

一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XXXV

鳥取県鳥取市気高町

^E ^{GE} 会下・^{KOO} ^{GE} 郡家遺跡

第1分冊

2018

鳥取県埋蔵文化財センター

序

山陰自動車道路は、一般国道9号の交通渋滞の緩和、災害時や緊急時における緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により整備が進められている自動車専用道路です。

鳥取県埋蔵文化財センターでは、鳥取市本高から同市青谷町を結ぶ事業区間である「鳥取西道路」の改築に伴う発掘調査を(公財)鳥取県教育文化財団及び(公財)鳥取市文化財団とともに平成20年度から実施しています。

本書に報告する鳥取市気高町の会下・郡家遺跡は、平成24年度から4年にわたる発掘調査の結果、縄文時代から江戸時代に至るまでの遺構や遺物が確認されました。なかでも、弥生時代の独立棟持柱建物と同時期の県内のものとしては最大で、平安時代中頃の長大な掘立柱建物群は県内では他にあまり例がないものです。今回の成果は「逢坂谷」と呼ばれる遺跡周辺地域の歴史を知る上で重要なものと言えます。

また、現地で調査成果の説明会を開催して、地元を中心に多くの方々においでいただきました。当センターでは、発掘調査で得られた情報や出土品を活かし、県内外の多くの方々に遺跡や埋蔵文化財のことを知っていただく取り組みも重要な業務の1つと考えています。本書が地域の歴史を解明し、多くの方に遺跡をより身近に感じていただく一助になれば幸いです。

最後に、本書をまとめるにあたり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所ならびに地元関係者の方々には、一方ならないご指導、ご協力をいただきました。心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成30年1月

鳥取県埋蔵文化財センター
所長 中原 齊

例 言

1. 本報告書は、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受け、鳥取県埋蔵文化財センターが一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成24年度から27年度にかけて行った会下・郡家遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、調査の経緯、遺跡周辺の環境、A・AR・B区の調査結果をまとめた第1分冊と、C・D・E区の調査結果と自然科学分析結果、遺物観察表及び写真図版をまとめた第2分冊からなる。
3. 一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、鳥取県が受託したものは鳥取県埋蔵文化財センターと鳥取県教育委員会(公益財団法人鳥取県教育文化財団へ再委託)が工区を分担して実施した。このため、両者が刊行する発掘調査報告書を一連のものとするため、巻次を下記のとおり振り分けている。

巻次Ⅰ、Ⅱ、XXXⅡ～：発行者 鳥取県埋蔵文化財センター

巻次Ⅲ～XXXⅠ：発行者 鳥取県教育委員会

なお、当該事業に伴う発掘調査には、このほかに公益財団法人鳥取市文化財団が受託し発掘調査を実施したものがあ

4. 本報告書に記載した遺跡の所在地は鳥取市気高町会下、郡家で、調査面積は合計で37,857㎡である。
5. 本報告書の執筆は原田雅弘、八崎興、濱本利幸、加藤裕一、荒川和哉、岡田裕之、田中正利が分担して行い、編集は田中が行った。各項目の執筆者は文末に記載した。
6. 平成26年度の発掘調査では安西工業(株)・(株)ジーアイシー共同企業体、平成27年度の発掘調査では安西工業株式会社の支援を受けて実施した。掘削作業や記録作業、測量作業は埋蔵文化財センターの指示のもとに支援業者が行った。
7. 本報告書に掲載した遺物の実測は鳥取県埋蔵文化財センターが行い、浄書は土器を株式会社エー・テック、石器と金属製品を株式会社アーキジオ、木製品を安西工業株式会社に委託した。
8. 本報告書で掲載した遺物写真のうち人形代(W100)の赤外線写真は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の中村一郎氏に撮影いただいた。それ以外の遺物写真は田中が撮影した。
9. 発掘調査で作成した図面、写真等の記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。
10. 本報告書では地形図に国土地理院発行の1/25,000地形図「浜村」および「鹿野」を使用した。
11. 本調査で、自然科学分析(放射性炭素年代測定、樹種同定、花粉分析、植物珪酸体分析)をパリオ・サーヴェイ株式会社、古代銭出土遺構(AES205)のX線CT撮影および画像解析を株式会社日立製作所に委託した。
12. 発掘調査、報告書作成にあたっては、下記の方々にご教示、ご助言、ご協力をいただいた。

飯島吉晴、大平 茂、小川裕紀、春日美海、高妻洋成、小山田宏一、高橋照彦、田村明子、永井久美男、深澤芳樹、山中敏史、渡辺晃宏

愛知県陶磁美術館、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、多治見市教育委員会、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、鳥取県教育委員会

凡 例

1. 本報告書では、平面直角座標第V系により地区割り設定を行っている。平面図において方位は座標北を示し、X、Y座標はm単位で表記されている。
2. 本報告書では、A区の建物番号について調査時のものから変更している。新旧の遺構名の対照表は別表のとおりである。

3. 標高は海拔で示した。

4. 土層および土器胎土の色調は基本的に『新版標準土色帖』を使用して命名した。

5. 遺構図面の縮尺は土坑が1/40、建物が1/60・1/100を基本とするが、統一されていない。

なお、断面図のアミカケで説明がない場合は以下のとおりである。

■：基盤層 ■：礫 ■：木材

土層注記において、混相物の大きさは最大のものの大きさを「～〇cm」と表記している。

6. 遺物は出土地点等を問わず種別ごとに算用数字で通し番号を付し、土器以外には数字の前に種別を示すアルファベットを付している。なお、図面と写真図版で番号は共通する。

石器・石製品：S 鉄製品：F、古銭：C、木製品：W

7. 遺物図面の縮尺は土器は1/4・1/8、石器は3/4・1/2・1/6、鉄製品は1/2、古銭は1/1、木製品は1/2・1/4・1/6・1/10とした。

図面の断面は須恵器を黒塗り、平安時代の施軸陶器をアミカケ、それ以外を白抜きで示している。土器の図面でケズリ調整の砂粒の動いた方向を矢印で示した。

石器の断面図で矢印で表した範囲のうち、特に断り書きがないものは敲打した紙面の範囲を示す。

8. 本報告書において遺物の時期・分類は下記の文献を参照した。

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

中村浩 2001 『和泉陶器出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

巽淳一郎 1979 「Ⅲ-2 土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)』倉吉市教育委員会

兵庫県教育委員会 1995『相生市・緑ヶ丘遺址群Ⅱ』兵庫県文化財調査報告 第139冊

高橋照彦 2003 「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究-平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に-』古代の土器研究会

齋藤孝正 2000 『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』(『日本の美術』第409号)至文堂

小森俊寛・上村恵章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

備前市教育委員会 2012『医王山東麓空跡群発掘調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告9

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』

目 次

序・例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法と経過	2
第3節 調査体制	6

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	10

第3章 A区の調査

第1節 地形と基本層序	17
第2節 縄文時代の遺構	27
第3節 弥生時代の遺構	34
第4節 古墳時代～飛鳥時代の遺構	169
第5節 奈良時代～平安時代の遺構	197
第6節 中世以降の遺構	307
第7節 時期不詳の遺構	341
第8節 包含層等出土遺物	396

第4章 AR区の調査

第1節 地形と層序	402
第2節 調査の概要	402
第3節 出土遺物	408

第5章 B区の調査

第1節 地形と基本層序	410
第2節 遺構面について	411
第3節 III層耕作段階の遺構	420
第4節 IV層耕作段階の遺構	425
第5節 V層耕作段階の遺構	437
第6節 V層耕作以前の遺構	449
第7節 時期不詳の遺構	494
第8節 包含層出土の遺物	496

挿図目次

図1	鳥取西道路関係遺跡位置	1	図52	A区	袋状土坑S219	平面・断面・出土遺物	72	
図2	会下・郡家遺跡調査範囲及び各年度調査箇所	3	図53	A区	袋状土坑S309・488・489・813	平面・断面・出土遺物	73	
図3	遺跡の位置	9	図54	A区	袋状土坑AES41	平面・断面・出土遺物	75	
図4	遺跡周辺の地形環境	9	図55	A区	袋状土坑AES583	平面・断面	76	
図5	周辺遺跡分布	11	図56	A区	袋状土坑AES660	平面・断面・出土遺物	77	
図6	A区 調査後地形・基本層序	18	図57	A区	袋状土坑AES740	平面・断面・出土遺物	78	
図7	A区 遺構配置(1)	19・20	図58	A区	袋状土坑AES902	平面・断面・出土遺物	79	
図8	A区 遺構配置(2)	21・22	図59	A区	袋状土坑AES970・1296・1312	平面・断面	80	
図9	A区 遺構配置(3)	23・24	図60	A区	袋状土坑AES1352	平面・断面・出土遺物	80	
図10	A区 遺構配置(4)	25	図61	A区	袋状土坑AES1571	平面・断面・遺物出土状況	81	
図11	A区 西側斜面土層断面	26	図62	A区	袋状土坑AES1571	出土土器(1)	82	
図12	A区 落とし穴 AES2526・2696・2927・5025・5075	29	図63	A区	袋状土坑AES1571	出土土器(2)	83	
図13	A区 落とし穴 AWS805・1779・2515・3492	31	図64	A区	袋状土坑AES1571	出土石器(1)	84	
図14	A区 落とし穴 AWS3147・3068・3130・3929	33	図65	A区	袋状土坑AES1571	出土石器(2)	85	
図15	A区 出土縄文土器	34	図66	A区	袋状土坑AES1577	平面・断面・出土遺物	86	
図16	A区 掘立柱建物1	平面・断面	35	図67	A区	袋状土坑AES1570・1741	87	
図17	A区 掘立柱建物1	断面	36	図68	A区	袋状土坑AES1798	平面・断面・遺物出土状況	88
図18	A区 掘立柱建物2	平面・断面	37	図69	A区	袋状土坑AES1798	出土遺物(1)	89
図19	A区 竪穴建物1	平面・断面	38	図70	A区	袋状土坑AES1798	出土遺物(2)	90
図20	A区 竪穴建物1	出土遺物	39	図71	A区	袋状土坑AES1981	平面・断面・遺物出土状況	91
図21	A区 竪穴建物2(古段階)	平面・断面	40	図72	A区	袋状土坑AES1981	出土遺物(1)	91
図22	A区 竪穴建物2(新段階)	平面・断面	41	図73	A区	袋状土坑AES1981	出土遺物(2)	92
図23	A区 竪穴建物3(1)	42	図74	A区	袋状土坑AES1981	出土遺物(3)	93	
図24	A区 竪穴建物3(2)	43	図75	A区	袋状土坑AES2427	平面・断面・出土遺物	94	
図25	A区 竪穴建物4	平面・断面(1)	44	図76	A区	袋状土坑AES2507	平面・断面・遺物出土状況	95
図26	A区 竪穴建物4	平面・断面(2)	45	図77	A区	袋状土坑AES2507	出土遺物(1)	95
図27	A区 竪穴建物4	遺物出土状況	46	図78	A区	袋状土坑AES2507	出土遺物(2)	96
図28	A区 竪穴建物4	出土遺物(1)	46	図79	A区	袋状土坑AES2566	平面・断面・出土遺物	97
図29	A区 竪穴建物4	出土遺物(2)	47	図80	A区	袋状土坑AES2807	平面・断面・遺物出土状況・出土遺物	97
図30	A区 竪穴建物5	平面・断面	48	図81	A区	袋状土坑AES2807	出土石器	98
図31	A区 竪穴建物6	49	図82	A区	袋状土坑AES2968	平面・断面・出土遺物	99	
図32	A区 竪穴建物7	50	図83	A区	袋状土坑AES3045	平面・断面・出土遺物	100	
図33	A区 竪穴建物8	古段階	51	図84	A区	袋状土坑AES3158	平面・断面・出土遺物	100
図34	A区 竪穴建物8	新段階	53	図85	A区	袋状土坑AES3430・4405	平面・断面・出土遺物	101
図35	A区 竪穴建物9	平面・断面	55	図86	A区	袋状土坑AES4661	平面・断面・出土遺物	101
図36	A区 竪穴建物9	出土土器	56					
図37	A区 竪穴建物10	57						
図38	A区 竪穴建物11	平面・断面	58					
図39	A区 竪穴建物12	平面・断面	59					
図40	A区 竪穴建物13(1)	61						
図41	A区 竪穴建物13(2)	62						
図42	A区 竪穴建物13	出土遺物	62					
図43	A区 竪穴建物14	平面・断面	63					
図44	A区 竪穴建物14	出土遺物	64					
図45	A区 竪穴建物15	平面・断面	66					
図46	A区 竪穴建物16	平面・断面・出土遺物	67					
図47	A区 袋状土坑S68	平面・断面	68					
図48	A区 袋状土坑S69	平面・断面	69					
図49	A区 袋状土坑S69	出土遺物(1)	69					
図50	A区 袋状土坑S69	出土遺物(2)	70					
図51	A区 袋状土坑S70	71						

图87	A区 袋状土坑AES4681 平面、断面、遺物出土状況、出土遺物	102	图117	A区 木棺墓AES3013 平面、断面、遺物出土状況、出土遺物	149
图88	A区 袋状土坑AES4744、4849、4898、4905 平面、断面、出土遺物	104	图118	A区 木棺墓AES3017、3025、3030 平面、断面	150
图89	A区 袋状土坑AES4906、4959、4993 平面、断面、出土遺物	105	图119	A区 木棺墓AES3042、3051、3071、3077 平面、断面	153
图90	A区 袋状土坑AWS3488 平面、断面、出土遺物	107	图120	A区 木棺墓AES3083、3118、4594、4595、4597 平面、断面、出土遺物	155
图91	A区 袋状土坑S343、390、AWS3154 平面、断面、出土遺物	109	图121	A区 木棺墓AES4598、4599、4600、4601 平面、断面	157
图92	A区 袋状土坑AWS3487、3384 平面、断面、出土遺物	111	图122	A区 木棺墓AES4603、4604、4605、4606、4607 平面、断面	159
图93	A区 袋状土坑AWS3383、3366、3486 平面、断面、遺物出土状況、出土遺物	113	图123	A区 木棺墓AES4608、4610、4611、4613、4651 平面、断面	163
图94	A区 袋状土坑AWS3396、3381、3382 平面、断面、遺物出土状況、出土遺物	115	图124	A区 木棺墓AES4717、4749 平面、断面	164
图95	A区 袋状土坑AWS3375、3373、3368 平面、断面	117	图125	A区 AES3504 平面、断面、遺物出土状況	165
图96	A区 袋状土坑AWS2482 平面、断面、遺物出土状況、出土遺物	118	图126	A区 AES3504 出土遺物	166
图97	A区 袋状土坑AWS1144 平面、断面、遺物出土状況	119	图127	A区 AWS658 平面、断面、出土遺物	167
图98	A区 袋状土坑AWS1144 出土土器	119	图128	A区 複数遺構で接合した弥生土器	167
图99	A区 袋状土坑AWS1144 出土土器	121	图129	A区 掘立柱建物3 平面、断面、出土遺物	168
图100	A区 袋状土坑AWS1168、566、398 平面、断面、遺物出土状況、出土遺物	122	图130	A区 掘立柱建物4 平面、断面	170
图101	A区 袋状土坑AWS713、2514 平面、断面、遺物出土状況、出土遺物	123	图131	A区 掘立柱建物5 平面、断面、出土遺物	171
图102	A区 袋状土坑AWS1047、678、497、409 平面、断面	126	图132	A区 掘立柱建物6 平面、断面	173
图103	A区 袋状土坑AWS3143、1329、87、1330 平面、断面、遺物出土状況	127	图133	A区 掘立柱建物6 断面	174
图104	A区 袋状土坑AWS86、3421 平面、断面、出土遺物	130	图134	A区 掘立柱建物7 平面、断面	175
图105	A区 袋状土坑AWS50、56、1219、1780 平面、断面、出土遺物	131	图135	A区 掘立柱建物8 平面、断面、出土遺物	176
图106	A区 土壙墓AWS421、3385 平面、断面、出土遺物	134	图136	A区 竪穴建物17 平面、断面	178
图107	A区 土壙墓AWS330、677、3374 平面、断面	135	图137	A区 竪穴建物18 平面、断面	179
图108	A区 木棺墓AWS329、2512 平面、断面、出土遺物	136	图138	A区 竪穴建物19 平面、断面、出土遺物	180
图109	A区 土壙墓AWS2598、3349 袋状土坑AWS2976(1)	138	图139	A区 竪穴建物20 平面、断面	181
图110	A区 土壙墓AWS2598、3349 袋状土坑AWS2976(2)	139	图140	A区 竪穴建物21 平面、断面	183
图111	A区 土壙墓AWS2598、3349 袋状土坑AWS2976 出土土器(1)	142	图141	A区 竪穴建物21 断面、出土遺物	184
图112	A区 土壙墓AWS2598、3349 袋状土坑AWS2976 出土土器(2)	143	图142	A区 竪穴建物22 平面、断面	185
图113	A区 土壙墓AWS2598、3349 袋状土坑AWS2976 出土土器(1)	144	图143	A区 竪穴建物23、24 平面、断面	187
图114	A区 土壙墓AWS2598、3349 袋状土坑AWS2976 出土土器(2)	145	图144	A区 竪穴建物25 平面、断面	188
图115	A区 土壙墓、木棺墓群 主軸、規模対応関係	146	图145	A区 竪穴建物26 平面、断面、出土遺物	189
图116	A区 木棺墓AES2911、2974、2992、3012 平面、断面	147	图146	A区 竪穴建物27 平面、断面、出土遺物	190
			图147	A区 竪穴建物28 平面、断面	191
			图148	A区 竪穴建物29 平面、断面、出土遺物	192
			图149	A区 竪穴建物30 平面、断面	193
			图150	A区 土壙墓AWS1333 平面、断面、出土遺物	194
			图151	A区 区画溝 平面	196
			图152	A区 区画溝 断面(1)	198
			图153	A区 区画溝 断面(2)	199
			图154	A区 区画溝 断面(3)	200
			图155	A区 区画溝 出土土器(1)	203
			图156	A区 区画溝 出土土器(2)	205
			图157	A区 区画溝 出土土器(3)	206
			图158	A区 区画溝 出土土器(4)	207

図159	A区	区画溝	出土施軸陶器等	207	図208	A区	掘立柱建物26	平面・断面	263
図160	A区	区画溝	出土石器(1)	209	図209	A区	掘立柱建物27	平面・断面・出土遺物	264
図161	A区	区画溝	出土石器(2)	210	図210	A区	掘立柱建物28	平面・断面・出土遺物	265
図162	A区	区画溝	出土石器(3)	211	図211	A区	掘立柱建物28	変遷図	266
図163	A区	区画溝	出土鉄製品	211	図212	A区	掘立柱建物29	平面・断面	267
図164	A区	区画溝	出土鍛冶滓	212	図213	A区	掘立柱建物30~32	平面・断面	269
図165	A区	粘土探掘坑	平面	213	図214	A区	掘立柱建物33	平面・断面・出土遺物	270
図166	A区	粘土探掘坑	断面(1)	214	図215	A区	掘立柱建物34	平面・断面	271
図167	A区	粘土探掘坑	断面(2)	215	図216	A区	掘立柱建物35	平面・断面	272
図168	A区	粘土探掘坑	出土土器	216	図217	A区	掘立柱建物36	平面・断面・出土遺物	273
図169	A区	粘土探掘坑	出土施軸陶器	217	図218	A区	掘立柱建物37	平面・断面・出土遺物	276
図170	A区	粘土探掘坑	出土石器・鍛冶滓	217	図219	A区	掘立柱建物38	平面・断面	277
図171	A区	粘土探掘坑	出土石器	218	図220	A区	掘立柱建物39	平面・断面・出土遺物	278
図172	A区	道路遺構変遷		221	図221	A区	掘立柱建物40	平面・断面・出土遺物	280
図173	A区	道路遺構第1段階		222	図222	A区	掘立柱建物41	平面・断面	282
図174	A区	道路遺構第2・3段階(1)		223	図223	A区	掘立柱建物41	出土遺物	283
図175	A区	道路遺構第2・3段階(2)		224	図224	A区	掘立柱建物42	平面・断面・出土遺物	284
図176	A区	道路遺構第1段階盛土下検出遺構		225	図225	A区	掘立柱建物43	平面・断面	286
図177	A区	道路遺構土層断面(1)		226	図226	A区	掘立柱建物43	出土遺物	286
図178	A区	道路遺構土層断面(2)		227	図227	A区	掘立柱建物44	平面・断面	287
図179	A区	道路遺構土層断面(3)		228	図228	A区	掘立柱建物44	出土遺物	288
図180	A区	道路遺構土層断面(4)		229	図229	A区	掘立柱建物45	平面・断面	289
図181	A区	道路遺構第2段階拡幅部側溝内 遺物出土状況(1)		230	図230	A区	掘立柱建物45	出土遺物	290
図182	A区	道路遺構第2段階拡幅部側溝内 遺物出土状況(2)		231	図231	A区	掘立柱建物46	平面・断面・出土遺物	291
図183	A区	道路遺構	出土遺物	233	図232	A区	掘立柱建物47	平面・断面	293
図184	A区	掘立柱建物9	平面・断面	235	図233	A区	掘立柱建物47	出土遺物	294
図185	A区	掘立柱建物9	出土遺物	236	図234	A区	掘立柱建物48	平面・断面	295
図186	A区	掘立柱建物10	平面・断面・出土遺物	237	図235	A区	AES205		297
図187	A区	掘立柱建物11	平面・断面	239	図236	A区	AES205出土銭貨 蛍光X線スペクトラル		299
図188	A区	掘立柱建物11	出土遺物	240	図237	A区	AES205 遺構切り取り内 銭貨 三次元CG(はば実寸大)		300
図189	A区	掘立柱建物12(1)	平面・断面	241	図238	A区	AES205 遺構切り取り内 埋没銭貨B 三次元CG(はば5倍)		300
図190	A区	掘立柱建物12(2)		242	図239	A区	AES205出土銭貨 CTヒストグラムと カラーマッピング		301
図191	A区	掘立柱建物12	出土遺物	242	図240	A区	S28・AES105	平面・断面・出土遺物	302
図192	A区	掘立柱建物13	平面・断面	243	図241	A区	S531・AWS3357	平面・断面・出土遺物	304
図193	A区	掘立柱建物13	出土遺物	244	図242	A区	AWS371・400・420	平面・断面・出土遺物	305
図194	A区	掘立柱建物14	平面・断面・出土遺物	245	図243	A区	地下式坑1	平面・断面	307
図195	A区	掘立柱建物15	平面・断面	247	図244	A区	地下式坑2	平面・断面・出土遺物	308
図196	A区	掘立柱建物15	出土遺物	248	図245	A区	地下式坑3	平面・断面・出土遺物	309
図197	A区	掘立柱建物16	平面・断面	249	図246	A区	地下式坑4	平面・断面・出土遺物	310
図198	A区	掘立柱建物16	出土遺物	250	図247	A区	地下式坑5	平面・断面・出土遺物	311
図199	A区	掘立柱建物17	平面・断面・出土遺物	251	図248	A区	地下式坑6・7	平面・断面・出土遺物	312
図200	A区	掘立柱建物18	平面・断面・出土遺物	253	図249	A区	地下式坑8	平面・断面	313
図201	A区	掘立柱建物19	平面・断面・出土遺物	254					
図202	A区	掘立柱建物20	平面・断面・出土遺物	255					
図203	A区	掘立柱建物21	平面・断面	256					
図204	A区	掘立柱建物22	平面・断面・出土遺物	258					
図205	A区	掘立柱建物23	平面・断面	259					
図206	A区	掘立柱建物24	平面・断面	260					
図207	A区	掘立柱建物25	平面・断面・出土遺物	261					

図250	A区	地下式坑9	平面・断面・出土遺物	314	図306	A区	竪穴建物33	平面・断面	377
図251	A区	地下式坑10	平面・断面・出土遺物	316	図307	A区	竪穴建物34	平面・断面	377
図252	A区	地下式坑11	平面・断面	317	図308	A区	竪穴建物35	平面・断面	378
図253	A区	地下式坑12	平面・断面	318	図309	A区	竪穴建物36	平面・断面	378
図254	A区	地下式坑13	平面・断面	318	図310	A区	竪穴建物37	平面・断面	379
図255	A区	地下式坑14	平面・断面	319	図311	A区	竪穴建物38	平面・断面	379
図256	A区	地下式坑14	出土遺物	319	図312	A区	竪穴建物39・40	平面・断面	380
図257	A区	地下式坑15	平面・断面	320	図313	A区	竪穴建物41	平面・断面	381
図258	A区	地下式坑16	平面・断面・出土遺物	321	図314	A区	竪穴建物42	平面・断面	382
図259	A区	地下式坑17	平面・断面	322	図315	A区	竪穴建物43	平面・断面	383
図260	A区	地下式坑18	平面・断面	324	図316	A区	竪穴建物44	平面・断面	384
図261	A区	地下式坑18	出土遺物	325	図317	A区	竪穴建物45	平面・断面	385
図262	A区	地下式坑19	平面・断面	326	図318	A区	竪穴建物46	平面・断面	386
図263	A区	地下式坑20	平面・断面	327	図319	A区	竪穴建物47	平面・断面	387
図264	A区	地下式坑21	平面・断面	327	図320	A区	竪穴建物48	平面・断面	388
図265	A区	地下式坑22	平面・断面	329	図321	A区	竪穴建物49	平面・断面	389
図266	A区	AES333	平面・断面	330	図322	A区	竪穴建物50	平面・断面	390
図267	A区	木棺墓AES3331	平面・断面・出土遺物	330	図323	A区	竪穴建物51	平面・断面	390
図268	A区	AWS405・3703・3741・3742	平面・断面・出土遺物	331	図324	A区	竪穴建物52	平面・断面	391
図269	A区	A区東端部	平面・断面	333	図325	A区	AES1518・2288・2544・3482	平面・断面	392
図270	A区	A区東端部遺構	出土遺物	334	図326	A区	AES1261	平面・断面	394
図271	A区	A区東端部	遺構断面	335	図327	A区	竪穴状遺構	平面・断面	395
図272	A区	S66	平面・断面・出土遺物	336	図328	A区	包含層出土土器	397	
図273	A区	AES485・S234	平面・断面・出土遺物	337	図329	A区	包含層等出土軸輪陶器	397	
図274	A区	AES1938	平面・断面	339	図330	A区	包含層出土石器(1)	398	
図275	A区	西側テラス状遺構	平面・断面	340	図331	A区	包含層出土石器(2)	399	
図276	A区	掘立柱建物49	平面・断面	342	図332	A区	包含層出土石器(3)	400	
図277	A区	掘立柱建物50	平面・断面	343	図333	A区	包含層出土石器(4)	401	
図278	A区	掘立柱建物51	平面・断面	344	図334	A区	包含層出土鉄製品・鉄滓	401	
図279	A区	掘立柱建物52	平面・断面	345	図335	AR区	遺構配置図	403	
図280	A区	掘立柱建物53	平面・断面	346	図336	AR区	土層断面(1)	404	
図281	A区	掘立柱建物53	柱穴断面	347	図337	AR区	土層断面(2)	405	
図282	A区	掘立柱建物54	平面・断面	348	図338	AR区	ARS4・5	平面・断面	406
図283	A区	掘立柱建物55	平面・断面	349	図339	AR区	ARS3	平面・断面	407
図284	A区	掘立柱建物56	平面・断面	350	図340	AR区	ARS6	平面・断面	408
図285	A区	掘立柱建物56	柱穴断面	351	図341	AR区	出土遺物	409	
図286	A区	掘立柱建物57	平面・断面	352	図342	BR区	土層断面位置	410	
図287	A区	掘立柱建物58	平面・断面	354	図343	BR区	西壁土層(1)	412	
図288	A区	掘立柱建物59	平面・断面	355	図344	BR区	西壁土層(2)	413	
図289	A区	掘立柱建物60	平面・断面	356	図345	BR区	調査区中央南北土層(南側)	414	
図290	A区	掘立柱建物61	平面・断面	357	図346	BR区	調査区中央南北土層(北側)	415	
図291	A区	掘立柱建物62	平面・断面	358	図347	BR区	調査区北側東西土層	416	
図292	A区	掘立柱建物63	平面・断面	359	図348	BR区	調査中央東西土層	417	
図293	A区	掘立柱建物64	平面・断面	360	図349	BR区	耕作痕跡形成過程想定模式図	419	
図294	A区	掘立柱建物65	平面・断面	362	図350	BR区	基本層序・調査面模式図	419	
図295	A区	掘立柱建物66	平面・断面	363	図351	BR区	S751	断面	420
図296	A区	掘立柱建物67	平面・断面	364	図352	BR区	Ⅲ層耕作段階	遺構平面	421・422
図297	A区	掘立柱建物68	平面・断面	366	図353	BR区	S751	出土遺物	423
図298	A区	掘立柱建物69	平面・断面	367	図354	BR区	BS128	平面・断面・出土遺物	424
図299	A区	掘立柱建物70	平面・断面	368	図355	BR区	BS42	出土遺物	426
図300	A区	掘立柱建物71	平面・断面	369	図356	BR区	Ⅳ層耕作段階	遺構平面	427・428
図301	A区	掘立柱建物72	平面・断面	371	図357	BR区	BS45・49	断面	429
図302	A区	掘立柱建物73	平面・断面	372	図358	BR区	BS45	出土遺物(1)	429
図303	A区	掘立柱建物74	平面・断面	374	図359	BR区	BS45	出土遺物(2)	430
図304	A区	竪穴建物31	平面・断面	375	図360	BR区	BS49	出土土器	430
図305	A区	竪穴建物32	平面・断面	376	図361	BR区	BS49	出土木製品(1)	430
					図362	BR区	BS49	出土木製品(2)	431
					図363	BR区	畦畔志村	石群1・2	433

図364	B区	石群2～6	434	図407	B区	BS171	出土杭	479	
図365	B区	V層耕作段階	遺構平面	435・436	図408	B区	BS171	出土農具	480
図366	B区	BS20・60	断面	438	図409	B区	BS171	出土木製品	481
図367	B区	BS20	出土遺物	439	図410	B区	BS171	出土木製祭祀具	482
図368	B区	S835・BS76	断面	439	図411	B区	BS179	断面	483
図369	B区	BS76	出土遺物	439	図412	B区	BS179	出土土器	483
図370	B区	S835	出土木製品	439	図413	B区	BS179	出土木製品	484
図371	B区	S835	出土土器	440	図414	B区	BS200・201	485	
図372	B区	S835	出土土器	441	図415	B区	BS69断面	485	
図373	B区	BS162	土器出土状況	442	図416	B区	BS16・18・46・47	486	
図374	B区	BS66・83・84・85	443				平面・出土遺物	486	
図375	B区	BS66	出土土器(1)	444	図417	B区	BS16・18・46・47	断面	487
図376	B区	BS66	出土土器(2)	445	図418	B区	BS203	平面	488
図377	B区	BS61・70	平面・断面	446	図419	B区	BS203	断面	489
図378	B区	V層耕作以前	遺構平面	447・448	図420	B区	BS203	出土土器	490
図379	B区	S834・BS197	断面	450	図421	B区	BS203	出土木製品	491
図380	B区	S834	断面	451	図422	B区	BS65・67・68・72	平面	492
図381	B区	S834北東部の変遷	452	図423	B区	BS65	断面	493	
図382	B区	S834	出土土器(1)	453	図424	B区	BS197	平面・断面・出土遺物	493
図383	B区	S834	出土土器(2)	454	図425	B区	BS160	平面・断面	495
図384	B区	S834	出土土器	455	図426	B区	Ⅲ層等	出土遺物	497
図385	B区	S834	出土大型木材	455	図427	B区	Ⅳ層	出土土器(1)	498
図386	B区	S834	出土竇串	456	図428	B区	Ⅳ層	出土土器(2)	499
図387	B区	S834	出土馬形代	457	図429	B区	Ⅳ層	出土土器(3)	500
図388	B区	S834	出土人形代・刀形代他	458	図430	B区	Ⅳ層	出土土器(1)	501
図389	B区	S834	出土木製品	459	図431	B区	Ⅳ層	出土土器(2)	502
図390	B区	BS78	断面・出土遺物	460	図432	B区	Ⅳ層	出土金属製品	503
図391	B区	BS171・195	平面	462	図433	B区	Ⅳ層	出土木製品(1)	504
図392	B区	BS171	断面	463	図434	B区	Ⅳ層	出土木製品(2)	505
図393	B区	BS171・木製構造物	断面	464	図435	B区	Ⅳ層	出土人形代・馬形代	506
図394	B区	BS171南側木製構造物	平面	465	図436	B区	Ⅳ層	出土竇串	507
図395	B区	BS171北側木製構造物	465	図437	B区	V層	出土土器(1)	508	
		古段階	平面	467	図438	B区	V層	出土土器(2)	509
図396	B区	BS171北側木製構造物	468	図439	B区	V層	出土土器(3)	510	
		新段階(当初)	平面	468	図440	B区	V層	出土土器	511
図397	B区	BS171北側木製構造物	470	図441	B区	V層	出土鉄鏝	512	
		新段階(補修)	平面	470	図442	B区	V層	出土木製品(1)	512
図398	B区	BS171北側木製構造物	471	図443	B区	V層	出土木製品(2)	513	
		上層木材	平面	471	図444	B区	V層	出土木製品(3)	514
図399	B区	BS171	出土土器(1)	473	図445	B区	V層	出土木製品(4)	515
図400	B区	BS171	出土土器(2)	474	図446	B区	V層	出土人形代・刀形代・舟形代	516
図401	B区	BS171	出土土器(3)	475	図447	B区	V層	出土馬形代・鳥形代	518
図402	B区	BS171	出土土器(1)	475	図448	B区	V層	出土竇串	519
図403	B区	BS171	出土土器(2)・鉄製品	476	図449	B区	包含層	出土施軸陶器	520
図404	B区	BS171	出土木材(1)	476	図450	B区	包含層等	出土緑色凝灰岩剥片	520
図405	B区	BS171	出土木材(2)	477	図451	B区	包含層	出土墨書土器(1)	521
図406	B区	BS171	出土木材(3)	478	図452	B区	包含層	出土墨書土器(2)	522

挿表目次

表1	A区	西側斜面	土層注記	27	表13	A区	掘立柱建物35	土層注記	274
表2	A区	土壌墓AWS2598・3349			表14	A区	掘立柱建物39	土層注記	279
		袋状土坑AWS2976土層注記(1)		140	表15	A区	掘立柱建物40	土層注記	281
表3	A区	土壌墓AWS2598・3349			表16	A区	掘立柱建物42	土層注記	285
		袋状土坑AWS2976土層注記(2)		141	表17	A区	掘立柱建物45	土層注記	290
表4	A区	掘立柱建物3	土層注記	169	表18	A区	掘立柱建物46	土層注記	292
表5	A区	掘立柱建物5	土層注記	172	表19	A区	掘立柱建物47	土層注記	294
表6	A区	竪穴建物22	土層注記	186	表20	A区	AES205 出土銭貨計測値		298
表7	A区	掘立柱建物9	土層注記	236	表21	A区	掘立柱建物57	土層注記	353
表8	A区	掘立柱建物10	土層注記	238	表22	A区	掘立柱建物71	土層注記	370
表9	A区	掘立柱建物13	土層注記	244	表23	A区	掘立柱建物73	土層注記	373
表10	A区	掘立柱建物14	土層注記	246	表24	AR区	土層断面(2)注記		406
表11	A区	掘立柱建物15	土層注記	248	表25	B区調査区中央東西土層	注記		418
表12	A区	掘立柱建物18	土層注記	254					

文中写真目次

写真1	A区	AES203	遺構切り取りX線透過写真 (1/4寸実寸)図235と1/4寸同方向	298	写真2	A区	AES205	出土銭貨X線透過写真 (1/4寸実寸)	298
-----	----	--------	--------------------------------------	-----	-----	----	--------	------------------------	-----

A区 遺構名称新旧对照表

掲載名称	調査時名称	掲載名称	調査時名称	掲載名称	調査時名称
掘立柱建物1	東調査区掘立柱建物27	掘立柱建物43	西調査区掘立柱建物12	竪穴建物11	西調査区竪穴建物3
掘立柱建物2	東調査区掘立柱建物28	掘立柱建物44	西調査区掘立柱建物13	竪穴建物12	西調査区竪穴建物16
掘立柱建物3	東調査区掘立柱建物10	掘立柱建物45	西調査区掘立柱建物14	竪穴建物13	西調査区竪穴建物26
掘立柱建物4	東調査区掘立柱建物18	掘立柱建物46	西調査区掘立柱建物15	竪穴建物14	西調査区竪穴建物2
掘立柱建物5	東調査区掘立柱建物19	掘立柱建物47	西調査区掘立柱建物17	竪穴建物15	西調査区竪穴建物1
掘立柱建物6	東調査区掘立柱建物20	掘立柱建物48	西調査区掘立柱建物18	竪穴建物16	西調査区竪穴建物14
掘立柱建物7	東調査区掘立柱建物21	掘立柱建物49	東調査区掘立柱建物37	竪穴建物17	東調査区竪穴建物9
掘立柱建物8	東調査区掘立柱建物5	掘立柱建物50	東調査区掘立柱建物35	竪穴建物18	東調査区竪穴建物25
掘立柱建物9	東調査区掘立柱建物11	掘立柱建物51	東調査区掘立柱建物7	竪穴建物19	東調査区竪穴建物1
掘立柱建物10	東調査区掘立柱建物12	掘立柱建物52	東調査区掘立柱建物41	竪穴建物20	東調査区竪穴建物12
掘立柱建物11	東調査区掘立柱建物13	掘立柱建物53	東調査区掘立柱建物44	竪穴建物21	東調査区竪穴建物15
掘立柱建物12	東調査区掘立柱建物2	掘立柱建物54	東調査区掘立柱建物30	竪穴建物22	東調査区竪穴建物8
掘立柱建物13	東調査区掘立柱建物3	掘立柱建物55	東調査区掘立柱建物45	竪穴建物23	東調査区竪穴建物2
掘立柱建物14	東調査区掘立柱建物4	掘立柱建物56	東調査区掘立柱建物9	竪穴建物24	東調査区竪穴建物35
掘立柱建物15	東調査区掘立柱建物1	掘立柱建物57	東調査区掘立柱建物38	竪穴建物25	東調査区竪穴建物13
掘立柱建物16	東調査区掘立柱建物55	掘立柱建物58	東調査区掘立柱建物8	竪穴建物26	東調査区竪穴建物14
掘立柱建物17	東調査区掘立柱建物14	掘立柱建物59	東調査区掘立柱建物39	竪穴建物27	東調査区竪穴建物17
掘立柱建物18	東調査区掘立柱建物15	掘立柱建物60	東調査区掘立柱建物40	竪穴建物28	東調査区竪穴建物22
掘立柱建物19	東調査区掘立柱建物16	掘立柱建物61	西調査区掘立柱建物28	竪穴建物29	東調査区竪穴建物11
掘立柱建物20	東調査区掘立柱建物17	掘立柱建物62	西調査区掘立柱建物23	竪穴建物30	西調査区竪穴建物4
掘立柱建物21	東調査区掘立柱建物6	掘立柱建物63	西調査区掘立柱建物27	竪穴建物31	東調査区竪穴建物26
掘立柱建物22	東調査区掘立柱建物36	掘立柱建物64	西調査区掘立柱建物20	竪穴建物32	東調査区竪穴建物27
掘立柱建物23	東調査区掘立柱建物22	掘立柱建物65	西調査区掘立柱建物19	竪穴建物33	東調査区竪穴建物28
掘立柱建物24	東調査区掘立柱建物24	掘立柱建物66	西調査区掘立柱建物31	竪穴建物34	東調査区竪穴建物20
掘立柱建物25	東調査区掘立柱建物26	掘立柱建物67	西調査区掘立柱建物30	竪穴建物35	東調査区竪穴建物29
掘立柱建物26	東調査区掘立柱建物32	掘立柱建物68	西調査区掘立柱建物9	竪穴建物36	東調査区竪穴建物34
掘立柱建物27	東調査区掘立柱建物23	掘立柱建物69	西調査区掘立柱建物24	竪穴建物37	東調査区竪穴建物30
掘立柱建物28	東調査区掘立柱建物25	掘立柱建物70	西調査区掘立柱建物25	竪穴建物38	東調査区竪穴建物31
掘立柱建物29	新規	掘立柱建物71	西調査区掘立柱建物7	竪穴建物39	東調査区竪穴建物32
掘立柱建物30	東調査区掘立柱建物29	掘立柱建物72	西調査区掘立柱建物10	竪穴建物40	東調査区竪穴建物33
掘立柱建物31	東調査区掘立柱建物34	掘立柱建物73	西調査区掘立柱建物11	竪穴建物41	西調査区竪穴建物11
掘立柱建物32	東調査区掘立柱建物33	掘立柱建物74	西調査区掘立柱建物6	竪穴建物42	西調査区竪穴建物13
掘立柱建物33	東調査区掘立柱建物42	竪穴建物1	東調査区竪穴建物7	竪穴建物43	西調査区竪穴建物8
掘立柱建物34	東調査区掘立柱建物43	竪穴建物2	東調査区竪穴建物16	竪穴建物44	西調査区竪穴建物25
掘立柱建物35	東調査区掘立柱建物31	竪穴建物3	東調査区竪穴建物10	竪穴建物45	西調査区竪穴建物10
掘立柱建物36	西調査区掘立柱建物22	竪穴建物4	東調査区竪穴建物3	竪穴建物46	西調査区竪穴建物15
掘立柱建物37	西調査区掘立柱建物21	竪穴建物5	東調査区竪穴建物18	竪穴建物47	西調査区竪穴建物17
掘立柱建物38	西調査区掘立柱建物5	竪穴建物6	東調査区竪穴建物19	竪穴建物48	西調査区竪穴建物6
掘立柱建物39	西調査区掘立柱建物3	竪穴建物7	東調査区竪穴建物21	竪穴建物49	西調査区竪穴建物12
掘立柱建物40	西調査区掘立柱建物26	竪穴建物8	東調査区竪穴建物23	竪穴建物50	西調査区竪穴建物9
掘立柱建物41	西調査区掘立柱建物1	竪穴建物9	西調査区掘立柱建物29	竪穴建物51	西調査区竪穴建物7
掘立柱建物42	西調査区掘立柱建物2	竪穴建物10	西調査区竪穴建物21	竪穴建物52	西調査区竪穴建物5

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本調査は、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受け、鳥取県埋蔵文化財センターが平成24年度から平成27年度にかけて実施した、一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う会下・郡家遺跡の本発掘調査である。

鳥取西道路は、一般国道9号の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、鳥取市本高から鳥取市青谷町青谷に至る延長約19.3kmの自動車専用道路である。

この鳥取西道路の計画地内及び隣接地には、多数の遺跡があり、建設に先立って計画地内の遺跡の有無・範囲・性格・内容等を確認する必要性が生じた。このため、平成19年度から鳥取市教育委員会が、文化庁の国庫補助事業として逐次試掘・確認調査を行った。

試掘・確認調査の結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成20年度には鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、松原古墳群と本高弓ノ木遺跡の本発掘調査が行われ、平成21年度からは、公益財団法人鳥取県教育文化財団が調査主体となり、鳥取市本高から鳥取市気高町下坂本に至る第Ⅰ、Ⅱ工区に所在する遺跡の本発掘調査を行っている。

第Ⅲ工区に所在する会下・郡家遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地として古くから知られており、昭和56年度には県営逢坂地区は場整備事業、昭和62年度には県営気高2期地区広域農道事業に伴う本発掘調査が、それぞれ気高町教育委員会(当時)により行われた。鳥取西道路改築に際しても、平成23年度に鳥取市教育委員会が行った試掘・確認調査により、計画地内に遺構が遺存していることが明らかとなったため、鳥取市気高町会下から郡家にかけての37,857㎡が本発掘調査の対象となった。(原田)



図1 鳥取西道路関係遺跡位置図

第2節 発掘調査の方法と経過

1 調査区の名称と調査方法(図2)

会下・郡家遺跡の調査前の状況は、水田・畑地・宅地・山林である。調査に先立ち調査区を東から西へ便宜的にA区・AR区・B区・C区・D区・E区に区分けし、A区については、調査区を東西2分する市道八幡陸達2号線を境にA区東とA区西に細分した。なお、A区西側の市道八幡会下線以东が鳥取市気高町郡家、以西が同町会下となる。

調査は平成24年度から27年度の4カ年に及ぶものであるが、各年度とも調査範囲の表土剥ぎを重機により行い、表土剥ぎ終了後、世界測地系国土座標第V系に載るように調査区内に10m方眼の基準杭を設定しグリッドを設けている。グリッド名は、調査区全体を網羅することができるよう、 $X = -55450m$ ・ $Y = -26600m$ の交点を基点(A1)とし、北から南にアルファベット、東から西に算用数字を用い、各交点の北東杭名を採った。それぞれの調査区はほぼ中央における主な座標は、A区東P11杭 $X = -55600m$ ・ $Y = -26700m$ 、A区西N21杭 $X = -55580m$ ・ $Y = -26800m$ 、B区M31杭 $X = -55570m$ ・ $Y = -26900m$ 、C区J41杭 $X = -55540m$ ・ $Y = -27000m$ 、D区H50杭 $X = -55520m$ ・ $Y = -27090m$ 、E区E55杭 $X = -55490m$ ・ $Y = -27140m$ である。

遺構番号は平成24年度は調査区に関係なく検出順に頭に「S」を付けた通し番号(例：S123)を、平成25年度以降は調査区ごとに頭文字(A区東：AES、A区西：AWS、AR区：ARS、B区：BS、C区：CS、D区：DS、E区：ES)の後に通し番号を検出順に付した。

検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易造り方測量及び光波トランシットによる測量を行った。現地での写真撮影及び遺物写真撮影は、35mm判、ブローニー(6×7)判カメラ、4×5判カメラを用い、白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用し、適宜デジタルカメラも使用した。航空写真撮影については、6×6判カメラを用い、白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。

なお、調査対象範囲は、E区の西側が丘陵斜面地にあたるものの、その大半が水田であるため、調査前地形測量は実施していない。(原田)

2 発掘調査の経過

以下に各年度における発掘調査経過の概要を述べる。

<平成24年度>

平成24年度は、A区、B区、C区の道路北側本線部分の調査を行った。調査に先立ち、5月26日に調査範囲全体の調査前航空写真撮影を実施した。

調査は7月2日から7月6日にかけてA区の表土剥ぎ作業を重機により行い、7月19日にA区東から発掘作業員の稼働を開始した。その後、9月10日からA区西の調査にも着手している。B・C区については、A区の調査と並行して9月26日にC区、9月27日から10月4日にかけてB区の表土剥ぎ作業を重機により行い、10月5日にC区、10月11日にB区に着手した。11月23日には、平安時代の大型掘立柱建物群の存在が明らかとなったA区で現地説明会を行い、90名の方々に参加いただいた。11月29日にA区調査後航空撮影を実施し、12月20日をもって発掘作業員の稼働を終了した。

発掘調査の結果、A区東で弥生時代の袋状土坑7基、弥生時代の竪穴建物1棟、平安時代の掘立柱

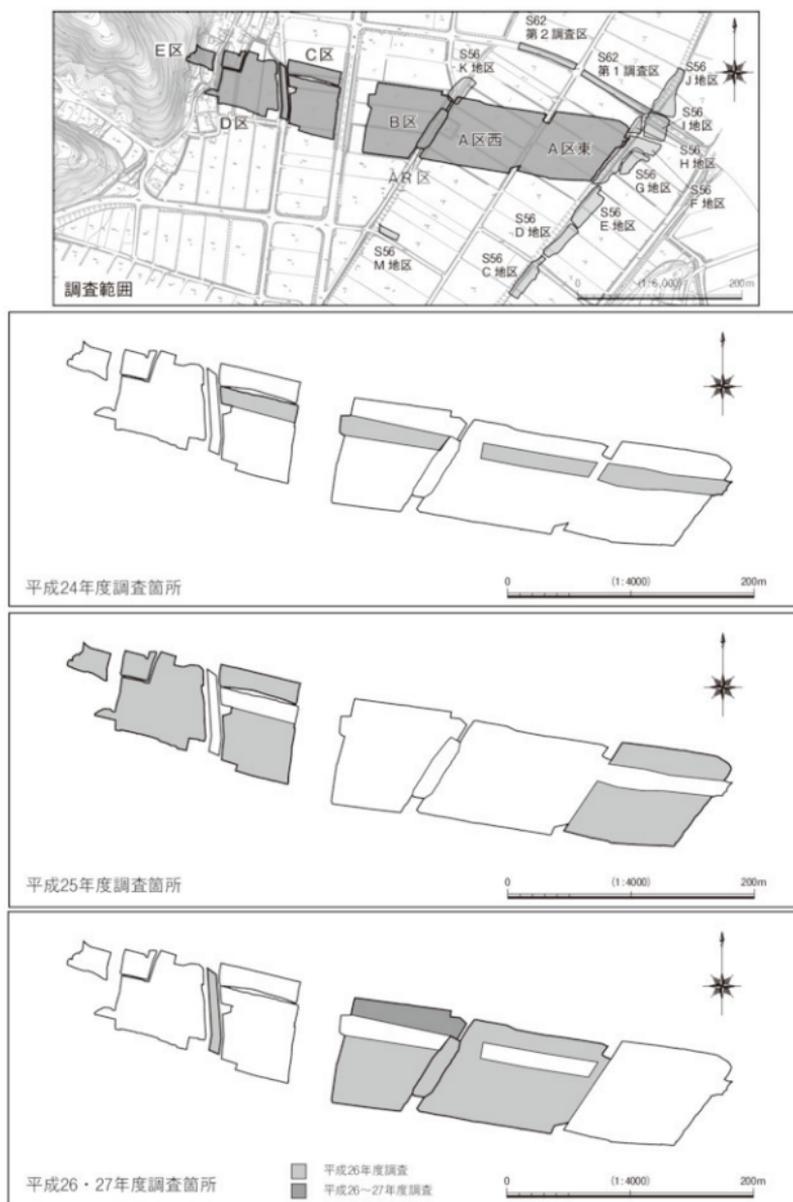


図2 会下・郡家遺跡調査範囲及び各年度調査箇所

建物4棟、室町時代以降の地下式坑1基、時期不明の堅穴建物2棟、掘立柱建物5棟など、A区西で弥生時代の袋状土坑4基、堅穴建物3棟、古代の溝状遺構1条など、B区で古代の溝状遺構3条、中世以降の溝状遺構1条、畦畔芯など、C区で古代の溝状遺構1条などを確認した。とりわけA区東では、平安時代中ごろの公的な性格を帯びた倉庫と考えられる大型掘立柱建物群が確認され、次年度に実施する調査区に展開していることも明らかとなるなど、律令体制が崩壊している時期の地方における様相解明に重要な知見を得ることができた。調査面積は、A区東1,535㎡、A区西1,216㎡、B区1,391㎡、C区910㎡の合計5,052㎡である。(原田)

<平成25年度>

平成25年度は、前年度に調査を実施した部分を除いたA区東、C区とD区、E区の調査を行った。なお、C区については、調査工程上の都合により、前年度調査区を境にC区北とC区南に分けて調査を行った。

調査は重機による表土剥ぎ作業を、A区東は4月2日から4月12日にかけて、C区南は4月8日から4月10日にかけて、D区はE区の表土剥ぎに伴う重機搬入路部分を除く範囲を4月2日から4月15日にかけてと、5月8日から5月10日にかけて、D区の残りの部分とE区は5月14日から5月28日にかけて、C区北は7月9・10日に行った。発掘作業員の稼働は、A区東とC区南において4月19日に開始した。その後、4月25日にD区、5月24日にE区、7月16日にC区北の調査に、それぞれ着手した。この間、6月18日には、前年度の調査により平安時代の大型掘立柱建物群が確認できていたA区東で、調査範囲を俯瞰する検出状況の航空撮影を実施している。台風による大雨のため、D区では調査区が冠水する事態が2度起こるなど、調査の進捗に重大な影響を及ぼしたが、10月3日にはD区の調査後航空撮影を実施し、10月5日にA区東で現地説明会を行い、112名の方々に参加いただくとともに、現地説明会に先立って行った、D区の地元向け報告会にも21名の方々に参加いただいた。11月2日にはA区東調査後航空撮影を実施し、12月17日をもって発掘作業員の稼働を終了した。

発掘調査の結果、A区東で縄文時代の落とし穴状遺構4基、弥生時代の木棺墓・土坑墓33基、袋状土坑16基、堅穴建物4棟、独立棟持柱建物2棟、古墳時代の堅穴建物4棟、掘立柱建物5棟、奈良時代の掘立柱建物5棟、平安時代の掘立柱建物7棟、室町時代以降の地下式坑22基、時期不明の堅穴建物、掘立柱建物など、C区で古代の溝状遺構2条、D区で古代の掘立柱建物2棟、粘土探掘土坑群、谷地形など、E区でピット3基などを確認した。前年度の調査で、その性格が目ざされたA区東では、平安時代中ごろの大型掘立柱建物群の中に、間仕切りや廂を持つものがあることなどから、単に倉庫としてだけでなく、気多郡衙衰退後に因幡国府と密接に結びついた公的な物資の収納・管理施設としての性格が考えられ、地方支配の在り方を探る上で貴重な調査成果をあげることができた。加えて、鳥取県最大級の独立棟持柱建物群が確認されるなど、弥生時代においても拠点的な地であったことが明らかとなるなど、数多くの重要な知見を得ることができた。調査面積は、A区東6,700㎡、C区4,548㎡、D区5,530㎡、E区830㎡の合計17,608㎡である。

なお、調査期間中に大型掘立柱建物群を中心とした掘立柱建物の構造や配置について、山中敏史氏に御指導を賜り、その指導内容を調査に反映させた。また、上記調査の他、A区西とB区の部分的な表土剥ぎを重機により行い、A区西については調査も一部であるが行った。(原田)

<平成26年度>

平成26年度は平成24、25年度調査部分を除いたA区西と、平成24年度調査区よりも南側のB区、C区

とD区の間にある市道睦会4号線の部分で調査を実施した。

調査は4月15日にA区西から着手し、前年度に機械掘削が終わっていた部分の遺構検出作業を行うとともに、残りの機械掘削を並行して実施した。B区の調査は5月13日から機械掘削に着手し、5月30日からは人力による掘削を開始した。B区は開析谷の中であるため、最初に東西と南北のサブトレンチを掘削して堆積状況の把握に努めつつ調査を進めた。市道睦会4号線部分(以下「C区平成26年度調査区」)の調査は7月14日から機械掘削に着手し、7月25日から人力による掘削を開始した。

A区西とB区の間にある市道八幡会下線の部分(AR区)は調査を行うために迂回路を設ける必要があった。そのため、A区西の西側の作業を優先して行い、迂回路敷設後の10月20日から31日にかけてAR区の機械掘削を実施した。

調査が進む中、11月12日にはA区西の航空撮影を行い、11月15日にはA区西で現地説明会を開催して101名の方々に参加いただいた。

AR区的人力掘削は11月17日から着手した。その後は雨や雪の日が多くなり作業が遅れ気味となったが、12月10日にB区最終面の航空撮影を行い、12月26日に現地での調査を終了した。

調査面積はA区(西調査区とAR区の合計)9,400㎡、B区4,088㎡、C区平成26年度調査区720㎡である。

A区西では落とし穴5基、掘立柱建物29棟、竪穴建物20棟、袋状土坑30基、土壇墓2基、道路遺構1条、溝1条、粘土探掘坑1基などを確認した。溝は古代に段丘面を東西に区画するために掘削されたもので、平安時代には溝を境に東西で様相が異なることが確認された。また弥生時代の土壇墓AWS2598は長軸2.8mの大型の掘方で深さが約2.5mある特異なもので注目される。

AR区、B区では3面の調査で耕作痕跡や溝状遺構、土坑などを確認し、少なくとも古代以降は水田耕作が行われていたことが分かった。

C区平成26年度調査区では、狭小な調査区ながら古代の掘立柱建物2棟などを確認した。(田中)

<平成27年度>

平成27年度はB区の北側部分の調査を行った。なお、一部は前年度に調査を着手している。

調査は4月13日から機械掘削と人力掘削を並行して開始した。調査にあたっては前年度同様に先にサブトレンチを掘削して堆積状況の把握に努めた。

調査の終盤になって、溝状遺構BS171内に木製構造物が比較的良好な状態で検出され、詳細な記録を取りながら部材を取り外すことで構造の把握を行った。7月24日に最終面の航空写真撮影を実施し、7月25日に現地での調査を終了した。調査面積は1,878㎡である。

この年の調査でも前年度同様に古代以降の耕作の痕跡を確認したほか、西側で礎敷遺構BS203を確認した。遺構の上面では女性を象った人形代が出土しており、祭祀を行うために造られた可能性が考えられた。

8月以降は調査で出土した遺物の整理作業と調査図面などのデータのとりまとめ作業を行うとともに、調査時に採取した試料を用いた自然科学分析を実施した。(田中)

<平成28・29年度>

前年度から引き続いて、現地調査で得られたデータのとりまとめ作業と出土遺物の整理作業(主に遺物実測作業および図版作成作業)を進め、報告書作成を実施した。

その間、A区で出土して土ごと切り取って持ち帰った古代銭のまとまり(AES205)について、蛍光X線分析とX線CT撮影および画像解析を実施した。(田中)

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

平成24年度		文化財主事	八峠 興、濱本 利幸
鳥取県埋蔵文化財センター			荒川 和哉、岡田 裕之
所長	久保 穰二郎		田中 正利
次長	中村 靖浩(兼総務係長)	発掘調査員	大谷 祐司、野津 旭
総務係			折井 敦
副主幹	白岩 準市		柴田 芳之(4月～12月)
主事	水本 裕子		近藤 人資
事務職員	岡村 好美、坂本 真奈美		(平成26年1月～3月)
	大丸 真紀、肌附 真観	発掘調査測量補助員(6月～12月)	
発掘事業室			近藤 人資、矢井 明
室長	山根 雅美(兼調整係長)	事務職員	近藤 智香
調整係			井上 章(4月)
発掘調査員	岩垣 命		平田 芳子
事務職員	池永 幸子		(5月～平成26年3月)
調査担当(気高調査事務所)		平成26年度	
副主幹	原田 雅弘	鳥取県埋蔵文化財センター	
文化財主事	八峠 興、荒川 和哉	所長	中原 斉
	田中 正利	次長	中村 靖浩(兼総務係長)
発掘調査員	藤本 隆之(10月～12月)	総務係	
事務職員	岡田 美子	係長	白岩 準市
平成25年度		主事	松浦 広美
鳥取県埋蔵文化財センター		事務職員	高橋 優、市村篤則
所長	久保 穰二郎	発掘事業室	
次長	中村 靖浩(兼総務係長)	室長	山根 雅美(兼調整係長)
総務係		調整担当	
係長	白岩 準市	発掘調査員	長谷 琢也
主事	松浦 広美	事務職員	中村 ゆかり
事務職員	治部 潤子、山本 真寿美	調査担当(気高調査事務所)	
	山本 友以(4月～12月)	係長(事務所総括調査担当責任者)	
発掘事業室			原田 雅弘
室長	山根 雅美(兼調整係長)	文化財主事兼係長	
調整担当		(会下・郡家遺跡調査担当責任者)	
発掘調査員	岩垣 命		加藤 裕一
事務職員	波邊 ゆきえ	文化財主事	八峠 興、田中 正利
調査担当(気高調査事務所)			梅村 大輔(4～6月)
係長(事務所総括調査担当責任者)		事務職員	竹内 努、新 ともみ
(会下・郡家遺跡調査担当責任者)		発掘調査支援業者	
	原田 雅弘		安西工業(株)・(株)ジーアイシー共同企業体

現場代理人	森 正人	平成28年度	
支援調査員	入江 剛弘、永田 宗秀	鳥取県埋蔵文化財センター	
	田代 郁夫、坂口 高人	所長	中原 斉
	久富 正登	次長	近藤 健(兼総務担当係長)
調査補助員	中北 敦子、藪野 勝久	総務担当	
	山本 雅徳	係長	港 浩二
平成27年度		主事	水本 祐子
鳥取県埋蔵文化財センター		事務職員	中森 貴子、西澤 直子
所長	中原 斉	発掘事業室	
次長	近藤 健(兼総務係長)	室長	松井 潔(兼調整担当係長)
総務担当		調整担当	
係長	白岩 準市	係長	濱 隆造(4月～5月)
主事	岡 梓	文化財主事	岩垣 命
	水本 祐子	発掘調査員	平井 克知
	(平成28年2月～3月)	調査担当(気高調査事務所)	
事務職員	高橋 優、植木 朋子	文化財主事	八峠 興、田中 正利
発掘事業室		事務職員	綾木 久美子
室長	山桥 雅美(兼調整係長)	平成29年度	
調整担当		鳥取県埋蔵文化財センター	
文化財主事	岩垣 命	所長	中原 斉
発掘調査員	平井 克知	次長	近藤 健(兼総務担当係長)
事務職員	坪内 恵子	総務担当	
調査担当(気高調査事務所)		係長	港 浩二
係長(事務所総括調査担当責任者)		主事	松浦 広美
	原田 雅弘	事務職員	高橋 優
文化財主事兼係長		発掘事業室	
(会下・郡家遺跡調査担当責任者)		室長	松井 潔
	加藤 裕一	文化財主事兼係長	
文化財主事	田中 正利		小山 浩和
事務職員	田淵 由樹子、中谷 沙織	発掘調査員	平井 克知
発掘調査支援業者	安西工業株式会社	調査担当(気高調査事務所)	
現場代理人	小田 晋吾	文化財主事	田中 正利
支援調査員	久富 正登	事務職員	神田 孝彦
調査補助員	山本 雅徳		

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境(図3・4)

鳥取県は、鳥取市を中心とする東部、倉吉市を中心とする中部、米子市を中心とする西部の3つの地域に分けられるが、東部・中部・西部の地域は、それぞれ旧の因幡国・伯耆国東伯・伯耆国西伯に相当する。会下・郡家遺跡は、鳥取県の東部地域に属する鳥取市の北西部、鳥取市気高町会下地内・郡家地内に所在する。

鳥取市は、平成16年(2004年)11月に、岩美郡国府町・福部村、気高郡気高町・鹿野町・青谷町、八頭郡河原町・用瀬町・佐治村の8町村を編入し、現在の形になった。会下・郡家遺跡が所在する鳥取市の北西部は、編入前は気高郡の郡域であった。

旧気高郡は、南部にそびえる鷲峰山(標高920.6m)西側の佐谷峠から長尾鼻に伸びる丘陵を境に、日置川・勝部川流域の山西地域(青谷町)と河内川・末用川流域の山東地域(気高町・鹿野町)の2つに分けられる。会下・郡家遺跡は、この2つの地域のうち山東地域の北西部に位置する。

山東地域には、南北方向に丘陵が伸び、その間を3つの谷が伸びている。3つの谷は、西から逢坂谷、勝見谷、瑞穂・宝木谷と呼ばれる。逢坂谷、瑞穂・宝木谷の大部分と勝見谷の北端部が気高町域で、勝見谷の北端部を除く大部分と山東地域南部が鹿野町域である。山東地域は、南部の山地のほとんどが山林で、谷沿いの丘陵の裾に集落が分布し、谷が畑地、水田として利用されている。北側は日本海に面し、東部に酒津漁港、西部に船磯漁港がある。

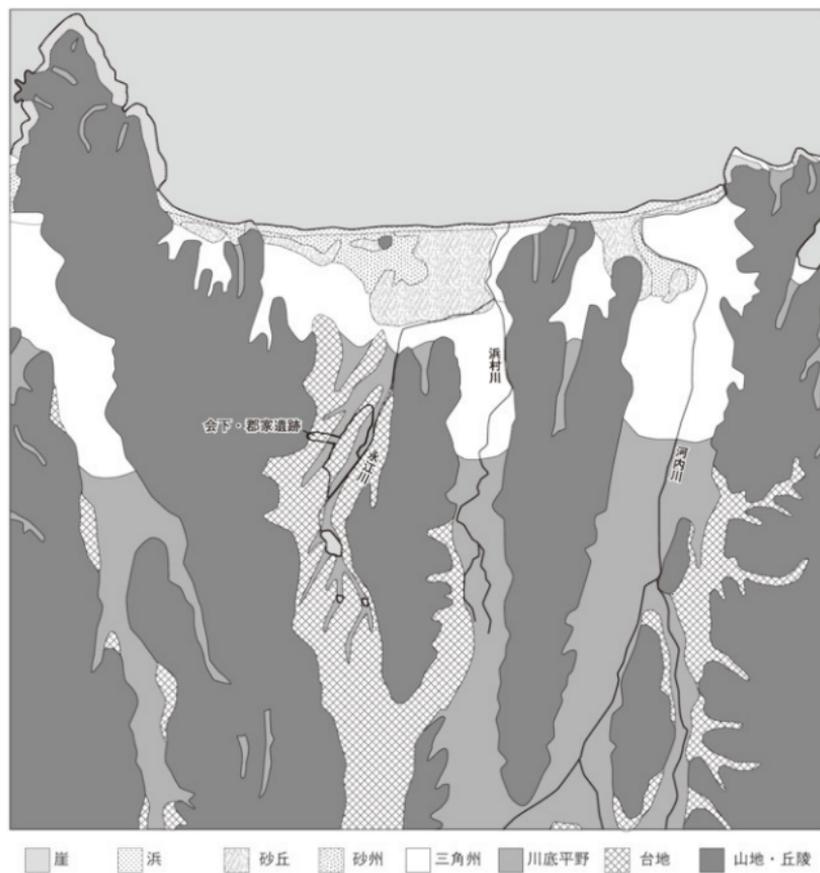
勝見谷の北部にある浜村温泉は明治15年(1882年)の道路工事の際に発見されたものだが、勝見谷には南北方向に伸びる断層があり、この断層に従って温泉が上昇している。勝見谷には浜村温泉の他に、昭和28年(1953年)に開湯した鹿野温泉が湧出している。浜村温泉街の北側、国道9号線との間の新砂丘上には、近年に新しく造成された住宅地が展開している。

この地域の地形を概観すると、北側に日本海を望み、南部は標高500m以上の山々が峰をなし、山地を形成している。これらの山は新生代第三紀中新世末の大規模な火山活動により、中国山地から流れ出した溶岩が河流により流されて堆積してきた白兔円礫層と、第三期鮮新世の火山活動で流出した多量の安山岩溶岩により造られた溶岩台地が、河川の浸食を受けて残されたものである。主な山としては、毛無山(標高570.5m)や鷲峰山、鷲峰山の南側に鹿野町で最も高い山(標高1136.8m)がある。この山は、山名が地図に記載されておらず、地元の人が「ゴーロ」・「アタマワレ」と呼んでいる山で、この山の北西麓から鷲峰山の南西麓にかけては河内川の水源地、毛無山の西麓が末用川の水源地である。鷲峰山からは、標高100mから200m前後の丘陵と逢坂谷、勝見谷、瑞穂・宝木谷の3つの谷底平野が日本海に向けて細長く南北方向に伸びる。河内川の流路は逢坂谷、勝見谷、瑞穂・宝木谷の順で流路を変えた。逢坂谷には河岸段丘が残されており、勝見谷、瑞穂・宝木谷は平坦な沖積平野である。この他に、山谷の出口には、扇状地が見られる。

逢坂谷の段丘本体は、花崗岩風化層の上位に堆積する礫層と、その上位に堆積する粘土層に分けられる。段丘本体の上位は大山倉吉軽石層(DKP)で覆われ、その上位には明黄褐色ロームが載り、その上位に大山上部ローム層・褐色ローム層が載り、その上を黒ボク層が覆っている。逢坂谷に大山の火山灰層が堆積していることから、逢坂谷を流れていた河内川は、大山が噴火し大山倉吉軽石層で覆われた時



図3 遺跡位置図



*土地分類基本調査図 地形分類図(鳥取北部・鳥取南部)1976を基に作成

図4 遺跡周辺の地形環境

には、勝見谷に流れるようになっていたと考えられる。やがて、現在と同じように瑞穂・宝木谷に流れるようになった。河内川が瑞穂・宝木谷に流れるようになった時期は、黒ボク層の形成より前である。

気高町の沿岸は、西端の長尾鼻と東部の酒津漁港周辺が溶岩流により形成された岩石海岸であるが、それ以外は殆どが砂丘である。砂丘の砂は、中国山地を構成する岩石のうち、主に花崗岩が風化により砕け、河川の浸食により流され、海に運ばれる間に円磨されたものである。その砂が波や海流、あるいは風により運ばれ、海中や砂浜の障害物に掛かることにより形成されたわずかな高まりに沿って堆積し、砂丘が形成されてゆく。砂丘の発達には緩急があり、砂丘の発達が緩慢な時には、砂丘上での人の活動が盛んになり、クロスナ層と呼ばれる地層が形成された。

この他の地形としては、湖沼がある。主に海岸の入江が砂丘の発達により堰き止められた潟湖で、気高町内では、現在も残る水尻池や、江戸時代以降に干拓された日光池が該当する。山に近い谷中には谷を堰き止めて人為的に造られた溜池が多くあり、また、小規模な池・沼地がわずかに残っている。

会下・郡家遺跡は逢坂谷北部の河岸段丘上に位置するが、遺跡が形成された当初の地形は近世以降の耕地造成による削平や、昭和時代の圃場整備による土地改変により、本来の地形や堆積していた地層が失われている部分が多い。(荒川)

第2節 歴史的環境

会下・郡家遺跡周辺の逢坂谷を中心に、勝見谷、瑞穂・宝木谷と周辺丘陵の気高町、鹿野町北部地域の歴史的環境について、遺跡の発掘調査の成果などを踏まえ、時代ごとに概観する。

縄文時代 この地域でヒトの活動の痕跡が確認されるのは縄文時代からで、旧石器時代に遡る遺跡は、今のところ確認されていない。

逢坂谷では山宮茶山畑遺跡(160)で刻目突帯文のある土器片が出土し、殿地内で凹石、郡家地内で石鏃、高江地内で打製石斧・石鏃が採集されている。勝見谷では寺内廃寺跡(117)で石鏃・打製石斧・磨石、寺内京南遺跡(119)で縄文後期の土器片、石鏃が出土している。瑞穂谷では柄杓目遺跡(65)で早期から晩期までの土器、打製石斧が出土している。宝木谷では下光元地内で磨製石斧、閉野地内で局部磨製石斧が採取されている。沿岸部の浜村砂丘上の短尾遺跡(308)でクロスナ層から中期の土器、石鏃・石斧・石錘・石槍などが出土しており、八東水の砂丘で有舌尖頭器・槍先型尖頭器(黒曜石製)が表採取されている。水尻池南側の奥沢見地内で打製石斧・石錘・石鏃が採集されている。

縄文時代の遺構としては、逢坂谷の山宮笹尾遺跡(159)で後期・晩期の土器、石鏃・石錘・首飾りなどの遺物を伴う土坑・落とし穴、山宮茶山畑遺跡で落とし穴が検出されており、瑞穂谷では土居地内の正寿寺裏山斜面で中期前葉の土器を伴う土坑が検出されている。瑞穂谷では柄杓目遺跡で早期から晩期までの土器を伴う溝状遺構、晩期の土器を伴う土坑が検出されている。

このように、縄文時代には沿岸部の砂丘や河岸段丘・扇状地上で、狩猟採集を中心とする生活が営まれていた痕跡を確認することができる。

弥生時代 弥生時代は、発掘調査などにより多くの遺構・遺物が確認されている。特に、逢坂谷で弥生時代の居住域・墓域に伴う遺構・遺物が多く確認されている。

逢坂谷では会下・郡家遺跡(1)で中期後葉から後期の竪穴建物、中期後葉の袋状土坑・土坑墓を含む土坑が検出されている。睦逢遺跡(154)では後期前葉の袋状土坑・木棺墓、三王尻遺跡(156)で中期の土



1 地下、城址遺跡 2 1 城址遺跡 3 城址遺跡 4 城址遺跡 5 城址遺跡 6 城址遺跡 7 城址遺跡 8 城址遺跡 9 城址遺跡 10 城址遺跡 11 城址遺跡 12 城址遺跡 13 城址遺跡 14 城址遺跡 15 城址遺跡 16 城址遺跡 17 城址遺跡 18 城址遺跡 19 城址遺跡 20 城址遺跡 21 城址遺跡 22 城址遺跡 23 城址遺跡 24 城址遺跡 25 城址遺跡 26 城址遺跡 27 城址遺跡 28 城址遺跡 29 城址遺跡 30 城址遺跡 31 城址遺跡 32 城址遺跡 33 城址遺跡 34 城址遺跡 35 城址遺跡 36 城址遺跡 37 城址遺跡 38 城址遺跡 39 城址遺跡 40 城址遺跡 41 城址遺跡 42 城址遺跡 43 城址遺跡 44 城址遺跡 45 城址遺跡 46 城址遺跡 47 城址遺跡 48 城址遺跡 49 城址遺跡 50 城址遺跡 51 城址遺跡 52 城址遺跡 53 城址遺跡 54 城址遺跡 55 城址遺跡 56 城址遺跡 57 城址遺跡 58 城址遺跡 59 城址遺跡 60 城址遺跡 61 城址遺跡 62 城址遺跡 63 城址遺跡 64 城址遺跡 65 城址遺跡 66 城址遺跡 67 城址遺跡 68 城址遺跡 69 城址遺跡 70 城址遺跡 71 城址遺跡 72 城址遺跡 73 城址遺跡 74 城址遺跡 75 城址遺跡 76 城址遺跡 77 城址遺跡 78 城址遺跡 79 城址遺跡 80 城址遺跡 81 城址遺跡 82 城址遺跡 83 城址遺跡 84 城址遺跡 85 城址遺跡 86 城址遺跡 87 城址遺跡 88 城址遺跡 89 城址遺跡 90 城址遺跡 91 城址遺跡 92 城址遺跡 93 城址遺跡 94 城址遺跡 95 城址遺跡 96 城址遺跡 97 城址遺跡 98 城址遺跡 99 城址遺跡 100 城址遺跡 101 城址遺跡 102 城址遺跡 103 城址遺跡 104 城址遺跡 105 城址遺跡 106 城址遺跡 107 城址遺跡 108 城址遺跡 109 城址遺跡 110 城址遺跡 111 城址遺跡 112 城址遺跡 113 城址遺跡 114 城址遺跡 115 城址遺跡 116 城址遺跡 117 城址遺跡 118 城址遺跡 119 城址遺跡 120 城址遺跡 121 城址遺跡 122 城址遺跡 123 城址遺跡 124 城址遺跡 125 城址遺跡 126 城址遺跡 127 城址遺跡 128 城址遺跡 129 城址遺跡 130 城址遺跡 131 城址遺跡 132 城址遺跡 133 城址遺跡 134 城址遺跡 135 城址遺跡 136 城址遺跡 137 城址遺跡 138 城址遺跡 139 城址遺跡 140 城址遺跡 141 城址遺跡 142 城址遺跡 143 城址遺跡 144 城址遺跡 145 城址遺跡 146 城址遺跡 147 城址遺跡 148 城址遺跡 149 城址遺跡 150 城址遺跡 151 城址遺跡 152 城址遺跡 153 城址遺跡 154 城址遺跡 155 城址遺跡 156 城址遺跡 157 城址遺跡 158 城址遺跡 159 城址遺跡 160 城址遺跡 161 城址遺跡 162 城址遺跡 163 城址遺跡 164 城址遺跡 165 城址遺跡 166 城址遺跡 167 城址遺跡 168 城址遺跡 169 城址遺跡 170 城址遺跡 171 城址遺跡 172 城址遺跡 173 城址遺跡 174 城址遺跡 175 城址遺跡 176 城址遺跡 177 城址遺跡 178 城址遺跡 179 城址遺跡 180 城址遺跡 181 城址遺跡 182 城址遺跡 183 城址遺跡 184 城址遺跡 185 城址遺跡 186 城址遺跡 187 城址遺跡 188 城址遺跡 189 城址遺跡 190 城址遺跡 191 城址遺跡 192 城址遺跡 193 城址遺跡 194 城址遺跡 195 城址遺跡 196 城址遺跡 197 城址遺跡 198 城址遺跡 199 城址遺跡 200 城址遺跡 201 城址遺跡 202 城址遺跡 203 城址遺跡 204 城址遺跡 205 城址遺跡 206 城址遺跡 207 城址遺跡 208 城址遺跡 209 城址遺跡 210 城址遺跡 211 城址遺跡 212 城址遺跡 213 城址遺跡 214 城址遺跡 215 城址遺跡 216 城址遺跡 217 城址遺跡 218 城址遺跡 219 城址遺跡 220 城址遺跡 221 城址遺跡 222 城址遺跡 223 城址遺跡 224 城址遺跡 225 城址遺跡 226 城址遺跡 227 城址遺跡 228 城址遺跡

圖5 周边遺跡分布圖

坑・木棺墓、上原遺跡(163)で竪穴住居跡、中期の木棺墓・土坑、上原南遺跡(164)で中期から後期の竪穴住居跡・土坑墓を含む土坑が検出されている。また、山宮茶山畑遺跡で中期の土器が出土している。

勝見谷では寺内庵寺跡で中期末から後期の土器、寺内京南遺跡で後期の土器片が出土している。瑞穂谷では柄杓目遺跡で中期の竪穴住居跡・土坑、後期の袋状貯蔵穴を含む土坑・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・木棺墓・溝が検出されており、東岸の常松菅田遺跡(18)で中期中葉の管玉工房が確認され、隣接する常松大谷遺跡(19)で後期後葉の谷水田が検出された。また西岸の下坂木清合遺跡(2)では中期中葉から終末期の遺物が出土しており、後期後葉から終末期の地中梁を伴う掘立柱建物や焼失した竪穴建物などが確認された。宝木谷では下光元地内で石包丁の破片が採取されている。浜村海岸の砂丘上にある短尾遺跡や宝木砂丘の第2砂丘列上の宝木高浜遺跡(6)では、クロスナ層から弥生土器・石包丁などが、奥沢見地内で弥生土器の底部・石錘が採取されている。

以上のように、弥生時代も河岸段丘・扇状地上、沿岸部の砂丘上で生活が営まれていたことが確認できるが、この地域での弥生時代の遺跡は中期以降のもので、前期の遺跡は確認されていない。

古墳時代 古墳時代には山麓や尾根上に多くの古墳が築造されるようになり、河岸段丘・扇状地上で生活が営まれる。まず、この地域の古墳や墓域に伴う遺構について、前期から概観する。

前期の古墳としては、二本木7号墳を含む同一丘陵上に並ぶ6基の方墳群がある。二本木7号墳は、東西22m・南北17mの方墳で、発掘調査により墳丘中央部を南北に横断する溝と、その溝を挟み東側に1基の埋葬施設、西側に3基の埋葬施設が検出されている。また、4世紀中頃に比定される古式土師器が出土している。他に前期の墓域に伴う遺構としては、上原南遺跡で供献土器と見られる古式土師器を伴う方形周溝墓・円形周溝墓が、柄杓目遺跡で木棺墓が検出されている。

中期には、丘陵上に前方後円墳の重高4号墳(全長21m)、重高5号墳(全長35.5m)、宝木1号墳(全長19m)、宝木16号墳(全長26m)、上光10号墳(全長33m)、矢口1号墳(全長21m)、山崎17号墳、重山9号墳(全長20m)、出百姓13号墳(全長22.5m)、前方後方墳の西山1号墳(全長47m)、八東水7号墳(全長約38m)、中円双方墳あるいは別区付きの前方後円墳と見られる沢見塚古墳(全長25m)などの古墳が築造された。山崎17号墳の箱式石棺の内外から、須恵器、鉄刀などが出土している。丘陵上には、これらの前方後円墳や前方後方墳以外にも、主に小円墳からなる群集墳が形成された。内部主体は主に箱式石棺で、箱式石棺には勝見15号墳に見られるように棺内に板石をV字状に立てかけた石枕を持つものがあり、「妻波型」と呼ばれる。箱式石棺を主な内部主体とする群集墳や古墳として、下光元古墳群(22)、日光小池古墳群(84)、勝見古墳群(93)、重山古墳群(100)、神越谷古墳群(121)などが分布する。下光元3号墳からは棺内から成年男女各1体の人骨、直刀、須恵器などが出土している。他に中期の墓域に伴う遺構として、戸島遺跡(43)で埋土から5世紀中頃の須恵器が出土した弧状にめぐる古墳の周溝と見られる溝が検出されているほか、帰属時期は不明であるが、方形周溝墓あるいは方墳の周溝と見られる溝も検出されている。

後期には、谷に沿った丘陵上に径10m前後の円墳を主体とする群集墳が形成された。内部主体は横穴式石室であるが、逢坂谷を中心する地域では、板状節理輝石安山岩の板石により、奥壁1枚、側壁各2枚を立て、その上に天井石2枚を置いた形を基本とする横穴式石室が見られる。この型の石室は、逢坂谷を中心として、西は青谷町日置谷周辺、東は勝見谷周辺に分布し「逢坂型横穴式石室」と呼ばれる。石室には線刻壁画が描かれているものがあるのが特徴で、気高町藤達11号墳の石室には鳥、格子状、横筋状、綾杉文、殿15号墳の石室には綾杉文、殿25号墳の石室には鳥、綾杉文、鹿野町西中国

8号墳の石室には木葉、直線状、青谷町吉川43号墳の石室には船、阿古山22号墳の石室には数隻の船、魚、星などの線刻が見られる。

横穴式石室内の調査では、山宮14号墳から須恵器、水谷口2号墳から須恵器、耳環、刀、鉄斧、鑿状工具、ガラス製小玉、西中園8号墳から須恵器、鉄製品、金銅製太刀、馬具が出土している。

また、宝木谷の下光元・上光とその周辺の丘陵には横穴墓が群集しており、他の谷の丘陵にも横穴墓群が点在する。瑞穂谷の漆谷横穴墓(50)は、内部は四注式の天井を有する家形で、壁面には綾杉文の線刻が確認されている。

後期の墓域に伴う遺構として、寺内京南遺跡で7世紀代の木棺直葬墓、柄杓目遺跡では板石ではなく塊石で築かれた横穴式石室が検出され、須恵器、耳環、碧玉製管玉、刀子、鉄釘が出土しており、土坑墓の可能性のある土坑も検出されている。

終末期の古墳としては谷奥古墳群(144)の谷奥1号墳、谷奥2号墳が知られる。江戸時代、明治時代に石室がほとんど破壊され、石室が破壊された時に谷奥1号墳から馬鐙、銅鏡、金環、銅鏡(変形神獸鏡)、直刀装具、玉類、須恵器などが出土しており、奥谷2号墳からは人骨が出土している。銅鏡が古墳から出土する例は、群馬県、千葉県を主とする関東地方を中心に、東北から九州にかけて見られるが、県内では智頭町の黒木谷古墳からの出土例が知られる。他に終末期の墓域に伴う遺構として、戸島遺跡で7世紀後半の須恵器高台付坏が底面から出土した土坑墓が検出されている。

古墳や墓域に伴うもの以外の遺構・遺物は、主に逢坂谷の段丘上で確認されている。睦逢遺跡で後期の竪穴建物、三王尻遺跡で前期の竪穴建物・土坑、山宮茶山畑遺跡・山宮阿弥陀森遺跡(161)で前期の竪穴建物、上原遺跡で前期の竪穴建物、上原南遺跡で袋状土坑を含む土坑が検出されている。宝木谷の戸島遺跡では後期の竪穴建物が検出されている。勝見谷では寺内京南遺跡で前期の竪穴建物、袋状土坑を含む土坑、溝、中期から後期の土坑、ピット、溝が検出されており、寺内廃寺跡で土師器、須恵器が出土している。瑞穂谷では柄杓目遺跡で前期の竪穴建物、掘立柱建物、土坑、中期の竪穴建物、土坑が検出されている。沿岸部の砂丘上の短尾遺跡で須恵器、宝木高浜遺跡で古式土師器、須恵器がクロスナ層から出土している。この他に、祭祀関連の遺物として、下光元地内で土馬、浜村地内・日光地内で子持勾玉が採集されている。古墳時代の集落遺跡は逢坂谷に多いが、勝見谷、瑞穂・宝木谷の丘陵での古墳群の分布を見ると、これらの谷の丘陵裾部や扇状地上に未確認の集落遺跡があることが想定される。

古代 鳥取県東部は、古代律令制下では山陰道因幡国に属した。『和名類聚抄』によると因幡国は、巨濃・法美・八上・智頭・邑美・高草・気多の7郡からなる。旧気高郡域(気高町・鹿野町・青谷町域)と鳥取市西端の一部を含む地域が、気多郡に比定されている。気多郡は大原・坂本・口沼・勝見・大坂・日置・勝部の7郷からなる。平城宮跡で出土した木簡に「因幡国喜多郡雉膳一斗五升 養老四年十月」、「因幡国気多郡勝見郷中男神部直勝見麩作物海藻大貳老籠六斤太」(表)「神護景雲四」(裏)という記載が見られるが、これが気多郡という郡名の初見である。

気多郡衙の比定地は、逢坂谷の段丘上に展開する上原遺跡群(山宮阿弥陀森遺跡、上原西遺跡(162)、上原遺跡、上原南遺跡)である。上原遺跡ではL字型の配置をとる大型掘立柱建物群、大型の二面庇付掘立柱建物跡を中心とする掘立柱建物群、礎石建物・区画溝が検出されている。二面庇付掘立柱建物跡を中心とする掘立柱建物群は9世紀以降に下る新しい段階の政庁の中心建物群と推定されている。また、掘立柱建物群よりも古い土坑から、土器、瓦、埴仏、輪羽口、埴塙などが出土している。出土

した須恵器から、7世紀末から8世紀初め頃の時期のものと見られ、この付近に郡衙施設造営以前の寺院、あるいは古い段階の郡衙施設に伴う仏教施設があったと推定されている。

山宮阿弥陀森遺跡では掘立柱建物群が50棟以上検出されている。桁行3間・梁行2間の側柱掘立柱建物跡を主体とするが、桁行6間・梁行2間のものを含む総柱掘立柱建物跡や大型の掘立柱建物跡も検出されており、他に柵・土坑なども検出されている。これらの土坑埋土などからは、7世紀末から9世紀末にかけての土器が多く出土しており、この中には30数点の墨書土器がある。墨書は「郡家一」「中」「長」「三町」などの文字が判読されている。また、坏、皿、甕類、竈、支脚、坏の転用硯、鉄滓などが出土している。これらの出土物から、郡官の居住区、郡衙の鍛冶工房か工人の居住区、あるいは郡衙の厨の機能を持つ区域と推定されている。この掘立柱建物群の東側では、長大な掘立柱建物跡を含む掘立柱建物群、区画施設の可能性がある溝が検出されている。この掘立柱建物群は、7世紀末から8世紀代にかけての古い段階の政庁の中心建物群と推定されている。

上原南遺跡では、掘立柱建物群、柵、土坑などが検出されており、7世紀末から10世紀まで存続する郡衙関連施設と推定されている。また、大型の土坑が検出され、その埋土から多量の瓦片と鳥尾が出土しており、気多郡衙と関わりを持つ寺院、仏教関連施設が存在した可能性が指摘されている。

上原西遺跡では総柱掘立柱建物跡が検出されており、郡衙の正倉跡かその一部、あるいは郡衙に伴う正倉以外に置かれた倉庫跡と推定されている。

宝木谷の戸島遺跡、馬場遺跡(44)では掘立柱建物群、掘立柱塀、溝、土坑などが検出されている。戸島遺跡の中心は東西45m、南北55.5mで周囲を掘立柱塀で囲んだ方形区画と掘立柱建物群である。方形区画は正殿と見られる中央の掘立柱建物と掘立柱塀により南区と北区に分けられ、正殿を囲むように布掘方掘方の掘立柱建物が10棟左右対称に配置されている。この配置は、7世紀後半から8世紀代にかけてのもので、その後、建物配置を変え10世紀まで続くことが確認されている。馬場遺跡では溝とその内側の掘立柱塀で区画された90m四方と推定される区画内に、南北方向に長い側柱掘立柱建物と総柱掘立柱建物などが配置されている。この配置は、8世紀中頃から10世紀にかけてのものと推定されており、その前段階の大型側柱掘立柱建物1棟が7世紀後半から8世紀中頃までのものと推定されている。戸島遺跡・馬場遺跡で検出された2つの区画内に配置された掘立柱建物群は、公的な機能をもつ施設(気多郡衙の出先機関的な施設、あるいは気多郡に属する坂本郷の官衙)とも推定されている。

他の古代の遺跡としては、逢坂谷北部の睦逢遺跡で7世紀後半あるいは7世紀末に開始され、奈良時代に至る掘立柱建物群、礎石建物・溝が検出されている。掘立柱建物の中には2棟並列の配置をもつものがあり、有力者層の居宅と推定されている。三王尻遺跡では掘立柱建物群・柵・土坑、山宮茶畑山遺跡では掘立柱建物群が検出されている。これらの掘立柱建物は、桁行4間以下・梁行3間以下の小型の建物であることや、配置の計画性が希薄で、方位にばらつきが見られることなどから、一般農民層の集落と推定されている。

逢坂谷以外では、勝負谷の寺内京南遺跡で奈良時代の掘立柱建物群、宝木谷の狭間遺跡(40)で奈良時代の掘立柱建物・掘立柱塀・井戸、平安時代の掘立柱建物が検出されている。瑞穂谷では常松菅田遺跡で飛鳥時代の掘立柱建物が、常松大谷遺跡で奈良時代後期から平安時代初期の掘立柱建物が検出され、流路内から木製祭祀具が出土している。下坂本清合遺跡では平安時代後期の掘立柱建物群が検出され、近くの流路からは多量の漆製品が出土した。また、柄杓目遺跡で平安時代前期の掘立柱建物群・柵が検出されている。掘立柱建物群には桁行6間ないし7間・梁行2間の長大な側柱掘立柱建物、

桁行3間・梁行2間の総柱掘立柱建物も含まれ、一般の住居とは性格を異にする掘立柱建物群と推定されている。沿岸部の宝木高浜遺跡では砂丘上のクロスナ層から糸切り底をもつ土師器坏が出土している。

古代の生産域に伴う遺構は検出されていないが、条里に基づく地割があったと推定されている。その施行時期はわからないが、逢坂谷の段丘上、勝見谷、瑞穂・宝木谷の谷底平野の南部に、条里の手掛りとなる小字名が残されており、また、圃場整備が施されるまでの地図や航空写真で方形地割が確認されている。

この地域における古代寺院としては、鹿野町寺内地区の寺内廃寺がある。白鳳・奈良時代の瓦片が出土し、寺内の集落内に塔心礎だけが残されているが、寺域や伽藍配置については明確ではない。

『延喜式』『神名帳』に記された気多郡内の式内社として、板井神社(気高町奥沢見)・志加奴神社(気高町宿)・加知弥神社(鹿野町寺内)・利川神社(青谷町早牛)・幡井神社(青谷町組見)の5社があり、『神名帳』に記されていない式外社として、『日本三代實録』に鷲峰神社(鹿野町鷲峰)・神前神社(青谷町鳴滝)・相屋神社(青谷町青谷)に神階が授与されたことが記されている。

古代の官道(駅路)として、山陰道が整備されていた。『延喜式』『兵部省諸国駅伝馬条』に、因幡国の山崎・佐尉・敷見・柏尾の4駅に駅馬各8疋、巨濃・高草・気多の3郡に伝馬各5疋が置かれていたことが記されている。駅路は、高草郡家以西の高草郡から気多郡にかけて、潟湖である湖山池の南側を通過するルートで内陸を通過していたと推定されている。

中世 中世の各争乱の中で、全国各地に城郭や砦が数多く築かれたが、この地域にも多く築かれた。

これらの中世城郭は、鎌倉時代以降に在地領主・国人により築城されたもの、また、南北朝時代以降の因幡守護に任じられた山名氏の内乱、因幡国への尼子勢・毛利勢の侵攻に伴う争乱、織田信長に遣わされた羽柴秀吉による中国攻めなど、各時期における因幡国内外の勢力争いを背景として築城あるいは利用されたものである。

これらの城郭・砦を築いた領主や国人の居館、この地域に住んでいたヒトが生活した村落については、その全容をつかめるようなものは、発掘調査で確認されていない。発掘調査により検出されたものを以下に挙げると、逢坂谷では山宮阿弥陀森遺跡で土坑墓が検出されている。山宮茶山畑遺跡で大型の土坑が検出されている。この大型土坑の埋土の下層に砂鉄を含み、土師器・須恵器の他に鉄釘1点・鉄製楔1点が出土しており、タタラ製鉄に関する遺構である可能性が指摘されている。上原南遺跡で地下式坑・土坑・柱穴と見られるピット、宝木谷の戸島遺跡で火葬を行なった可能性がある土坑墓が検出されている。また、山崎17号墳の発掘調査で後円部の表土下で五輪塔の頂部(空・風輪部)が出土し、山裾から宝篋印塔の九輪部と見られる石片が採取されている。勝見谷では寺内廃寺跡で寺の廃絶以降の掘立柱建物・土坑墓群が検出されている。土坑墓の中には井戸を転用したもの、備前焼甕に木製の箱型の蓋で覆い、さらにその上に板石を置いたもの、墓坑の端に土師器皿を大小大小の配列で埋納したものが見られる。寺内京南遺跡では土坑が検出されており、また、圃場整備に伴う基礎工事の際、宝篋印塔・五輪塔が一群をなして出土しており、中世の墓域があったと考えられている。瑞穂谷では常松大谷遺跡で鎌倉時代の掘立柱建物が検出されており、下坂本清合遺跡では柄杓目遺跡で室町時代から近世初頭にかけての土坑墓・五輪塔・列石群など墓域に伴う遺構、遺物や土坑、15世紀末の石列、石組み溝などが検出されている。石組み溝で囲まれた内側でピットが検出されていることから、石組み溝は建物を囲む溝と考えられている。

この他に、信仰に関連する遺構・遺物として、勝見15号墳で経塚が検出されている。この経塚は、古墳の墳丘上に川原石を盛り、墳頂付近に掘られた方形の土坑に板石を立て経筒を納める石室にしたものである。盗掘により破壊されていたが、蓋と身からなる陶製の外筒が土坑の内外から出土している。12世紀後半から13世紀初めにかけて製作されたと考えられ、身の外面には「藤井□□惣テ井遺候也」の墨書が見られる。会下・郡家遺跡では室町時代中期頃の仏具を埋納した土坑が検出されている。出土した仏具は青銅製で、香供養具・華供養具・燈供養具・飲食供養具からなる。青銅製仏具の出土は、同遺跡における中国産・朝鮮産磁器・輸入銭の出土とともに、これらの物品を入手・所持し得る有力者が居住していたことを示している。

近世以降 中世の各時期の争乱を経て、この地域は、天正9年(1581年)、豊臣秀吉により因幡国気多郡鹿野城主として1万3,800石を与えられた亀井武藏守茲矩により治められる。後に、茲矩は徳川家康により因幡国高草郡2万4,200石を増増され、3万8,000石の鹿野藩初代藩主となる。茲矩は藩内の諸産業の振興、新田開発のための干拓、治水、植林、朱印船貿易などの政策を行なった。産業振興のひとつとして茶栽培が勧められたが、山宮茶山畑遺跡で検出された植栽・施肥施設の痕跡は、近世初頭に開かれた茶園に伴う茶木の植栽・施肥の跡と考えられている。

鹿野藩は、元和元年(1615年)、茲矩の嫡子政矩が石見国津和野4万3,000石に増増転封された後、廃藩となり鳥取藩領となった。その後、寛永17年(1640年)、播磨国山崎藩主池田輝澄がお家騒動(池田騒動)を起こして鳥取藩お預かりとなり、堪忍料として1万石を与えられたことで再立藩した。寛文2年(1662年)、輝澄の後を継いだ政直が輝澄の死後、1万石を与えられ播磨国福本藩に転封されることにより、鹿野藩は再び廃藩となった。貞享2年(1685年)、鳥取藩主池田光仲が2万5,000石を次男仲澄に与え、新田分知による分家とし鳥取東館新田藩を立藩した。幕末に至るまで藩庁は鳥取に置かれ、鳥取藩から蔵米の支給を受け、藩政は鳥取の本藩から派遣された役人が行っており、形式的な藩であった。明治元年(1868年)12月に鹿奴陣屋を藩庁とし鹿奴藩と呼称されたが、明治2年(1869年)に廃藩し、鳥取藩に吸収された。

茲矩が入城した鹿野城は、本来は中世山城で山名氏配下の志加奴氏の居城であったが、入城した茲矩が山城を総石垣造りにし、新たに籠に本丸・二の丸を築き、城下町の整備を行なった。茲矩の嫡子政矩の津和野転封後、鹿野城には独立した領主は入らず、鳥取藩主池田光政の重臣である日置豊前守忠俊の居城として残された。しかし、寛永5年(1628年)の火出により城内の建物は焼失した。寛永9年(1632年)、池田光政が備前岡山藩に移封され、これに従い日置豊前守も備前に移り、残っていた石垣も正保元年(1644年)2月に取り崩されたと伝えられる。

発掘調査により検出された近世以降の遺構は、墓域に伴う遺構として、山宮茶山畑遺跡で墓標を伴う方形の土壇状遺構・台座礎石状遺構が検出されており、信仰に伴う遺構として、北短尾遺跡(90)で3基の塚が検出されている。これらの塚は、浜村砂丘の海岸に突き出すように浮かぶ小高い丘陵上に立地し、塚はいずれも石を環状に積み上げ、その中に盛土を行ない、穴を掘り蓋石をしている。塚の盛土内から寛永通宝・康熙通宝が出土している。農耕に伴うものとしては、会下・郡家遺跡で用水路・暗渠・耕作溝、陸道遺跡で暗渠が検出されており、会下・郡家遺跡の周辺は水田や畑地として利用されていたことが窺える。近世以降は、丘陵裾に沿う集落、河岸段丘上・谷底平野に広がる畑地・水田という景観が展開しており、その景観は、果樹園造成や圃場整備による地形の変形はあるが、現在に至るまでほぼ変わらずに残されている。(荒川)

第3章 A区の調査

今回の調査では、道路を境に東と西で地区を分けて調査を実施したが、全体に遺構が広がっており、本書ではまとめて報告を行うこととする。また、調査区内で多量の土坑や小穴を検出、調査を行ったが、本書では遺構の性格が明確なものを中心に主要な遺構のみを報告する。

第1節 地形と基本層序(図6・11、PL.9・10)

A区は、会下・郡家遺跡全体においては東寄りに位置する調査区で、段丘面上とその東側の低位面、西側の谷地形に位置するB区へと続く斜面(西側斜面部)から成る。

段丘面の現況の地目は「田」で、昭和50年代に実施された圃場整備により改変を受け、平坦化されている。とりわけ谷部寄りの西側は、削平、盛土造成といった改変が顕著で、原地形保持の度合いは低い。旧地表面を為していた堆積と推測される、黒色・黒褐色系を呈するシルト層(Ⅲ層)は調査区の中央から東側にかけて遺存しており、大規模な改変の影響は比較的標高が低い調査区北西部を中心に確認できる。

東側の低位面の境の斜面は地下式坑が削平された状況で確認できることや堆積層から出土した遺物から、段丘崖ではなく江戸時代以降の土地改変によるものと判断した。また、調査区北西部に段丘面よりも1段下がった平坦面が確認できたが、これらについても同時期の土地改変の伴うと考える。一方、O4グリッド(以下「グリッド」省略)東半とP4には遺構を検出した面の上に江戸時代の水田耕作土が堆積することから、遺構の年代の下限は18世紀代より以前に比定でき、概ね中世後期から近世前期にかけての遺構群と推定できる。

A区西側は、昭和50年代の圃場整備に加え、斜面部にはそれに付随した農道の敷設、段丘面には圃場整備後建設された会下浄水場の跡地が所在するなど、一帯はこの時期にかなり大きな改変を受けている。斜面部では、テラス状の平坦面を2箇所、溝(AWS3045、現代溝)を伴い検出しているが、出土遺物や土層堆積(図11)から近世以降、現代に至るまでの帰属時期が想定でき、それ以前の地形の詳細については判然としない。ただ、これら平坦面には対応しないものの、古代末～中世前期に帰属する土器が出土した溝(AWS3029・3030)を限られた範囲ながら検出しており、斜面部の開発及び土地利用の履歴が少なくともこの頃まで遡る可能性がある。

基本層序 本調査区のうち、西調査区では段丘面における基本的な土層堆積は、A～Fの6地点で記録を行い、東調査区では南側で基盤層より上の堆積状況の記録を行った。以下、その概要を述べる。

I層：現代水田における耕作土。

II層：昭和50年代実施の農地改善に伴う造成土。旧地形のうち、標高の低くなる北西側(A-A'セクション)や北東部(J-J'セクション)で厚く堆積する。

III層：黒色(10YR2/1)、黒褐色(10YR3/1、10YR3/2)を呈するシルト層で、いわゆるクロボクと呼称される堆積。遺構における埋土色調等の特徴から、段丘面上における遺構面は本層中にある。西側斜面部には厚く堆積しており、明確な遺物出土は確認されていない。一方、東側斜面から低位面にかけて堆積する本層類似の堆積には中世以降の遺物を包含していた。

続くIV層以下が火山砕屑物による堆積で、本調査区においては基盤層に該当する。

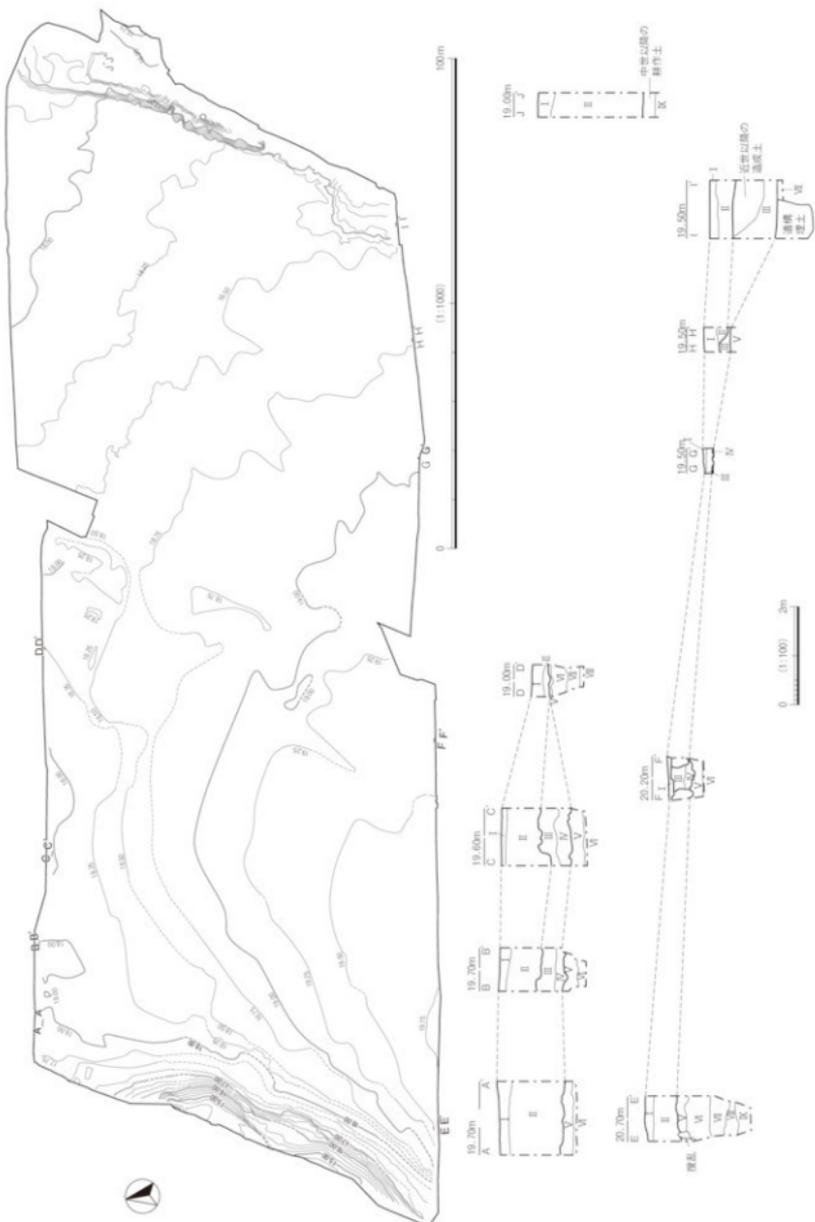


図6 A区 調査後地形図・基本層序



図7 A区 遺構配置(1)



図8 A区 遺構配置(2)



図9 A区 遺構配置(3)



図10 A区 遺構配置(4)



図11 A区 西側斜面 土層断面

表1 A区 西側斜面 土層注記

A-A'		
番号	土色・土質	備考
1	10YR4/2K黄褐色シルト	ローム、DKPブロック(径-1cm)少量
2	10YR3/2黒褐色シルト	ローム、DKPブロック(径-5mm)含む、ややゆるい
3	10YR3/2暗褐色シルト	ローム、DKPブロック(径-5mm)多量、ややしめる
4	10YR3/2暗褐色シルト	ローム、DKPブロック(径-5mm)多量、ややしめる
5	10YR4/2K黄褐色シルト	ローム、DKPブロック(径-5mm、径-5mm)少量
6	10YR4/2K黄褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少量、ややゆるい
7	10YR5/3にぶい黄褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少量、ややゆるい
8	10YR4/2K黄褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少量
#1-8 高世以降の造成土・耕作土		
9	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少量含む
10	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	ややしめる 9層と11層との境界層
11	10YR5/1暗褐色シルト	11層との境界層
12	7.5YR7/6暗褐色シルト	ややしめる
13	10YR6/8明黄褐色細礫～シルト(シルト主体)	DKPと考えられる層
14	7.5YR7/6暗褐色シルト	ややしめる 12層と同一と考えられる、褐色を呈するローム層
#9-14 基盤層		

B-B'		
番号	土色・土質	備考
1	10YR4/2K黄褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)含む
2	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-1cm)含む
3	2.5Y3/2暗褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)多量、ややゆるい
4	2.5Y3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)多量、ややゆるい
5	2.5Y3/2暗褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)多量
#1-5 旧耕作土(高世以降埋積層)		
6	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少量、ややゆるい
旧跡遺構等は埋積層もしくはは遺跡遺構等以前の遺土か、土器破片を含む。		
7	10YR2/2黒褐色シルト	基盤層ブロック(径-5mm)少量含む、ややゆるい
8	10YR3/2暗褐色シルト	ややゆるい
9	10YR3/1黒褐色シルト	基盤層ブロック(径-5mm)少量含む、ややゆるい
10	10YR3/1黒褐色シルト	基盤層ブロック(径-5mm)少量含む、ややゆるい
11	2.5Y3/2暗褐色シルト	基盤層ブロック(径-5mm)少量含む、ややしめる
12	2.5Y3/1黒褐色シルト	基盤層ブロック(径-5mm)少量含む、ややしめる
13	10YR2/1黒褐色シルト	7.5YR6/8暗褐色シルト～粘土(粘土主体)ブロック(径-2cm)多量
14	7.5YR6/8暗褐色シルト	10YR3/1黒褐色シルトブロック(径-5mm)含む、ややしめる
15	10YR7/6明黄褐色シルト	10YR3/2暗褐色シルトブロック(径-1cm)含む、ややしめる
16	2.5Y3/2暗褐色シルト	7.5YR6/6暗褐色シルト～粘土(粘土主体)ブロック(径-2cm)多量
17	10YR2/1黒褐色シルト	7.5YR6/6暗褐色シルト～粘土(粘土主体)ブロック(径-1cm)少量含む
18	2.5Y3/1黒褐色シルト	7.5YR6/6暗褐色シルト～粘土(粘土主体)ブロック(径-5mm)少量含む、2.5Y6/6明黄褐色シルト～粘土(粘土主体)ブロック(径-1cm)少量含む
19	2.5Y4/2暗黄褐色シルト	2.5Y3/2暗褐色シルトブロック(径-1cm)少量含む
20	2.5Y3/2暗褐色シルト	基盤層ブロック(径-5mm)少量含む
#17-20 旧地中の遺構		
21	2.5Y5/2暗黄褐色シルト	
22	2.5Y5/3黄褐色シルト	
#21-22 25-27層との境界層		
23	2.5Y6/6明黄褐色細礫～シルト(シルト主体)	AT又はその二次埋積
24	7.5YR6/6暗褐色シルト	ややしめる
25	10YR6/6明黄褐色シルト	ややしめる
26	10YR7/8黄褐色シルト	ややしめる
27	2.5Y6/6明黄褐色シルト	ややしめる
#23-27 基盤層		

IV層：III層とV層との中間層で、漸移的に色調が変化する。

V層：明黄褐色(10YR7/6～2.5Y6/8)細礫～シルト(シルト主体) 始良丹沢火山灰(AT)及びその二次堆積と想定する。

VI層：橙色(7.5YR7/4～7/6)シルト～粘土(粘土主体) 粘性の強いローム層。

VII層：明黄褐色(10YR7/6)シルト～粘土(シルト主体) 乳白色に近い色調を呈するローム層。

VIII層：VII層とIX層との中間層。

IX層：明黄褐色(7.5YR5/8～10YR6/8)細礫～シルト(シルト主体) いわゆる大山倉吉軽石(DKP)層に該当すると想定される。本調査区における遺構の一部は、本層まで掘り込まれている。(加藤)

第2節 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構と判断したものは落とし穴がある。以下、東調査区から順に記述するが、東調査区は遺構番号順、西調査区は北から順に記述している。

AES2526(図12、PL11)

R10で検出した遺構で、平面形は長径1.28m、短径0.73mの楕円形を呈する。掘方の断面形は底側が狭い台形で、検出面からの深さは0.94mある。底面の南寄りには長径0.2m、短径0.17m、深さ0.34mの小穴が掘られていた。

埋土は底面付近の壁際に基盤層のブロックを多く含む堆積がみられ、それ以外は基盤層ブロックが少ない黒色シルトが堆積していた。小穴の埋土は上部の埋土と差がなく、杭などを据えた痕跡は確認できなかった。埋土からは時期不明の土器の小片が出土したのみで、遺構の時期は不明である。(田中)

AES2696(図12, PL11)

R11で検出した遺構で、平面形は長径1.31m、短径0.90mの楕円形を呈する。掘方の壁面はほぼ垂直で、検出面からの深さは1.11mある。底面は中央に向かってやや深くなり、ほぼ中央には長径0.20m、短径0.18m、深さ0.47mの小穴が掘られていた。

埋土は壁面付近と小穴には基盤層の細粒ブロックを含む堆積がみられ、それ以外は基盤層ブロックを含まない黒色シルトが堆積していた。小穴には杭などを据えた痕跡などは確認できなかった。埋土からは時期不明の土器の小片が出土したのみで、遺構の時期は不明である。(田中)

AES2927(図12)

P15の南東隅に位置する。平面形は検出面と底面ともにほぼ円形を呈し、検出面で長径0.82m、短径0.76m、底面で長径0.64m、短径0.55mある。断面形は縦長の長方形を呈し、深さは0.95mある。底面ビットは確認できなかった。

埋土は8層からなり、旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。1～6層は皿状に堆積することから流入土と考える。

時期を決定する遺物は出土していないが、平面円形で底面ビットがない形状や埋土の状況から、縄文時代早期～前期の落とし穴と考える。(岡田)

AES5025(図12)

R18で検出した遺構である。調査当初、地下式坑18に切られる遺構としてAES5016を確認し、埋土を掘り下げていたが、調査を進める中で北側が1段低くなり、中央に小穴が確認できたことから、AES5016に切られる別の遺構と判断したものである。

検出面での平面形は東西0.70m以上、南北0.62m以上の楕円形を呈すると考えており、検出面からの深さは0.40mある。

底面には2基の小穴が掘られていた。中央部にあるAES5028は長径0.26m、短径0.18m、深さ0.28mのややいびつな楕円形を呈し、底面の北東の壁際にあるAES5026は長径0.18m、短径0.16m、深さ0.25mの楕円形を呈する。

前述の遺構認識の経緯から、上部の埋土については記録していないが、AES5016の埋土と類似した堆積(基盤層のブロックをあまり含まない黒褐色シルト)だったと考える。底面の小穴にはATブロックを少量含む黒色シルトが堆積しており、杭などを据えた痕跡などは確認できなかった。(田中)

AES5175(図12)

M6の西辺中央に位置する。掘立柱建物9～11の柱穴に壊されており、これらの柱穴の埋土掘削後に検出した。平面形は検出面と底面ともに楕円形を呈し、検出面で長径1.08m、短径0.70mある。断面形は逆台形状を呈し、深さは1.11mある。底面中央には、平面円形のビットがあり、径が0.18m、深さが0.39mある。

埋土は8層に分かれ、いずれも旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とし、壁際の5、6層は、壁崩落により基盤層由来のブロックを多く含む。

時期を決定する遺物は出土していないが、平面楕円形で底面ビットがある形状や埋土の状況から、

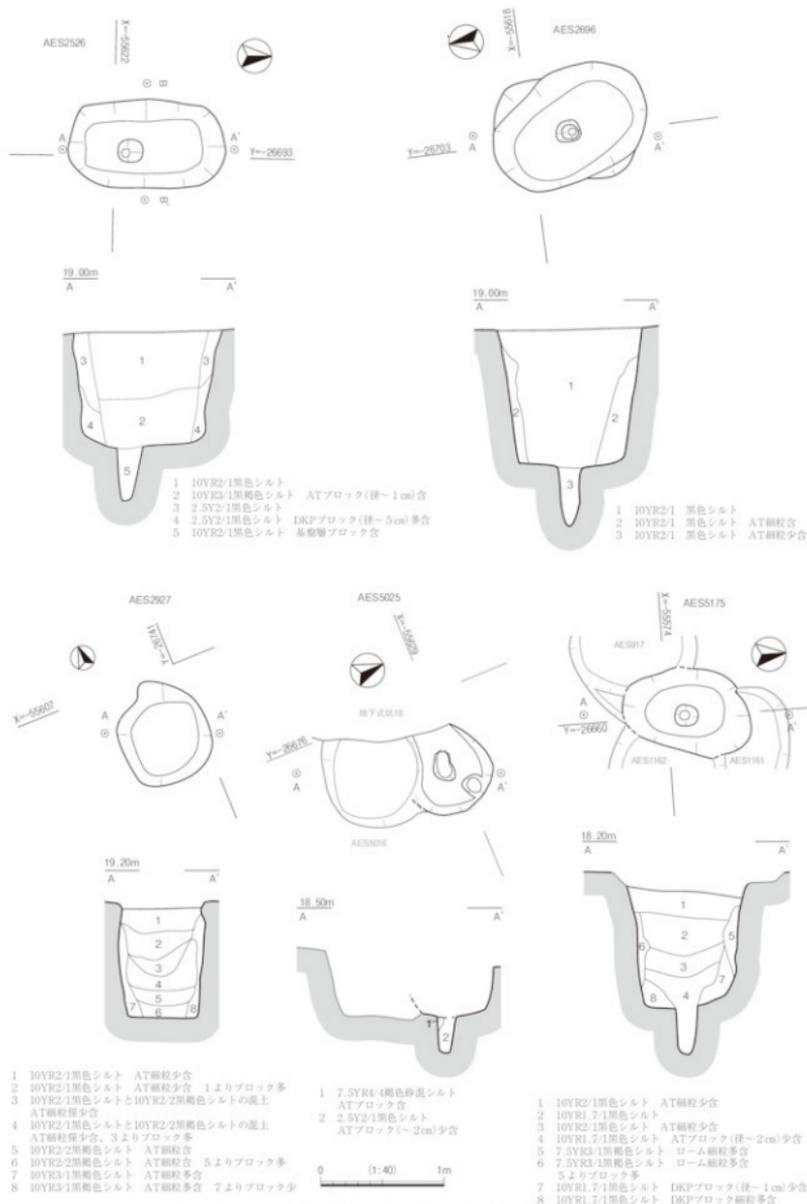


図12 A区落とし穴 AES2526・2696・2927・5025・5175

縄文時代中期～晩期の落とし穴と考える。(岡田)

AWS3492(図13, PL.11)

M13中央西側に位置する。検出時の平面形は南北方向に軸をもつ、黒色シルトのやや不整な円形で、長径0.65m、短径0.56m、検出面からの深さは底面までが0.49m、底面ビットまでを含めると0.59mで、最深部はローム層中である。

断面形は壁面の起伏が多い不整な円筒形で、底面は中央に向かい緩く下がる。底面の平面形は不整な隅丸方形で、長軸0.43m、短軸0.36mある。底面中央に平面円形の径0.13～0.15m、深さ0.1mの底面ビットをもつ。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体とし、底面付近にロームブロックを多く含む4が、上層から検出面まではブロックの少ないシルトが南方向から船底状に堆積する。

遺物は1層を主体とする掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化していない。(八峠)

AWS805(図13)

N21の北東に位置する。

検出時の平面形は北西から南東方向に軸をもつ黒色シルトの楕円形で、長径0.8m、短径0.54m、検出面からの深さは底面までが0.66m、底面ビットまで含めると0.77mで、最深部はローム層下の基盤層中である。断面形は深い逆台形で、底面は中央に向かい下り、壁面は75°程度で立ち上がる。底面の平面形は不整な円形で、長径0.49m、短径0.41m、検出面から底面までの深さは0.66mある。底面中央やや東側には平面円形、径0.11～0.14m、深さ0.11mの底面ビットがある。

埋土は黒色から黒褐色のシルトを主体とし、周縁部には肩部の崩落したATのブロックが含まれる。堆積が船底状で流入土と考える。遺物は上面一部の攪乱層中からガラス片や煙管等が出土したが、遺構に関わるものではない。(八峠)

AWS2515(図13)

L20の北東隅に位置する。検出時の平面形は南北方向に主軸をもつ円形で、長径0.87m、短径0.79m、検出面からの深さは1.01m、最深部は基盤層中である。断面形は長方形で、底面にはビットをもたない。底面の平面形も不整な円形で、長径0.76m、短径0.6mある。

埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームの他、基盤層のブロックも含む。船底状の堆積が繰り返されることから、壁面が大きく崩落することなく、流入土によって埋没したと考える。遺物は掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化し得ない。(八峠)

AWS1779(図13, PL.11)

R22の北世に位置する。検出時の平面形は北東から南西方向に軸をもつ不整な楕円形で、長径1.35m、短径0.81m、検出面からの深さは底面までが0.48m、底面ビットまでを含めると0.82mで、最深部はローム層中である。断面形はやや浅い逆台形で、底面から0.2m程は垂直に近く、検出面までは緩く立ち上がる。底面の平面形は北東から南西方向に軸をもつ楕円形で、長径1.03m、短径0.65mある。中央やや北西に平面円形、径0.13～0.16m、深さ0.36mのビットがある。

埋土は底面から検出面まで黒色から黒褐色のシルトが堆積する。概して周縁部にはAT・ロームブロックが多く、中央部には少ない。底面ビットは4層に分層できた。2・4・5層以下は人為的な堆積の可能性があるが、検出面にかけて上層は流入土と考える。掘り下げ中に遺物が出土したが、いずれも小片で図化し得ない。(八峠)

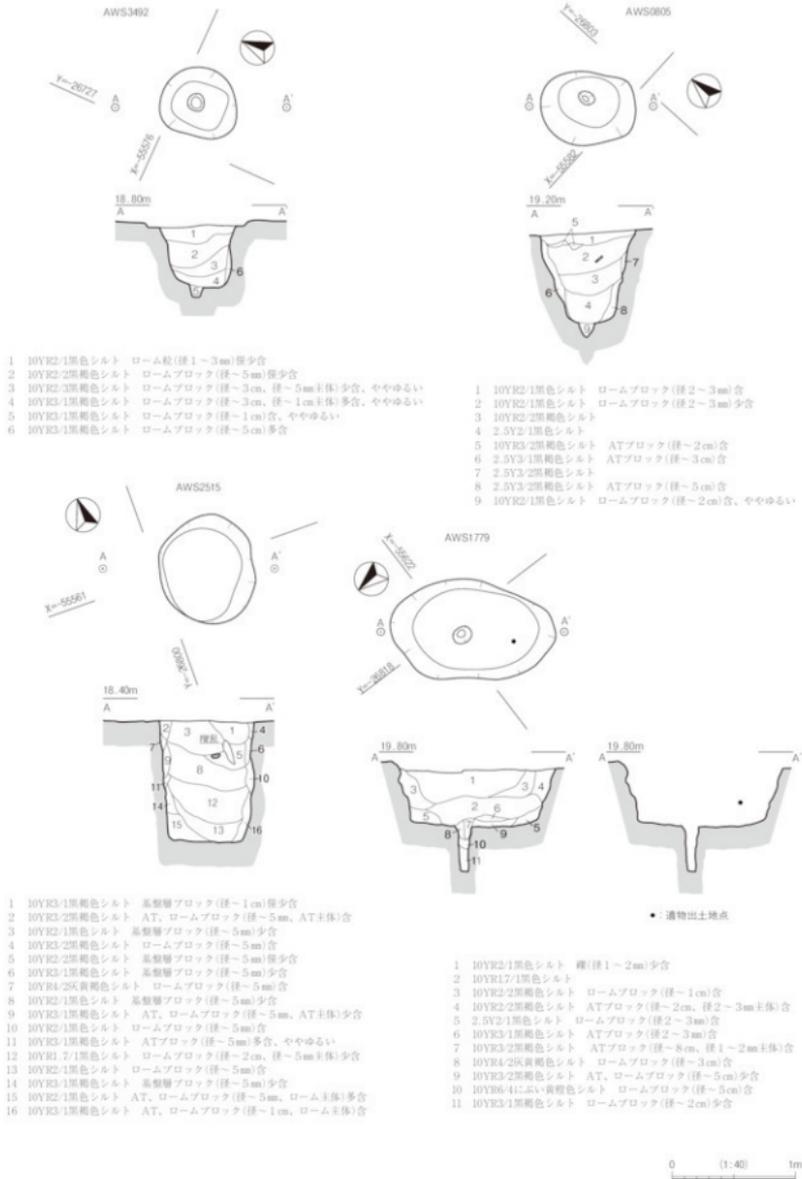


図13 A区 落とし穴 AWS805・1779・2515・3492 平面・断面

AWS3147(図14)

O26とO27の南際、西に下る傾斜の際付近に位置する。検出時の平面形は北西から南東方向に軸をもつ不整な楕円形で、長径0.87m、短径0.65m、検出深は1.08mで、最深部はローム層下の基盤層中である。断面形は壁面が比較的平滑な円筒形で、底面は中央に緩く下るものの底面ビットは認められない。底面は北西から南東方向に軸をもつ楕円形で、長径0.59m、短径0.35mある。

埋土は底面上にATブロックを多く含む黒褐色シルトが堆積する。上層から検出面までは、壁面からのロームブロックを少量含む黒色～黒褐色シルトが南側から船底状に堆積する。底面ビットは検出していない。遺物は出土していない。(八峠)

AWS3929(図14)

R20の中央に位置する。

上面に掘立柱建物40とそれに伴う被熱面をもつ窪みがあり、サブトレンチ掘削により確認した。

検出面での平面形は不整な楕円形で、長径0.89m、短径0.74m、検出面からの深さは底面までが0.61m、底面ビットまで含めると0.85mで、最深部はローム層中である。断面形は底面から広がる逆台形である。底面の平面形は東西方向に軸をもつ不整な楕円形で、長径0.59m、短径0.42mある。底面は中央に向かい下り、中央に平面円形、径0.09～0.10m、深さ0.24mの底面ビットをもつ。

埋土は、底面から検出面まで黒～黒褐色シルトを主体とする。検出面付近は被熱面をもつ土坑に切られるため、若干の焼土ブロックが含まれる。はじめに底面付近から周縁部にかけてブロックを含む層が壁面に沿うように、中央には船底状に堆積する。遺物は掘り下げ中に土器が出土したが、いずれも小片で図化し得ない。(八峠)

AWS3130(図14)

M25の中央に位置する。周囲は南東から北西に向かう斜面で、南西から北に向かう丘陵の屈曲部に位置する。東側上位には南北に延びる古代の道路遺構があり、断面を確認する際、傾斜に直交するサブトレンチの断面で検出した。そのため北側については調査していない。断面形状が袋状ではあるが、遺構の埋土や立地から落とす穴と判断した。

検出面の平面形は円形で遺存する径は0.53m、深さは0.86mを測る。中央付近は検出できたものの底面ビットは確認していない。断面形は縦長の袋状、底面は東西に主軸をもつ楕円形と推定され、遺存する径は0.7mである。

埋土は黒褐色シルトを主体に、ロームブロックを含む。概ね斜面の上側から船底状の堆積を繰り返すことから流入土と考える。遺物は掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化し得ない。(八峠)

AWS3068(図14)

N26南西隅で、西向きの斜面が下り圃場整備によるテラスの際に位置する。遺構の上部は流失または圃場整備により掘削されたと考える。

検出時の平面形は南北方向に軸をもつ不整な円形で、長径1.07m、短径0.83m、検出面からの深さは底面までが0.28m、底面ビットまで含めると0.45mで、最深部は基盤層中である。断面形は浅い皿状、底面の平面形は北側が不整な円形で、長径0.71m、短径0.52mで、底面北端に平面円形の径0.14～0.17m、深さ0.17mの底面ビットがある。

埋土はATブロックを含む黒褐色シルトが主体で、斜面の側にあたる東側から中央部にかけて自然に堆積したと考える。遺物は出土していない。(八峠)

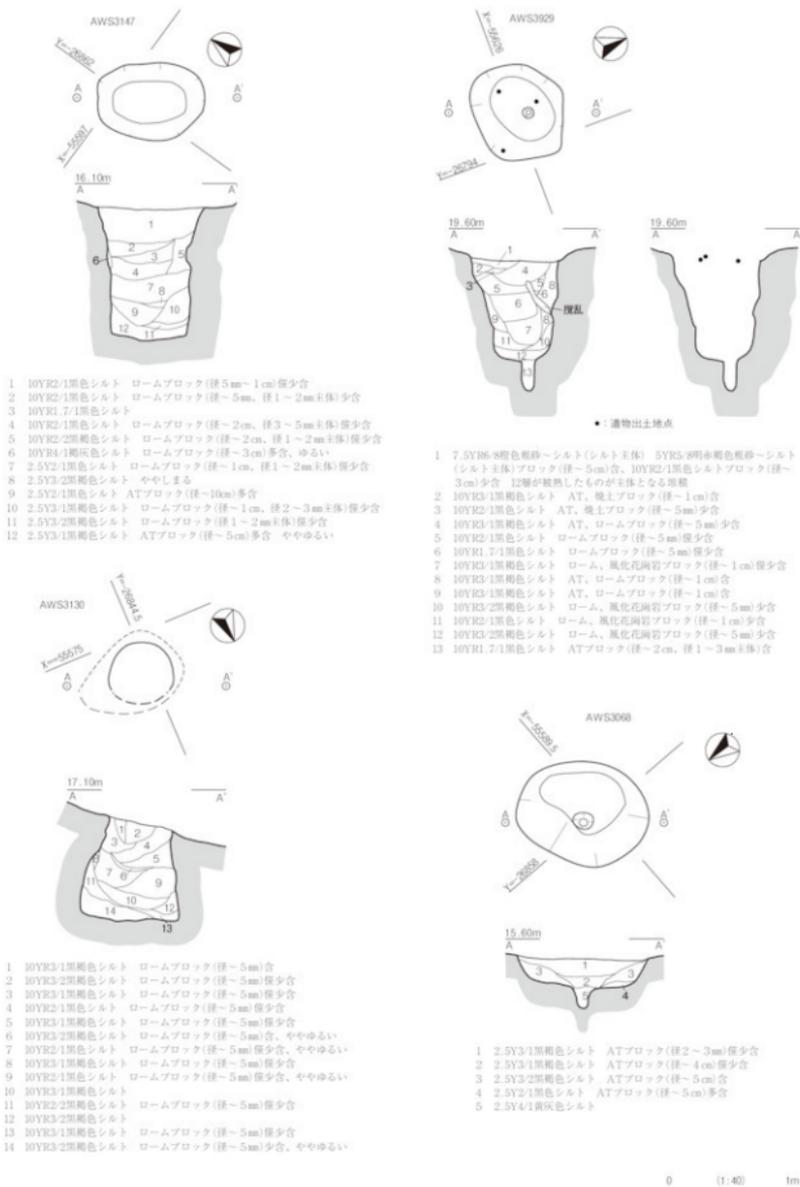


図14 A区 落とし穴 AWS3147・3068・3130・3929 平面・断面

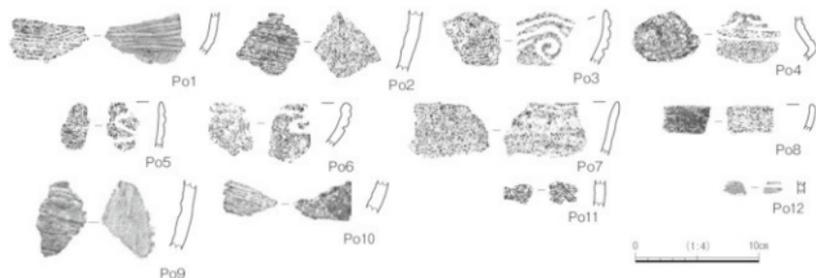


図15 A区出土縄文土器

調査区内出土縄文土器(図15)

本調査区における縄文時代の遺構は、落とし穴と目されるものは散見されるが、他の時期に比して少数にとどまる。遺物出土数もそのことを反映しており、土器の破片資料が散発的に見つまっている。帰属時期としては、早期末から晩期に亘る。

Po1は浅鉢の胴部片と考えられ、屈曲部を有する。調整は内外面ともに貝殻条痕だが、外面は当該屈曲部に境に条痕の向きが変化している。羽鳥下層Ⅱ式よりも古相を示す可能性があり、早期末から前期初頭に位置付けられる。Po2は内面に貝殻条痕が施される深鉢片で、胎土がPo1に近似することから、同様に早期末～前期初頭に帰属する可能性がある。

Po3は深鉢の口縁部資料で、山形を呈する口縁部外面には、沈線束による渦巻状の意匠が入る。緑帯文土器で、後期中葉に位置付けられる。Po4・5は深鉢で、外面は縄文の地文に沈線による曲線文様が施文され、これも緑帯文土器に該当する可能性を持つ。Po6は浅鉢の口縁部片。調整は内外面ミガキで、口縁端部内面には縄文、外面には横位・曲線を指向する沈線が施される。後期後葉帰属か。Po7は深鉢で、内外面に強いナデが施され、内面には一部ミガキが認められる。粗製土器で、後期に帰属か。Po8は後晩期に帰属する粗製深鉢である。内外面には粗雑なナデが施される。

Po9・10は深鉢の胴部片。いずれも内面にやや幅広く横方向の条痕が施される。両者は同一個体の可能性がある。帰属時期ははっきりしない。Po11・12は微細な破片。いずれも外面縄文地で、Po12には沈線が入る。細片のため、詳細な帰属時期は不明である。(加藤)

第3節 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては、掘立柱建物と竪穴建物、袋状土坑、土塚墓、木棺墓を確認した。

弥生時代と特定できた掘立柱建物はいずれも大型の建物で、このうち掘立柱建物1は独立棟持柱建物で、この時期のものとしては県内最大である。調査区中央南寄りには土塚墓、木棺墓が集中する部分があり、弥生時代中期後葉頃の墓域と考えられる。

以下、各遺構について記述するが、掘立柱建物、竪穴建物は概ね東から西に順に、それ以外のものは東調査区のもの遺構番号順に、西調査区のもの概ね北から南の順になっている。

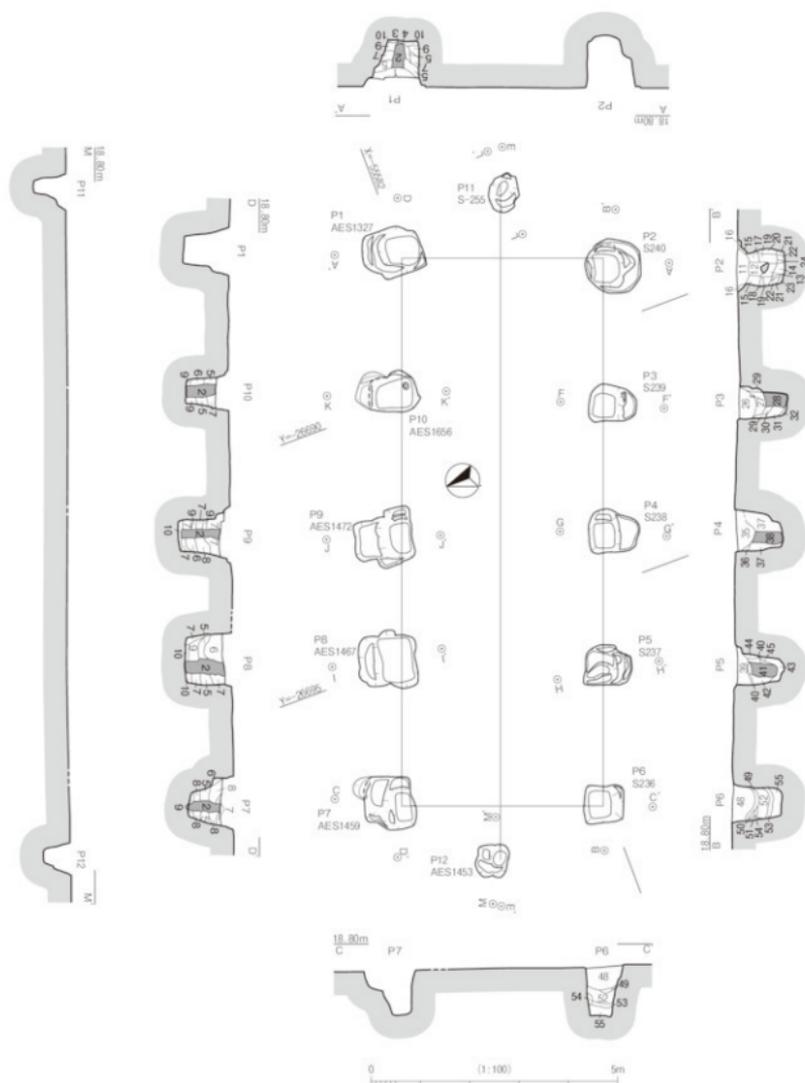


図16 A区 掘立柱建物1 平面・断面

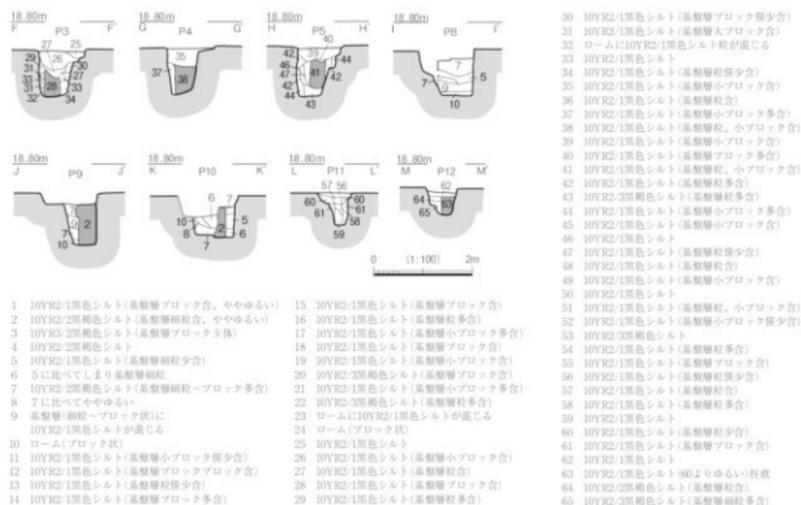


図17 A区 掘立柱建物1 断面

掘立柱建物

掘立柱建物1 (図16・17、PL.2)

M10、N9・10にまたがって位置する桁行4間、梁行1間の東西棟の建物で、棟持柱が梁筋の外側にある独立棟持柱建物である。規模は桁行が11.4m、梁行が4.2mで、主軸方向はN-69°-Wである。東西の棟持柱間の長さは13.7mある。

桁行の柱穴掘方は建物の外側にテラス面を設けて掘り込まれたものが多く、そのため平面形はいずれも南北にやや長い長方形または楕円形を呈する。柱穴の長軸は0.95~1.26(平均1.09)m、検出面からの深さは0.95~1.19(平均1.04)mある。棟持柱の掘方は平面形が長径0.8m前後の不整形で、検出面からの深さはP12(0.63m)よりP11の方が深い(0.80m)。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを多く含んでいる。柱痕跡は埋土観察から確認でき、そこから復元する柱の径は0.2~0.3mあり、柱の間隔は2.8m前後のほぼ等間であることがわかる。

時期を決定しうる遺物は出土していないが、建物の形状や周辺遺構との関係から、遺構の時期は弥生時代中期と考える。(岡田)

掘立柱建物2 (図18、PL.12)

O10、P10で検出した桁行4間、梁行1間の南北棟の建物である。規模は桁行9.53m、梁行3.50mと推定され、建物の主軸方向はN-3°-Eである。

柱穴の平面形は不整形なものが多く、長径は0.66~0.83(平均0.75)m、検出面からの深さは1.03~1.21(平均1.13)mある。いくつかの柱穴で柱の痕跡と思われる堆積や掘方底面の柱の当たりと思われる円形の僅かな窪みが確認でき、径が0.2~0.3mの柱が立てられていたと推測した。柱の間隔は2.22~2.56mで、南端の柱間が他よりも広くなる。

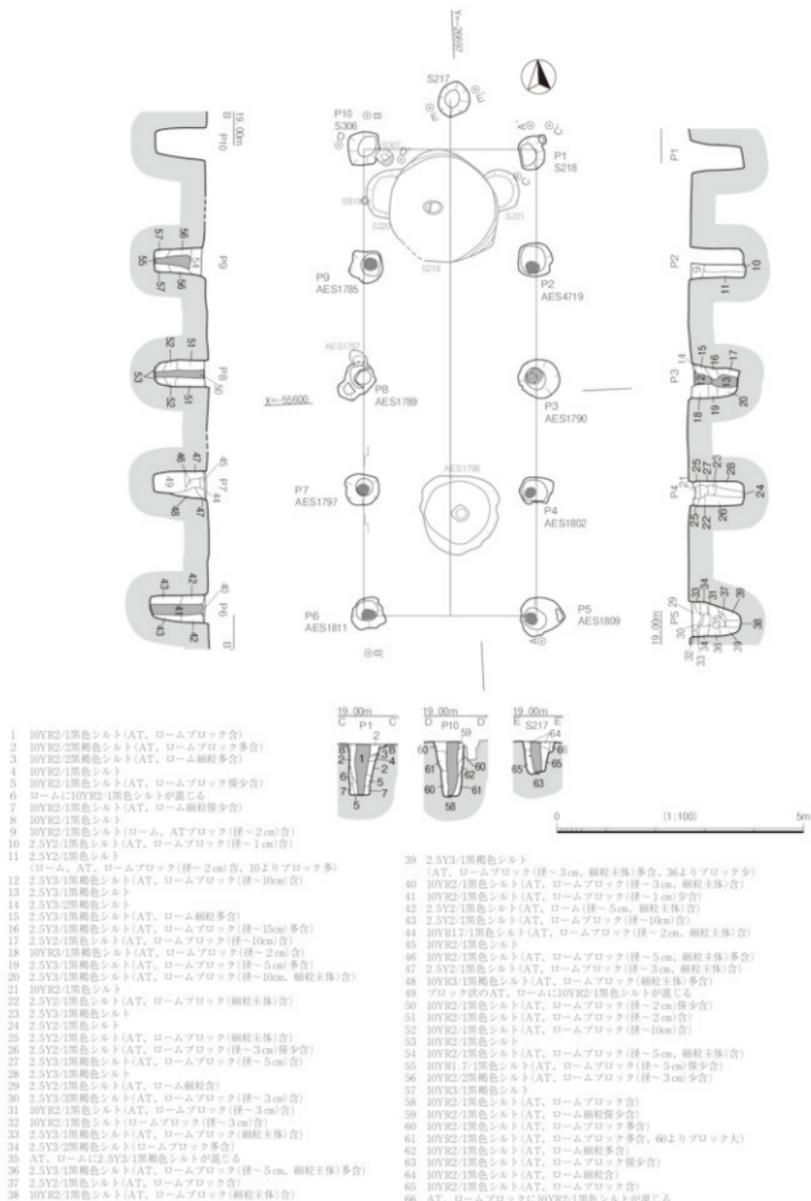


図18 A区 掘立柱建物2 平面・断面

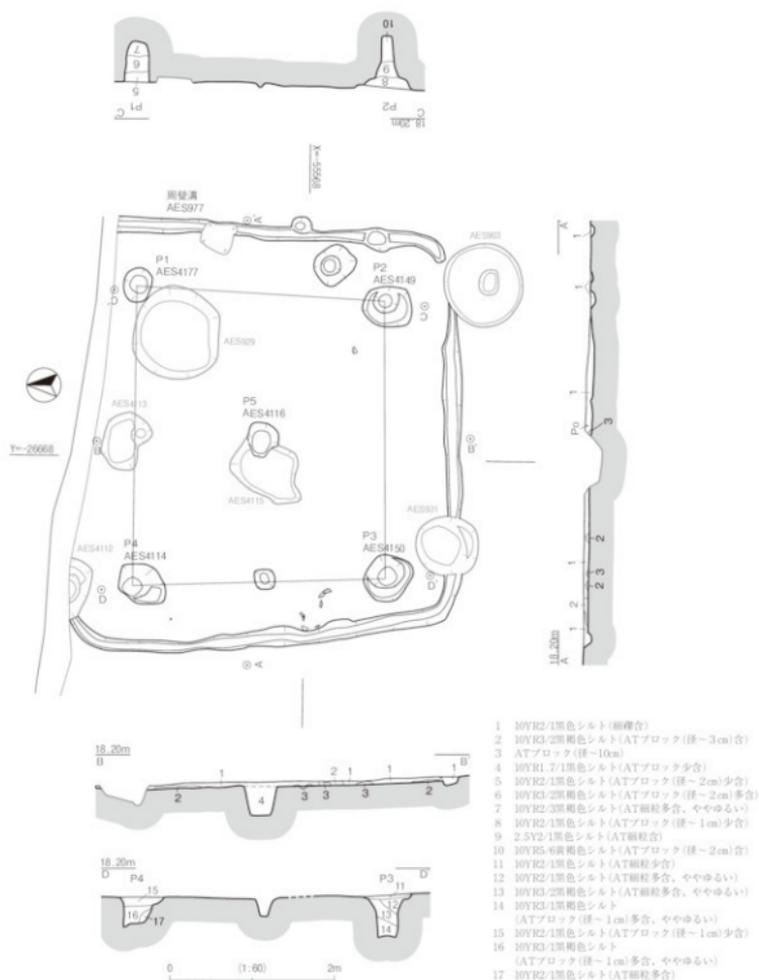


図19 A区 竪穴建物1 平面・断面

掘方の埋土は基盤層のブロックを多量に含むものほとんど含まないものが混在するが、P3やP8のように基盤層ブロックの多いものと少ないものが互層になるものもある。また、P9では柱痕跡と思われる堆積の上を覆うように別の堆積があり、柱を抜き取った痕跡と考えた。

建物北側柱列の外側には長径0.73mの楕円形の柱穴S217がある。この柱穴は建物の中軸線上に位置し、棟持柱の可能性があるものの建物の南側には対応する柱穴はみられず、断定はできない。

また、袋状土坑のS219とAES1798が建物の中に取まる位置にあるが、関連するかははっきりしない。柱穴掘方からは弥生土器の細片が出土し、土師器など後世の遺物を含まないことから弥生時代の建

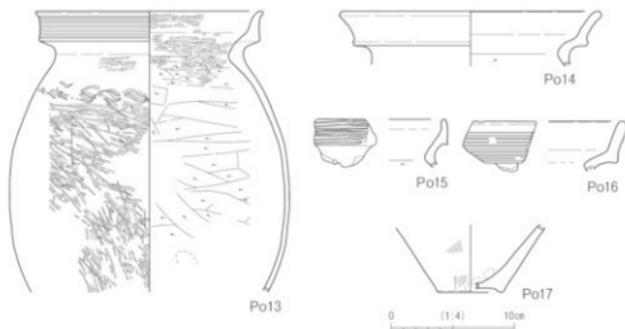


図20 A区 竪穴建物1出土遺物

物と判断したが、時期を特定しうるものがなく建物の詳細な時期は不明である。(田中)

竪穴建物

竪穴建物1 (図19・20, PL.13・98)

L7・8に位置し、北側の一部は調査区外のため未調査である。掘立柱建物9・10・23の柱穴やビットにより、一部を壊されていた。

平面形は方形であり、検出面における主軸の長さは、東西が5.14m、南北が4.48m以上あり、検出面から床面までの深さは約0.1mある。周囲に幅が0.10～0.23mの壁溝が巡る。

主柱穴P1～4の規模は、最大径が0.43～0.60(平均0.56)mで、深さが0.32～0.62(平均0.50)mある。P5はいわゆる中央ビットで、最大径が0.42m、深さが0.32mある。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に3.0m、3.4m、3.1m、3.7mある。

埋土は、建物内と柱穴ともに旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかったが、P2の下方はほぼ柱の太さに合わせて掘削されたと考えられ、そこから柱径は0.14mに復元できる。

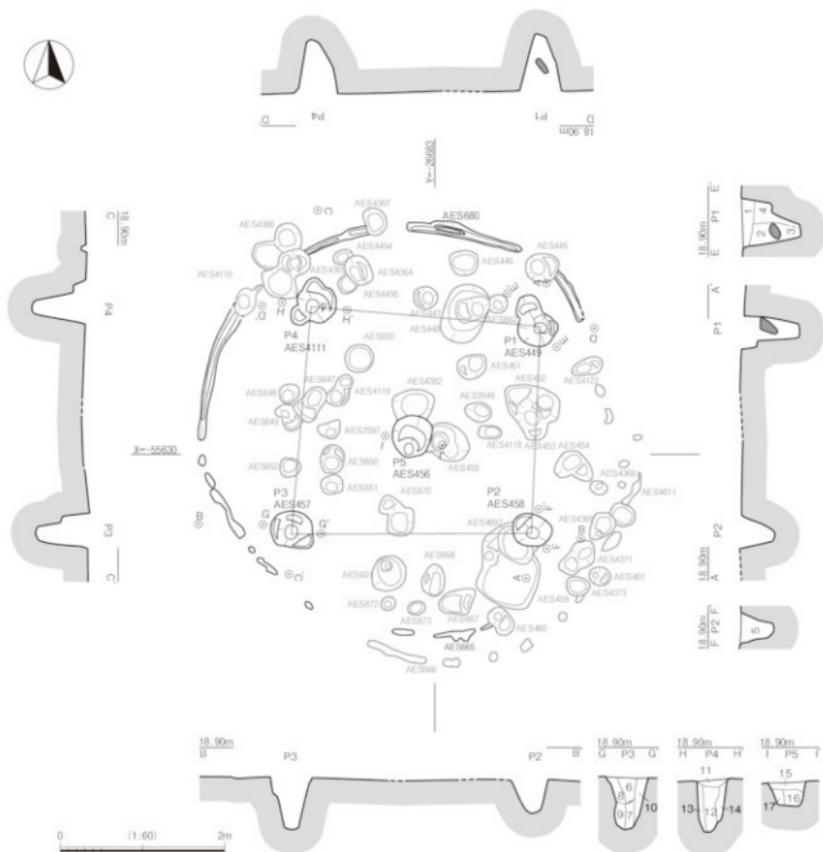
竪穴埋土からは弥生時代後期後葉の土器が出土しており、その時期に造られた建物と推定される。

(岡田)

竪穴建物2 (図21・22, PL.13)

S9で検出した建物である。遺構精査を行っているとき、竪穴部分は残っていなかったが、円形に巡る細く浅い溝AES680が確認でき、円形の竪穴建物の存在が想定できた。ただ、平面検出だけではどの掘方が竪穴建物に属するかが判断できず、埋土を半載して確認することで、ようやく主柱穴の特定が出来た。

後世の耕作などの影響で、東側から南側にかけての周壁溝は残っておらず、西側についてもごく浅く痕跡のみとなっていた。主柱穴はP1～4で、掘方底面の中央付近で四辺形を結ぶと、東辺と西辺がほぼ平行し(東西幅2.80m)、東辺(2.56m)が西辺(2.80m)よりもやや短い。柱穴掘方の平面形は長径0.50～0.66mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.43～0.68(平均0.60)mで、南東の掘方はやや浅い。主柱穴を結んだ四辺形のはほぼ中央には長径0.52m、短径0.40m、検出面からの深さが0.36mのP5があり、中央ビットと判断した。床面には貼床の痕跡はなく、被熱面も確認できなかった。周壁溝や主柱穴の位置関係から径4.95mの円形の建物を想定した。



- | | | |
|--|---|---|
| 1 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~3cm)僅少含) | 7 10YR2/2黒褐色シルト(AT副粒含) | 13 10YR2/1黒色シルトとATの混土
(径~8cmのアロックス状) |
| 2 10YR2/2黒褐色シルト(AT副粒含) | 8 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~5cm)多含) | 14 10YR2/1黒褐色シルト |
| 3 10YR2/1黒色シルト | 9 10YR2/2黒褐色シルト(ATブロック(径~5cm)多含) | 15 10YR2/1黒色シルト |
| 4 10YR2/1黒色シルト(AT副粒含) | 10 10YR2/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)多含) | 16 10YR2/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)多含) |
| 5 10YR2/1黒色シルト
(ATブロック(径~3cm, 副粒主体)含) | 11 10YR1/7/1黒色シルト
(ATブロック(径~3cm)僅少含) | 17 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~3cm)僅少含) |
| 6 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~2cm)多含) | 12 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~2cm)多含) | |

図21 A区 竪穴建物2(古段階) 平面・断面

主柱穴のうち、P1の中段辺りで磔が1つ出土した。調査時にはその用途などを想定出来なかったが、調査終了後に改めて情報を整理すると、磔の上面標高と遺構の底面標高が近いP7とP8があり、P8からP1とP7の中心を結ぶとほぼ直角になることが分かった。さらにこれらの遺構を結んでほぼ長方形になる位置にはP6があり、遺構群の南側にはごく浅く痕跡のみとなった溝状遺構AES666が確認できた。これらの遺構群は先に述べたものとは別の竪穴建物で、P1の状況から建て替えた後の建物と考えた。

新段階の主柱穴掘方の底面中央付近で四辺形を結ぶと、古段階と同じように東辺と西辺がほぼ平行

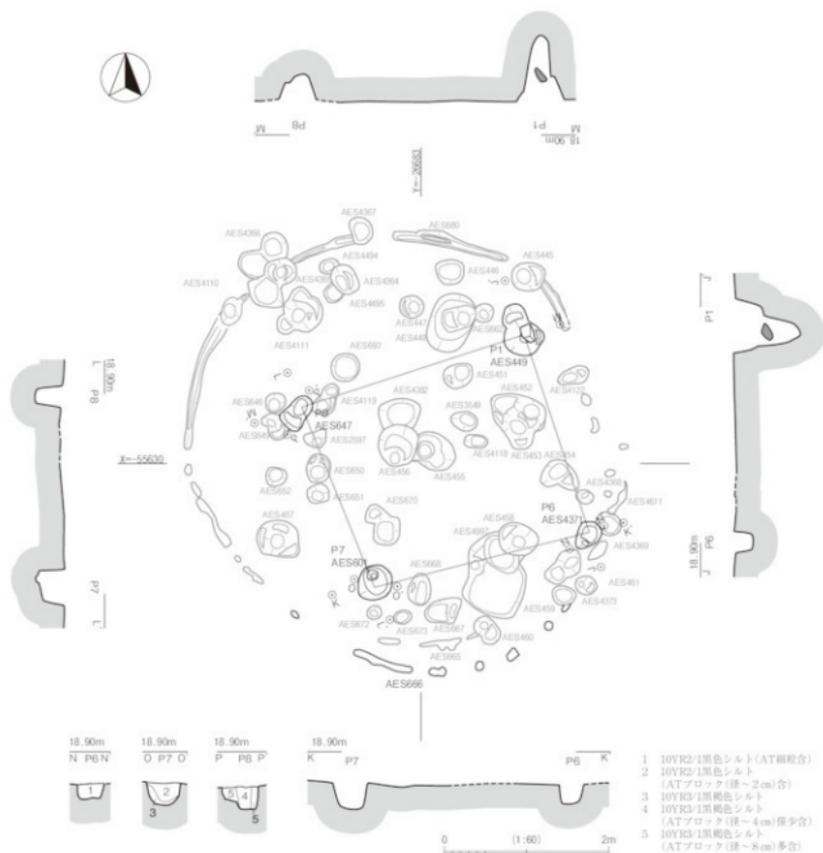


図22 A区 竪穴建物2(新段階) 平面・断面

し(東西幅2.75m)、東辺(2.57m)が西辺(2.41m)よりやや長い。P1以外の新段階の主柱穴は楕円形を呈し、P7とP8は規模はほぼ同じ(長径0.43m、検出面からの深さ0.35m)だがP6は小さめで浅い(長径0.24m、検出面からの深さ0.18m)。また、中央ピットになり得るものは確認できなかった。主柱穴の位置関係と周壁溝の形状から径4.58mの円形の建物を想定した。

時期を特定できる遺物は出土しなかったが、竪穴の形状から弥生中期の建物と考える。(田中)

竪穴建物3(図23、PL13・98)

L11・12に位置する。複数のピットや攪乱によって、壊されており、壁も残らないが、壁溝や柱穴はよく残存していた。

平面形は隅円方形であり、検出面における主軸の長さは東西・南北ともに5.44mある。

主柱穴P1～4は、いずれも検出面で広く、下方に向かってすり鉢状に狭まり、下半分では円筒状となり、ほぼ柱の太さになると考えた。規模は、最大径が0.58～0.66(平均0.63)mで、深さが0.98～

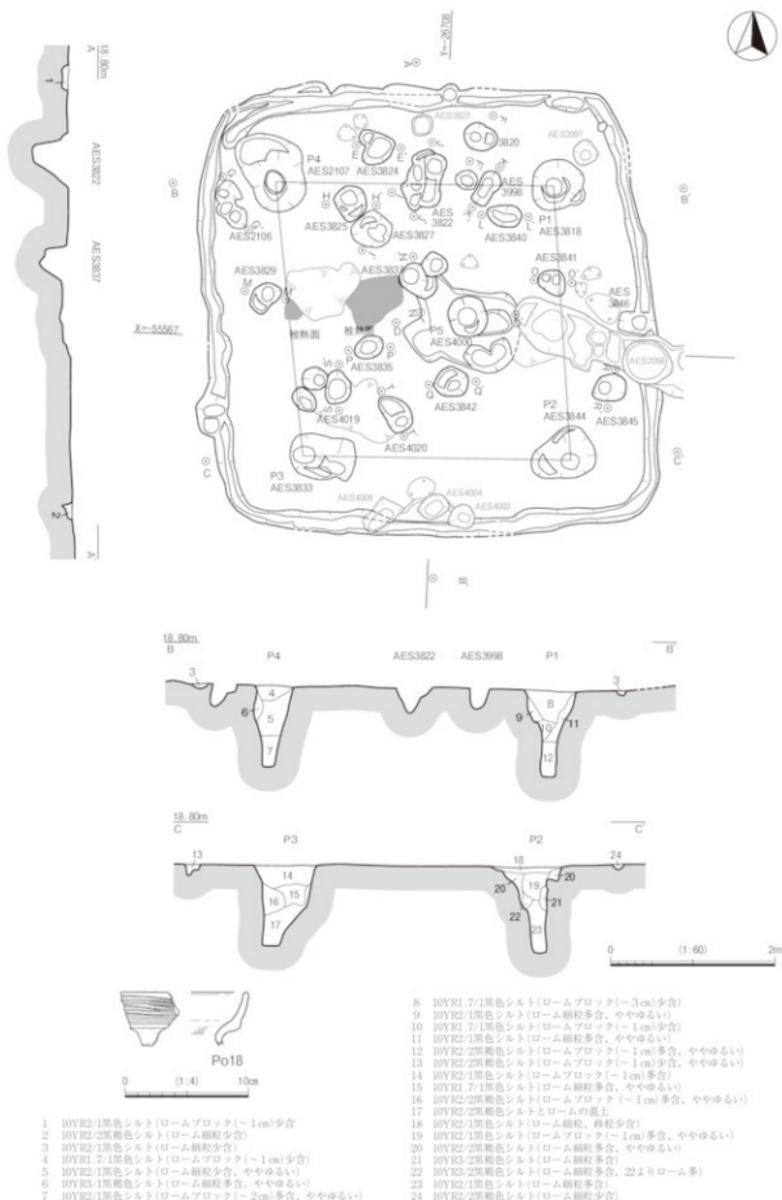


図23 A区 竪穴建物3(1)

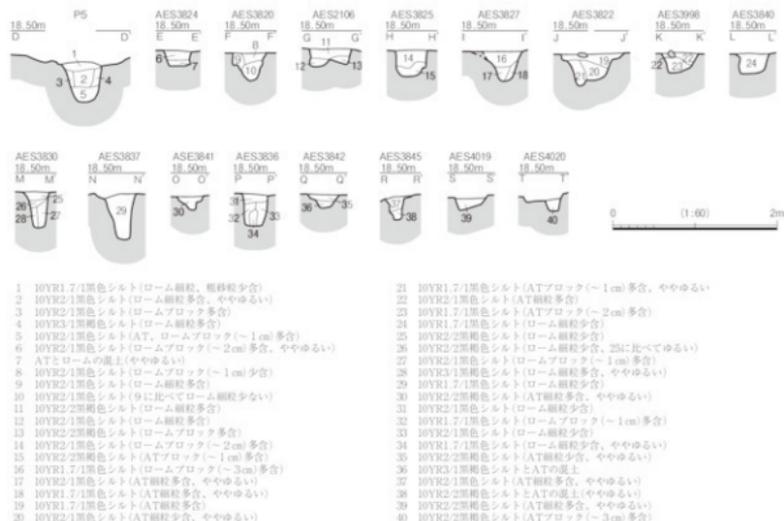


図24 A区 竪穴建物3(2)

1.05(平均1.02)mある。P5はいわゆる中央ピットで、最大径が0.51m、深さが0.54mある。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に3.4m、3.2m、3.4m、3.4mである。

竪穴部分の埋土はほとんど残存していないが、柱穴や壁溝埋土とともに旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体として基盤層由来のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかったが、柱穴下半の径から、柱の径は0.18m程度と考える。

遺物は竪穴部分から弥生時代後期後葉の瓦片が出土しており、この時期の建物と考える。(岡田)

竪穴建物4(図25~29, PL14)

O11の南西部で検出したほぼ方形の建物で、竪穴S71は検出面で南北6.50m、東西6.47mで、検出面からの深さは0.18mある。壁面沿いには幅0.16m前後、深さ0.10m前後の溝が巡っていた。貼り床や被熱面は見られなかった。

主柱穴は4本で、ほぼ長方形に並んでいた。掘方の平面形は楕円または不整形で、平面規模はばらつきがある。深さはP4以外は0.55m前後で、P4だけが0.42mと浅めである。P1とP2の断面で柱の痕跡と思われる堆積(9、17)が確認でき、径0.1m前後の柱が立てられていたと考えた。

竪穴のほぼ中央には底面で最も大きい土坑P5があり、いわゆる中央ピットと考えた。P5の平面形は西辺がいびつながら長軸1.00m、短軸0.68mの隅円方形を呈する。掘方は2段になっており、1段目は深さが0.1m前後と浅く、底面の南寄りに長径0.56m、短軸0.46mの楕円形を呈する2段目がある。2段目の深さは1段目底面から0.40mあり、断面形は底面に南に偏った楕円状を呈していた。2段目の埋土は比較的基盤層のブロックを多く含んでいた。

P5に関連する遺構として、P5の南東隅から竪穴の南東隅へ延びる溝状遺構AES3710がある。溝の幅は0.15m前後で、底面はP5側に僅かに下る傾斜があった。

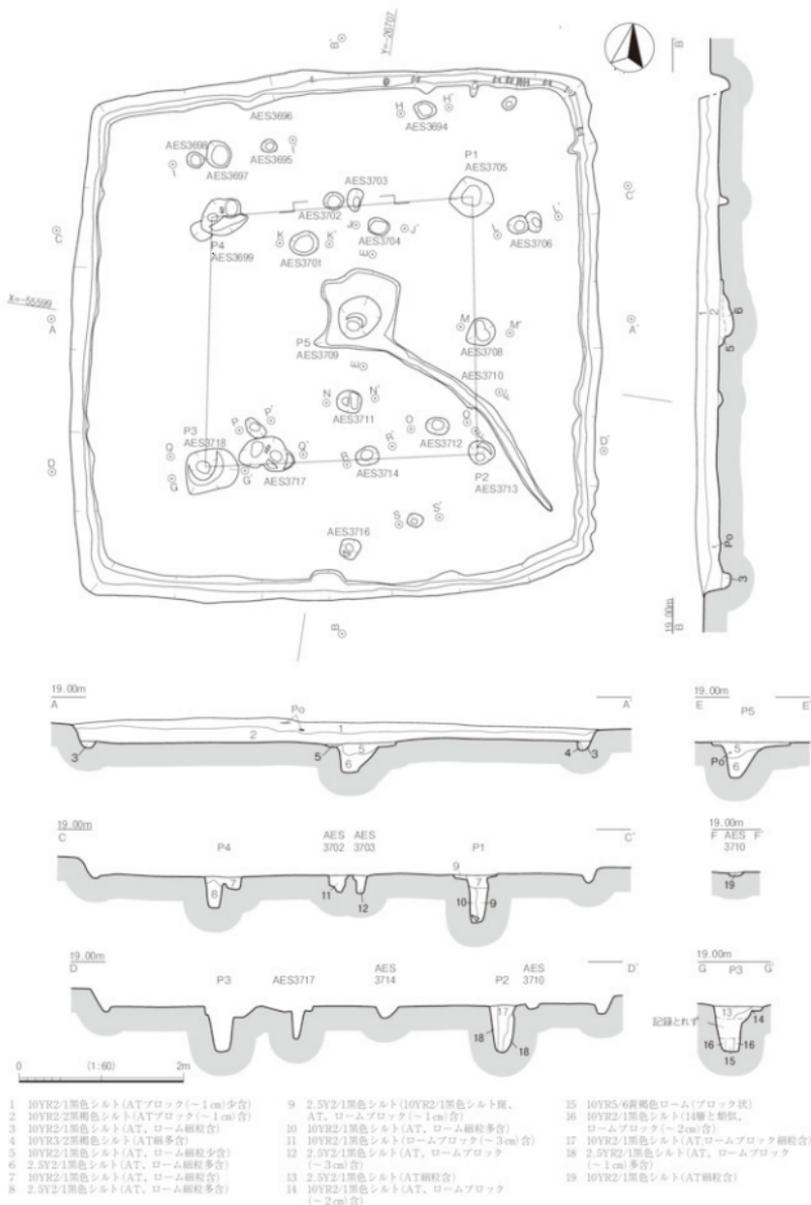


図25 A区 竪穴建物4 平面・断面(1)



図26 A区 竪穴建物4 平面・断面(2)

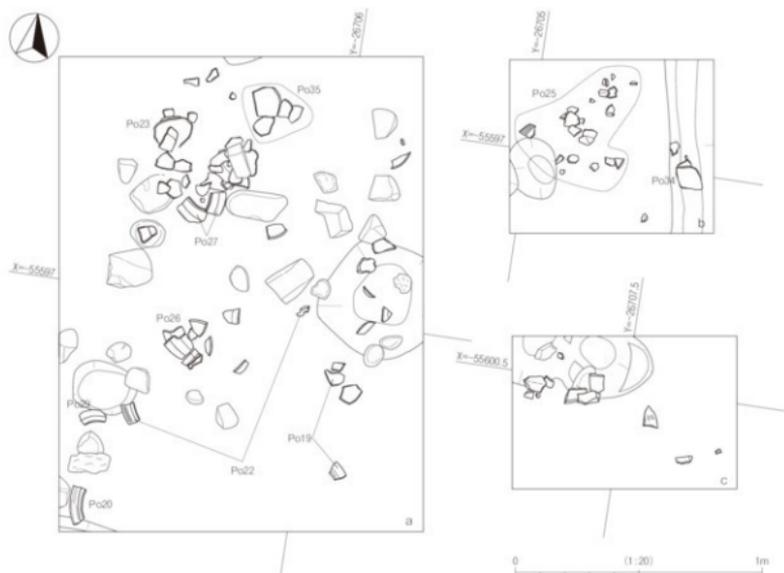


図27 A区 竪穴建物4 遺物出土状況平面

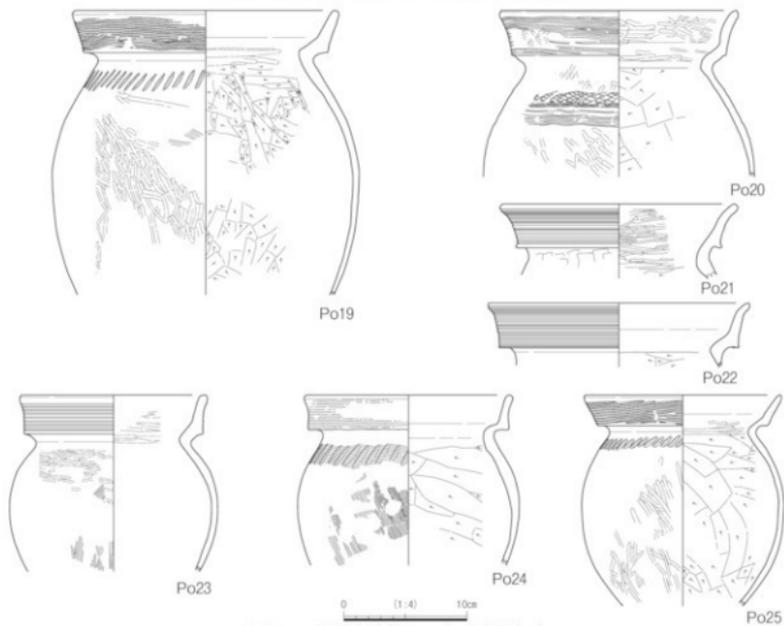


図28 A区竪穴建物4 出土遺物(1)

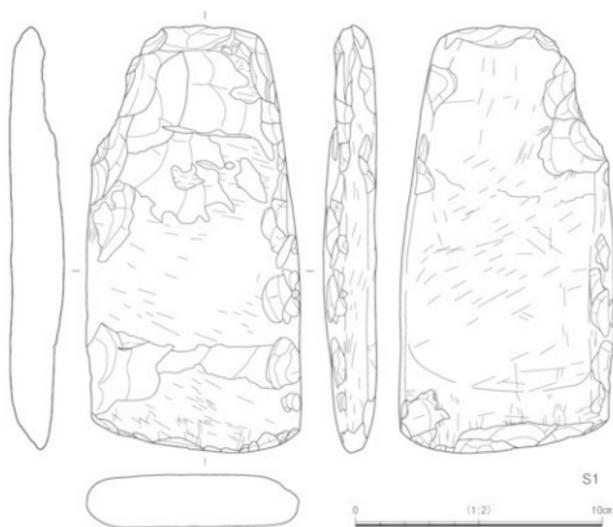
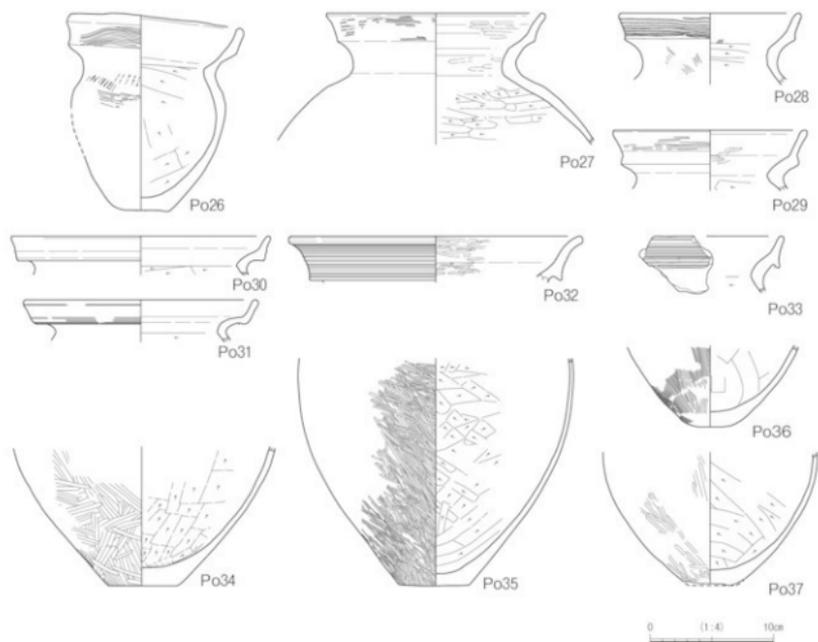


図29 A区竖穴建物4 出土遺物(2)

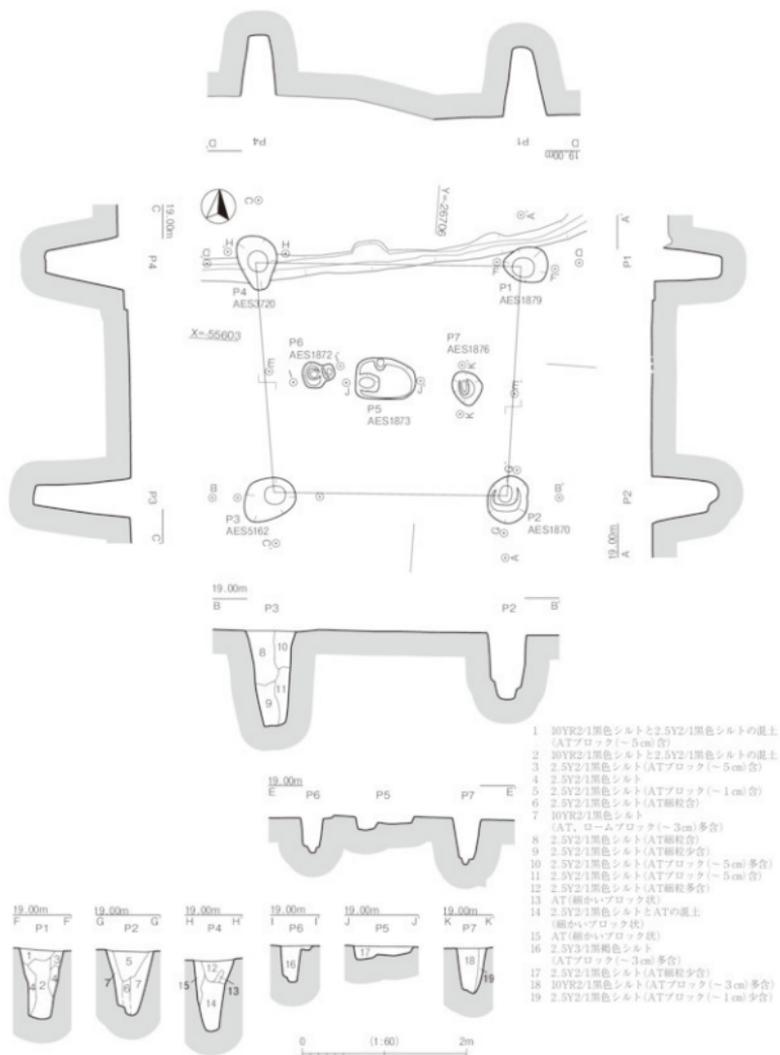


図30 A区 竪穴建物5 平面・断面

遺物などは堅穴の底面直上と底面よりも少し上辺りで出土しており、特に堅穴北東部で多く見つかった。土器はほとんどが弥生時代後期後葉の壺と甕で、口縁端部は外反して平行沈線を施す。また体部上半に刺突文や押し文状の施文を施したものが多い。南側の底面付近で磨製石斧が1点出土した。磨製石斧は扁平で幅が広く、刃部には使用時のものと思われる剥離面がやや偏った形でみられる。

出土した土器から、建物は弥生時代後期後葉に機能したと考えた。(田中)

堅穴建物5(図30、PL15)

P11で検出した建物で、後世の耕作などによって堅穴部分はすべて失われ、検出した面では周壁溝や被熱面は認められなかった。

主柱穴はP1～4の4本で、掘方の芯々間距離は南北方向は3.8m前後でほぼ同じであるのに対し、東西方向は北辺(3.2m)が南辺(2.9m)に比べてやや長い。掘方の平面形は楕円形で、長径が0.53～0.63m、検出面からの深さは0.83～1.13mあり、掘方底面の標高は東側のP1、2に比べて西側のP3、4の方が低くなる。なお、P4は堅穴建物4に切られており、この建物が堅穴建物4に先行することが確認できた。

主柱穴を結んだ四辺形のほぼ中央に長径0.73m、短径0.51m、検出面からの深さが0.17mのP5があり、中央ピットと判断した。またP5の東と西に長径が0.5m前後の楕円形を呈する穴が2基(P6、7)があり、P5～7がほぼ直線に並ぶことから、これらも堅穴建物に関連するものと考えた。

この建物は先述したように堅穴建物4に先行することから、弥生時代後期後葉以前に造られたもの判断できるが、掘方内から時期が特定しうる遺物が出土しなかった。そのため、この建物が弥生時代中期から後期中葉までのどの段階に機能したかははっきりしない。(田中)

堅穴建物6(図31)

P10、Q10で検出した建物で、堅穴部分と周壁溝はすべて失われていた。

主柱穴はP1～4で、P3の南側は地下式坑A21の天井崩落の際に崩れていた。底面の中央付近で結んだ四辺形は、西辺(3.14m)と南辺(3.24m)に比べて、東辺(3.38m)と北辺(3.50m)が長い。また、P1とP3、P2とP4を結んだ線は交点は直角に近い。掘方の平面形は楕円形または不整形で、長径は0.50～0.78mでばらつきが大きい。検出面からの深さは0.53～0.91mで、底面標高は南東隅のP2が最も高く、北西隅のP4が最も低い。

主柱穴を結んだ四辺形の中央付近には長径0.58m、短径0.43m、深さ0.30mのP5があり、中央ピットと判断した。P5の埋土には主柱穴と異なり基盤層ブロックをほとんど含まなかった。

またP5の東と西には、周辺の土坑などよりも深い柱穴掘方と思われるP6、7がある。底面中央を結んだ線は主柱穴を結んだ四辺形の北辺とほぼ平行しており、これらについても堅穴建物に関連する遺構と判断した。

P3の掘方埋土から弥生土器の底部が出土しており、柱穴などの配置から弥生時代の建物と判断しているが、詳細な時期は不明である。(田中)

堅穴建物7(図32)

Q12、R12で検出した建物で、後世の耕作などによって堅穴部分はすべて失われ、検出した面でも周壁溝や被熱面は認められなかった。

主柱穴はP1～4の4本で、掘方の芯々間距離は東西方向は3.2m前後、南北方向は2.85m前後で、P3がやや南にずれるが掘方の中心を結ぶとほぼ長方形になる。掘方の平面形は楕円形で、長径はやや

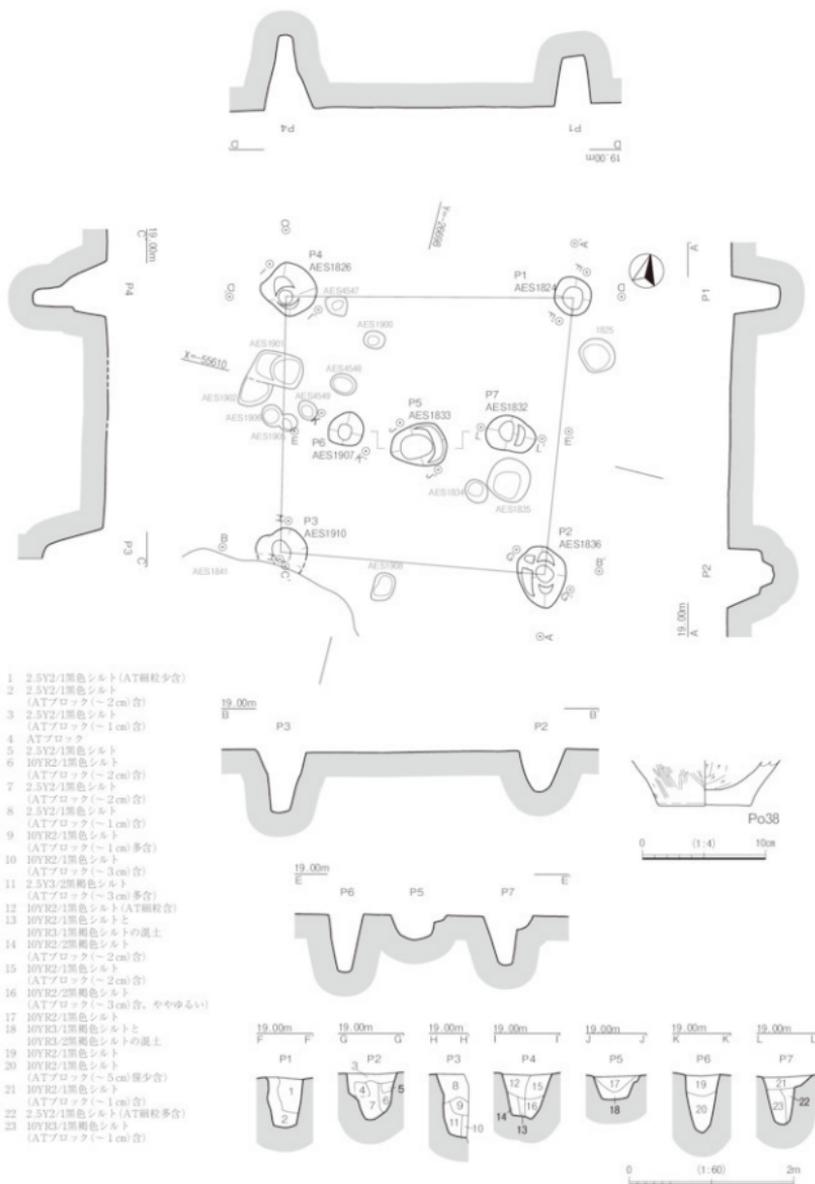


図31 A区 竅穴建物6

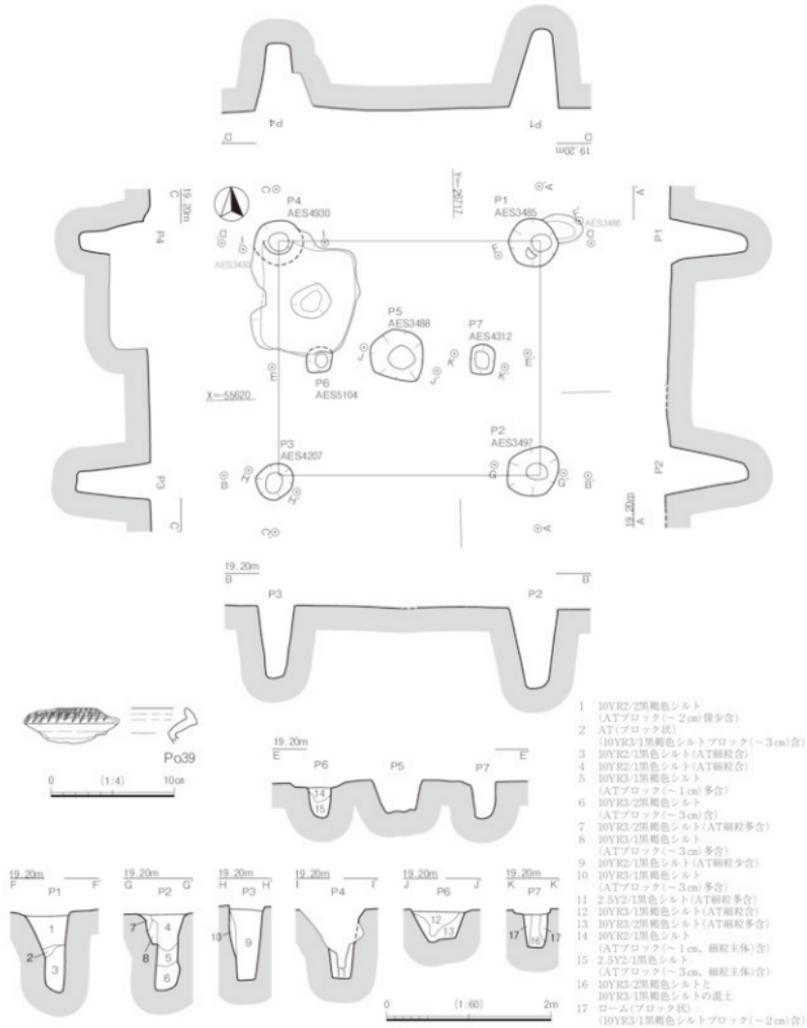


図32 A区 竪穴建物7

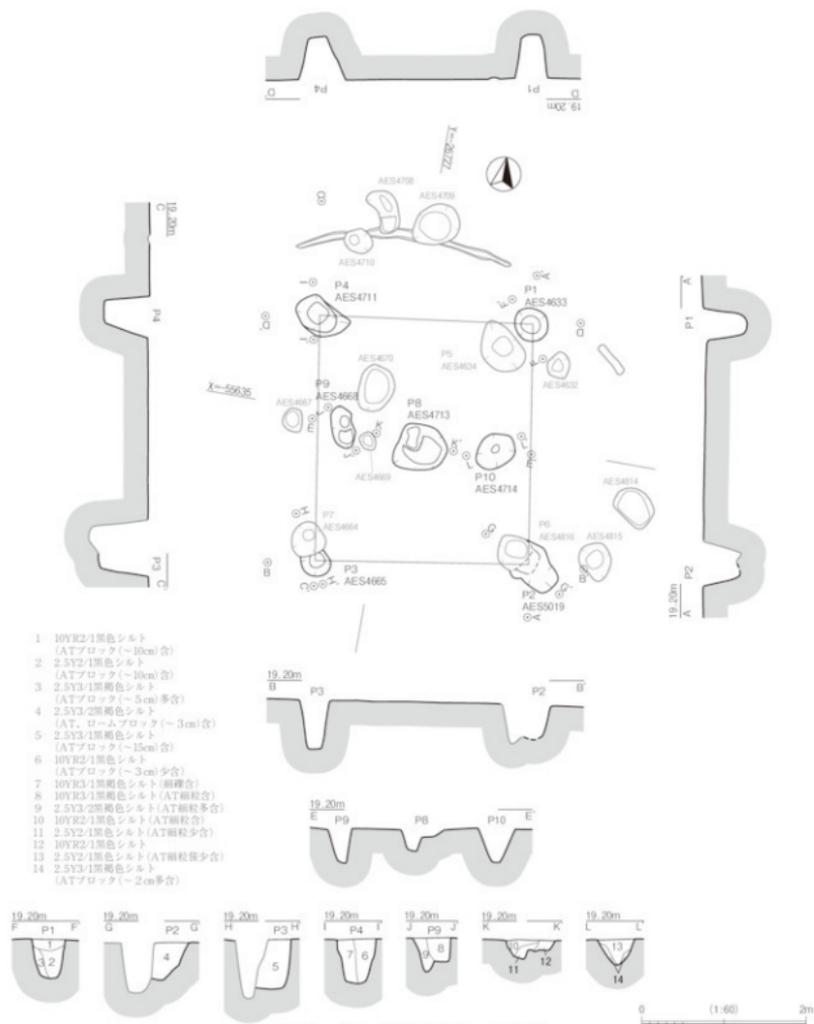


図33 A区 竪穴建物8 古段階

小さいP3で0.45m、それ以外は0.6~0.7mある。掘方の検出面からの深さは東側のP1、2で1.0m前後であるのに対し、西側のP3、4は0.9m弱でやや浅い。

主柱穴を結んだ四辺形のほぼ中央には長径0.69m、短径0.59m、検出面からの深さが0.42mのP5があり、建物の中央ピットと判断した。また、P5の東と西に隅円方形に近い平面形の穴が2基(P6、7)があり、P5~7が直線に等間隔で並ぶことから、これらも竪穴建物に関連すると考えた。このうち、P7では柱の痕跡と思われる16層が確認できた。

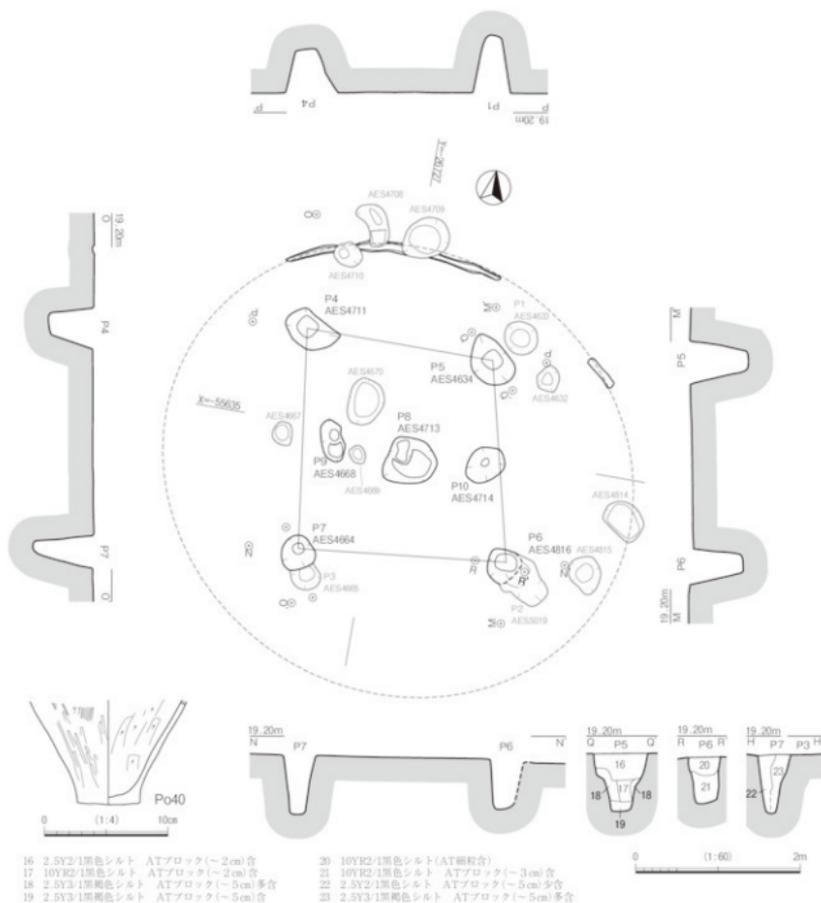


図34 A区 竪穴建物8 新段階

出土した遺物として、P3から弥生時代中期後葉の瓦片が出土しており、柱穴などの配置から考えても同時期の建物の可能性が高いと判断した。

なお、P4とP6は袋状土坑AES3430と重なっていたが、埋土が類似していたことから前後関係が確認できなかった。(田中)

竪穴建物8(図33・34、PL15)

S13で検出した建物で、竪穴部分は失われて周壁溝は一部残るのみである。主柱穴の切り合い関係から一度建て替えが行われたことが確認できた。以下、新段階、古段階と呼称して記述する。

古段階の主柱穴はP1～4で、掘方底面の中心で結ぶと東辺と西辺がほぼ平行しており(間隔2.6m前後)、東辺(2.95m)に対して西辺がやや長い(3.02m)。掘方の平面形は楕円形または不整形で、長径は

P1が0.43m、P4が0.68mで規模にばらつきがある。検出面からの深さは0.45～0.61mある。

新段階の主柱穴はP5～7で、北西側については古段階のP4を踏襲したと考えた。P5とP7、P6とP4の掘方の底面中央で結んだ線は直角に近い角度で交わり、交点はP6とP4を結んだ線のほぼ中央に当たる。掘方底面の中央で結んだ四辺形の各辺の長さはP5から時計回りに2.48m、2.55m、2.62m、2.30mある。掘方の平面形は不整形で、長径はP5がやや0.67mでやや大きく、P6、7はほぼ同じ(0.42m)である。検出面からの深さはP6が0.60mであるのに対し、P5、7は0.72mでやや深い。またP6はP4(0.55m)に比べてやや深い。

周壁溝は幅が0.1m前後、検出面の深さが0.1m未満で、平面形は緩やかに円弧状になっている。溝の南東部にもごく浅い痕跡が僅かに残っていた。

周壁溝と古段階の主柱穴の位置関係を見ると、P1にはかなり近く、P4からはやや離れている。仮に古段階に伴うとすると、堅穴を真円で復元すると堅穴の北東に偏ることになり、主柱穴を中心になるようにすると極端に細長い楕円形の堅穴を想定する必要がある。

一方、周壁溝と新段階の主柱穴P5の間隔は、新段階でも使用したと思われるP4と周壁溝の間隔に近い。そこで、周壁溝が新段階の建物に伴うものとして、主柱穴と堅穴の縁がほぼ同じ距離になるようにしつつ周壁溝の形状に合わせた形で堅穴を復元すると、長径5.9m前後、短径5.4m前後の楕円形が想定される。

建物の中央には長径0.72m、短径0.59mの不整形な土坑P8があり、中央ピットと判断した。底面は2段になっており、全体が検出面から0.1mほど掘り込まれ、北西部がさらに0.1mほど深くなる。P8の東と西には長径0.5m前後、検出面からの深さが0.4m前後の不整形な穴P9、10がある。P8～10はほぼ直線に並んでおり、これらの穴も堅穴建物に関するものと判断した。

建物機能時に伴う遺物がないものの、円形の建物であることから弥生時代中期頃の建物と判断した。なおP6掘方埋土からは弥生土器の底部から体部にかけての破片が出土した。(田中)

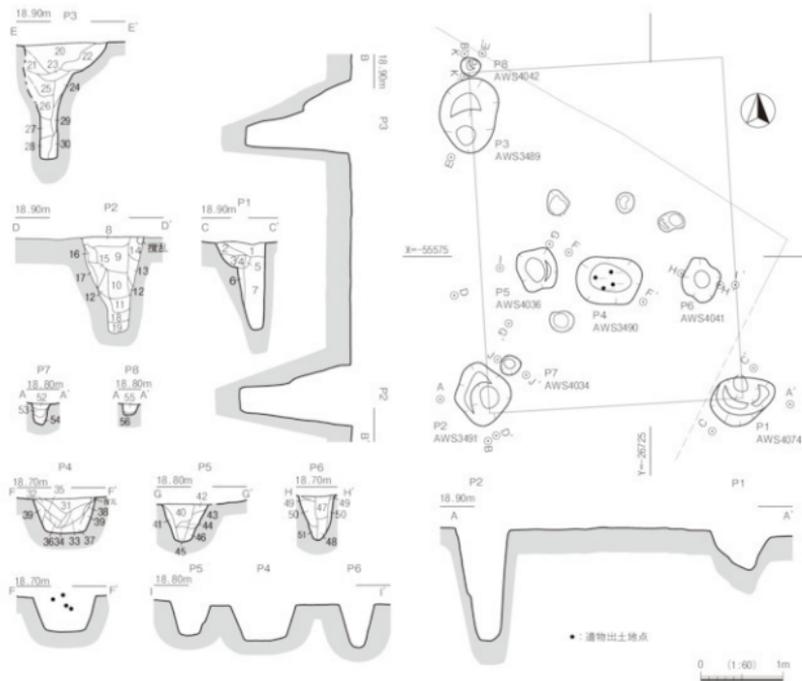
堅穴建物9(図35・36)

M13で検出した建物である。P1は平成25年度に、A区東のAES2189として検出したものの西壁際の一部しか掘り下げていなかった。平成26年度の調査でP2・P3を調査し、調査範囲東側の法面に同柱穴が想定されたため、安全面を確保しつつP1を再検出して調査を行った。

北東側の柱穴、壁溝や被熱面、貼床等は確認していないものの、中央ピットと両側に2本の柱穴が確認できたことから床面以下まで上位を掘削された堅穴建物と考えた。

柱穴の平面はP1が東西、P2・P3が南北に長い楕円形状で、径0.54～0.92m、検出面からの深さはP1が1.07m、P2が1.17m、P3が1.40mでいずれも1mを越える。柱穴の芯々間距離は、P1-P2間が1.05m、P2-P3は1.15mである。柱穴の埋土はいずれも黒色から黒褐色シルトを主体とする。P1の7層は柱痕か。P2・P3は堆積が安定せず、ややゆるい層が多いことから柱は抜き取られたと考える。P7はP2の北東隣、P8はP3の北隣に位置することから補助柱と考える。いずれも平面は不整な円形、検出面からの径は0.20～0.25m、深さはP7が0.26m、P8が0.14mである。

中央ピットはP4である。平面は東西方向に軸をもつ不整な楕円形で、長軸0.79m、短軸0.58m、検出面からの深さは0.54mで、底面はローム層中である。断面形は逆台形で、底面は木根状の窪みのほか起伏があり、平坦ではない。平面形は不整な楕円形で、径0.24m～0.51mである。埋土は黒色～黒褐色シルトを主体とする。底面付近に37層が堆積し、その上から検出面にかけて、中央に向かう黒



- [P1]
- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm)僅少含
 - 2 2.5Y3/1黒褐色シルト
 - 3 2.5Y2/1黒色シルト ATブロッカ(径-5cm, 縦柱主体)含
 - 4 2.5Y4/1黄灰色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 5 2.5Y3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 6 7.5YR6/4L-赤い黄褐色細砂シルト
 - 7 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-10cm)含
- [P2]
- 8 10YR2/2黒褐色シルト ロームブロッカ(径-2cm)少含
 - 9 10YR2/1黒色シルト
 - 10 ロームブロッカ(径-2cm)少含, ATブロッカ(径-5cm, 径-5cm主体)含
 - 11 7.5YR2/1黒色シルト ローム縦柱含
 - 12 10YR2/1黒色シルト
 - 13 ロームブロッカ(径-3cm, 径-5cm主体)多含, ややゆるい
 - 14 10YR3/2黒褐色シルト
 - 15 ロームブロッカ(径-2cm, 径-5cm主体)多含, ややゆるい
 - 16 10YR7/4L-赤い黄褐色細砂シルト
 - 17 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm)含
 - 18 2.5Y3/1黒褐色シルト ローム粒(径-5cm)含
 - 19 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロッカ(径-20cm)含
 - 20 10YR7/4L-赤い黄褐色細砂シルト
 - 21 10YR3/1黒褐色シルト ブロッカ(径-3cm)少含
 - 22 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5cm)含, ややゆるい
 - 23 7.5YR2/2黒褐色シルト ロームブロッカ(径-5cm)多含, ややゆるい
 - 24 2.5Y3/1黒褐色シルト 基礎層ブロッカ(径-3cm)多含, ややゆるい
- [P3]
- 25 10YR2/1黒色シルト
 - 26 ローム粒(径-1cm, 縦柱主体)含, ATブロッカ(径-2cm)少含
 - 27 10YR3/1黒褐色シルト
 - 28 ATブロッカ(径-5cm, 径-5cm)含, ロームブロッカ(径-1cm)少含
 - 29 2.5Y2/1黒色シルト
 - 30 2.5Y1/1黄灰色シルト ロームブロッカ(径-5cm)混, ややゆるい
 - 31 10YR6/4L-赤い黄褐色細砂シルト
 - 32 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 径-1cm主体)含
 - 33 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 34 10YR4/2黄褐色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径-5cm主体)多含
 - 35 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径-5cm主体)多含
 - 36 10YR4/1黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
 - 37 10YR4/1黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
 - 38 10YR2/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5cm主体)少含
 - 39 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 縦柱主体)含
 - 40 10YR3/1黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
 - 41 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径-5cm主体)多含
 - 42 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ATブロッカ(径-1cm)少含, ややゆるい
 - 43 2.5Y4/1黄灰色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径-5cm主体)多含
 - 44 10YR3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 径-5cm主体)少含
 - 45 10YR2/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5cm主体)少含
 - 46 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 縦柱主体)含
 - 47 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 48 10YR4/1黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
 - 49 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 50 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 51 10YR4/1黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
 - 52 10YR3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 53 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 54 10YR4/2黄褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 55 10YR2/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 径-5cm主体)少含
 - 56 10YR4/2黄褐色シルト ATブロッカ(径-2cm)少含, ややゆるい
- 27 7.5YR6/4L-赤い黄褐色細砂シルトと2.5Y3/1黒褐色シルトがブロッカ(径-5cm)混じる, ややゆるい
- 28 7.5YR7/4L-赤い黄褐色シルト-粒上, ロームブロッカ(径-3cm)少含
- 29 2.5Y4/2黄灰色シルト
- 30 2.5Y3/1黒褐色シルトブロッカ(径-2cm)少含, ややゆるい
- 31 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト-粒上, ややゆるい
- [P4]
- 31 10YR2/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 径1-2cm主体)僅少含
 - 32 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロッカ(径-2cm, 縦柱主体)少含
 - 33 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロッカ(径-3cm, 縦柱主体)多含
 - 34 10YR2/1黒褐色シルト ロームブロッカ(径-5cm)僅少含, ややゆるい
 - 35 10YR4/1黒褐色シルト ロームブロッカ(径-2cm)多含, ややゆるい
 - 36 10YR2/2黒褐色シルト ロームブロッカ(径-5cm, 径-5cm主体)多含
 - 37 10YR3/2黒褐色シルト ロームブロッカ(径-2cm, 径-5cm主体)多含
 - 38 10YR7/4L-赤い黄褐色細砂シルト
 - 39 10YR3/1黒褐色シルトブロッカ(径-2cm)多含
- [P5]
- 39 10YR3/2黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
 - 40 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 41 2.5Y4/2黄灰色シルト
 - 42 ATブロッカ(径-3cm, 径-5cm主体)多含, ややゆるい
 - 43 2.5Y3/1黒褐色シルト AT(径-5cm, 縦柱主体)含
 - 44 2.5Y3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 45 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト ATブロッカ(径-1cm)少含, ややゆるい
 - 46 2.5Y4/1黄灰色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径-5cm主体)多含
 - 47 10YR3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 径-5cm主体)少含
- [P6]
- 47 10YR2/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5cm主体)少含
 - 48 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 縦柱主体)含
 - 49 10YR3/1黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
 - 50 10YR4/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径-5cm主体)多含
 - 51 10YR4/1黒褐色シルトとロームブロッカ(径-5cm)混
- [P7]
- 32 10YR3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 33 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 34 10YR4/2黄褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 縦柱主体)少含
 - 35 10YR2/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 径-5cm主体)少含
 - 36 10YR4/2黄褐色シルト ATブロッカ(径-2cm)少含, ややゆるい

図35 A区 竪穴建物9 平面・断面

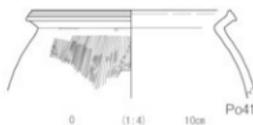


図36 A区 竪穴建物9 出土土器

P5・P6は共に平面形は不整な方形で、P5の径は0.47～0.57m、P6の径は0.48～0.55m、検出面からの深さはP5が0.46m、P6が0.55mである。埋土は黒褐色シルトが主体で、P6には47・48層の柱痕跡を確認した。中央ピットの両側に小ピットをもつ竪穴建物06のような例もあるが、この場合は柱痕跡が認められること、竪穴建物としては比較的大きいことから4本柱建物の補助的な支えか、P5・P6の2本柱の建物として建て替えられた可能性もあろう。

遺物は中央ピットP4の掘り下げ中に遺構中央付近から弥生時代中期中葉の甕Po41が出土した。ほか、各柱穴から遺物は出土しているが、いずれも小片で図化に耐えない。

時期は柱穴の埋土と出土遺物から弥生時代中期の竪穴建物と考える。(八峠)

竪穴建物10(図37、PL15・98)

Q16に位置する建物である。建物の中央を区画溝に掘削され、両側の壁溝と主柱穴のみ調査した。壁溝の位置、埋土と位置、規模と深さから4本の柱穴を特定した。

主柱穴間は芯々で東西方向は、北側P1-P2間が2.65m、南側P3-P4間が3m、南北方向は東側P2-P3間が2.8m、西側P4-P1間が2.7mである。

主柱穴の上部は削平が及んでいるものの、平面形は不整な楕円形で、径は0.33m～0.65mである。掘方の深さは0.51m～0.67mある。中央ピット、被熱面等は確認していない。

ほか、建物の南西隅で径0.26m～0.49m、検出面からの深さ0.59mのピットを検出した。主柱穴とピット埋土は黒色または黒褐色シルトを主体とし、ATやロームのブロックを含む。P1の3層、P2の9層・10層、P3の16層、P4の21層・22層、P5の33層は柱痕跡の可能性がある。このうちP5の埋土中位からPo42が出土した。壁溝の範囲内であること、建物の構造と土器の時期に齟齬がないことから、建物と同時期のピットと考える。土器は柱穴の掘方の埋土中に位置する。ただし主柱穴とは異なることから、どの段階で入れられたのかは明らかではない。

出土遺物や埋土や建物の構造から、弥生時代中期後葉の竪穴建物と考える。(八峠)

竪穴建物11(図38、PL16)

N18区に位置する建物で、三辺以上をもつ壁溝を検出したが南東側の遺存状況はわるい。東側と北側の屈曲部がともに概ね110°開くことから、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面付近まで上位を掘削された正五角形状の竪穴建物と考えた。

主柱穴はいずれも壁溝の屈曲部付近にあり、芯々でP1-P2間が2.85m、P2-P3間が2.7m、P3-P4間が2.5m、P4-P5間が2.6m、P5-P1間が2.55mある。主柱穴の平面はP3を除き不整な円形で、P1・P3・P4では、P1が径0.24m～0.28m、P2・P5では径が0.48m～0.73mあるが、内側の掘方の径は概ね0.25m～0.29mである。検出面からの深さは不揃いではあるが、0.31m～0.55mである。

P6は五角形のはほぼ中央にあり、平面は不整な円形で径は0.43m～0.48m、検出面からの深さは0.23mで、緩く立ち上ることから中央ピットと考える。

壁溝は西側・北側・北東側の三辺で確認し、北東から東側の屈曲部は周囲に攪乱があり、明瞭には検出していない。幅は0.09m～0.16m、検出面からの深さは0.04mである。

遺構の埋土は黒色から黒褐色シルトを主体に、黄褐色または褐色シルトのブロックを含む。

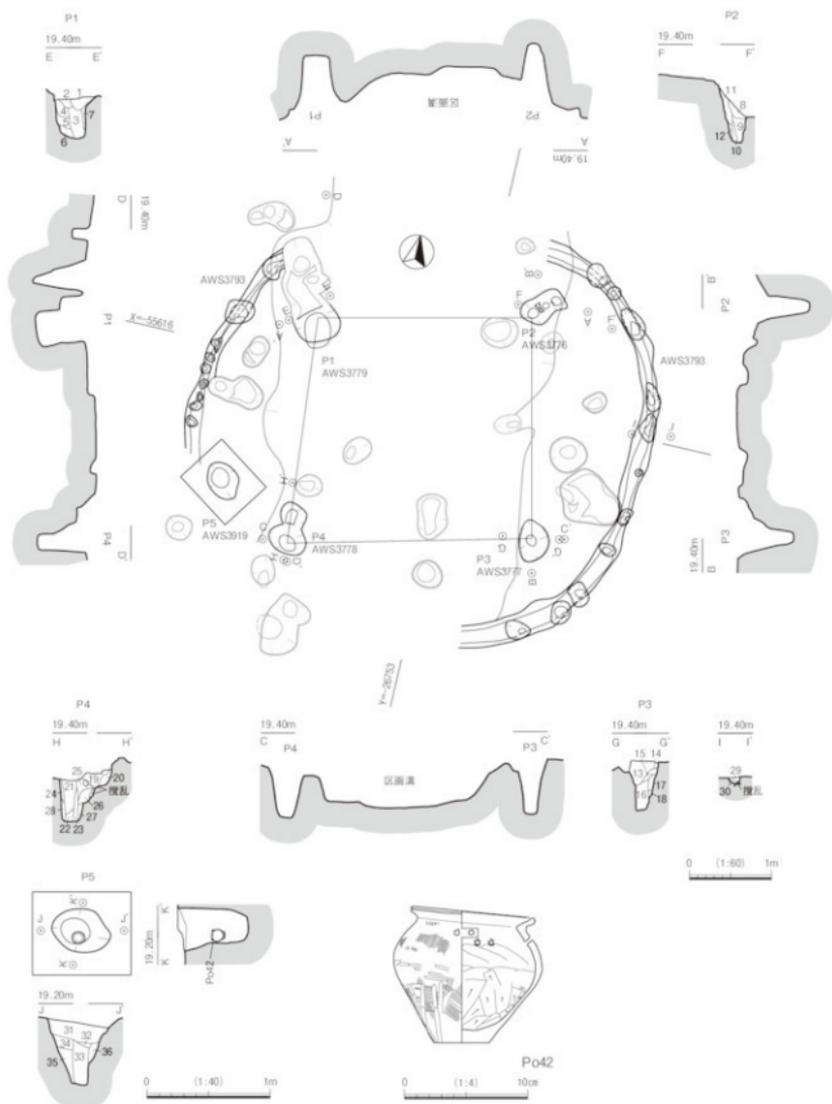


图37 A区 竪穴建物10

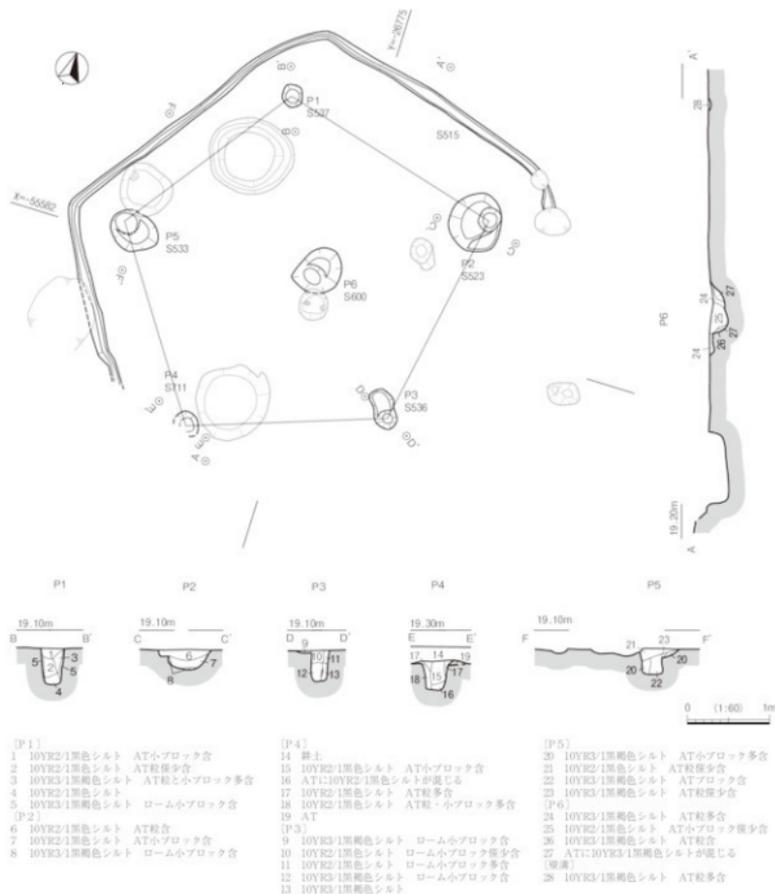


図38 A区 竪穴建物11 平面・断面

削平により埋土が遺存していなかったため、遺物はP2の埋土から出土したのみである。いずれも小片で図化に耐えなかった。

埋土や建物の構造から、弥生時代の竪穴建物と考える。(八峠)

竪穴建物12(図39、PL16)

O20・P20に位置する建物である。建物の壁溝AWS83と中央に位置するP1から被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴は特定していない。袋状土坑AWS87に壁溝が切られている。P2・P6・P13・P14・P17・P18・P20は壁溝AWS83と位置的には重複する。P2・P14・P17・P19は壁溝を切る。P13は壁溝と一体か。P6・P20は不明である。

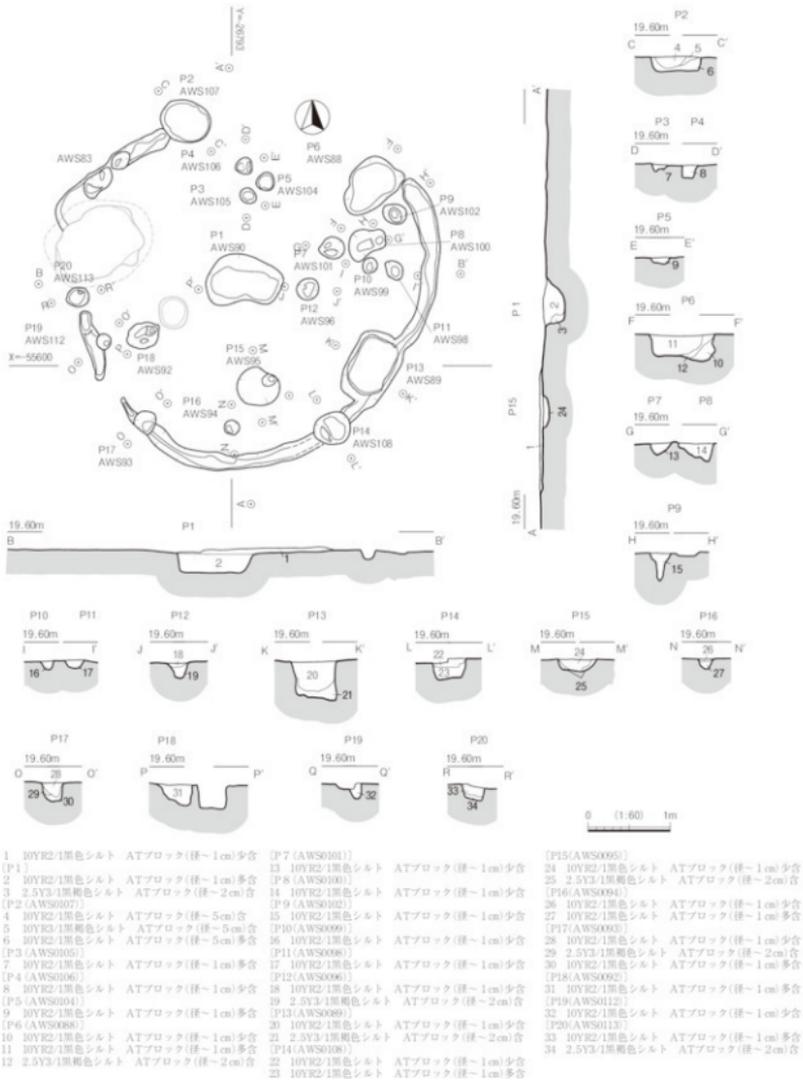


図39 A区 竪穴建物12 平面・断面

このうち、P2・P6は不整な楕円形で、径0.45m～0.77m、検出面からの深さは0.18mと0.32m、P13は隅丸長方形で、径は0.61m～0.92m、検出面からの深さは全体で最も深い0.51mある。P14・P17・P19・P20は不整な円形で、径0.17m～0.45m、検出面からの深さは0.2m～0.27mである。

また西側で掘立柱建物67と重複し、柱穴一基は周溝内にあるものの、他に重複する建物はない。その他のピットはいずれも建物の範囲内にある。こうした建物内の小型のピットP3～P5・P7・P9～P12・P16・P18は、平面は不整な円形で、径は0.16m～0.43m、検出面からの深さは0.06m～0.34mである。ただし中にはやや大きく不整な楕円形で、柱の当り状の一段落の箇所をもつP8・P15もあり、径が0.25m～0.52m、検出面からの深さは0.34m～0.44mある。P8～P15間の距離は芯々とするなら2.15mで、袋状土坑AWS87の位置にピットを想定すれば、三本柱の建物が推測できる。

ピットの埋土は黒色から黒褐色シルトで、黄褐色のブロックを含む。P2・P6・P14・P17・P18・P20ではATのブロックを多量に含む層があり、P2・P14・P17はいずれも壁溝を切っていることからこうしたピットは建物の時期を下る可能性がある。

遺物はP1・P6・P13～P15から出土したものの、規則性は認められない。またいずれも小片であり図化に耐えない。

埋土や建物の構造から、弥生時代の袋状土坑AWS87を遡る竪穴建物と考える。(八峠)

竪穴建物13(図40～42、PL16・98)

P20・21で検出した建物で、規模は東西6.9m、南北7.0mで平面形はほぼ円形を呈する。

検出面から床面までの深さは最深部で0.15mである。圃場整備等により遺構の大半が削平を受けており、遺構の遺存状況は良くない。竪穴部分の埋土は最下層と考えられる黒色シルト層が1層検出できたのみである。

床面では24基のピットを確認した。主柱穴はP1～P4で、P5は中央ピットと考えられる。中央ピットP5からは南西方向に幅0.3m、長さ1.4mの小溝が延びる。他に壁溝内などで7基の小穴を検出した。

主柱穴の柱穴間距離はいずれも芯々で3.5m、正方形の配置をとる。床面からの深さは0.9m～1.0mである。柱痕跡から判断すると、径0.2m程度の柱材を使用していたと考えられる。

P10とP11はいずれも平面形が円形を呈し、深さも揃えるピットである。P11では柱痕跡を確認している。これら2基のピットは屋内施設を構築するピットとも考えられるが、直径が約0.5mあり、主柱穴を除く他の床面検出ピットに比べて大きい。

南東主柱穴P3の南側には幅1.0m、長さ3.3mの溝状の突出部が認められた。平面形は方形で、底面には皿状の凹みがある。長軸側の中心を通るラインを延長するとP3～P2の中心を結ぶラインと一致し、方位も揃える。埋土の観察から住居跡との切り合いは認められず、住居埋土と一連の堆積状況であった。そのため、この突出部は竪穴建物に伴う施設であると判断した。用途としては出入り口の可能性がありますと考えられる。

遺物は埋土中から土器や石器が出土した。土器はいずれも細片であり、床面よりやや浮いた位置で出土した。このうち弥生土器の壺、甕、底部、石器を図化した。S4は黒曜石製の石鏃で、両極打撃による剥片を素材に周辺のみを調整したものである。

出土遺物から、本遺構の時期は弥生時代中期中葉～後葉と考えられる。(濱本、八峠)

竪穴建物14(図43・44、PL17)

M20・21に位置する。後世の削平と攪乱が酷く、西側は床面がほぼ露出している状況であった。

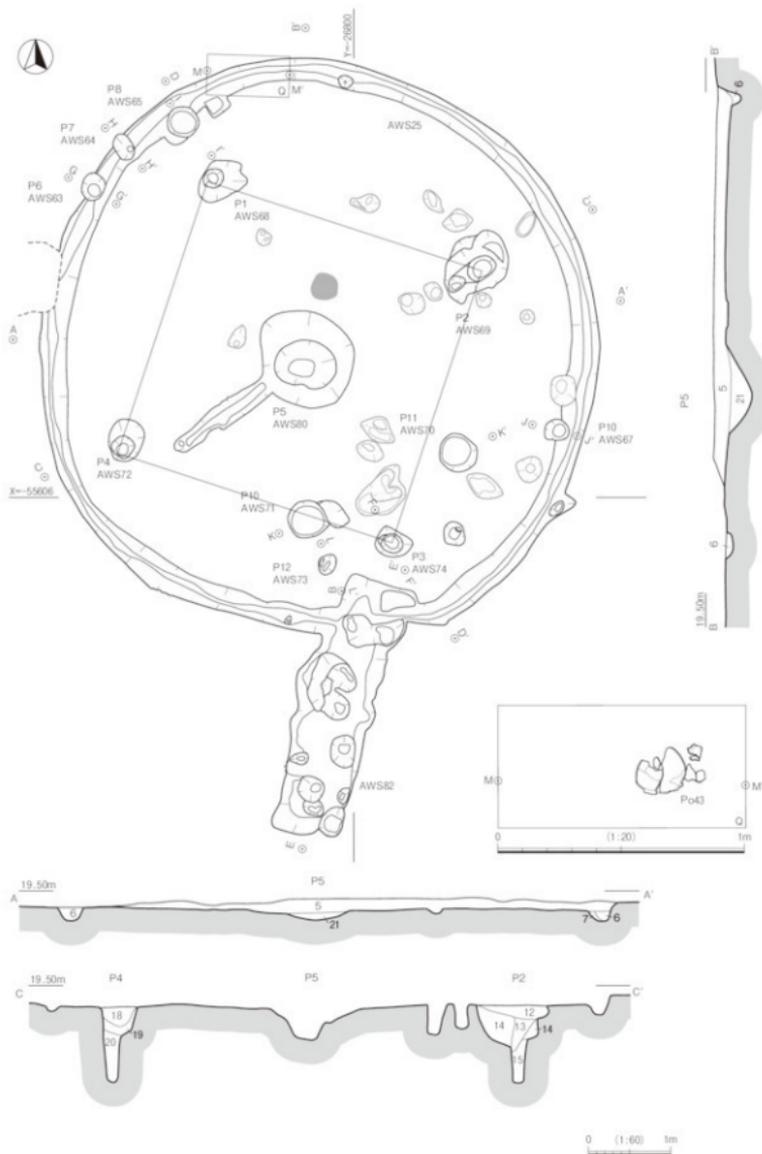


図40 A区 竖穴建物13(1)

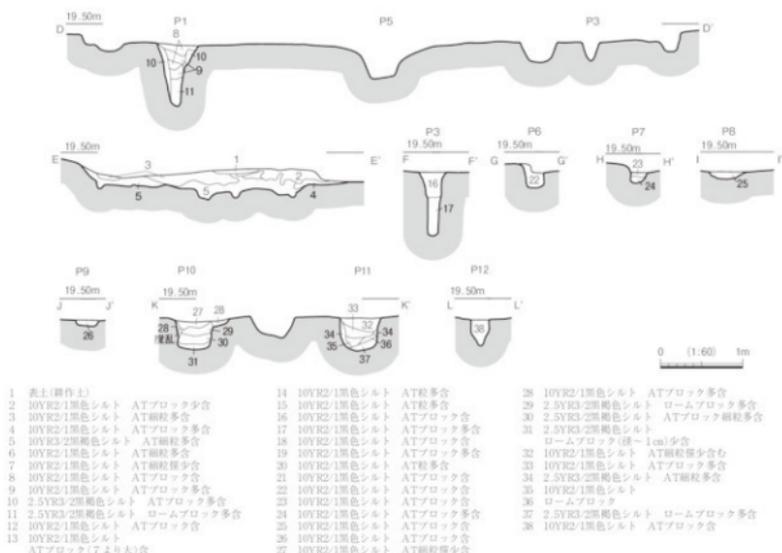


図41 A区 竪穴建物13(2)

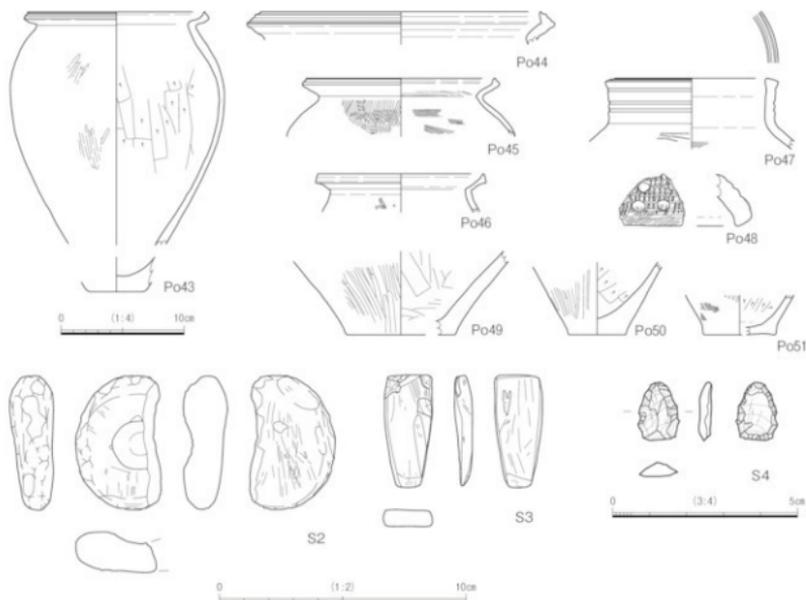


図42 A区 竪穴建物13 出土遺物

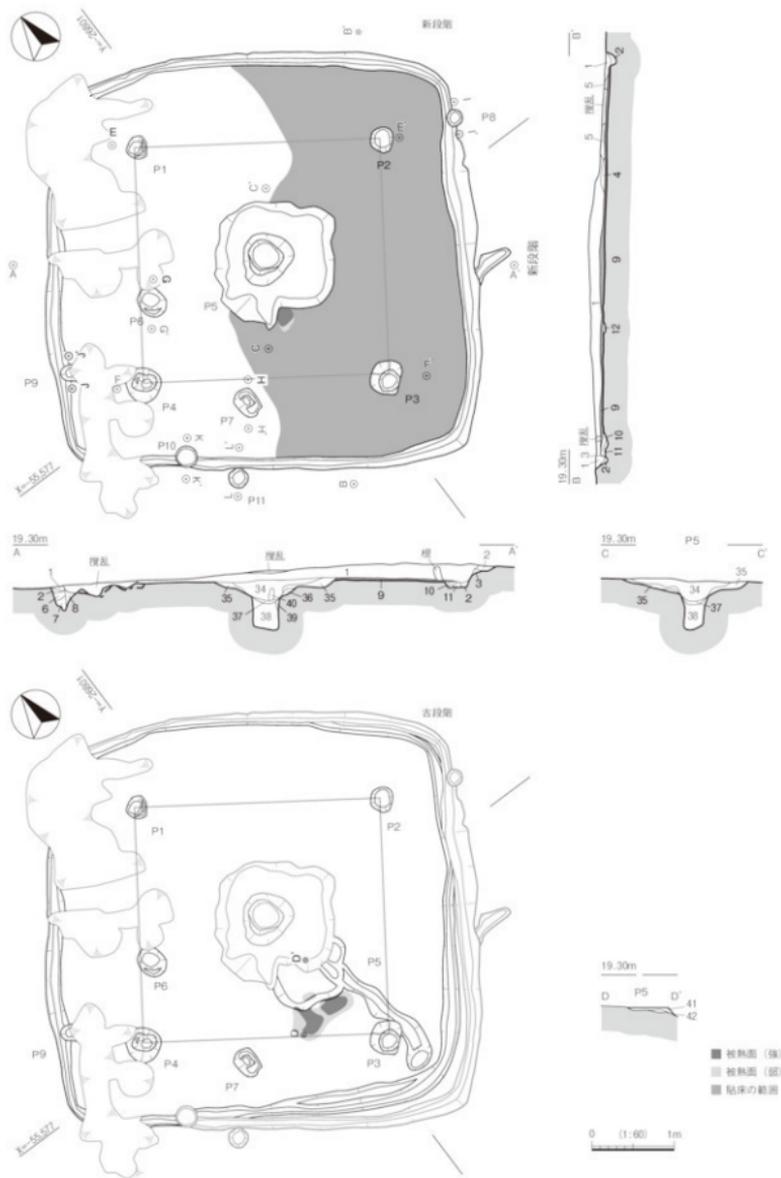
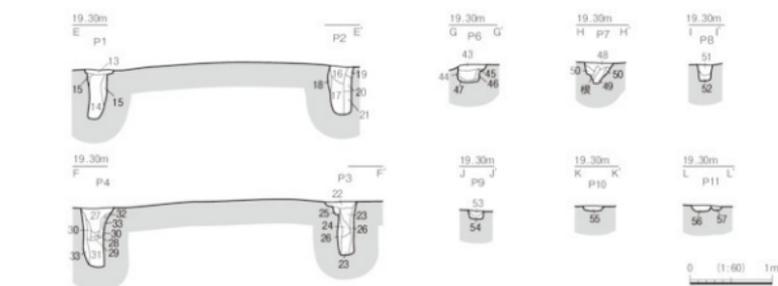


図43 A区 竪穴建物14 平面・断面



建物内

- 1 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 炭屑僅少含
- 2 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒僅少含
- 3 10YR4-1褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒多量含
- 4 10YR3-4暗褐色シルト 10YR2-1黒色シルトブロック含
- 5 10YR3-3暗褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒僅少含
- 6 10YR2-1黒色シルト 10YR3-4暗褐色シルト小ブロック含
- 7 10YR2-1黒色シルト 10YR3-4暗褐色シルト小ブロック多量含
- 8 10YR3-4暗褐色シルト 10YR2-1黒色シルトブロック多量含
- 9 10YR3-1黒褐色シルト 10YR3-4暗褐色シルト小ブロック含, 船床
- 10 10YR2-1黒色シルト 10YR3-4暗褐色シルト粒含
- 11 10YR2-1黒色シルト
10YR4-6褐色シルト, 10YR3-4暗褐色シルト小ブロック含
- 12 10YR3-1黒褐色シルト 10YR3-4暗褐色シルト小ブロック含
- P1 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック含
- 13 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック多量含
- 15 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック含
- P2 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック多量含
- 16 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒僅少含
- 17 10YR2-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック多量含
- 18 10YR4-2灰褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒多量含
- 19 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒多量含
- 20 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒僅少含
- 21 10YR3-1黒褐色シルト
- P3 22 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック含
- 23 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルトブロック多量含
- 24 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック多量含
- 25 10YR4-1褐色シルト 10YR4-6褐色シルトブロック多量含
- 26 10YR4-6褐色シルト 10YR3-1黒褐色シルト多量含
- P4 27 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック含
- 28 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒僅少含
- 29 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルトを帯状に含む
- 30 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒含
- 31 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルトブロック僅少含
- 32 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒多量含
- 33 10YR3-1黒褐色シルト

P5

- 34 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 炭屑含
- 35 10YR3-1黒褐色シルト 10YR3-4暗褐色シルトブロック多量含
- 36 10YR4-1褐色シルト 10YR3-1黒褐色シルトブロック多量含
- 37 10YR2-1黒色シルト
- 38 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-1褐色シルト(やや砂質)粒多量含, 炭小片含
- 39 10YR4-6褐色シルト 10YR2-1黒色シルトブロック含
- 40 10YR4-1褐色シルト(やや砂質) 10YR4-6褐色シルト粒含
六段階
- 41 10YR3-1黒褐色シルト 10YR3-4暗褐色シルト小ブロック含
- 42 10YR4-1褐色シルト 10YR3-1黒褐色シルト粒含
- P6 43 10YR2-1黒色シルト
- 44 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルトブロック多量含
- 45 10YR4-1褐色シルト 10YR4-6褐色シルトブロック含
- 46 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒含
- 47 10YR3-1黒褐色シルト
- P7 48 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック含
- 49 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒含
- 50 10YR4-1褐色シルト 10YR4-6褐色シルトブロック含
- P8 51 10YR2-1黒色シルト
- 52 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒僅少含
- P9 53 10YR3-1黒褐色シルト
- 54 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒含
- P10 55 10YR3-1黒褐色シルト 10YR4-6褐色シルト粒, 小ブロック含
- P11 56 10YR2-1黒色シルト 10YR4-6褐色シルト粒僅少含
- 57 10YR3-1黒褐色シルト

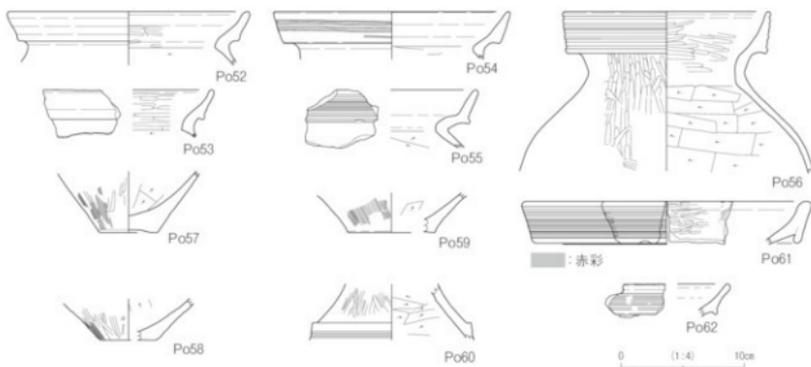


図44 A区 堅穴建物14 出土遺物

建物は同位置で南東側を拡張するように建て替えを行っており、古段階と新段階の2時期に細分できる。いずれの段階においても平面形は隅丸方形であり、検出面における主軸の長さは、古段階で東西が5.00m、南北が4.95m、新段階で東西が5.27m、南北が5.11mある。検出面から新段階の床面までの深さは最大で約0.2mである。壁溝は、拡張された南東部のみ新しく設けられているが、その他の部分は、古段階のものを新段階においても踏襲している。幅は0.15～0.20mである。

主柱穴は新段階において掘り直されていると考えるが、古段階から同位置を維持するP1～P4の4本で、新段階におけるP1～P4の規模は、最大径が0.28～0.42mで、深さが0.60～0.71mある。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に2.5m、2.5m、2.5m、2.7mである。

いわゆる中央ピットは古段階と新段階で位置、規模とも異なっている。古段階における中央ピットは床面やや南東よりに位置し、新段階の中央ピットにより北東側ほぼ半分が削平されているが、平面形は一辺約1m程度のいびつな隅丸方形を呈していたものと考えられる。深さは0.10mある。この中央ピットの南側に被熱面が広がっている。また中央ピットから南東側コーナーに向けて幅0.15～0.25cm、深さ0.05～0.10mの溝が伸びている。新段階における中央ピットは床面ほぼ中央に位置し、平面形は一辺1.4～1.5mを測るいびつな隅丸方形を呈する。2段に掘り込まれており、深さは最大で0.58mを測る。古段階のものと同様に南側に被熱面が広がっている。

新段階において南東側を拡張する際に、古段階の壁溝を埋める形で貼床を床全面に施したと考えるが、削平により西半は消失している。

建物埋土は、柱穴や壁溝埋土とともに旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とする。

遺物は少なく、埋土中においても散見する程度であったが、新段階中央ピット脇の床面ほぼ直上で弥生土器の甕、壺などが出土した。

出土遺物より、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考える。(原田)

竪穴建物15(図45、PL17)

M21・22、N21・22に位置する竪穴建物である。

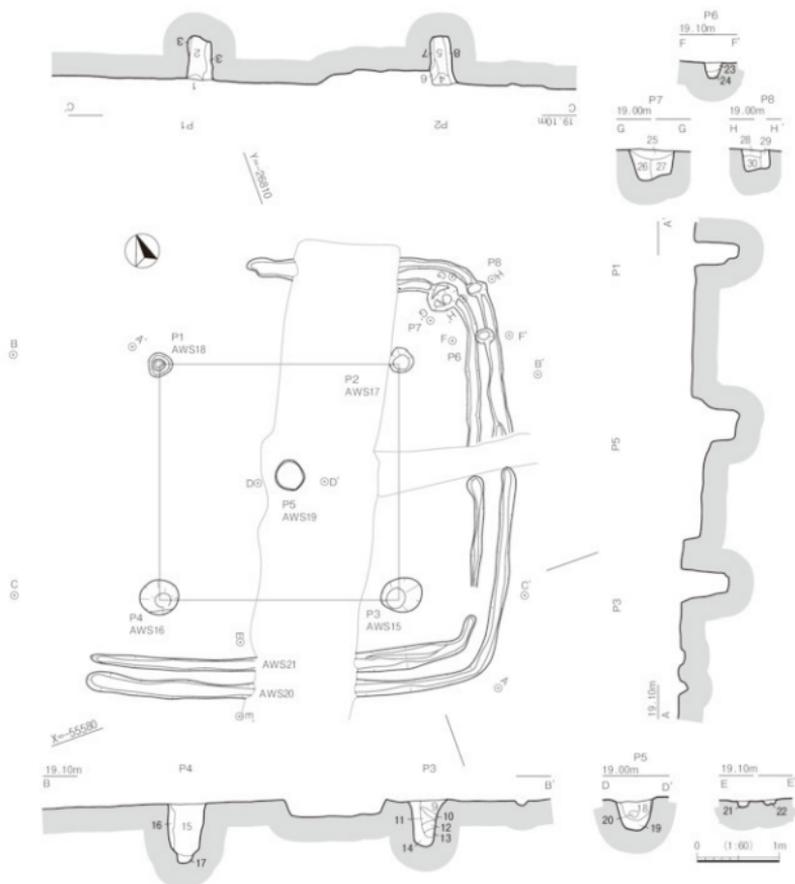
遺構の中央を南北、東西に掘り込む攪乱によって破壊されているほか、圃場整備による削平が著しく、底面ピットおよび壁溝のみの検出となった。

検出したピットは9基で、主柱穴はP1～4である。前述のように圃場整備による削平を受けているため、本来の床面のレベルは明らかでないが、検出面からの主柱穴の深さは0.6～0.7mある。P1、2の底面に認められた柱当たりから判断すると、直径0.15～0.2mの柱材を使用していたと考えられる。主柱穴の柱穴間距離はいずれも芯々で2.9m、平面配置は正方形である。

壁溝は住居東側および南側はほぼ遺存するが、北側および西側は認められなかった。本来は全周していたものが削平により失われた可能性もあるが詳細は明らかでない。幅は0.10～0.25m、深さ0.05～0.08mで、一部途切れるものの2条の壁溝が平行して巡る。壁溝の形状から、本住居跡の平面形は隅丸方形を呈していたと考えられる。

2条の壁溝が巡ることから住居の建て替えも想定されるが、主柱穴の平面プラン等から複数のピットの切り合いは認められなかった。建て替えの際に旧住居の主柱を抜き取り、同じ柱穴を用いて建て替えたか、もしくは住居使用時に2条の壁溝を有していたと考えられる。

削平により埋土が遺存していなかったため、遺物はピット埋土から出土したのみである。いずれも小片で図化に耐えなかった。出土遺物からは遺構の時期決定をする根拠に乏しいが、平面形が隅丸方



- [P1]
 1 10YK2/1黒色シルト 10YR4.6褐色シルト粒僅少含
 2 10YK2/1黒色シルト 10YR4.6褐色シルト粒含
 3 10YK3/2黒褐色シルト 10YR4.6褐色シルトブロック多含
 [P2]
 4 10YK2/1黒色シルト 10YR4.6褐色シルト粒僅少含
 5 10YK2/1黒色シルト 10YR4.6褐色シルト粒含
 6 10YK3/2黒褐色シルト 10YK3/3暗褐色シルト小ブロック、
 10YR4.6褐色シルト粒含
 7 10YK3/3暗褐色シルト 10YK3/2黒褐色シルト多含
 8 10YK3/2黒褐色シルト 10YR4.6褐色シルトブロック多含
 [P3]
 9 10YK2/1黒色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)僅少含
 10 10YK3/2黒褐色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)多含
 11 10YK2/1黒色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)僅少含
 12 10YK3/2黒褐色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)多含
 13 10YK2/1黒色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)僅少含
 14 10YK3/2黒褐色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)多含
 [P4]
 15 10YK2/1黒色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)僅少含

- 16 10YK3/2黒褐色シルト 黄褐色シルト(径-1cm)多含
 17 10YK2/1黒色シルト±10YK3/2黒褐色シルト混 しまり強い
 [P5]
 18 10YK2/1黒色シルト 10YR4.6褐色シルト粒僅少含
 19 10YK2/1黒色シルト 10YR4.6褐色シルト粒含
 20 10YK3/3暗褐色シルトブロック
 21 10YK2/1黒色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)僅少含
 22 10YK2/1黒色シルト 黄褐色シルト粒(径-1cm)僅少含
 [P6]
 23 10YK2/1黒色シルト 10YR4.6褐色シルト粒僅少含
 24 10YK3/3暗褐色シルト
 [P7]
 25 10YK2/1黒色シルト
 26 10YK2/1黒色シルトに10YR4.6褐色シルト粒僅少含
 27 10YK2/1黒色シルトに10YR4.6褐色シルト粒含
 [P8]
 28 10YK2/1黒色シルトに10YR4.6褐色シルト粒僅少含
 29 10YK2/1黒色シルト
 30 10YK2/1黒色シルトに10YR4.6褐色シルトブロック含

図45 A区 竪穴建物15 平面・断面

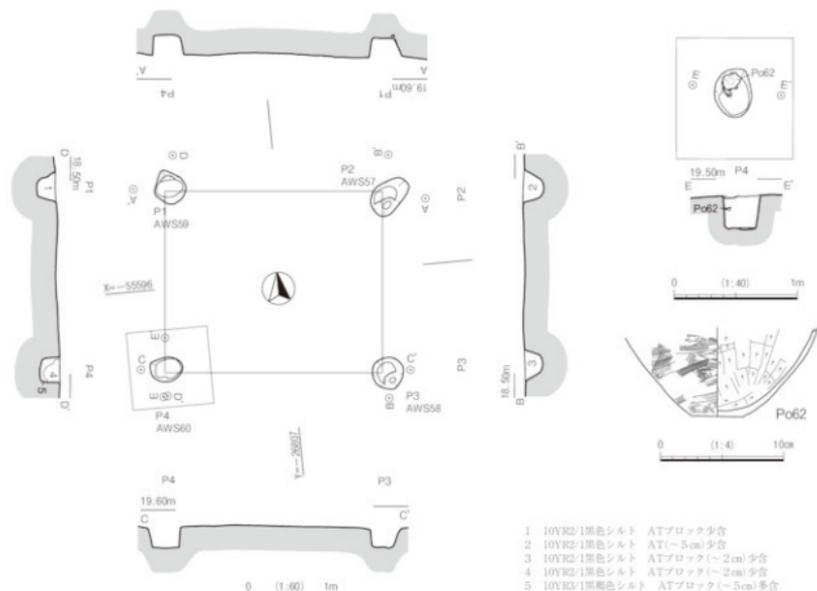


図46 A区 竪穴建物16 平面・断面・出土遺物

形と考えられることから弥生時代後期と考える。(濱本・八峠)

竪穴建物16(図46、PL17)

O21南西にある建物である。

建物の西側に総柱建物である掘立柱建物72が、南西に竪穴建物51が位置するものの周囲に柱穴の広がりはないこと、壁溝と中央ピット、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴間距離(芯々)はP1-P2:2.65m、P2-P3:2.15m、P3-P4:2.75m、P4-P1:2.2mで南北方向より東西方向の柱間の方がやや広い。ピットの深さは検出面から0.22~0.25mである。埋土はATブロックを含む黒色系のシルトである。

柱穴の平面形はP1・P3が不整な円形で径0.36m~0.43m、P2・P4が不整な円形で径0.3m~0.54mである。検出面からの深さは0.25m~0.32mで一定の深さが遺存する。

P4の4層の黒色シルト中から弥生土器の甕の底部が出土した。柱痕跡が確認できないことから建物廃絶後に入れられたと考える。外面には一部ススの付着が認められる。

本遺構の時期はP4から出土した甕Po62の特徴から弥生時代後期後葉と考える。(濱本・八峠)

袋状土坑

S68(図47)

O10で検出した土坑である。検出面での平面形は楕円形を呈し、東側に土坑S67に切られていた。S67を完掘して全体形を確認した段階での規模は、長径1.06m、短径0.93mある。

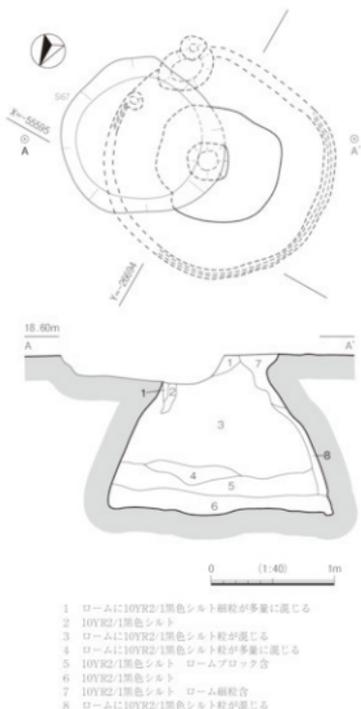


図47 A区 袋状土坑S69 平面・断面

S69 (図48～50)

M13とN13にまたがる形で検出した土坑である。検出面での平面形は長径2.22m、短径2.05mの円形を呈する。

埋土の堆積状況を観察すると、穴の上部が上に向かって開いており、上部外側には基盤層のブロックを多く含む1層や、基盤層が崩落したとみられる3、4層が堆積していた。このことから、埋没段階に穴の壁面が崩れており、上部は機能段階よりも広がったと考える。

穴の深さは1.34mあり、下部は直線的に外側へ広がる。底面は長径2.25m、短径2.15mの楕円形を呈する。底面の壁際には幅0.10～0.15m、深さ0.05～0.10mの溝が巡り、中央に長径0.42m、深さ0.25mの小穴が掘られていた。溝は底面の埋没土と同じものが堆積しており、土坑の機能段階には開口していたことが確認できた。小穴の埋土は底面埋土と似ているものの、含まれているベース層ブロックの大きさや量に差があり、土坑が機能した段階に埋められていた可能性がある。

埋土からは弥生時代中期中葉から後葉の土器が出土した。土器はいずれも破片で、割れたものを廃棄したと考えた。Po76・77は接合しないものの胎土や施文が類似しており同一個体の可能性が高い。遺物は遺構底面から浮いた状態で出土して必ずしも遺構の機能した時期を示していないが、弥生時代中期に機能していた可能性が高いと考える。(田中)

断面形は検出面の直下から直線的に広がる台形を呈する。検出面からの深さは1.24mあり、底面は長径1.86m、短径1.74mのほぼ円形を呈する。底面の壁際には幅0.05～0.10m、深さ0.05m前後の浅い溝が巡る。また底面の中央と壁際に小穴を確認した。

中央の小穴は長径0.45m、短径0.43mの円形で、土坑底面の埋土と同じ堆積で埋没していることから、土坑が機能している段階には開口していたと考えられる。

一方、壁際の小穴は長径0.50m、短径0.35mの平面が不整形なもので、埋土は底面の堆積とは異なり基盤層のブロックを含んでいる。そのため、壁際の小穴は土坑が機能していた段階の状況が不明で、土坑掘削段階で掘りすぎた部分を埋めて整形した可能性も考えておきたい。

土坑内は、底面付近に黒色シルトが堆積し、その上には基盤層のブロックを主体とする層が検出面まで堆積していた。この堆積の基盤層ブロックは比較的細くなっており、土坑の壁面が崩落したものとは考えにくく、人為的に埋められた可能性が考えられる。

埋土からは時期を判断しうる遺物が出土しておらず、機能した時期は不明である。(田中)

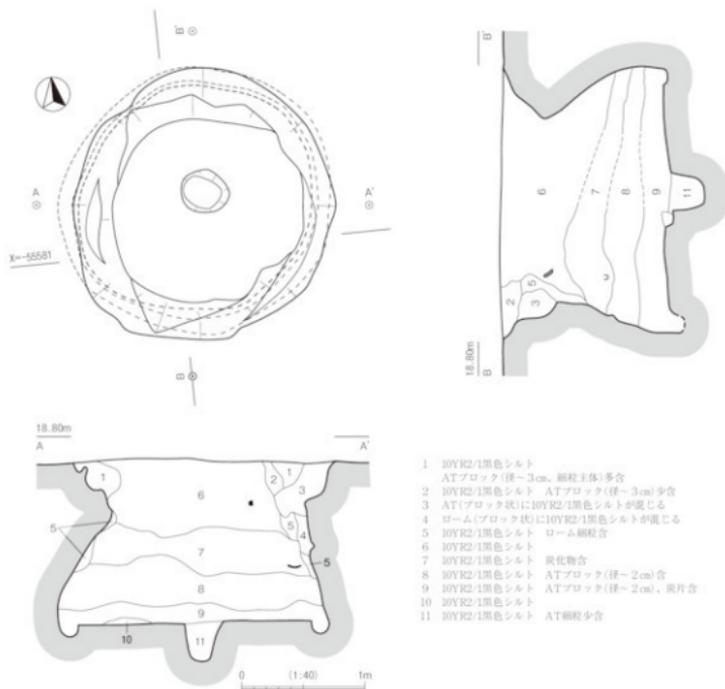


図48 A区 袋状土坑S69 平面・断面

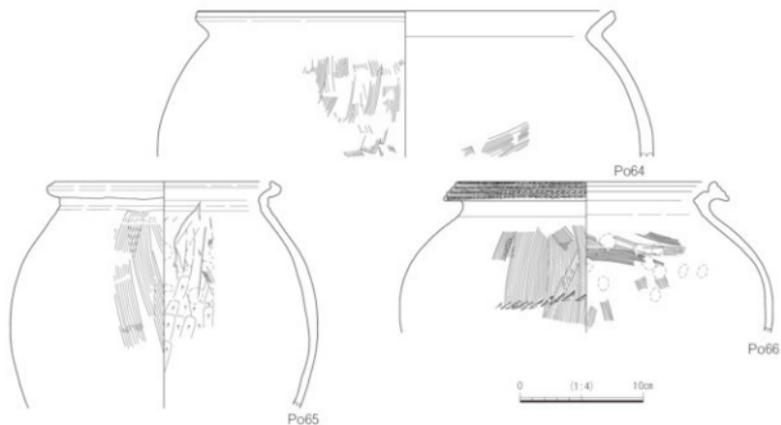


図49 A区 袋状土坑S69 出土遺物(1)

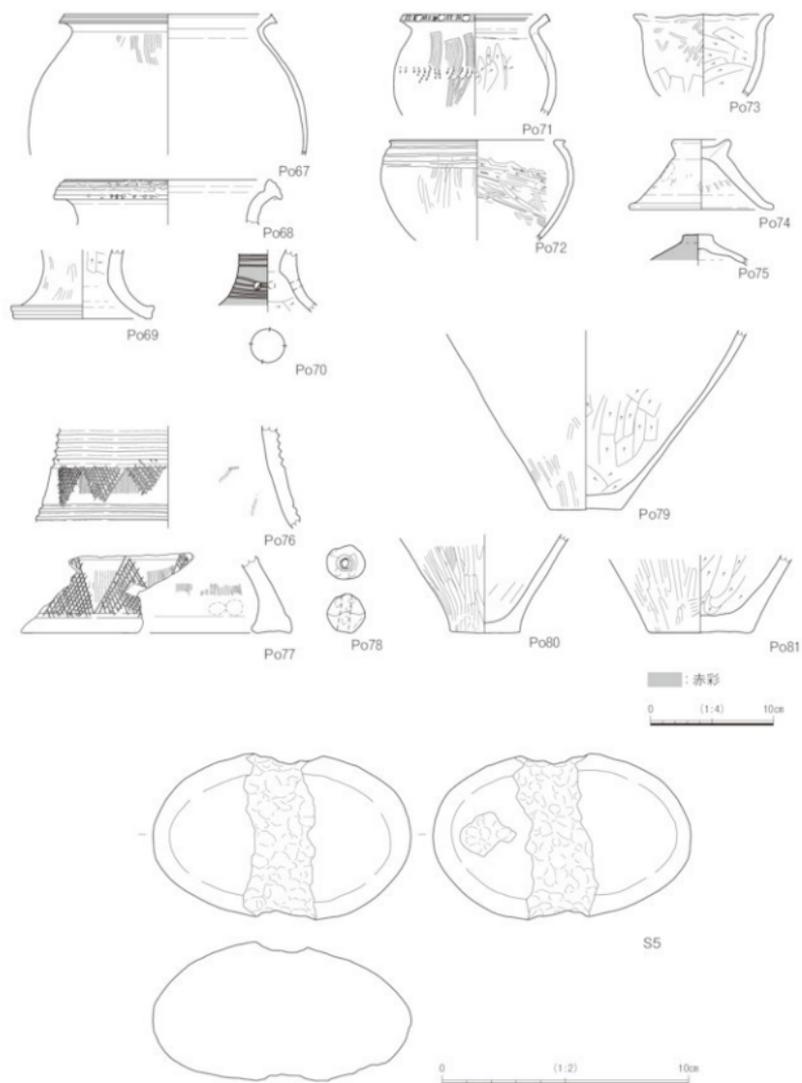


図50 A区 袋状土坑S69 出土遺物(2)

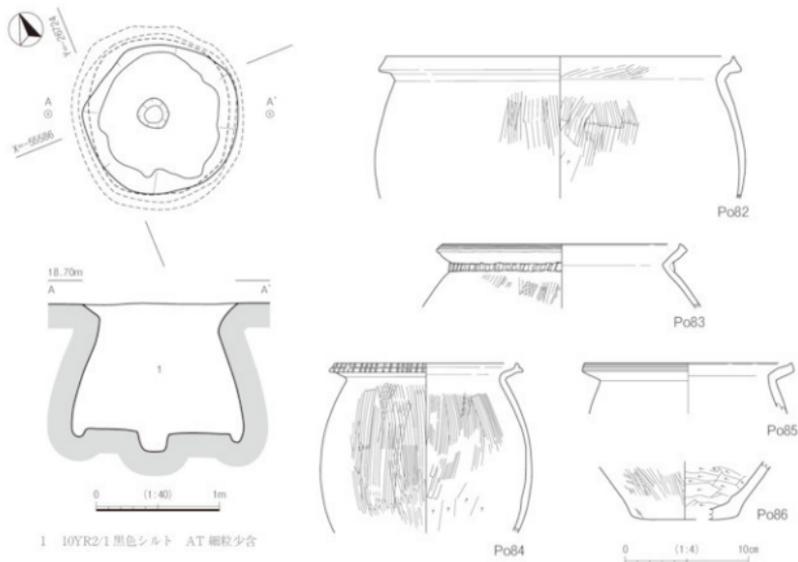


図51 A区 袋状土坑S70 平面・断面・出土遺物

S70(図51)

N13で検出した土坑である。検出面での平面形は長径1.22m、短径1.18mの円形を呈する。

断面形は、検出面から約0.2m程度は上に開く形をしており、それより下側で直線的に広がっていた。埋土に基盤層のブロックをほとんど含まないことから、崩落などによる形状の変化はなく、もともとこの形を保っているものと考えた。土坑の検出面からの深さは1.06mで、底面は長径1.50m、短径1.41mの楕円形を呈する。底面の壁際には幅0.1m前後、深さ0.08m程の浅い溝が廻り、中央辺りに長径0.24m、短径0.22m、深さ0.16mの円形の小穴が掘られていた。

埋土は基盤層の細かいブロックを含む黑色シルトの単層で、底面の溝や小穴は土坑が機能した段階では開口していたと考える。

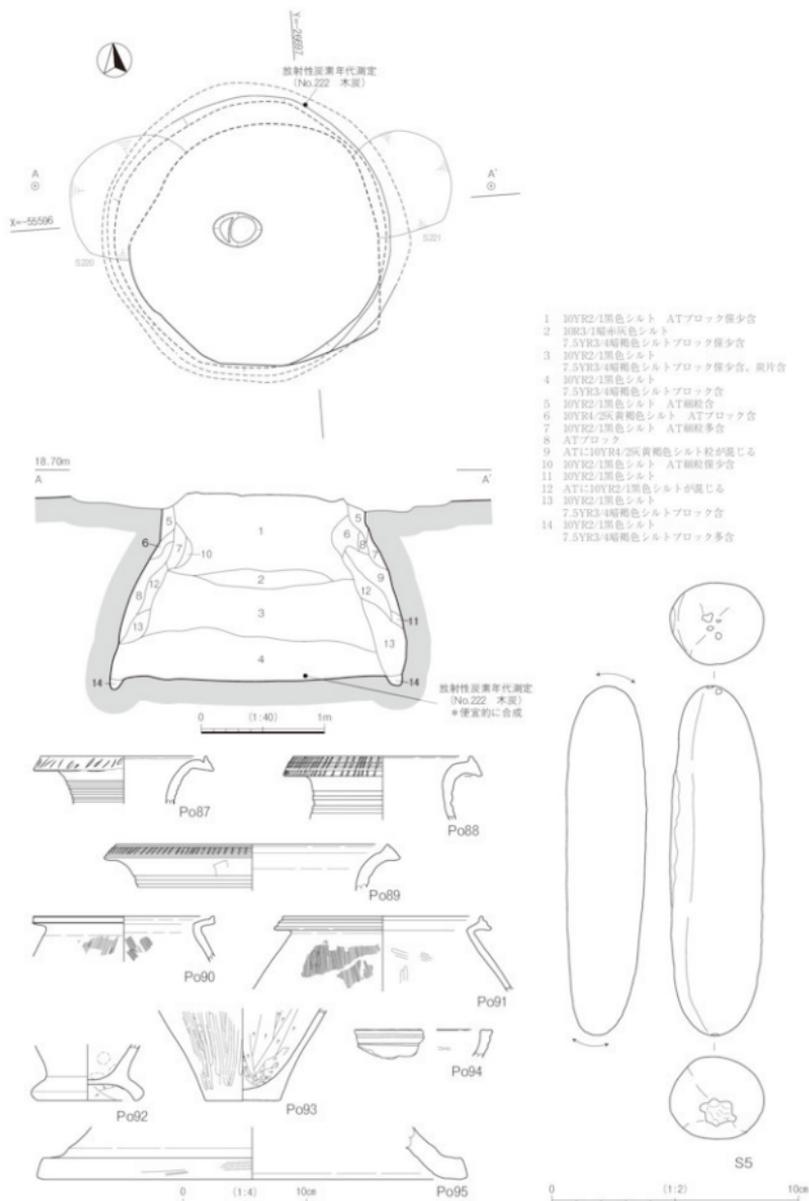
埋土からは弥生時代中期中葉から後葉の土器が出土した。(田中)

S219(図52)

O10で検出した土坑で、検出面での平面形は径2.28mの円形を呈し、検出面からの深さは1.51mある。

埋土の堆積状況を観察すると、壁面付近の上側3分の2程度に壁面が崩落したものと考えられる基盤層のブロックを主体とした堆積が認められる。そのため、上部は崩落によって広がっていることが考えられ、開口部は土坑が機能した段階よりも大きくなっている可能性がある。一方、底面付近については、崩落した基盤層は見られず、機能していた頃と大きく変化していないと考えられた。以上の状況から、土坑の断面形は検出面の直下付近から直線的に広がり、底面付近の壁が垂直に近い角度で立ち上がる形状が想定される。

底面は長径2.42m、短径2.38mの円形を呈し、壁際には幅0.2m前後、深さ0.1m前後の溝が廻る。ま



- 1 10YR2-1黒色シルト ATブロック稀少
- 2 10R3-1暗赤褐色シルト
- 7.5YR3-4暗褐色シルトブロック稀少
- 3 10YR2-1黒色シルト
- 7.5YR3-4暗褐色シルトブロック稀少、炭片含
- 4 10YR2-1黒色シルト
- 7.5YR3-4暗褐色シルトブロック含
- 5 10YR2-1黒色シルト AT細粒含
- 6 10YR4-2K黄褐色シルト ATブロック含
- 7 10YR2-1黒色シルト AT細粒多含
- 8 ATブロック
- 9 AT:10YR4-2K黄褐色シルト粒が混じる
- 10 10YR2-1黒色シルト AT細粒稀少
- 11 10YR2-1黒色シルト
- 12 AT:10YR2-1黒色シルトが混じる
- 13 10YR2-1黒色シルト
- 7.5YR3-4暗褐色シルトブロック含
- 14 10YR2-1黒色シルト
- 7.5YR3-4暗褐色シルトブロック多含

図52 A区 袋状土坑S219 平面・断面・出土遺物

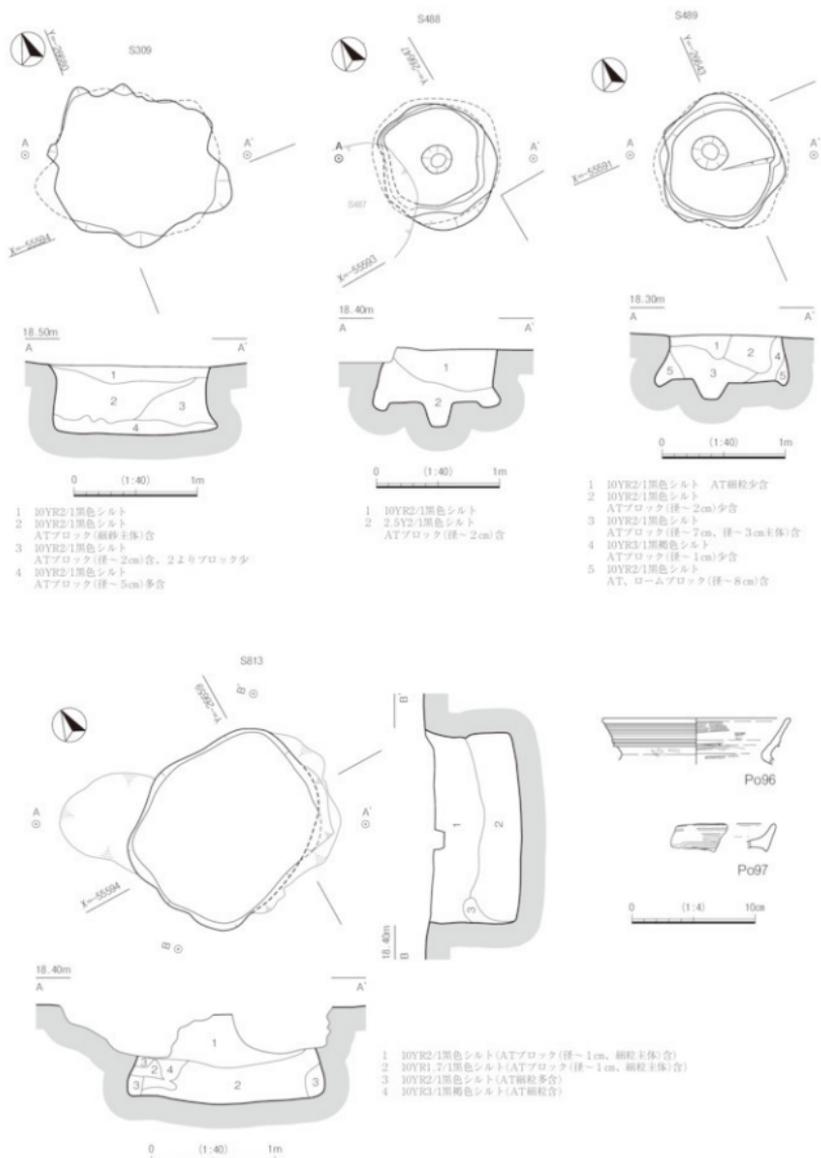


図53 A区 袋状土坑S309・488・489・813 平面・断面・出土遺物

た底面の中央には長径0.38m、短径0.18m、深さ0.10mの小穴が掘られていた。

埋土からは弥生時代中期後葉の土器や石器が出土した。Po88・89は口縁端部に凹線を施文後に刺突文を施す。Po95は器壁が厚く大型の器台などの脚部と判断した。これらの遺物は遺構底面から浮いた状態で出土して必ずしも遺構の機能した時期を示していないが、弥生時代中期に機能していた可能性が高いと考えた。

なお、底面で出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施しており、暦年較正年代で紀元前231～91年(2 σ)の結果を得ている。(田中)

S309(図53)

O8とO9にまたがる形で検出した土坑である。検出面での平面形はやや不整な部分があるものの、長軸1.20m、短軸1.10mの隅円方形を呈し、検出面からの深さは0.56mある。

断面形は壁面がほぼ垂直で、底面付近で僅かに外側に広がっていた。底面には溝や小穴は検出されなかった。

埋土は底面付近に基盤層のブロックを多く含む堆積があり、その上は基盤層ブロックの比較的少ない堆積となる。

埋土からは時期を判断しうる遺物が出土しておらず、機能した時期は不明である。(田中)

S488(図53)

O5で検出した土坑である。検出面での平面形は長径1.04m、短径0.91mのやや不整な楕円形を呈し、検出面からの深さは0.44mある。

断面形は検出面直下に垂直またはやや外側に開く部分が僅かにあり、その下は直線的に広がる形状を呈する。底面は径1.28mの円形を呈し、壁際には幅0.16m前後、深さ0.06m程の溝が巡る。また、底面のほぼ中央には径0.20m、深さ0.19mの小穴が掘られていた。

埋土の堆積状況から、土坑は基盤層ブロックを含む黒色シルトが西側から流れ込む等して埋没した後に基盤層ブロックをほとんど含まない層が堆積したことが確認できた。底面の溝と小穴は前者の堆積によって埋没することから、土坑が機能した段階ではどちらも開口していたものと考えている。

埋土からは時期を判断しうる遺物が出土しておらず、機能した時期は不明である。(田中)

S489(図53)

O5で検出した土坑である。検出面での平面形は長径1.10m、短径0.91mのやや不整な楕円形を呈し、検出面からの深さは0.40mある。

断面形は検出面付近で上側に開く部分が若干あり、その下は直線的に広がる形状を呈する。底面は長径1.11m、短径1.07mの楕円形を呈し、壁際には0.10～0.15m、深さ0.05m程の溝が巡る。また底面の中央やや北寄りに径0.28m、深さ0.15mの小穴が掘られていた。

埋土は、底面付近に基盤層ブロックを含む層が西側にやや厚く堆積し、その上に基盤層ブロックをあまり含まない層が堆積していた。

埋土からは時期を判断しうる遺物が出土しておらず、機能した時期は不明である。(田中)

S813(図53)

O6で検出した土坑で、掘立柱建物14と掘立柱建物15の柱穴に切られていた。検出面での平面形はややびつな箇所があるが長軸1.48m、短軸1.31mの隅円方形を呈し、検出面からの深さは0.72mある。

壁面はほぼ垂直で、下半分が僅かに広がっている箇所が認められた。底面には溝や小穴は検出され

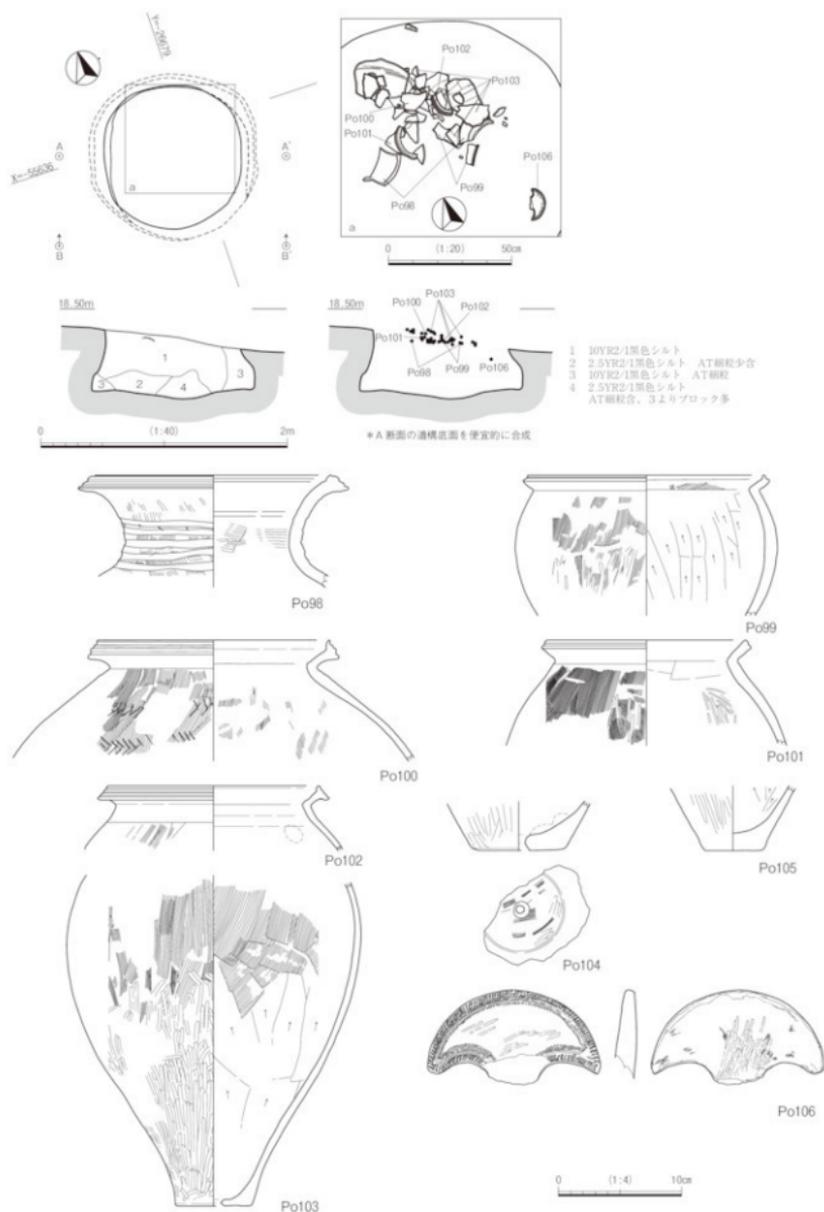


図54 A区 袋状土坑AES441 平面・断面・出土遺物

なかった。

埋土は底面の壁際付近に基盤層ブロックを多めに含む堆積が見られ、埋没の過程で壁面が僅かに崩落したと考えた。

埋土からは弥生時代後期後葉の土器が出土した。いずれも破片で流入土に伴うものである。遺物は機能した時期を示すものではないが、弥生時代後期に機能したと考えておきたい。(田中)

AES441 (図54, PL.99)

S8で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.33m、短径1.20mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.56mある。

断面形は検出面直下から直線的に外側に広がり、底面は中央が楕円状にやや窪む。底面の形状は長径1.39m、短径1.32mの楕円形を呈する。底面の壁際は溝状に僅かに低くなっていたが、南側では確認できず、人為的に溝をつくったかは不明である。それ以外の掘り込みは確認できなかった。

埋土は底面付近に基盤層の細粒を含む層がみられるが、ほとんどは流入土が堆積したと考えた。

遺物は検出面の直下で土器片がまとまって出土した。土器片はばらばらのもので、割れたものを廃棄したと考えた。土器片群から少し離れたところで分銅型土製品が出土した。土器片よりも低い位置で出土したが、土器群と同じ最上層の堆積内にあり、祭祀的な意図はないと思われる。一方、底面付近では遺物はほとんど出土しなかった。

土器片は弥生時代中期後葉のもので、遺構が機能したのは中期後葉またそれ以前と考える。(田中)

AES583 (図55, PL.99)

N7で検出した土坑である。検出時の平面形は長軸1.52m、短軸1.21mの隅円方形で、長辺は中央やや広く楕円に近い。検出面からの深さは0.60mある。

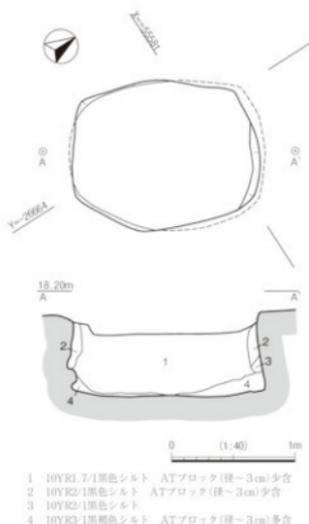


図55 A区 袋状土坑AES583 平面・断面

断面形は検出面直下から僅かに外側に広がっており、底面には溝や小穴は検出されなかった。

埋土は底面に基盤層ブロックを多く含む層が薄く堆積し、その上は基盤層のブロックを少量含む黒色シルトであった。堆積状況からは人為的に埋め戻された形跡は認められなかった。

埋土からは時期を判断しうる遺物が出土しておらず、機能した時期は不明である。(田中)

AES660 (図56)

T10で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.20m、短径1.20mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.47mある。

断面形は検出面直下から直線的に外側へ広がり、底面付近はやや丸みを帯びる。底面の平面形は長径1.54m、短径1.42mの楕円形を呈する。底面の壁際には幅0.05m程度の浅い溝が巡り、中央やや西寄りには長径0.32m、短径0.27m、深さ0.13mの小穴が掘られていた。

埋土は壁際に基盤層のブロックを含む堆積が見られる

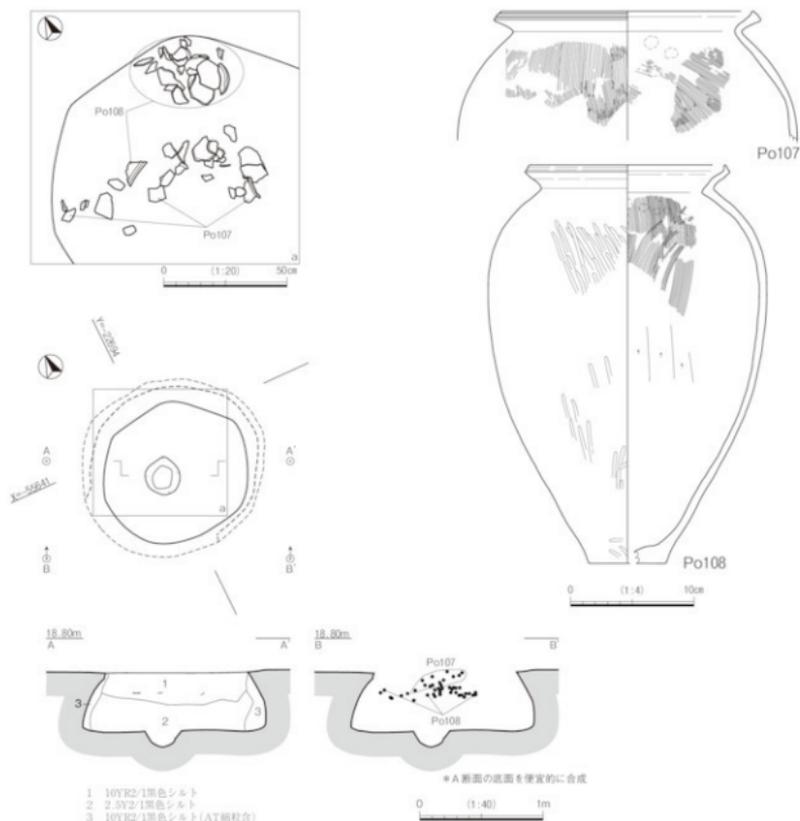


図56 A区 袋状土坑AES660 平面・断面・出土遺物

が、ほとんどは基盤層ブロックを含まない黒色シルトで、人為的に埋め戻された形跡は認められない。底面の溝と小穴は埋没段階の堆積と同じもので埋まっており、これらは機能段階には開口していたと考えている。

遺物は検出面から少し掘り下げた黒色シルト内から土器片がややまとまって出土した。埋没段階に廃棄されたものとする。土器は主に弥生時代中期後葉のもので、遺構が機能したのは中期後葉またはそれ以前と考える。(田中)

AES740(図57)

Q9で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.41m、短径1.27mの東西に長い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.61mある。

断面形は検出面のほぼ直下から直線的に外側へ広がっており、底面付近の壁面がほぼ垂直に立ち上がる箇所が一部ある。底面の形状はややいびつな箇所はあるが、長径1.70m、短径1.54mのおおむね

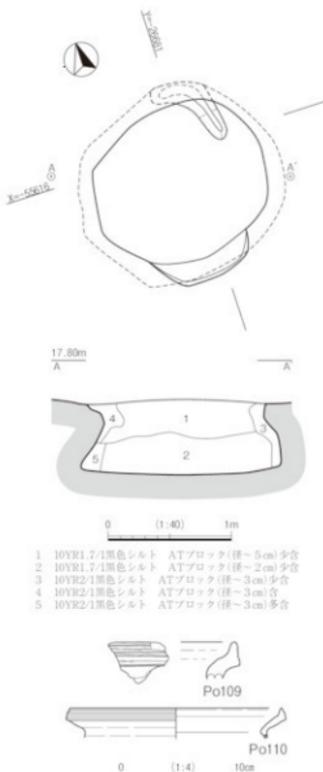


図57 A区 袋状土坑AES740
平面・断面・出土遺物

楕円形を呈する。底面には溝状の窪みを確認したが、人為的に掘られたものかどうかは不明である。これ以外に溝や小穴は確認されなかった。

堆積状況を見ると、壁際に基盤層の細粒ブロックを含む層が見られるものの、大半は基盤層ブロックをあまり含まない黒色シルトで埋没していた。

埋土からは弥生土器が少量出土しており、Po109は口縁端部が内傾し平行沈線が施されている。この土器から、遺構が機能した時期は弥生時代後期中葉以前と考える。

(田中)

AES902(図58、PL.99)

M7の北東隅に位置する。平面形は検出面で楕円形に近く、底面で不整形円形を呈する。検出面では長径が1.28m、短径が1.05m、底面では長径が1.29m、短径が1.03mある。断面形は大部分がフラスコ形だが、北東部分の壁は底面に向かって真つすぐ下りる。最深部での深さは0.50mある。底面ピットや周溝は確認できなかった。

埋土は2層に分かれ、いずれも旧地表土由来の黒色シルトを主体とし、皿状に堆積することから流入土と考える。埋土2層中からは、埋土とともに流入した完形に近い弥生土器の小甕をはじめ弥生土器片が出土した。

遺構の時期は、出土した弥生土器が清水編年のIV-3期に比定できることから、弥生時代中期後葉と考える。

(岡田)

AES970(図59)

M8の北西隅付近に位置する。平面形は検出面、底面ともに円形を呈し、検出面での直径は0.98m、底面での直径は0.87mある。断面形は、ほぼ長方形を呈し、深さは0.51mある。底面には幅約0.1mの周溝が巡っている。底面ピットは確認できなかった。

埋土は基盤層ブロックを多く含む黒色シルトの単層である。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES1296(図59)

N8で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.10m、短径1.02mの南北にやや長い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.43mある。

断面形はほぼ垂直で東西方向で僅かに外側に広がっていた。底面に溝や小穴は確認されなかった。

埋土は底面に土坑の機能段階から廃棄した後に堆積した黒色シルトがあり、その上は人為的に埋められたと考えられる基盤層ブロックを主体とした層が検出面まで続く。

埋土からは時期を判断しうる遺物が出土しておらず、機能した時期は不明である。(田中)

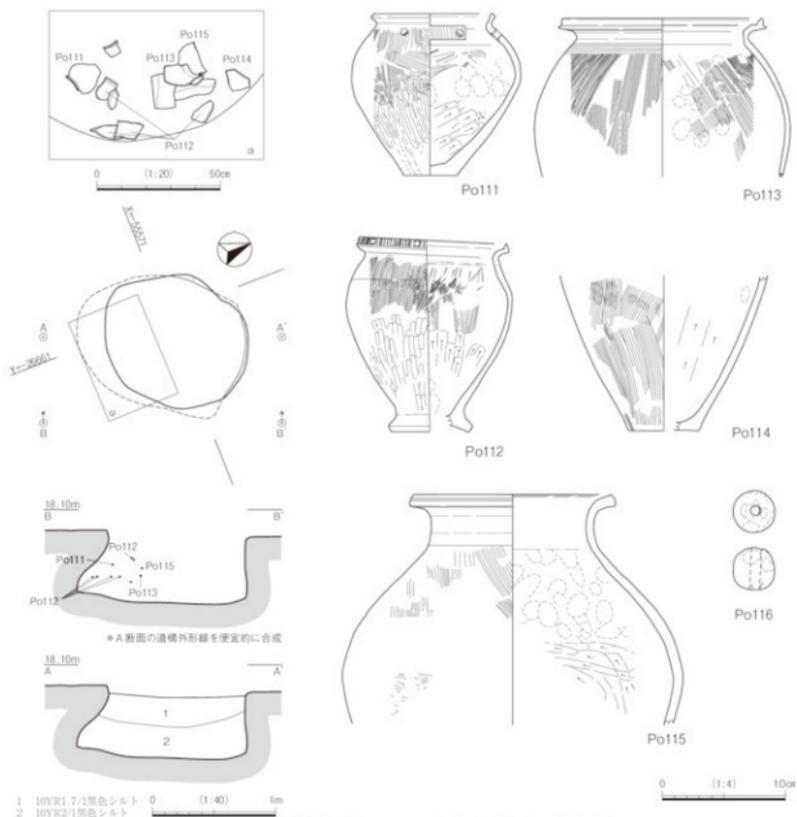


図58 A区 袋状土坑AES902 平面・断面・出土遺物

AES1312(図59)

P9で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.20m、短径1.14mの南北にやや長い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.38mある。

壁面はほぼ垂直で、僅かに外へ広がる箇所がある。底面の壁際には幅0.06m、深さ0.03m程の浅い溝が巡り、中央には長径0.26m、短径0.20m、深さ0.13mの小穴が掘られていた。溝や小穴は底面の堆積したものと同一層で埋没しており、土坑が機能した段階には開口していたと考えられる。

埋土は底面に基盤層ブロックをほとんど含まない黑色シルトが堆積しているのに対し、上層にはATがブロック状になったものが見られた。そのため、土坑が廃棄された後しばらくしてから人為的に埋めたと考えられる。

時期が判断できる遺物が出土しておらず、機能または廃棄された時期は不明である。(田中)

AES1352(図60)

N9の中央よりやや北寄りに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での直径は1.17m、底面

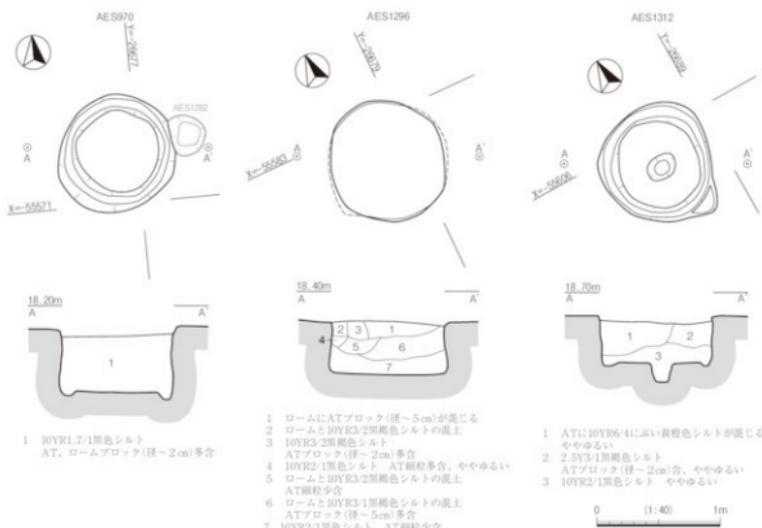


図59 A区 袋状土坑AES970・1296・1312 平面・断面

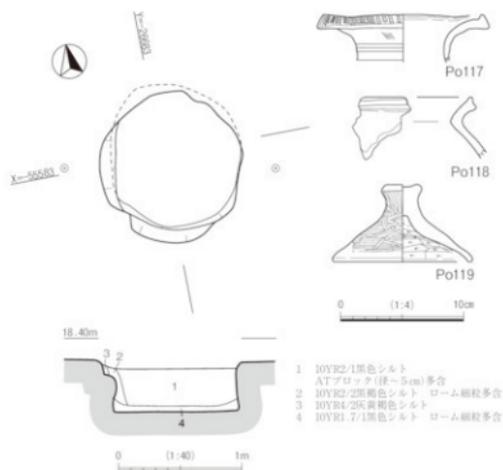


図60 A区 袋状土坑AES1352 平面・断面・出土遺物

AES1571(図61~65, PL.18・19・99・100)

M9の中央やや北東寄りに位置する。開口部は検出面より狭く、やや低い位置にある。平面形は検出面ではほぼ円形、開口部で不整形を呈し、検出面での長径が2.13m、短径が1.93mで、開口部での長径が1.48m、短径が1.35mある。底面はほぼ円形を呈し、長径が2.35m、短径が2.15mある。断面

での直径は1.24mある。断面形は底面がわずかに広い台形状を呈し、深さは0.35mある。底面ビットや周溝は確認できなかった。

埋土は4層からなり、1・4層が皿状の堆積で、旧地表土由来の黒色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを多く含む。西壁付近では壁崩落による基盤層ブロック塊があることから、本来の西壁は現状より東側に内傾していたと推定する。

埋土からは弥生土器が出土しており、いずれも埋没時に流入したものである。出土した遺物から弥生時代中期中葉の土坑と考える。(岡田)

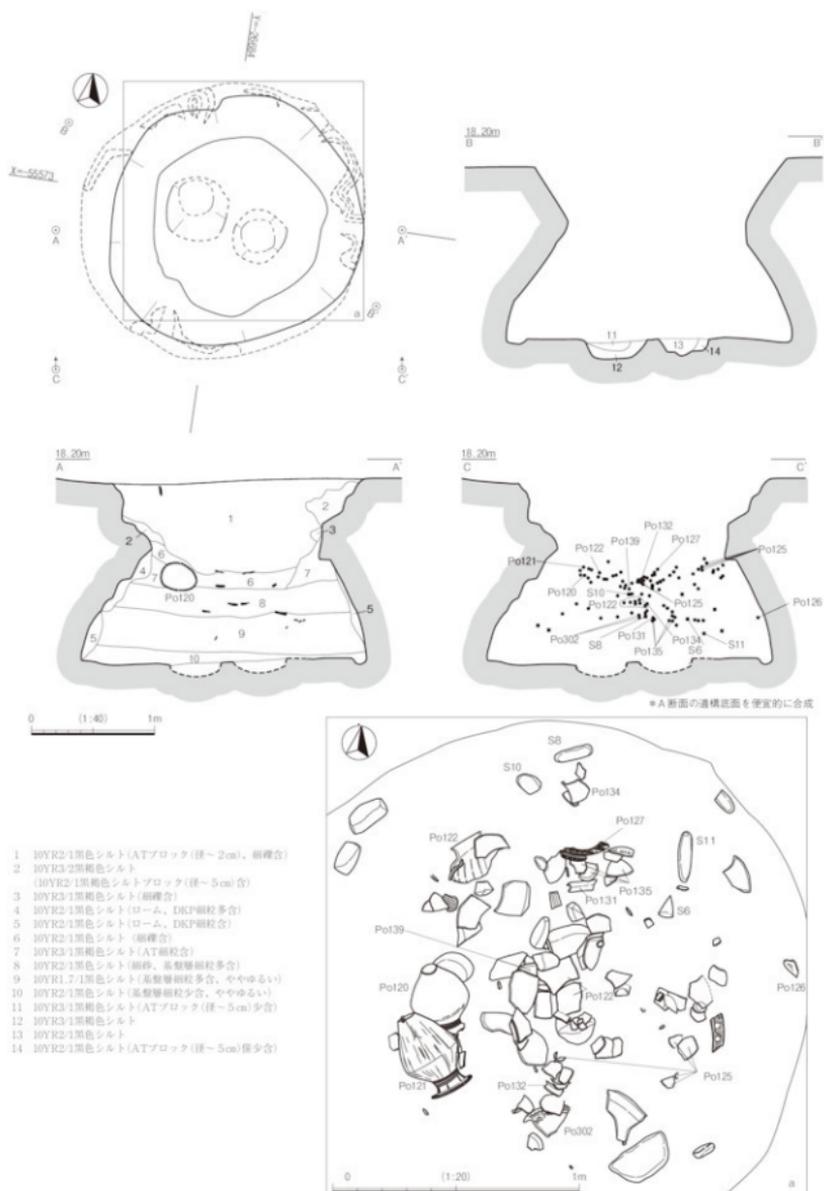


図61 A区 袋状土坑AES1571 平面・断面・遺物出土状況

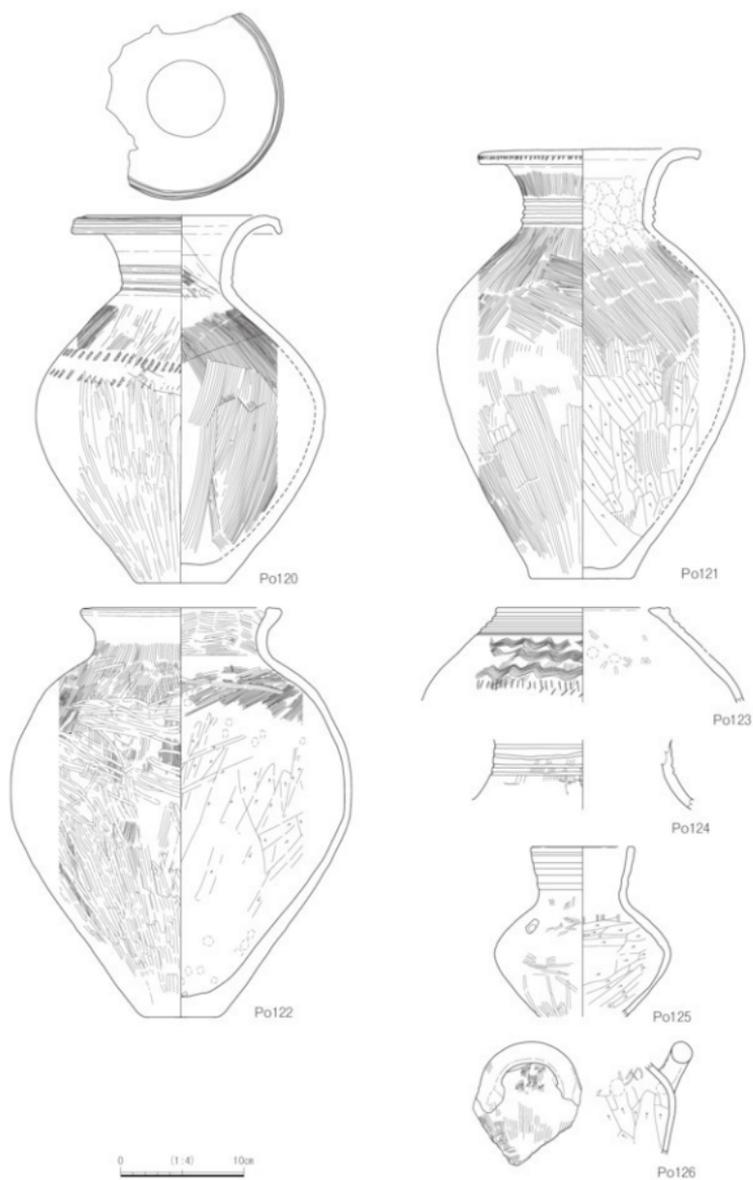


図62 A区 袋状土坑AES1571 出土土器(1)

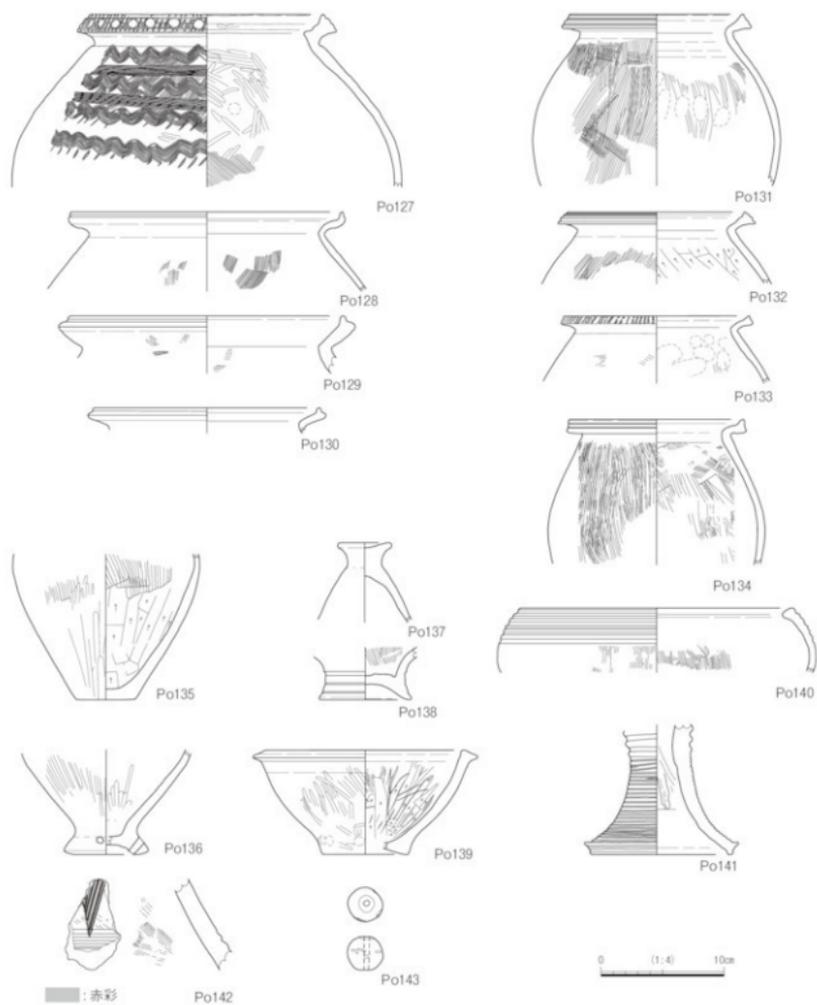


図63 A区 袋状土坑AES1571 出土土器(2)



图64 A区 袋状土坑AES1571 出土石器(1)

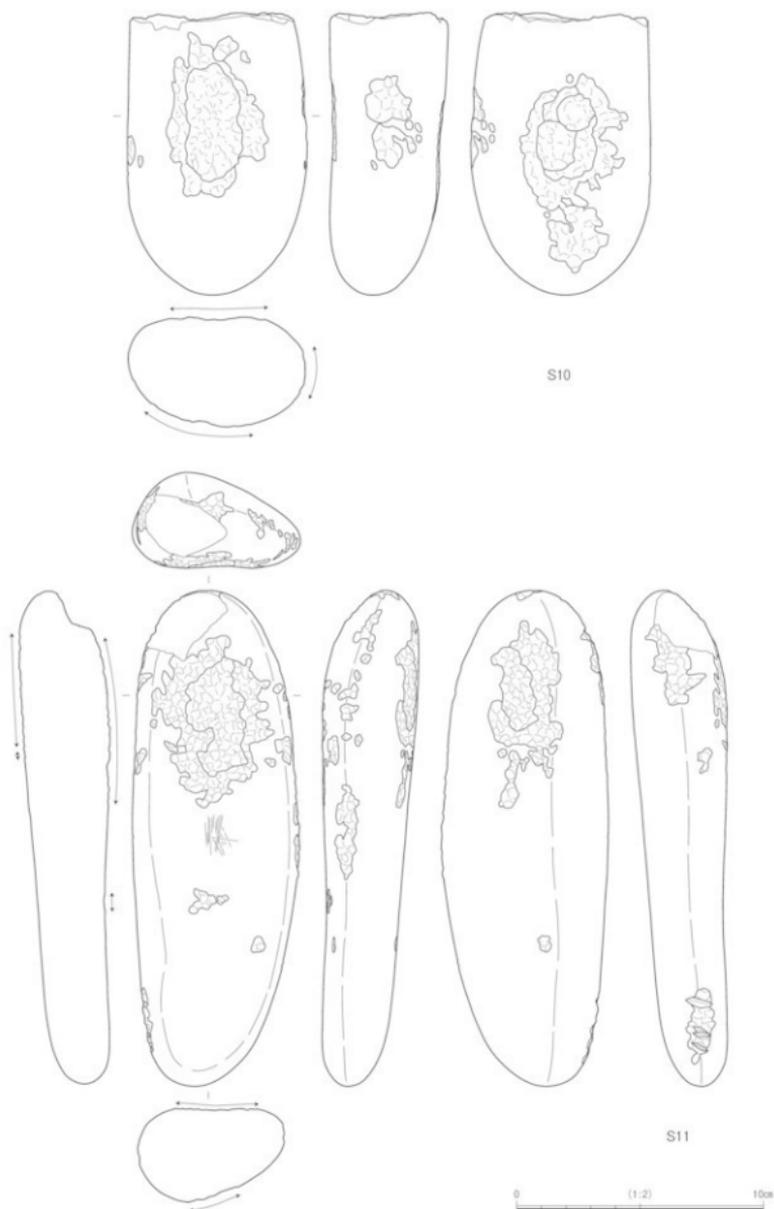


图65 A区 袋状土坑AES1571 出土石器(2)

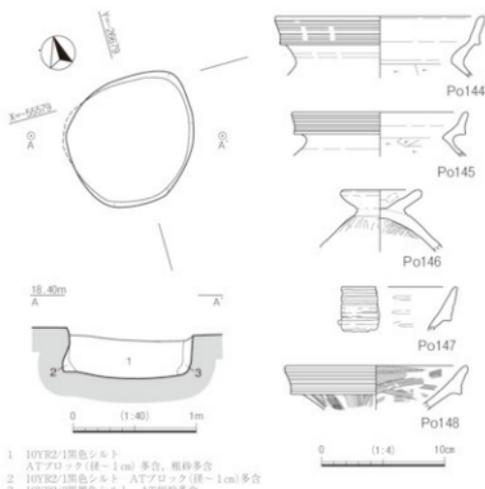


図66 A区 袋状土坑AES1577 平面・断面・出土遺物

棄または埋置されたと考える。1～3層は6・7層の堆積後、ほぼ連続的に堆積したと考える。

遺物は、埋土各層から弥生土器や石器が多く出土した。

土器は壺、甕、鉢、高坏、器台で、ほとんどは破片で出土している。Po120は口縁の一部を除いて残っており、端部は下垂する。Po121は完形であるが底部がひび割れている。Po122は他の壺よりも体部の最大径部の位置が高く、やや肩が張った形をしている。Po123の体部には櫛描波状文が施される。Po127は口縁端部に凹線を施文後に刺突文と円形浮文が施され、体部には櫛描波状文と直線文が交互に施される。Po142は器台の脚部と思われ、篋描の鋸歯文部分に赤色塗彩された痕跡が残る。

石器は磨製石斧と磨製石剣、敲石がある。S7は磨製石剣の基部の破片で、関部に2条の溝が切られ、穿孔が1箇所みられる。また茎部の研磨が粗く、研磨した時の面が所々に残っている。

遺構の時期は、出土した土器が清水編年のIV様式に比定できることから、弥生時代中期と考える。

(岡田、田中)

AES1577(図66)

M8で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.20m、短径0.99mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.38mある。

壁面はほぼ垂直で、一部でやや外側へ広がっていた。底面には不整形の窪みが見つかったが、意図的に掘られたものではないと判断した。底面の壁際には溝は認められなかった。

埋土は壁際に基盤層のブロックを含む堆積がみられ、それ以外は基盤層のブロックをほとんど含まない黒色シルトであった。堆積状況からは人為的に埋められた形跡は認められなかった。

埋土からは弥生時代後期後葉の土器が出土した。土器は流入土から出土しており、遺構の時期を直接示すものではないものの弥生時代後期の遺構と考えておきたい。(田中)

形はフラスコ形を呈し、開口部から底面までの深さは1.00mある。底面には円形のビット状凹みが東西2カ所に確認でき、東側の直径0.5m程度、西側の直径が0.4m程度、深さはいずれも0.1m程度となる。周溝は一部で確認でき、幅0.1m程度、深さ0.05～0.06mある。

埋土は10層からなり、いずれも旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。8～10層は皿状の堆積であるが、6・7層との境で不連続があり、8層上面の6・7層中からは完形の壺をはじめ多くの土器が出土した。これらの土器は、埋土とともに流入したのではなく、8層堆積後に意図的に廃

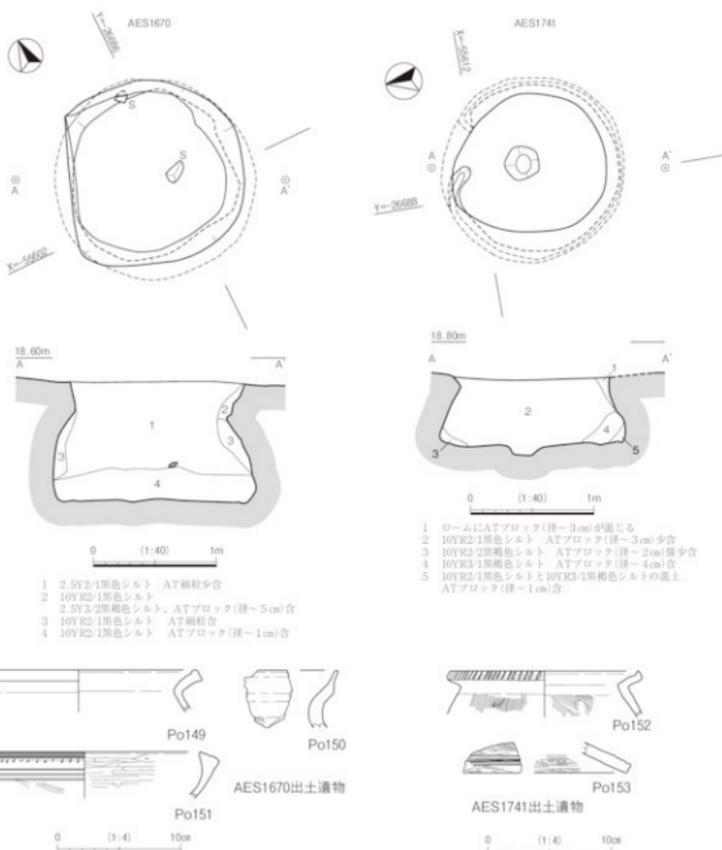


図67 A区 袋状土坑AES1670・1741 平面・断面・出土遺物

AES1670 [図67]

P9で検出した土坑である。検出時の平面形は一部に直線的な箇所があるものの、長径1.83m、短径1.55mの概ね楕円形を呈し、検出面からの深さは0.94mある。

断面形は、検出面から0.2~0.3mはややすぼみ、それよりも下側でやや丸みをもって外側に広がっていた。底面の平面形は径1.60mの円形を呈する。壁際には幅0.10~0.21mの浅い溝が巡り、中央部の小穴は認められなかった。

埋土は壁際に基盤層のブロックを含む堆積がみられ、それ以外は基盤層のブロックをあまり含まない黒色シルトであった。堆積状況からは人為的に埋められた形跡は認められなかった。

埋土からは弥生土器が少量出土した。弥生時代中期の土器とともに弥生時代後期後葉のPo150も含まれていた。そのため、土坑の機能した段階は不明であるものの、埋没したのは弥生時代後期後葉以

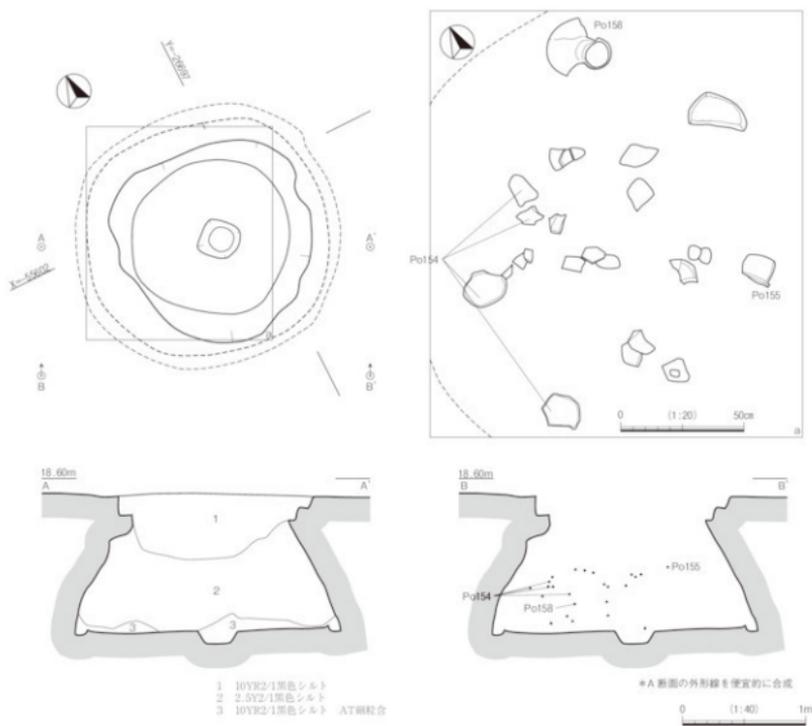


図68 A区 袋状土坑AES1798 平面・断面・遺物出土状況

降と判断した。(田中)

AES1741(図67)

Q9で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.26m、短径1.16mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.57mある。

断面形は、検出面直下から外側へ直線的に広がっており、底面付近でやや丸みを帯びる箇所がみられた。底面の平面形は径1.50mの円形を呈し、壁際には幅0.1m程の浅い溝が巡っていた。また底面中央やや北寄りで長径0.30m、短径0.26m、深さ0.08mの小穴が掘られていた。小穴は土坑底面の堆積と同じもので埋没しており、土坑が機能した段階には開口していたとみられ、柱などを据えた痕跡は認められなかった。

埋土は底面の壁面付近で基盤層のブロックを含む堆積が見られ、それ以外は基盤層ブロックをほとんど含まない黒色シルトであった。埋土内からは弥生時代中期中葉の土器片が出土した。いずれも流入土から出土したもので遺構の時期を示すものではなく、弥生時代中期に機能した可能性を指摘するととどまる。(田中)

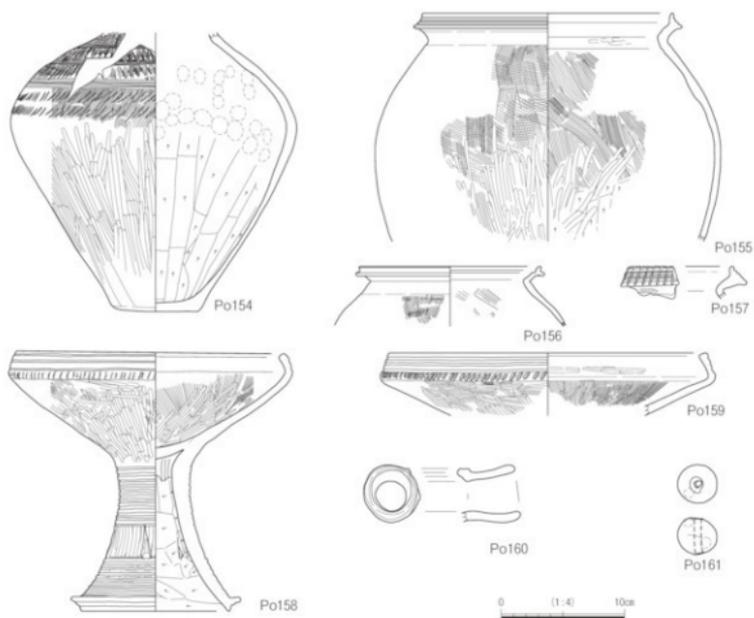


図69 A区 袋状土坑AES1798 出土遺物(1)



図70 A区 袋状土坑AES1798 出土遺物(2)

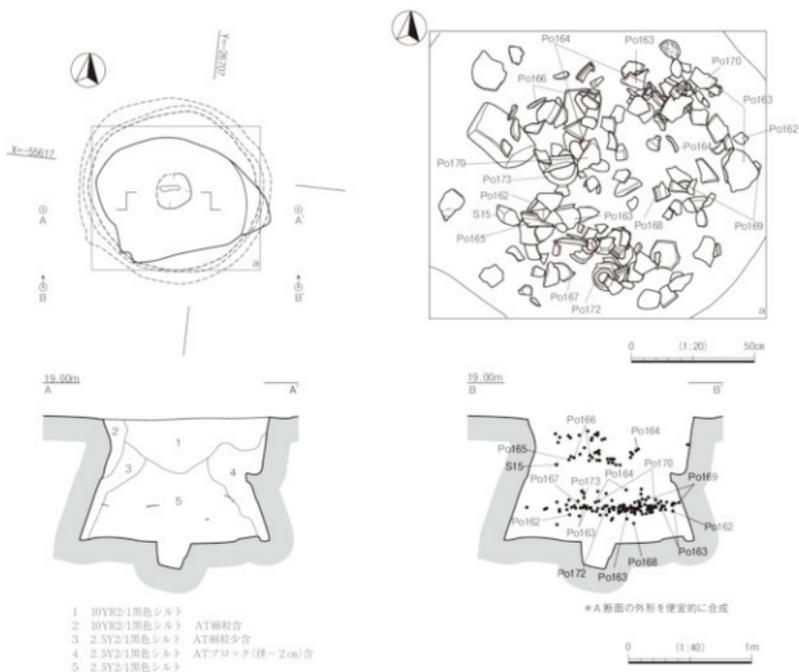


図71 A区 袋状土坑AES1981 平面・断面・遺物出土状況

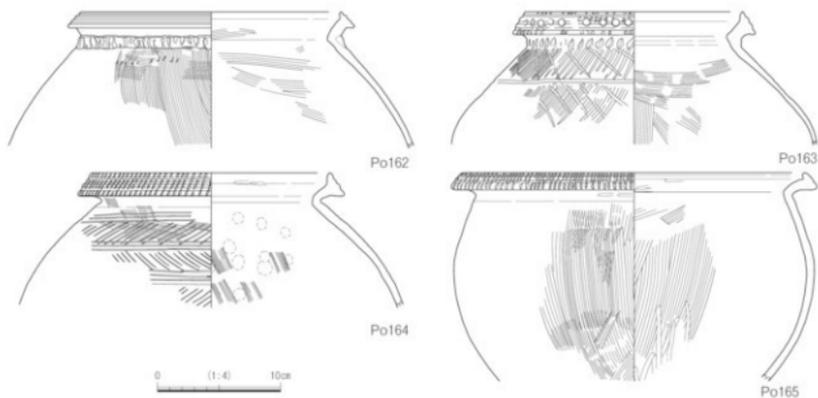


図72 A区 袋状土坑AES1981 出土遺物(1)

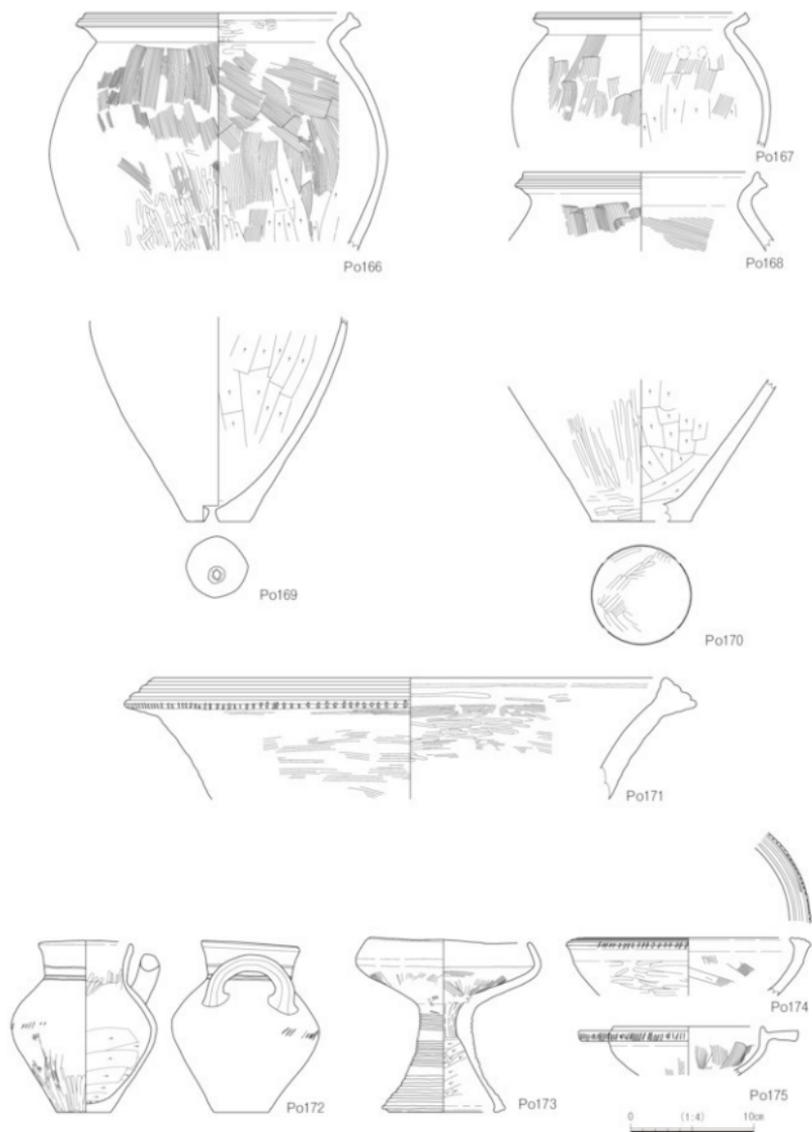


図73 A区 袋状土坑AES1981 出土遺物(2)

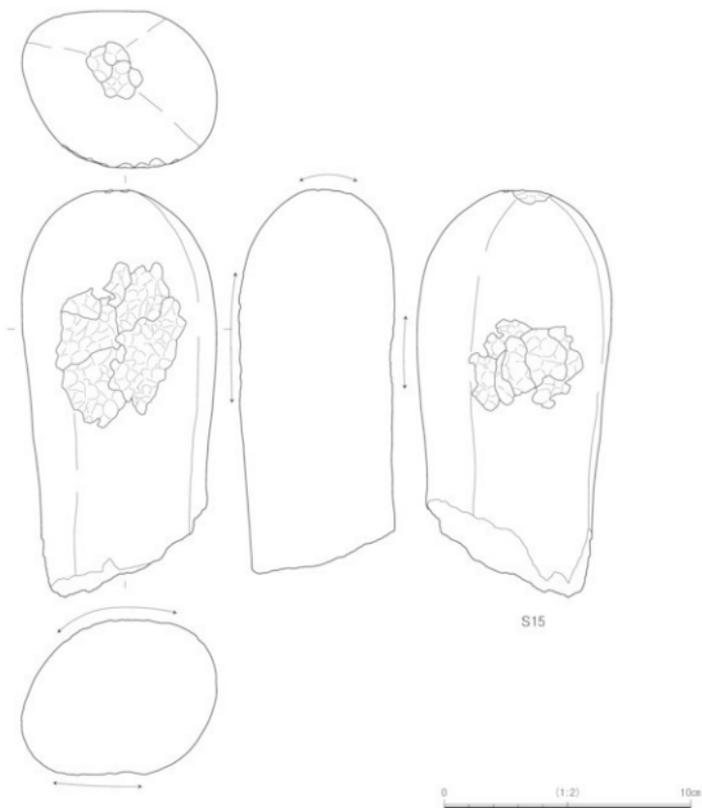


図74 A区 袋状土坑AES1981 出土遺物(3)

AES1798(図68～70、PL.19・100)

P10で検出した土坑である。検出時の平面形はややいびつな筒形もあるが長径1.64m、短径1.46mの概ね楕円形を呈し、検出面からの深さは1.14mある。

断面形は、検出面から0.2m程度は垂直またはややすぼまっており、その下は直線的に外側へ広がっていた。底面の平面形は径2.13mの円形を呈し、壁際には幅0.1m前後、深さ0.06mの溝が巡る。また底面中央部には長径0.37m、短径0.32m、深さ0.10mの小穴が掘られていた。溝や小穴は底面の堆積と同じもので埋没しており、土坑が機能していた段階には開口していたものと考えた。また、小穴に何かを据えた痕跡は認められなかった。

埋土は底面付近に基盤層のブロックを少量含む薄い堆積があり、その上はすべて基盤層ブロックをほとんど含まない黒色シルトであった。

遺物は土坑の下半分を中心に土器片が出土した。高坏の脚部など比較的大きな破片も含まれるが、土器片はばらばらで廃棄されたものと考えた。土器は弥生時代中期後葉のものである。(田中)

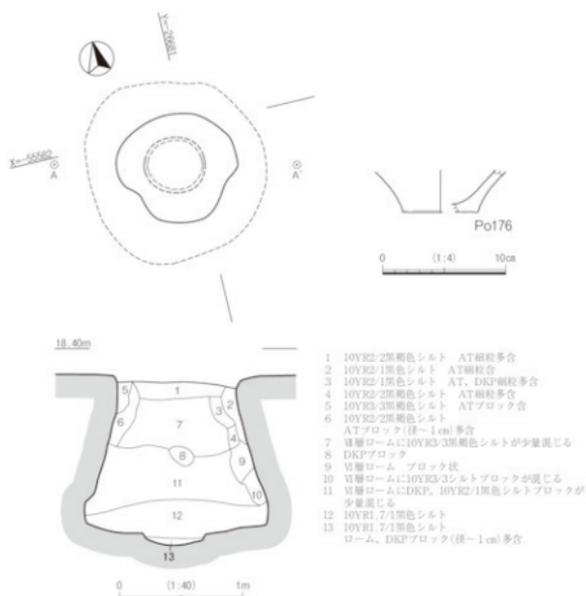


図75 A区 袋状土坑AES2427 平面・断面・出土遺物

AES1981(図71~74、PL20・101)

検出時の平面形は東西に長い楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.02mある。

土坑の東側には深さ0.45mの段差があるが、腐絶・埋没段階で壁面が崩落したことによるものとみられる。これ以外の部分の断面形は、検出面のほぼ直下から外側に広がっており、検出面からの深さは1.02mある。底面は長径1.56m、短径1.48mの楕円形を呈する。底面には壁面に接して幅0.10~0.15m、深さ0.05m前後の周壁溝が巡り、ほぼ中央には長径0.28m、短径0.26m、深さ0.21mの小穴が掘られていた。小穴の平面、断面で木材が据えられた痕跡は認められなかった。

土坑内は、最初に基盤層ブロックを含まない5層が堆積しつつ、壁面から崩落した基盤層ブロックを含む2~4層が堆積していったと考えている。

1層と5層には土器片や人頭大までの礫を含んでおり、底面から0.2m上辺りで特に多く出土した。土器片はばらばらで完形に復元できるものはなく、割れたものを廃棄したものと考えた。また、土器片は上下2群に大別できるものの、上下の土器片で接合するものがあり、埋没や廃棄に大きな時間差を認めることは出来ない。一方、5層の南壁付近で完形の水差(Po172)が出土しており、土器廃棄の段階で意図的に置かれたものと考えた。

埋土内からは弥生土器と石器が出土した。弥生土器は口縁部に凹線が施されており、凹線施文後に刺突文や円形浮文を施したものがみられる。Po163の体部には右上がりの沈線をやや密に施した後に左上がりの沈線をやや疎らに施文した文様帯が2段みられる。Po164の体部には沈線で綾杉文が施されており、最上段はPo163と同様の文様となっている。高坏には坏部の体部が内湾するものと、水平

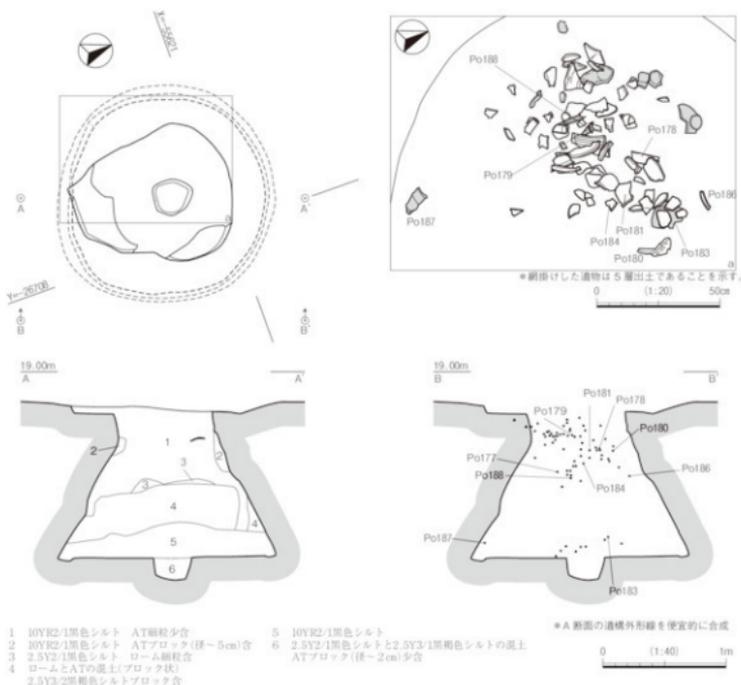


図76 A区 袋状土坑AES2507 平面・断面・遺物出土状況

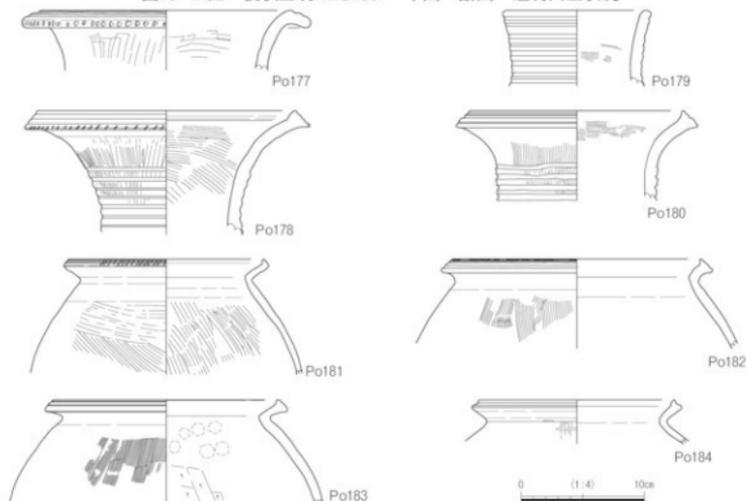


図77 A区 袋状土坑AES2507 出土遺物(1)

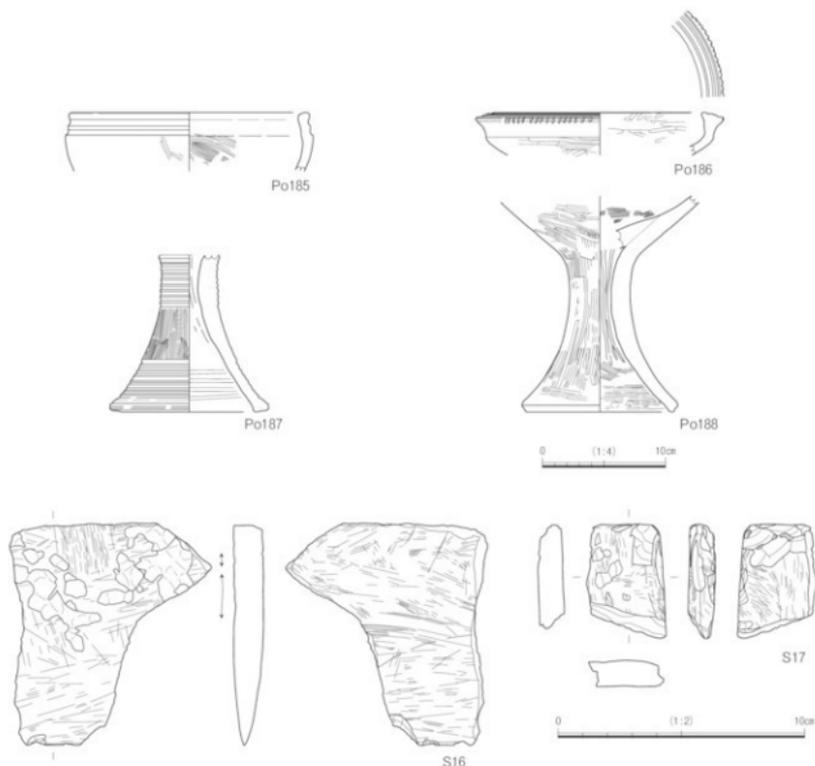


図78 A区 袋状土坑AES2507 出土遺物(2)

口縁を有するものがある。

出土した土器は弥生時代中期後葉のもので、少なくともこの段階には土坑本来の機能を失っていたと考えた。(田中)

袋状土坑AES2427(図75、PL.21)

N9の北東隅付近に位置する。平面形は検出面で直径は0.95mの不整円形、底面で直径は1.45mのほぼ円形を呈する。断面形はフラスコ形を呈し、底面までの深さは1.23mある。底面のほぼ中央には、円形ビット状の凹みがあり、直径が0.50m、深さが0.09mある。周溝は確認できなかった。

埋土は13層からなり、12、13層と7～11層が堆積した後、不連続面があり、2～6層と1層が堆積する。最下層の12層と底面ビット埋土の13層は旧地表土由来の黑色シルトで、11層は基盤層となるロームを主体した堆積、7層と壁際の2～6・9・10層は旧地表土とロームの混土で、7層はローム主体である。7、8、11層は人為的な埋め戻し土と考える。

埋土からは弥生土器の底部が出土した。詳細な時期を決定する遺物は出土していないが、弥生時代中期の遺構と考える。(岡田)

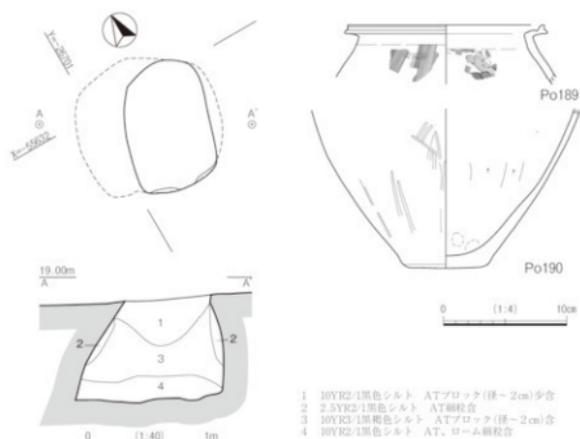


図79 A区 袋状土坑AES2566 平面・断面・出土遺物

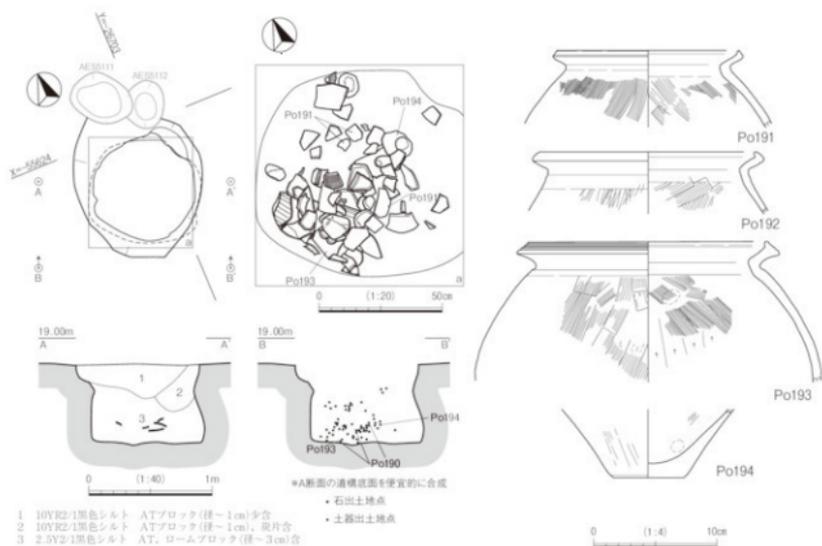


図80 A区 袋状土坑AES2807 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物



図81 A区 袋状土坑AES2807 出土石器

AES2507(図77, PL101)

検出時の平面形は南の肩が凹凸のある不整形を呈し、長径1.21m、短径1.10mある。

断面は検出面から0.2~0.3mまでは壁面はほぼ垂直で、これより下で外側に広がっていた。底面の平面形は長径1.78m、短径1.76mの円形を呈する。底面には壁面に接して幅0.12~0.07m、深さ0.03m前後の周壁溝が巡り、ほぼ中央には長径0.30m、短径0.28m、深さ0.17mの小穴が掘られていた。小穴の平面、断面で木材などが据えられた痕跡は認められなかった。

土坑内は底面付近に基盤層ブロックをほとんど含まない5、6層が堆積し、その上に基盤層がブロック状になった4層が堆積していた。4層には土壌がほとんど含まれておらず、周辺で土坑などを掘削したときに出た基盤層で埋めたと考えた。この上には黑色シルトが堆積しており、これらは土壌が流入したものである。

遺物は主に1層と5層に含まれており、とくに1層からややまとまった数の土器片が出土した。土坑の機能が失った後に廃棄されたと判断している。土器はすべて弥生土器で、1層と5層から出土した土器で接合するものはみられなかったが、土器に時期差はほとんどないと考えた。弥生土器は壺、直口壺、甕、高坏があり、その多くに凹線が施される。

土器の時期から弥生時代中期後葉に機能した後に破棄されたと考えた。(田中)

AES2566(図79)

検出時の平面形は南北に長い楕円形を呈し、長径1.05m、短径0.69m、検出面からの深さは0.83mある。

断面形は、検出面直下から外側に広がり、底面付近ではほぼ垂直になる。底面の平面形は長径1.26m、短径1.24mのほぼ円形を呈し、開口部に対して底面は西側に大きく広がっていた。底面はやや凹凸があるが、周壁溝や小穴は認められなかった。

土坑は基盤層ブロックを含む黑色または黒褐色シルトによって埋没していた。2層は壁面からの崩

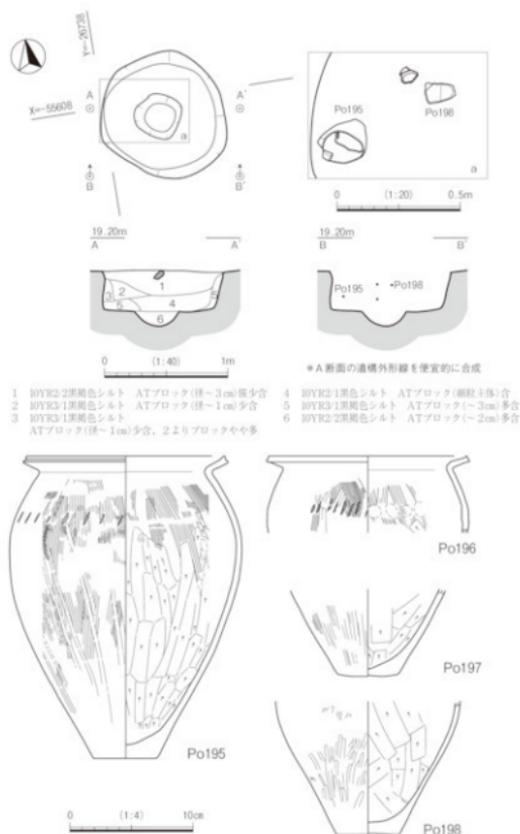


図82 A区 袋状土坑AES2968
平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

った。底面の平面形は長径0.94m、短径0.84mのややいびつな楕円形を呈し、底面には溝や小穴は認められなかった。

埋土は前述したように上下で差があり、下半分(3層)は大きめの基盤層ブロックを含んでいるのに対し、上半分(1、2層)は細かめの基盤層ブロックを少量含む堆積であった。遺物は下層中の底面から0.1~0.3m上で弥生土器の破片がまとまって出土した。土器は拳大程度の礫とともに出土しており、大きめの破片が多く複数の個体が混ざった状態であった。出土状況から土坑として機能しなくなった後に土器を廃棄したと考えた。出土した土器は弥生時代中期後葉のものである。

土器に混ざって出土した石器として1点図化した。S18は太型蛤刃石斧の破損品で安山岩製。刃部からの大きな剥離で片面のほぼ全体が失われる。その後で刃部側を機能部とする敲石として再利用している。基部の欠損は被熱による。(田中)

落によってブロックをやや多く含んでいた。埋没状況からは人為的に埋め戻された様子は認められなかった。埋土からは弥生時代中期後葉の土器が少量出土した。

土器は流入土に伴うもので遺構が機能した時期を示すものではないが、弥生時代中期に機能した土坑と考えておきたい。(田中)

AES2807(図80・81)

R11で検出した土坑で、北側は掘立柱建物28と掘立柱建物34の柱穴に切られていた。検出時の平面形は失われている箇所があるが長径は1.3m程度、短径1.02m南北に長い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.63mある。

断面形は上部がすぼまり、その下はやや丸みを帯びながら外側に広がっていた。埋土を観察すると、上部と下部で埋土に差があり、上部の形状は後世の改変を受けている可能性がある。最もすぼまった部分の形状は径0.82mの円形を呈する。下部の広がり方は南側が比較的顕著であるが、それ以外の箇所では少し広がる程度で、北側ではほぼ壁面が垂直になる箇所もあった。

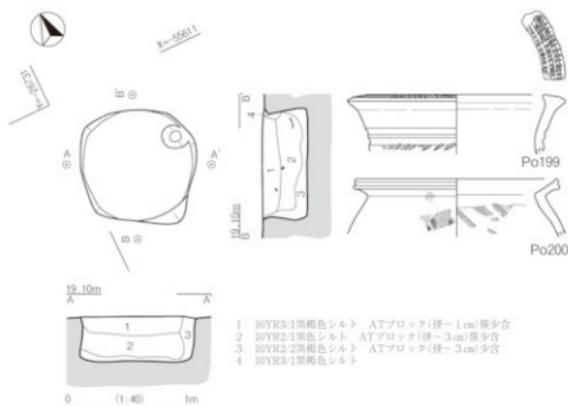


図83 A区 袋状土坑AES3045 平面・断面・出土遺物

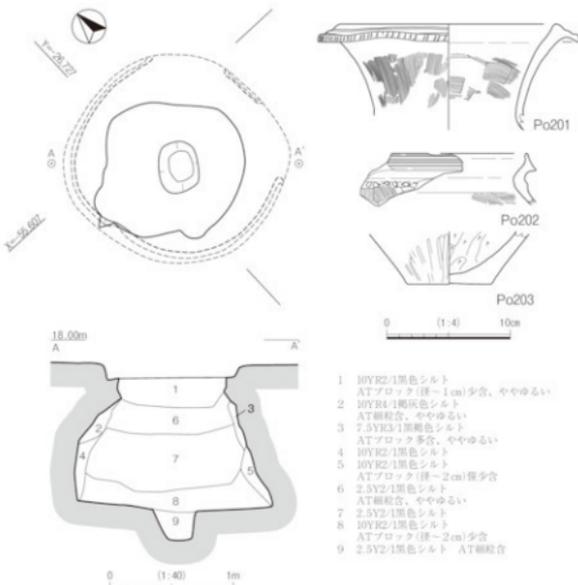


図84 A区 袋状土坑AES3158 平面・断面・出土遺物

AES2968(図82、PL.21・101)

P14の南西寄りに位置する。平面形は検出面と底面ともに不整形円形を呈し、検出面で長径は1.08m、短径0.95m、底面で長径は0.86m、短径0.81mある。断面形態は主軸となる東西方向ではほぼ長方形を呈し、南北方向ではやや底面の狭い逆台形状を呈する。底面までの深さは0.34mある。底面のほぼ中央には直径0.37m、深さ0.12mの円形ビット状の凹みがあり、断面形は逆台形状を呈する。周溝は確

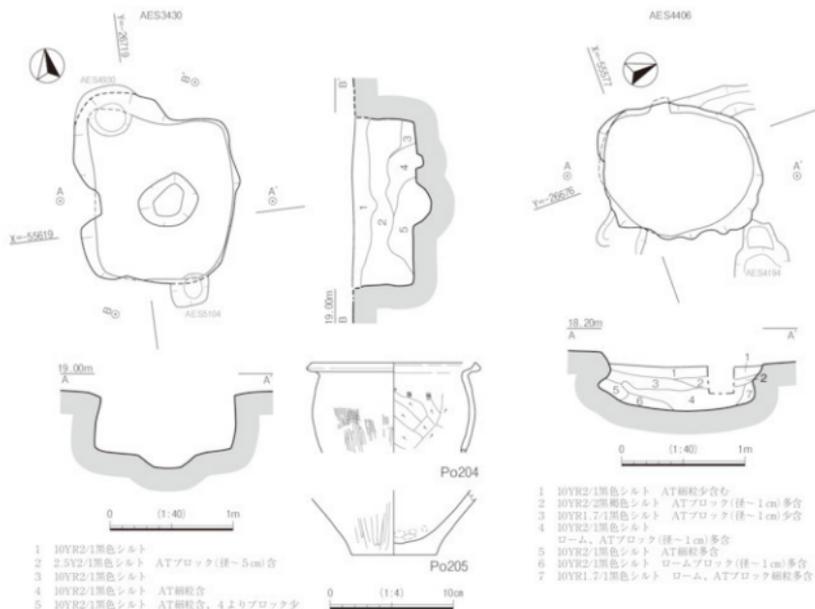


図85 A区 袋状土坑AES3430・4405 平面・断面・出土遺物

認できなかった。

埋土は6層からなり、いずれも旧地表土由来の黒褐色シルトを主体とする。西壁寄りの3・5層と底面ピット埋土の6層でATを多く含む。

遺物は、西壁寄りの2・3層中から弥生土器が出土しており、Po195は完形に近く横倒しの状態で出土した。

遺構の時期は、出土した甕の年代が清水編年のIV-3様式に比定できることから、弥生時代中期後葉と考える。(岡田)

AES3045(図83)

Q14の北東隅付近に位置する。平面形は検出面と底面ともにはほぼ円形を呈し、検出面で長径0.94m、短径0.90m、床面で長径0.94m、短径0.89mある。断面形は底面がわずかに広い台形状を呈し、底面までの深さは0.46mある。底面ピットや周溝は確認

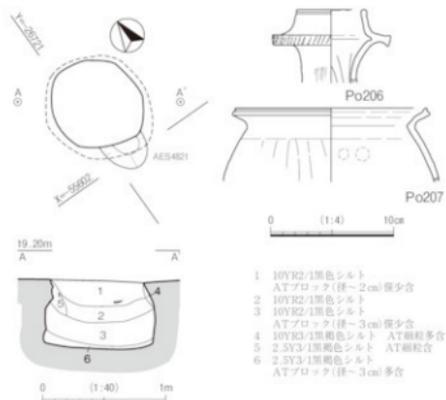


図86 A区 袋状土坑AES4661 平面・断面・出土遺物

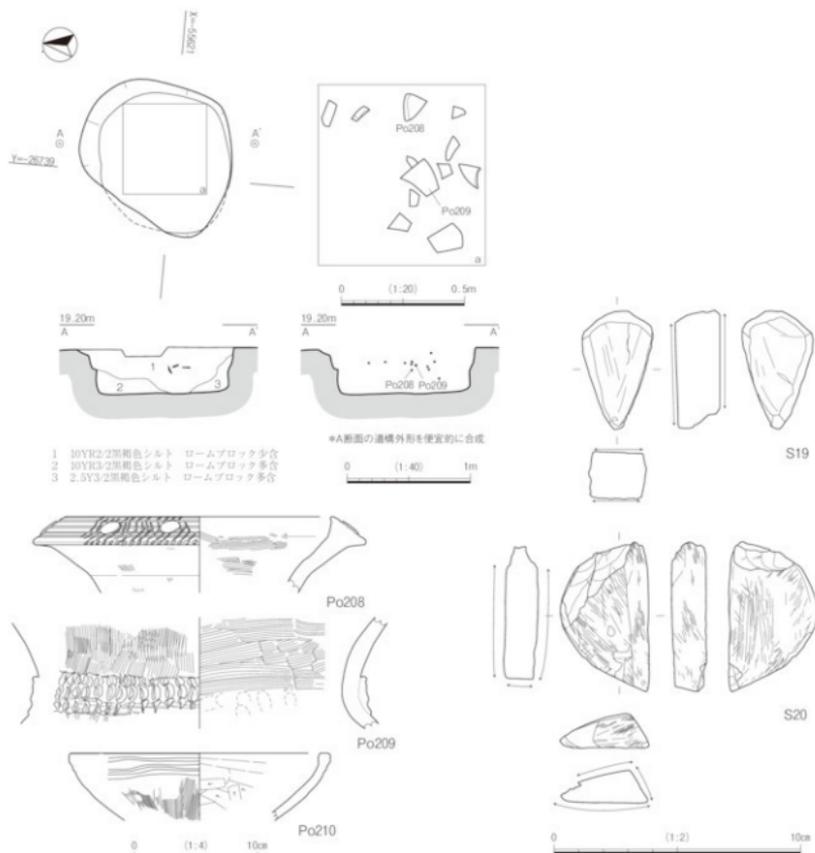


図87 A区 袋状土坑AES4681 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

できなかった。

埋土は4層からなり、いずれも旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。3層の堆積後、不連続面があり、1・2層が皿状に堆積する。

遺物は、1・2層中から弥生土器片が出土した。

遺構の時期は、出土した土器の年代から、弥生時代中期と考える。(岡田)

AES3158(図84)

P13の中央よりやや南西寄りに位置する。平面形は検出面と底面ともにはほぼ円形を呈し、検出面で長径1.12m、短径1.02m、底面で長径が1.83m、短径1.70mある。断面形はフラスコ形を呈し、底面までの深さは1.10mある。底面の中央付近では長径0.42m、短径0.31mの長楕円形の凹みを検出した。凹みの断面形は逆台形状を呈し、深さは0.25mある。底面の周囲には最大幅0.14m、深さ0.01～

0.04mの溝が廻るが、東側はほとんど残存していなかった。

埋土は9層からなり、いずれも旧地表土由来の黒色シルトを主体とする。1・6・7・8層は皿状に堆積し、2・3層にはATブロックを多く含む。9層の底面ピットや溝の埋土も、黒色シルトを主体とする。

埋土からは弥生時代中期後葉の土器が出土した。口縁端部には凹線が施されており、Po202の口頭基部には低い突帯に刺突文が施文される。これらの遺物は弥生時代中期後葉のものであり、遺構が機能したのは弥生時代中期と考える。(岡田)

AES3430(図85)

Q12で検出した土坑である。検出時の平面形は北西部がやや張り出すが長軸1.34m、短軸1.08mの隅円方形を呈し、検出面からの深さは0.48mある。北西部には堅穴建物7の柱穴があり、土坑はこれを切っていた。平面形がややいびつなのは、柱穴を壊す形で土坑が造られており、その部分が基盤層の部分に比べて軟弱であったために機能段階で崩れた可能性がある。

壁面はほぼ垂直で、一部が僅かに外側に広がる。底面のほぼ中央には長径0.50m、短径0.40m、深さ0.12m程の小穴が掘られていた。壁際には溝は認められなかった。

埋土は、主に基盤層ブロックをあまり含まない黒色シルトで、中段辺りで基盤層の大きめのブロックを含む堆積が見られた。(田中)

AES4406(図85)

M8で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.48m、短径1.12mの隅円方形に近い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.36mある。

壁面は丸みを帯びて僅かに外に広がっており、底面も中央部が最も低くなるような丸みをもつ。底面には溝や小穴は認められなかった。

埋土は主に細かい基盤層ブロックを多く含む黒色系のシルトで、人為的に埋められた可能性がある。(田中)

AES4661(図86、PL101)

P15の北東隅に位置する。平面形は検出面と底面ともにはほぼ円形を呈し、検出面で長径0.82m、短径0.71m、底面で長径0.90m、短径0.82mある。断面形は底面がやや広い台形状を呈し、検出面からの深さは0.55cmある。底面ピットや周溝は確認できなかった。

埋土は6層に分けられ、旧地表土由来の黒色シルトを主体とする。1～3・6層は皿状に堆積する。1層と5層中から、それぞれ弥生土器の甕片と壺口縁片が出土した。

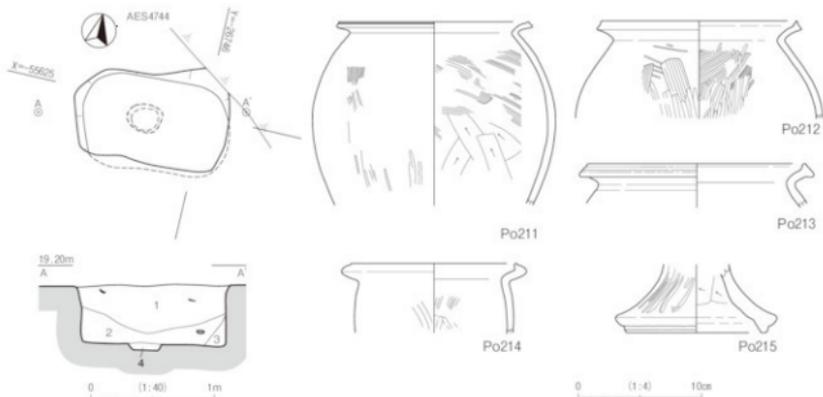
遺構の時期は、出土土器が清水編年のIV-3様式に比定できることから、弥生時代中期後葉と考える。(岡田)

AES4681(図87)

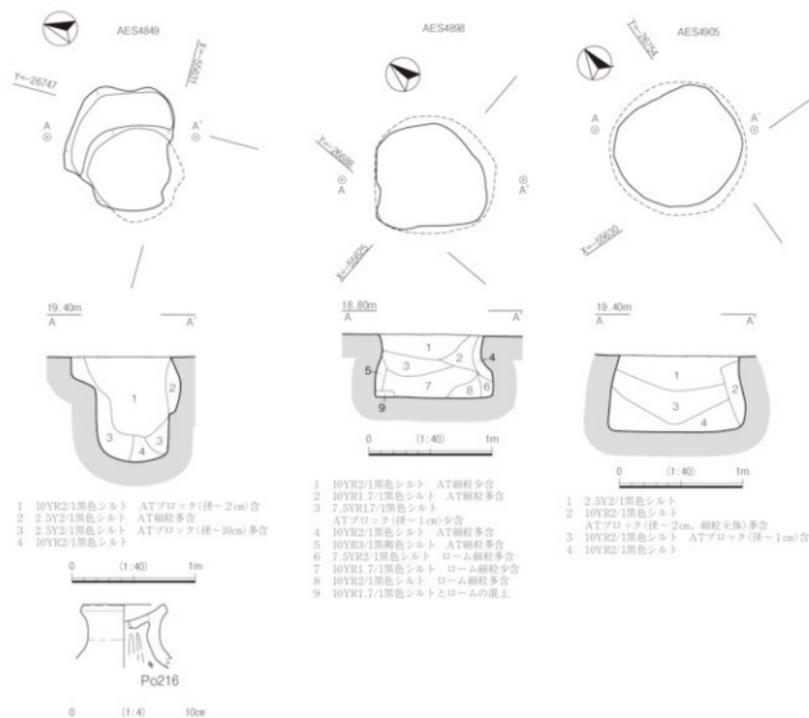
R14で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.40m、短径1.12mのややいびつな楕円形を呈し、検出面からの深さは0.38mある。

壁面はほぼ垂直で、西側の一部が僅かに外側へ広がる。底面には溝や小穴は認められなかった。

埋土は底面に基盤層ブロックを多く含む薄い堆積があり、その上は基盤層ブロックをほとんど含まない黒色シルトであった。遺物は主に黒色シルトから土器片が出土した。土器は破片のみで、土坑として機能しなくなった後に廃棄されたと考えた。土器は弥生時代中期後葉のもので、遺構が機能して



- 1 10YR1.7/1黒色シルト 細粒
- 2 10YR2.1黒色シルト ATブロック(径~15cm)合
- 3 10YR3.1黒褐色シルト 細粒合
- 4 2.5Y3.1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm)合



- 1 10YR2.1黒色シルト ATブロック(径~2cm)合
- 2 2.5Y2.1黒色シルト AT細粒多合
- 3 2.5Y2.1黒色シルト ATブロック(径~10cm)多合
- 4 10YR2.1黒色シルト

- 1 10YR2.1黒色シルト AT細粒少合
- 2 10YR1.7/1黒色シルト AT細粒多合
- 3 7.5YR1.7/1黒色シルト
ATブロック(径~1cm)少合
- 4 10YR2.1黒色シルト AT細粒多合
- 5 10YR3.1黒褐色シルト AT細粒多合
- 6 7.5YR2.1黒色シルト ローム細粒多合
- 7 10YR1.7/1黒色シルト ローム細粒少合
- 8 10YR2.1黒色シルト ローム細粒多合
- 9 10YR1.7/1黒色シルトとロームの混土

- 1 2.5Y2.1黒色シルト
- 2 10YR2.1黒色シルト
- 3 ATブロック(径~2cm, 細粒土体)多合
- 4 10YR2.1黒色シルト ATブロック(径~1cm)合

図88 A区 袋状土坑AES4744・4849・4898・4905 平面・断面・出土遺物

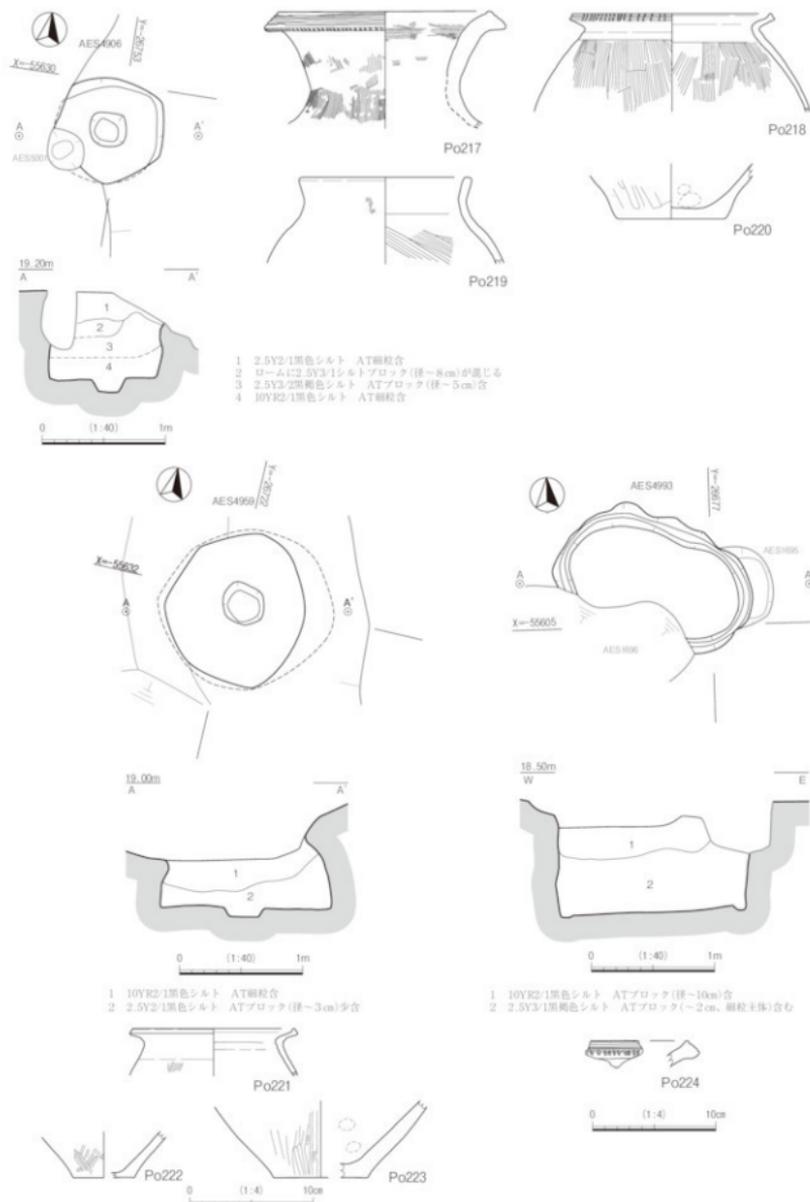


図89 A区 袋状土坑AES4906・4959・4993 平面・断面・出土遺物

いたのは同時期またはそれ以前と考えた。(田中)

AES4744(図88)

R15で検出した遺構である。検出時の平面形は長径1.27m、短径0.72mの小判形に近い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.48mある。

壁面は南側から東側は検出面直下から外側に少し広がっているのに対し、北側から西側はほぼ垂直である。底面の壁際には溝状に窪むが、意図的に造られたものとするにはやや不明瞭であった。底面の中央には長径0.24m、短径0.2m前後、深さ0.05mの浅い穴が掘られていた。

埋土は底面付近に基盤層ブロックを含む堆積があり、上部は基盤層ブロックをほとんど含まない黒色シルトである。遺物は黒色シルト内を中心に弥生時代中期中葉から後葉の土器片が出土した。

埋没時の流入土に伴うものなので遺構の時期を示すものではないが、弥生時代中期に機能したと考えておきたい。(田中)

AES4849(図88)

S15で検出した遺構で、検出時の平面形は長径0.96m、短径0.90mのややいびつな楕円形を呈する。

東側は検出面から約0.2mで底面となるのに対して、西側はさらに深くなる。2つの遺構が切りあっている可能性が考えられたが、堆積状況を観察したところ1つの遺構であると判断した。深くなる部分の平面形はいびつな部分があるが径0.70mの概ね円形を呈し、検出面からの深さは0.86mある。

壁面は東側がほぼ垂直であるのに対し、西側は検出面直下から直線的に外側へ広がっていた。底面には溝や小穴は認められなかった。

埋土は下部に大きめの基盤層ブロックを多く含む堆積があり、その上は基盤層ブロックをほとんど含まない。下部の堆積については埋め戻しなどの人為的要因による可能性がある。埋土からは土器の小片が出土しており、弥生土器の蓋を図化した。

遺構の時期や機能を特定するのは難しいが、弥生時代の貯蔵穴と考えておきたい。(田中)

AES4898(図88)

R9で検出した土坑である。検出時の平面形は長径1.00m、短径0.92mのややいびつな楕円形を呈し、検出面からの深さは0.50mある。

断面形は検出面から0.1m程度はほぼ垂直で、その下からやや丸みを帯びて外側に広がっていた。底面の形状は長径1.04m、短径1.00mのややいびつな円形を呈する。底面には溝や小穴は認められなかった。

埋土は主に基盤層の細粒ブロックを含む堆積で、最上部は基盤層ブロックをあまり含まなかった。

時期が判断できる遺物が出土しておらず、機能または廃棄された時期は不明である。(田中)

AES4905(図88)

R16で検出した土坑である。検出時の平面形は長径0.99m、短径0.91mの隅円方形に近い楕円形を呈し、検出面からの深さは0.62mある。

断面形は検出面直下から直線的に外側へやや広がっており、底面の平面形は径1.10mの円形を呈する。底面には溝や小穴は認められなかった。

埋土は壁面付近に基盤層のブロックを多く含む堆積があり、それ以外は主に基盤層ブロックをほとんど含まない黒色シルトである。

時期が判断できる遺物が出土しておらず、機能または廃棄された時期は不明である。(田中)

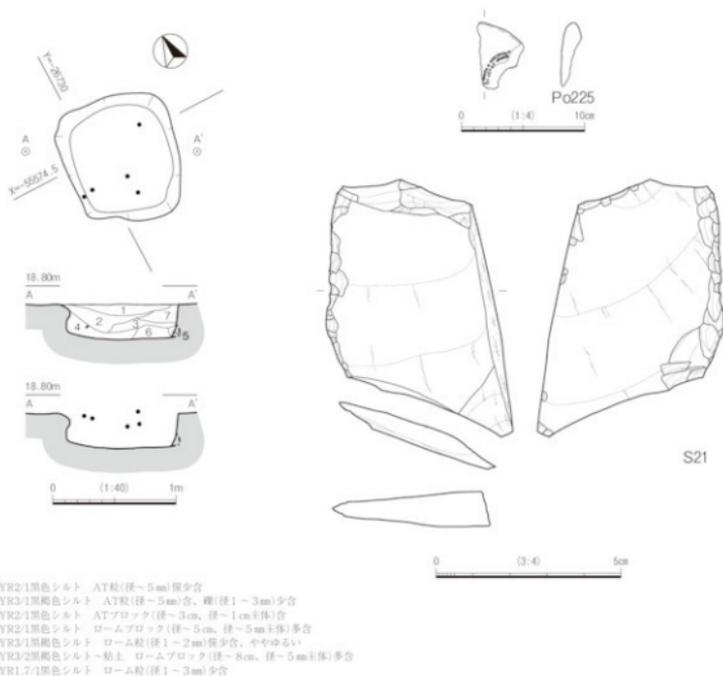


図90 A区 袋状土坑AWS3488 平面・断面・出土遺物

AES4906(図89)

S16で検出した土坑で、区画溝、ピットAES5001に切られる。検出時の平面形は長径0.90m、短径0.82mのややいびつな楕円形を呈し、検出面からの深さは0.66mある。

壁面はほぼ垂直で、南側で僅かに外側へ広がっていた。底面のほぼ中央に径0.30m、深さ0.11mの小穴が掘られていた。

埋土は主に基盤層のブロックを少量含む堆積で、一部にロームを主体とした2層がみられた。2層は壁面の崩落した堆積の可能性ある。遺物は3層の下側で拳大から人頭大までの礫とともに出土しており、土坑の埋設途中に破砕品が廃棄されたと考えた。出土したのは弥生時代中期後葉の土器で、Po217の口縁部下端には刻み目が、Po218の口縁部には凹線を施文後に刺突文が施されている。

出土した土器から遺構が機能したのは弥生時代中期後葉またはそれ以前と判断した。(田中)

AES4959(図89)

S16で検出した土坑で、区画溝の底面で検出した。検出時の平面形は長径1.24m、短径1.10mの楕円形を呈し、深さは比較的残存していた東側で0.59mある。

断面は残存していた面の直下からやや丸みを帯びて広がっており、特に東側が顕著であった。底面の形状は長径1.45m、短径1.32mの楕円形を呈し、中央には長径0.36m、短径0.32m、深さ0.05mの小穴が掘られていた。

埋土はATブロックを少量含む黒色系のシルトで底面の小穴を含めて埋没していた。埋土からは弥生時代中期中葉と思われる弥生土器が出土したが、すべて流入土内から見つかったため、遺構の時期を直接示すものではなく、弥生時代中期に機能、廃棄された可能性を指摘するにとどまる。(田中)

AES4993(図89、PL22)

P8で検出した土坑で、地下式坑16に切られる。検出時の平面形は長径1.57mの小判形で、短径は残存部分の形状から1.0m前後と推定した。

壁面はほぼ垂直で、外側に広がる箇所はない。底面の壁際には幅0.15m前後、深さ0.05m前後の浅い溝が巡る。小穴は認められなかった。

埋土は基盤層のブロックをやや多く含む堆積であるが、人為的に埋め戻したと判断しうる状況ではなかった。埋土からは弥生時代中期後葉の壺の口縁部が出土しており、下端部に刻み目が施される。

出土遺物が遺構の時期を示すかどうかは判断しがたく、弥生時代中期に機能、廃棄した可能性を指摘するにとどまる。(田中)

AWS3488(図90)

M13・14の中央境に位置する。

土坑の平面は南北方向に軸をもつ隅丸方形で、長軸1.17m、短軸0.92m、検出面からの深さは0.29mで、底面はAT層とローム層の境である。

断面形は浅い逆台形で、底面は木根状の窪みは複数あるものの概ね平坦で、平面は不整な方形、長軸0.89m、短軸0.77mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体に、底付近はAT・ロームブロックを多く含む。

遺物は掘り下げ中に弥生土器が出土した。このうち、分銅型土製品と削器を図化した。S21は片刃削器で、一側縁に礫面をもつサヌカイトの剥片を素材に、もう一側縁を両面から二次加工して刃部を形成する。二次加工中に折損しているがその後も二次加工は継続している。

南西側に位置する袋状土坑AWS3486やAWS3487と比較すると径が小さく掘方も浅いものの、遺構の形状と土層の堆積から弥生時代の袋状土坑と考える。(八峠)

S343(図91)

M15、N15に位置する。周辺は南西から北西に向かう現代の用水路でローム層まで掘削されており、南東側3分の2程度を確認した。

土坑検出時の平面は黒色シルトの不整な方形の広がり、長軸は1.1m、遺存する短軸は0.69mである。検出面からの深さは底面までが0.34m、底面のピット及び壁溝の底までが0.39mで、最深部はローム層中である。

断面形は南側が僅かに袋状となるが、他は概ね垂直である。底面の平面も不整な方形で、長軸0.9m、遺存する短軸は0.62mである。底面の西から南東の一部で遺存状況はよくないものの最大幅0.12m、最大深さ0.05mの壁溝を、中央には東西方向に軸をもつ径0.19m～0.26mの底面にピットを確認した。

埋土は底面のピットとその上部に褐色シルトを主体とする広がりがあるものの、下層より上は黒色シルトを主体とし、褐色シルトの小ブロックを含む。

土坑の中央から東側の埋土中から遺物が出土している。底面よりやや浮いているため、廃絶後の遺物であろう。弥生土器の蓋Po226を図化した。

出土遺物や埋土、遺構の形状から弥生時代の袋状土坑と考える。(八峠)

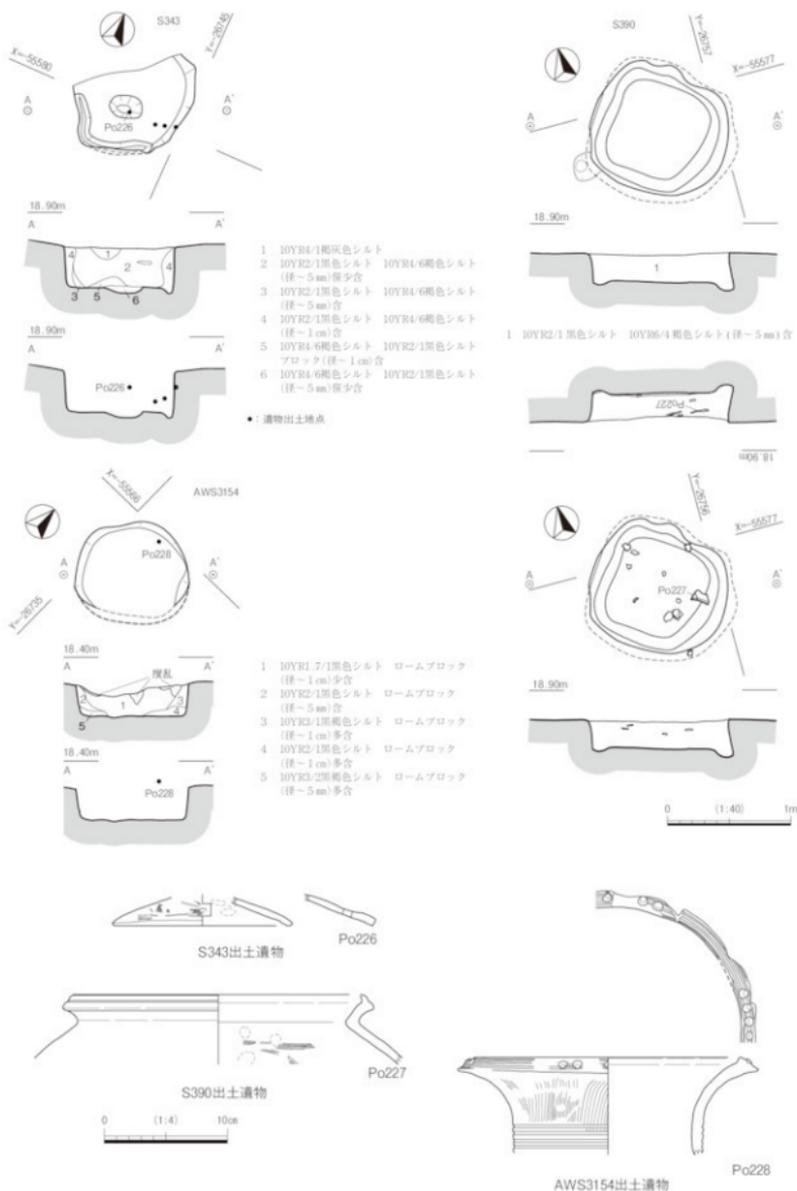


図91 A区 袋状土坑S343・390・AWS3154 平面・断面・出土遺物

S390(図91)

M16の中央やや南に位置する。

土坑の平面は黒色シルトのやや不整な隅丸方形の広がりとして検出した。長軸は1.11m、短軸が0.96m、検出面からの深さは0.22m、壁溝までを含めると0.31mで、最深部はローム層中である。

周囲はローム層まで掘削されているため、底部からの立ち上がりは明瞭ではない。底面の平面も不整な隅丸方形で、周囲を幅0.10m～0.19m、最大深さ0.09mの壁溝が全周し、内側は窪みや起伏はあるものの壁際までほぼ平坦である。壁溝を除いた底面は、長軸0.93m、短軸0.89mである。

埋土は黒色シルトの単層で、褐色シルトの小ブロックを含む。

遺構の中央から北にかけて遺物が出土した。底面よりやや浮いているため、廃絶後の遺物であろう。

出土遺物と埋土、及び遺構の形状から弥生時代中期後葉の袋状土坑と考える。(八峠)

AWS3154(図91, PL.103)

L14のほぼ中央で検出した遺構で、周辺は現代の水路によりローム層下の基盤層近くまで掘削されていた。

土坑の南東側は明らかでないが、検出時の平面は概ね円形とみられる。径は最大で0.91m、検出面からの深さは0.27mである。

断面は南北両側とも底面からやや高い位置に最大径をもつ袋状を呈すると考える。底面は基盤層中でやや起伏があるものの概ね平坦である。底面の平面はやや不整な円形で、径は最大で0.83mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体に、周縁部からロームブロックを含む層が、中央部にはブロックの少ないシルト層が堆積する。

遺物は遺構検出中及び掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS3487(図92, PL.102)

M14東側中央で検出した。南にAWS3486が隣接する。

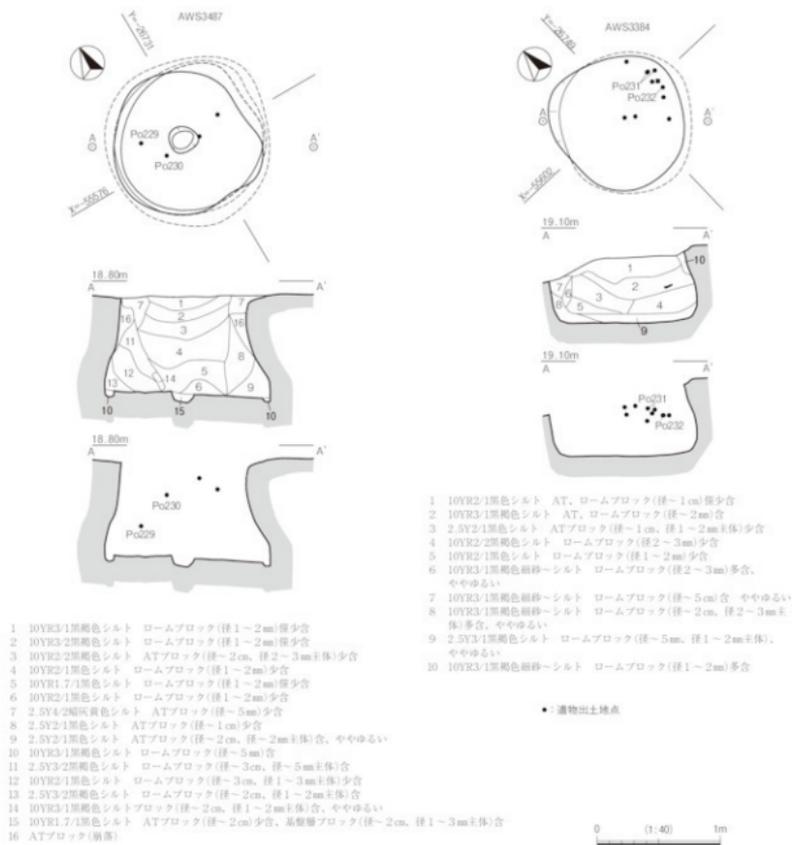
土坑検出時の平面は黒褐色および暗灰黄色シルトの不整な円形の広がり、径1.12m～1.20m、検出面からの深さは0.87mで、最深部はローム層と下の基盤層の境である。

断面形は底面周縁部に最大径をもつ袋状で、東側は0.15m程垂直に立ち上がった後、緩く内傾する。西側は崩落のため立ち上がりは垂直に近い。壁面の起伏は大きい。底面の平面は不整な円形で径は1.38m～1.43mである。壁面との際に幅0.1m～0.16m、深さ0.04m～0.06mの壁溝が全周する。ほか底面中央に径0.22～0.24m、深さ0.07mの小ピットを検出した。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体に、底部から周縁部にかけてAT・ロームブロックを含む層と、検出面に近くブロックの少ない1～4層に大別できる。壁面の堆積が急角度であり、中央の層も中心付近が盛り上がることから流入による堆積としては違和感がある。再利用の使用面も確認できないことから、周囲の後中央へと人為的に埋めた可能性がある。

遺物埋土の中位から上位にかけて出土した。意図的に埋めたとみるならば廃棄年代にちかい。このうち弥生土器の甕Po229と注口部Po230を図化した。

出土遺物、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期中葉の袋状土坑と考える。(八峠)



- 1 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径1~2mm)僅少含
- 2 10YR3/2黒褐色シルト ロームブロック(径1~2mm)僅少含
- 3 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック(径1~2cm, 径2~3mm主)少含
- 4 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径1~2mm)少含
- 5 10YR1/7/1黒色シルト ロームブロック(径1~2mm)僅少含
- 6 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径1~2mm)少含
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色シルト ATブロック(径~5mm)少含
- 8 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径~1cm)少含
- 9 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径~2cm, 径~2mm主)含、ややゆるい
- 10 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)含
- 11 2.5Y3/2黒褐色シルト ロームブロック(径~3cm, 径~5mm主)含
- 12 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径~3cm, 径1~3mm主)少含
- 13 2.5Y3/2黒褐色シルト ロームブロック(径~2cm, 径1~2mm主)含
- 14 10YR3/1黒褐色シルトブロック(径~2cm, 径1~2mm主)含、ややゆるい
- 15 10YR1/7/1黒色シルト ATブロック(径~2cm)少含、基盤層ブロック(径~2cm, 径1~3mm主)含
- 16 ATブロック(崩落)

- 1 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロック(径~1cm)僅少含
- 2 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径~2mm)含
- 3 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径~1cm, 径1~2mm主)少含
- 4 10YR2/2黒褐色シルト ロームブロック(径2~3mm)少含
- 5 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径1~2mm)少含
- 6 10YR3/1黒褐色細砂~シルト ロームブロック(径2~3mm)多含、ややゆるい
- 7 10YR3/1黒褐色細砂~シルト ロームブロック(径~5cm)含 ややゆるい
- 8 10YR3/1黒褐色細砂~シルト ロームブロック(径~2cm, 径2~3mm主)多含、ややゆるい
- 9 2.5Y3/1黒褐色シルト ロームブロック(径~5cm, 径1~2mm主)含、ややゆるい
- 10 10YR3/1黒褐色細砂~シルト ロームブロック(径1~2mm)多含

● 遺物出土地点

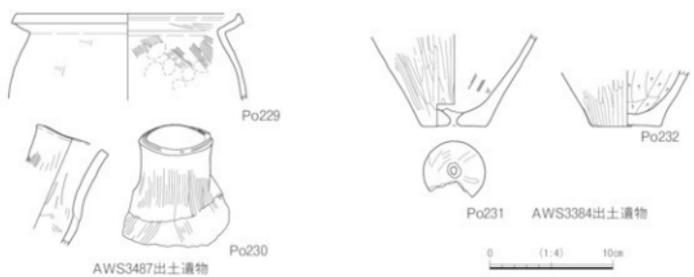


図92 A区 袋状土坑AWS3487・3384 平面・断面・出土遺物

AWS3384(図92)

P15北西端で検出した。西側の一部を耕地段差により掘削される。

土坑検出時の平面は、円形の黒色シルトの広がりと一緒にATブロックが広がる状況を検出した。径1.01m～1.14m、検出面からの深さは0.58mで、底面はローム層中である。

断面は底面から0.2m程上位に最大径をもつ袋状で、底面は概ね平坦である。底面の平面は不整な円形で、径1.05m～1.17mで、検出面よりも若干広い。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトが主体で、底面付近にロームブロックを多く含む8・9層、西側底面付近で小単位の崩落があるものの、検出面まで船底状に堆積する。

遺物は北東側の2層中から弥生土器甕の体部片が出土した。底面より浮いた状態であること、下層が周囲からの流入による堆積であることを考慮するならば、土坑の使用が終了してからある程度経過した後の遺物と考える。

出土遺物と埋土、及び遺構の形状から弥生時代中期の袋状土坑と考える。(八峠)

AWS3383(図93)

P16北東側に位置する。

土坑の検出時の平面は黒褐色シルトの周縁にATブロックが広がる状況を検出した。検出時の平面形は不整な円形で、径1.05m～1.22m、検出面からの深さは0.61mで、底面はローム層中である。

断面形は西側が袋状となる底面付近に最大径、東側は緩く内湾しながら立ち上がり、底面から0.3m上位に最大径をもつものの、大きく崩落した状況は認められない。

底面には波状の起伏があり、ローム層と下の基盤層が混在する。底面の平面は不整な円形で、径1.18m～1.22mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は壁面からの崩落を除き、少量のAT・ロームブロックを含む黒～黒褐色のシルトを主体とする。上層である1・2層には弥生土器片のほか径0.2m程の石が含まれる。

遺物は弥生土器の甕と石鏃を図化した。S22はサスカイト製の石鏃で、横形剥片を素材に周辺のみを調整して整形している。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期中葉の袋状土坑と考える。(八峠)

AWS3366(図93, PL102)

R18中央西側に位置する。

土坑の南側をAWS3562に掘削される。検出時の平面は東西方向に軸をもつ不整な楕円形で、径0.75m～1.01m、検出面からの深さは0.56mで、底面はローム層中である。

断面形は東壁がわずかに内傾するものの、概ね円筒状である。底面は壁際の立ち上がり際まではほぼ平坦で、壁面も概ね平滑である。底面の平面は東西方向に軸を持つ楕円形で、長径1.03m、短径0.76mある。壁溝や底面のピットは確認できない。底面が概ね平坦であること、壁にかけての立ち上がりが明瞭であるため土坑と分別し、貯蔵穴として調査した。

埋土は底部から周縁部にかけて黒～黒褐色シルトにAT・ロームブロックを多く含む層と、検出面中央部のブロックが比較的少ない層がある。水平方向を主体としており、人為的な埋め戻しではないと考える。

遺物は遺構内で細片の状態幅広く出土し、埋土の高低にも規則性はなく、出土遺物にもやや時期幅が認められることから機能終了後には廃棄土坑として使用された可能性がある。

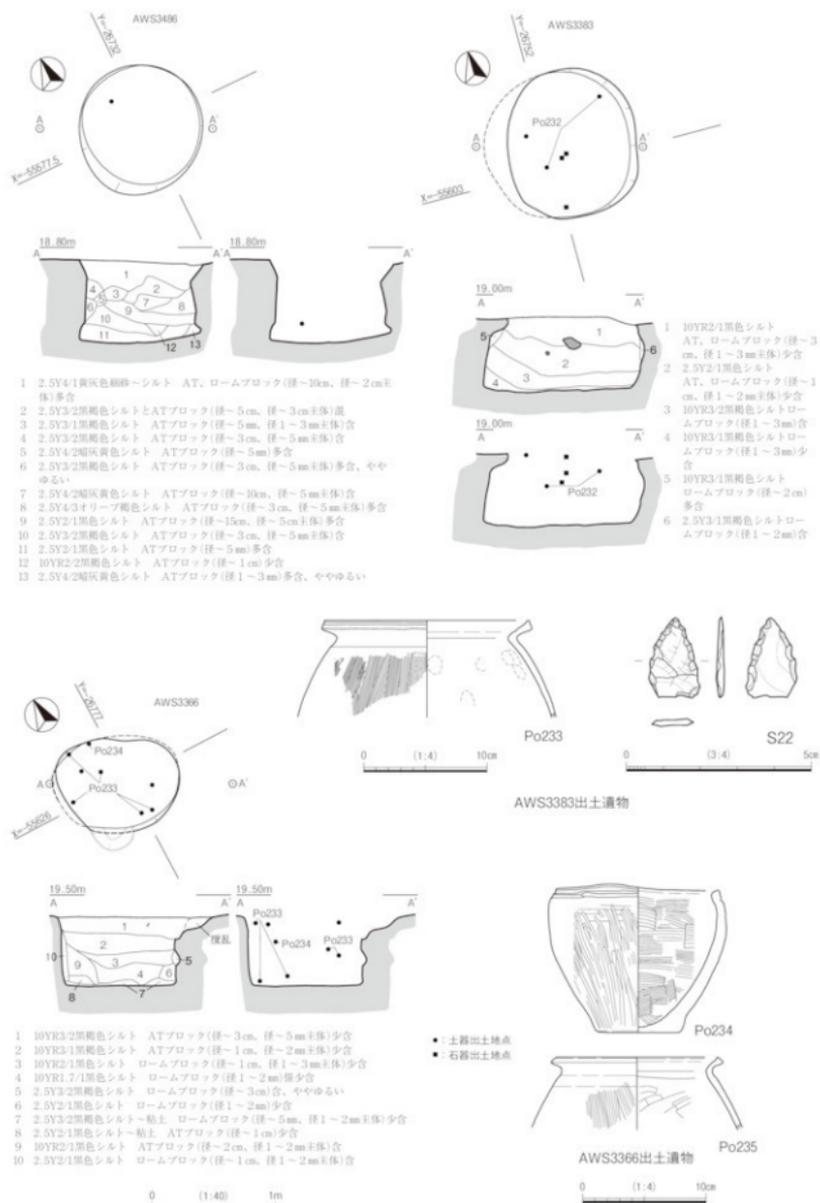


図93 A区 袋状土坑AWS3383・3366・3486 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期中葉から後葉の袋状土坑で、廃棄土坑に転用されたと考える。(八峠)

AWS3486(図93)

M14東側中央にあり、北にAWS3487が隣接する。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、径1.01m～1.07m、検出面からの深さは0.67mで、底面はローム層である。

断面形は円筒状ではあるが、立ち上がりから僅かに細くなり、検出面にかけて広がる。底面は若干中央付近が深み、周縁部にかけて高くなる。底面の平面は円形で、径0.94m～0.96mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は北側からATブロックを含む黒～黒褐色シルトが、上層には小単位の堆積があり、人為的に埋めた堆積と考える。

遺物は遺構の北側、底面から浮いた状態で出土した。他にも掘り下げ中に小片が出土しているが、いずれも図化し得ない。遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS3396(図94)

P15の中央南西端付近に位置する。遺構の南側が攪乱によりローム層まで掘削が及んでいた。

土坑検出時の平面は不整な円形で、径0.77m～0.9m、検出面からの深さは最大0.73mで、底面はロームと下層と下の基盤層との境にある。

断面は東側の底面から0.2m、西側は0.5m程上位に最大径をもつ不整な袋状で、立ち上がりは緩く内傾する。底面は東壁にかけて緩く立ち上がる。底面の平面はほぼ円形で、径0.83m～0.87mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトが主体で、底から周縁部に4・5層が堆積した後、船底状に1～3層が堆積する。遺物は出土していないため、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS3381(図94)

P17中央南側に位置する。東隣に堅穴建物43が隣接するものの、いずれの遺構もローム層まで掘削が及んでおり、関係は不明である。

土坑は土層断面で新旧二回にわたり使用されたことを確認した。検出時の平面は南北方向に軸をもつ、黒色シルトとATブロックの不整な楕円形で、長径0.97m、短径0.74m、検出面からの深さは0.77mで、底面はローム層下の基盤層である。

断面形は底面周縁に最大径をもつ袋状で、壁面はドーム状に立ち上がる。底面は緩い起伏があり中央に向かい下る。底面の平面は不整な円形で、長径1.24m、短径1.14mを測り、検出面よりも大きい。下の段階では壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は底面から2層まではロームを主体に人為的に埋め、壁際を掘削し、再度使用したと考える。新しい段階での埋土は1・5～7・9～12層で、周縁部にはブロックの多い黒褐色シルトが、中央にはブロックの少ない黒色シルトが堆積する。断面で見ると7層の堆積から新たな段階で壁溝の存在が推測できる。

遺物は中央やや南側で、埋められた土と新たな段階との際から出土している。ほか掘り下げ中にも出土しているがいずれも小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

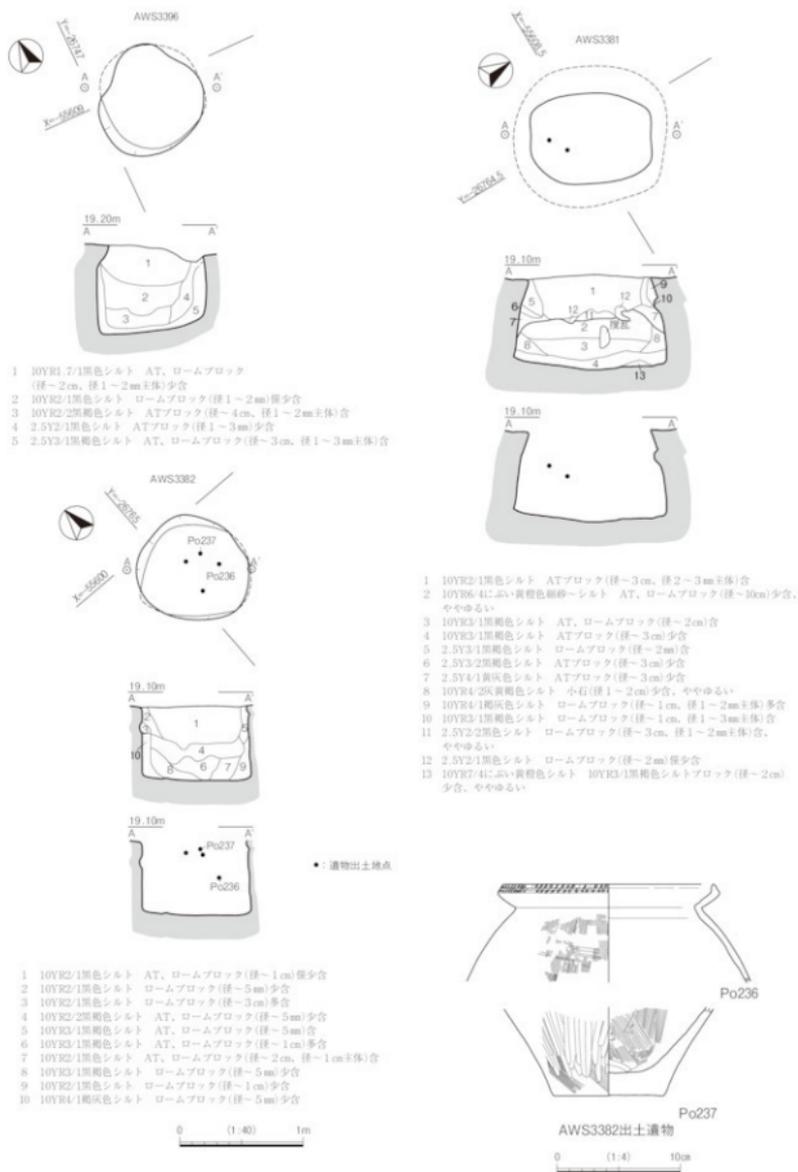


図94 A区 袋状土坑AWS3396・3381・3382 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

AWS3382(図94)

P17中央北端に位置する。

土坑は黒褐色シルトの周縁にATブロックがドーナツ状に広がる状況として検出した。平面は不整な円形で、径0.8m～0.92m、検出面からの深さは0.61mで、底面はローム層と下の基盤層の境である。

断面は長方形で、壁面に細かな屈曲はもつもののほぼ垂直に立ち上がる。底面の平面は不整な円形で、径は0.74m～0.86mである。窪みや起伏はあるものの壁際までほぼ平坦である。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は周縁部から中央部にブロックの少ない8～10層、中央にはブロックを多く含む6・7層が小単位で、4層から検出面までは壁面の崩落を除きブロックの少ない黒色シルトが堆積する。堆積状況からみて人為的に埋められた可能性がある。

遺物は遺構中央付近の中位から上位にかけて出土した。埋められた段階のものであろう。このうち弥生土器の甕Po236と底部Po237を図化した。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期中葉の袋状土坑と考える。(八峠)

AWS3375(図95)

Q17中央西側に位置する。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、径1.08m～1.19m、検出面からの深さは0.49mで、底面はローム層中である。

断面形は壁面の崩落により、東側が垂直、ほかは緩く立ち上がる。底面は波状の起伏があるものの概ね平坦である。底面の平面は不整な丸形で、径は0.91～0.98mある。壁溝や底面のピットは確認できない。底面が概ね平坦であること、壁にかけての立ち上がりが明瞭であるため土坑と分別し、貯蔵穴として調査した。

埋土は周縁部の塊状の崩落土とともに、ATブロックを含む黒褐色シルトが船底状に堆積する。1・3層には径0.2m程の礫が含まれる。

遺物は遺構の中央から東にかけて、底面から浮いた状態で出土した。ほか掘り下げ中にも出土したがいずれも小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS3373(図95)

Q17中央南側、掘立柱建物23の南西隣に位置し、北隣には土壌墓AWS3374がある。

土坑の検出時の平面は南北方向に時期をもつ隅丸方形で、長径0.94m、短径0.83m、検出面からの深さは0.96mで、底面はローム層下の基盤層中である。

断面形はフラスコ状で、窪みや起伏はあるものの壁際までほぼ平坦である。西壁では底面際から約70度程度内傾する。底面の形状は不整な円形で、径1.07m～1.14mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体とする。10層はやや粘性をもつ。9層から上は中央部分の堆積が主体のため、9層から上は人為的に埋められ、11・12層はその際の空隙に入り込んだゆるい層と考える。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS3368(図95)

R17・18に位置する。東側の一部を掘立柱建物36のP9に掘削される。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、切り合いのない範囲は、径1.21m～1.25m、検出面からの深

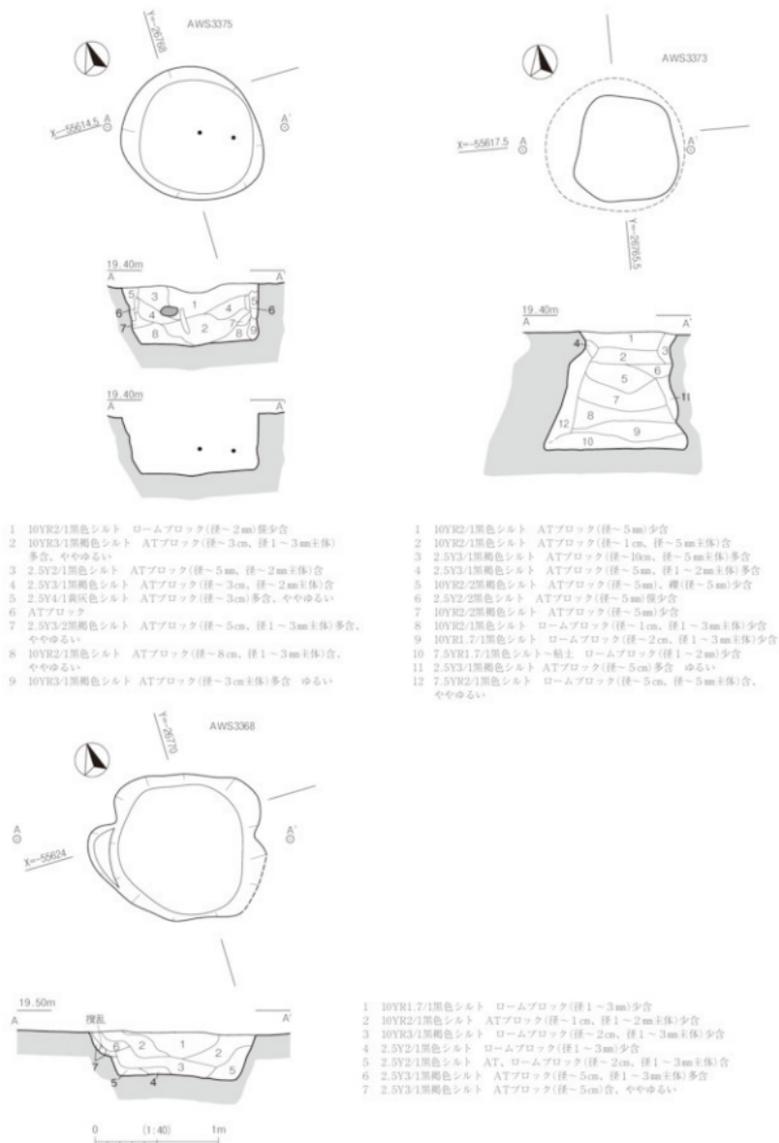


図95 A区 袋状土坑AWS3375・3373・3368 平面・断面

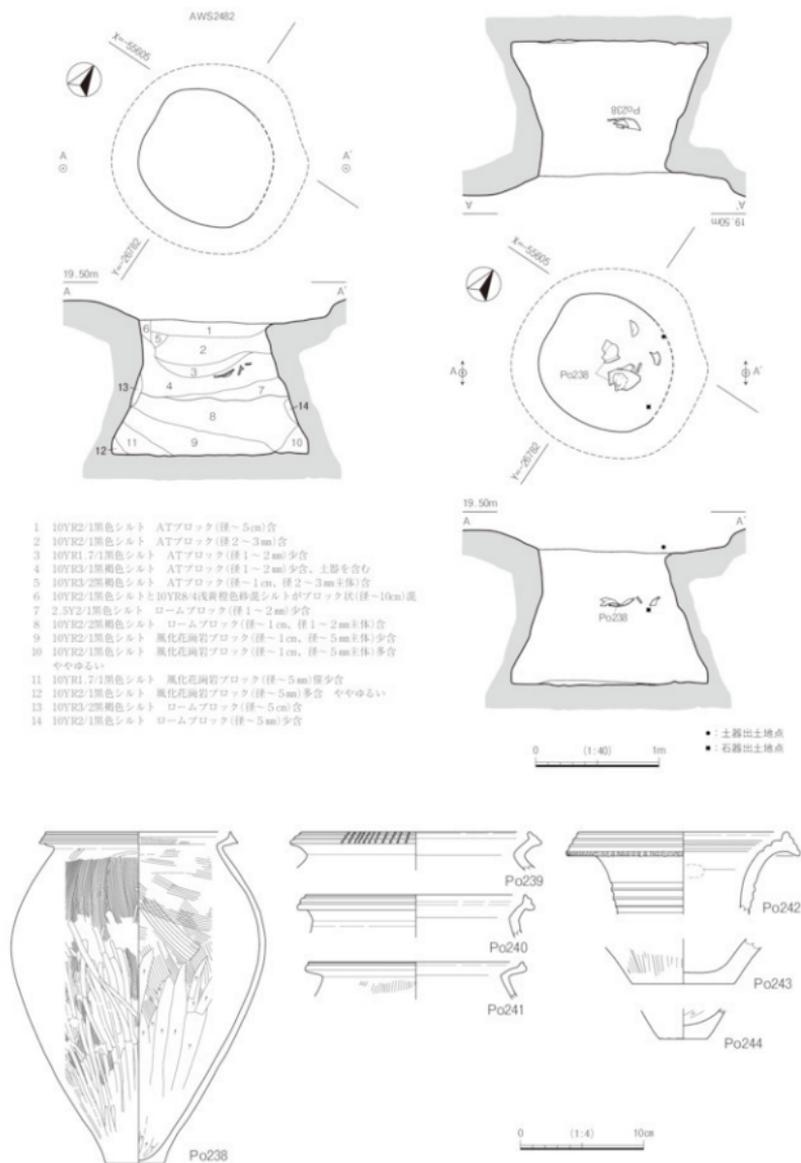


図96 A区 袋状土坑AWS2482 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

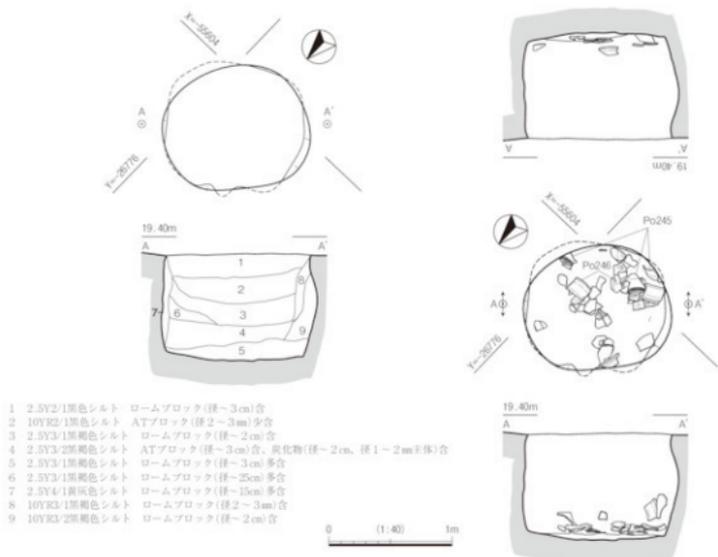


図97 A区 袋状土坑AWS1144 平面・断面・遺物出土状況

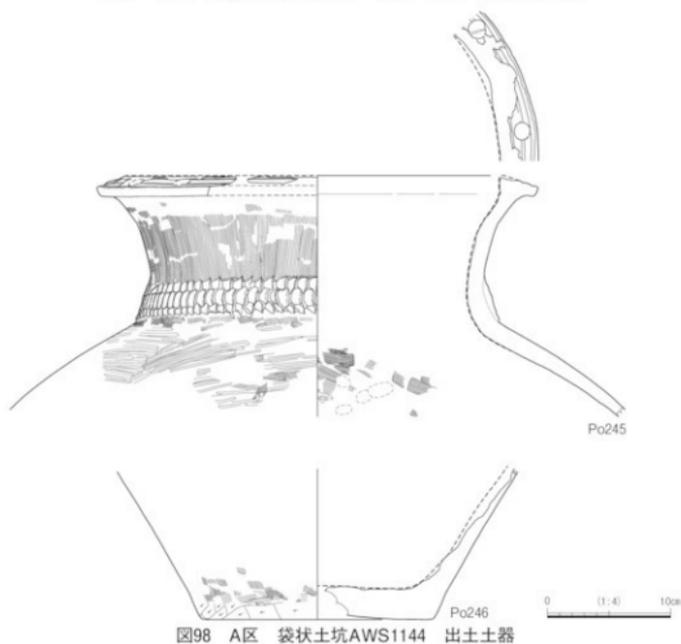


図98 A区 袋状土坑AWS1144 出土土器

さは0.36mで、底面はローム層中である。

断面は底面よりも0.3m程高い、遺構上面を大きく掘削されているため、検出面付近で最大径をもつ袋状になると考える。底面の平面は不整な円形で、径1.03m～1.14mである。壁溝や底面のピットは確認できない。底面が概ね平坦であること、壁にかけての立ち上がりが明瞭であるため土坑と分別し、貯蔵穴として調査した。

埋土は黒色または黒褐色シルトが周縁部から互層に堆積する。中央付近の堆積層には粒状のAT・ロームブロックを少量含む。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)
AWS2482(図96、PL102)

P19中央東端にある。掘立柱建物40の柱穴内内の南側にあり、同時期であれば建物に附随する袋状土坑となる。

土坑の検出時の平面は東西に軸をもつ不整な楕円形で、遺構上部には遺構の落ち込みのために入り込んだとみられる攪乱土が、0.15m程の厚さで堆積していた。

検出時の形状は不整な円形で、径1.05m～1.19m、検出面からの深さは1.09m、底面はローム層下の基盤層中である。底面付近は中央部がわずかに高く際に向かい低くなる。断面形はフラスコ状で、立ち上がりは70°程度内傾する。

底面の平面はやや不整な円形で、径は1.54m～1.59mある。周壁溝はもたないものの、底面の中央付近がやや高く縁辺部に向かい緩く傾斜する。底面のピットは確認できない。

埋土は底面付近が西から東に向かい、基盤層ブロックを含む黒～黒褐色シルトで人為的に埋められる。P17の袋状土坑AWS3381の例を参照するならば、8層以下の堆積と7層以上の堆積の方向や混和物が異なるため、一回8層上面の段階まで埋めた後、再度使用された可能性がある。最終的に弥生土器を含む4層など、人為的に埋められた状況を示す。

遺物は主に4層から出土しており、甕Po238～241、壺Po242、底部Po243・244を図化した。

出土遺物、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期後葉であるが、これは遺構廃棄後であり、使用時期、はじめの掘削時期はこれを若干遡ると考える。(八峠)

AWS1144(図97～99、PL.22・102)

P18中央やや西、南西から北東に延びる現代の水路の西際に位置する。

土坑の検出時の平面は東西方向に軸をとる楕円形で、径0.89m～1.21m、検出面からの深さは0.87mで、底面はロームとその下の基盤層との間付近である。

断面は西側で底面から0.4m～0.5mにかけて膨らむものの、東側ではほぼ垂直に立ち上がり、底面から壁面にかけて起伏が多い。底面の平面は円形で、径0.89m～1.15mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒色～黒褐色シルトを主体に、底面には5層が、南壁には9層が堆積し、弥生土器の小片が多く含まれる。6～8層は壁面崩落のロームブロックを含む。

出土したのは弥生土器の大型壺とその底部である。形状を保つ大きな破片ではなく小片で、表裏も規則性は認められない。底面や土器底部も掘えられたような状況ではなく、土器片は中央から南側に集中し、南壁付近では壁に沿うような状況で出土していること、石斧片も含まれていることから、南側からの廃棄が考えられる。土器は二次的な被熱と思われる器面剥離が顕著である。

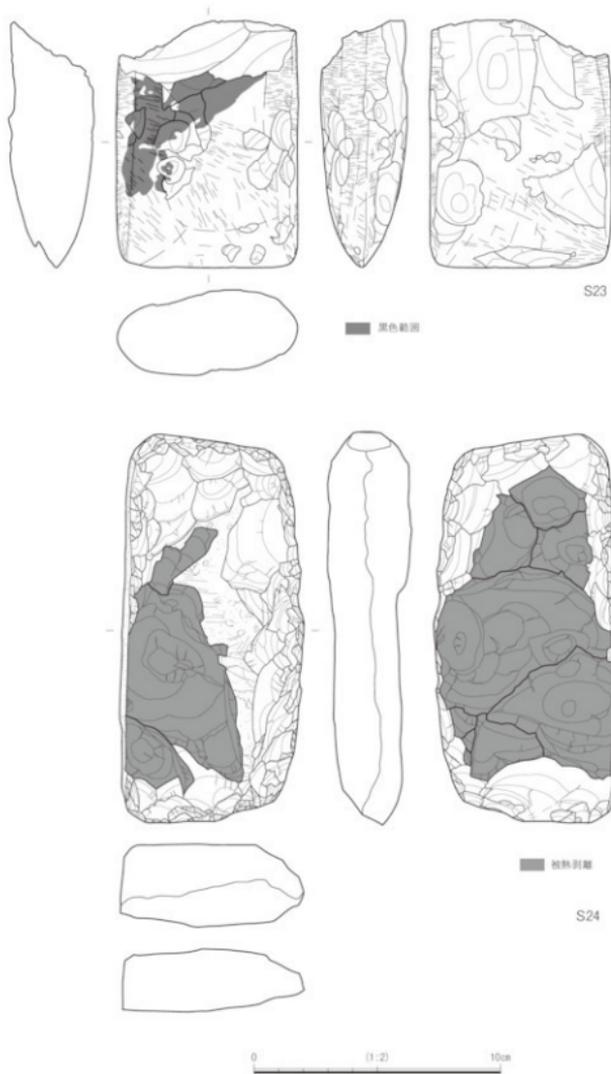


図99 A区 袋状土坑AWS1144 出土石器

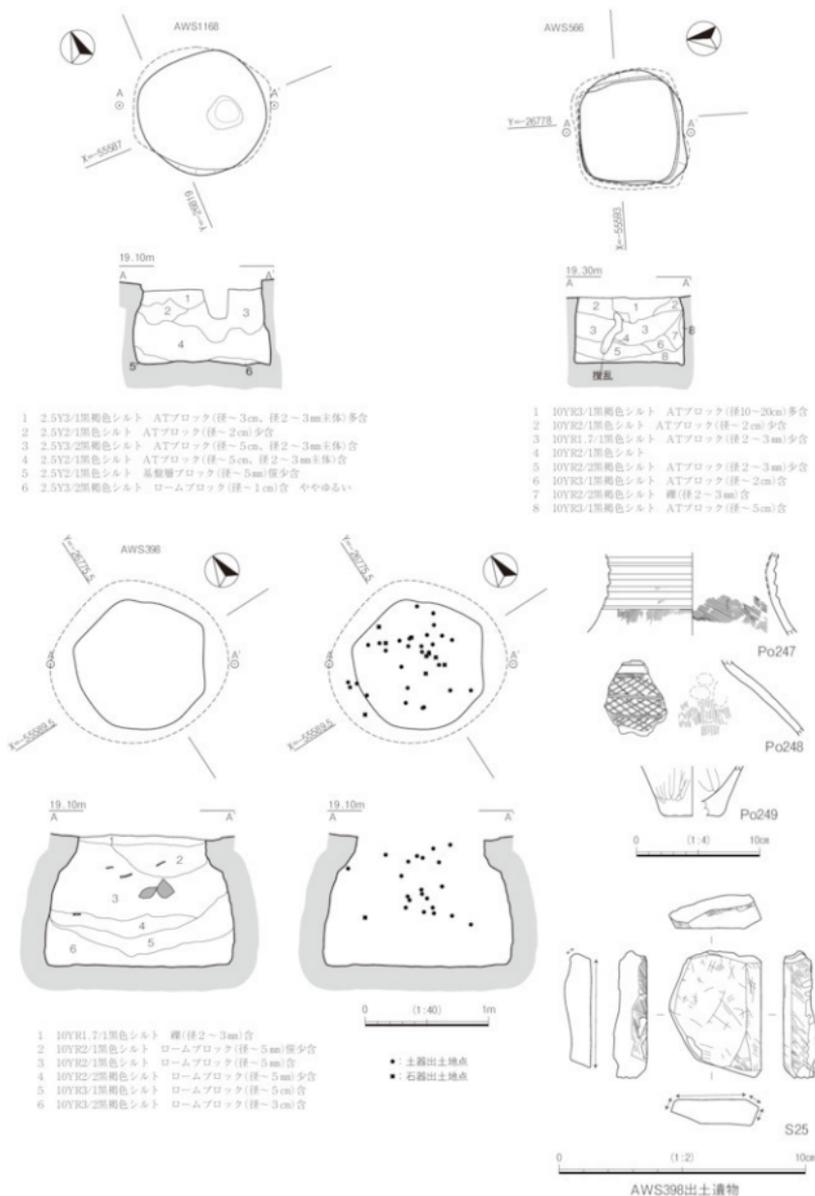


図100 A区 袋状土坑AWS1168・566・398 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

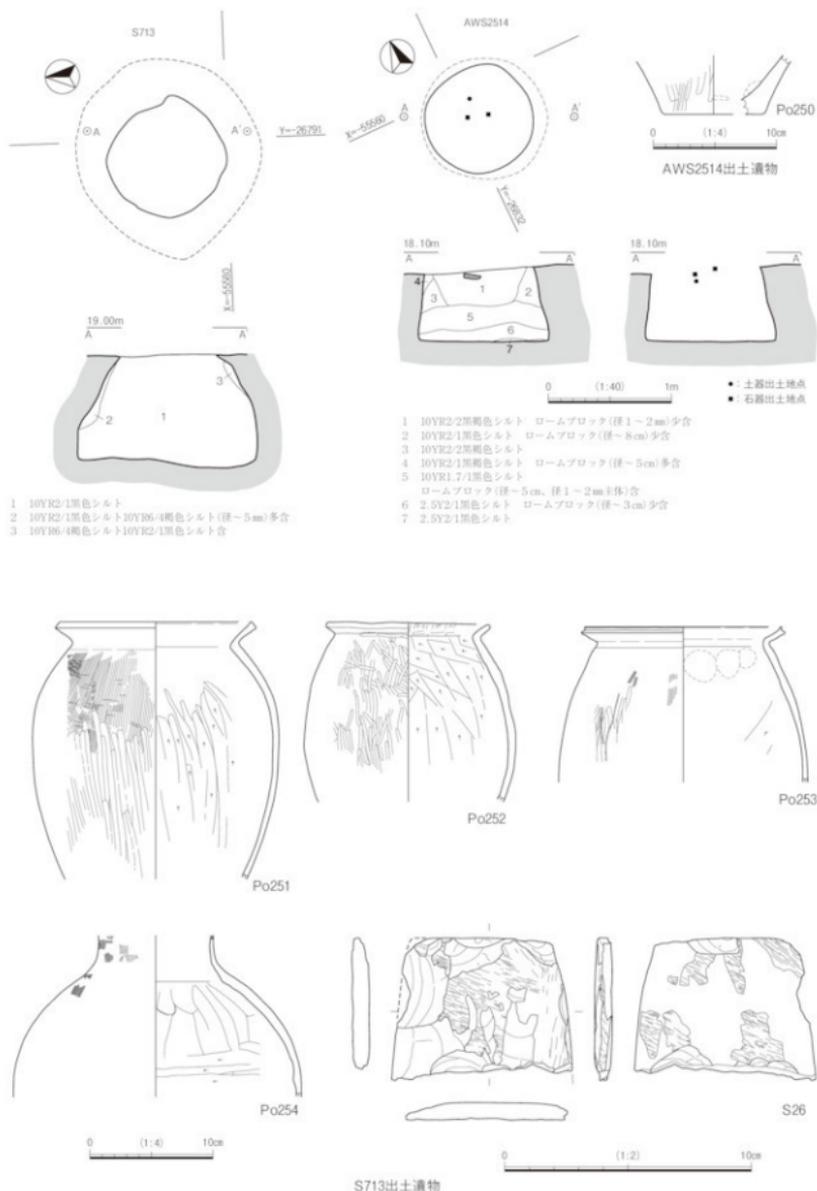


図101 A区 袋状土坑AWS713・2514 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

埋土から出土した石器として2点を図化した。S23は磨製石斧で、被熱による剥離や煤と思われる付着物がみられる。S24は安山岩製の石鋏で、礫素材で分厚い。表面の一部に研磨痕が認められるので、もとは砥石か磨石だったかもしれない。両面の大半が被熱剥離で覆われるが、いずれも打撃による剥離面に後行するため、石器の製作時点よりも後で被熱したことが明らかである。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期後葉の袋状土坑で、廃棄土坑に転用されたと考える。(八峠)

AWS1168(図100)

N22南西隅付近に位置する。

土坑の検出時の平面は東西方向に軸をもつ楕円形で、径0.97m～1.03mある。検出面からの深さは0.70mで、底面はローム層とその下の基盤層の際である。土坑の中央やや南東ではビットAWS2618を検出した。

断面形は底面から0.2m程度高い箇所に立ち上がりをもつ袋状で、検出面にかけて緩く内傾する。底面はやや起伏があるものの概ね平坦である。底面の平面はやや不整な円形で、径は0.99m～1.17mある。中央から周縁部にかけて緩く下がるものの明瞭な壁溝や底面のビットは確認できない。

埋土はローム層下の基盤層ブロックを含む5層と含まない6層が底面上に堆積し、その上にATブロックを含む黒～黒褐色シルトの1～4層が堆積する。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS566(図100)

O18北西部に位置する。

土坑の検出時の平面は不整な隅丸方形で、長軸0.90m、短軸0.84m、検出深は0.53mで、底面はローム層と下の基盤層の際である。

断面形は方形で、底面からの立ち上がりは僅かに内傾する。底面はやや起伏があるものの概ね平坦である。底面の平面は長軸1.13m、短軸0.83mの不整な隅丸方形で、壁面に接して幅0.03～0.10m、深さ0.02m程度の壁溝が周回する。

埋土はいずれも黒色から黒褐色シルトが主体で、はじめに8層が、南側では小塊状の6・7層が堆積し、検出面にかけて船底状に堆積する。1層は後世の掘削である。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS398(図100)

N18中央南端に位置する。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、径は1.03m～1.08m、検出面からの深さは1.05mで、底面はローム層下の基盤層中である。

断面形は、底面際に最大径をもつ袋状で、立ち上がりは緩く内湾する。底部の平面は不整な円形で、径は1.32m～1.45mある。細かな起伏はあるものの概ね平坦で明瞭な壁溝や底面のビットは確認できない。

埋土は底付近では黒褐色シルトの4～6層が船底状に堆積し、5・6層にロームブロックを含む。中・上層の1～3層は黒色シルトで、粒状のロームブロックを含む。

遺物は弥生土器片のほか、径0.2m程度の自然石が多く含まれる。出土層位は底面にちかい6層を除く5層から上位で、位置には規則性は認められないことから、遺構廃絶後、一定の自然堆積の段階を

経た後、廃棄土坑として使用されたと考える。弥生土器の壺Po247・248、底部Po249、砥石S25を図化した。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期後葉の袋状土坑で、廃棄土坑に転用されたと考える。(八峠)

S713(図101)

M20、N20に位置する。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、径は1.03m～1.05m、検出面からの深さは0.98mで、底面はローム層中である。

断面形は不整な袋状で、北側では底面から0.2m程直立した後には内傾するが、南側では検出面にかけて緩く内湾する。底面の中央やや北側が若干高く、周縁部に向けて下がるものの明瞭な壁溝や底面のピットは確認できない。底面の平面は不整な円形で、径1.30m～1.43mである。

埋土は黒色シルトを主体とし、若干の褐色シルト粒を含む。周縁部の一部には崩落土がある。

遺物は埋土中から出土した遺物として弥生土器の壺、甕、底部と石器を図化した。S26は磨製石器の基部で、扁平で幅広である。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期後葉の袋状土坑と考える。(八峠)

AWS2514(図101)

L24北東隅、土壌墓AWS2598の南西近くにある。周囲は標高17.9m～18mの西方向に下がる地形である。

土坑の検出時の平面はほぼ円形で、径は0.84m～0.89m、検出面からの深さは0.61mを測り、底面はローム層下の基盤層中である。

断面は底面付近に最大径をもつ袋状を呈し、東側の側壁際の立ち上がりは約75°である。底面の平面は円形で、径は1.01m～1.02mとほぼ円形である。底面にはやや窪みがあるものの概ね平坦で、壁溝や底面のピットは確認できない。埋土は底面から検出面まで黒～黒褐色シルトが堆積する。底面にちかい5～7層はロームブロックを含む水平方向の堆積である。その上から検出面まではブロックのほか径0.2m～0.3mの礫が含まれる。

遺物は遺構の中心部付近から浮いた状態で出土した。弥生土器の底部Po250のほか、掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期の袋状土坑と考える。(八峠)

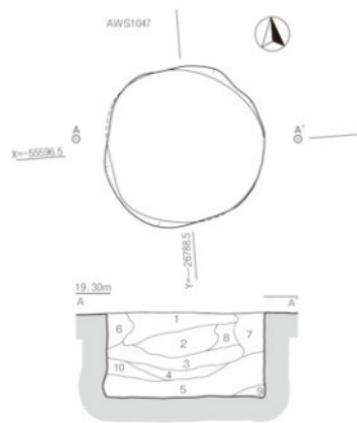
AWS1047(図102)

O19南西部、袋状土坑AWS86の北東隣に位置する。

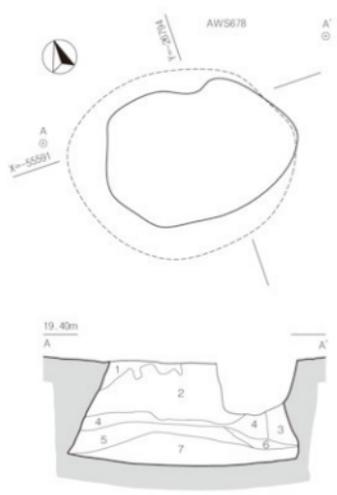
土坑の検出時の平面はやや不整な円形で、中央にローム、周縁に黒褐色の不整なドーナツ状の広がり、風倒木痕とも想定した。径は1.12m～1.17m、検出面からの深さは0.69mで、底面はローム層中である。

断面形は底面周縁部に最大径をもつフラスコ状で、底面はほぼ平坦、西側壁際の立ち上がりはほぼ垂直である。底面の平面は不整な円形で、径は1.25m～1.32mある。窪みや起伏はあるものの壁際まではほぼ平坦である。壁溝や底面のピットは確認できない。

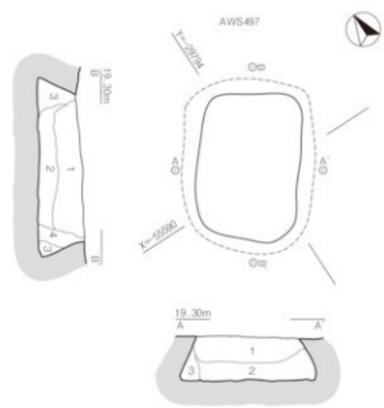
埋土は底面に黒色シルトの5層が、上にAT層に由来する浅黄～黄灰色の3・10層が、さらに上には径0.2m程のロームブロックを含む1・2層が堆積する。基本層序とは逆層順であることから、人為的



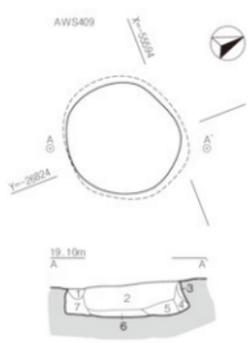
- 1 7.5YR6/4にぶい褐色シルト ロームブロック(径~20cm)多含
- 2 2.5Y4/1黄灰色シルト 2.5Y7/4成黄色砂混シルトブロック(径~20cm)多含
- 3 2.5Y7/4成黄色砂混シルト 2.5Y3/1黒褐色シルトブロック(径~5cm)多含
- 4 2.5Y3/1黒褐色シルト 2.5Y7/4成黄色砂混シルトブロック(径~5cm)多含
- 5 2.5Y2/1黒色シルト
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色シルト ATブロック(径~5cm)多含
- 7 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm)多含
- 8 2.5Y4/2暗灰黄色シルト ATブロック(径~5cm)多含
- 9 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径2~3cm)多含
- 10 2.5Y4/1黄灰色シルト ATブロック(径~20cm)多含



- 1 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径~10cm)混
- 2 10YR8/4成黄褐色シルト ATブロック(径~10cm)僅少含
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト ロームブロック(径~10cm)多含
- 4 10YR8/4成黄褐色シルト ATブロック(径~10cm)多含
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色シルト ATシルト(径~10cm)多含
- 6 10YR8/4成黄褐色シルト ATブロック(径~10cm)多含
- 7 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径~2cm, 径1~2mm主体)多含



- 1 10YR7/1黒色シルト AT、ロームブロック(径~1cm)少含、礫(径2~3mm)多含
- 2 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径2~3mm主体)、礫(2~3mm)多含
- 3 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径2~3mm主体)多含
- 4 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径2~3mm)多含



- 1 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径~5mm)少含
- 2 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径~5mm)僅少含
- 3 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径~5mm)少含
- 4 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径~5mm)少含
- 5 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロック(径~1cm)少含
- 6 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径~1cm)多含
- 7 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロック(径~5mm)少含



図102 A区 袋状土坑AWS1047・678・497・409 平面・断面

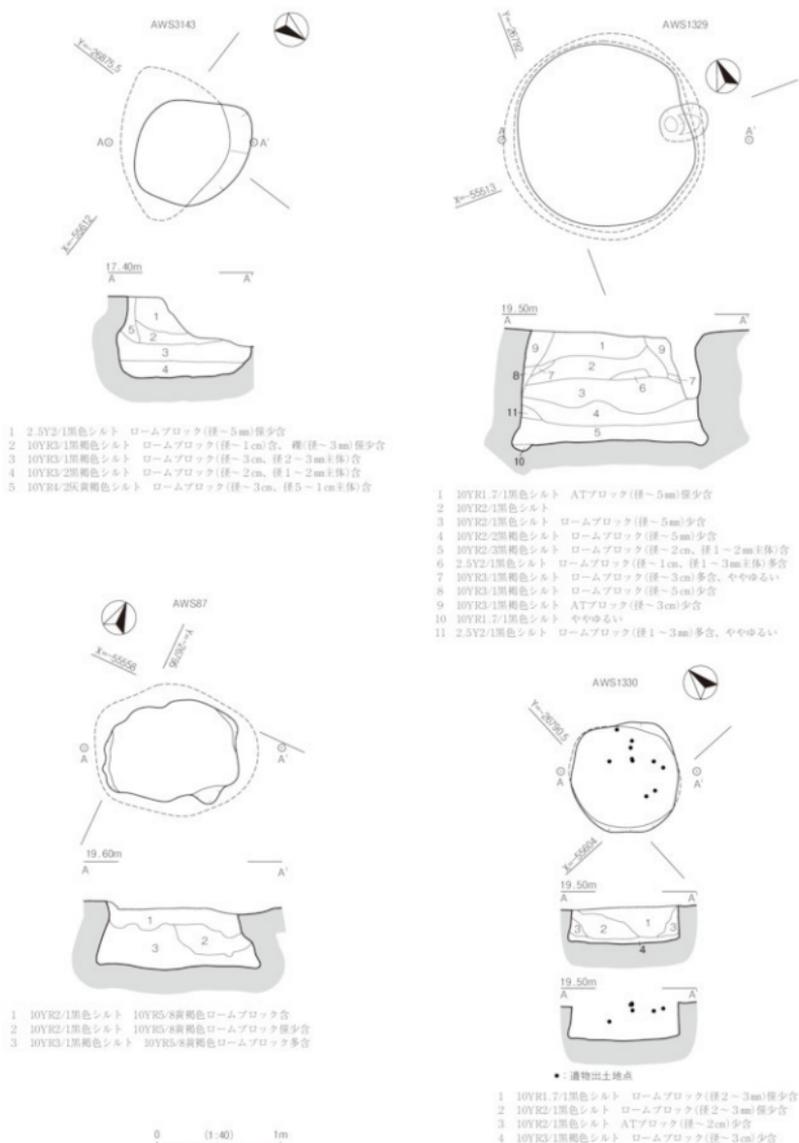


図103 A区 袋状土坑AWS3143・1329・87・1330 平面・断面・遺物出土状況

に埋められたと考える。隣接する袋状土坑の一方に基本層序と逆の堆積が確認できるのはAWS678・AWS497と同様である。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS678(図102、PL23)

O20中央北端、袋状土坑AWS497が南隣に位置する。

土坑の検出時の平面は東西方向に軸をもつ、中央付近が浅黄褐色で縁辺が黒褐色、東側に黒色シルトが重なる不整な楕円形の広がりとして検出し、当初は風倒木痕とも想定した。東側は後世の掘乱により掘削される。検出面での規模は径1.02m～1.59m、検出面からの深さは0.86mある。

底面は平滑ではあるが緩く中央に下がり、ローム層下の基盤層である。立ち上がりは70°程度内傾するフラスコ状であるが、底面の平面は南に軸をもつ不整な楕円形で、径は1.52m～1.88mある。底面中央はやや窪み、周縁部にかけて緩く立ち上がる。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は底面に黒色シルトの7層が、中央部分が盛り上がりながら堆積し、その上に浅黄から暗灰黄色シルトの2～6層が覆う。5層は黒褐色シルトからATまでの漸移層に、2・4・6層はATとロームの混和土である。基本層序と逆層位であること、中央から周縁に向かい堆積していることから人為的に埋められたと考える。隣接する袋状土坑の一方に基本層序と逆の堆積が確認できるのはAWS1047・AWS86と同様である。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS497(図102、PL23)

O20中央北端に位置する。

土坑の検出時の平面は北東から南西方向に軸をもつ不整な隅丸長方形で、当初は木棺墓の可能性も考えた。長軸1.27m、短軸0.83m、検出面からの深さは0.36mで、底面はローム層中である。

断面形は浅い台形で、西側壁際の立ち上がりは約70°である。底面は窪みや起伏はあるものの壁際までは平坦である。底面の平面は北東から南西方向に軸をもつ不整な隅丸長方形で、長軸1.47m、短軸1.08mである。底部東側の立ち上がりの際に僅かに窪むものの概ね平坦で、壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は、はじめに周縁から比較的AT・ロームブロックを多く含む3・4層が、中央部に粒状のAT・ロームブロックを含む1・2層が水平方向に堆積する。壁際の崩落の後、周辺の土壌が流入したと考える。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS409(図102)

O23ほぼ中央で検出した。掘立柱建物42のP1とP2の間に位置する。

土坑の検出時の平面は概ね円形で、径0.89m～0.94m、検出面からの深さは0.27mを測る。底面はローム層中である。

底面中央から周縁部にかけて緩く0.1m程上がり、内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は概ね平坦である。底面の平面はやや不整な円形で、径0.94m～1.06mである。底部中央が僅かに窪むものの概ね平坦で、壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒色～黒褐色のシルトを主体とし、底面から周縁部には小単位の堆積で、粒状のAT・ロームブロックが含まれる。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS3143(図103)

Q28北側で検出した。周囲は道路遺構により上面、西側ともに掘削され、段状の地形に改変される。

土坑の西側を段差により掘削される。検出時の平面は整形な方形の広がりとして検出した。径0.85m～1.07m、検出面からの深さは0.53mで、底面はローム層と下の基盤層の境である。

断面形は、東側は底面から0.3m程度上位に最大径をもつ袋状を呈する。底面はやや起伏があり、底面の平面は壁との際が明瞭でなく、北東から南西方向に軸をもつ不整な楕円形で、径0.85m～1.24mである。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトが主体で、3・4層は2～3cmのロームブロックを含む黒褐色シルトの水平堆積、その上の検出面までは壁面が崩落しながら流入土が堆積したと考える。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS1329(図103)

Q20北東側で検出した。東側をピットAWS3426に掘削される。

土坑の検出時の平面は北西から南東方向に軸をもつ不整な楕円形状で、径1.08m～1.23m、検出面からの深さは0.88mある。底面はロームと下の基盤層の境である。

底面中央がやや高く、周縁部に向かい緩く下がる。立ち上がりは垂直からやや内傾する袋状である。底面の平面は円形で、径1.62m～1.68mである。窪みや起伏はあるものの壁際までは平坦である。壁面に接して幅0.08～0.14m、深さ0.04m程度の壁溝が周回する。底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体とし、ブロックの多少により上下に分けられる。底面から3層まではAT・ロームブロックを比較的多く含み、水平方向の人為的な堆積である。間に使用面は認められないものの、2層から検出面の周縁部には壁面の崩落土が混入することから、上位はその後堆積したと考える。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS87(図103)

O20に位置し、竪穴建物12の壁溝を掘削する。

土坑の検出時の平面は東西方向に軸をもつ不整な楕円形で、径0.77m～1.13m、検出面からの深さは0.57mである。底面はローム層中である。

断面形は袋状で、西側は83°、東側は69°で、西側は底面から0.3mほど上で外方に屈曲するが、東側は内湾しながら緩く立ち上がる。底面の平面は不整な楕円形で径1.05m～1.33mである。底面の中央付近と壁際がやや窪むものの概ね平坦の範囲であり、壁溝や底面のピットとまではいえない。

埋土は黒色または黒褐色シルトを主体とし、3層はロームブロックを多く含み、他の層との境も起伏が大きいことから、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は埋土中から縄文土器が出土したものの、土坑に伴う遺物とは考えにくく、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS1330(図103)

P19・20に位置する。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、径0.86m～0.96m、検出面からの深さは0.29mある。底面はローム層中である。

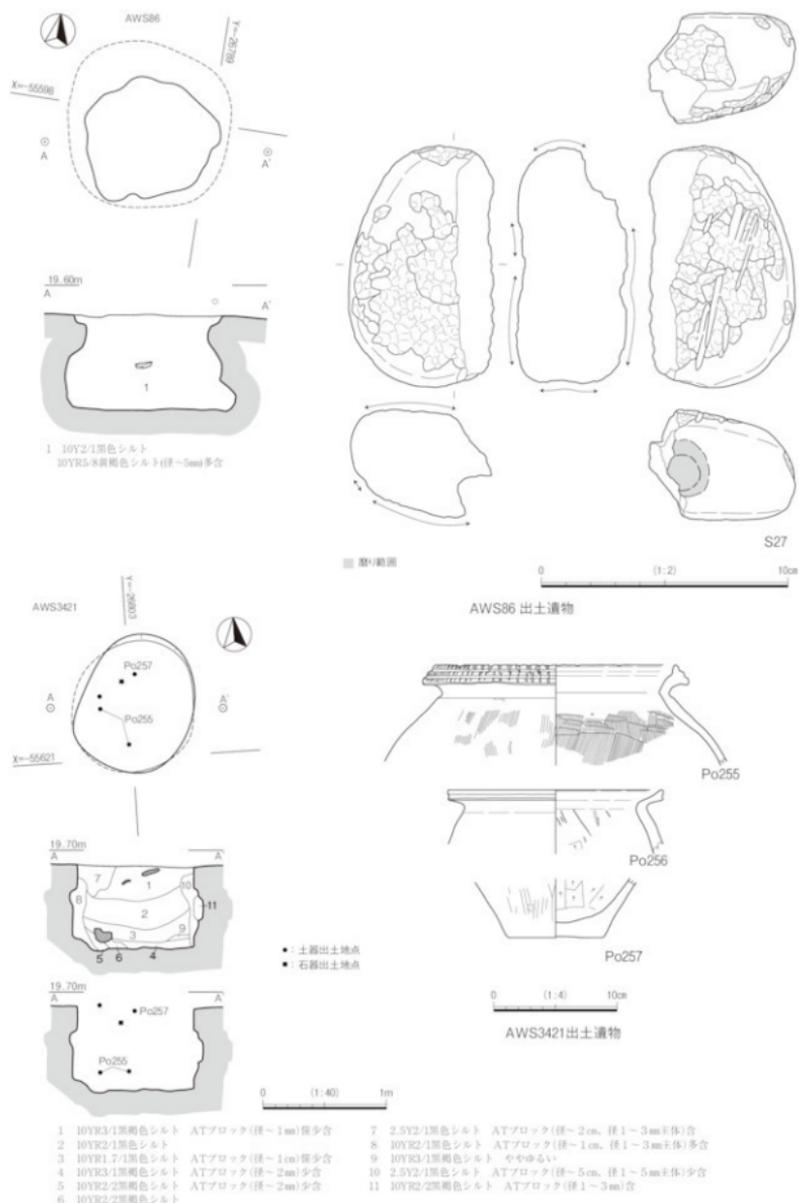


図104 A区 袋状土坑AWS86・3412 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

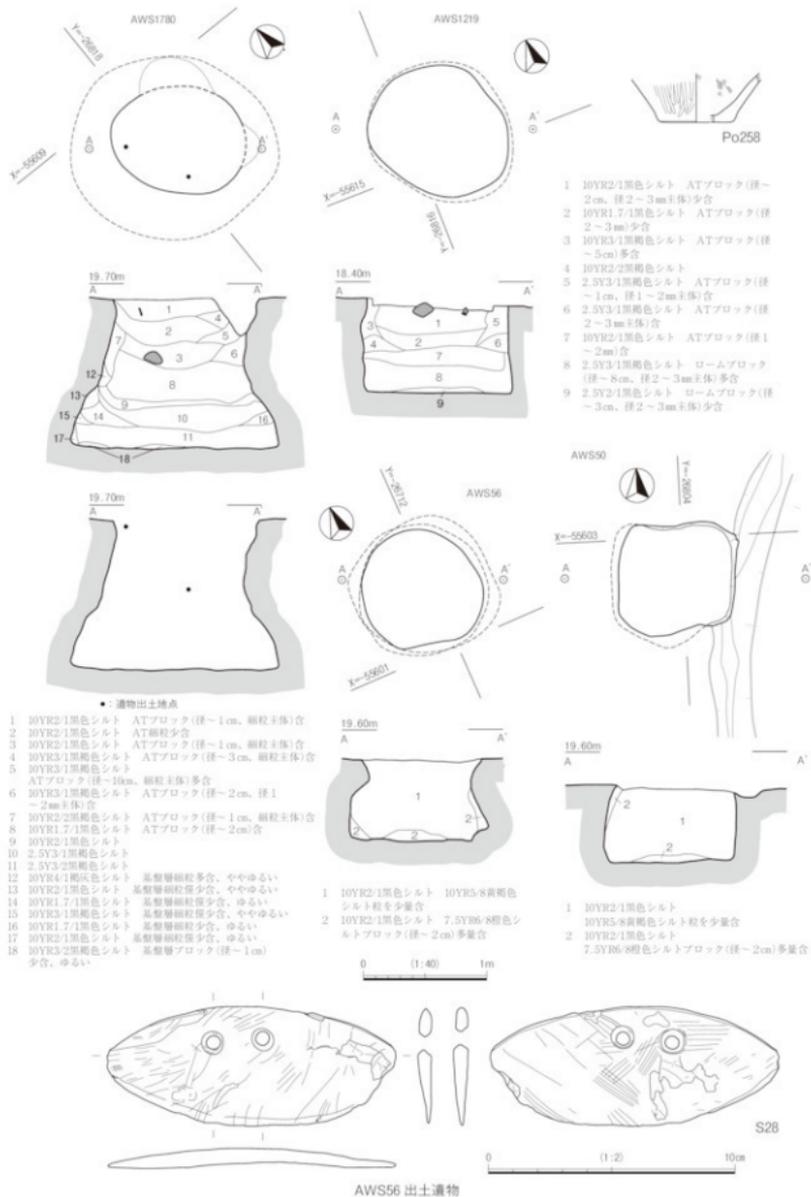


図105 A区 袋状土坑AWS50・56・1219・1780 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

断面形は浅い台形で、西側壁際の立ち上がりは約85°である。底面の平面はやや不整な円形で、径は0.83m～0.96mである。底面は多少の起伏があり、中央に向かい緩く下る。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は底面及び周縁部にロームブロックを含む3・4層が、検出面まで粒状のロームブロックを含む1・2層が堆積する。

遺物は遺構の中央から北東側、底面から浮いた状態で出土した。出土した点数は多いもののいずれも小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS86(図104)

O19・20に位置する。袋状土坑AWS1047の南西隣に位置する。

土坑の検出時の平面は複数の突出部をもつ不整な円形で、径0.98m～1.05m、検出面からの深さは1mである。底面はローム層中である。

断面形は歪な袋状で、西側は底面から0.4mまで直立したのち括れるが、東側では底面付近のみ突出し、上位にかけても壁面の起伏が大きい。底面の平面は不整な隅丸方形で、長軸は1.42m、短軸は1.28mである。底面は起伏があるものの概ね平坦である。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒色シルトが主体で、ATブロックを含む。隣接する袋状土坑の一方に基本層序と逆の堆積が確認できるのはAWS678とAWS497と同様である。

遺物は埋土中から敲石S27が出土したほかは、土器が小片のみで図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

AWS3421(図104、PL103)

R21北東端、掘立柱建物76の北西隣に位置する。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、径は0.9～1.03m、検出面からの深さは0.7mで、底面はローム層下の基盤層である。

断面形は東西ともに底面際から0.2m～0.4m上位が外側に突出する不整な長方形で、壁面には細かな起伏が多く、崩落によるローム層が混和する。底面の平面は不整な円形で、径は1.01m～1.1mである。底面は周縁部、壁面際が他の袋状土坑に比べて鈍角で、底面の小さな起伏も多い。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体とする。周縁部から底面にかけて崩落のATブロックを含む層が、中央は船底状に堆積する。径0.1m～0.2mの礫が含まれる。

遺物は中央から西側の周縁部付近、やや浮いた位置と遺構の上位等から出土した。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期後葉の袋状土坑と考える。(八峠)

AWS1219(図105)

Q22はほぼ中央に位置する。

土坑の検出時の平面は南北方向に主軸をもつ不整な楕円形で、径は0.97m～1.19m、検出面からの深さは0.76mある。下面はロームと下の基盤層との境である。

断面形は、壁面の遺構上部が崩落しており、立ち上がりは垂直に近い。一部立ち上がる途中が広がる不整な袋状を呈する。底面の平面は南北に長軸をもつ不整な楕円形で、径は1.06m～1.26mである。底面はほぼ平坦である。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は底面上の7～9層がロームブロックを比較的多く含む黒～黒褐色シルトが堆積する。7層の

上面で硬化面等使用の痕跡は確認していないものの、不自然な水平方向の堆積のため、人為的に埋めたと考える。遺構周縁部の堆積は、壁面のATブロックを含む3～6層と、自然石や土器片を含む1・2層がある。

遺物は埋土中から弥生土器底部Po258が出土した。他にも出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。

遺物の形状、埋土及び遺構の形状から弥生時代中期の袋状土坑と考える。(八峠)

AWS1780(図105)

P22、Q22の掘立柱建物73の中央やや東に位置する。土坑の東側を断面V字状の掘削を受けていた。

検出時の平面は北西から南東方向に軸をもつ楕円形状で、径が0.87m～1.1m、検出面からの深さは1.23mで、底面はローム層と下の基盤層の境である。

断面は不整なフラスコ状で、西側壁際の立ち上がりは約75°である。底面の平面は不整な楕円形で、径は1.48m～1.69mで、緩い起伏があるもののはほぼ平坦である。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は底面にブロックをほとんど含まない黒褐色シルトが、壁面際に崩落とみられる基盤層ブロックを含む層が堆積する。10層から検出面までは黒色シルトを主体にATブロックを含む層が船底状に堆積し、壁面が崩落しながら埋没したと考える。

遺物は埋土中から弥生土器片が出土した。埋土には小礫も多く含まれることから、いずれも廃棄されたと考える。

埋土および遺構の形状から弥生時代の袋状土坑と考える。一定期間自然堆積した後に廃棄土坑に転用されたと考える。(八峠)

AWS56(図105、PL103)

P22北東、竪穴建物51の南隣に位置するものの切り合い関係はない。

土坑の検出時の平面は不整な円形で、径0.95m～1m、検出面からの深さは0.8mである。底面はローム層中である。

断面は不整な袋状で、西側は底面から0.3m垂直に立ち上がりその上で括れるが、東側の底面隅は段状に掘り残す。底面の平面は不整な円形で、径は1.1m～1.16mである。底面にはやや起伏が多く、壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒色シルトを主体に、黄褐色シルトのブロックを含む。

遺物は埋土中から石包丁が出土した。

埋土及び遺構の形状から弥生時代中期後葉の土坑と考える。(八峠)

AWS50(図105)

P21中央東側、竪穴建物13の西側壁溝と重複して検出した。建物に附随する遺構なのかは不明瞭である。

土坑の検出時の平面は不整な方形で、長軸0.94m、短軸0.9m、検出面からの深さは0.67mある。底面はローム層中である。

断面は不整な袋状で、底面から外側に突出しながら立ち上がる。底面の平面は不整な方形で、長軸1m、短軸0.99mである。底面にはやや起伏がある。壁溝や底面のピットは確認できない。

埋土は黒色シルトを主体とし、黄褐色シルトのブロックを含む。

遺物は埋土中から出土したものの、小片で図化に耐えず、遺構の詳細な時期は不明である。(八峠)

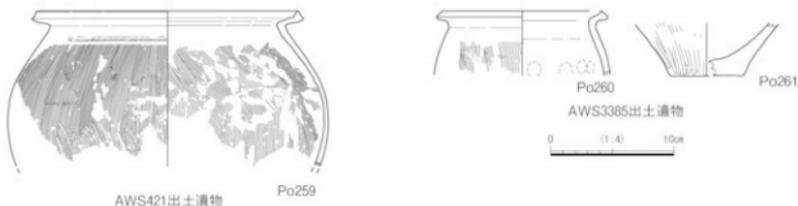
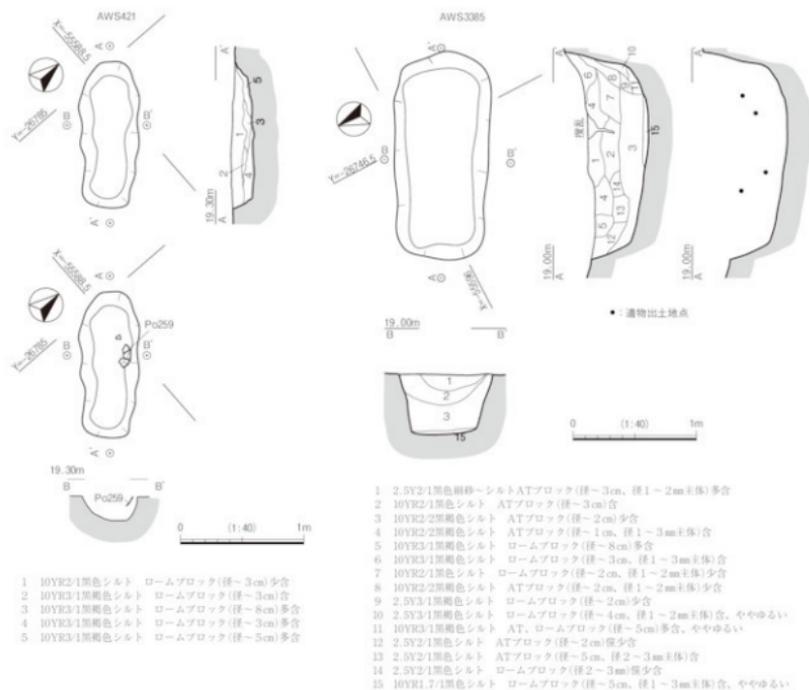


図106 A区 土墳墓 AWS421・3385

土墳墓・木棺墓

AWS3385(図106)

O15の中央西側に位置し、遺構の北西側は耕地段差により段状に掘削された状態で検出した。

検出時の平面形は東西に軸をもつ隅丸方形で、長軸1.70m、短軸0.78m、検出面からの深さは0.68mで、底面の中央付近はローム層下の基盤層である。

断面形は東西から底面に向かい低くなる船底状である。底面の平面形は隅丸方形で、長軸1.43m、短軸は東側0.60m、西側0.53mで東側が広い。主軸はN-28°-Wである。

埋土は底面付近にブロックの少ない黒褐色シルトの3層が堆積し、東側および3層の上層から検出面にかけて小単位に分かれ、人為的に埋められたと考えるが、平面・断面ともに木棺の痕跡は確認で



図107 A区 土壌墓 AWS330・677・3374 平面・断面・遺物出土状況

きない。

遺物は埋土中位から弥生土器が出土した。堆積の過程で入り込んだと考える。弥生土器の甕Po260、底部Po261を図化した。

人骨は遺存していないが、南東方向に頭位を向けた弥生時代中期の土壌墓と考える。(八峠)

AWS421(図106)

N19の中央南側に位置する。

検出時の平面は北西から南東方向に軸をもつ長方形で、長軸1.20m、短軸0.48m、検出面からの深さは0.19mで、底面はローム層中である。

断面は長軸方向が浅い逆台形、短軸方向は船底状である。底面の形状は検出面と同じ方向に軸をもつ不整な楕円形で、長軸1.00m、短軸は南東・北西ともに0.26mである。主軸方向はN-44°-Wである。

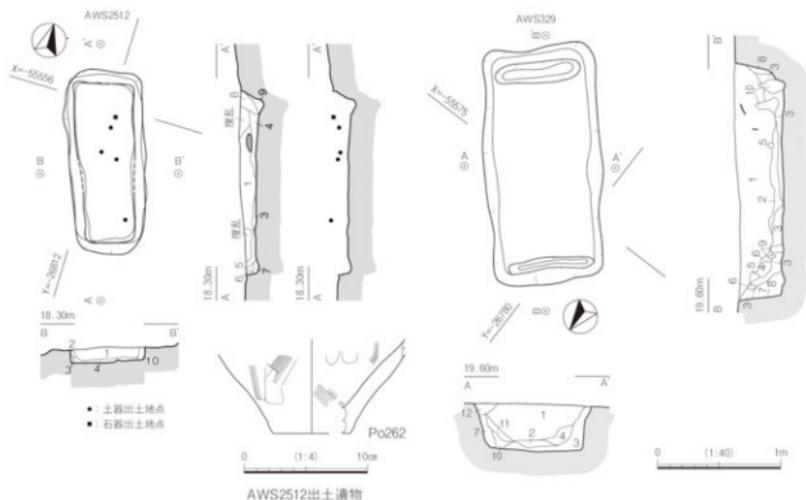
埋土は、底面付近の黒褐シルトにロームブロックを多く含む4・5層と、検出面にちかい黒色シルトを主体とする1層に分かれる。間の3層は黒褐色シルトに大粒のロームブロックを含む。平面・断面ともに木棺の痕跡は確認できない。

1層からは弥生土器が出土した。弥生土器の甕Po259を図化した。

人骨は遺存していないが、遺構の形状と土層の堆積、遺物から北西方向に頭位を向けた弥生時代中期の土壌墓と考える。(八峠)

AWS3374(図107)

Q17中央南側で、南に袋状土坑AWS3373に接するが切り合いはない。



- ：土器出土地点
■：石器出土地点
- AWS2512出土遺物**
- 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロック(径-5mm、AT主体)少含
 - 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-5mm)含
 - 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含
 - 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-5mm、ローム主体)少含
 - ※1-4 棺内の遺物
 - 10YR3/2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含
 - 10YR3/2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)含
 - 10YR4/3にぶい黄褐色シルト ATブロック(径-1cm)含
 - 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-5mm)少含
 - 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-5mm)含
 - 10YR3/2黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少含
 - ※5-10 棺裏込土か

- 10YR2/1黒色シルト 10YR4/4褐色シルト粒含
- 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/4褐色シルト粒多含
- 10YR4/1褐色シルト 10YR4/4褐色シルト小ブロック多含
- 10YR2/1黒色シルト
- 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR4/1褐色シルト粒多含
- 10YR3/1黒褐色シルト
- 10YR4/1褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルト小ブロック多含
- 10YR3/2黒褐色シルト 10YR4/4褐色シルト粒含
- 10YR2/1黒色シルト 根による攪乱
- 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/4褐色シルト小ブロック含
- 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルト小ブロック含
- 10YR4/2灰黄褐色シルト 後世の攪乱

図108 A区 木棺墓 AWS329・2512

検出時の平面は南北方向に軸をもつ、やや不整な楕円形で、長軸1.04m、短軸0.66m、検出の深さは0.12mで、底面はローム層中である。

断面形は皿状で、底面は木根状の攪乱による起伏が大きい。底面の平面形は隅丸長方形で、長軸0.87m、短軸は南側・北側とも0.43mである。主軸方向はN-14°-Eである。

埋土は黒褐色から灰黄褐色のシルトを主体とする。底面付近の2・3層はロームブロックが多く、その上の1層は比較的少ない。人為的な堆積ではあるが、平面・断面ともに木棺の痕跡は確認できない。

遺物は掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化し得ない。

人骨は遺存していないが遺構の形状と土層の堆積から弥生時代の土壌墓と考える。(八時)

AWS677(図107)

P19の中央北側に位置する。

検出時の平面は東西方向に軸をもつ隅丸長方形で、長軸1.16m、短軸0.78m、検出面からの深さは0.41mで、底面はローム層中である。

断面形は逆台形、底面の平面形は隅丸長方形で、長軸0.95m、短軸は西側0.58m、東側0.52mで西側が広い。主軸方向はN-30°-Eである。

埋土はロームブロックのやや多い3・4層が底面と壁際に、ブロックの少ない2層が中央から西側に堆積し、検出面にかけてブロックの少ない1層が堆積する。人為的な堆積ではあるが、平面・断面ともに木棺の痕跡は確認できない。

遺物は掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化し得ない。

人骨は遺存していないが、遺構の形状と土層の堆積から弥生時代の土壌墓と考える。(八峠)

AWS330(図107)

P19の中央西側にあり、竪穴建物48の東側と重なる。

検出時の平面形は南北方向に軸をもつ不整な楕円形で、長径1.54m、短径0.84m、検出面からの深さは0.36mあり、底面はローム層中である。

断面形は長軸が起伏があるものの概ね平坦で壁面は緩く立ち上がり、短軸は船底状である。底面は長軸1.11m、短軸0.51mで北側が広い。主軸方向はN-18°-Eである。

埋土は黒色から黒褐色のシルトを主体とし、褐色シルトのブロックを含む。

遺物は掘り下げ中に出土したものの、いずれも小片で図化し得ない。

人骨は遺存していないが、遺構の形状と土層の堆積から弥生時代の土壌墓と考える。(八峠)

AWS329(図108)

P19の中央付近に位置する。

検出時の平面は北西から南東方向に軸をもつ不整な長方形で、長軸1.89m、短軸0.97m、検出面からの深さは0.41mで、底面はローム層中である。

断面は長軸・短軸方向とも逆台形である。底面の形状はほぼ長方形で、長軸1.79m、短軸方向はほぼ同じで0.74m～0.76mある。南西側に最大幅0.18m、長さ0.81m、深さ0.03m、北東側に最大幅0.08m、長さ0.19m、深さ0.02mの小口材を据える穴を確認した。主軸方向はN-20°-Wである。

埋土は黒色から黒褐色のシルトを主体とする。長軸方向の壁際では、小口付近から検出面にかけて内側に傾斜しており、裏込めの土が十分ではない状況が推察される。側板については両小口と堆積状況が類似するものの、底面上では側板の痕跡は確認していない。

人骨は遺存していない。掘り下げ中に遺物は出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。

遺構の形状と土層の堆積から南西方向に頭位を向けた弥生時代の木棺墓と考える。(八峠)

AWS2512(図108)

K22の南東隅に位置する。

検出時の平面は南北方向に軸をもつ不整な長方形で、長軸1.49m、短軸0.97m、検出面からの深さは0.19mで、底面はローム層中である。

断面は長軸・短軸方向ともに浅い逆台形である。底面の形状は北側が広がる長方形で、長軸1.29m、短軸は0.38m～0.44mである。主軸方向はN-20°-Wである。

埋土は中央部が黒色シルト、周縁部及び底部が黒褐色シルトを主体とし、1層の底面は概ね水平で、壁際にかけて垂直方向に屈折して立ち上がる。

人骨は遺存していない。遺物は遺構内の1層から弥生土器片が出土した。このうち、弥生土器底部Po262を図化した。

底面には木棺の痕跡は明瞭に残されていないものの、遺構の形状と土層の堆積から北方向に頭位を向けた弥生時代の木棺墓と考える。(八峠)

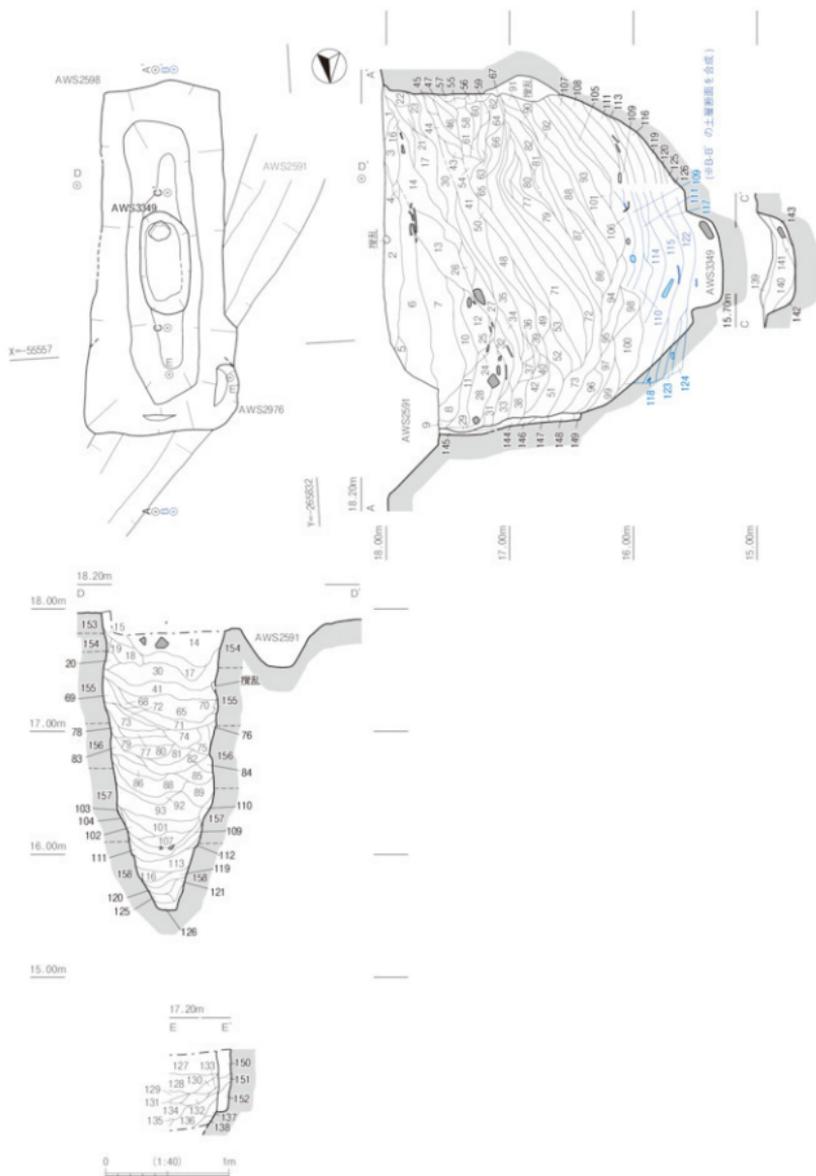


図109 A区 土壌基 AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976(1)

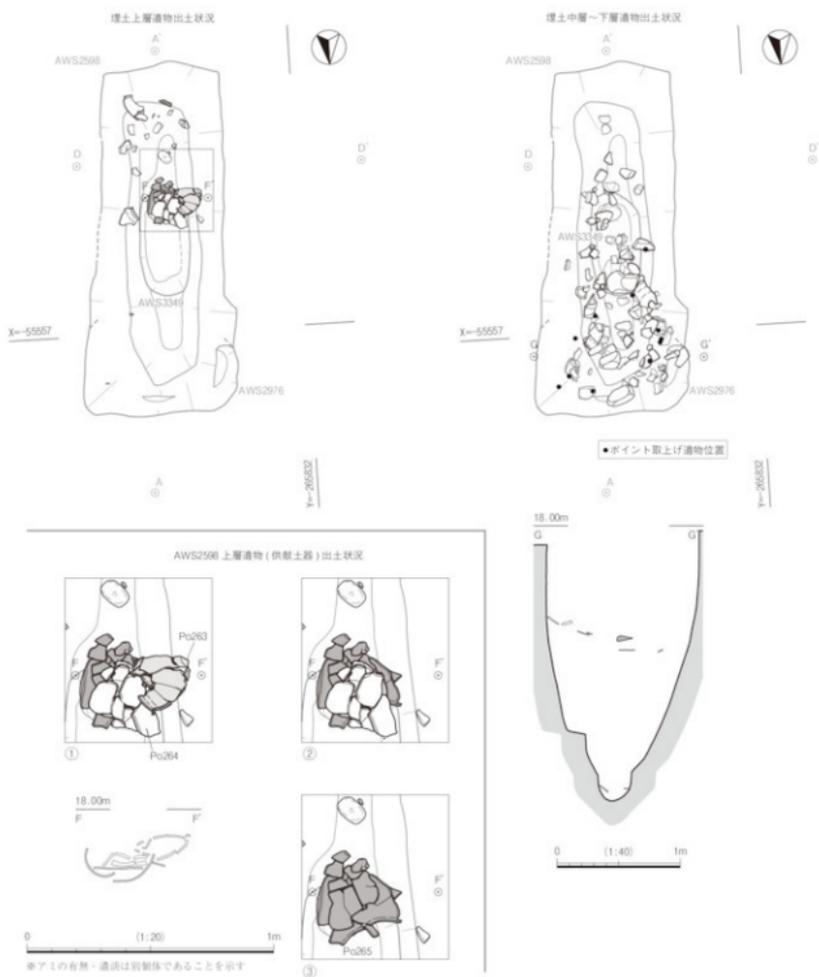


図110 A区 土墳墓 AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976(2)

表2 A区 土壌基AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976土層注記(1)

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	64	10YR2/1褐色シロト	ローム、DKPブロック(径=2cm)少
2	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少	65	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少
3	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少	66	10YR3/2暗褐色シロト	ローム、DKPブロック(径=1cm)少
4	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	67	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少
5	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	68	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少、ややゆるい
6	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少	69	10YR2/1褐色シロト	ロームブロック(径=1cm)少
7	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少	70	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少
8	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少	71	10YR3/1暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=5cm)少、 10YR2/1褐色シロトブロック(径=1cm)少
9	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	72	10YR6/6明黄褐色シロト	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少 ローム由来土を主体とする堆積
10	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	73	10YR3/1暗褐色シロト	ロームブロック(径=1cm)少
11	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=1cm)僅少	74	10YR3/1暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm)少、 径=1cm主体多
12	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	75	10YR3/1暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=1cm)少、ややゆるい
13	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	76	10YR3/3い黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=3cm、 径=2cm主体多)
14	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ローム、DKPブロック(径=1cm)少、 ややゆるい	77	10YR4/1褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、 径=1cm主体多)
15	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=1cm)少	78	10YR4/1褐色シロト	AT、ロームブロック(径=1cm)少
16	10YR1/7.1灰色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	79	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、径=1cm主体多)、 10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少
17	10YR3/1暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=1cm、径=5cm主体)少	80	10YR7/6明黄褐色シロト	AT、DKPブロック(径=2cm、径=1cm主体)少 ローム由来土を主体とする堆積
18	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=5cm)少	81	10YR3/1暗褐色シロト	AT、DKPブロック(径=2cm、径=1cm主体)少
19	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=5cm)少	82	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=3cm、 径=1cm主体多)、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少
20	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=5cm)少	83	10YR3/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、 径=1cm主体多)、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少
21	10YR2/1褐色シロト	AT、ロームブロック(径=5cm)少	84	10YR4/2灰黄褐色シロト	DKPブロック(径=1cm)少
22	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少	85	10YR2/1褐色シロト	AT、DKPブロック(径=3cm)多
23	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=5cm)少、ややしまる	86	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、 径=1cm主体多、ゆるい)
24	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少、ややゆるい	87	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=1cm)少、ややゆるい
25	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	88	10YR3/1暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、 径=5mm主体多、ゆるい)
26	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	89	10YR3/1暗褐色シロト	AT、ローム、DKPブロック(径=1cm、 径=5mm主体)少、ややゆるい
27	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	90	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、径=1cm主体)少
28	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少、ややゆるい	91	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、径=1cm主体)少
29	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	92	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=1cm、 径=5mm主体多、ゆるい)
30	7.5YR7/6明黄色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=1cm)少、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=2cm)少、ややしまる ローム由来土を主体とする堆積	93	10YR3/1暗褐色シロト	AT、DKPブロック(径=2cm、径=5mm主体)少
31	10YR2/1褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、径=5mm主体)少	94	10YR2/1褐色シロト	AT、DKPブロック(径=5cm、径=2.5cm主体)少、ややゆるい
32	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	95	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少、ゆるい
33	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ローム、DKPブロック(径=3cm)少	96	10YR7/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=1cm)少 ローム由来土を主体とする堆積
34	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=2cm、径=5mm主体)少	97	2.5YR/6暗黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=1cm)少、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積
35	10YR6/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=2cm)少、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=5cm)少 ローム由来土を主体とする堆積	98	2.5YR/3黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ゆるい ローム由来土を主体とする堆積
36	2.5YR/6暗黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=2cm)少、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=5cm)少 ローム由来土を主体とする堆積	99	2.5YR/4.1い黄褐色シロト	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少 基盤層ブロック(径=5cm)少、ゆるい
37	10YR4/2灰黄褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	100	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ローム、DKPブロック(径=2cm、 径=1cm主体多、ゆるい)
38	10YR3/2暗褐色シロト	AT、ロームブロック(径=4cm、径=1cm主体)少	102	10YR3/2灰黄褐色シロト	AT、ローム、DKPブロック(径=2cm、 径=1cm主体多、ゆるい)
39	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	103	10YR4/1褐色シロト	AT、DKPブロック(径=2cm)少、ゆるい
40	10YR4/2灰黄褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少	104	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)僅少、ややゆるい
41	10YR4/2灰黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=4cm、径=2cm主体)多、ややしまる	105	10YR3/1暗褐色シロト	AT/ブロック(径=5cm)少、10YR4/2灰黄褐色シロトブロック(径=2cm)少、ゆるい
42	2.5YR/2暗黄褐色シロト	AT/ブロック(径=2cm)少	107	10YR3/2灰黄褐色シロト	AT、DKPブロック(径=3cm、径=1cm主体)多、ゆるい
43	2.5YR/6暗黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)僅少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積	108	10YR4/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5cm)少、ゆるい
44	2.5YR/6暗黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=3cm)少、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積	109	10YR4/1褐色シロト	ローム、DKPブロック(径=1cm、径=5mm主体)少、ゆるい
45	10YR5/2灰黄褐色シロト	ロームブロック(径=1cm)多	110	12.5YR/8前黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=3cm)少、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積
46	2.5YR/1暗黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=2cm)少、10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積	111	10YR5/3.1い黄褐色シロト	基盤層ブロック(径=5mm)少、ゆるい
47	2.5Y7/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい AT、ローム由来土を主体とする堆積	112	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5mm)少、ゆるい
48	2.5Y4/2暗黄褐色シロト	AT/ブロック(径=2cm)少	113	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=1cm)少、ゆるい
49	10YR3/1暗褐色シロト	ロームブロック(径=2cm)少	114	10YR3/1暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5mm)少、ゆるい
50	10YR6/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	AT/ブロック(径=5cm、径=2cm主体)少 ローム由来土を主体とする堆積	115	10YR2/1褐色シロト	AT、DKPブロック(径=2cm)少、ややゆるい
52	2.5Y3/2暗黄褐色シロト	AT、ロームブロック(径=3cm、径=1cm主体)少	116	10YR2/1褐色シロト	DKPブロック(径=3cm、径=5mm主体)少、ゆるい
53	10YR2/1褐色シロト	基盤層ブロック(径=5mm)僅少、ややゆるい	117	10YR6/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=2cm)少、ややゆるい DKP由来土を主体とする堆積
54	10YR4/2灰黄褐色シロト	ロームブロック(径=1cm)少			
55	2.5YR/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)多 AT、ローム由来土を主体とする堆積			
56	10YR4/1褐色シロト	ロームブロック(径=5mm)多			
57	2.5YR/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積			
58	2.5YR/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積			
59	2.5Y7/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少 ローム由来土を主体とする堆積			
60	2.5YR/6明黄褐色シロト-粘土(シロト主体)	10YR3/1暗褐色シロトブロック(径=1cm)少、ややゆるい ローム由来土を主体とする堆積			
61	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5mm)少			
62	10YR3/1暗褐色シロト	ロームブロック(径=1cm)少			
63	10YR3/2暗褐色シロト	基盤層ブロック(径=5mm)少、ややゆるい			

表3 A区 土壙墓AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976土層注記(2)

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
118	2.5Y6/6明黄褐色シルト～粘土(シルト主体)	ATブロック(厚～1cm)少含、10YR3/1黒褐色シルトブロック(厚～5mm)含、ややゆかい。ローム由来土とする可能性がある	139	10YR3/1黒褐色シルト	ローム、DKPブロック(厚～2cm、厚～1cm)少含、ややゆかい
119	2.5Y6/8明黄褐色細礫～シルト(シルト主体)	10YR3/1黒褐色シルトブロック(厚～5mm)少量含 DKP由来土を主体とする可能性がある	140	10YR4/2黄褐色シルト	ローム、DKPブロック(厚～1cm)少含、ゆかい
120	10YR4/2黄褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～1cm)含、ゆかい	141	10YR4/2黄褐色シルト	ローム、DKPブロック(厚～1cm)少含、ゆかい
121	10YR2/1黒色シルト	DKPブロック(厚～5mm)少含、ゆかい	142	10YR2/1黒色シルト	ローム、DKPブロック(厚～1cm)少含、ゆかい
122	10YR4/3(～)黄褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～5mm)含、ゆかい	143	10YR2/1黒色シルト	DKPブロック(厚～1cm)含、ややゆかい
123	10YR4/2黄褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～3cm)含	AWS2976		
124	10YR3/1黒褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～5mm)少含、ゆかい	144	10YR3/1黒褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～5mm)少含、ややゆかい
125	10YR4/2黄褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～5mm)少含、ゆかい	145	10YR3/1黒褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～1cm、厚～5mm)少含
126	10YR3/2黒褐色シルト	DKPブロック(厚～1cm)少含、ややゆかい	146	10YR4/2黄褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～2cm、厚～5mm)少含
127	10YR4/3(～)黄褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～1cm、厚～5mm)少含、10YR3/2黒褐色シルトブロック(厚～5mm)含	147	10YR2/1黒色シルト	DKPブロック(厚～3cm、厚～5mm)主体少含
128	10YR4/3(～)黄褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～3cm、厚～1cm)少含、10YR3/2黒褐色シルトブロック(厚～5mm)少含	148	10YR3/2黒褐色シルト	DKPブロック(厚～5mm)少含、ややゆかい
129	2.5Y6/6明黄褐色シルト～粘土(シルト主体)	ATブロック(厚～1cm)少含、10YR3/2黒褐色シルトブロック(厚～5mm)少含	149	10YR4/2黄褐色シルト	DKPブロック(厚～5mm)少含、ややゆかい
130	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～2cm、厚～5mm)主体少含	150	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～1cm)少含、ややゆかい
131	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～5mm)少含、ややゆかい	151	10YR3/1黒褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～5mm)含、ややゆかい
132	2.5Y6/6明黄褐色シルト～粘土(シルト主体)	ATブロック(厚～1cm)少含、10YR3/2黒褐色シルトブロック(厚～5mm)少含	152	10YR3/1黒褐色シルト	黒髪髯ブロック(厚～5mm)少含、ややゆかい
133	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～5mm)含	注記		
134	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～2cm)少含	153	2.5Y6/6明黄褐色細礫～シルト(シルト主体)	AT又はその二次堆積
135	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(厚～2cm)少含	154	7.5YD6/6暗褐色シルト～粘土(粘土主体)	
136	10YR2/1黒色シルト	ロームブロック(厚～5mm)少含	155	10Y7/7明黄褐色シルト～粘土(シルト主体)	
137	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(厚～5mm)含	156	10YR7/4(～)黄褐色シルト	DKPブロック(厚～5mm)含～粘土(シルト主体)
138	10YR4/2黄褐色シルト	ロームブロック(厚～5mm)少含	157	2.5Y6/6明黄褐色細礫～シルト(シルト主体)	ロームブロック(厚～5cm)少含
139	10YR4/2黄褐色シルト	ロームブロック(厚～5mm)少含	158	2.5Y6/6明黄褐色細礫～シルト(シルト主体)	DKP

土壙墓AWS2598・3349、袋状土坑AWS2976(図109～114、PL24～26・104)

K24で段丘面西側の平坦地に位置する。現代耕作土及び造成土直下に露出するV層において検出された。AWS2598は平面形が長方形を呈する墓塚で、主軸方向はN-7°-Eである。検出面における規模は長軸2.88m、短軸は0.93～1.18m、深さは最大で2.47mある。本遺跡における当該期の墓塚としては平面規模もさることながら深さが際立っており、特徴的である。墓塚の北西側において道路遺構溝(aws2591)と重複し、掘り込まれる。

検出当初は、墓塚北側の短軸長が南側よりも大きく認識されたため、被葬者の頭位を北に採る墓塚と想定し、調査に着手した。墓塚中央やや南寄りの埋土層において、壘3個体が折り重なった状態で検出された(図110Po263～265)。Po265が一番下に、Po264がほぼその上に乗り、一番上にPo263がもたれかかるような状態で、土圧により潰れていた。これらは出土状況から、墓上での供献行為に伴う可能性が高いと判断した。このような供献土器と想定できる個体のほか、埋土中からは上層から下層に至るまで比較的多数の土器、礫が出土した(図110右上)。ただ、これらは平面・垂直分布的に見ると散漫で、土器接合における復元率も低調であり、遺物の組成から勘案すると、本遺跡における袋状土坑の遺物内容に近似すると想定された。このような知見を考慮しつつ平面や土層断面を精査し調査を進めたところ、墓塚が土坑AWS2976と重複し、掘り込んでいることが判明した(図109E-E'、A-A'セクション)。断面図のように、AWS2976は掘方のほとんどをAWS2598に切られ失っており、形態の詳細は判然としない。しかしながら、上述したように墓塚埋土から多数出土した遺物の由来がAWS2976にある可能性が考えられること、わずかに残った掘方から推測される規模(長軸約1.2m、深さ最大で1.15m)から、AWS2976は袋状土坑と想定する。検出時に、AWS2598の北側短軸長を南側のそれと比較して大きく認識したのは、AWS2976との重複に起因するものである。

墓塚については、上半では概ね垂直に近い状態で掘削されているが、検出面からの深さ1.4～1.7mあたりで、やや鈍いものの屈曲点を有し、以深では窄まっていく。そのまま墓塚底面に至り、その平

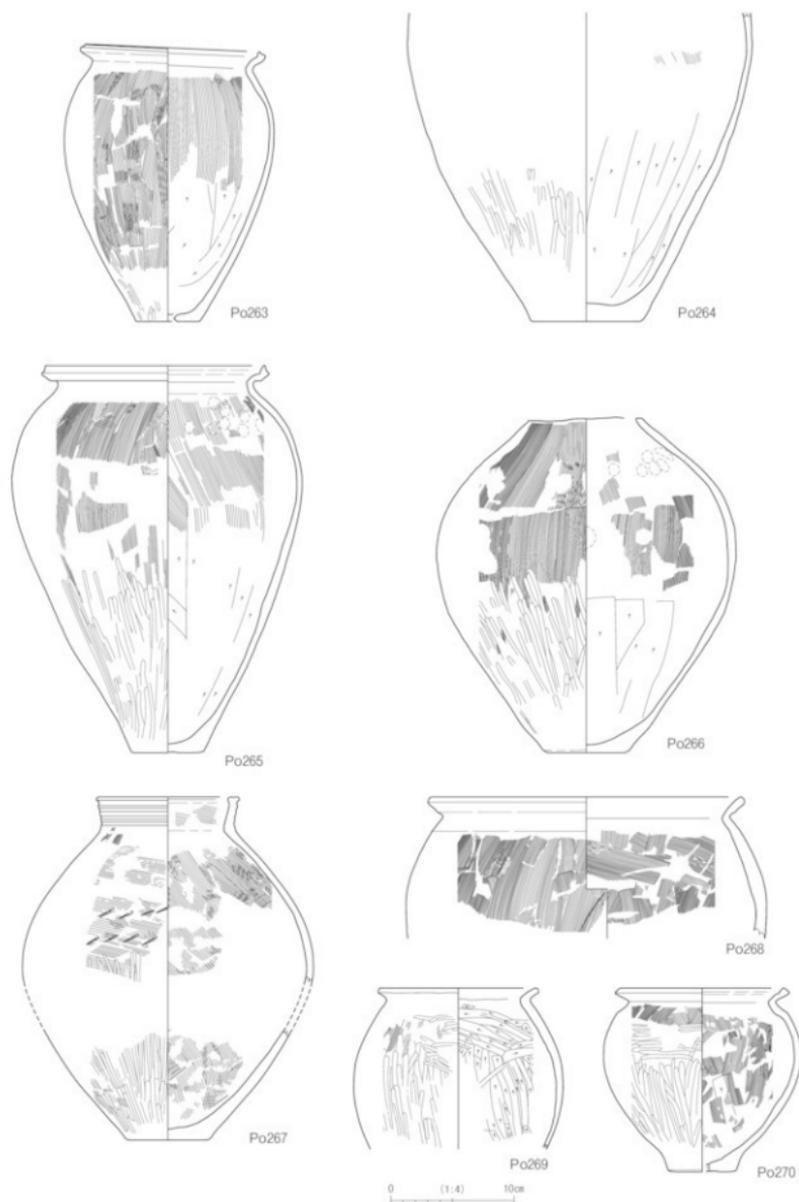


図111 A区 土壙墓AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976 出土土器(1)



図112 A区 土墳墓AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976 出土土器(2)

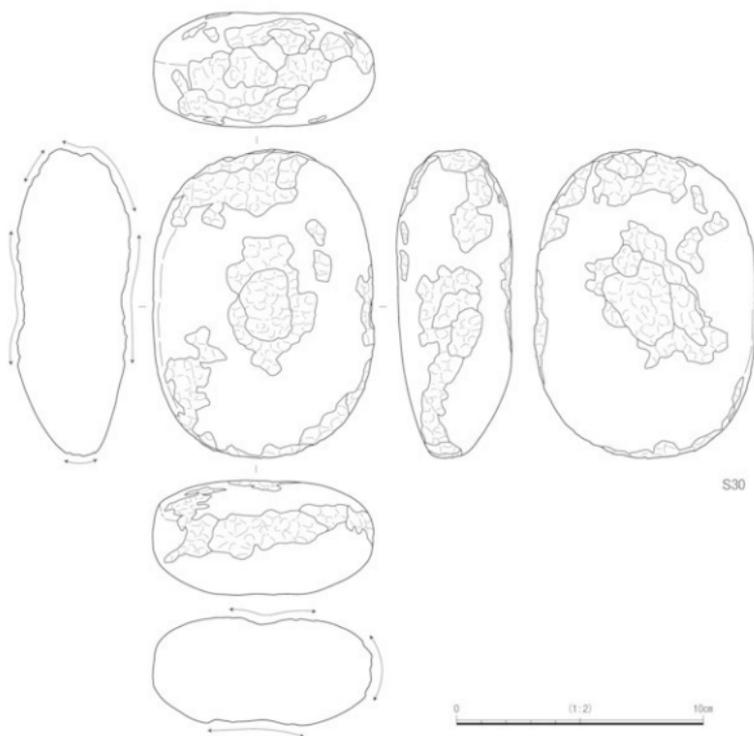


図113 A区 土壙墓AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976 出土石器(1)

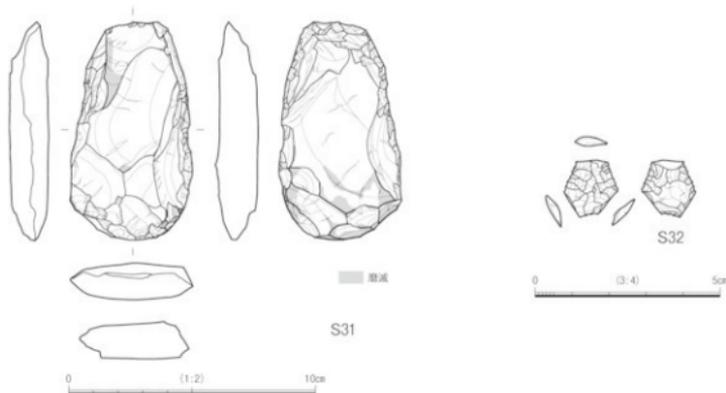


図114 A区 土墳墓AWS2598・3349 袋状土坑AWS2976 出土石器(2)

面形は細長い楕円形状を呈する(図109)。規模は長軸が1.76m、短軸が0.15～0.40mである。

墓底面のほぼ中央において、平面形が楕円形の掘り込みAWS3349を確認した。AWS3349の掘方長軸の方位は、墓壁掘方のそれと合致し、検出位置、検出面の標高を考えれば墓壁と一体であることは明白である。検出面における規模は長軸0.85m、短軸0.40mある。埋土を掘り下げたところ、深さ0.3mに満たない浅い掘方であったが、底面南端で磔1を検出した。それ以外の遺物は出土していない。磔は平坦面を持つ薄手の河原石で、掘方壁面から底面にかけて沿うように据えられていた(図109)。検出状況から、当該河原石を被葬者の枕として使用したものと評価し、AWS3349は埋葬施設と判断した。この仮定を採用した場合、埋葬頭位は南となり、掘方の規模から勘案すると被葬者は未成人、具体的には乳幼児と想定できる。AWS3349の掘方は南側がやや浅く、北側に向け緩い傾斜をもって深くなっており、埋葬頭位を南とする想定を補強すると考える。また、上述した供献行為に伴うと考えられる土器(Po263～265)の出土位置を合成すると、河原石の位置とほぼ重なる(図110)ことも付記しておきたい。なお、AWS3349を加えた本遺構全体の深さは、2.73mに達する。

墓城内における土層堆積からは木棺痕跡は見出されず、急激に下半が窄まる掘方の形態からも木棺採用の可能性は考え難く、本遺構は土墳墓と評価する。墓城内全般の土層堆積は、明瞭な凹レンズ状を呈する。埋土はクロボク由来の黒褐色系、基盤層由来土が主体となる灰黄褐色・明黄褐色系の二種に大別されるが、細かな単位で分層でき、二種が交互に堆積する箇所も確認できる(図109)。土器片や磔といった遺物がかなり混在するが、埋め戻しは丁寧な為されている。上述したように、墓壁掘方は概ね中位で屈曲点を持つが、そこに木製の板を架け、埋葬施設の蓋とした可能性を考える(図109)。墓城内における断面凹レンズ状の土層堆積は、木蓋が腐朽することにより、その上の埋土が蓋によって仕切られた埋葬空間へ流入したことの反映と想定する。

図111・112に出土した土器を示した。全て弥生土器である。

先述したように、Po263～265は墓上供献に伴うと想定する土器で、いずれも甕である。Po264は上半を失い、器形全体を窺うことが出来ないが、法量的には各々異なる。Po263・265における口縁部は「く」字状に屈曲し、端部は上方へ短く折り曲げられ狭い面を指向する。Po263は当該箇所凹線文

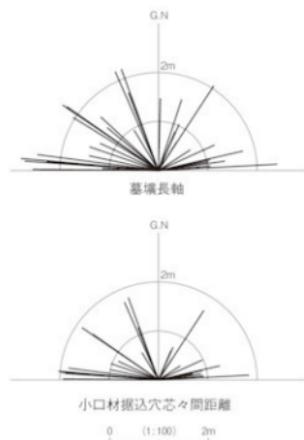


図115 A区 土壇墓・木棺墓群
主軸・規模対応関係

ナデのみを施す一群で、Po273は胴部外面にタタキ調整痕を確認でき、下半を欠失するものの胴部の張りは顕著である。Po274は口縁端部が凹み、沈線状となっている。Po275は端部が内傾し、ヨコナデによってやや凹む。Po277～280は口縁端部に凹線文が施されるもので、Po276～278は1条、Po279・280は2条である。Po281～284は壺又は甕の底部。法量の大小があり、基本的に安定した平底を呈する。

図113・114では埋土から出土した石器を図化した。S30は敲石で、平らな礫の両面の中央と側面に敲打痕がみられる。S31はやや小型の石鋸で安山岩製。剥片素材で、刃部側の両面と基部側の片面に使用による磨減が認められる。S32は黒曜石製石鋸の中央部破片。鋸歯状の側縁をもち、先端と両基部をおそらく使用によって失っている。

以上、出土遺物を概観した。土壇墓における供献土器と目される3個体と、その他の出土土器、すなわち袋状土坑に由来すると想定する土器群の双方共に、一部で凹線文施文を確認できるが、いずれも甕の口縁端部の拡張が顕著でない点、組成全体において凹線文を持たない資料が多数であることを考慮すれば、弥生時代中期後葉のうちでも古い段階に該当すると想定され、本土壇墓の帰属時期を示すものとする。(加藤)

南西部の土坑墓群

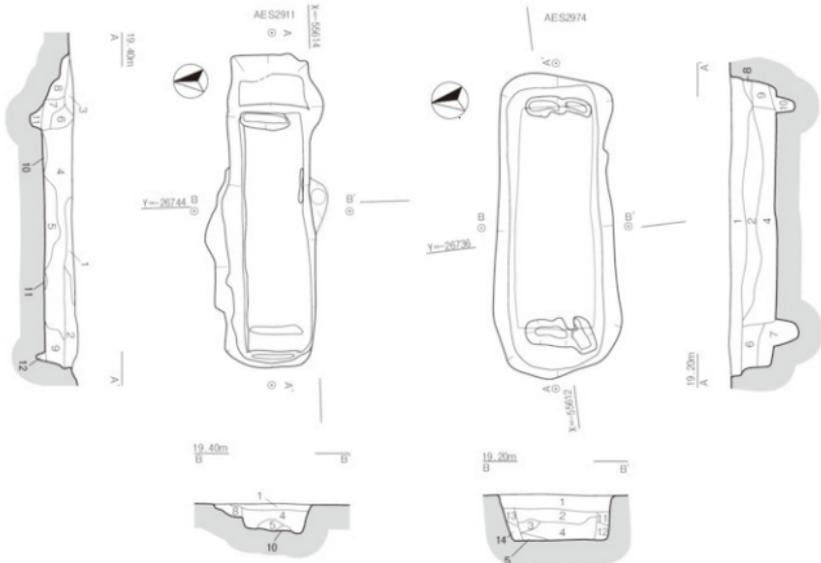
調査区の中央部南側に33基の土壇墓、木棺墓を確認した。墓壇の多くは底面に棺の小口材を据えるための穴が確認でき、底面に長側板の痕跡が残るものもみられた。

図115は墓壇主軸の座標北に対する偏位角と長軸長を対比したもので、線がそれぞれの墓に対応する。線の長さは上の図では墓壇長軸の長さ、下の図では小口材を据える穴が確認できたもので長軸方向の芯々間の距離を示す。

主軸の向きに注目すると大きく5方向存在することが分かる。このうち東西に近い方向の2群については同一の群と見なせるかもしれない。

が1条施される。Po264は口縁部から肩部にかけて欠失しているが、胴部は3個体ともに胴部上半に最大径を有し、下半は絞りこまれ底部に至る形態を示す。

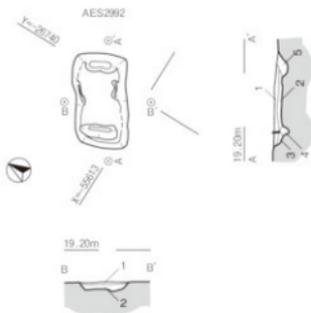
以下はその他、埋土中における出土土器を示した。Po266・267は壺である。Po266は無頸壺としたが、口頸部を故意に打ち欠いたものと考えられる。離面は整えられている。Po267は直口壺と呼べるもので、短く立ち上がった口頸部に4条の凹線文、口縁端部に凹線文が1条施される。一部、復元が叶わなかったが、胴部はほぼ中位が最大径となる器形を採る。Po268～280は甕で、壺と比べ出土数が多数を占める。Po268～271は「く」字状の口縁部を持ち、端部は特に目立ったアクセントを持つことなく収まる一群である。Po268・269は素口縁と言えるもの、背の詰まった小型品のPo270の端部は僅かに肥厚面を有する。Po271は端部に刻み目が入る。Po272～275は端部を概ね上方へ折り返すようにし、拡張気味とする。Po272・273は端部調整がヨコ



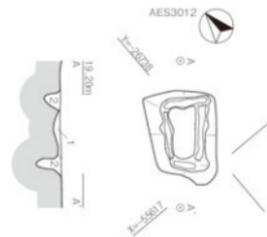
- 1 2.5V2/1黒色シルト(ATブロック(径~3cm)稀少含)
- 2 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~2cm)少含)
- 3 2.5V2/1黒色シルト
- 4 2.5V3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)含)
- 5 2.5V3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)含)
- 6 2.5V3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~5cm)多含)
- 7 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)含)
- 8 2.5V3/2黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)含)
- 9 2.5V3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)含)
- 10 2.5V3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)多含)
- 11 7.5YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~4cm)多含)
- 12 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~3cm)少含)

※平面図のアミフセ線は裏詰め土と
棺内埋土の境界を示す。

- 1 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~2cm)含)
- 2 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~10cm)含)
- 3 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)含)
- 4 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~3cm)多含)
- 5 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~5cm)多含)
- 6 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~5cm)含)
- 7 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~15cm)含)
- 8 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~10cm)多含)
- 9 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~8cm)多含)
- 10 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~8cm)多含)
- 11 10YR1/2 1黒色シルト
- 12 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~10cm)含)
- 13 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~2cm)含)
- 14 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~5cm)多含)



- 1 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~5cm)少含)
- 2 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~2cm)含)
- 3 10YR2/2黒褐色シルト
- 4 10YR2/2黒褐色シルト(ATブロック(径~1cm)含)
- 5 10YR2/2黒褐色シルト(ATブロック(径~1cm)少含)



- 1 10YR2/2黒褐色シルト(高梨層ブロック多含)
- 2 10YR3/2黒褐色シルト(高梨層ブロック多含)

0 (1:40) 1m

図116 A区 木棺墓AES2911・2974・2992・3012 平面・断面

墓壇の規模でみると方位に関係なく長軸が0.7~1.0mと1.2~1.5m、2m以上の3種類に分けられ、小口材を据える穴の芯々間距離は墓壇の規模に対応して0.7m前後と、0.9~1.2m、1.7~2.0mの3つに大別できる。そのため、墓壇の規模には一定の規格が存在した可能性がある。

副葬品は出土しなかったが、棺上に供献したと思われる甕が出土した墓があり、この土器から弥生時代中期後葉を中心とした墓群と考える。(田中)

AES2911(図116)

Q15で確認した墓で、墓壇の平面形は長辺にやや凹凸があるものの、概ね隅円の台形状を呈する。規模は長軸2.55m、短軸は東側で0.71m、西側で0.62mある。墓壇の主軸方向はN-89°-Wである。検出面からの深さは0.26mで、墓壇の断面形は長軸、短軸とも逆台形を呈し、長軸方向の東壁は他の壁よりも緩やかである。

墓壇内を少し掘り下げて平面を精査すると、墓壇の南寄りにロームブロックを少量含む4層が広がり、その外側に4層に比べてロームブロックを多く含む6~9層が囲むように広がっていた。堆積状況からは4、5層は棺が腐朽した後に陥没、流入したもので、基盤層ブロックの多い堆積が棺の裏込め土の可能性が高いことが確認できた。棺材の痕跡は確認できなかった。

底面には短辺の下端に沿うような小口材を据えるための穴がある。東側の穴は幅0.13m、深さ0.11m、西側の穴は幅0.08m、深さ0.13mである。堆積状況と合わせてみると、東側は裏込め土が穴の棺内側の肩まで堆積していたのに対して、西側では穴の内側約0.2mまで裏込め土が堆積し、西側の裏込め土の端あたりには墓壇西辺に平行する浅い窪みが確認できる。

以上の状況から、東側は棺の小口材を穴に据えていたと考えられるが、西側は壁際に穴を掘ったものの、棺材を据える際には穴を用いずにより内側にある窪みのあたりに小口材を据えた可能性が考えられる。裏込め土の範囲を元にとすると、棺の内法は長さ1.62m前後、幅0.45m前後と推定される。また、小口材を据える穴の芯々間距離は1.94mある。(田中)

AES2974(図116、PL27)

Q14の北辺中央に位置する。墓壇の平面形は西側がわずかに広い隅丸長方形を呈し、検出面における長軸長が2.48m、短軸長が0.95m、西側短辺が1.04m、東側短辺が0.91mあり、底面における長軸長が2.32m、短軸長が0.74m、西側短辺が0.76m、東側短辺が0.72mある。断面形は長軸方向ではほぼ長方形を呈し、底面までの深さは0.37cmある。底面の東西両端では、平面が不整形円形の小口材を据える穴を検出しており、西側で長さ0.59m、幅0.25m、深さ0.19m、東側で長さ0.52m、幅0.15m、深さ0.15mある。両坑間の芯々間距離は1.84mある。墓壇の主軸方向はN83°-Wである。

埋土は旧地表土由来の黒色~黒褐色シルトを主体としており、1層除去後に裏込め土を検出した。棺内の埋土は大きく2層に分かれ、棺蓋が腐朽した後に流入した堆積と考える。8~14層はほとんどが基盤層ブロックを多く含んでおり、木棺の裏込め土および棺腐食後の堆積土と考える。

裏込め土の内側の範囲は検出面で側辺の長さが北側で1.78m、南側で1.80m、小口幅が西側で0.61m、東側で0.56m、底面で側辺の長さが北側で1.75m、南側で1.78m、小口幅が西側で0.53m、東側で0.52mある。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES2992(図116)

Q14・15に位置する。墓壇の平面形は長方形を呈し、検出面で長軸長0.77m、短軸長0.41m、短辺

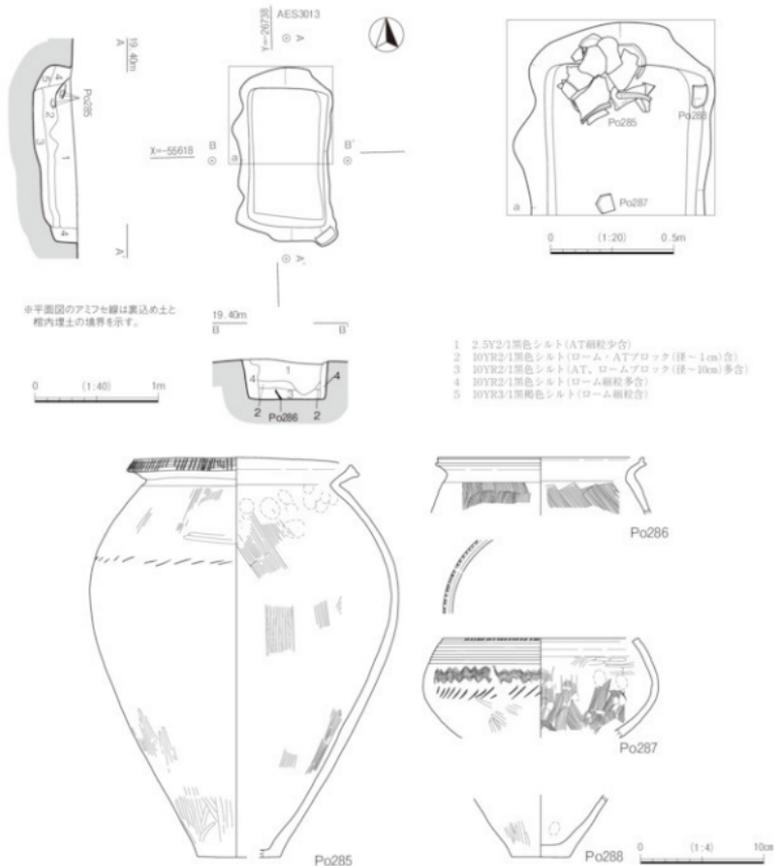


図117 A区 木棺墓AES3013 平面・断面・遺物出土状況・出土遺物

は東西両側とも0.42mあり、底面で長軸長0.67m、短軸長0.31m、短辺は両側とも0.32mある。断面形は長軸と短軸方向ともに逆台形状を呈し、底面までの深さは0.10mある。底面は生物擾乱が著しいが、東西両端で平面楕円形の小口材を据える穴を検出しており、西側で長さ0.30m、幅0.11m、深さ0.05m、東側で長さ0.26m、幅0.10m、深さ0.05mある。小口材を据える穴の芯々間距離は0.53mある。墓塚の主軸方向はN-60°-Eである。

埋土は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。棺痕跡は確認できなかった。

埋土中から土器片が出土したが、時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3012(図116)

Q14で確認した木棺墓で、墓塚の平面形は長径0.69m、短径0.60mの不整形を呈する。検出面からの深さは0.05mとごく浅いので、検出時の平面形が当初の形状をとどめているかどうかは不明である。

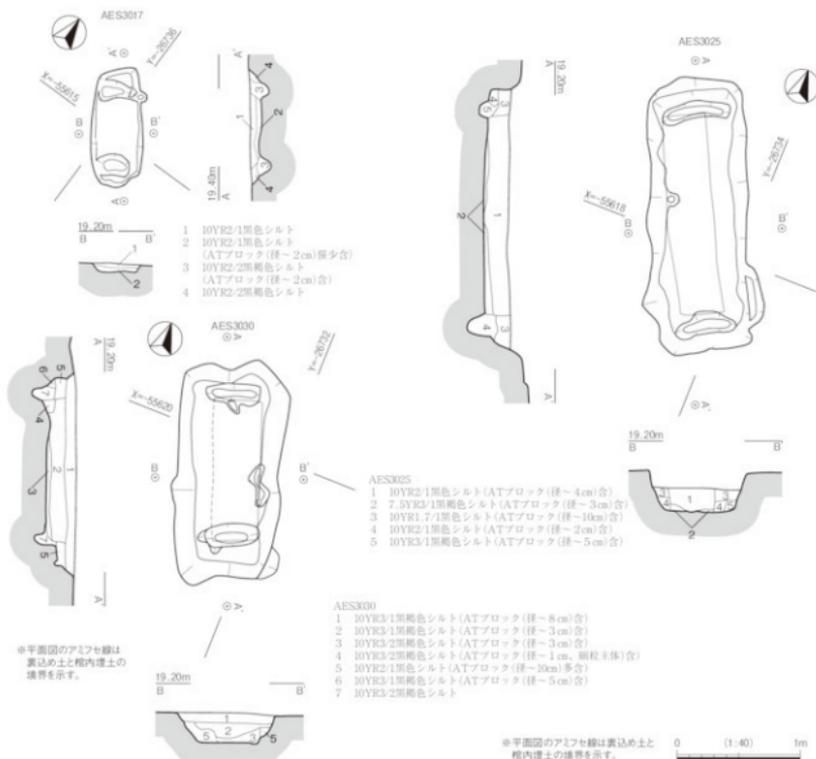


図118 A区 木棺墓AES3017・3025・3030 平面・断面

当初は柱穴などの可能性を想定して墓壇を半載したところ、底面に小口材を据える穴などが確認でき、木棺墓と認識することができた。小口材を据える穴を基にした主軸方向はN-33°-Eである。

底面には小口材を据える穴と長側板を据えた痕跡と思われる浅い窪みを確認できた。小口材を据える穴は幅が0.1m前後で墓壇底面から0.1~0.2m掘り下げられていた。堆積状況を観察したが、小口材の痕跡は認められなかった。長側板の痕跡は底面から0.05m程度窪んだ溝状を呈するもので、こちらでも板の厚さを知りうるものは確認できなかった。棺材を据えた位置や厚さが判明しないので、正確な棺内の規模は不明である。小口材を据える穴の芯々間距離は0.50mある。

埋土がほとんどなく、時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES3013(図117, PL.27・105)

Q14で確認した木棺墓である。検出時の墓壇の平面形は東辺が比較的直線的であるものの、他の辺は凹凸がある。一方、下端は整った隅円方形を呈する。検出面での規模は長軸の最大長が1.47m、短軸の最大長が0.81mである。検出面からの深さは0.33mあり、断面形は長軸方向では北側がやや深くなる逆カマボコ形、短軸方向はほぼ長方形を呈する。墓壇の主軸方向はN-2°-Eである。

平面を検出したところ、ローム細粒をわずかに含む黒褐色シルト(1層)が隅円方形で確認でき、その周りに1層に比べてローム細粒を多く含む黒褐色シルト(4層)がみられた。堆積状況を確認すると、1層の下にはやや大きめのロームブロックを含む2層が堆積し、さらにその下にはロームブロックを多量に含む3層が堆積していた。3層の下面は北側に傾斜しているのに対して上面はほぼ水平になっている。また4層の下には一部に色調が異なる5層が堆積するが、1～3層を囲むように底面まで堆積していた。

以上の状況から、墓壙を掘削後に棺材を据えて、棺内には底面を水平にするために3層を敷き、外側には裏込め土として4、5層を入れたと考えた。3層の平面的な広がりには長さ1.03m前後、幅0.54m前後ある。底面に小口材を据える穴はみられなかった。

棺内に副葬品はみられなかったが、北端の1の下面付近で甕が土圧で押しつぶされた状態で出土した。棺上供献されたものと思われる。甕の中からは遺物は出土しなかった。

供献された甕は弥生時代中期後葉のもので、口縁端部に凹線文を施文後に刺突文が施される。また棺内埋土からも同時期の土器片が出土しており、この墓はその頃に構築されたと判断した。(田中)

AES3017(図118)

Q14の中央付近に位置する。墓壙の平面形は長方形を呈し、検出面で長軸0.96m、短軸0.42m、北側短辺が0.32m、南側短辺が0.34mあり、底面で長軸0.88m、短軸0.35m、北側短辺が0.26m、南側短辺が0.29mある。断面形は長軸と短軸方向ともに逆台形状を呈し、底面までの深さは0.09mある。底面は生物擾乱が著しいが、南北両端では平面形が不整形楕円形の小口材を据えるための穴を検出しており、北側で長さ0.26m、幅0.16m、深さ0.06m、南側で長さ0.27m、幅0.16m、深さ0.10mある。穴の芯々間距離は0.65mある。墓壙の主軸方向はN-36°Wである。

埋土は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。3層は小口材が腐植した後に裏込め土が流入したと考える。棺痕跡は確認できなかったが、棺内の埋土の範囲を棺の内側とすれば、長軸は0.44m程度となる。

埋土からは時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3025(図118)

Q14の南辺中央に位置する。墓壙の平面形はほぼ長方形を呈し、検出面で長軸2.20m、短軸0.79m、北側短辺が0.76m、南側短辺が0.75mあり、底面で長軸2.06m、短軸0.55m、北側短辺が0.66m、南側短辺が0.59mある。断面形は長軸方向がほぼ長方形、短軸方向が逆コマボコ形を呈し、底面までの深さは0.31mある。底面の南北両端では平面楕円形の小口材を据える穴を検出しており、北側で長さ0.54m、幅0.14m、深さ0.08m、南側で長さ0.50m、幅0.18m、深さ0.15mある。穴の芯々間距離は1.73mある。主軸方向はN-24°Wである。

埋土は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。3～5層はATブロックを多く含んでおり、木棺の裏込め土と考える。

検出面からやや掘り下げた面での裏込め土内側の範囲は長さ1.65m前後、幅が0.35m前後である。

埋土から時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3030(図118)

Q14、R14にまたがる形で位置し、すぐ東側に平行して木棺墓AES3077がある。墓壙の平面形は北側がわずかに広い長方形を呈し、検出面で長軸1.70m、短軸0.83m、北側短辺0.88m、南側短辺0.79

mあり、底面で長軸1.46m、短軸0.53m、北側短辺0.63m、南側短辺0.50mある。断面形は長軸方向で逆台形、短軸方向で逆コマゴコ形を呈し、底面までの深さは0.25mある。底面の南北両端では、平面形が隅丸長方形の小口材を据える穴を検出しており、北側で長さ0.44m、幅0.10m、深さ0.19m、南側で長さ0.44m、幅0.19m、深さ0.10cmある。両穴の芯々間距離は1.15mある。墓塚の主軸方向はN-22°-Wである。

埋土は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体としており、5、6層は木棺の裹込め土、7は棺材の痕跡と考えた。棺内埋土の範囲は長さ1.15m前後、幅0.4m前後である。埋土からは時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3042(図119、PL28)

Q15で確認した木棺墓で、墓塚の平面形は南辺にやや凹凸があるものの、長軸2.80m、短軸0.95～1.00mのほぼ隅丸長方形である。検出面からの深さは0.31mで、断面形は長軸方向では西壁がほぼ垂直であるのに対して、東壁が緩やかに傾斜しており、短軸方向では逆台形を呈する。墓塚の主軸方向はN-85°-Wである。

墓塚内を少し掘り下げたところ、掘方の北側から西側にかけて大きめなATブロックを含む8層が確認でき、南側に2層に比べてATブロックの少ない4層がみられた。墓塚の南辺と東辺付近で2つの堆積の境界は不明瞭ながら、4層が棺内に流入した埋土、8層が棺の裹込め土と判断した。

裹込め土の内側を0.2mほど掘り下げると、ATブロックをやや多く含む15層が面的に広がることが確認できた。この面で精査を行うと、両側の小口と両長側の西半分でATブロックがやや少ない堆積(13、14層)が筋状に延びていた。堆積状況では底面よりも上の状況が不明瞭であるものの、13、14層が棺材の痕跡で15層が棺床に敷かれたと考えた。棺の内法は長さ1.95m、幅0.42m、棺材の厚さは長側材が0.04～0.06m、小口材が0.08mと推定される。また、小口材は据えるために底面に掘られた穴の棺外側の壁面に沿わせるように据えられたと思われる。なお、小口材を据えるための穴の芯々間距離は2.04mある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES3051(図119)

Q14の東辺中央に位置する。墓塚の平面形は長方形を呈し、検出面で長軸1.14m、短軸0.64m、西側短辺が0.59m、東側短辺が0.60mあり、底面で長軸1.02m、短軸0.54m、西側短辺が0.51m、東側短辺が0.54mある。断面形は長軸方向が逆台形状、短軸方向が逆コマゴコ形を呈し、底面までの深さは0.10mある。底面は生物擾乱が著しいが、東端で平面形が不整楕円形の小口材を据える穴を検出しており、長さが0.50m、幅が0.12m、深さが0.05mある。墓塚の主軸方向はN-88°-Wである。

埋土は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。西側の3層は小口板の腐植土と考える。棺痕跡は確認できなかった。時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3071(図119)

Q13の南西隅付近に位置する。墓塚の平面形は隅丸長方形を呈し、検出面で長軸1.31m、短軸0.68m、西側短辺0.65m、東側短辺0.60mあり、底面で長軸1.17m、短軸0.60m、西側短辺0.55m、東側短辺0.51mある。断面形は長軸と短軸方向ともに逆台形状を呈し、底面までの深さは0.14mある。底面は生物擾乱が著しく、西側は攪乱を被るものの、両端で小口材を据えるための穴を検出した。平面形は楕円形を呈し、東側で長さ0.52m、幅0.25m、深さ0.19m、西側で長さ0.55m、深さ0.17mある。

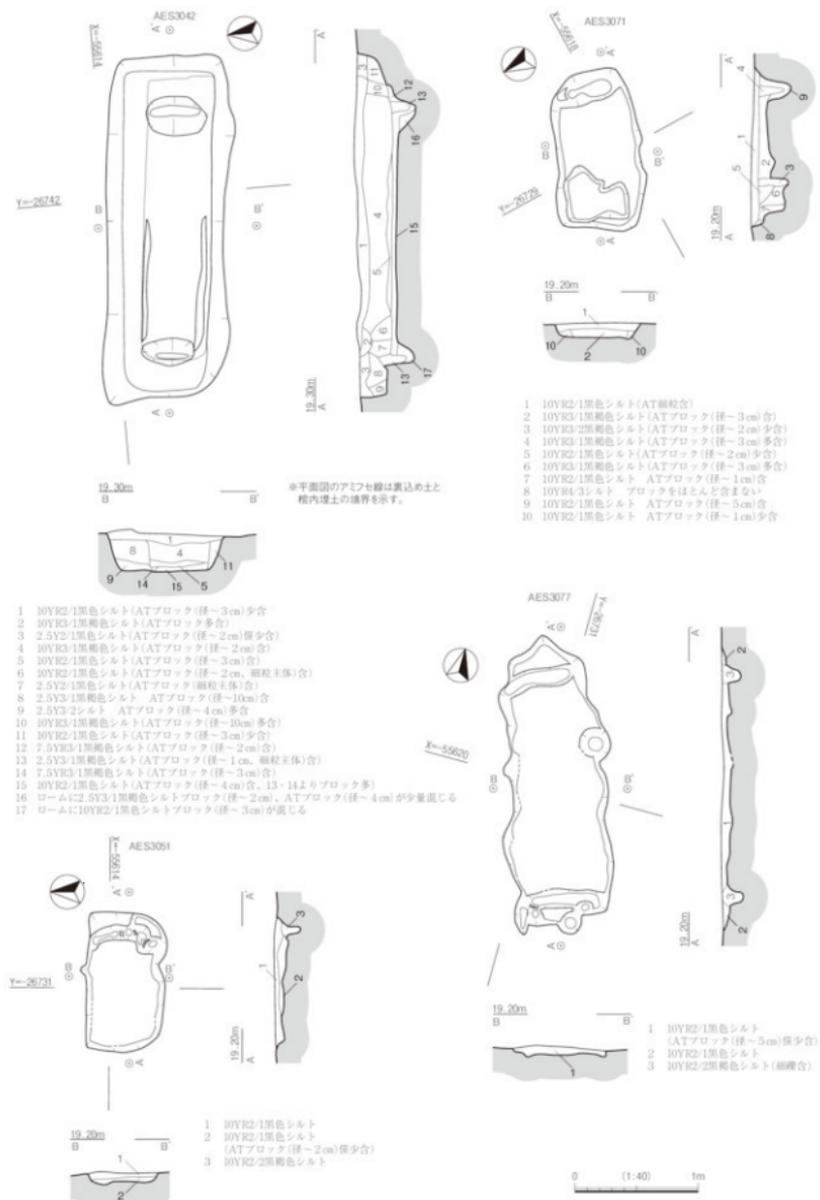


図119 A区 木棺墓AES3042・3051・3071・3077 平面・断面

両穴の芯々間距離は0.90mで、墓塚の主軸方向はN-60°-Wである。

埋土は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とし、4層は東側小口板の腐植土で、8、9層は木棺の裏込め土と考える。埋土からは時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3077(図119)

Q14、R14にまたがる形で位置する。墓塚の平面形は不整な長方形を呈し、検出面で長軸2.20m、短軸0.83m、北側短辺0.74m、南側短辺0.65mあり、底面で長軸1.96m、短軸0.70m、北側短辺0.60m、南側短辺0.64mある。上面がかなり削られており、断面形ははっきりしない。底面は生物擾乱が著しいが、南北両端で小口材を据える穴を検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、北側で長さが0.59m、幅が0.15m、深さが0.12m、南側で長さが0.65m、幅が0.16m、深さが0.12mある。両穴の芯々間距離は1.79mで、墓塚の主軸方向はN-24°-Wである。

埋土は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とし、3層は小口板の腐植土と考える。棺痕跡は確認できなかったが、3層が確認できるため、棺の長軸内法は1.60m程度と推測される。埋土からは時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3083(図120)

P14の南東隅付近に位置する。墓塚の平面形は長方形を呈し、検出面で長軸1.52m、短軸0.46m、北側短辺0.41m、南側短辺0.33mあり、底面で長軸1.46m、短軸0.38m、北側短辺0.35m、南側短辺0.31mある。断面形は長軸と短軸方向ともに逆台形状を呈し、底面までの深さは0.17mある。底面は生物擾乱が著しく、小口材を据える穴も検出できなかった。墓塚の主軸方向はN-18°-Eである。

埋土は大きく2層からなり、旧地表土由来の黒色～黒色シルトを主体とする。

棺痕跡は確認できなかったが、周辺の木棺墓と墓塚の形状が類似することから、木棺墓と考える。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES3118(図120)

P14の東辺中央に位置する。墓塚の平面形は長方形を呈するが、東側は攪乱により変形している。規模は検出面で長軸1.95m、短軸約0.55m、北側短辺0.67m、南側短辺0.44m以上あり、底面で長軸1.74m、北側短辺0.60m、南側短辺0.33m以上ある。上面がかなり削られており、断面形ははっきりしない。底面も生物擾乱が著しく、小口材を据えるための穴は検出できなかった。墓塚の主軸方向はN-17°-Eである。埋土はわずかに残存し、黒色～黒褐色シルトを主体とする。

周辺の木棺墓と墓塚の形状が類似することから、木棺墓と考える。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

AES4594(図120)

S14で確認した墓で、墓塚の平面形は長軸1.36m、短軸0.81mの隅円方形を呈する。検出面からの深さは0.22mで、断面形は長軸方向、短軸方向ともに逆台形を呈する。墓塚の主軸方向はN-50°-Wである。

堆積状況を観察すると、両長辺と北西側の短辺に基盤層ブロックを多く含んだり、基盤層ブロックを主体とした堆積が確認でき、棺の裏込め土と判断した。底面には両長辺の墓塚下端のやや内側で1段低くなり、裏込め土は低くなった部分にも一部堆積していた。棺材の痕跡が残っておらず、短辺側の裏込め土の範囲が後世の攪乱で失われているため、棺の正確な規模は不明である。裏込め土の内側の大きさは長さ1.2m前後、幅は0.38mである。

時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

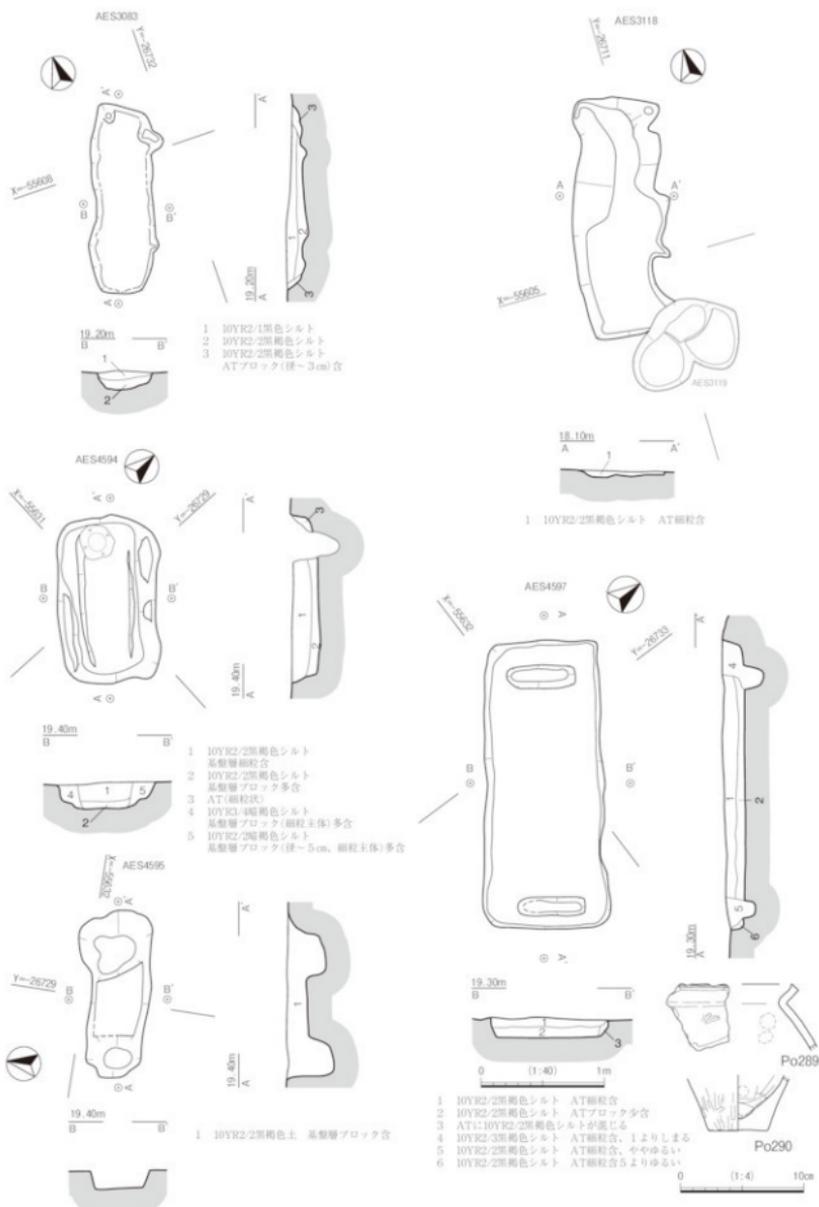


図120 A区 木棺墓AES3083・3118・4594・4595・4597 平面・断面・出土遺物

AES4595(図120)

S13で確認した土坑で、墓壙の平面形は長径1.36m、短径0.59mの不整形を呈する。検出面からの深さは、掘方中央部で0.16mで、短軸方向の断面形は北側が南側よりも壁面が垂直に近い。墓壙の主軸方向はN-82°-Eである。

底面の両端に掘り込みが確認でき、東側は径0.36m、深さ0.16m、西側は径0.30m、深さ0.21mある。埋土はロームブロックを含む黒褐色シルトの単層で、裏込め土などが確認できない。

他の木棺墓壙とは形状が大きく異なっており、埋没状況からは積極的に墓と評価するのは難しい。ただ、土坑墓群の中にあり、掘方の規模が似通っているため、底面の掘り込みが木棺の小口材を据えるための穴になる可能性があると考えられる。両端の掘り込みの芯々間距離は0.88mある。

時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4597(図120)

S14で確認した木棺墓で、墓壙の平面形は長軸2.36mの隅円方形を呈する。短辺は北西側が0.88mなのに対して南東側が1.04mでやや広くなる。検出面からの深さが0.17mあり、断面形は長軸方向、短軸方向ともに方形に近い。墓壙の主軸方向はN-56°-Wである。

墓壙の底面には、短辺下端の少し内側に溝状の小口材を据える穴がある。穴はいずれも短辺下端にほぼ平行しており、南東側は下端から0.08m内側にあり長さ0.55m、幅0.14m、深さ0.08m、北西側は下端から0.15m内側にあり長さ0.55m、幅0.20m、深さ0.15mある。両穴の芯々間距離は1.88mある。

墓壙内は大半がATブロックを少量含む黒褐色シルト(1、2層)が堆積しており、棺内に流入した土壌と思われる。長軸方向の堆積状況を観察すると、墓壙北西側では1、2層が小口材を据える穴の内側半分を覆うように堆積し、穴の中は1層よりもしまった堆積で裏込め土と思われる4層で埋まっていた。南東側は他の堆積よりもしまりがゆるい5、6層があり、穴も同じもので埋まっていた。棺の小口材が腐朽した後に周辺の土壌などが流入したと考えた。短軸方向では北端にロームブロックを主体とする3層があり、これも木棺の裏込め土と考えている。南側には裏込め土は確認できなかった。

副葬品などはなかったが、埋土から弥生時代中期後葉のものと思われる弥生土器が出土しており、遺構の構築された時期に近い遺物の可能性がある。(田中)

AES4598(図121)

S14で確認した木棺墓で、墓壙は北辺が西に開く台形状を呈し、長辺は東辺で1.88m、西辺で2.06m、短軸は0.85mある。検出面からの深さは0.21mあり、墓壙の断面形は長軸方向では西壁がほぼ垂直にあるのに対して東壁はやや外側に開き、短軸方向はほぼ長方形を呈する。墓壙の主軸方向はN-33°-Eである。

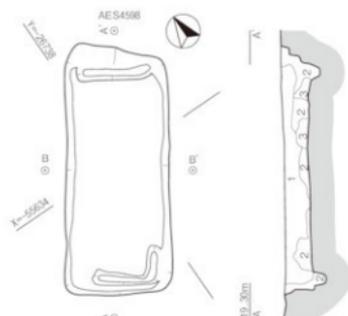
墓壙内の堆積状況を見ると、上部に大きめのロームブロックを含む1層、下部にロームの細粒を多く含む2～4層がある。棺材の痕跡や裏込め土と判断しうるものは確認できない。

底面には短辺下端に沿うように溝状の掘り込みがあり、北側では幅0.12m、深さ0.07m、南側では幅が広いところで0.20m、深さ0.12mある。小口材を据える穴と考えられ、南側では一部が浅くなりながら東辺へ延びていた。両穴の芯々間距離は1.69mある。

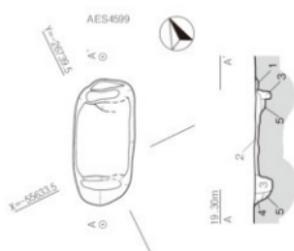
時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4599(図121)

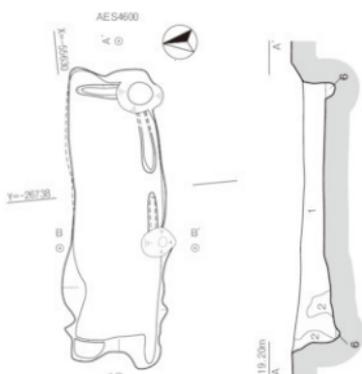
S14で確認した木棺墓で、墓壙の平面は長辺は直線的であるのに対して、短辺は弧状となっている。



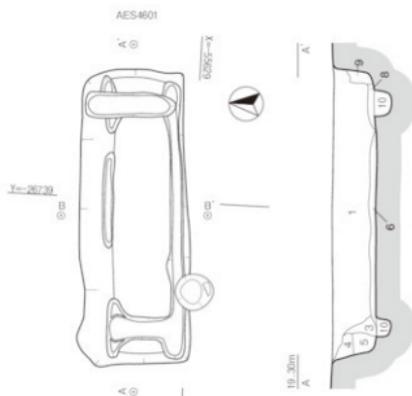
- 1 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック、細粒少含、炭化跡含
- 2 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含
- 3 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック少含
- 4 ロームブロック



- 1 10YR2/2黒褐色シルト AT細粒少含、2よりLまる
- 2 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック少含
- 3 10YR2/2黒褐色シルト AT細粒含
- 4 10YR2/2黒褐色シルト AT細粒含(3よりブロック少)
- 5 AT:10YR2/2黒褐色シルトが混じる



- 1 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック少含
- 2 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含
- 3 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含、2よりブロック少
- 4 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック含
- 5 AT(ブロック状)
- 6 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック含、1よりブロック多



- 1 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック少含
- 2 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック(細粒主体)多含
- 3 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含
- 4 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック含
- 5 AT(ブロック状)
- 6 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含
- 7 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック(細粒主体)多含
- 8 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含
- 9 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含、3よりブロック少
- 10 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック多含、8よりブロック少
- 11 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック含

0 1:40 1m

図121 A区 木棺墓AES4598・4599・4600・4601 平面・断面

規模は長軸の最大長が1.03m、短軸は0.50mある。検出面からの深さは0.03mと浅く、墓塚の断面形状は不明である。墓塚の主軸方向はN-24°-Eで、AES4598とほぼ方向を揃えるようにつくられていた。

底面には、短辺の壁際に深さ0.1~0.12mの小口材を据える穴があり、幅は北側で0.06m、南側で0.20mある。両穴の芯々間距離は0.73mある。

墓塚内は大半が基盤層のブロックを少量含む黒褐色シルトが堆積しており、棺が腐朽した後に陥没、流入した土壌と思われる。長軸方向の両端には2層に比べてATブロックを多く含む3、4層とATブロックを主体とした5層がある。4層は小口材の裏込め、3層は小口材が腐朽した後に裏込め土などが流入したと判断した。北側の小口材を据える穴の棺内側にも5層が見られる。この堆積は棺内全体に広がらないので、棺床に敷いたものとは考えにくく、小口材の固定と棺内の窆みを埋めたものと思われる。3層が小口材の形状を留めるとすると、棺の内法の長さは0.60m前後と推定される。上部の削平が著しく、長側板の裏込め土の有無は不明である。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4600(図121)

S14で確認した木棺墓で、墓塚の平面形は四隅が長軸方向に少し拡張したような形をしている。墓塚の規模は長軸が中央の短いところで2.27m、両端の拡張が確認できる北辺で2.41m、短軸が0.73mある。検出面からの深さは0.33mで、断面形は長軸方向が逆台形、短軸方向ではほぼ長方形を呈する。墓塚の主軸はN-86°-Wである。

墓塚内は基盤層ブロックを含む黒色シルトによって大半が埋没している。墓塚の北辺付近と西辺付近に基盤層ブロックを多く含む2~4層があり、平面の精査ではその広がりか確認できないが、これらが棺の裏込め土だった可能性がある。また、四隅が長軸方向に拡張することから、長側板の端が小口材の外側に延びていた可能性があるものの、材の痕跡などが確認できず、確認がない。

墓塚底面には、東辺と南辺の東側に墓塚下端から少し内側に幅0.07~0.10mの溝状の窆みを確認した。東辺の窆みは深さが0.07mあり小口材を据える穴と判断した。穴はATブロックをやや多く含む6層で埋没しており、同様の堆積は西辺の壁面裾にも認められた。墓塚西辺裾では明瞭な窆みが検出できなかったが、西辺側の6層が小口材を据えた痕跡の可能性があり、推定される小口材を据える穴の芯々間距離は1.98mである。

南辺の窆みは深さが0.03m前後と浅く、長側板を据えた際に窪んだ痕跡と判断した。北側の裏込め土の端から南側の棺材を据えた痕跡の棺内側まで0.54mある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4601(図121)

S14から15にまたがる形で確認した木棺墓で、墓塚の平面形は北辺にやや凹凸があるが長軸は2.41m、短軸は0.67mの方形を呈する。検出面からの深さは0.38mあり、墓塚の断面形は長軸方向、短軸方向ともに逆台形を呈する。墓塚の主軸はN-87°-Eである。

墓塚底面には短辺の下端からやや内側に溝状の掘り込みがみられる。東側は幅0.20m、深さ0.14m、西側は幅0.16m、深さ0.11mあり、小口材を据える穴と考える。また、北辺の下端のやや内側にも幅0.06~0.10m、深さ0.03mの溝状の窆みがあり、東端は小口材を据える穴と重なっていた。長側板を据えた痕跡と思われる。

墓塚内はATブロックを少量含む黒褐色シルト(1層)によって大半が埋没していた。堆積状況を見

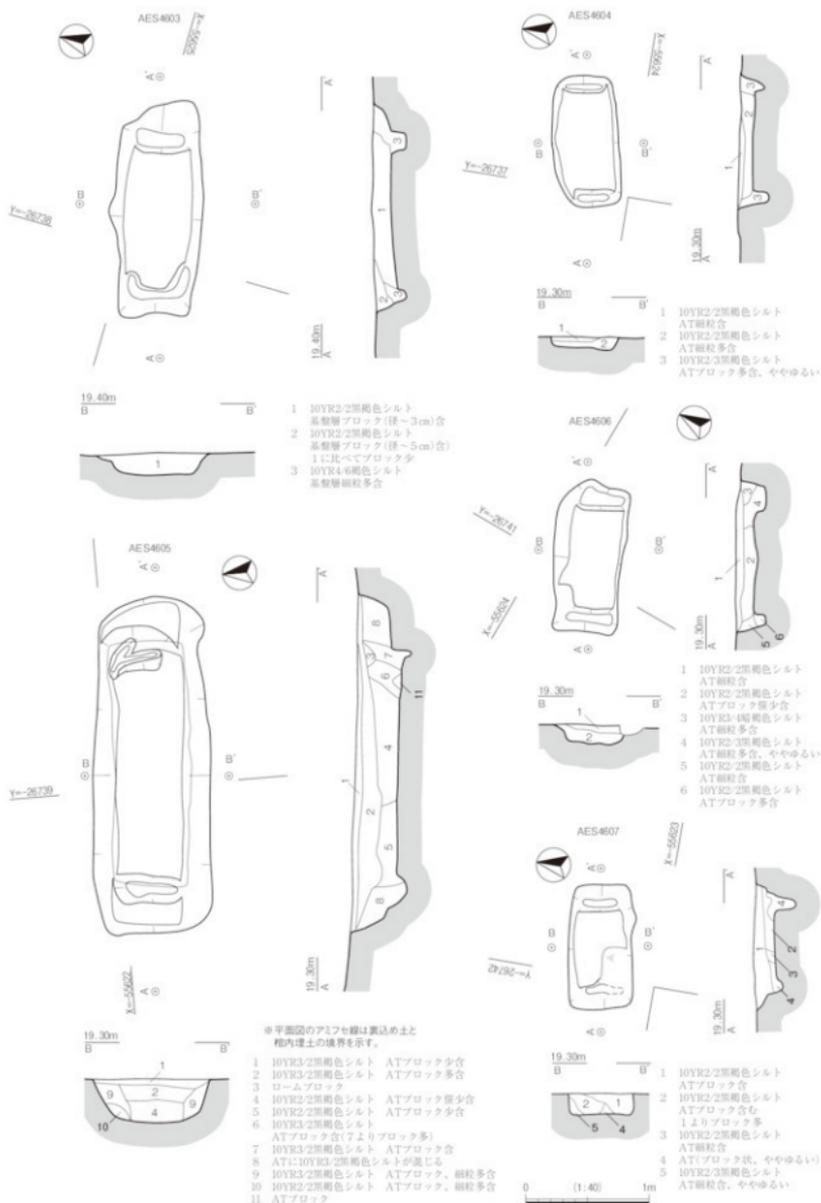


図122 A区 木棺墓AES4603・4604・4605・4606・4607 平面・断面

ると、東辺と西辺にATブロックを多く含む4、5、10層がみられる。これらは小口材を据える穴の棺外側の肩まで堆積しており、棺の裏込め土と思われる。一方底面に堆積する6～9層は同じようにロームブロックを多く含むが、小口材を据える穴をふさぐように堆積していることから棺床に敷いたものとは考えにくく、裏込め土が棺材が腐朽した後に棺内などに流入したと考えた。

棺材の痕跡が確認できないため棺の内法は判然としませんが、小口材を据え込める穴の芯々間距離が1.84m、長側板の据え込み痕跡の内側が0.48mある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4603(図122、PL.29)

R14で確認した木棺墓で、墓塚の平面形は長辺はほぼ直線的で平行するが、東辺の南側が外側に大きく膨らみ、西辺は両端が長辺方向にやや膨らむ。規模は長軸の最大長が1.76m、短辺は東辺で0.63m、西辺で0.59mある。検出面からの深さは0.17mあり、墓塚の断面形は長軸方向、短軸方向ともに逆台形を呈し、東壁は他の壁面に比べて傾斜が緩い。墓塚の主軸方向はN-77°Eである。

底面には短辺の壁際に小口材を据える穴がある。いずれも溝状を呈しており、東側は幅0.17m、深さ0.10mのまっすぐであるのに対し、西側は幅0.10m、深さ0.07mで両端が北辺と南辺の下端に沿うように曲がって延びる。両穴の芯々間距離は1.28mある。

墓塚内は大半が基盤層ブロックを含む黒褐色シルトが堆積しており、棺が腐朽した後に陥没、流入したと思われる。東西両端にはローム細粒を多量に含む3層が見られる。棺の裏込めと思われ、東西とも小口材を据える穴の中まで堆積していた。墓塚短軸方向の断面では明確な裏込め土はみられなかった。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4604(図122、PL.29)

R14で確認した木棺墓で、墓塚の平面形は隅円長方形に近く、北辺がやや外側に膨らむ。規模は長軸1.07m、短軸は最も広いところで0.53m、短辺が0.40mある。検出面からの深さは0.11mあり、墓塚の断面形は長軸方向、短軸方向ともに逆台形を呈する。墓塚の主軸方向はN-78°Eである。

底面には短辺の壁際に小口材を据える穴があり、東側で長さ0.36m、幅0.14m、深さ0.08m、西側で長さ0.30m、幅0.20m、深さ0.13mある。両穴の芯々間距離は0.91mある。

墓塚内は大半は基盤層の細粒を含む黒褐色シルトが堆積する。棺が腐朽した後に陥没、流入したと思われる。長軸方向では両端にATブロックを多く含む3層があり、小口材を据える穴もこの堆積で埋没していた。小口材が腐朽した後に棺の裏込め土が流入したと考える。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4605(図122、PL.28)

R14で確認した木棺墓で、墓塚の平面形は東辺が外側に膨らむが、長軸の最大長が2.72m、短軸が0.97mの概ね隅円方形を呈する。検出面からの深さは0.35mあり、墓塚の断面形は長軸方向が逆台形、短軸方向が逆コマボコ形を呈する。墓塚の主軸方向はN-86°Wである。

墓塚内全体を少し掘り下げると、北辺寄りに基盤層ブロックを少し含む黒褐色シルト(2層)があり、その周りに基盤層ブロックを多く含む8～10層が広がっていた。堆積状態から2層は棺内への流入土、8～10層は棺の裏込め土と判断した。

墓塚底面には、短辺下端に沿うように溝状の小口材を据える穴があり、東側が幅0.15m、深さ

0.08m、西側が幅0.20m、深さ0.07mある。両穴の芯々間距離は1.90mある。

堆積状況を観察すると、木棺の裏込め土は東側は小口材を据える穴の外側まで、西側は穴の外側半分まで堆積していた。西側は小口材の腐朽後に裏込め土が流入したと思われるが、東側の裏込め土と棺内埋土の境界は直線的であり、小口材の痕跡はないものの、埋土の境界が棺材の外側の面に相当する可能性がある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4606 (図122, PL.28)

R15で確認した木棺墓で、墓壇の平面形は北東側がやや膨らむ隅円長方形で、軸1.19～1.25m、短軸0.50～0.55mある。検出面からの深さは0.18mあり、墓壇の断面形は長軸方向がほぼ長方形、短軸方向が逆台形を呈する。墓壇の主軸方向はN-66°-Eである。

底面には短辺の壁際に深さ0.08～0.10mの小口材を据える穴がある。穴の芯々間距離は0.98mある。

墓壇内の大半は基盤層の細粒を含む黒褐色シルトが堆積する。棺が腐朽した後に陥没、流入したと思われる。小口材を据える穴より外側では基盤層のブロックを多く含む3～6層があり、棺の裏込めの土と考える。東側の裏込め土は小口材を据える穴よりも内側まで堆積するが、おそらく棺内の一部にまだ空洞があった段階で小口材が朽ちて流れ込んだのであろう。短軸方向の断面では裏込め土はみられなかった。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4607 (図122, PL.29)

R15で確認した木棺墓で、墓壇の平面形は長軸1.03m、短軸0.50mの隅円方形を呈する。検出面からの深さは0.18mあり、墓壇の断面形は長軸方向では逆台形、短軸方向では長方形を呈する。墓壇の主軸方向はN-80°-Eである。

墓壇内は黒褐色シルトが堆積しており、上層(1層)に比べて下層(2、4、5層)は基盤層ブロックを多く含む。下層は棺の裏込め土や棺上に被覆した土が棺が腐朽していく中で流入したものであろう。

墓壇の底面には小口材を据える穴があり、墓壇短辺の下端に沿うように幅0.10mの溝状の掘り込みであった。深さは西側が0.06mと浅めだが、東側は0.17mと深く掘られていた。穴の芯々間距離は0.71mある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4608 (図123, PL.29)

S15で確認した木棺墓で、墓壇の平面形は長辺は直線的であるのに対し、短辺は東辺が外側に膨らむような形に、西辺では南西隅が長軸方向に張り出す形状をしていた。平面規模は長軸は中央部で1.06m、短軸は西側で0.56m、東側で0.70mある。検出面からの深さは0.21mあり、墓壇の断面形は長軸方向、短軸方向ともに逆台形を呈する。墓壇の主軸方向はN-85°-Eである。

墓壇埋土を数cm掘り下げて平面を精査すると、東辺以外の3辺に沿うように基盤層ブロックを多く含む埋土がみられ、これらが棺の裏込め土と推測した。そこで、堆積状況を確認したところ、長軸方向の底面付近に基盤層ブロックを主体とした8、11層が確認できた。また、その内側にも基盤層ブロックを多く含む3～6層が見られた。

底面には、小口材を据える穴が確認できた。西側は掘方下端にはほぼ沿い、幅は0.06mであるのに対し、東側は下端より0.1mほど内側に掘られており、幅は0.14mでやや広い。これらの穴の埋土は基盤

層ブロックを主体とした堆積であった。穴の芯々間距離は0.92mある。

これらの状況から、基盤層ブロックを主体とした堆積が棺小口側の裏込め土と考えられ、その内側の堆積は裏込め土が棺内に流入したと判断した。裏込め土の内側の長さは0.86mある。

一方、短軸方向の堆積状況を観察すると、墓壁の壁面付近に流入土に比べて堅くしまった12、13層が確認でき、これらが棺の裏込め土の可能性がある。この堆積に挟まれた内側の幅は0.41mある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4610(図123)

Q14、R14で確認した木棺墓で、墓壁の平面形は長軸1.48m、短軸0.87mの隅円方形を呈する。検出面からの深さは0.22mあり、墓壁の断面形は長軸方向、短軸方向ともにほぼ長方形を呈する。墓壁の主軸方向はN-71°-Wである。

堆積状況を見ると、最上層に基盤層細粒をあまり含まない黒褐色シルト(1層)があり、その下は基盤層細粒を多く含む2～10層になる。東辺の4層と西辺5、6層、北辺の7層は棺の裏込め土の可能性が高く、それ以外の堆積は棺が腐朽していく中で裏込め土の一部が流入したと思われる。

墓壁底面まで掘り下げると、各辺の下端よりやや内側に溝状に窪んでいる状況が確認できた。東辺のものは幅0.16m、深さ0.08mあり、小口材を据える穴であるが、それ以外については深さが0.04m以下と浅く、掘られたものというよりも材を据えたときにできた痕跡と考えた。東側の小口材の据えた位置がはっきりしないが、仮に穴の棺内側に沿わせていたとすると、棺の内法長は0.88m、幅は0.22m前後と推定される。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4611(図123)

R15、S15で確認した木棺墓で、長辺は直線的であるのに対し、短辺は弧状になる。墓壁の規模は長軸の最長部は0.86m、短軸は北西側で0.45m、南東側で0.39mある。検出面からの深さは0.14mと浅く、墓壁の断面形は長軸方向、短軸方向ともに逆台形を呈する。墓壁の主軸方向はN-23°-Wである。

墓壁の底面には短辺の壁際に小口材を据える穴がある。北西側は幅0.10m、深さ0.12mの溝状であるのに対して、南東側は深さ0.10mの不整形のピット状を呈する。両穴の芯々間距離は0.65mある。

墓壁内の大半は基盤層のブロックを含む黒褐色シルトが堆積する。棺が腐朽した後に陥没、流入したと思われる。南東側の堆積状況を見ると、小口材を据える穴の外側に基盤層ブロックを多く含む4層であるのに対し、内側にはブロックの少ない3層である。4層は棺の裏込め土と考えられ、3層は小口材が腐朽した後に上層(1層)の堆積が流れ込んだとみられる。北西端は小口材を据える穴の中に基盤層ブロックを多く含む2層が堆積しており、棺内が埋没した後に小口材が腐朽し、裏込め土が流れ込んだものとする。以上の状況から小口材は穴の棺内側の壁近くに沿わせていたと考え、棺内法長は0.40m前後と推定される。墓壁短軸方向の断面では、裏込め土とみられる堆積は確認できなかった。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4613(図123)

R15で確認した墓で、北側は後世の圃場による溝状の掘り込みによって失われていた。残存する墓壁の規模は長軸2.04m、短軸0.48m、検出面からの深さ0.15mである。墓壁の主軸方向はN-58°-Wである。

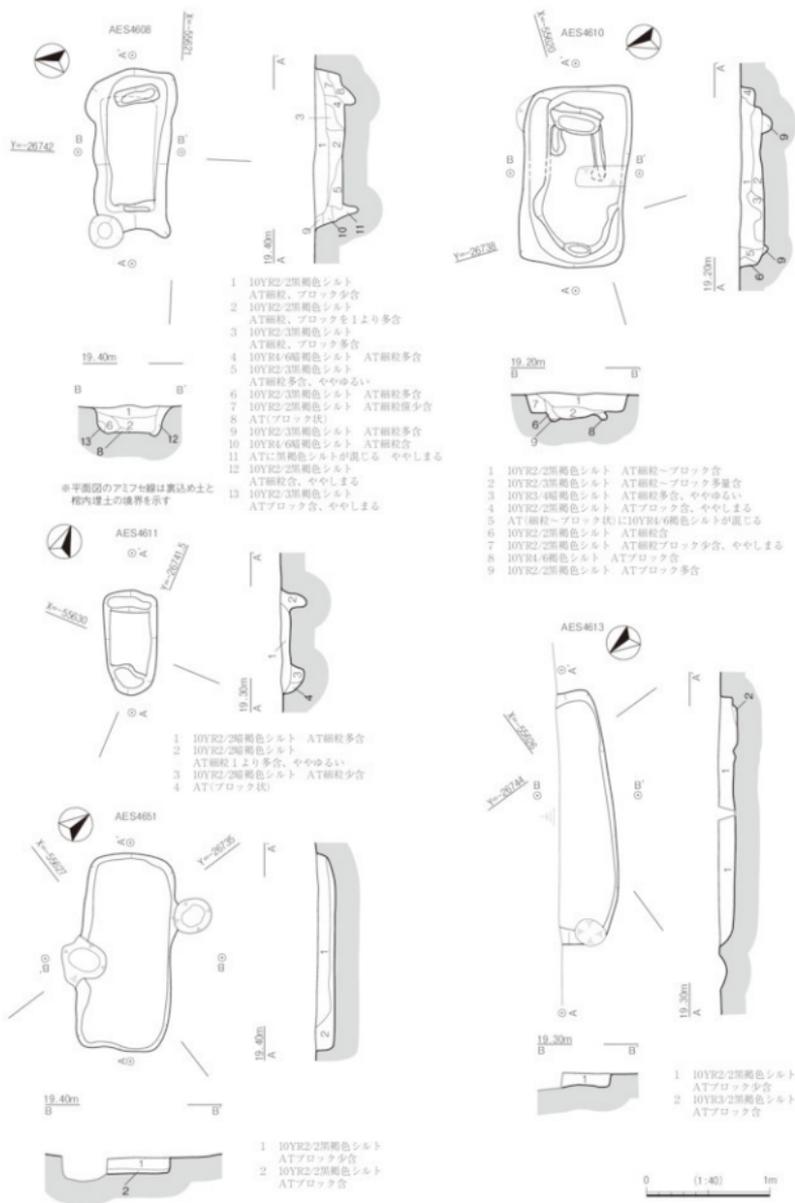


図123 A区 木棺墓AES4608・4610・4611・4613・4651 平面・断面

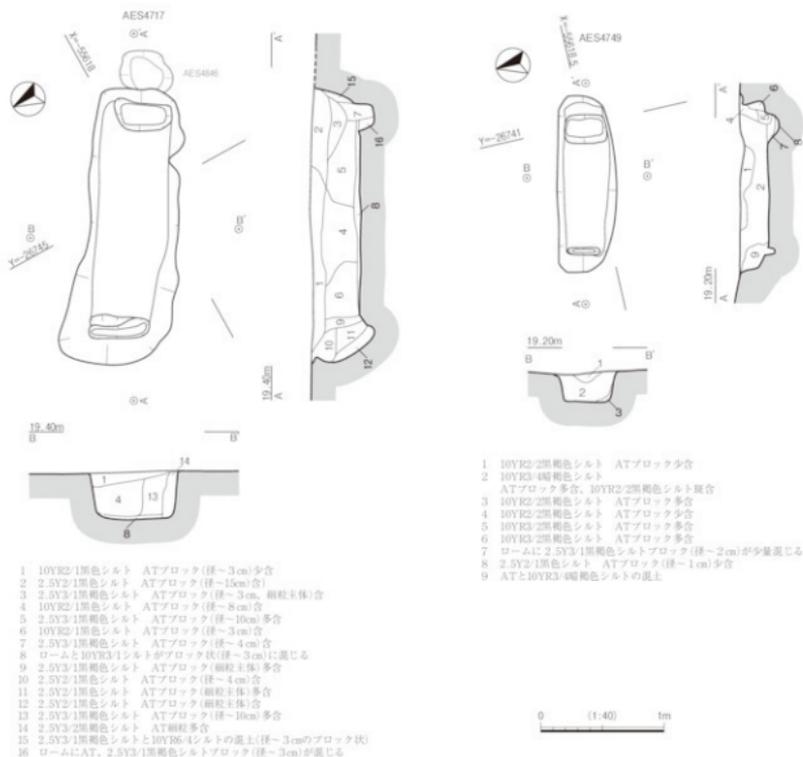


図124 A区 木棺墓AES4717・4749 平面・断面

墓壇埋土は基盤層ブロックを少量含む黒褐色シルトの単層で、棺材の痕跡や裏込め土は確認できない。また、底面に小口材を据える穴や据えた際にできた痕跡は認められず、土壌墓の可能性が高い。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4651(図123)

R14で確認した墓で、墓壇の平面形は長軸1.60m、短軸0.70mの隅円方形を呈する。検出面からの深さ0.14mあり、墓壇の断面形は長軸方向では南東側がほぼ垂直であるのに対して北西側がカマボコ形となり、短軸方向では隅円方形に近い。墓壇の主軸方向はN-47°-Wである。

底面に小口材を据えるための穴はなく、堆積状況から棺材の痕跡は確認できないことから土壌墓と考える。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4717(図124)

Q15で確認した木棺墓で、墓壇の平面形は北西部にやや膨らんだ形状をしている。形状は長軸2.27m、短軸0.72m、検出面からの深さ0.39mある。墓壇の主軸方向はN-55°-Wである。

墓壇内を全体に少し掘り下げて精査すると、南辺付近に他よりも基盤層ブロックを多く含む13、14

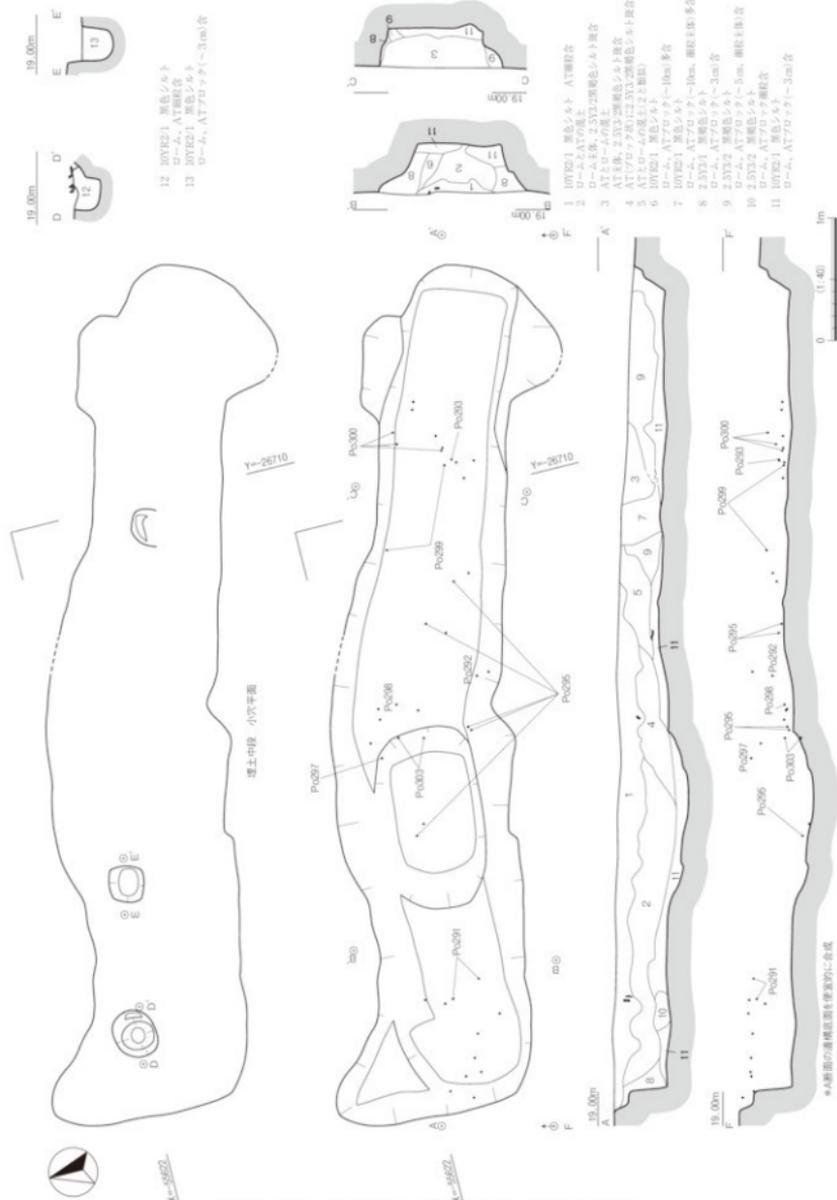


図125 A区 AES3504 平面・断面・遺物出土状況

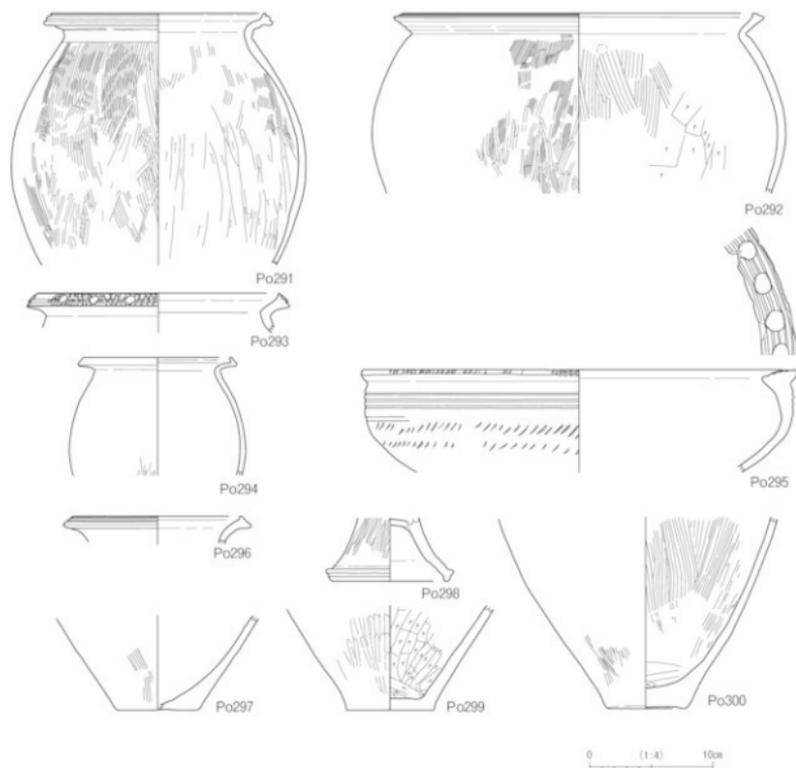


図126 A区 AES3504 出土遺物

層が帯状に確認できた。堆積状況から棺の裏込め土と思われる。同じような堆積には西端の9～12層がある。また、底面には基盤層ブロックを主体とした薄い8層が確認できた。平面で範囲を確認できなかったが、棺床に敷かれた可能性が高い。

墓竈底面には、短辺下端に沿うように幅0.16～0.20m、深さ0.12m前後の穴が掘られており、小口材を据える穴と判断した。東側の穴では東と西で埋土が異なっており、堆積状況から東側の7層が小口材の痕跡、西側の16層が材を固定するための裏込め土と考えた。東側の小口材の厚さは0.15m前後と推定される。一方、西側の穴は裏込め土ですべて埋没していた。穴の芯々間距離は1.73mある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES4749(図124)

Q15で確認した墓で、墓竈の平面形は南側がやや膨らむが、長軸1.44m、短軸の最大部が0.49mの概ね隅円方形を呈する。検出面の深さは0.24mで、墓竈の断面形は長軸方向が逆台形、短軸方向がほぼ方形を呈する。墓竈の主軸方向はN-78°-Wである。

墓竈内は基盤層ブロックを多く含む黒褐色シルトを基本とした堆積で埋まっており、徐々に掘り下



図127 A区 AWS658
平面・断面・出土遺物

- 1 10YR3-1黒褐色シルト
ATアロック(径~3cm, 細粒主体)含
- 2 10YR3-1黒褐色シルト AT細粒含
- 3 10YR2-1黒色シルト
- 4 2.5Y2-1黒色シルト
ATアロック(径~5cm)少含
- 5 10YR3-1黒褐色シルト
ロームアロック(径~4cm)多含
- 6 10YR3-2黒褐色シルト
ロームアロック(径~1cm, 細粒主体)含

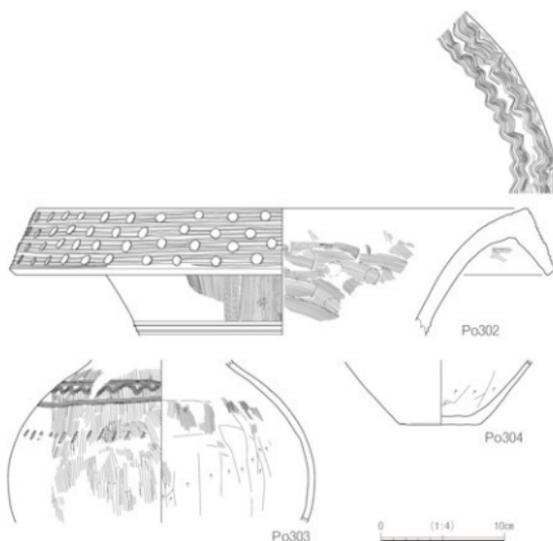


図128 A区 複数遺構で接合した弥生土器

げながら平面の精査を行ったが、明確な棺痕跡は確認できなかった。堆積状況を観察すると、西辺に基盤層ブロックを主体とした9層があり、小口材の表込め土と判断した。これ以外については墓坑埋土や棺の表込め土が棺内に流入したものと考えた。

墓坑の底面には、短辺の壁際に溝状に掘られた深さ0.1m前後の穴が確認できた。棺の小口材を据えるための穴で、西側の穴は幅が0.06mと細めであるのに対し、東側の穴は0.22mと広い。穴の芯々間距離は1.00mある。

埋土から時期を特定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

その他の遺構

AES-3504(図125・126)

R11・12にかけて延びる東西方向の溝状遺構である。溝は北側にやや凸になるように緩やかに曲がっており、長さは6.82m、幅は1.02~1.38mある。底面は西から東へ僅かに下っていて、西側で少し深くなる箇所がみられた。検出面からの深さは一番深くなるところで0.29mある。

埋土は底面付近に基盤層ブロックを含む黒色シルトがあり、この上にブロック状になった基盤層を主体とした2~6層が厚く堆積していた。この層は人為的に溝を埋め戻した堆積とみられ、この上面で精査を行うことにした。その結果、3箇所でも1層に近い黒色シルトを基本とした堆積が埋土で、長径0.3m前後の円形のピットを検出した。布掘建物の掘方の可能性も考えたが、これに対応する掘方やピット列が確認できず、詳細は不明である。

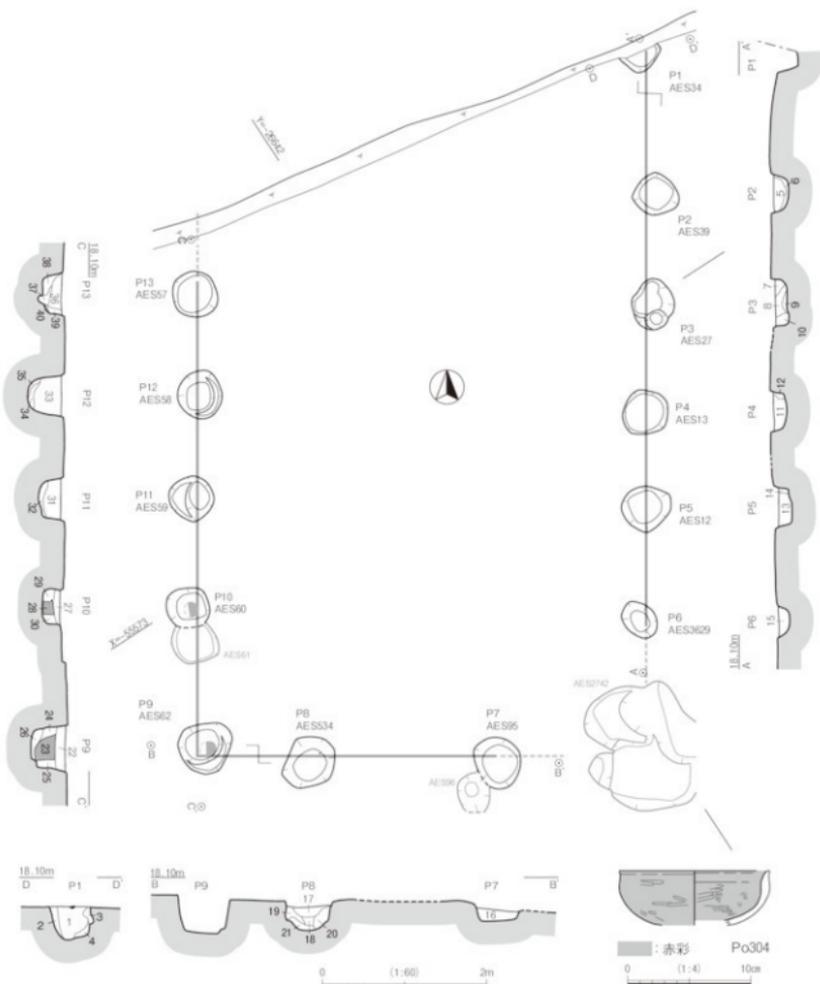


図129 A区 掘立柱建物3 平面・断面・出土遺物

遺物は、遺構西側の基盤層を主体とした堆積の上面と、遺構東側の底面付近で出土した。出土した土器は弥生時代中期中葉から後葉のもので、多くの土器の口縁端部や脚端部に凹線文が確認できる。Po293・294は口縁端部の凹線文を施文後に円形浮文が施される。(田中)

AWS658(図127)

O21の北東隅にある遺構である。平面は北西から南東方向に軸をもつ楕円形で、長径0.79m、短径0.58m、検出面からの深さは0.53mで、底面はローム層中である。

表4 A区 掘立柱建物3 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR2/1黒色シルト		21	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-8cm)含)
2	10YR2/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-5cm)含)	22	10YR3/1黒褐色シルト	
3	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-5cm)多含)	23	10YR1/7/1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)極少含)
4	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm)少含)	24	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)多含)
5	10YR1/7/1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)少含)	25	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm)極少含)
6	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)含)	26	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm)極少含)
7	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-1cm)含)	27	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)含)
8	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm)極少含)	28	10YR2/1黒色シルト	
9	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)含)	29	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-8cm)含)
10	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)含)	30	10YR1/7/1黒色シルト	
11	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック細粒含)	31	10YR3/1黒褐色シルト	
12	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm)多含)	32	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-3cm)含)
13	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)少含)	33	10YR1/7/1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)少含)
	10YR3/1黒褐色シルトの混入		34	10YR3/1黒褐色シルト	
14	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-4cm)多含)	35	ロームブロックに10YR3/1黒褐色シルトブロック(径-2cm)が混入	
15	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)含)	36	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)含)
16	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)含)	37	10YR2/1黒色シルト	36に比べてブロック少
17	10YR1/7/1黒色シルト		38	ロームブロックに10YR3/1黒褐色シルトが混入	
18	10YR2/1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)極少含)	39	10YR2/1黒色シルト	
19	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-3cm)含)	40	10YR3/1黒褐色シルト	(AT細粒含)
20	10YR3/1黒褐色シルト	(ATブロック(径-4cm)含)			

断面形は北西と南東に段をもつ2段掘り、底面は径0.33m～0.35mのやや不整な円形である。柱状の掘方をもつもの、周囲に対応する遺構は検出できない。

埋土は、底面に大粒のATブロックを含む3・4層、周縁部に4・5層、上位に1・2層が堆積する。

遺物は掘り下げ中に弥生土器が出土した。このうちPo301を図化した。

掘方から、柱穴の可能性をもつ弥生時代中期後葉の土坑と考える。(八時)

その他の遺物(PL105)

図128は弥生時代の複数の遺構から出土して接合した遺物である。

複数の遺構で遺物が接合するのは主に袋状土坑から出土したもので、溝状遺構AES3504から出土した土器の中にも接合するものが確認できた。遺物が接合する遺構は比較的近いものもあるが、数10m離れた遺構で出土した土器で接合するものもあり、その傾向は様ではない。接合する土器はいずれも破片で完形になることはない。

要因として、これらの土器が当時の地表の土壌に含まれたもので、遺構が流入土で埋設するときに遺構内に入ったと考えるのが妥当であろう。(田中)

第4節 古墳時代～飛鳥時代の遺構

古墳時代の遺構は掘立柱建物と竪穴建物がある。この時期の遺構と認識できたものは調査区の東側に多い。ただ、A区では出土遺物が乏しく時期の特定ができない建物(第7節で記述)も多く、他の段階も同様であるが、この時期の段丘面上の遺構の広がりを捉えるのは難しい。

掘立柱建物

掘立柱建物3(図129)

L5・M4・5に位置する、桁行6間以上、梁行3～4間の建物である。南東隅の柱穴は、地下式坑9によって壊される。規模は、桁行が8.80m以上、梁行が5.26mで、建物の主軸方向はN-33°-Eである。

柱穴の平面形はいずれもほぼ円形を呈しており、規模は直径が0.52～0.68(平均0.58)m、深さが0.15～0.40(平均0.28)mある。掘方の深さは桁方向の西側柱筋が平均0.34m、東側柱筋が平均0.23m

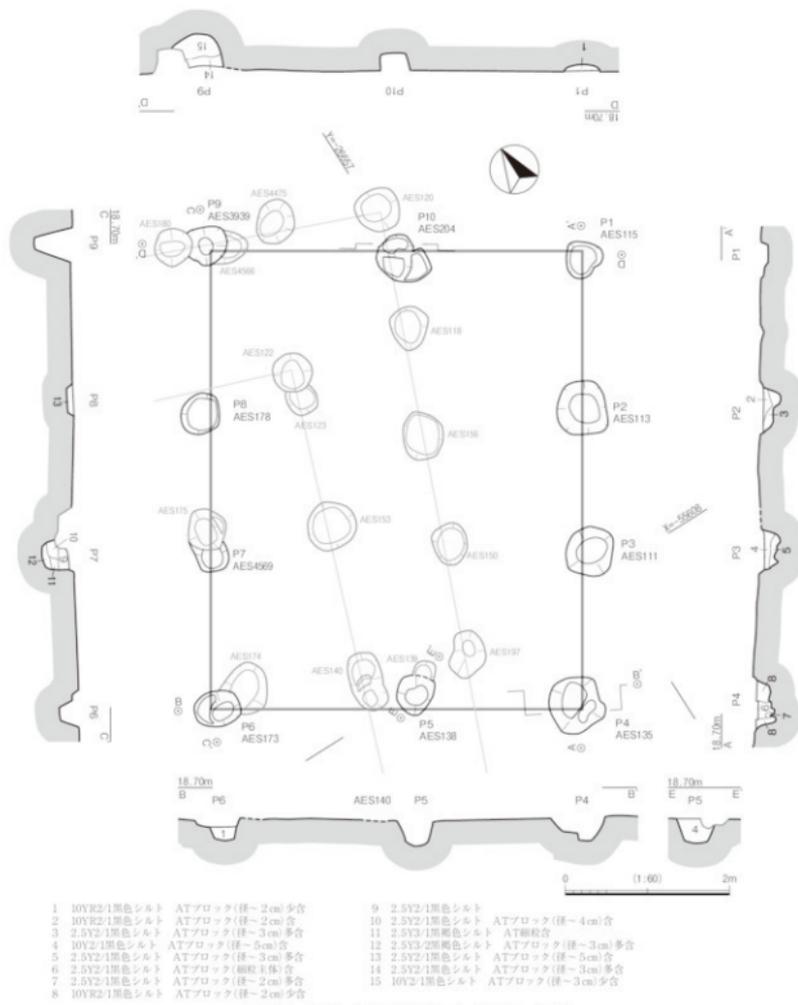


図130 A区 掘立柱建物4 平面・断面

で、西側が東側に比べて深い。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを少し含む。埋土観察から、P9・10で柱痕と思われる堆積が確認でき、そこから復元できる柱の直径は0.15~0.35m程度である。

柱痕跡および柱穴の中心間を結んだ柱間隔は桁行で1.20~1.70(平均1.36)m、梁行はP7-P8間が2.30m、P8-P9間が1.26mで、両者にはほぼ倍近くの差があるため、P7-P8間に柱穴が1基存在し

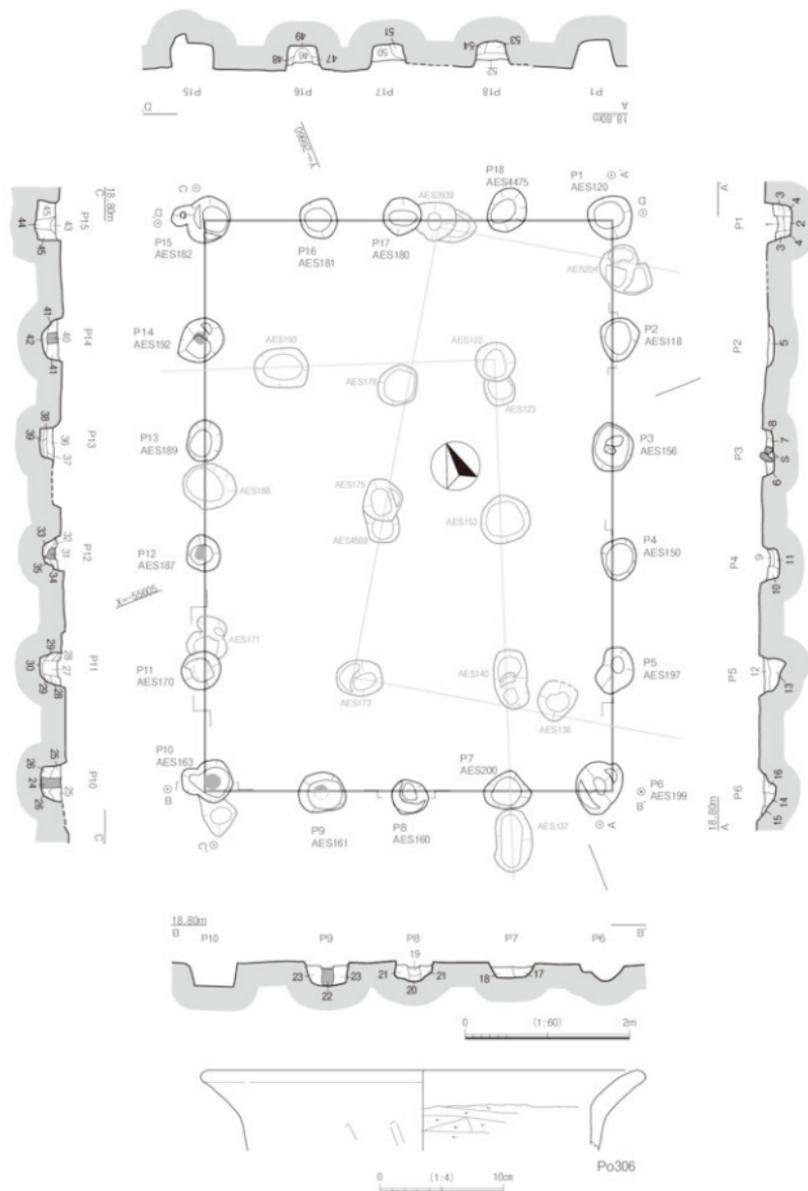


図131 A区 掘立柱建物5 平面・断面・出土遺物

表5 A区 掘立柱建物5 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-1cm)含、ややゆるい	28	10YR3/1黒褐色シルト	細礫含
2	1よりアブロック多含		29	10YR3/2黒褐色シルト	ATアブロック(径-2cm)含
3	10YR2/2黒褐色シルト	ATアブロック(細粒主体)含	30	10YR3/2黒褐色シルトとロームがアブロック状(径-3cm)に混じる	
4	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-2cm)含	31	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-2cm)含
5	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-3cm)含	32	10YR2/1黒色シルト	
6	10YR2/1黒色シルト	細礫含	33	10YR3/2黒褐色シルトとロームがアブロック状(径-4cm)に混じる	
7	10YR3/2黒褐色シルトとローム(アブロック状(径-2cm)に混じる)の黄土		34	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-2cm)含
8	10YR3/1黒色シルト		35	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-2cm)含
9	ロームと10YR3/1黒褐色シルトの黄土		36	10YR2/1黒色シルトとATアブロック(径-3cm)含	
10	10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの黄土		37	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-4cm)含
11	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-3cm)含	38	10YR2/1黒色シルト	
12	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-5cm)含	39	ロームに10YR3/1黒褐色シルトが混じる	
13	10YR3/2黒褐色シルト	ATアブロック(径-5cm)多含	40	10YR2/1黒色シルト	
14	10YR2/1黒色シルト	ややゆるい	41	10YR2/1黒色シルトと細礫含	
15	10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの黄土		42	ロームに10YR3/1黒褐色シルトアブロック(径-3cm)が混じる	
16	10YR1.7/1黒色シルトと10YR2/1黒色シルトの黄土		43	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-2cm)含、ややゆるい
17	10YR2/1黒色シルト	細礫含	44	10YR3/1黒褐色シルトとATアブロック(径-3cm)含	
18	10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの黄土		45	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-3cm)少含
19	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-1cm、細粒主体)含、ややゆるい	46	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-2cm)少含
20	7.5YR2/1黒色シルト	ロームアブロック(径-2cm)含	47	10YR3/1黒褐色シルト	
21	10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの黄土	ATアブロック(細粒主体)含	48	10YR3/1黒褐色シルト	ATアブロック(径-3cm)含
22	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-2cm、細粒主体)少含、ややゆるい	49	10YR3/1黒褐色シルトとATアブロック(径-3cm)含	
23	10YR2/2黒色シルト	ATアブロック(径-3cm、細粒主体)含	50	10YR3/1黒褐色シルトとATアブロック(径-1cm)少含	
24	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-1cm)少含	51	10YR3/1黒褐色シルト(ATアブロック(径-1cm、細粒主体)含)	
25	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-2cm)含	52	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-2cm)保少含
26	10YR3/1黒褐色シルトとATアブロック(径-4cm、細粒主体)含		53	10YR2/1黒色シルト	ATアブロック(径-5cm)少含
27	10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの黄土	ATアブロック(径-2cm)含	54	2.5Y2/1黒色シルト	AT細礫含

た可能性がある。

掘方からは土師器、須恵器の破片が出土しており、1点を図化した。Po304は内外面ともミガキで調整し、赤色染彩する。

出土遺物から、遺構の時期は古墳時代後期と考える。(岡田)

掘立柱建物4(図130、PL30)

P6・7で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。柱の痕跡などが残っておらず、柱穴掘方の中央をなるべく通るように推定すると桁行5.62m、梁行が4.52mとなり、建物の主軸方向はN-32°Eである。

柱穴の平面形は楕円形または不整形で、長径0.48～0.69(平均0.57)m、検出面からの深さは0.06～0.49(平均0.25)mで、特に深さのばらつきが大きい。推定復元線上での桁行の掘方芯々間距離は中央(1.8m前後)が他のもの(1.9～2.0m)に比べて狭い。梁行は北辺がほぼ等間隔なのに対し、南辺は中央の柱が東に寄る(西から2.47m、2.05m)。

柱穴掘方埋土からは土師器、須恵器の細片が出土しており、古墳時代後期後葉以降と思われる坏蓋の細片が含まれること、奈良時代以降のものと判断される遺物が含まれないことから、古墳時代後期から飛鳥時代の建物と考える。(田中)

掘立柱建物5(図131、PL30)

P6・7で検出した、桁行5間、梁行4間の南北棟の建物である。規模は桁行7.02m、梁行4.95mで、建物の主軸方向はN-22°Eである。

柱穴の平面形はややいびつな楕円形で、長径が0.45～0.64(平均0.55)m、検出面からの深さが0.12～0.36(平均0.28)mである。建物北東のP2・3は他のものに比べて浅くなっており、浅い柱穴のある位置は掘立柱建物8と類似する。柱(明確でないものは柱穴の中央)の間隔は、桁行では両端が広め(1.5m前後)で内側は狭く(1.3～1.4m)、梁行では西端が広く(1.37m、1.45m)、それ以外が狭く(1.02

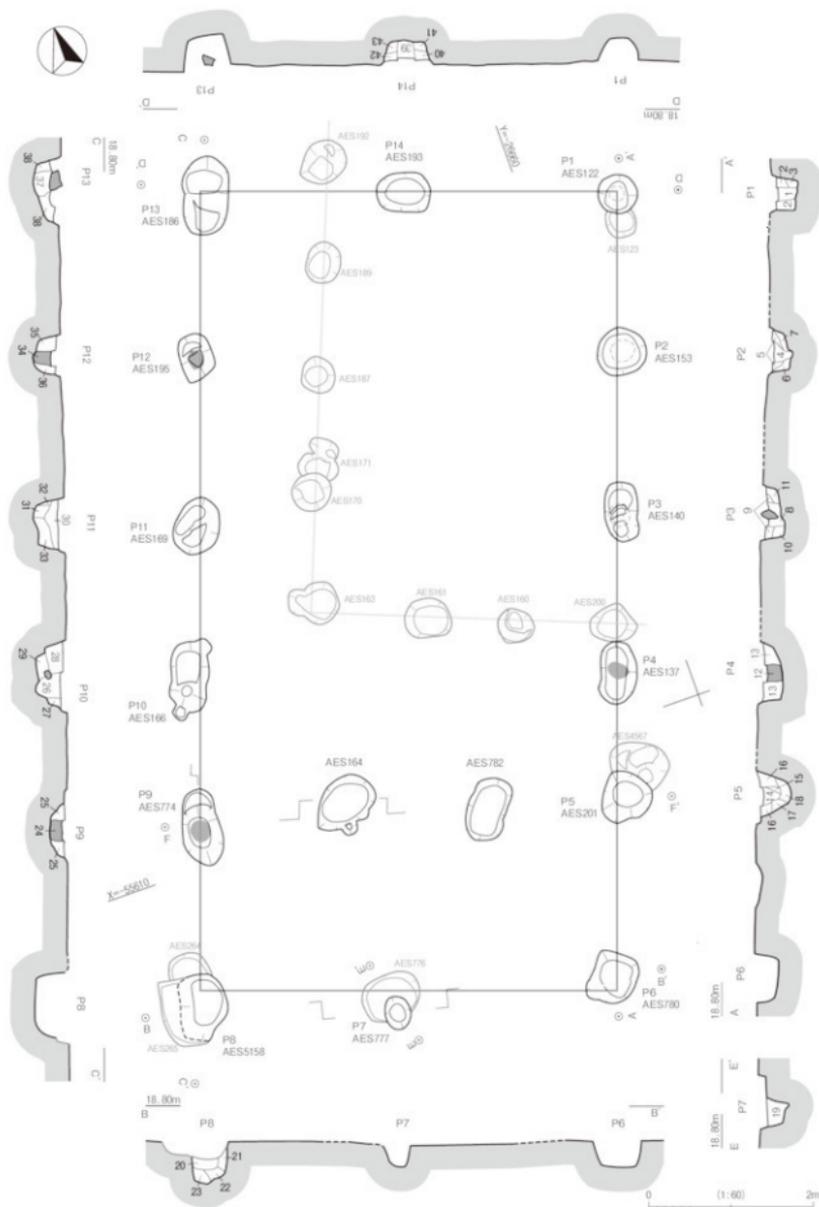


図132 A区 掘立柱建物6 平面・断面

中土層注記4図133参照

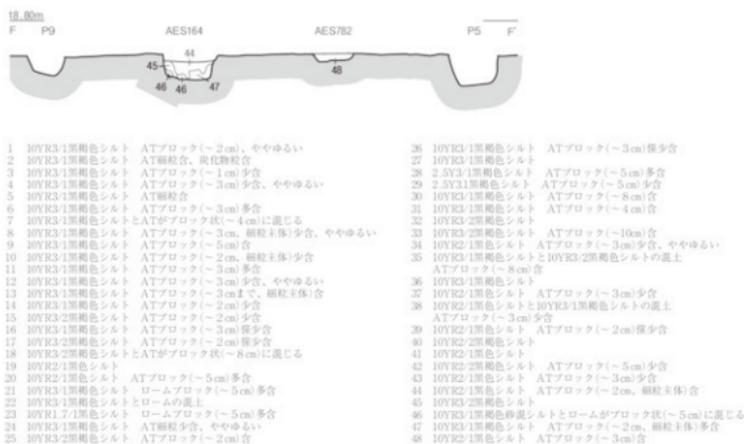


図133 A区 掘立柱建物6 断面

~1.29m), とくに西から2番目の柱間が極端に狭くなる。

柱穴の平面・断面で柱の痕跡が確認でき、直径0.15~0.2mの柱が据えられたと考える。掘方埋土は基盤層ブロックを少量含む暗褐色シルトを基本とする。

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器の細片が出土しており、土師器甕を図化した。奈良時代以降と判断される遺物を含まないことから古墳時代後期から飛鳥時代の建物と考える。(田中)

掘立柱建物6 (図132・133, PL30)

P6・7、Q6・7で検出した、桁行5間、梁行2間の南北棟の建物である。桁行の側柱列はほぼ平行し、北側柱は桁行の柱列とほぼ直交するが、西側柱列は東側柱列より長いことから、梁行の側柱列は平行しない。桁行は東側で9.61m、西側で10.09m、梁行は桁と直交する北側で5.11mある。建物の主軸方向はN-19°-Eである。

柱穴の平面形はやや細長い楕円形が多く、円形が混在する。そのため長径は0.48~0.97(平均0.69)mで差が大きく、検出面からの深さは0.08~0.48(平均0.34)mである。

柱穴の平面・断面で柱の痕跡(可能性があるものを含む)が確認でき、直径0.2~0.3mの柱が据えられたと考える。柱の間隔は東辺で1.54~2.18(平均1.92)m、西辺で1.70~2.29(平均2.02)mであり、どちらも一番南側が広く、南から2番目の柱間が狭くなる。

なお、南から2本目にあたるP5とP9を結んだ線上には2つの穴(AES164、AES782)がある。この線は南辺とほぼ平行しており、建物の間仕切りだった可能性がある。

柱穴掘方の埋土からは土師器、須恵器の細片が出土した。時期を判断しうる遺物はなかったが、掘立柱建物5、7と規模が類似し同じ場所で繰り返し建てられている状況から、古墳時代後期から飛鳥時代の建物と考えておく。(田中)

掘立柱建物7 (図134)

Q7・8で検出した、桁行5間、梁行4間の南北棟の建物である。規模は桁行7.03m、梁行5.17mで、建物の主軸方向はN-19°-Eである。北側柱列の東から2本目の柱穴については土坑AES775によっ

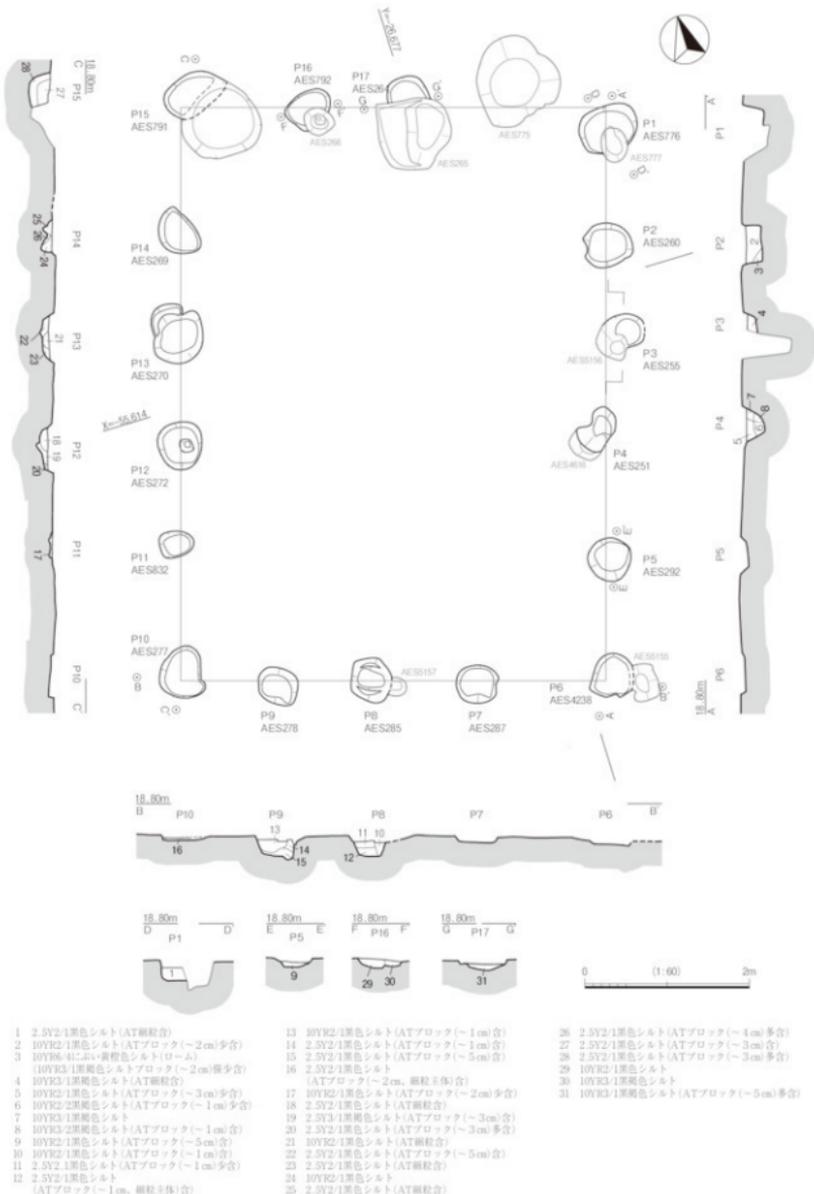


図134 A区 掘立柱建物7 平面・断面

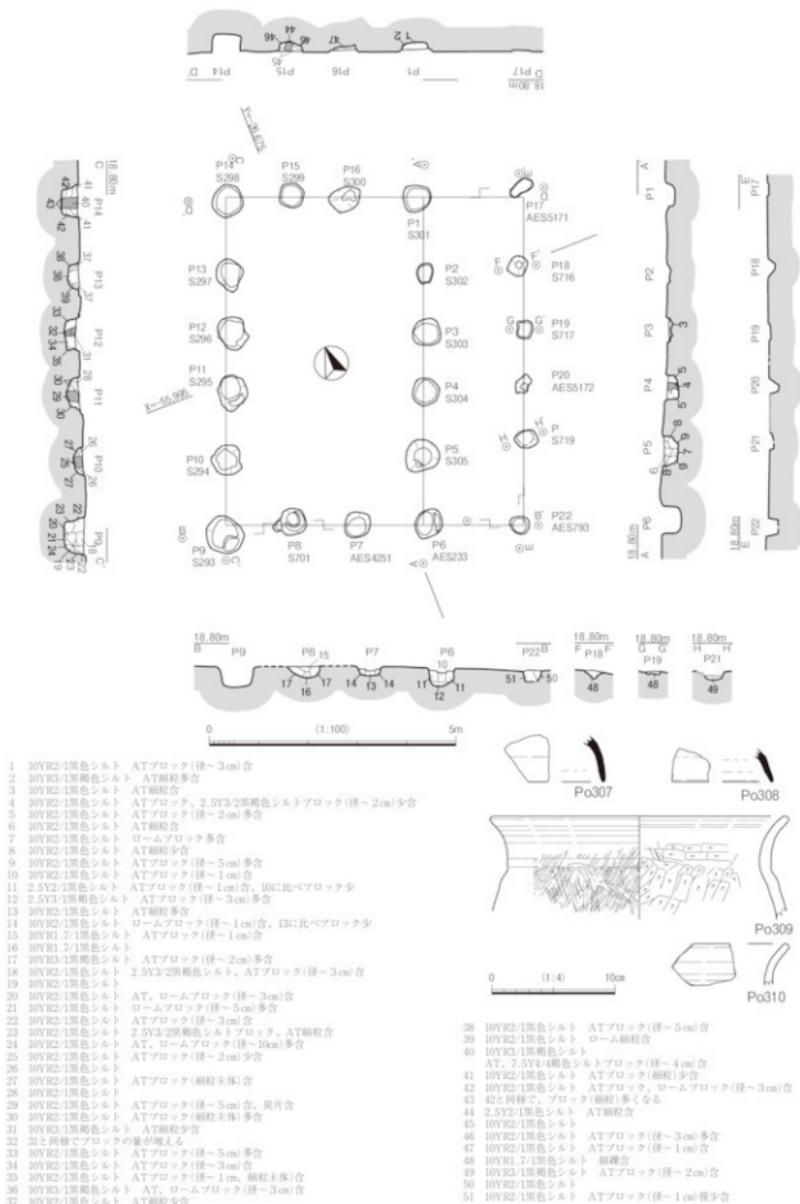


図135 A区 掘立柱建物B 平面・断面・出土遺物

て失われたと考える。

柱穴の平面形は不整形のものが多く、長径が0.34～0.84(平均0.59)mで規模の差が大きい。検出面からの深さが0.10～0.60(平均0.26)mで、桁行でみると南端が浅く北側の掘方ほど深くなる傾向がある。とくに東側柱列ではやや深いP4以外は掘方の間の距離に比例して底面の標高が変化していた。そのため、建物を構築したときの地表面がやや南から北へ低くなる傾斜があって、地表面から同じ深さで掘方が掘削されたと考えた。長方形で想定した建物の線上での掘方の芯々間距離は桁行で1.05～1.71(平均1.41)m、梁行はすべての柱穴がある南側柱列で1.13～1.55(平均1.29)mでばらつきが大きい。柱穴の通りはよくない。

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器の細片が出土した。この中には古墳時代後期の坏身の細片が含まれており、古代の遺物と特定出来るものが含まれないことから、古墳時代後期の建物と考える。

(田中)

掘立柱建物8(図135、PL30)

O8・9で検出した南北棟の建物で東側に廂が付く。建物の主軸方向はN-22°-Eである。

身舎は桁行5間、梁行3間で規模は桁行6.84m、梁行4.02mある。柱穴の平面形は円形または楕円形のものの中に不整形なものが混じる。掘方の規模は長径が0.41～0.76(平均0.63)m、検出面からの深さは0.05～0.51(平均0.27)mある。掘方は南西隅のP9が最も深く、大きくみればP9から東または北に行くに従って浅くなる傾向があり、隅に当たるP1、6、14は隣の掘方よりも少し深めになる。

柱穴の土層を観察すると、柱の痕跡が確認できるものがあり、径0.15～0.30mの柱が据えられたと考えた。また、P5～7、P9では中央付近に他よりも基盤層ブロックを多く含む堆積がみられ、柱を引き抜いた後に埋め戻した可能性がある。これらを含めて柱間を計測すると桁行で1.18～1.59(平均1.39)m、梁行で確認できるのは1.23mである。

廂の幅は2.03mあり、柱穴掘方は平面形が不整形である。掘方の規模は長軸が0.31～0.52(平均0.42)m、深さが0.04～0.37(平均0.19)mで、身舎のものよりも小さい。掘方の間隔はP21が少し北に寄っている以外は身舎東柱列とほぼ同じである。

掘方埋土からは須恵器・土師器が出土した。須恵器坏蓋Po307・308は口縁部と天井部の境に沈線がなく、稜もはっきりしない。土師器甕Po309・310は口縁部が緩く外反する。

建物の時期は掘方から出土した土器から古墳時代後期後葉以降で、調査区内で確認した奈良・平安時代の建物の多くが梁行2間であることから飛鳥時代の可能性が高いと考える。(田中)

竪穴建物

本項は遺物が出土していないもので竪穴部分が方形、隅円方形のものも含めて報告する。そのため、一部の建物は弥生時代に遡る可能性がある。

竪穴建物17(図136、PL31)

N5・6に位置する。竪穴建物18と重複し、中世の溝AES246によって一部を壊されていた。

平面形は隅円方形であり、検出面における主軸の長さは東西が4.96m、南北が4.74mある。検出面から床面までの深さは0.15mで、壁溝の幅は0.10～0.20mである。

主柱穴P1～P4の規模は長径0.38～0.51(平均0.42)m、深さ0.30～0.57(平均0.48)mある。P5はいわゆる中央ビットで、最大径が0.62m、深さが0.33mある。柱穴間の距離は、P1から時計回り

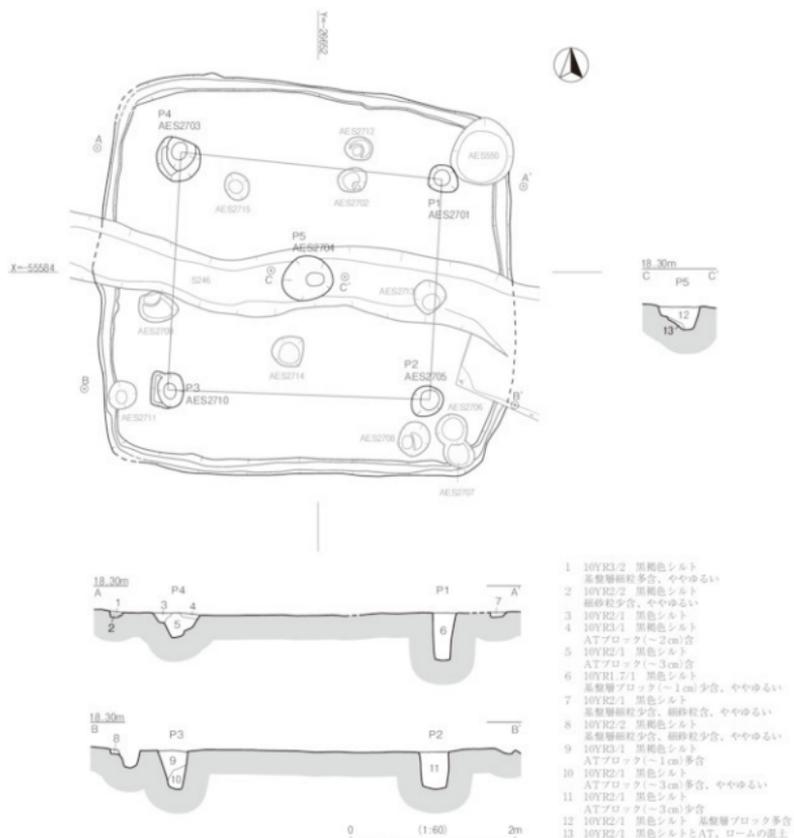


図136 A区 竪穴建物17 平面・断面

の順に2.8m、3.2m、2.9m、3.2mある。

竪穴部分の埋土はほとんど残存しないが、柱穴や壁溝埋土とともに旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかった。

遺物は北側周壁溝内から古墳時代中期から後期の土師器甕の細片が出土しており、この頃の遺構と考える。(岡田)

竪穴建物18(図137)

N6に位置し、竪穴建物17と重複する。壁溝の可能性のある溝は竪穴建物17の南側でわずかに残存するのみであった。残存する壁溝から平面形は隅円方形と推定できるが、規模は不明である。

柱穴P1～P4の規模は、長径0.34～0.42(平均0.37)m、深さ0.51～0.55cm(平均0.52)mある。P5はいわゆる中央ビットで、長径が0.38m、深さが0.20mある。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に2.7m、2.6m、2.9m、2.8mある。

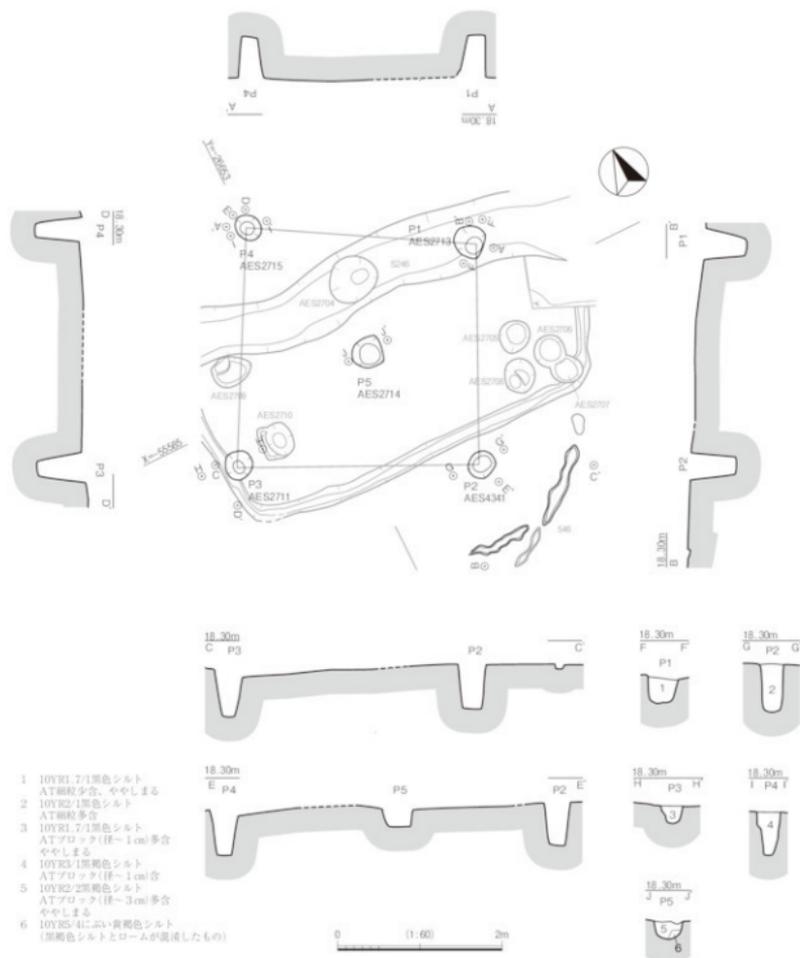


図137 A区 竪穴建物18 平面・断面

竪穴部分の埋土は残存しないが、柱穴埋土は旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかった。

時期を決定する遺物は出土していないが、P3が竪穴建物17の周壁溝を切ることから、遺構の時期は古墳時代と考える。(岡田)

竪穴建物19(図138)

O6、P6で検出した方形の竪穴建物で、規模は北東-南西方向が3.76m、北西-南東方向が3.70m、検出面からの深さは0.12mある。竪穴の縁には幅0.16~0.27m、深さ0.09~0.16mの周壁溝が

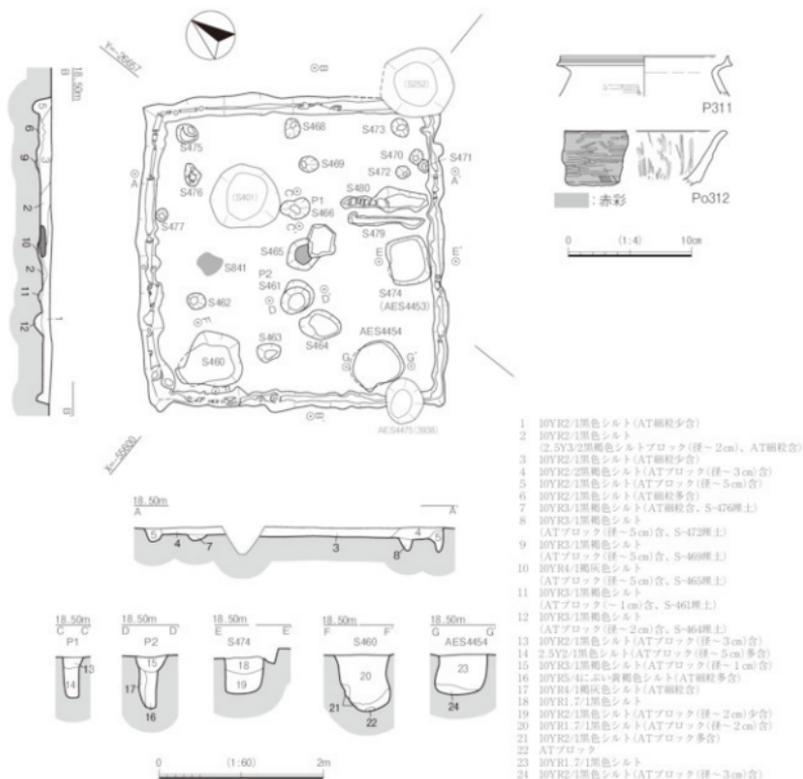


図138 A区 堅穴建物19 平面・断面・出土遺物

巡る。貼床は認められなかった。

建物の支柱穴は、堅穴中央に北東-南西方向に並ぶP1・2の2本である。周壁溝の近くには長径0.25~0.45m、深さ0.1m前後の小穴(S468・471・473・475・477)が並ぶようになり、これらも建物の上屋構造に関連する可能性がある。

床面には被熱面が2カ所確認でき、このうち中央部にあるものは浅い穴(S463)の下面で確認された。穴の上面には長径約0.4mの平らな石があり、建物の機能段階で何らかの台として使用したと想定される。そのため、当初は建物中央部で火を扱っていたが、後に西側に移した可能性がある。堅穴の南西隅には長径0.82m、深さ0.70mの土坑S460がある。西側や南側の壁面が開口部よりも外側へ広がる形をしており、建物内の貯蔵穴と考えた。

その他、床面には浅い小穴や溝がみられるが、これらが建物に直接関連するかどうかは不明である。

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土しており、須恵器坏身や内面に縦方向のミガキを施した土師器高坏の坏部の小片が含まれる。一方、底面の柱穴や小穴からは須恵器が出土せず、形状から時期が判断できる遺物は古墳時代前期の土師器片が最も新しい。床面直上で遺物がみられないのでは

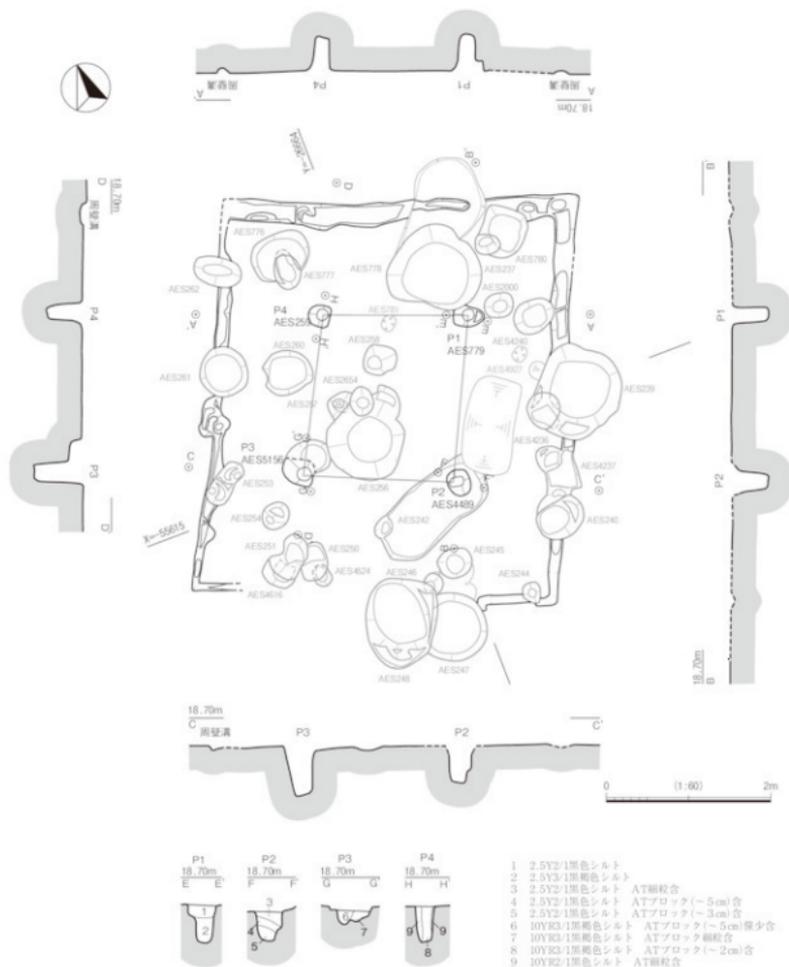


図139 A区 竪穴建物20 平面・断面

つきりしないが、古墳時代前期または中期に建物が機能し、古墳時代後期に埋没したものと考えておきたい。(田中)

竪穴建物20(図139)

Q7で検出した竪穴建物で、竪穴部分はすべて後世の耕作などによって失われていた。検出面では周壁溝が残存していたものの、南側ではごく浅くしか残っておらず、一部は不明瞭になっていた。このことから、建物の床面も一部削平されたと考えられ、貼床や坪などの被表面は確認されなかった。周壁溝の状況から、竪穴部分の底面が南北4.80～5.02m、東西4.28～4.42mのややゆがんだ方形であ

ることが確認できた。

主柱穴は4本で、底面中央で四辺形を結ぶと東西の辺はほぼ平行しており(南辺2.05m)、東辺(2.30m)は西辺(2.23m)よりもやや長い。掘方の平面形は長径0.27~0.38mの楕円形で、検出面からの深さはP3が0.60mで他のもの(0.4m前後)よりもやや深い。なお、P3は掘立柱建物7の柱穴を切っており、堅穴建物が掘立柱建物廃絶後に造られたことが確認できた。

柱穴埋土からは土器の細片が出土したが、時期を特定しうる遺物はなかった。ただ、掘立柱建物7の柱穴を壊していることから、古墳時代後期の建物と考える。(田中)

堅穴建物21(図140・141、PL.105)

R7からS8で検出した建物である。堅穴の西寄りには溝状遺構AES2867に切られており、南西部分は地下式坑18の堅坑に切られるとともに地下室部分の天井が崩落したことで攪乱を受けていた。また、南側は近世以降の切土によって失われていた。

建物は2段階あり、検出段階で確認できたのは新段階の堅穴である。古段階の建物は新段階の堅穴内に収まる形で確認できた。新段階の堅穴は残存している部分から平面形が東西6.24mの方形であることがわかる。堅穴の検出面からの深さは0.15~0.20mで、堅穴の底面裾には幅0.2~0.3m、深さ0.1m前後の周壁溝が巡っていた。

また、地下式坑18の南側には東西に伸びる溝状の窪みが確認できた。この窪みが堅穴の南周壁溝と考えられるが、窪みの底面に凸凹があり、中にはかなり深いものがあるため生物擾乱の可能性もある。窪みを周壁溝とすると、堅穴の南北長さは6.8m前後となる。

主柱穴はP1~4で、底面で四辺形に結ぶと北西隅がほぼ直角になるのに対し、南東隅は鈍角になる。主柱穴の底面芯々間の距離はP1から時計回りに2.20m、2.46m、2.36m、2.52mある。主柱穴の平面形は楕円形もしくは不整形で、長径は0.34~0.56mでばらつきが大きく、短径はP2がやや大きめであるものの他は柱穴は0.3~0.4mで比較的揃っていた。深さはP1が0.95mとやや深いのが他は0.85m前後で比較的揃っていた。

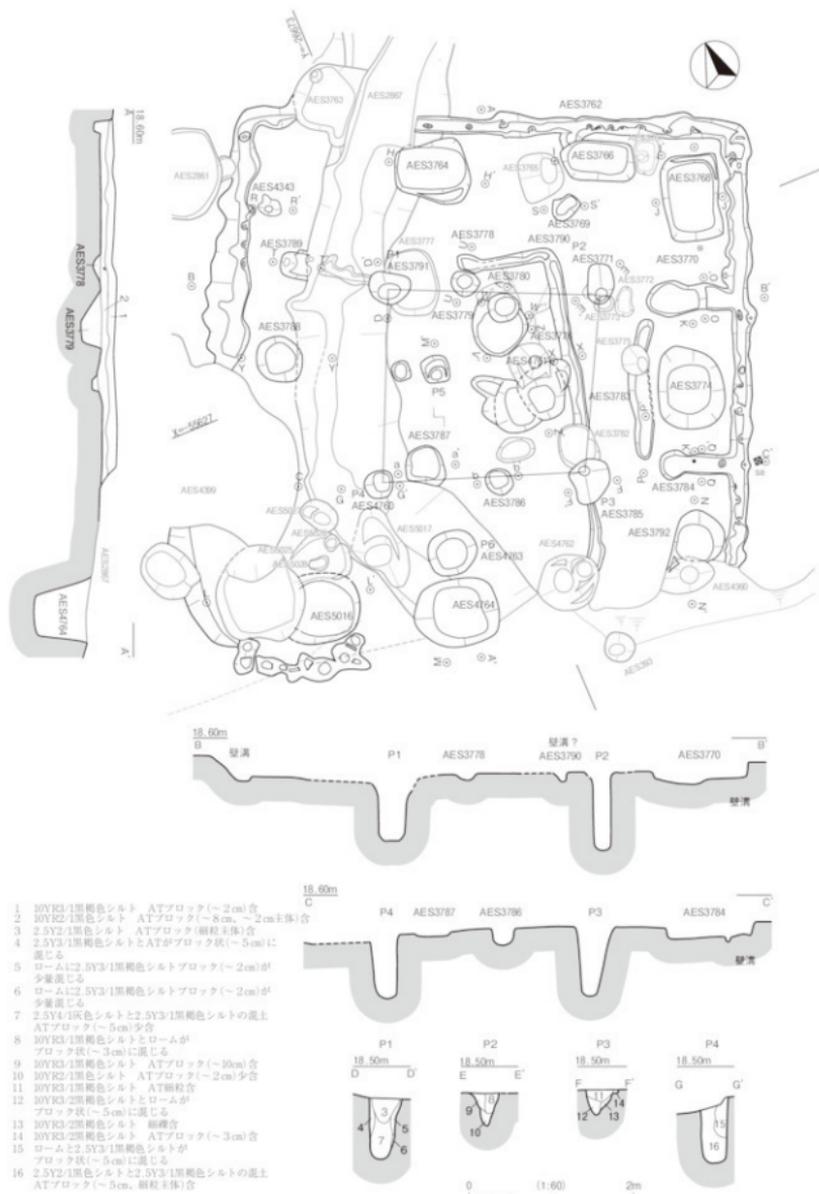
堅穴東辺のほぼ中央には南北長さ1.00m、東西長0.80m、深さ0.40mの楕円形の土坑AES3774があり、それを方形に囲むように溝状遺構が造られていた。溝状遺構は周壁溝とほぼ同じ深さで、土坑の南北にある溝状遺構(AES3770、3784)は主柱穴の底面中央で結んだ北辺と南辺の延長線上に掘られていた。

堅穴底面にはAES3774と平面規模や深さが同じような隅円方形や楕円形の土坑が複数確認できた。これらはすべて周壁溝のすぐそばに造られていた点で共通する。中には僅かながら壁面が掘方開口部よりも外側に広がるものがあり、貯蔵を目的とした土坑の可能性もある。また、埋土の下部に基盤層のブロックを多く含む堆積が確認できたものもあり、すべてが一度に開口していたのではなく、不要となったものを埋め戻しつつ、新たに穴を掘り直したと推測した。

古段階の建物に伴う遺構としては周壁溝AES3790と主柱穴P5、6がある。

AES3790は幅0.2m前後で南北方向に約4m延び、北側で西へほぼ直角に曲がり1.2m延びていた。また南端も西に少し曲がっていることから、建物の南北方向は4mを大きく超えないと考えた。また、新段階堅穴の西壁やその外側に建物の痕跡がないことから、東西方向も4m以内に収まると思われる。

主柱穴は平面規模や深さにやや差があるが、少なくともP6の断面で柱の痕跡と思われる堆積(図141、20層)が確認でき、溝とP6の位置関係からP5を主柱穴と判断した。



- 1 ⅡV R3-1黒褐色シルト・ATブロック(～2cm)合
- 2 ⅡV R2-1黒色シルト・ATブロック(～8cm、～2cm主体)合
- 3 2.5Y2-1黒色シルト・ATブロック(細粒主体)合
- 4 2.5Y3-1黒褐色シルトとATがブロック状(～5cm)に混じる
- 5 ロームに2.5Y3-1黒褐色シルトブロック(～2cm)が少量混じる
- 6 ロームに2.5Y3-1黒褐色シルトブロック(～2cm)が少量混じる
- 7 2.5Y4-1灰色シルトと2.5Y3-1黒褐色シルトの混土・ATブロック(～5cm)少含
- 8 ⅡV R3-1黒褐色シルトとロームがブロック状(～3cm)に混じる
- 9 ⅡV R3-1黒褐色シルト・ATブロック(～10cm)合
- 10 ⅡV R2-1黒色シルト・ATブロック(～2cm)少含
- 11 ⅡV R3-1黒褐色シルト・AT細粒合
- 12 ⅡV R3-2黒褐色シルトとロームがブロック状(～5cm)に混じる
- 13 ⅡV R3-2黒褐色シルト・細粒合
- 14 ⅡV R3-2黒褐色シルト・ATブロック(～3cm)合
- 15 ロームと2.5Y3-1黒褐色シルトがブロック状(～5cm)に混じる
- 16 2.5Y2-1黒色シルトと2.5Y3-1黒褐色シルトの混土・ATブロック(～5cm、細粒主体)合

図140 A区 竪穴建物21 平面・断面

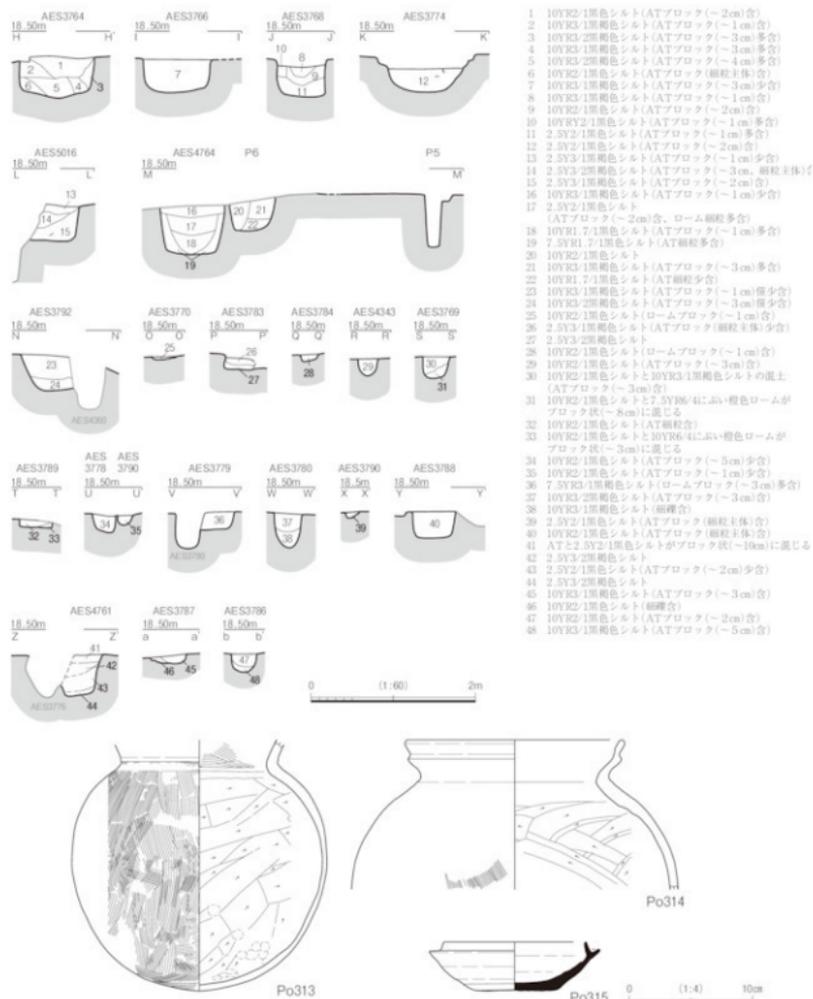


図141 A区 竅穴建物21 断面・出土遺物

AES3790やP5を含む南西部の一部の遺構の上面に基盤層のブロックを多く含む堆積が被覆していた。基盤層のブロックを含む堆積は、広く面的に認められなかったことから、新段階構築時に窪みを埋めて補修したと判断した。

遺物はAES3774とAES5016から土師器甕が出土しており、AES3784を検出した上面で須恵器坏身が出土した。Po315は底部外面が平らで寛切り未調整である。これらの遺物から、新段階の建物は古墳時代中期から後期にかけて機能したと考えた。一方、古段階に関連する遺構からは時期の特定できる

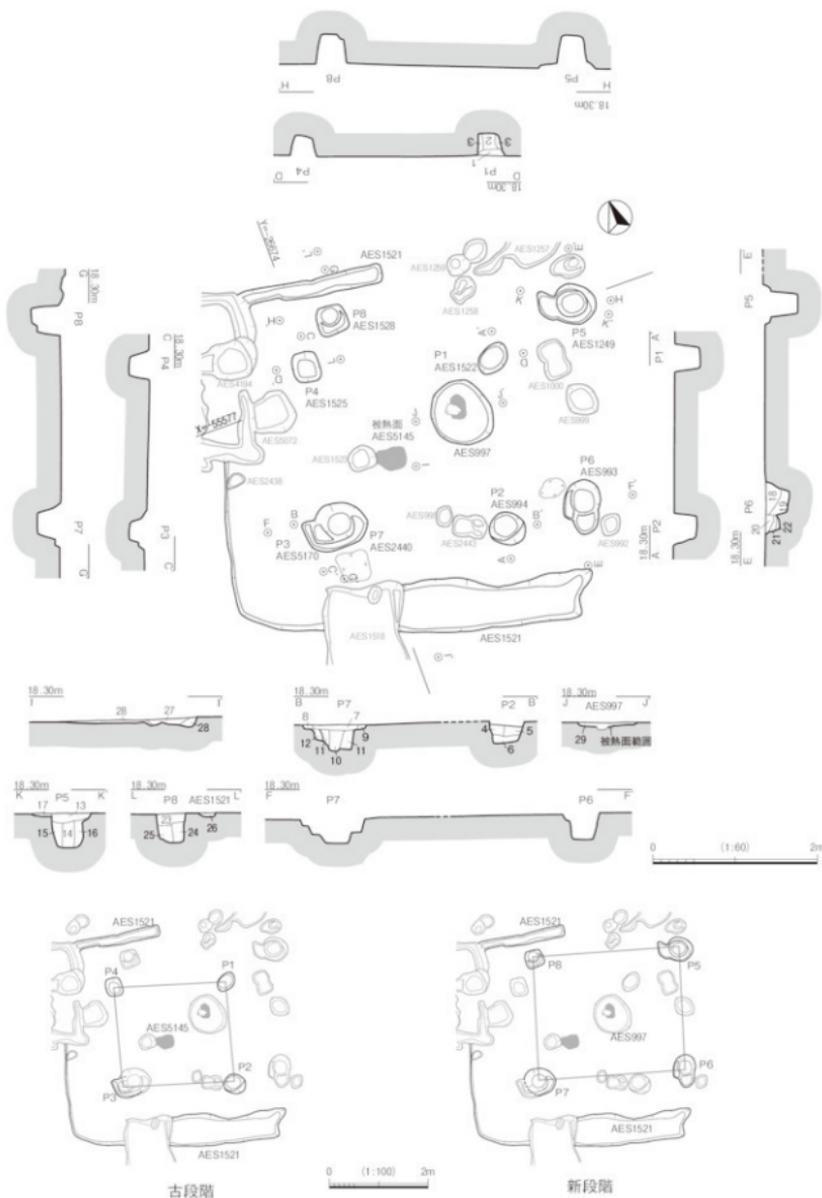


図142 A区 竪穴建物22 平面・断面

表6 A区 竪穴建物22 土層記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=2cm)合)	16	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=2cm)合)
2	10YR3-2黒褐色シルト	(AT細粒多含)	17	10YR2-1黒色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混土	
3	10YR3-1黒褐色シルト	(細粒合)	18	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)径少含)
4	10YR3-1黒褐色シルト	(AT細粒合)	19	10YR2-1黒色シルト	
5	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=5cm)多含)	20	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)少含)
6	10YR3-1黒褐色シルト		21	ロームに10YR2-1黒色シルトブロック(径=3cm)が混じる	
7	10YR2-1黒色シルト	(細粒合)	22	10YR3-1黒褐色シルト	
8	10YR2-1黒色シルトと 10YR3-1黒褐色シルトの混土	(細粒合)	23	10YR1-7.1黒色シルト	
9	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=2cm)少含)	24	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=2cm)多含)
10	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=2cm)合)	25	10YR3-1黒褐色シルト	(AT細粒合)
11	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=2cm)合)	26	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=2cm)少含)
12	10YR3-1黒褐色シルトとロームがブロック状(径=3cm)に混じる。		27	10YR2-1黒色シルトと 10YR3-1黒褐色シルトの混土	(ATブロック(径=2cm)少含)
13	10YR2-1黒色シルト		28	10YR3-2黒褐色シルト	(ATブロック(径=3cm)少含)
14	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=5cm)合)	29	10YR1-7.1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)径少含)
15	10YR3-1黒褐色シルト				

遺物は出土しなかった。(田中)

竪穴建物22(図142)

M8、N8に位置する。柱穴と壁溝の一部、被熱面2箇所を検出した。建物の北西側を土坑AES1261に、南側を土坑AES1518にそれぞれ壊されていた。

主柱穴はP1～4(1次建物)と、P5～8(2次建物)があり、P7がP3を壊すことから、1次から2次建物へ建て替えられたと考える。柱穴の配置からみて、北側の壁溝は1次建物に伴うと考える。南西～南側の幅の広い溝は、1次建物に伴う外側の壁溝と、2次建物に伴う内側の壁溝が建て替えの際に重複したと推定する。被熱面は、1次建物とAES145、2次建物とAES999がそれぞれ対応すると考える。

平面形はいずれも方形で、1次建物の主軸の長さは南北が4.50mであり、東西も同程度と推定する。

柱穴の規模は、1次建物はP3を除く長径が0.37～0.44(平均0.41)mで、深さが0.21～0.32(平均0.25)mある。2次建物は長径が0.37～0.52(平均0.45)mで、深さが0.33～0.51(平均0.43)mある。柱穴間の距離は、1次建物ではP1から時計回りの順に2.0m、2.2m、2.0m、2.4m、2次建物ではP5から時計回りの順に2.5m、3.0m、2.5m、3.0mある。

建物埋土はほとんど残存しないが、壁溝と柱穴埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかった。

時期を決定する遺物は出土していないが、平面形態から弥生時代後期から古墳時代にかけての建物と考える。(岡田)

竪穴建物23・24(図143)

O8で検出した方形の竪穴建物である。遺構検出を行った際に、北側を除く3辺を巡る幅0.10m前後の溝が確認でき、その内側では3箇所の被熱面を検出した。これらの状況から、溝が竪穴建物23の周壁溝と判断し、遺構の記録を行った。その後、再度周辺の遺構検出のために精査を行うと、東辺の溝が一部失われてしまった。数箇所断面を確認すると、溝は深さが0.04m以下のごく浅いものであることが分かった。被熱面が残っていることから、多少の削平はあるものの、周壁溝が浅いものだったことを示すものと考えた。竪穴部分の規模は北西-南東方向が3.04m、北東-南西方向は2.95m以上ある。南辺の周壁溝がやや広いが、形状が不整形なので、建物が機能していた段階に窪んだためと考えらるべきであろう。床面には貼床は認められなかった。

建物の主柱穴として四辺形に配置された4基が確認できたが、四辺形の軸と周壁溝の軸が異なる上にP2は周壁溝を切っていた。そのため、四辺形に配置された柱穴は周壁溝とは別のもの(竪穴建物

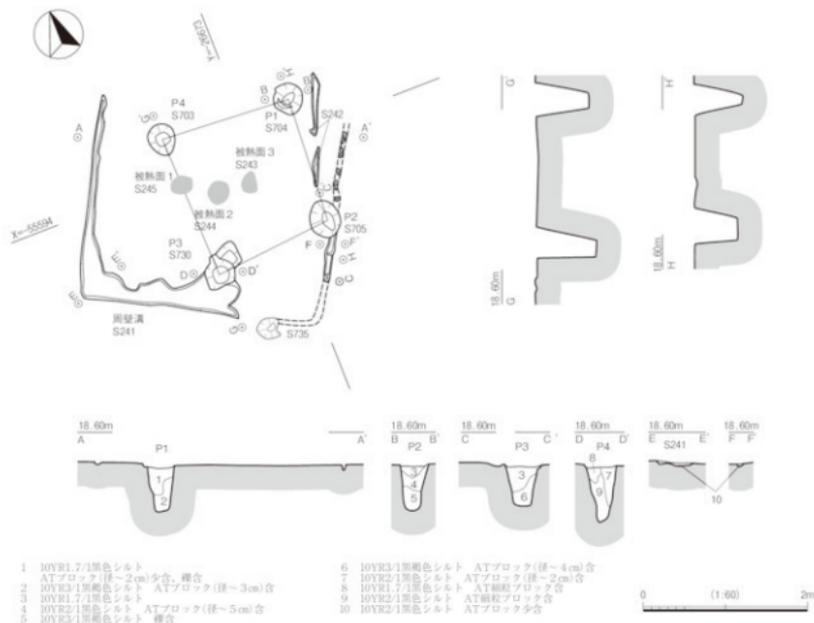


図143 A区 竪穴建物23・24 平面・断面

24)を想定する必要がある。これ以外に柱穴と認識しうる遺構がないので、竪穴建物23は主柱を建てずに造られたか、あるいはP1とP3に2本が主柱穴で竪穴建物24が建てられる時に再利用された可能性を考えておきたい。

竪穴建物24の主柱穴は長径0.37~0.44mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.53~0.80mで、各柱穴の心々間距離は1.52~1.60mある。この建物に伴う周壁溝は検出できず、建物の規模は不明である。

床面には3箇所の被熱面が確認できた。位置関係から被熱面1、2は竪穴建物23の中央付近で行った行為に伴うもの、被熱面3は竪穴建物24の小屋根組の中央で行った行為に伴うものと判断した。

竪穴部分が失われていたため詳細な時期は不明であるが、遺構検出段階でこの周辺から古墳時代の須恵器が出土していたことから、古墳時代後期を中心とした時期の建物と考える。(田中)

竪穴建物25(図144)

P9の南東付近で検出した竪穴建物で、竪穴部分はすべて後世の耕作などによって失われていた。検出面では建物の南西部分に当たる周壁溝AES1728が残っており、竪穴の平面形が隅円方形だったと考えた。周壁溝は幅0.2m前後、検出面からの深さは0.1m未満である。

主柱穴は4基で、掘り底面の中央を結んだ四辺形は北辺と南辺がほぼ平行しており(間隔2.59m)、北辺(2.44m)に比べて南辺(2.53m)がやや長い。この四辺形と周壁溝の方向を比較すると、東辺が西の周壁溝とほぼ平行するが他の辺は平行にはならず、主柱穴の四辺形が周壁溝に対して右回りに振るような配置になっていた。主柱穴が建物のほぼ中央にあったと仮定して、残存する周壁溝の位置から

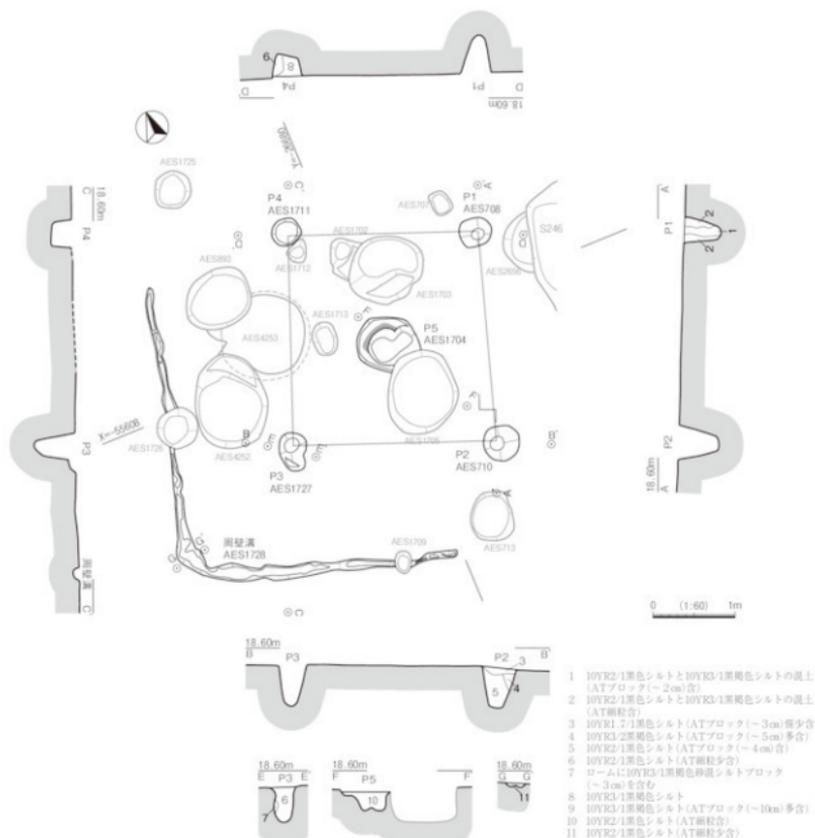


図144 A区 竪穴建物25 平面・断面

竪穴の規模を復元すると東西5.7m、南北5.4m程度になる。

主柱穴掘方の平面形は長径0.36～0.47mの楕円形または不整形で、検出面からの深さはP4のみが0.29mと浅く、それ以外は0.5m前後ある。

主柱穴の四辺形のほぼ中央には長径0.77m、短径0.67m、検出面からの深さが0.24mのP5があり、中央ピットと考えた。P5は西側が東側に比べてかなり浅い平らな面となっており、被熱によって赤く変色していた。東側の深くなる部分の埋土には焼土や被熱の痕跡は認められず、壁面にも被熱の痕跡はなかった。そのため、西側で被熱した後に東側の深くなる部分が掘られた可能性がある。

主柱穴の埋土からは弥生土器と思われる土器の細片が出土するものの、時期の特定できる遺物は出土しなかった。建物の形状から弥生時代後期から古墳時代の建物と考えたい。(田中)

竪穴建物26(図145)

Q9で検出した建物である。

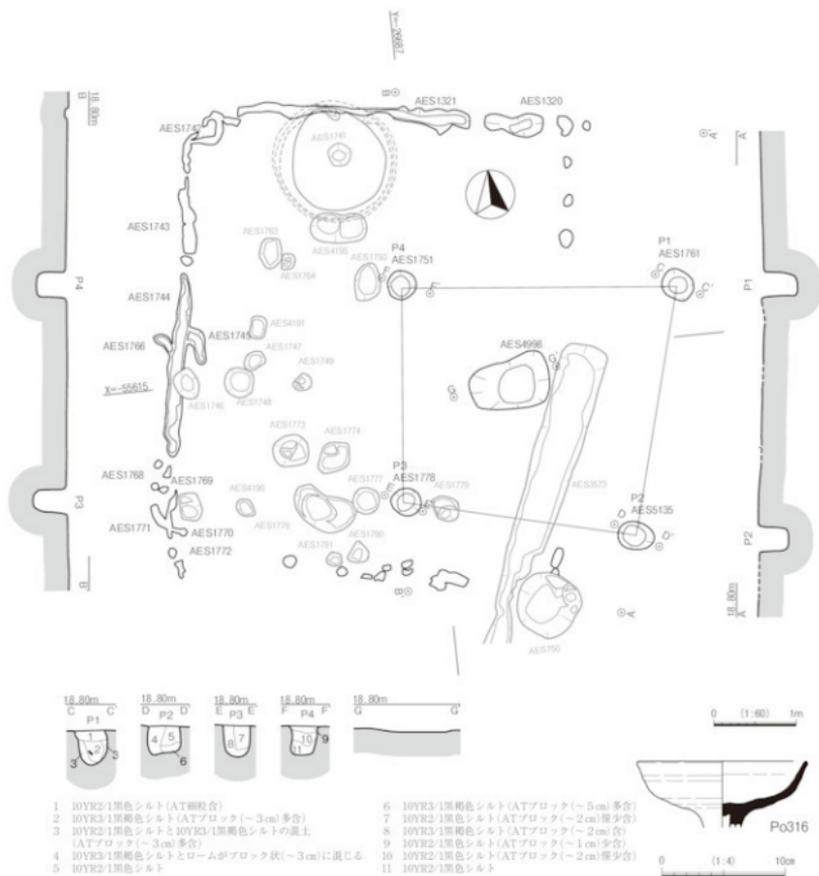


図145 A区 竪穴建物26 平面・断面・出土遺物

ほぼ直角に折れ曲がる幅0.1m前後の細い溝が検出でき、竪穴建物の北と西の周壁溝と想定した。どちらの溝も途切れる箇所があるが、北辺で4.2m程度、西辺で5.0m程度確認できた。溝の検出面からの深さは0.15m以下で、僅かに痕跡が残るだけの部分もあった。同じような痕跡は北辺の東端から南に点在するものと、西辺南端の東側に東西方向に点在するものがあり、これらが東辺と南辺の周壁溝になる可能性を考えた。ところが、この範囲内で支柱穴となり得るものはP3とP4の2つだけで、支柱掘方の位置は南側に偏ることになる。

一方、P3、4と同規模の穴P1、2が東側にあり、これらが1棟の竪穴建物の支柱穴となると考えられた。もし北辺と西辺の周壁溝とP1～4が同一の建物だとして、支柱穴が建物のほぼ中央になると仮定した場合、東西8.3m、南北6.6mの大型の建物となる。

後世の耕作などによって建物の床面に関する情報が得られないため、建物の詳細な状況を知ること

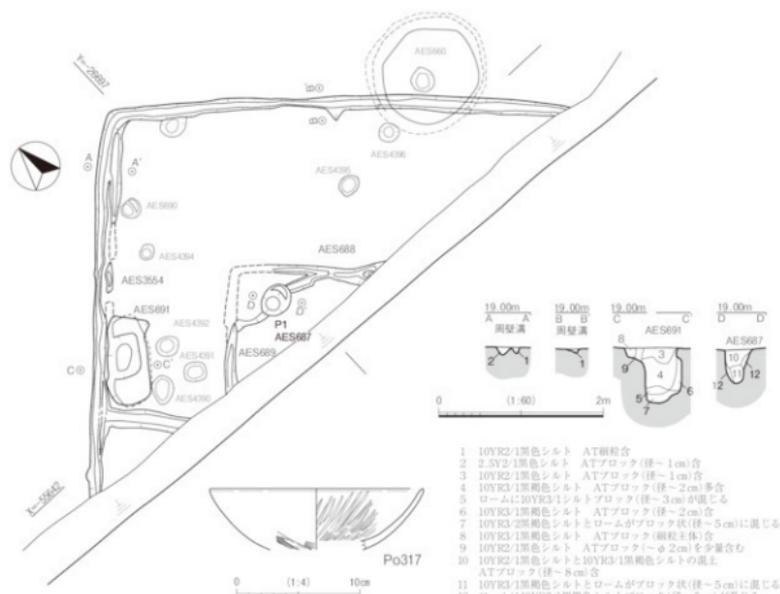


図146 A区 竪穴建物27 平面・断面・出土遺物

は出来ず、大型竪穴建物か、支柱穴と周壁溝で別々の建物となるかは判断できなかった。

支柱穴の掘方底面の中央で結んだ四辺形は、北東と南東の角がほぼ直角で、南北の辺がほぼ平行する(東辺2.69m)。一方、南北の辺の長さを比べると南辺(2.81m)に比べて北辺が長い(3.20m)。掘方の平面形は長径0.36~0.44mの楕円形で、検出面からの深さは0.4m前後ある。

P1の埋土からは須恵器の高坏が出土した。坏部は口縁部が外反して外面の縁があまく、古墳時代後期後葉頃のものである。そのため、建物の時期は古墳時代後期後葉または飛鳥時代頃と考える。

(田中)

竪穴建物27(図146、PL.31)

T10で検出した建物で、半分以上は調査区外になる。竪穴部分はすべて失われており、周壁溝のみが残っていた。検出できた範囲での平面形は北西-南東方向が5.6m以上、北東-南西方向が4.7m以上の方形の建物である。

周壁溝は幅が0.1~0.2m、深さが0.1m前後ある。西側にはその内側に同規模の溝が確認でき、僅かではあるが建物を拡張した可能性がある。また西側の溝から直角に分岐する溝が1条確認できた。

さらに、建物内に方形に巡ると思われる溝AES688、689が確認できた。別の建物の周壁溝の可能性はあるが、確認できる範囲が狭く詳細は不明である。

支柱穴は1つ確認できたが、柱痕跡はみられなかった。

西側の周壁溝のそばには長径1.10m、短径0.50m、検出面からの深さ0.78mの土坑AES691がある。断面形は東側が外側に僅かに広がっており、建物内の貯蔵穴と思われる。

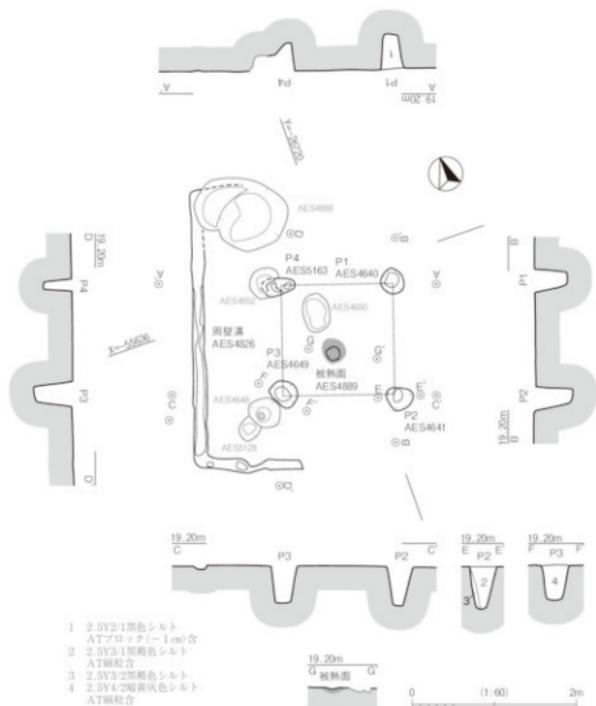


図147 A区 堅穴建物28 平面・断面

遺物はAES691の埋土から土師器の高坏が出土した。Po317は内面に放射状のミガキが施されていた。この土器から、建物の時期は古墳時代後期頃と考える。(田中)

堅穴建物28(図147)

S13で検出した建物で、堅穴部分はすべて失われていたが、周壁溝は建物の西辺と南辺の一部が残っており、方形の建物と確認できた。周壁溝は幅が0.17m、深さが0.05m未満でごく浅い。溝の西辺についてはすべて残っていると思われ、堅穴の南北長は3.42mと考えた。堅穴の東西長は主柱穴の位置を基にすると3.5m前後と推測される。

主柱穴は4基で、掘方上端の中央付近で四辺形を結ぶと一辺1.37m前後のほぼ正方形になる。掘方の平面形は長径0.32m前後の楕円形または不整形で、検出面からの深さはP2、3が0.46m程度あるのに対し、P1が0.41m、P4は0.36mで浅めである。

建物の中央よりやや南寄りに被熱面AES4889がある。検出時、被熱面の中央に黒色シルトが円形に広がり、その周りにも黒色シルトの広がりが認められた。被熱面を含めて半載したところ、被熱面の中央は僅かに窪んだところに黒色シルトが堆積しており、被熱面の周辺のもののは後世の耕作などによる攪乱によるものであった。

P2の掘方埋土内から古墳時代後期の須恵器坏蓋と思われる細片が出土しており、建物はその頃に

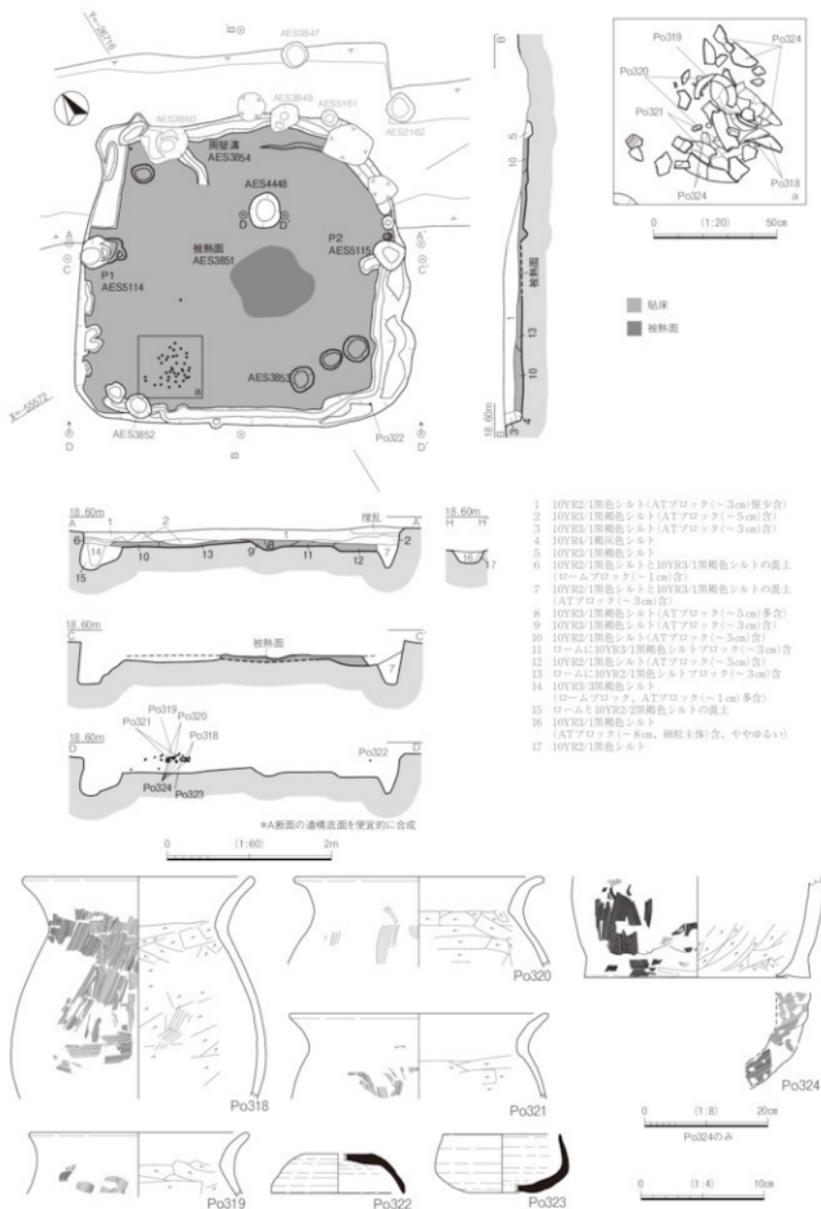
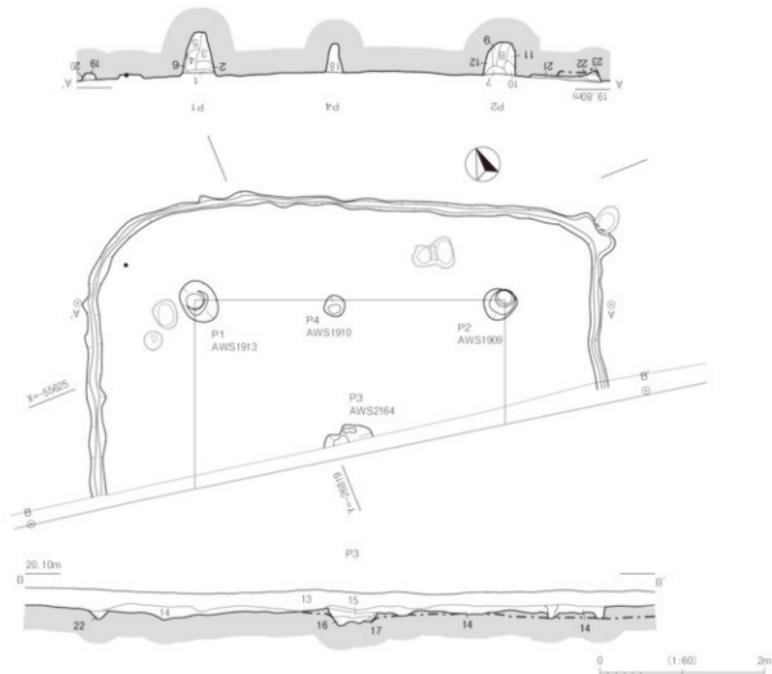


図148 A区 竪穴建物29



[P1]

- 1 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径-3cm, 径1-2mm主体)多含
- 2 2.5Y4-2褐色黄色シルト ATブロック(径-3cm, 径1-2mm主体)多含
- 3 2.5Y3-2黒褐色シルト ローム粒(径1-2mm)多含, ややゆるい
- 4 2.5Y3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm, 径2-3mm主体)多含
- 5 2.5Y3-2黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm, 径2-3mm主体)多含, ややゆるい

- 6 10YR3-1黒褐色シルト ローム粒(径2-3mm)含

[P2]

- 7 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm, 径1-2mm主体)多含
- 8 2.5Y3-1黒褐色シルト ローム粒(径2-3mm)含, ややゆるい
- 9 2.5Y2-1黒褐色シルト ロームブロック(径-1cm, 径2-3mm主体)多含, ややゆるい
- 10 2.5Y4-2褐色黄色シルト ロームブロック(径-1cm, 径1-2mm主体)多含, ややゆるい
- 11 10YR3-1黒褐色シルト-粘土 ローム粒(径1-2mm)含, ややゆるい
- 12 10YR3-1黒褐色シルト-粘土と10YR6-6紅-赤褐色シルトの混じり(径-3cmのブロック状) ややゆるい

- 13 10YR5-1褐色細砂-シルト ATブロック(径-2cm), ロームブロック(径-2cm), 稜(径2-3mm)含

- 14 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-3cm, 径2-3mm主体)多含

[P3]

- 15 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径-1cm)極少含, ローム粒(径2-3mm)極少含

- 16 2.5Y3-2黒褐色シルト AT粒(径2-3mm)含, しまる

- 17 2.5Y3-2黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm, 径1-2mm主体)多含

[P4]

- 18 2.5Y4-1黄褐色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混じり ややゆるい

- 19 10YR2-1黒色シルト ローム粒(径2-3mm)少含, しまる

- 20 2.5Y3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm, 径1-3mm主体)多含

- 21 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-3cm, 径2-3mm主体)多含

- 22 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm, 径1-2mm主体)多含

- 23 2.5Y3-1黒褐色シルト AT粒(径1-2mm)多含

図149 A区 竪穴建物30 平面・断面

建てられたと判断した。(田中)

竪穴建物29(図148, PL.32・105)

L12, M12に位置する。北東部分の壁は近世以降の削平により壊されていた。

平面形は隅円方形であり、検出面における主軸の長さは北西-南東方向が3.92m、北東-南西方向が3.70mで、検出面から床面までの深さは0.24mである。壁溝は北西側で一部を残すのみだが、他の部分ではほぼ残存しており、壁溝の幅は0.14~0.22m程度である。

埋土は基盤層由来のブロックを含む旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトが流入したものである。

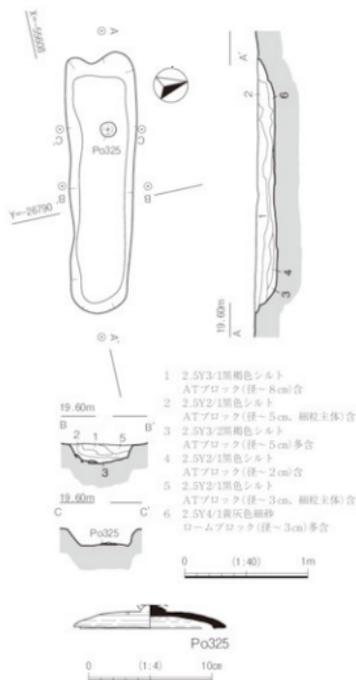


図150 A区 土墳墓AWS1333
平面・断面・出土遺物

円形で、径0.38m～0.54m、検出面からの深さはP1が0.53m、P2が0.41mである。

P3は東西0.6m以上、深さは0.18m以上あるものの、半截に到らず底面までは確認していない。掘方の断面が緩く下がること、建物のほぼ中央に位置することから中央ピットと考える。

遺物は北西隅の攪乱層や壁溝埋土、P1から出土したもののいずれも小片で図化に耐えない。

建物の構造から、弥生時代から古墳時代の竪穴建物と考える。(八峰)

土墳墓

AWS1333(図150)

P19・20南に位置する。

検出時の平面形は東西方向に軸をもつ楕円形を呈する。西端にアンカーの鉄杭があり、攪乱の可能性も想定された。長軸は2.09m、短軸は0.58m、検出深は0.18mで、底面はローム層中である。

断面形は平坦な底面から皿状に立ち上がる船底状である。底面は攪乱による起伏が大きいものの概ね平坦で、底面は西に向かいわずかに上がり、立ち上がりも緩やかである。墓底面の長軸は1.86m、短軸は西側0.42m、東側0.39mで、西側が広い。墓塚の主軸方向はN-77°-Wである。平面・断面ともに木棺の痕跡は確認できない。

床面は基盤層由来の黄褐色シルトを主体とした貼り床がされていた。床面の中央付近には、0.88×1.04mの範囲で不整形の被熱面を確認した。

柱穴は2基あり、貼床除去後に南東側と北西側の壁際中央で確認した。柱穴の規模はそれぞれ、最大径が0.40mと0.39mで、深さが0.20mと0.28mである。

遺物は南西部の床面直上から土師器と須恵器がまとまって出土しており、建物廃絶時にそのまま廃棄されたと考える。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代後期と考える。(岡田)

竪穴建物30(図149)

R22・23に位置する建物である。おおよそ南側半分は調査区外となる。

建物は南北3.3m以上、東西6.3m、厚さ0.02～0.1mのATブロックを含む黒色シルトの範囲として検出した。壁溝の幅は0.06m～0.22m、深さは0.1～0.2mある。検出した範囲内では貼床及び被熱面は認められない。

主柱穴は2基以上であるが、いずれも竪穴部分の隅付近に位置していることから4本柱とみられる。P1-P2の柱穴間距離は、芯々で3.75m、軸線上にあるP4を間柱とすると、P1-P4間が1.65m、P4-P2間が2.10mである。主柱穴の平面は不整な楕



图151 A区 区画溝 平面

埋土は西側の底面上に黄灰色の細砂が堆積し、その上に細かな粒状のATブロックを主体とする2層があり、検出面まではやや大ぶりのブロックを主体とする1層が堆積する。中央やや北東の底面直上から、つまみが打ち欠かれた須恵器の蓋が正位置で出土した。

人骨は遺存していないが土壌墓で、時期は須恵器から飛鳥時代と考える。(八峰)

第5節 奈良時代～平安時代の遺構

この段階の遺構として区画溝と粘土採掘坑、道路遺構、掘立柱建物を確認した。遺構数や遺物量は弥生時代のものと同様で多い。調査区北東部で確認した大型建物群や、9世紀から10世紀の施釉陶器が多く出土したことから、とくに平安時代には一般的な集落とは異なる様相を呈することが明らかになった。

以下、各遺構について記述する。

区画溝(図151～162、PL34～38・106～108)

調査区の中央部のやや西寄り、段丘面を概ね南北方向に縦断する大規模な溝状遺構である。K16・17、L16～19、M17・18、N16・17、O16、P16、Q16、R16、S15・16に亘る広範囲において検出された。なお、北側のL18一帯において、不整楕円形状を呈する大規模な掘り込みが目を引くが、この掘り込みは、本溝埋没後に営まれたもので、掘方の特徴や掘削深度などを勘案した結果、粘土採掘に伴う可能性を考えている(以下、「粘土採掘坑」と呼称する)。その詳細は別項に記載する。

本溝の検出層位についてであるが、東西座標Pライン以南は表土下にⅢ層(クロボク)が遺存し、本遺構埋土との峻別が困難であったため、基盤層であるⅣ層又はⅤ層まで掘削して検出を行った。一方、Pライン付近より北は表土直下に基盤層が露出し、後世における改変の影響を強く反映している。その状況に比例して掘方の遺存状況も不良となり、とりわけMラインより北側が顕著で、掘方底面付近のみの遺存にとどまる。このような検出状況下であったため、土塁等、溝に伴う構造物の存否は不明である。

次に、本溝の掘方における特徴を述べる。底面の概ね中央に幅0.5～1m程度の幅狭な溝状の掘り込みが確認できる。本遺構検出範囲において当該掘方は、南端付近のR16・S16で曖昧となるが、それ以外の箇所では断面形が逆台形を呈することも多く、比較的明瞭である。また、走向は本溝に沿っており、本遺構に伴うことは明確である。埋土中には粗粒砂、中粒砂が多く混じるほか、土器小片、小礫を多数包含しており、上位の埋土(シルト主体)とは様相をはっきりと異にしている。特に東西Oライン付近より南側では、土器小片、小礫の包含が密で、当該埋土上面はよく締まっていた。こうした状況は、上、下層における堆積状況の明瞭な差異、掘方断面形態の連続性が乏しい点などを勘案し、時期差に起因するものとする。すなわち、本遺構は少なくとも二段階に亘って営まれ(以下、「古段階」、「新段階」と呼称する)、本溝底面中央に細く残る溝状掘り込みは、溝を再掘削するなどした際、前段階の掘方底面付近が遺存した可能性を想定する。

本溝の走向は、原則として直線的に推移するが、検出範囲中において明瞭な変化点又は屈曲点を二箇所有する。地点で言うとN16、L18である。南側は、S15・16において調査区外から検出され、以北は前述の変化点の一つであるN16に至るまで、概ね北方向へ50m程度延びる。その間における掘方の規

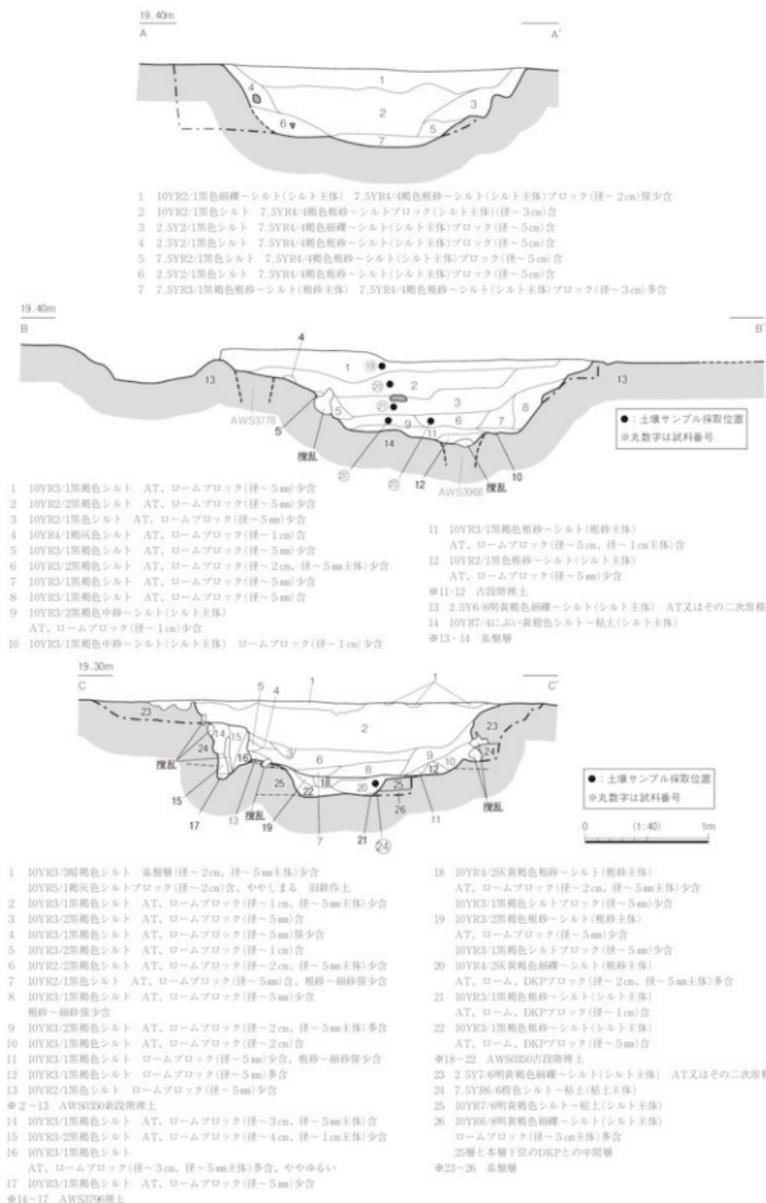


図152 A区 区画溝 断面(1)

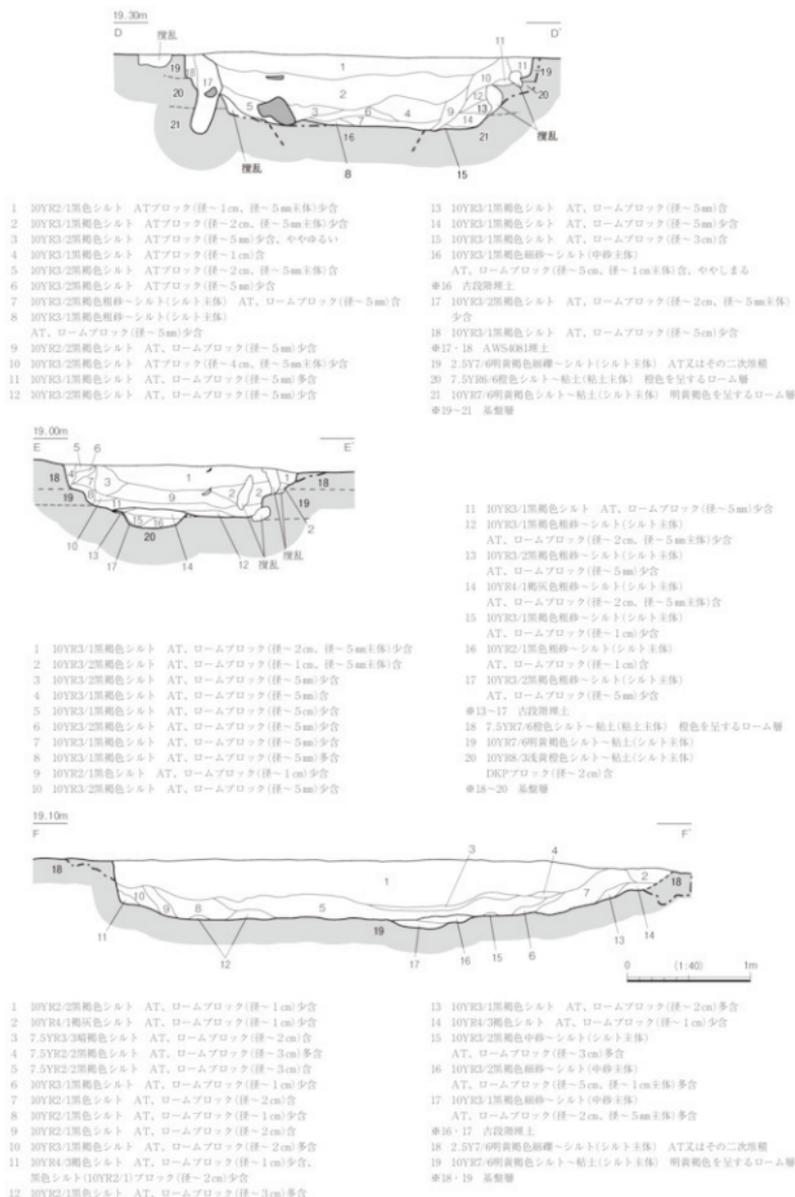


図153 A区 区画溝 断面(2)

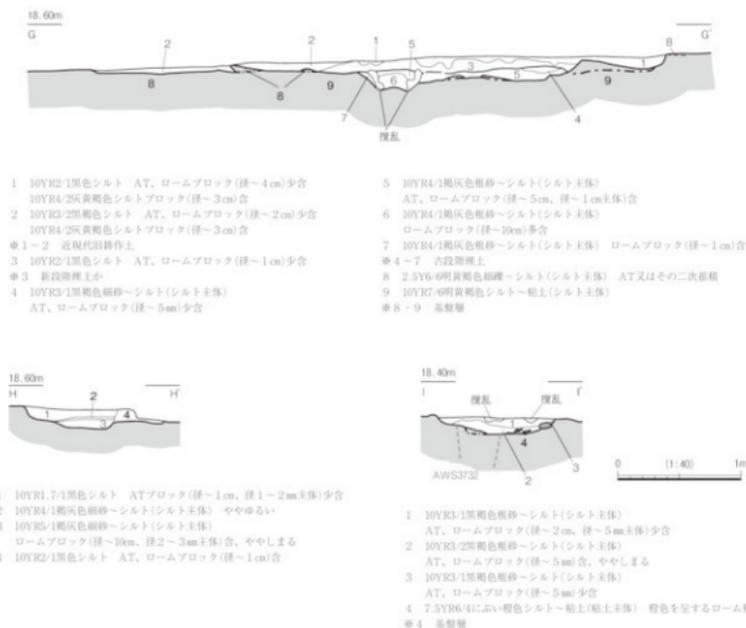


図154 A区 区画溝 断面(3)

模は、新段階がC-C' セクションでの計測値で幅2.49m、深さ0.61m、古段階が幅0.82m、深さ0.19mとなる。N16より先は、北西方向へ走向を転換し、二箇所目の変化点であるL18までの距離は25m程度ある。このセクションでは、途中で溝掘方の幅が増しており、平面的には南西側へ幅が緩やかに拡大している。当該箇所の上層断面(F-F' セクション)においては、新段階が幅4.54m、深さ0.47m、古段階が幅0.70m、深さ0.10mある。どのような過程を経て溝幅を拡大したのかについては、F-F' セクションの上層堆積から明確な判断は困難である。ただ、古段階に係ると想定できる堆積は確認できないため、新段階において行われた蓋然性の方が高い。L18一帯では、本項冒頭で触れたように粘土採掘坑と目される大規模な掘方により、当該箇所の状況が不明瞭となっているが、本グリッドを境に北東方向への屈曲、北西方向への延長の2方向が確認できる。北西方向へ延びる掘方はL19グリッド中において途切れ、以降は不詳となる。N-N' セクションにおける規模は、幅1.14m、深さ0.16mで、古段階掘方に近似する。これを古段階掘方の名残と仮定した場合、古段階掘方は北東方向へも継続しているため、同段階において更に構築時期が細分されるのか、2方向に分岐していたのかが問題となるが、上述した粘土採掘坑掘方の存在に加え、そもそも掘方の遺存状態が悪いため、詳細は不明である。北東方向への屈曲側も古段階掘方の遺存が手がかりとなる。当該掘方は、その方向を維持したまま延び、K16から先は調査区外となる。L-L' セクションにおける規模(古段階)は、幅0.97m、深さが0.14mである。新段階掘方も若干遺存するが、規模を復元し難い状況にある。

本溝を平面的に俯瞰すると、掘方肩部~底面付近にかけて、小規模なピットが多数存在するのに気付く。本調査区の段丘面は全般に植物の根に起因する攪乱が多く、遺構確認に際しては注意を払う必

要があったが、当該ピットは本溝掘方付近に沿い、明らかに集中的な分布が確認でき、本溝に伴うものと判断した。ピット掘方は、杭痕跡様の細くて深いものから、一定の平面規模を持つものまで個体差が認められる。ピット埋土は溝埋土色調に類似し原則として平面的な峻別が困難であったため、未確認事例が多数を占めるが、土層断面B-B' セクション14～16層に見られるようにいずれも最終的な溝埋没以前に営まれたと推測する。既述したように本溝埋没後に掘削が為されたL18の粘土探掘坑底面においても小ピットが点在しており、その一部は当該ピットの名残である可能性もある。これらピットは、検出位置や配置状況から、溝掘方強化に係る板材等を支持するため打ち込まれた杭、又は侵入遮断用の柵や逆茂木状の構造物といった、防御機能に供した可能性などが指摘できるが、明確な判断は現状では難しい。

以上、広範囲に亘る検出状況を概観してきたが、本溝は、その規模や走向の特徴から、一定の敷地を区画するために掘削されたと推察する。問題となる区画の対象であるが、本溝より東側に該当する可能性が高い。その範囲の多くは東調査区に該当し、同区においては、先述した本遺構南端のS15・16以外で本溝は検出されておらず、全容は不明と言わざるを得ないが、A区東調査区には本溝と帰属時期が概ね合致する大型の掘立柱建物群が規則的配置をもって構築されており、本溝が区画する対象として相応しい。一方、本溝より西側にも同時期性を指摘できる建物群をはじめとした遺構が検出されているが、規模や配置の規則性において東調査区の建物群に劣るため、本溝が区画もしくは圍繞する対象とは想定し難いと考える。すなわち、本溝を境として東側、西側の敷地に所在する、同時代の遺構群を俯瞰すると明瞭な格差が確認でき、このことは、本溝を「区画溝」と位置付ける所以となっている。

本遺構機能時の状況や、周辺古環境に関する知見を得るため、埋土より土壌サンプルを採取し、自然科学分析を実施した。土壌サンプルは、B-B' セクションでは新段階埋土、C-C' セクションでは古段階埋土から採取し(図152 試料番号①9～②4)、珪藻、花粉分析を実施した。珪藻分析については、化石の産出率、保存状態共に不良であったが、B-B' セクション新段階埋土の6層において、陸生珪藻の存在が僅かながら認められ、好気的な環境を示唆する内容となっている。一方、古段階埋土に係る有意な知見は本分析では得られていない。花粉についても、全般に化石の保存状態の悪さが目立ち、好気的環境下における風化の進行が指摘されている。分析結果の詳細については、第9章に記載している。

出土遺物は、古・新段階共に埋土中より多数出土した。出土土器相は、弥生土器、古墳時代～古代帰属の土師器、須恵器、土製品が主体をなし、多様性に富む。これらは本遺跡における主要な遺構の時期相と合致するものであり、本遺構の埋没状況を反映している。出土した土器のうち、ある程度復元の進んだ個体は存在するものの、原則破片資料の域にとどまり、出土状況的にも専ら二次的と判断される。本遺構は「区画溝」としての機能を失った際、人為的に埋め戻されたと想定しているが、埋め戻しに使用した土は、労力的な観点から、近隣よりもたらされた可能性が高い。特に新段階埋土から出土した遺物の多くはその際に混入したものと考える。古段階埋土中には、上述の通り土器細片や小礫が意識的に施された可能性はあるものの、個々の遺物は2次的な資料がほとんどであり、その点で新段階埋土出土資料と同様に捉えられる。以下に詳述していくが、出土遺物のうち最新相を示すのは平安時代(10世紀後半から11世紀前半頃)帰属と目される土師器となる。本調査区全体の出土土器相において、それに続く中世前期帰属の遺構、遺物検出数が激減することから、本遺構埋没後、中世に

においては人為が加わる頻度は低下し、概ね農地等の利用に止まったと推測している。

出土遺物を図155～162に示した。既述の通り、本遺構は掘方形態、埋土特徴の明瞭な相違を重視し、古段階、新段階と2段階の変遷を想定した。しかしながら、両段階を横断して接合する資料が多数存在し、本遺構出土遺物のうち最新遺物と目される底面回転糸切り離しの土師器杯・皿についても、両段階埋土からの出土があり、遺物面からは両段階の峻別は困難、という結果となった。上述したように、本遺構出土土器の多くは時期幅の大きい2次資料であり、本遺構周辺の土を埋め戻しに使用したことの影響と捉えられるため、古段階、新段階埋土に亘って接合する遺物が存在しても不思議ではない。ただ、最新時期を示すと考えられる資料において明瞭な差が認められないことは、両段階の時期差が土器型式に反映されないほどの期間であった、との解釈も一応可能と考えるが、当該期の詳細な土器編年が未構築であることも大きく、今回設定した古・新段階の真偽も含めた意味で、今後の課題と言わざるを得ない。以下、段階、種別ごとに詳細を述べていくこととする。

まずは、現状では本遺構の時期比定にも関わってくる土師器杯皿(供膳具)について記載する。Po326～337は無高台の杯である。Po326は底部が回転ヘラ切り離しで内外面赤色塗彩、外面にはヘラミガキが施される、奈良時代からの器形等特徴を残す資料である。Po327・328も底部切り離しが回転ヘラ切りだが、口径に対し底径が縮小気味となる。器壁は強い回転ナデにより波打ち、胎土についてもやや緻密さが低下し、軽薄化する傾向が認められる。Po329～338は、底部切り離しが回転糸切りとなる。量量は口径10～11cm台(Po329～332)と、14～15cm程度(Po333・334)があるが、後者は遺存状態不良のため推定値である。器形的には、体部が丸みを帯びるもの(Po329・332)と、概ね直線かやや外反気味に外傾するもの(Po330・331)に2大別される。これらの属性が時期差を示すものかは、現状においては明確ではない。Po335・336は底部。Po335は見込にヘラ状工具で雑多な線刻が施される。文字様とはならず、刻書とは認識できない。本資料は器面が荒れており、線刻が焼成前もしくは後か判然としませんが、粘土探掘坑出土資料中には類例が多数みられ、いずれも焼成前である。Po336は見込に墨書による文字が確認できるが、断片のため判読できない。Po337・338も同じく底部資料であるが、古段階埋土から出土したもので、底部が回転糸切り離しの資料を示した。器形全体を復元出来る資料はなく、出土数も新段階と比較して少ないが、確実に含まれている。Po339～344は、底部が厚みを持ち外面が直立ないし外方へ張り出し気味となる、いわゆる平高台状を呈する一群である。後述するが、本調査で出土した須恵器杯の中に平高台を伴う資料が一定数確認でき、体部等、器形全般においても兵庫県南西部に所在する相生窯址群出土資料に類似することが判明した。土師器杯における平高台状を呈する一群についても、当該須恵器の器形的な影響を受けた可能性があり、一定数出土する。ただ、本遺構出土資料は器形全体を復元出来るものではなく、詳細は不明である。Po345～Po348は高台杯であるがいずれも底部資料で、器形全体を窺えるものではなく、本遺構の埋没状況に即した結果となっている。Po345は外方へ張る断面三角形の高台を貼り付け、内外面赤色顔料を塗布する。高台内はナデにより底部切り離しは不詳だが、器形的には回転ヘラ切りであろう。比較的古相を示す資料である。Po346～Po348は、いわゆる足高台杯である。断面「八」字状に高台が付く。Po348の見込には線刻が施される。線の運びは文字様で刻書と評価するが、遺存状況が不良で判読不能である。Po349は杯の口縁部資料で、内面の一部に漆が付着している。Po350・351は皿である。本遺構に限れば、杯に比して出土量は少ない印象である。Po350は底部切り離しが回転ヘラ切りで、内外面に赤色顔料を塗布し、ミガキが施される。体部は短く外反し、古相を示す。Po351は底部回転糸切り離しで、口径10cm

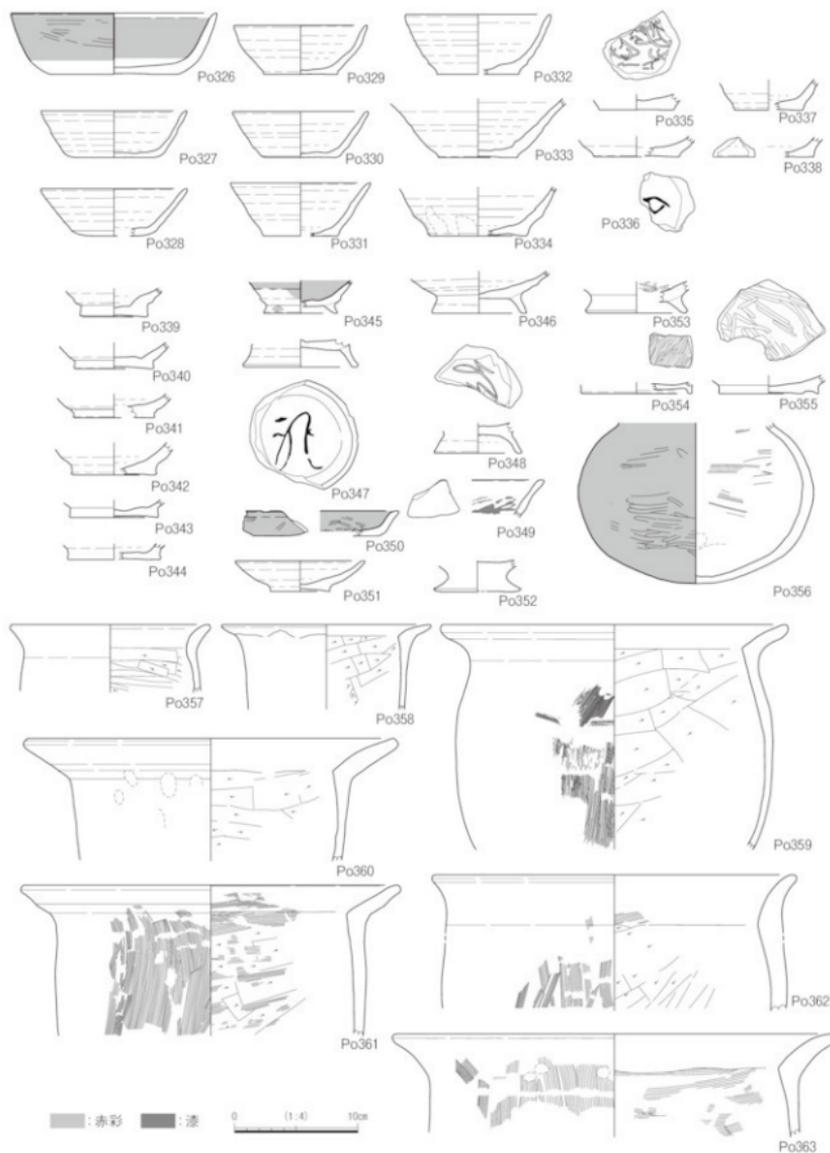


図155 A区 区画溝 出土土器(1)

台と小法量である。口径に比して底径は小さく、体部は内湾気味に強く外傾して口縁端部に至る。同タイプの皿は道路遺構側溝からまとまって出土している。Po352は柱状高台の皿又は坏の底部資料である。回転糸切り離しの底部からくびれつつ立ち上がり、皿もしくは坏部に至る。底端部は尖り気味である。

Po353～355は黒色土器である。全て底部資料で、内面を黒色処理している。Po353・355は高台坏で、Po353は外方へ張るやや丈の高い高台を貼り付ける。一方、Po355は丸みを帯びた低い高台を貼り付けている。胎土もやや異質な印象で、搬入品の可能性がある。Po355は無高台だが、回転糸切りの底部外周に強いナデを施し、窪ませて粗雑な高台状としている。

続いて、土師器における供膳具以外、煮炊具、その他土製品等について述べる。Po356は土師器の壺で、口頸部を欠く。体部は球形に近く、外面には赤色顔料を塗布し、ヘラミガキが施される。内面調整もハケメやナデと比較的丁寧な作りで、胎土も精良で色調は白色がかかる。Po357～Po363は土師器の甕である。断面「く」字状に屈曲する口縁部をもつ。法量や口縁部形態の詳細など、個体差が認められる。器形を復元出来る資料が不足しているが、体部形態においては、丸みを持ち膨らみ気味に推移するものと、ほぼ直立して直線的に底部へと続くタイプが確認できる。Po364～366は移動式甕である。多数破片は出土したが復元状況は芳しくなく、断片に止まる。Po364は笑口に沿って貼り付けられる底部分。ハケメとヘラケズリを中心とした、粗雑な調整痕が残る。Po365は掛口に該当する。やや内傾して立ち上がり、素口縁状に取まる。Po366は底部付近の破片である。重量を支えるため粘土を足して補強しており、底端部の断面は下膨れ状となっている。Po367・368は土製支脚である。頂部における甕等の土器を受けるための突起はいずれも二方向で、体部は中空となるタイプである。ただ、体部の形態はやや異なり、Po367は緩やかに内傾しながら立ち上がり、端部付近において内湾気味となる。一方のPo368は、同じく内傾しながら立ち上がるが、体部上位で外方へ屈曲し端部に至る。Po369～371はミニチュア土器である。Po369は超小型品で、器高・口径共に1.5cmを切る。粘土に指を押し込んで凹ませている。坏を意識したものか。Po370・371は、口縁部断面が「く」字状の土師器甕を表現したものと考えられる。Po372～375は土玉である。径0.6～0.7cm程度の孔が焼成前に穿たれている。大きさにはやや個体差がみられ、Po372は最大長が1.5cm程度の小型品である。Po376・377は土錘。断面形は中央がやや膨らむ筒状を示し、ややずんぐりしたPo376と細身のPo377が出土している。Po378は分銅形土製品片である。片面(表面)に微細な刺突文を連続的に配し、帯状の施文を展開している。Po379は動物形を呈する土製品である。四足動物を素材としていることに疑いはないが、細部の表現が曖昧であることと胴体の半分を欠くこともあり具体的には判然とし難い。

Po380～411は須恵器である。本調査区における多様な時期相を反映し、古墳時代から平安時代に至る資料が出土した。以下、器種別に概観していくこととする。Po380～389は蓋坏である。Po380は復元ながら口径12.5cm、頂部調整は回転ヘラ切りである。陶邑編年におけるTK209型式併行と考えられる。Po381は扁平な器形で、端部には短くかえりを有し、宝珠つまみが付く。Po382とPo383は輪状つまみを持ち、口縁部が下方へ屈曲、直立する形態を採る。輪状つまみの断面形は両者で異なり、Po382はつぶれた方形、Po383は鈍い三角形状を呈する。Po384～386は口縁端部における下方への屈曲が小さく、Po384は宝珠つまみを持ち、Po385・386のつまみは扁平なボタン状を呈する。Po384・386の頂部は平坦面を指向する。Po387は器形の扁平度合いが増し、口縁が水平方向へ少し延びた後に下方へ短く屈曲する形態を採り、断面三角形状をなす。欠損のため、つまみの有無は不明である。続く

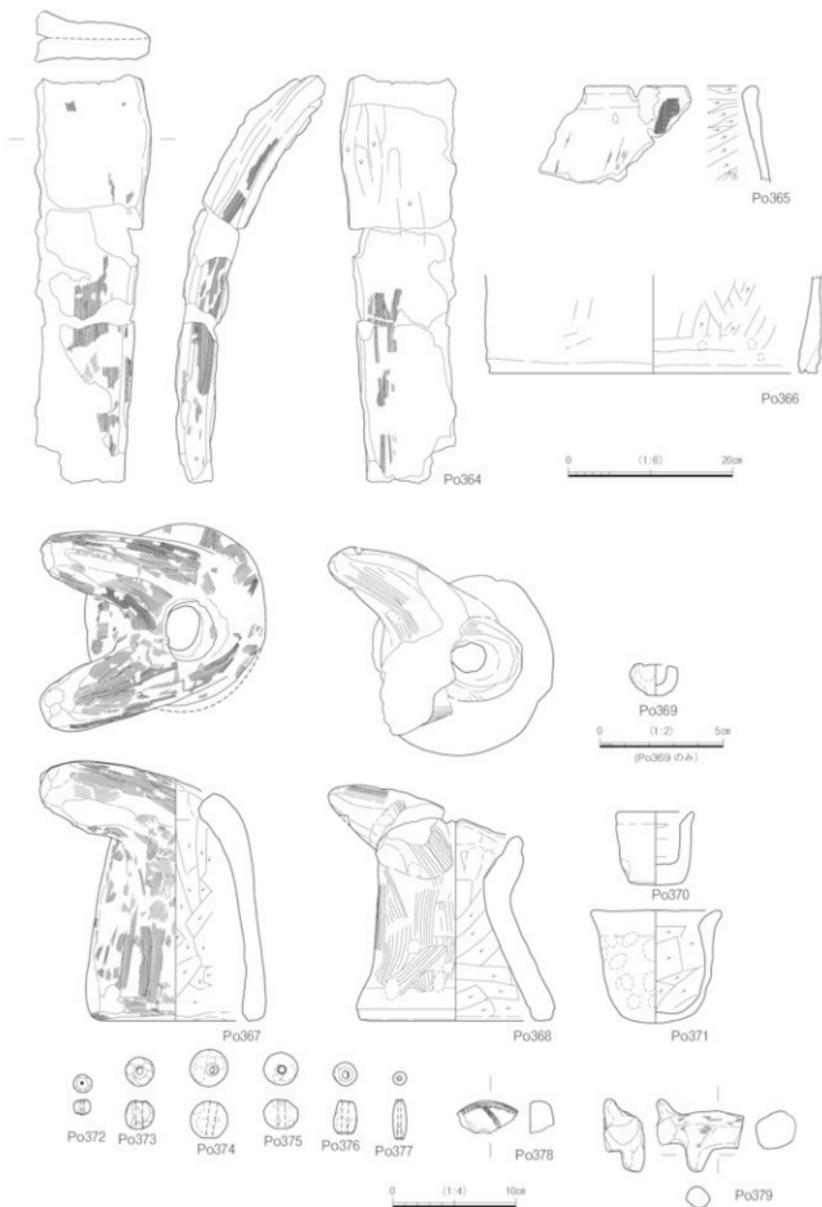


図156 A区 区画溝 出土土器(2)

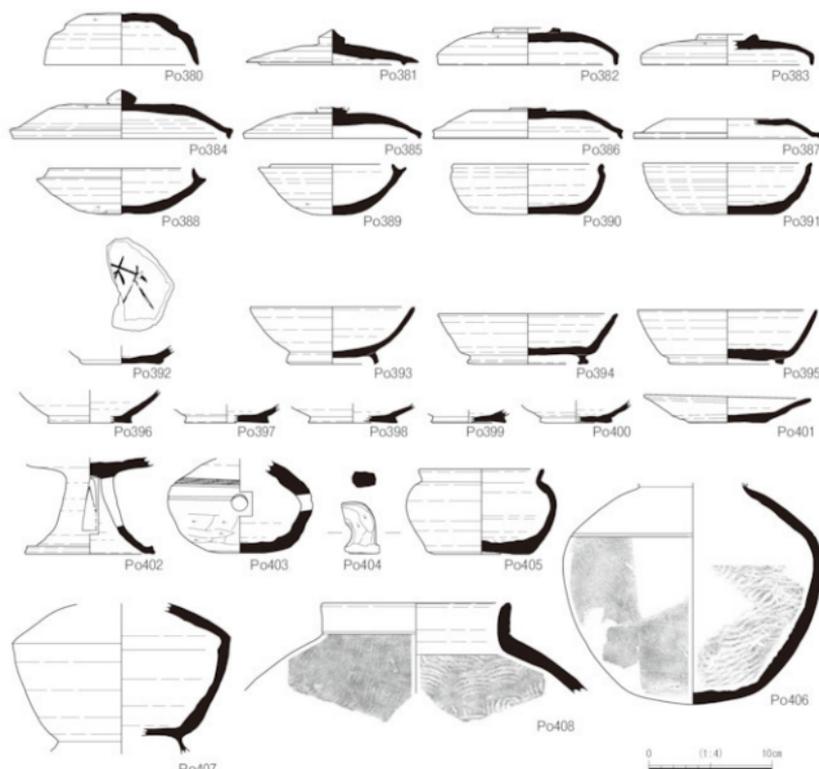


図157 A区 区画溝 出土土器(3)

で、坏身を概観する。Po388・389は底部調整が回転ヘラ切りとなり、それぞれ陶器TK209型式、TK217型式併行と考えられる。Po390～392は無高台の坏である。Po390は体部が丸みを持ちつつ立ち上がり、口縁端部が屈曲する。底部切り離しは回転糸切りとなる。Po391は同様な特徴を示すが、口縁部の屈曲が弱い。Po392は底部資料で、見込みに大きく「一」が墨書されており、「林」と判読できる。Po393～395は高台坏である。Po393は丸みを帯びた体部をもち、外方に張った高台が付く。底部は回転ヘラ切りである。Po394・395は体部～口縁部が直線的に外傾し、底部周縁に直立気味の高台が付く。高台の高さに差があるが、両者とも底部切り離しは回転ヘラ切りである。Po396～400は底部が平高台状を呈する坏である。いずれも底部資料であり、高台側面は外方へ若干張り出し気味となり、底部切り離しは回転糸切りである。体部下半が遺存するPo396・400を見ると、丸みを帯びた器形をなすものと想定される。土師器の項で述べたように、こうした特徴的な形態を示す一群は兵庫県相生窯址群出土須恵器に類似している。本遺構出土資料は、器形全体を窺えないものの、兵庫県教育委員会による分類、編年によれば、糸切り平高台碗の碗Cに該当し、平高台側面の調整における切り込みは顕著ではないものの、底部と体部の境界は比較的明瞭で、第3段階のb-1期に近似すると考えられる。

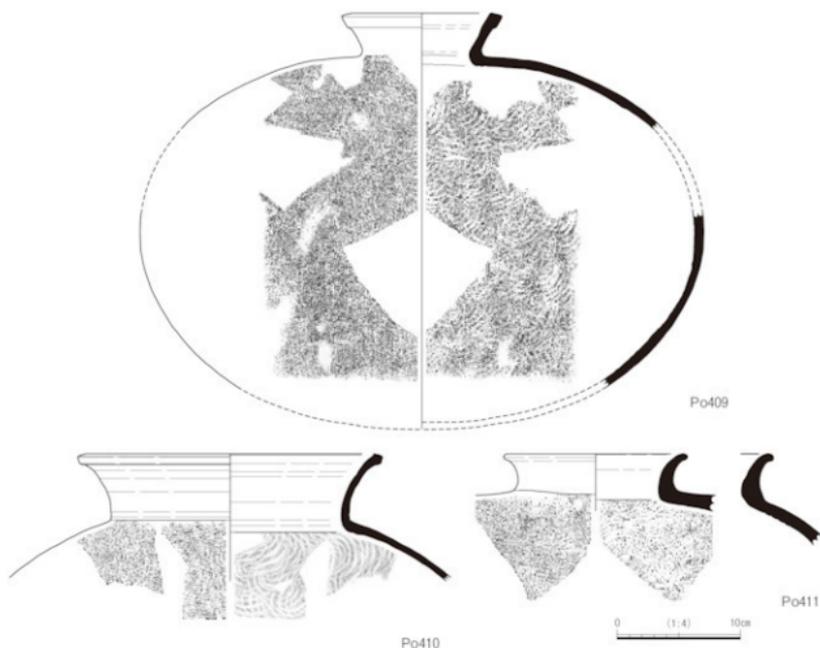


図158 A区 区画溝 出土土器(4)

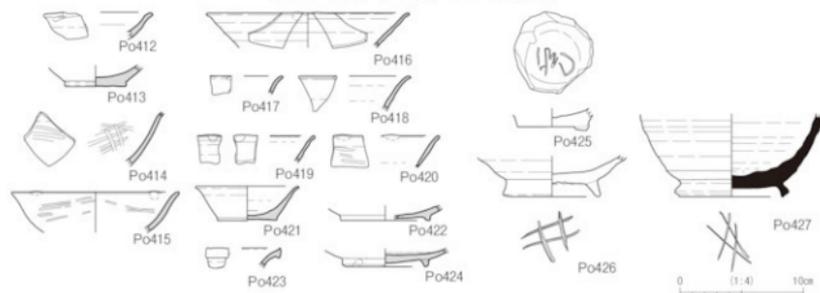


図159 A区 区画溝 出土施釉陶器等

ただ、これらが相生等遠隔地生産品の持ち込みなのか、本遺跡近辺における模倣品かの判断は、帰属時期を推察する上で重要で、出土事例の蓄積に伴った器形等の詳細な比較検討はもちろんのこと、胎土分析等、化学分析結果の援用が必要となるだろう。Po401は皿である。回転糸切り離しの底部から、大きく開いて外傾する体部は、外反気味となる。焼成はやや不良。Po402は高坏で、坏部の大部分を欠く。短脚で1段2方向の透かしが入る。遺存する坏部の内底部が平滑化しており、具体的内容は不明だが2次使用された可能性がある。Po403は甕で、口頸部を欠く。体部はやや扁平化傾向を示し、最大径はほぼ中央となる。外面の装飾はカキメと沈線のみである。Po404は平瓶もしくは提瓶の把手

片と考えられる。Po405・406は壺で、Po405は短頸壺である。器高7cm足らずと寸胴で、外傾する口頸部とやや肩の張る体部をもつ。底部に回転糸切り痕が残る。Po406は口頸部を失う。体部外面下半は格子目タタキのち、カキメが施され、内面には同心円状の当て具痕がある。底部は丸みを帯びる。Po407は長頸壺で、口頸部を欠く。肩部がよく張っており稜は鋭い。底部周縁に外方へ張った高台が付く。Po408は甕である。短頸で、短く直立する。以下は肩部のみの遺存だが、外面は平行タタキ後カキメが施される。Po409～Po411は横瓶である。いずれも口頸部を中心とした復元に止まったが、当該部分の形態にはバリエーションが認められる。Po409・410は外反もしくは外傾しながら立ち上がり、口縁端部を断面方形様形に肥厚させる。Po411は外反しつつ短く立ち上がり、そのまま丸く収めている。

Po412～422は緑釉陶器である。Po412とPo413は焼成や釉調が類似しており同一個体と思われる。軟質焼成で全面に緑色の釉が残る。9世紀前半の京都産と考えられる。Po414・415は暗めの色調の胎土で内外面にミガキ調整が確認できる。体部は内湾し、Po415は口縁端部に輪花がみられる。9世紀後葉から末頃の京都産と考える。Po416～420はきめの細かい胎土に淡緑色や黄緑色に近い色調の釉が施される。体部は比較的直線的で、Po415・418には口縁部に輪花がみられる。Po421は小形坏で軸は薄く、底部外面は露胎である。Po422は椀の底部と思われ、削り出し高台で底部外面は露胎である。これらは10世紀前半の京都産と考える。

Po423・424は灰軸陶器である。Po423は細片ながら瓶の口縁部と思われる。内外面とも施釉されるが、外面が白いのに対し内面は緑色に近い。Po424は椀または皿の底部で、体部内外面は施釉、底部内外面が露胎である。9世紀末の黒笹90号窯期第3段階のものと考えられる。

Po425～427は刻書がみられる土器で、Po425は内面に文字と思われるものが、Po426・427は外面に「井」形の刻書がある。

石製品では敲石と砥石、石斧、石鏃等を図化した。敲石はいずれもやや細長い礫を使用する。砥石は破面以外は研磨に使用される。S39はサスカイト製の両面調整石器破片で、よく整っていて薄く、3方の側面にわずかに自然面が残る。上半を折損しているため全体の形態は不明であるが、打製石剣の可能性が高い。S40は緑色片岩製の磨製石斧刃部破片で割れは節理から生じている。S41は安山岩の石鏃で、背面の大半が礫面となる剥片を素材に、主に主剥離面を階段状剥離で調整した粗雑なものである。刃部側の側縁には研磨による線状痕が残る。主剥離面側の基端と刃部を中心に磨滅があり、着柄と使用に関係すると考える。S42は小型の石鏃の刃部破片で安山岩の板状礫を素材に周辺を調整しただけのものである。S43は緑色凝灰岩の施溝分割片で暗緑色を呈する。素材面は研磨面1面と、それに直交する剥離面3面が残っている。剥離面2面と、研磨面と剥離面1面との角に施溝があり、後者を起点とした最終剥離面が不規則となって放棄されたものと考えられる。S44はサスカイト製の局部磨製石鏃で両面の刃部のみを縦方向の研磨で仕上げる。S45は石鏃でサスカイト製である。

鉄製品では刀子を図化した。また、椀形鍛冶滓や粘土質溶解物などの鍛冶関連遺物も出土しており、椀形鍛冶滓2点を図化した。

以上、主な出土遺物を概観してきた。既述の通り、遺物の帰属時期は、弥生時代から平安時代と長期に亘る。データ化は実施しておらず、印象的な所見に過ぎないが、弥生時代、古墳時代といった本調査区においては古相を示す遺物は東西座標におけるOライン以南に分布の中心があり、該期の主たる遺構分布がここに反映されていると考えている。(加藤)

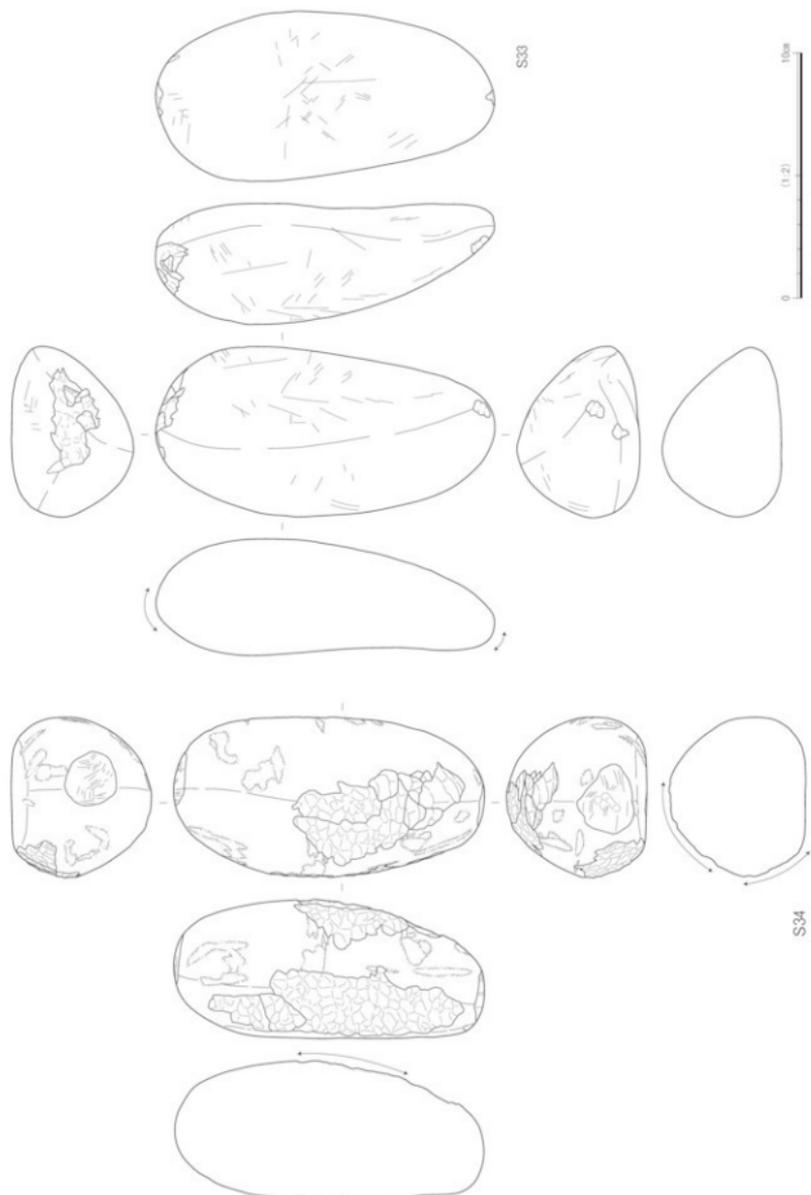


図160 A区 区画溝 出土石器(1)



図161 A区 区画溝 出土石器(2)

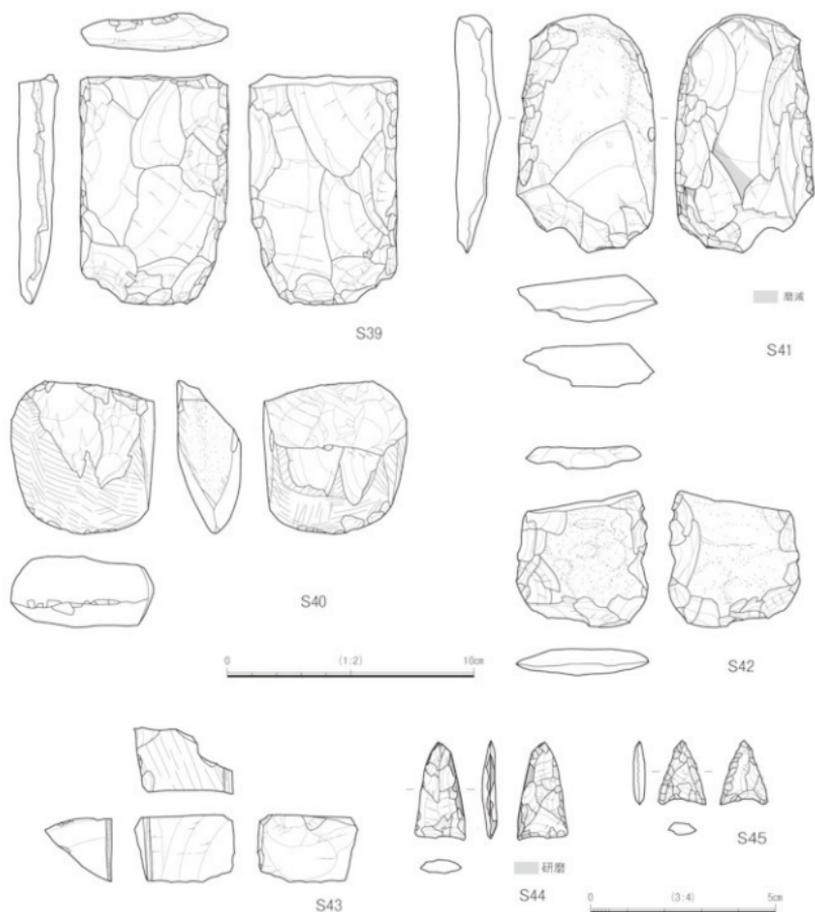


图162 A区 区画溝 出土石器(3)

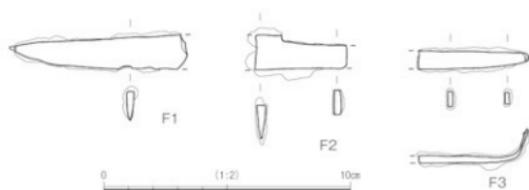


图163 A区 区画溝 出土鉄製品

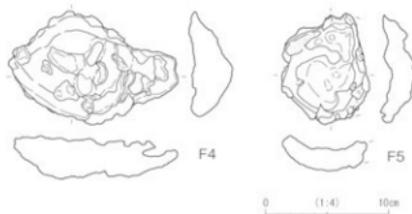


図164 A区 区画溝 出土銀治洋

粘土採掘坑(図165～171、PL.38～40・108)

L17～19、M17・18に亘り検出された大規模な掘り込みである。平面形は不整な楕円形状を呈し、外形線は不規則に展開する。検出面における規模は、長軸14.71m、短軸8.22m、深さは最大で0.73mある。検出層位は表土下に露出するV層においてであり、一帯は後世の改変を受け本来の掘方をかなり失っていると推察される。本遺構掘方は平安時代帰属の区画溝掘方と重複し、区画溝埋没後に掘削される。区画溝の項で述べたように、本遺構は区画溝走向における屈曲点もしくは分岐点に位置するため、調査当初は同溝との関連を想定したが、重複状況から双方の同時期性が揺らぎ、最終的に関連性は低いと判断した。掘方底面には浅い凹みが多数確認でき、これら凹みの平面形は径2m前後～3m程度の歪な楕円形状を呈することから、多数の土坑状掘り込みの集合体である可能性を想定した。このことは掘方平面形の歪さとよく符合する。南西側は連続土坑状を呈し掘方が比較的明瞭に遺存しており、一部壁面を横方向へ掘り広げるような状況を示す。

上述した特徴的な掘方の形態は何に起因するか、明確な根拠があるわけではないが、不整形を呈する土坑状の掘り込みが多数重複、もしくは連続する形態は、いわゆる粘土採掘坑に類似する。本遺構においても、不整形を呈する平面形態から無作為な掘削状況が看取されるが、断面をみると底面の凹凸は平面形態ほど顕著ではない。つまり、底面標高、掘削深度的な観点においては際だった差がない。粘土採掘坑とした場合、採掘の対象が焦点となる。掘方がどの層まで及んでいるかを見ると、多くがDKP(基本層序Ⅸ層)の上面、もしくはやや掘り込んだあたりとなる。原則としてDKP層の上位には、粘性の強いローム層が堆積しており(基本層序におけるⅥ・Ⅶ層)、当該層が採掘の対象となった可能性を考えている。すなわち、掘削がDKPに至ったところで止めた可能性を指摘しておきたい。埋土は水平に近い形で堆積する箇所と、不規則な堆積状況を示す箇所が混在する。全般的には基盤層由来のブロックを比較的多く包含しており、人為的な埋め戻しによると想定している。

出土遺物は、埋土からまとまった量が出土した。しかし区画溝と同様に、遺物は多時期、多種に亘っており、大半が2次的にもたらされた資料と考えられる。ただ、本遺構においては、掘方底面付近において出土し、且つ完形に近い状態に復元出来る個体が少数ながら存在し、本遺構機能時に伴うと見做しうる資料を含む。当該遺物は、土師器の坏である。以下、種別、器種ごとに詳細を述べる。

Po428～459は土師器である。Po428～446は無高台の坏で、そのうちPo428・429・430は掘方底面付近において、同一箇所において検出された。遺存状態も良好で、一括性の高い資料と評価している。いずれも底部切り離しは回転糸切りである。法量的には口径11cm(Po428)、13cm前後(Po429・430)の2法量を示す。ただし、Po430は口縁端部付近を欠いており、推定値である。器形的には、Po428・Po429が体部にやや丸みを持つ。一方、Po430の体部は概ね直線的であるが、施された回転ナデの強さ



図165 A区 粘土採掘坑 平面

に左右される程度の差とも感じられ、個体差の範疇と考える。この3個体を見る限り、上記した体部形態の違いは時期差を示す属性とするほどには明瞭でないように思われる。Po431～436は底部切り離しが回転ヘラ切りの一群である。一定数の出土があり、Po432のように、出土位置、遺存状況が良好な資料も存在する。口径は11～13cm台までの幅があるが明瞭な法量分化は見られない。底部回転ヘラ切り離しの資料は口径に対して底径が大きく、底部糸切りの資料に対して器形的に若干の隔たがりがあるように思われ、同一の型式組列上にはない可能性を考えている。Po437～441は底部回転糸切りの資料である。法量的には、若干幅があるものの口径11～12cm台と15cm弱の2法量に収束する。既述のとおり、体部形態は丸みを持つもの(Po439)と外反気味となるもの(Po440)の2種が存在するが、中庸な形態を示す資料も多い。Po444～446は平高台状の底部を持つ。Po446は見込みに比較的明瞭な段を有し、その中に文字が刻書されるが、判読不明である。Po447は坏もしくは皿の底部片。底部切り離しは回転ヘラ切りで、見込に墨書が遺存する。かなりの崩し書きで、2文字分確認できる。上の文字は

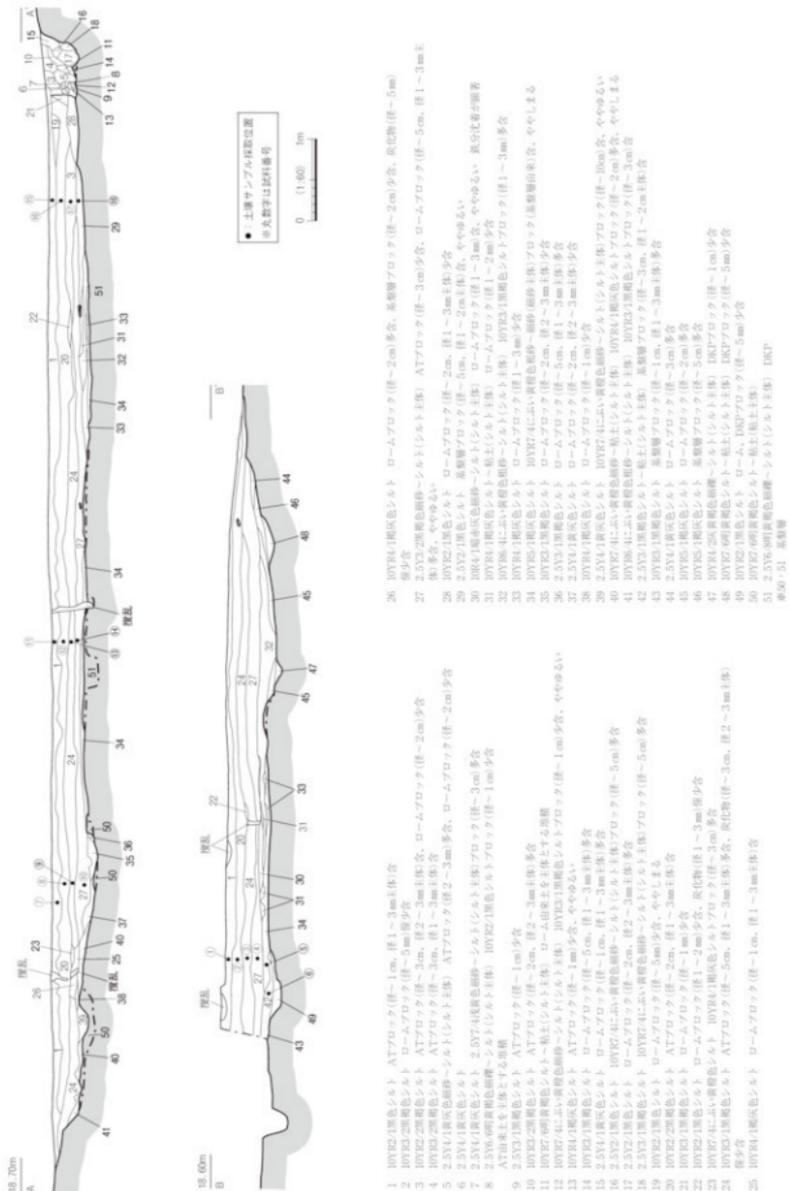


図166 A区 粘土探掘坑 断面(1)

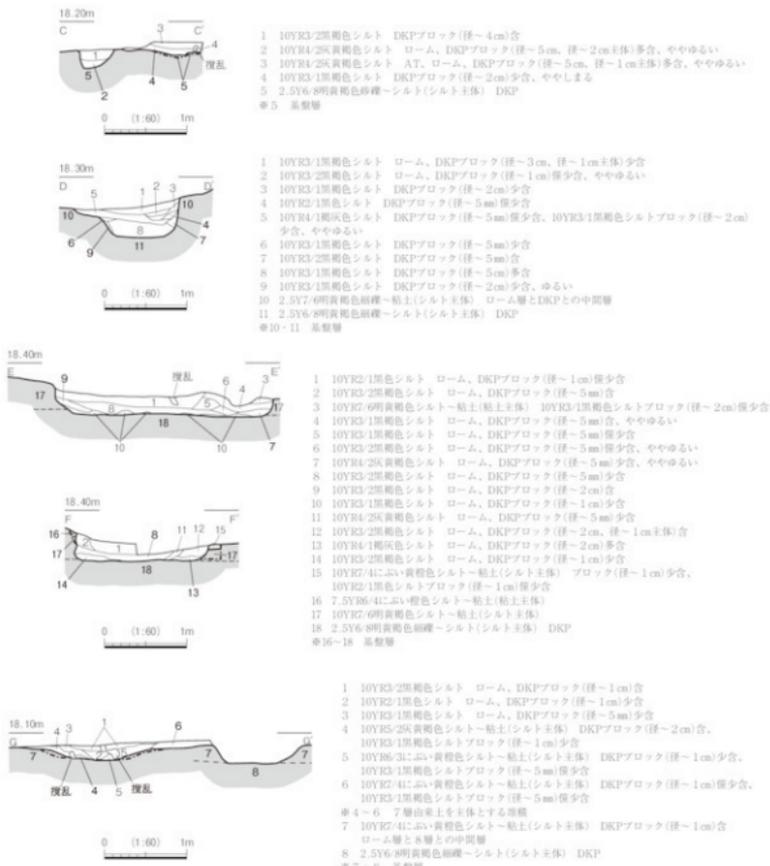


図167 A区 粘土探掘坑 断面(2)

端が見えるのみで不明、下の文字は「柏」と読めるか。Po448～452は破片資料ながら、見込に線刻が入る一群である。Po450のように明瞭に刻書と分かるものもある一方、Po449のように長い線刻一本のみという資料もあり、必ずしも文字を意識したとは限らないと考える。このような線刻が認められる土器は、区画溝からの出土も僅かにあるが、本遺構からの出土量がまとまっている。Po453は高台坏で、外方へ張った足高高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がった後、外反しつつ外傾し口縁部へ至る。Po454は皿である。扁平な器形を示し、体部が強く外傾するため、口径は復元ながら12cmを超える。底部切り離しは回転ヘラ切りである。Po455は破片資料のため明確ではないが皿と考える。口縁部には横方向のナデ、それ以外は不定方向のナデが施され、手捏ね整形による京都系土器器形の可能性がある。断片的ながら口縁部形態を見ると小森・上村編年における平安京(京都)Ⅱ期に近似すると考える。Po456・457は柱状高台を持つ坏又は皿である。回転糸切り離しの底部が張る器形を示す。

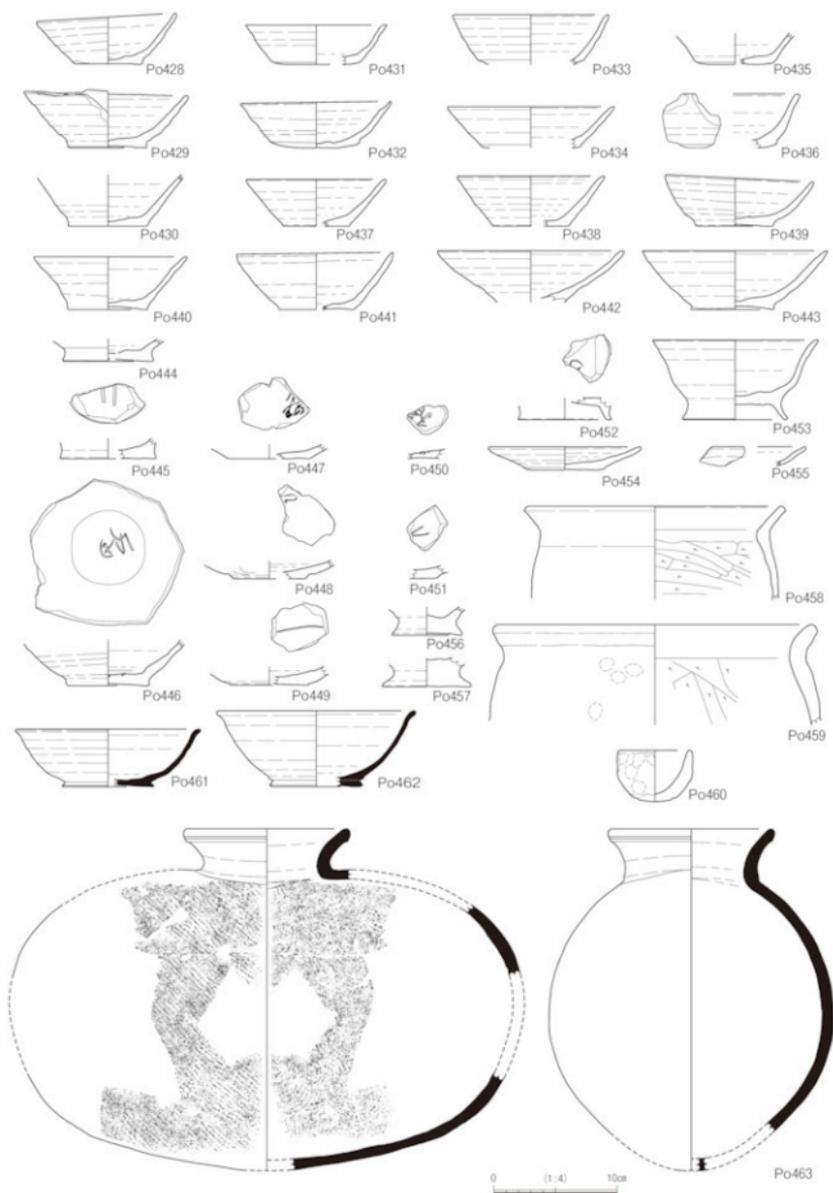


図168 A区 粘土探掘坑 出土土器

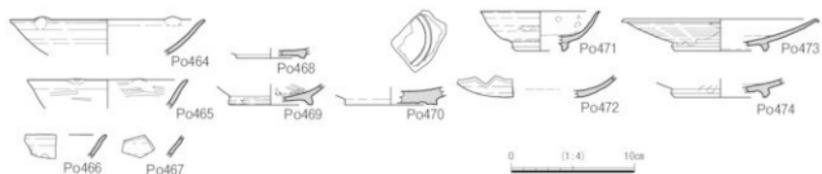


図169 A区 粘土採掘坑 出土施釉陶器

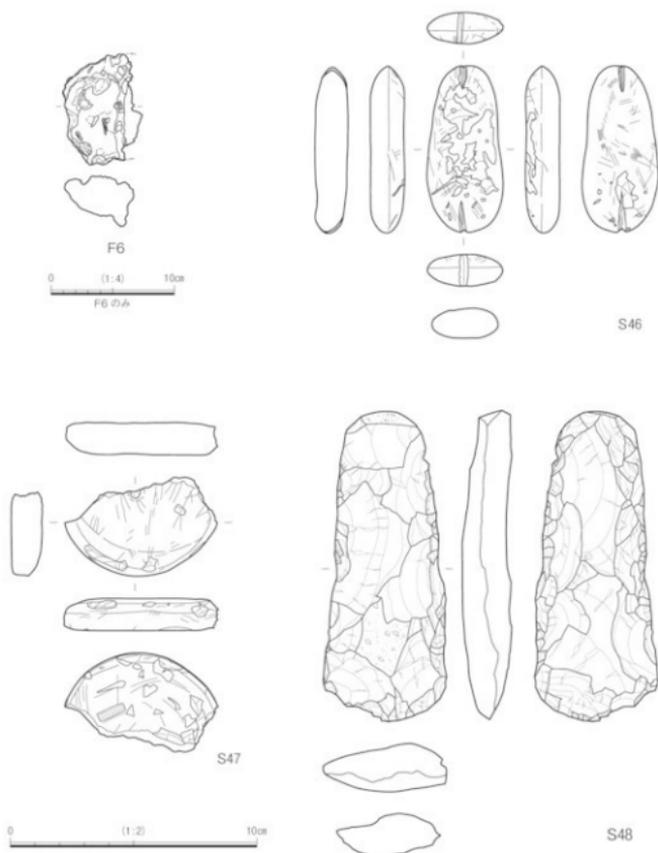


図170 A区 粘土採掘坑 出土石器・鍛冶滓

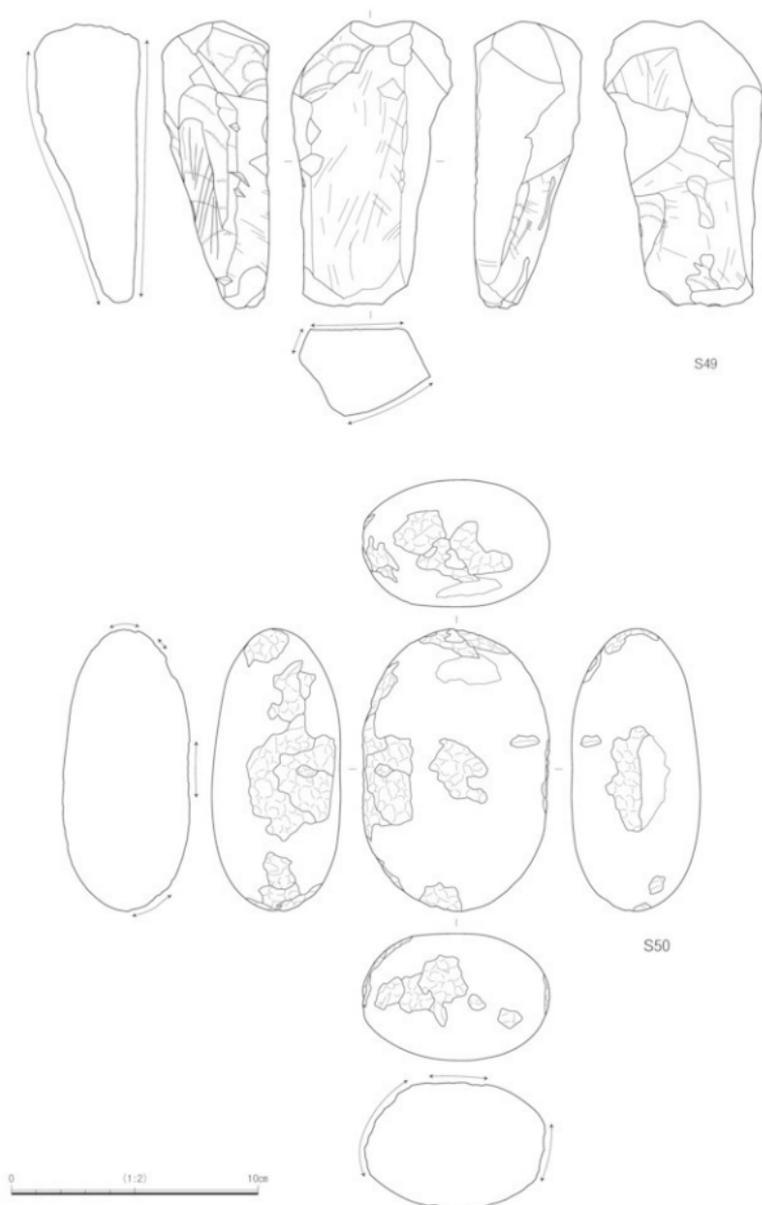


図171 A区 粘土採掘坑 出土石器

Po458・459は甕。共に「く」字状の口縁部を持つ器形だが、個体差が大きい。Po460は土製品のミニチュア土器。器高4 cm余りの小型品で、ナデやエビオサエで粗く整形する。坏を意識したものか。

Po461～Po463は須恵器である。Po461・462は平高台状を呈する坏で、概ね器形全体が復元できる。いずれも丸みを持った体部で、口縁部は外反し、糸切り平高台の底部と体部の境は明瞭である。Po462はやや身が深い器形を示す。これらを形態的特徴の類似する兵庫県相生窯址群の編年に当てはめれば、椀Cにおける第3段階のb-1期に近いと考える。Po463は横瓶である。口縁部は外反し、端部を僅かに肥厚させ、外面には沈線を一条施す。

Po464～470は緑釉陶器である。Po464～466は椀の口縁部付近で、体部は緩やかに内湾し、Po464・465は口縁端部に輪花がみられる。Po467は椀の体部で外面に稜がみられる。Po468は削り出し高台の底部で、底部外面は露胎である。これらはきめ細かい胎土に淡緑色の釉が施される。Po469は暗い色調の胎土の底部で高台は削り出す。淡緑色～緑色の釉調で底部外面は露胎である。これらは9世紀後葉から10世紀前半の京都産と考える。Po470は褐色の胎土に濃緑色の釉が施された底部で全面施釉される。底部内面には2条の圈線が廻り、高台端部に段が作られる。10世紀後半の近江産と考える。

Po471～474は灰釉陶器で、Po471は底部外面以外は施釉、Po472～474は底部内外面が露胎である。高台はいずれも三日月状を呈する。これらは9世紀末の黒笹90号窯期第3段階のものと考えられる。

石器として敲石と砥石、石錘で、鍛冶関連遺物として椀形鍛冶滓を図化した。S46は石錘で、細長い碟の両端に浅い溝が彫られ、外面に被熱による剥離がみられる。S48は安山岩製の石鋏で、両面を丁寧に調整している。

以上、出土遺物を概観してきた。遺構掘方の重複関係においては、本遺構は区画溝よりも後出することが判明しているが、最新と目される遺物(土師器坏)の比較では明瞭な差異は認められない。詳細な編年が未構築な現状もあり、区画溝の埋没時期に対して大きな時期差は考え難いとするにとどめておきたい。(加藤)

道路遺構(図172～183、PL.3・41～52・109)

J23、K23・24、L24、M24・25、N24～26、O25・26、P26～28、Q27・28に亘って検出した、段丘面西端の斜面際を南西～北東方向に延びる遺構である。北東、南西側のいずれも、調査区外へと続いている。本遺構の大半は、近・現代の造成土・耕作土下に露出する基盤層において検出したが、M24・25、N24・25においては黒褐色系の所謂クロボク(Ⅲ層)が遺存しており、その上に構築されている(図172)。

溝状遺構が概ね並行して数条、一定の連続性をもって確認でき、溝に挟まれた範囲において盛土・硬化面が一部遺存していたことから、本遺構を道路遺構と判断した。盛土・硬化面については、道路における路面及び路盤に該当し、それらに沿って検出された溝は側溝と捉えられる。盛土及び硬化面は、後世の改変により遺存状況が不良であったが、盛土、側溝には重複関係が認められ、そこからの所見により少なくとも3段階に亘り構築されたことが判明した。ここでは、構築時期の古い順から第1段階、第2段階、第3段階と呼称することとし(図172)、以下、段階毎に詳細を述べる。

第1段階 調査区南西側(Q28)から中央やや北寄り(M24・25)までの範囲において、確認した(図173)。東西座標におけるMラインより北側については、後世の改変により様相が不明となる。調査区南西側を中心に、一対となる側溝が並走し、溝間に盛土と硬化面を伴っている。

盛土は削平を受け、厚さにして0.1~0.25cm程度遺存していたが、堆積上半を中心に硬化しており(図177A-A' セクション51~53層等)、平面的にも一定の範囲において硬化面を形成する。硬化面が路面そのものなのか路盤に該当するのか明確ではないが、土層堆積や平面的な遺存状況から盛土上位を失っている蓋然性は高く、路盤に係る堆積と考える。盛土中においては、礫等を意識的に混入した痕跡はない。硬化した堆積が敷設時における突き固め等の工程に由来するのか、道路として使用した結果生じたものなのか、現状において判別は困難である。側溝間の距離から導かれる幅員は1.6~2.6mである。

側溝は、両側共に遺存するのは調査区南西側のQ28・P27までで、O26以北については斜面側が後世の改変のため不明となる。一方、尾根側についてはN25まで確認できる。側溝の規模は、幅が0.5~0.9m、深さは尾根側が0.2m前後、斜面側は0.35~0.45mである。側溝の底面標高を比較すると、斜面側が明らかに低く、この差は斜面側における排水に関する必要性に起因する可能性がある。

第2段階 調査区全体において確認した。ただ、両側溝、盛土の構成要素が揃う範囲は調査区南西側のごく一部に止まり、Mラインより北側については、側溝(段丘面側)のみの遺存である。側溝の重複関係から、本段階をさらに2時期に細分し、それぞれを古段階、新段階とした。

本段階側溝の走向は、第1段階側溝を概ね踏襲している。斜面側の側溝は、調査区南西側のQ28・P27の遺存に止まり、第1段階の側溝埋没後、ほぼ同じ場所において掘り直したと土層断面(A-A'、B-B' セクション)から判断した。一方の段丘面側は、後述する本段階盛土との位置関係から、調査区南西側では掘方をほぼ接して並走する2条が該当する可能性が高い(図174)。いずれも遺存状況は不良で、底面付近のみの遺存だが一部重複箇所があり、東側が新しい。新段階側溝をAWS2587、古段階側溝をAWS2589と呼称する。これら尾根側の側溝は、O25において一時途切れるが、N25において再び確認され、以北は調査区外まで続く。本段階の幅員は、両側溝の遺存する南西側では2.0~2.5m程度に復元できる。

段丘面側の側溝は、L24において屈曲が認められる。一方、その南側のN25においても溝や盛土の遺存状況から、L24屈曲点と平面对称に屈曲する可能性が高い(図175)。すなわち、N25からL24にかけて、側溝が上記の屈曲により、東側へ若干張り出し、幅員を拡張することが判明した。以後、上記範囲を「拡幅部」と呼称する。

拡幅部においては、M24・M25・N25に亘り、掘立柱建物47を検出した(図232)。別項で詳述するが、同建物は桁行4間、梁行1間の平面規模を持ち、桁行の軸が側溝の走向とほぼ一致し、互いに沿うように位置することから強い関連性が窺え、両遺構の同時期性は高いと考える。また、この建物に接する側溝埋土中からは、土師器皿を中心とした遺物がまとまって出土した。本遺構全般にみて、拡幅部以外においては、側溝、盛土中共に出土遺物は極めて少なく、当該箇所の特異性は明らかである。

図181・182に拡幅部側溝の遺物出土状況を示した。土層断面の検討に従い、新段階(AWS2587)、古段階(AWS2589)の順に埋土を掘り下げ、遺物検出状況をそれぞれで記録したものの、遺物の垂直分布は連続的で、新・古段階遺物を明確に仕分けることは困難であった。次いで遺物の平面分布を見ると、多くが掘立柱建物側、すなわち道路路面寄りに位置することが分かる。また、遺存状況の良好な個体は、原則として底部外面を上にして出土しており、意識的に伏せて置かれた可能性を示唆する。このような遺物の出土状況、掘立柱建物の存在など、諸状況を勘案すれば、拡幅部において何らかの祭事が執り行われた可能性が指摘できよう。



図172 A区 道路遺構変遷

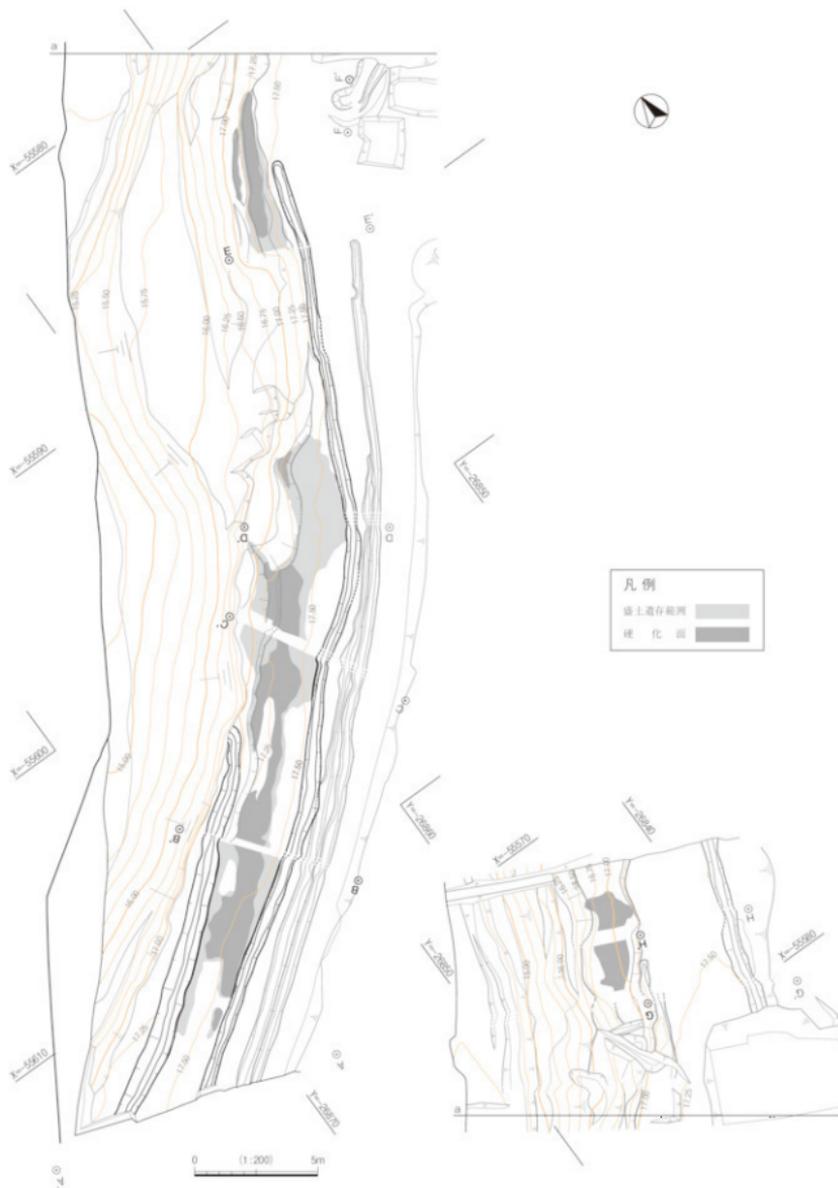


図173 A区 道路遺構第1段階



図174 A区 道路遺構第2・3段階(1)



図175 A区 道路遺構第2・3段階(2)



図176 A区 道路遺構第1段階盛土下検出遺構

拡幅部より北側については、段丘面側の側溝(AWS2587・2589)以外の状況は不明となる。斜面側の側溝、盛土は全く残存していなかったが、古段階のAWS2587の掘方は幅0.75～0.85m、検出面からの深さは0.5m弱と、本調査で検出した側溝においては、遺存状況が比較的良好で、掘方の断面形は逆台形状を呈してしっかりと掘り込まれている。盛土が遺存していないことなど、他構成要素の遺存状況の悪さを考えれば、何らかの意味を有すると想定されるが、推し量る材料に乏しい。

本段階の帰属が想定される盛土は、O26・P26、N25・M25・M24に亘りやや散漫ながら確認した。O26・P26においては、第1段階の側溝及び盛土との先後関係が把握できる。本段階盛土は第1段階の



図177 A区 道路遺構土層断面(1)

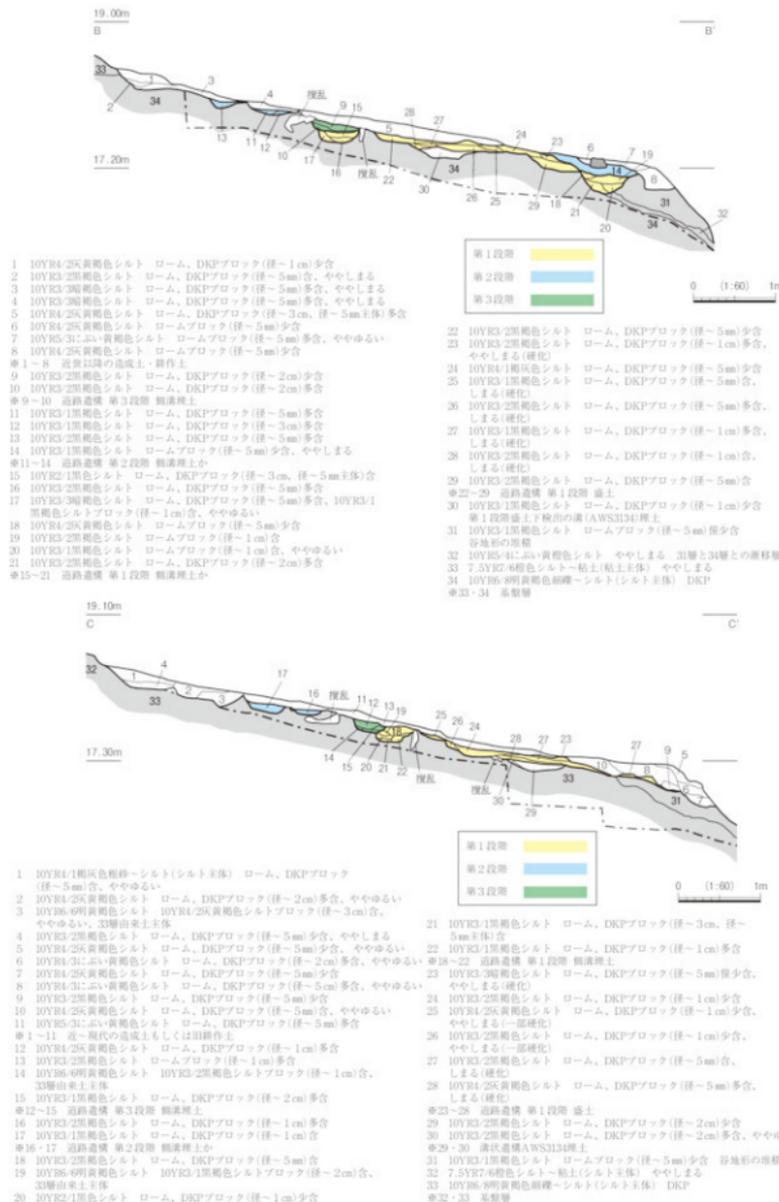


図178 A区 道路遺構土層断面(2)

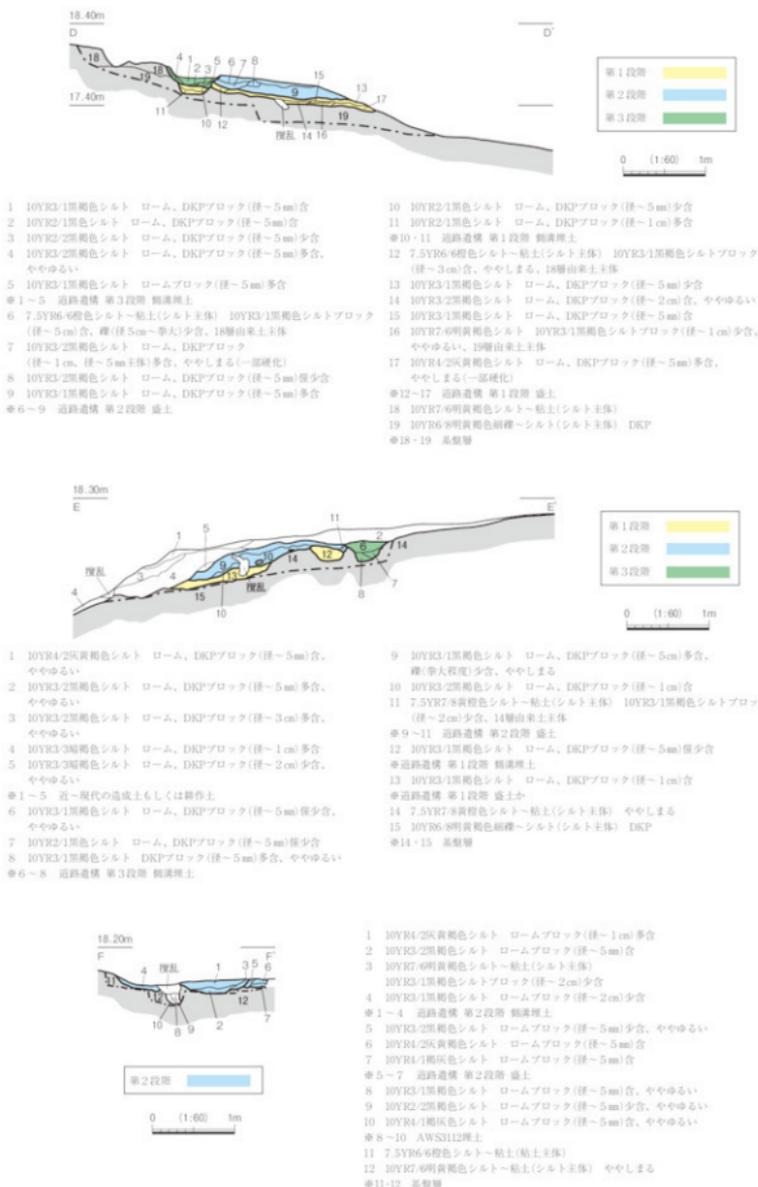


図179 A区 道路遺構土層断面(3)

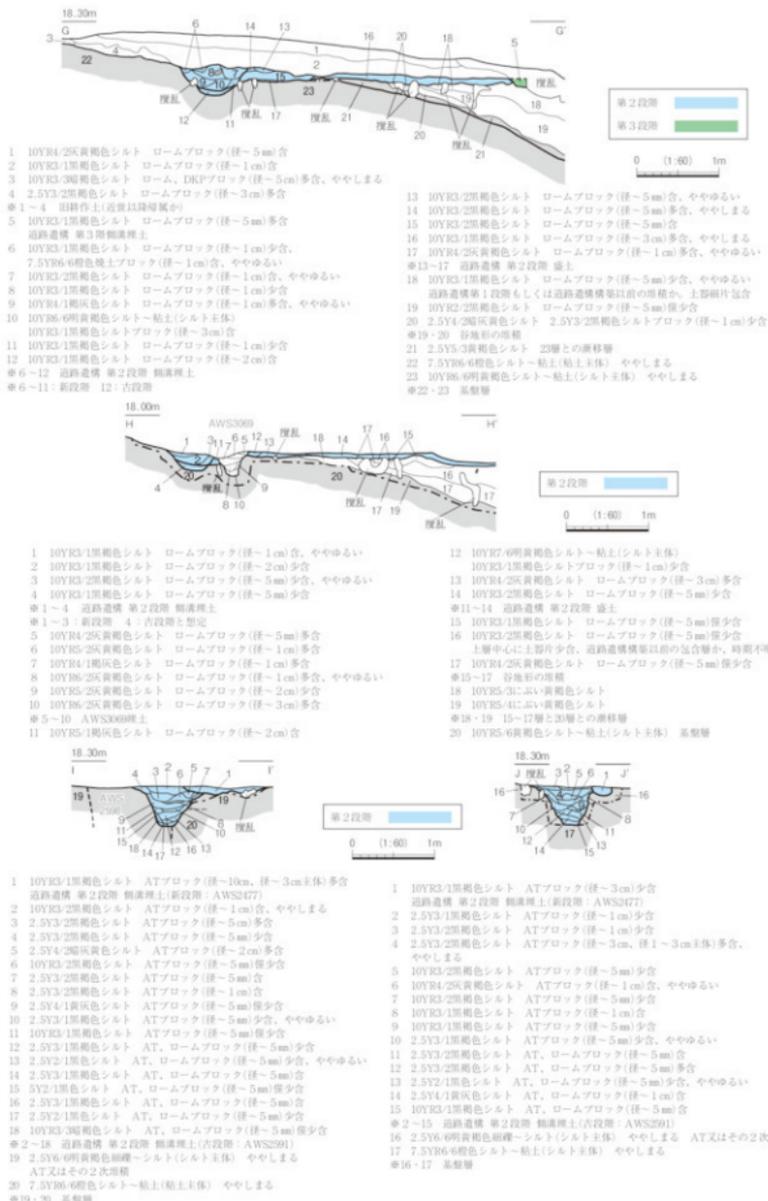


図180 A区 道路遺構土層断面(4)



図181 道路遺構 第2段階拡幅部側溝内 遺物出土状況(1)



図182 道路遺構 第2段階拡幅側溝内 遺物出土状況(2)

側溝埋没後構築され(E-E' セクション)、第1段階盛土を一部削平するなどして整地し、盛土を施したことが窺える(D-D'、E-E' セクション)。

N25・M25・M24、すなわち拡幅部においては、後世の改変が比較的少なく、いわゆるクロボク(皿層)が遺存する。盛土はその上に0.1~0.15mの厚みで検出された(図180)。当該範囲の盛土は、概ね水平、均一な状況であり、基盤をあらかじめ整えた後に施された可能性が高い。本範囲において、斜面側の側溝は残存していないため幅員は不明だが、盛土の遺存範囲から、3.5m以上と見積もられる。

本段階の盛土は、遺存状況が良好な箇所では厚み0.2m前後あり、第1段階でみられたような明瞭な硬化面は伴わない。このことから路面そのものは失われている可能性が高いが、盛土には基盤層由来土を主体的に用い、O26・P26でみられるように密ではないが拳大~人頭大程度の礫を混入するなど(図174拡大部分)、路盤を強化する意図が窺える。

第3段階 本遺構における最新段階である。本段階帰属と判断した遺構は側溝1条にとどまり、盛土は後世の改変により一切を失っていると判断した。

側溝の走向は第1・2段階と合致し、旧段階を踏襲した構築であることは明らかである。第1・2段階側溝との位置的な比較を行うと、第1段階の尾根側側溝とはほぼ重複し、第2段階側溝の少し西側を並走する状況にあるため、本段階側溝も段丘面側である可能性が高い。調査区南西側のQ28から検出し、O26、P26等で第2段階盛土を掘り込み、M25に至るまで確認できるが、以降は不明となる。溝の規模は幅が0.5~0.8m、検出面からの深さが0.1~0.2m程度と、他段階と同様に遺存状況は芳しくない。溝からの出土遺物は僅少で、詳細な帰属時期比定は難しい。

図183に出土遺物を掲げた。Po475~Po489は第2段階における拡幅部(M24・25)の側溝(AWS2587・2589)出土遺物で、一括性が高い資料と評価できる。Po489を除き全て土師器である。Po475~479は皿。口径9~10cm台で、器高は2.5cm前後である。口径値はやや幅を持つが、焼き歪みも多分に影響していると考えられ、規格的に同一の範疇にあると評価したい。いずれも底部切り離しは回転系切りで、体部はやや内湾気味に短く外傾する。Po480~485は坏である。遺存状況の良好な資料は皆無である。Po480~482は体部から口縁部にかけて遺存する資料。底部から内湾気味に立ち上がる、体部下に丸みを持つ器形を示す。口径は13cm台と16cm前後の2法量を示す。Po483~Po485は底部資料で、いずれも底部回転系切り離しである。体部下に丸みを帯び、Po480~482と同タイプと考えられる。Po486は高台坏で、いわゆる足高台と呼ばれる、断面「八」字様に丈の高い高台を貼り付ける。Po487は柱状高台皿の底部資料。端部にはやや曖昧ながら後が入り、そこから窄まりながら短く立ち上がって皿部に至る。Po488は高台の剥離痕が底部に認められ、高台皿と呼ぶべきであろうが、皿部の形態が独特である。体部は、底部から水平に近い形で外傾し口縁部に至るため、身の深さがほとんどない。底部には焼成後、円孔が1箇所穿たれる。口径は9.75cmと無高台の皿に近い。Po489は鍛冶関連遺物の羽口片で、先端部に該当する。

Po490~504は、上述したM24・25以外で出土した資料である。M24・25に隣接したグリッドからは一定数の出土がある。特に北隣に該当するL24は出土量がまとまっており、詳細な出土状況は不明ながら、拡幅部の一角を占める蓋然性は高い。Po490~502は土師器で、Po490~498は皿である。口径が概ね10cm前後、器高は2cm前後と、M24・25出土資料よりも器高がやや低い資料があるものの、同タイプと考えられる。Po498は口径11cm台とやや大きい数値を示すが、破片資料であり焼き歪みの影響も考えると、慎重に取り扱う必要がある。Po499~501は坏である。体部はいずれもやや内湾しつつ外

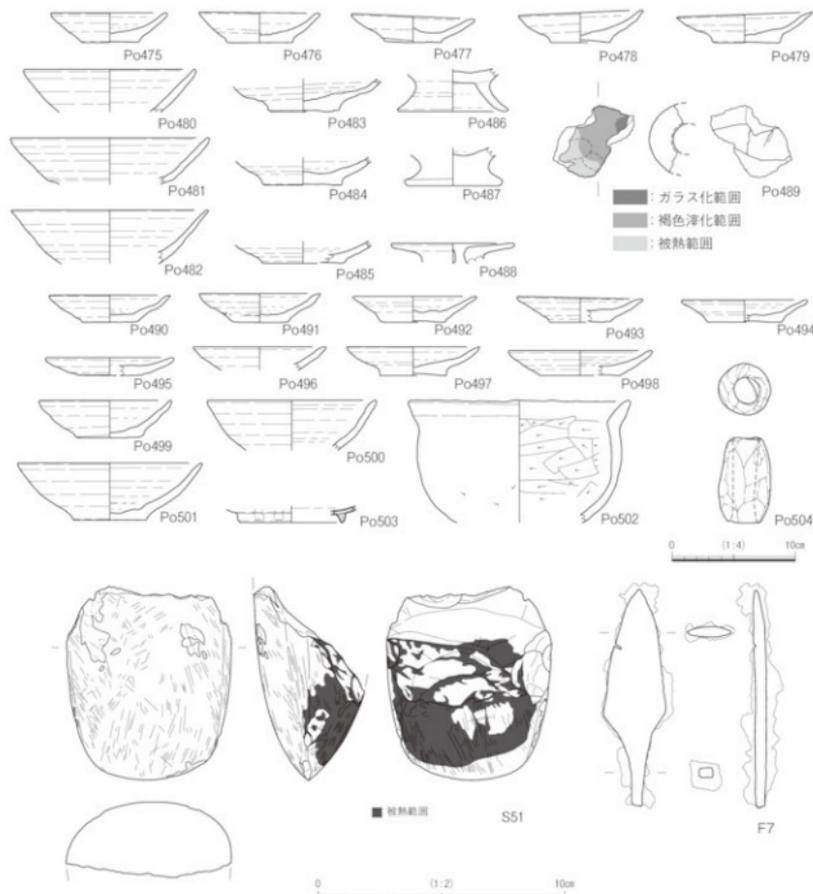


図183 A区道路遺構 出土遺物

傾する。Po499は口径が10cm台と、小量の皿と同様な数値を示すが、器高が3cmと高く、プロポーション的には坏と考えられる。Po500は底部に欠く資料で、口径は13cm台。Po501は口径15cm弱ある。Po502は甕で、口径17.6cmと小型の範疇に入る。口縁形態は古墳時代に淵源を辿りうる、「く」字状を呈するものであるが、器高は低く、扁平化が進捗しつつある段階と考える。Po503は灰軸陶器皿の底部資料。断面三角形の高台を貼り付ける。高台内は露胎である。黒笹90号窯式期併行と考えられる。Po504は土鍾である。比較的大振りな資料で、孔径は2.2cmある。

以上、第2段階に限定されるものの出土遺物を概観した。繰り返しとなるが、他段階では出土遺物そのものが僅少であり、第2段階の拡幅部における状況の特異さは明白である。須恵器供膳具の出土は無く、主体となる土師器環・皿の底部切り離しは全て回転糸切りで、その中では口径10cm、器高2.5

cm前後を測る小法量の皿が安定して出土する。また、皿においては他法量の資料が認められず、単一法量を示唆していると考ええる。一方、高台坏を含めた坏の出土量は皿と比較して少なく、遺存状況が良好な資料も多くない。無高台の坏は、径13cm台、16cm前後のものがあり、10cm台の小型品も1点に止まるが出土し、3法量から成ると考えられる。伯耆国守福年によれば、底部回転糸切り産しの土師器坏皿は、10世紀前半頃から出現すると推定されている。また、底端部が張り、定型化の進行した柱状高台皿又は坏の出土は、时期的にやや新しい要素と考えており、上述した単一法量を指向する小法量皿の安定した出土も勘案し、推定時期幅が広いが10世紀後半から11世紀前半頃の帰属を想定しておきたい。一方、第1・3段階については、当該段階に確実に伴う遺物の特定が困難なうえ、出土量も少なく帰属時期比定の素材を欠く。道路使用が収束した時期についても直接的な根拠は薄弱だが、本遺構のみならず段丘面上全般の出土遺物相において、中世前期帰属の輸入陶磁器白磁が出土していないことを重視し、11世紀後半以降には続かないと想定する。

以上、各段階の詳細と出土遺物について述べ、本遺構の時期比定を行った。既述したように、本遺構の最古段階とする第1段階の盛土は、調査区南西側を中心に遺存しており、盛土除去後の遺構検出において、遺構を一定数確認した(図176)。検出した遺構はピットや土坑が主体で、これらは道路遺構との関連性は低いと判断した。ただ、O26・P26・P27・Q27において検出した溝状遺構(AWS3134)は、走向が道路遺構側溝と近似しており、関連する可能性がある。17.7mに亘って検出し、規模は幅が0.5～1.2m、検出面からの深さは0.1～0.15mあり、道路側溝と比較して差は少ない。土層断面の所見から、第1段階盛土構築以前に営まれたことは明確で(A-A'、B-B'、C-C' セクション)、第1段階よりも古い段階が存在する可能性はある。しかしながら、AWS3134以外に道路遺構の構成要素と評価できる遺構が無いことから、可能性を指摘するに止めておきたい。なお、出土遺物については僅少で、明確な帰属時期を示すものはない。(加藤)

掘立柱建物

北東部の大型建物群

調査区北東部に桁行が10mを超える建物が集中して確認できた。柱穴掘方も他の建物に比べて大きくことが特徴である。一部の建物は後世の土地改変で失われていたが、柱穴掘方の規模から同様の規模の建物と判断し、本項で報告する。

掘立柱建物9(図184・185、PL.4・53・110)

L6・7、M6・7に位置する桁行7間、梁行1間の東西棟の建物である。規模は桁行が16.14m、梁行が5.00mあり、建物の主軸方向はN-71°-Wである。

柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は最大径が0.84～1.15m(平均1.03m)ある。深さは0.26～0.60m(平均0.52m)で、ばらつきが大きい。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックのほか、焼土や炭を多く含んでいる。段下げ状況や埋土観察、底面の状況から、多くの柱穴で柱痕跡を確認でき、そこから復元できる柱の直径は0.20～0.44mである。

柱痕および柱穴の中心間を結んだ柱間隔は、桁行が1.92～2.62m(平均2.28m)、梁行が西側で4.80m、東側で5.00mである。P16の底面からは、長さ0.25m程度の不整形の礫が出土しており、根石と考える。

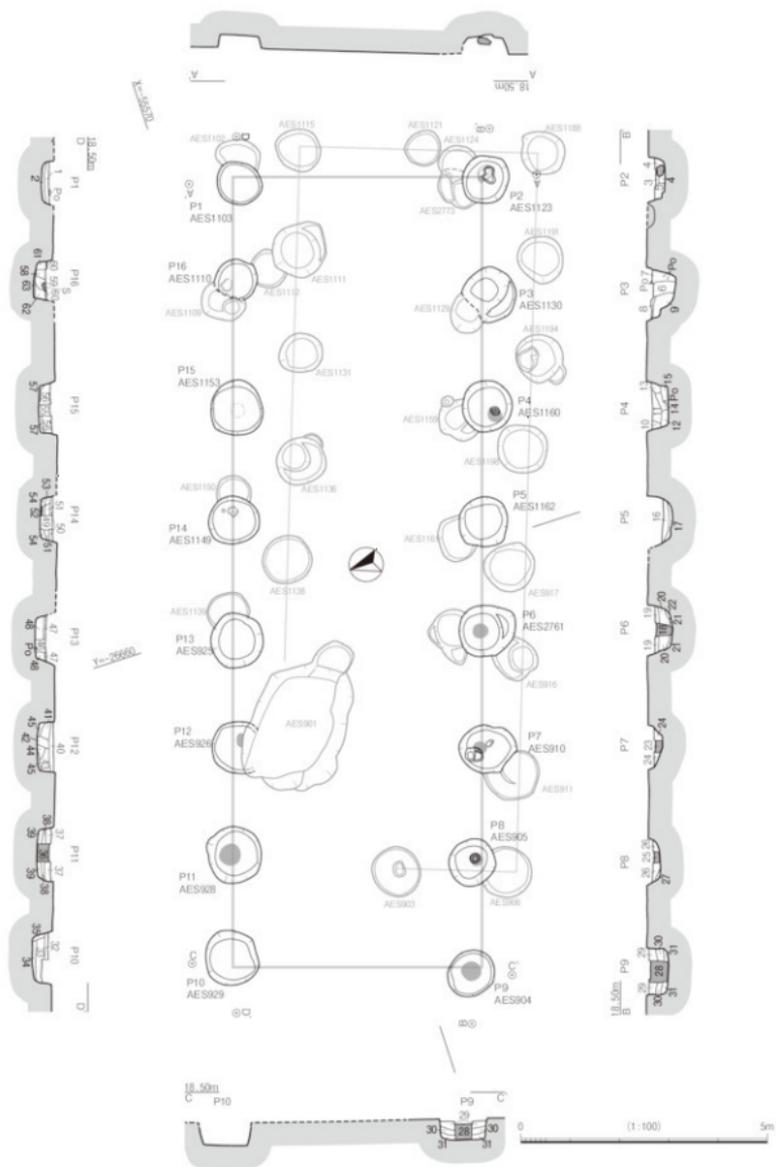


図184 A区 掘立柱建物⑨ 平面・断面

表7 A区 掘立柱建物9 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)合、径-5cmの炭化樹根合)	34	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-4cm)合)
2	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-4cm)少合)	35	10YR3-1黒褐色シルト	
3	10YR1.7/1黒色シルト	(ATブロック(径-5cm)少合)	36	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-10cm)合)
4	7.5YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)合)	37	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-4cm)合)
5	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(径-5cm)多合)	38	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-5cm)多合)
6	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-8cm)合)	39	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)少合)
7	2.5Y3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-5cm)合)	40	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)合)
8	2.5Y3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm、細粒主体)合)	41	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-5cm)多合)
9	2.5Y3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-3cm)多合)	42	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm、細粒主体)合、炭化樹根合)
10	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)合)	43	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)少合)
11	10YR2-1黒色シルト	(砂や砂殻)	44	10YR2-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-4cm)合)
12	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)多合)	45	2.5Y2-1黒色シルトとATブロック状(径-5cm)に混じる	
13	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)多合、炭化樹根合)	46	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-8cm)合)
14	10YR1.7/1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)多合)	47	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)合)
15	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm)多合、ロームブロック、炭化樹根合)	48	2.5Y3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-3cm)合)
16	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)合)	49	2.5Y2-1黒色シルト	(AT細粒合)
17	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-3cm)多合)	50	2.5Y3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-3cm)合)
18	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)合)	51	10YR2-1黒褐色シルト	(AT細粒合)
19	10YR2-1黒色シルト	(AT細粒合)	52	10YR2-1黒色シルトとAT細粒少合	
20	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-5cm)合)	53	2.5Y2-1黒色シルト	
21	2.5Y2-1シルトとATがブロック状(径-5cm)に混じる		54	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-2cm)少合)
22	ATブロックに2.5Y2-1シルトブロック(径-2cm)が混じる		55	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-4cm)合)
23	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(径-3cm)少合)	56	2.5Y2-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-4cm)合)
24	10YR2-1黒色シルト	(AT細粒多合)	57	2.5Y2-1黒褐色シルトとATがブロック状(径-3cm)に混じる	
25	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック細粒合)	58	7.5YR2/2-1シルト	(ロームブロック(径-1cm)多合)
26	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-2cm)合)	59	7.5YR1.7/1シルト	(ロームブロック、ATブロック(径-2cm)多合)
27	10YR2-1黒色シルトとATブロック状(径-5cm)に混じる		60	10YR2-1黒色シルト	(ロームブロック(径-2cm)少合)
28	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)多合)	61	10YR1.7/1シルト	(ロームブロック(径-5cm)多合)
29	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-5cm)多合)	62	10YR2-2シルト	(ロームブロック、ATブロック(径-1cm)多合)
30	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)、ロームブロック多合)	63	ロームと10YR2-2黒褐色シルトの混土	
31	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径-1cm)多合)			
32	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径-5cm)少合)			
33	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径-5cm、細粒主体)合)			

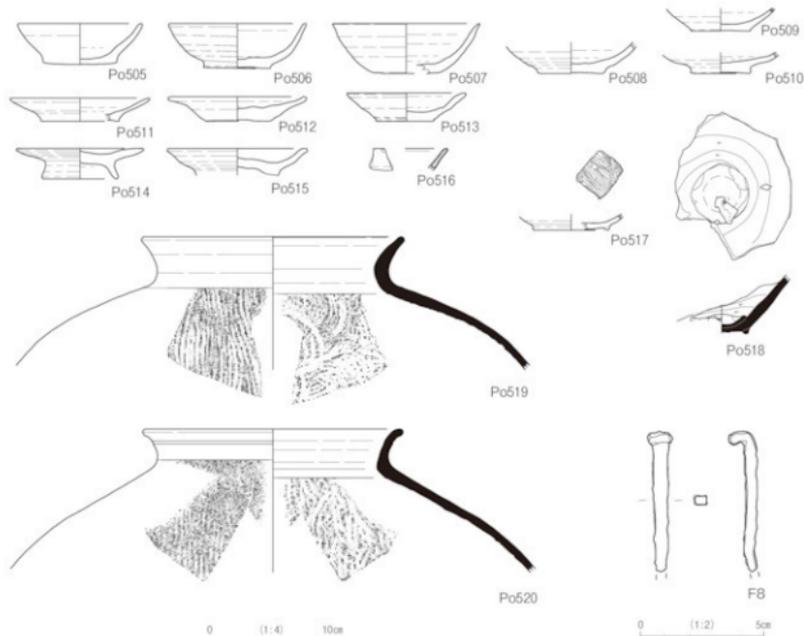


図185 A区 掘立柱建物9 出土遺物

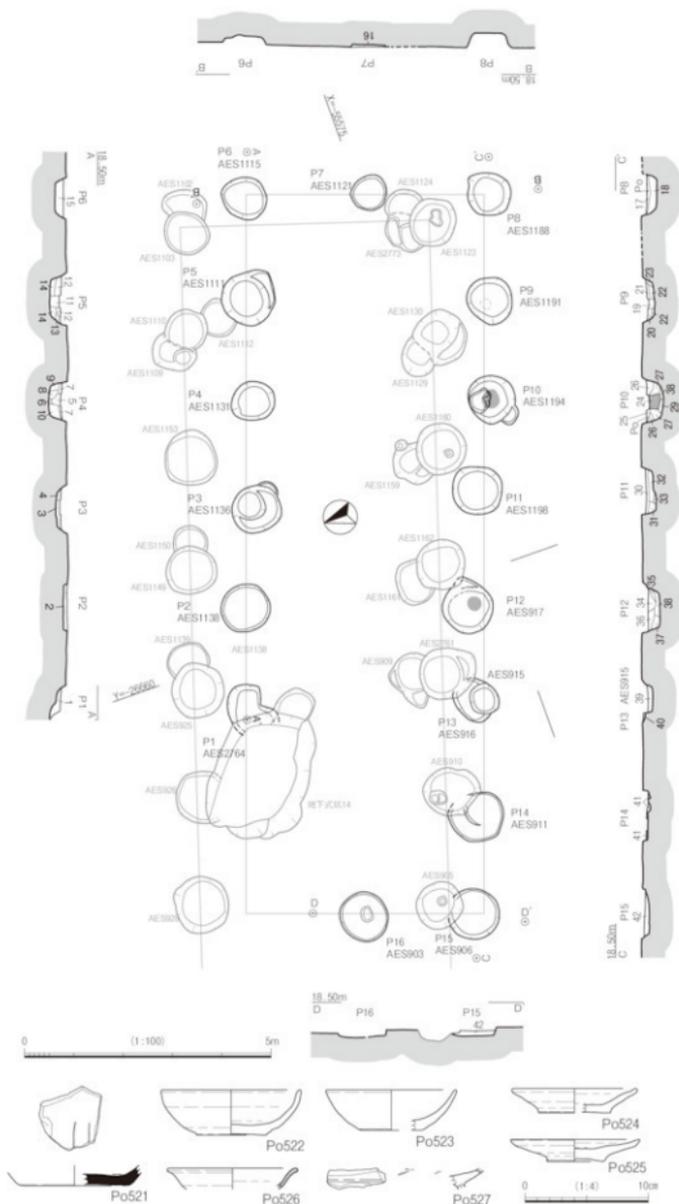


図186 A区 据立柱建物10 平面・断面・出土遺物

表8 A区 掘立柱建物10 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)僅少含)	22	2.5YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=2cm)多含)
2	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)僅少含)	23	2.5YR3-1黒色シルト	(AT細粒含)
3	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)含)	24	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)含)
4	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)含、3よりブロック多)	25	2.5Y2-1黒色シルト	(AT細粒含)
5	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)含)	26	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)僅少含)
6	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)含)	27	10YR3-2黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)多含)
7	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)少含)	28	2.5Y3-1黒色シルトとATがブロック状(径=3cm)に混じる	
8	2.5Y3-1黒色シルトとATがブロック状(径=3cm)に混じる		29	ATブロックと2.5Y3-1黒色シルトがブロック状(径=3cm)に混じる	
9	2.5Y3-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)含)	30	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=4cm)含)
10	10YR2-1黒色シルト		31	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック細粒含)
11	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)多含)	32	2.5YR3-1黒色シルト	(ATブロック(径=10cm)含)
12	10YR2-2黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)多含)	33	2.5Y2-1黒色シルトとATがブロック状(径=3cm)に混じる	
13	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)多含)	34	2.5Y2-1黒色シルトとATがブロック状(径=5cm)に混じる	
14	ロームにATブロック(径=2cm)が少し混じる		35	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック細粒)僅少含)
15	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm、細粒主体)少含)	36	10YR1-7-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)多含)
16	10YR3-1黒色シルト	(ATブロック(径=2cm)少含)	37	10YR2-2黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)多含)
17	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)多含)	38	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=4cm、細粒主体)含)
18	7.5YR1-7-1黒色シルト	(ATブロック、7.5YR6-6塊山ロームブロック(径=2cm)多含)	39	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)含)
19	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=2cm)含)	40	2.5Y2-1黒色シルト	
20	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)含)	41	10YR3-2黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)含)
21	10YR3-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)含)	42	10YR3-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)多含)

遺物は、柱抜き取り痕などから土師器が出土したほか、P1～3、16などの柱穴埋土から須恵器大甍片が多く出土した。これらの須恵器片は建物を作る際に流入したと考える。

Po505～510は土師器環で、いずれも底部切り離しが回転糸切りである。Po506～510は体部が内湾し、Po507以外は底部が平高台状を呈する。Po511～513は土師器皿でいずれも体部が外形し、Po513はやや深めである。Po514・515は土師器高台皿で、Po515は貼付高台が脱落する。皿の部分はいずれも浅めである。Po516は緑軸陶器で外面に稜が見られる。Po517の黒色土器は回転台を用いずに作られ、内面のミガキが細い。搬入品またはその製作技法の影響を受けたものと思われる。Po518の須恵器蓋は輪状のつまみが付いており、焼成段階の焼き歪みが著しい。土師器と比べて古い時期のものである。

柱穴掘方は掘立柱建物10、11の柱穴を壊しており、これらより新しい時期の建物と考える。このことと出土遺物から、遺構の時期は10世紀後半と考える。(岡田)

掘立柱建物10(図186、PL.4・53・110)

L6・7、M6・7に位置する、桁行7間、梁行2間の東西棟の建物である。規模は桁行が14.74m、梁行が4.90mで、建物の主軸方向はN-69°-Wである。柱穴は北西隅で確認できず、その東側の柱穴2基は地下式坑14の天井崩落で壊されていた。

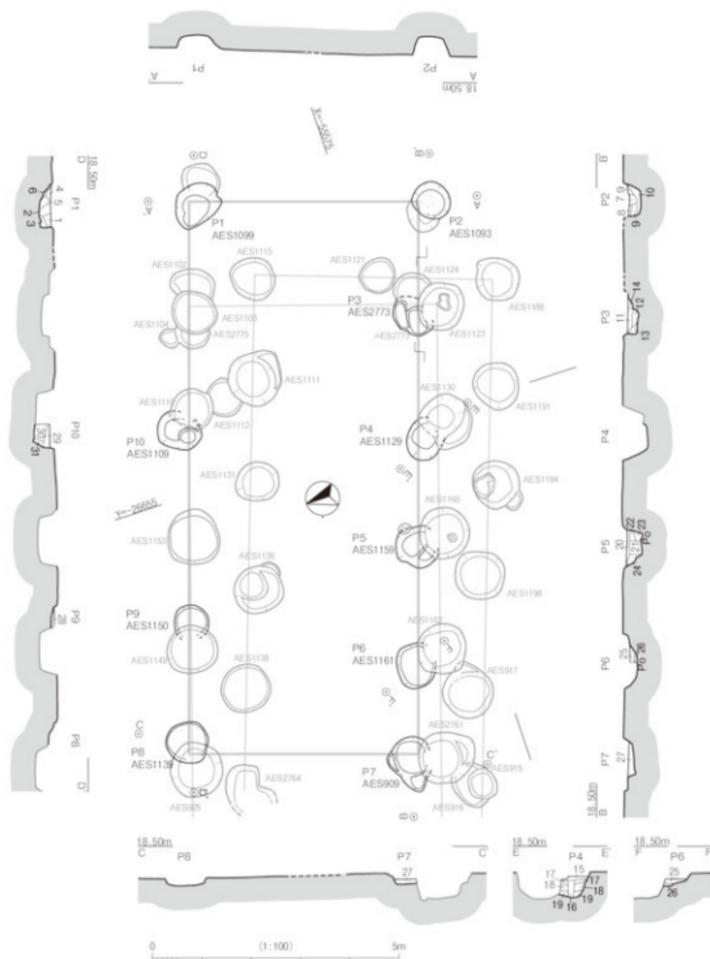
柱穴の平面形はいずれも円形を呈しており、規模は最大径が0.72～1.10(平均0.96)mある。深さは桁筋が0.15～0.44(平均0.26)mで、妻中央の柱はP7が0.06m、P16が0.14mある。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。段下げ状況や埋土観察、底面の状況から、柱痕跡を確認できた柱穴もあり、そこから復元できる柱の直径は0.18～0.30mある。

柱痕跡および柱穴の中心間を結んだ柱間間隔は、桁行が1.82～2.32(平均2.28)m、梁行が2.20～2.50m(平均2.39m)である。

遺物は、柱抜き取り痕などから土師器が出土したほか、P6、8などの柱穴埋土からは須恵器大甍片が多く出土した。図化した土師器環はいずれも体部が内湾する。谷19は緑軸陶器の小椀で外面に稜がみられる。

南側柱筋の柱穴掘方の一部が掘立柱建物9の柱穴によって壊されており、掘立柱建物11に先行する建物と考える。掘立柱建物11とは切り合い関係になく、先後関係は不明だが、出土遺物から掘立柱建



- | | |
|---|---|
| 1 10YR1.7/1黒色シルト(ロームブロック(~1cm)多含) | 16 7.5YR1.7/1黒色シルト(ATブロック(~1cm)多含) |
| 2 7.5YR1.7/1黒色シルト | 17 10YR2.1/黒色シルト(ATブロック(~3cm)少含) |
| (ロームブロック、2.5Y6.2/黄褐色砂質シルトブロック(~3cm)多含) | 18 7.5YR1.7/1黒色シルト(ロームブロック(~5cm)多含) |
| 3 10YR2.1/黒色シルト(ローム細粒少含) | 19 7.5YR1.7/1黒色シルト(ローム細粒少含) |
| 4 7.5YR1.7/1黒色シルト(ローム細粒少含) | 20 10YR2.1/黒色シルト(2.5Y2.1/黒色砂質シルトブロック(~2cm)多含) |
| 5 7.5YR1.7/1黒色シルト(ロームブロック(~1cm)多含) | 21 5YR1.7/1黒色シルト(ロームブロック(~1cm)多含) |
| 6 7.5YR1.7/1黒色シルトとロームの混土 | 22 7.5YR2.2/黒褐色シルト(ロームブロック(~1cm)多含) |
| 7 10YR2.1/黒色シルト(AT細粒多含) | 23 7.5YR1.7/1黒色シルト(ローム細粒少含) |
| 8 10YR2.1/黒色シルト(AT細粒少含) | 24 10YR3.1/黒褐色シルト(2.5Y2.1/黒色シルトブロック(~3cm)少含) |
| 9 10YR2.2/黒褐色シルト(ATブロック(~5cm)多含) | 25 10YR2.2/黒褐色シルト(ATブロック(~2cm)多含) |
| 10 2.5Y2.1/黒色シルト(ATブロック(~2cm)多含) | 26 7.5YR1.7/1黒色シルト(ATブロック(~1cm)少含) |
| 11 10YR2.2/黒褐色シルト(ATブロック(~5cm)多含) | 27 10YR1.7/1黒色シルト(ロームブロック(~2cm)多含) |
| 12 10YR2.3/黒褐色シルト(ATブロック(~5cm)多含) | 28 2.5Y2.1/黒色シルト(ATブロック(~3cm)多含) |
| 13 10YR2.2/黒褐色シルト(ATブロック、ロームブロック(~2cm)多含) | 29 7.5YR1.7/1黒色シルト(ロームブロック、ATブロック(~3cm)多含) |
| 14 2.5Y3.0/黄オリーブ褐色シルト(ATブロック(~2cm)少含) | 30 10YR2.1/黒色シルト(ATブロック(~2cm)多含) |
| 15 10YR1.7/1黒色シルト(ATブロック(~2cm)多含) | 31 10YR2.1/黒色シルト(ロームブロック多含) |

図187 A区 掘立柱建物11 平面・断面

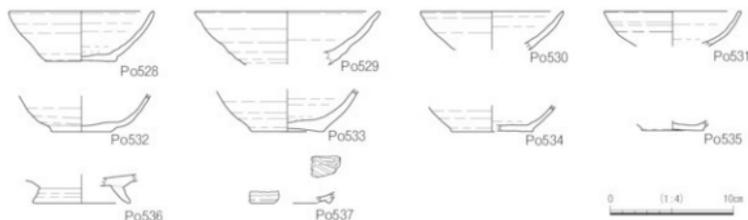


図188 A区 掘立柱建物11 出土遺物

物10よりやや遅れる10世紀中葉～後半と考える。(岡田)

掘立柱建物11(図187・188, PL.A・53・110)

L6、M5・6・7に位置する、桁行5間、梁行1間の東西棟の建物である。規模は桁行が11.20m、梁行が4.78mで、建物の主軸方向はN-70°-Wである。

柱穴の平面形はいずれも円形を呈しており、規模は最大径が0.60～0.91(平均0.82)mある。深さは、0.10～0.50(平均0.28)mで、ばらつきが大きい。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックや焼土・炭を含んでいる。段下げ状況や埋土観察、底面の状況から、柱痕跡を確認できた柱穴があり、そこから復元できる柱の直径は0.18～0.34mである。柱痕跡および柱穴の中心間を結んだ柱間隔は、桁行が1.70～2.68m(平均2.19m)である。

柱穴掘方からは土師器、須恵器、黒色土器が出土しており、このうち土師器と黒色土器を図化した。土師器は体部が直線的で中段あたりでゆるく屈曲するものと、底部から緩やかに内湾するものがある。黒色土器Po537は細片で成形技法ははっきりしないが、高台が低めで回転台を用いていない可能性がある。

建物の時期については、桁筋の柱穴が掘立柱建物9の柱穴によって壊されており、掘立柱建物9に先行すると考える。掘立柱建物10とは切り合い関係になく先後関係は不明だが、出土遺物から掘立柱建物12よりやや先行する10世紀中葉と考える。(岡田)

掘立柱建物12(図189～191, PL.54・110)

O6・7、N6・7で検出した桁行7間、梁行2間の東西棟の建物である。柱穴掘方の中央付近をなるべく通るように建物を想定すると桁行15.78m、梁行4.94mになる。建物の主軸方向はN-70°-Wである。建物の中には東西端からそれぞれ2間で間仕切りするための柱穴(P18、19)が確認できた。

柱穴の平面形は円形又は楕円形で、ややいびつなものも含まれる。長径は0.76～1.19(平均0.97)m、検出面からの深さが0.06～0.47(平均0.25)mで、とくに妻中央や間仕切りの柱穴が浅くなる。また、桁行の南側柱列の掘方の深さをみると、P4が他のものより浅くなっていた。北側柱列ではP1とP17の間の柱穴が確認できなかったが、南側柱列と同様に掘方が浅く検出面に残らなかったと考えた。

柱穴の芯々間距離は桁行で1.83～2.72m(平均2.20m)、梁行で2.39～2.55m(平均2.47m)であり、とくに桁行でばらつきが大きい。明確な柱の痕跡は確認できなかったが、P5の底面に長径0.5mほどの礫が据えられており、この上に柱が据えられた可能性がある。また、P10の底面中央で礫が出土しており、その上にあった26層は基盤層ブロックを含んでいることから、柱痕跡そのものではないものの、柱抜取痕と思われる。またP6の14層も埋土の状況から抜取痕と考えた。これらを基にすると、P5と

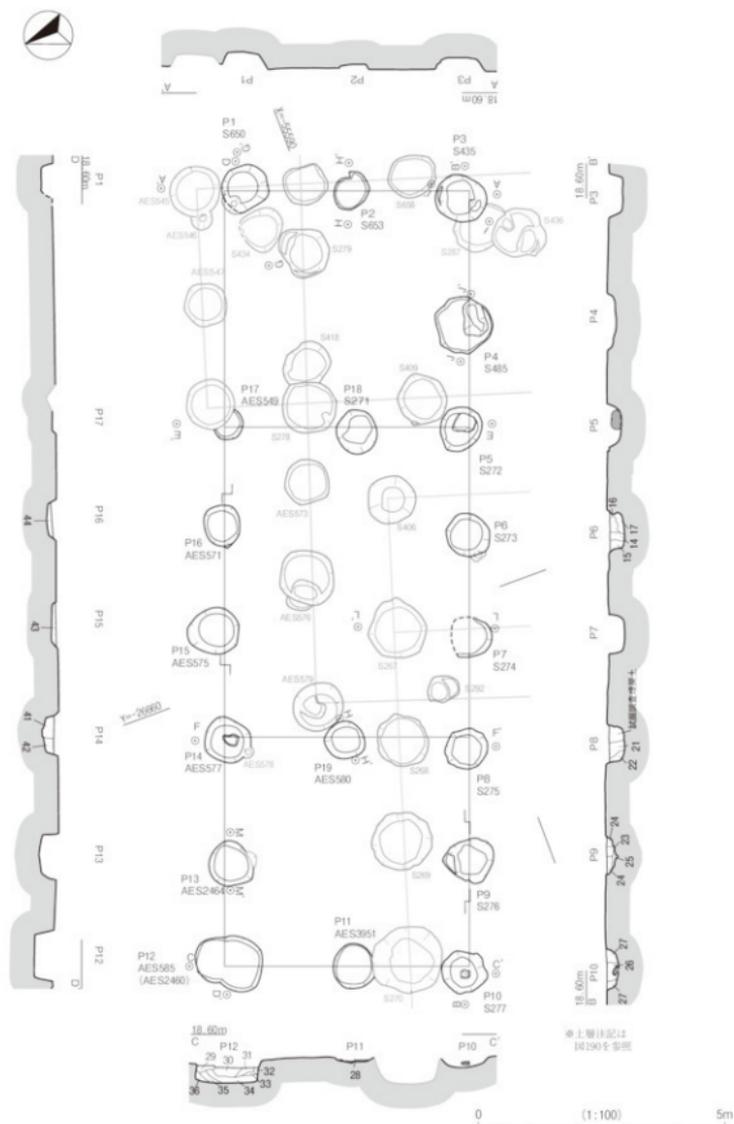


図189 A区 掘立柱建物12(1)

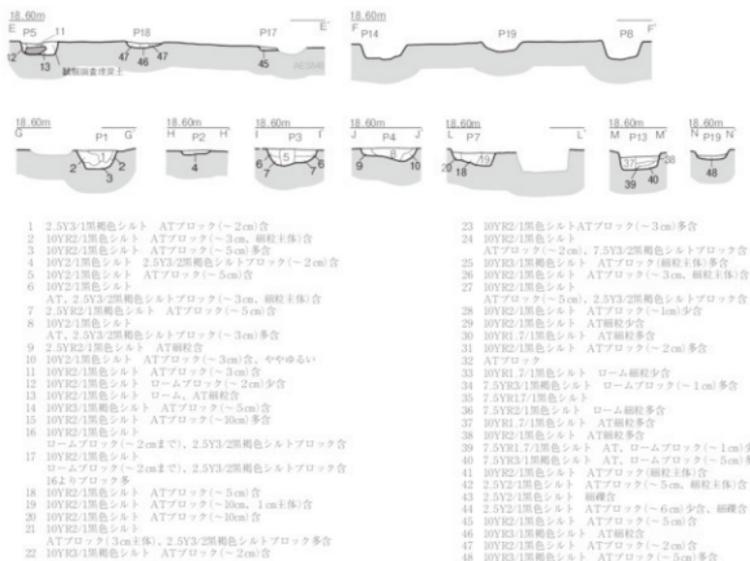


図190 A区 掘立柱建物12(2)

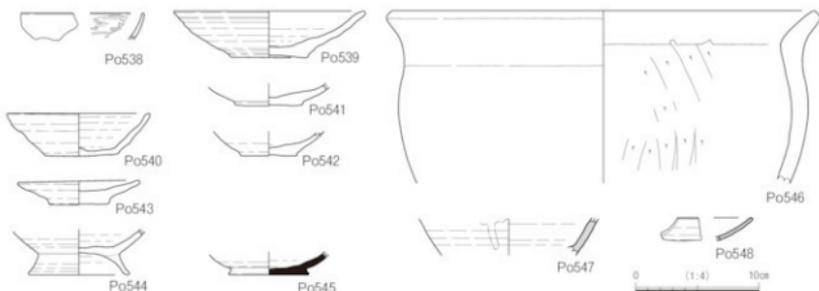


図191 A区 掘立柱建物12 出土遺物

P6の柱間は2.3m前後になり、桁行では、掘方中央から外れるものがあるものの、この間隔ですべて掘方の中に柱が収まる。そのため、桁行に関しては2.3m前後(7.5尺程度)の間隔だった可能性がある。

掘方埋土からは土師器、須恵器、灰陶軸器が出土した。土師器等は底部から体部への立ち上がりが直線的で、体部最下部には強い回転ナデは認められない。これらは10世紀のものと思われ、掘立柱建物15の柱穴から出土したもの比べてやや古くなると考える。(田中)

掘立柱建物13(図192・193, PL.54・110)

O5・6で検出した桁行7間、梁行2間の東西棟の建物である。規模は桁行15.97m、梁行4.60mと想定し、建物の主軸方向はN-71°-Wである。

柱穴の平面形は円形又は楕円形だが、やや不整形なものが多い。長径は0.66~1.23(平均0.97)m、

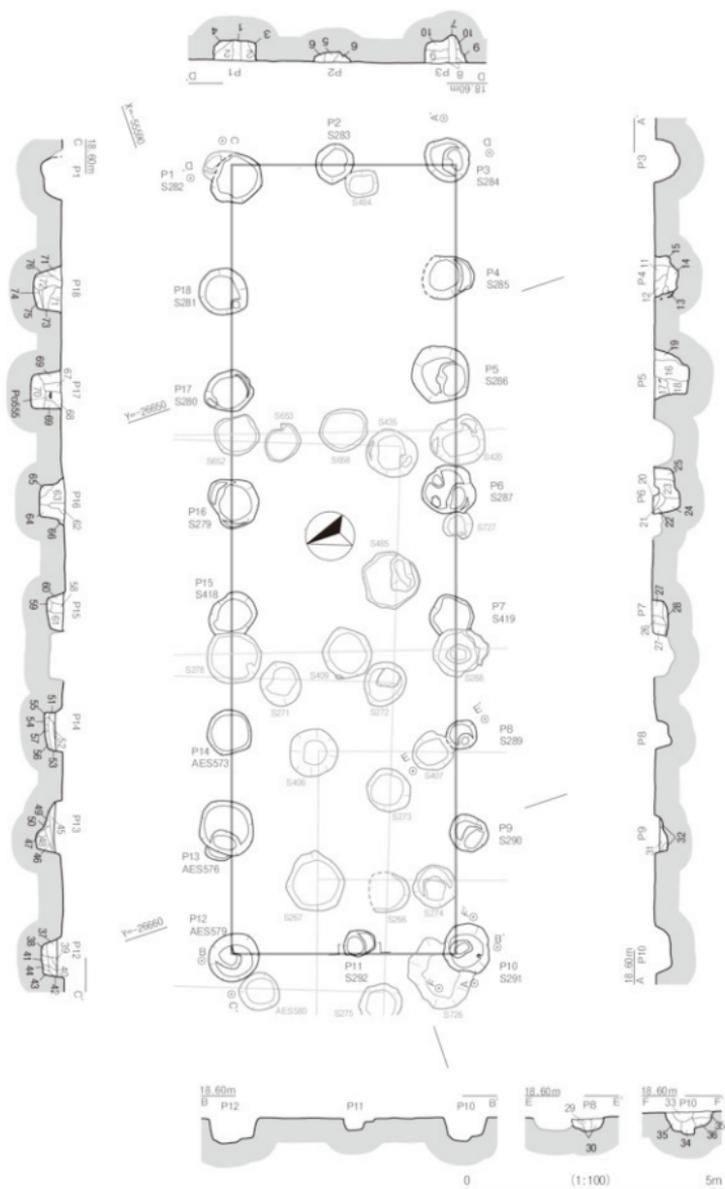


図192 A区 掘立柱建物13

表9 A区 掘立柱建物13 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm, 縦柱主体)合	37	10YR2-2黒褐色シルト	ATブロック(径=2cm)少含。斑点
2	10YR3-1黒褐色シルト	AT、10YR2-1黒色シルトブロック(径=7cm)多含	38	10YR2-1黒色シルト	縦柱合、斑点
3	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径=3cm)合	39	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)合
4	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)多含	41	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=8cm)多含
5	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合	42	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)合、30よりやや粗
6	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径=2cm)、2.5Y3-2黒褐色シルトブロック合	43	10YR2-1黒色シルト	縦柱合、ややゆい
7	10YR2-1黒色シルト	10YR4-6褐色シルト(径=2cm)合	44	2.5Y2-1黒色シルトとロームブロック(径=5cm)に混じる	
8	10YR2-1黒色シルト	A7細粒少含	45	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合
9	10YR2-1黒色シルト	AT、7.5YR4-6褐色シルトブロック(径=5cm)、2.5Y3-2黒褐色シルトブロック合	46	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(縦柱主体)合
10	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径=7cm)多含	47	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)多含
11	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)合、炭片合	48	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)合
12	10YR2-1黒色シルト	ATブロック、ロームブロック(径=5cm)合	49	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合
13	10YR2-1黒色シルト	ATブロック少含	50	10YR2-1黒色シルトと	ATブロック(径=3cm)合
14	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径=3cm)多含、10YR2-1黒色シルトブロック合	51	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合
15	ブロック状のAT1:2.5Y3-2黒褐色シルト、10YR2-1黒色シルトブロックが混じる		52	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm, 縦柱主体)合
16	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=8cm)多含	53	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)多含
17	10YR2-1黒色シルト	A7細粒合	54	2.5Y2-1黒色シルト	縦柱合
18	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)、2.5Y3-2黒褐色シルトブロック合	55	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合
19	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)合	56	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)多含
20	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm, 縦柱主体)合	57	ATブロック	
21	ブロック状のロームにAT、10YR2-1黒色シルトが混じる		58	10YR2-1黒色シルト	ロームブロック(径=3cm)合
22	10YR2-1黒色シルト	ATブロック少含	59	10YR2-1黒色シルト	ロームブロック(径=5cm)合
23	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=6cm)多含、2.5Y3-2黒褐色シルトブロック合	60	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合
24	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合	61	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)合
25	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm, 縦柱主体)合	62	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径2cmまで)合
26	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)合	63	10YR2-1黒色シルト	ロームブロック(径=3cm, 縦柱主体)、2.5Y3-2黒褐色シルトブロック合
27	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=4cm)多含	64	10YR3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径=5cm)多含
28	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径=3cm)多含	65	64に比べてATブロック多	
29	10Y2-1黒色シルト	AT、2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=3cm, 縦柱主体)合、30よりATブロック多	66	2.5Y3-2黒褐色シルト	ATブロック(径=3cm)合
30	10Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)合	67	10YR2-1黒色シルト	ATブロック少含
31	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)合	68	10YR3-1黒褐色シルト	ロームブロック(縦柱主体)合
32	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)多含	69	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径=3cm)合
33	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)多含	70	10YR2-1黒色シルト	ロームブロック(径=10cm)多含
34	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径=3cm)合	71	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=8cm)、2.5Y3-2黒褐色シルトブロック合
35	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径=3cm)合	72	10YR2-1黒色シルト	ロームブロック(径=2cm)合
36	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)合	73	71に比べブロックの量が多くなる	
			74	10YR2-1黒色シルト	ATブロック少含
			75	ブロック状のAT1:10YR2-1黒色シルトが混じる	
			76	10YR2-1黒色シルト	2.5Y3-2黒褐色シルト、A7細粒合

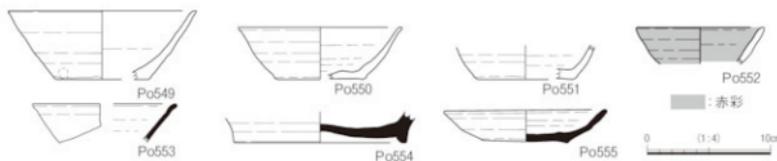


図193 A区 掘立柱建物13 出土遺物

検出面からの深さが0.21~0.74(平均0.47)mで、妻側中央の柱は他に比べて小さめで、検出面からの深さも浅い。

柱穴掘方の土層を観察すると、いくつかの柱穴で柱の痕跡が確認でき、径0.2~0.3mの柱が据えられていたことが分かった。また、P4(11、12層)、P5(17層)、P16(62、63層)、P17(67・68層)では柱抜取痕と思われる堆積が確認できた。これらを基に柱の中心を想定し、柱痕跡が不明確なものは建物想定線上の中央で計測した柱間隔は桁行で1.95~2.54(平均2.28)m、梁行で2.00~2.60(平均2.30)mとなり、間隔のばらつきが大きく、柱痕跡または柱抜取痕の間隔だけで見ても2.2~2.4mで若干ばらつきがある。なお、P4とP17では掘方底面に基盤層ブロックを主体とした堆積があり、掘方掘削後に柱の長さに合わせて底面を埋めた可能性がある。

掘方埋土から出土した土師器環の中には底部からの立ち上がりや内湾するものが含まれる。ま

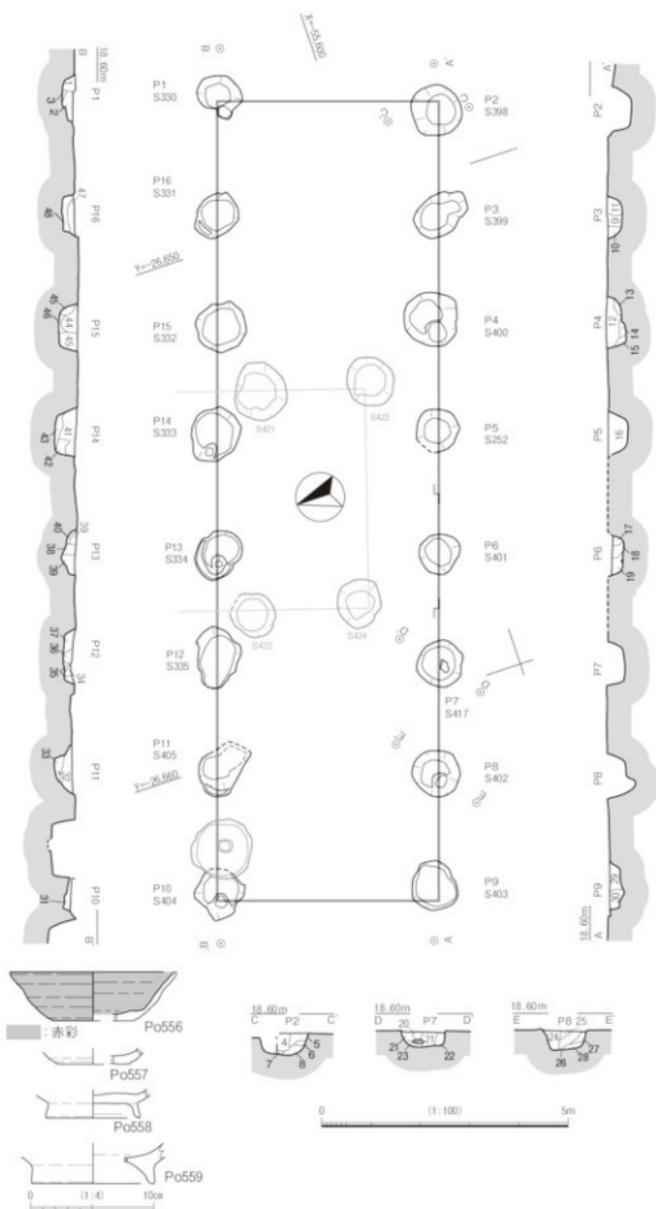


図194 A区 掘立柱建物14 平面・断面・出土遺物

表10 A区 掘立柱建物14 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)合)	24	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)合)
2	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(径=5cm)多合)	25	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=3cm)合)
3	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)多合)	26	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=5cm)多合)
4	10YR2-1黒色シルト	(AT細粒合)	27	10YR2-1黒色シルト	(AT, ローム(径=2cm)少合)
5	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=3cm)多合)	28	ブロック状のロームに10YR2-1黒色シルトが混じる	
6	10YR2-1黒色シルト		29	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)合)
7	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)多合)	30	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=3cm)合)
8	ブロック状のロームに2.5Y3-2黒褐色シルト(径=3cm)、10YR2-1黒色シルトが混じる		31	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)合)
9	10YR2-1黒色シルト	(AT, ロームブロック(径=2cm)合)	32	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=5cm)合)
10	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)合)	33	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)少合)
11	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=7cm)多合)	34	10YR2-1黒色シルト	(AT細粒少合)
12	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cmまで)合)	35	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)合)
13	10YR2-1黒色シルト	(AT, ロームブロック(径=2cm)合)	36	10YR2-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=7cm)多合)
14	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=5cm)合)	37	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=3cm)合)
15	10YR3-1黒褐色シルト	(AT, ローム(径=5cm)合)	38	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=3cm)合)
16	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)多合)	39	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)合)
17	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)合)	40	10YR2-1黒色シルト	(AT細粒少合)
18	10YR3-1黒褐色シルト	(AT細粒少合)	41	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=1cm)合)
19	10YR2-1黒色シルト	(AT, ロームブロック(径=5cm)合)	42	10YR2-1黒色シルト	(AT, ローム(径=7cm)多合)
20	10YR2-1黒色シルト	(AT細粒合)	43	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)合、41、42に比べブロック多)
21	10YR2-1黒色シルト	(AT, 2.5Y3-2黒褐色シルトブロック(径=5cm)多合)	44	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=5cm)合)
22	10YR3-1黒褐色シルト	(ローム, ATブロック(径=7cm)多合)	45	10YR2-1黒色シルト	(2.5Y3-2黒褐色シルト, ATブロック(径=3cm)合)
23	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)多合, ブロック量は他より多い)	46	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(径=3cm)合)
			47	10YR2-1黒色シルト	(2.5Y3-2黒褐色シルト, ATブロック(径=3cm)合)
			48	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(径=5cm)合)

た、P17の柱抜取痕の中から完形の須恵器皿(Po555)が出土しており、建物の廃絶時に伴う祭祀行為の可能性がある。出土した遺物から10世紀代の建物と考える。(田中)

掘立柱建物14(図194)

O5・6で検出した桁行7間、梁行1間の東西棟の建物である。柱穴掘方の中央付近をなるべく通すように建物を想定すると桁行16.33m、梁行4.52mとなる。梁行方向の中央で明確な柱穴を確認できなかったが、ちょうど中間付近にくすんだ土が薄く皿状に堆積していた箇所が存在した。他の建物を見ると、梁行の中央の柱穴が小型で浅くなることが多いことから、この建物でも同様の柱穴があったものの、底面が基盤層にほとんど達しておらず、わずかに痕跡のみが残った可能性がある。建物の主軸方向はN-71°-Wである。

柱穴の平面形は円形または楕円形のものに、不整形なものが混在する。長径は0.88~1.22(平均0.99)m、検出面からの深さが0.24~0.59(平均0.38)mである。明確な柱痕跡が確認できず、建物想定線上で桁行の掘方の芯々間距離を計測すると2.10~2.63(平均2.33)mでばらつきが大きい。

掘方埋土からは土師器が出土した。Po556は底部切り離しが鋭切りで内外面とも赤彩する。Po557・558は底部切り離しが回転糸切りである。

建物の時期は10世紀代で、柱穴が掘立柱建物15の柱穴に壊されていることから、掘立柱建物15に先行する。(田中)

掘立柱建物15(図195・196、PL54)

O6からN8で検出した東西棟の建物である。このうち、桁行の東端の柱穴(P15・17)は他のものよりも浅くなる。また、柱間をみると桁行が東端のみ広がる。これらのことから、身舎5間の建物の東側に妻廂が付く建物と考えた。建物の主軸方向はN-71°-Wである。

規模は身舎が桁行10.92m、梁行4.72mで、廂は2.7mある。建物の柱穴が掘立柱建物14の柱穴を壊すので、掘立柱建物14よりも新しいことが分かる。

柱穴の平面形は円形又は楕円形を呈し、長径は0.88~1.37(平均1.14)m、検出面からの深さが0.22~0.78(平均0.55)mである。ほとんどの柱穴は規模がほぼ同じであるが、身舎東妻柱列中央のP2と廂

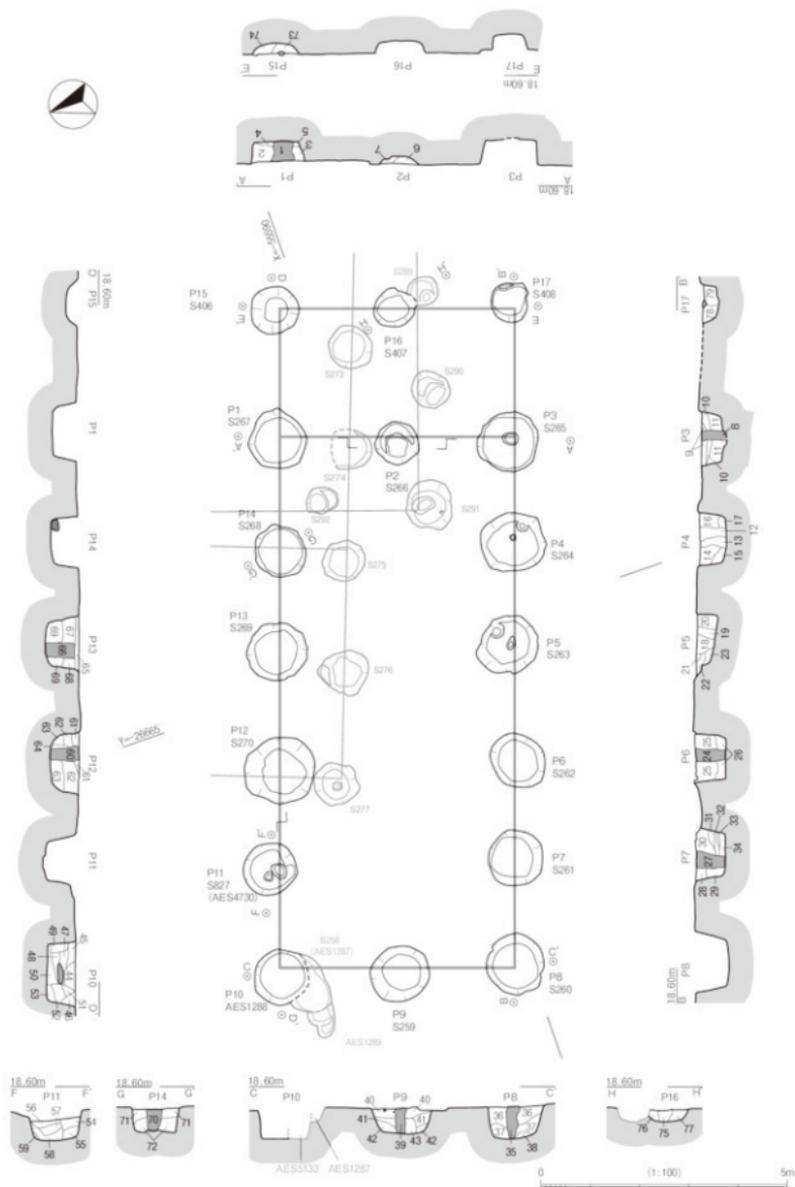


図195 A区 掘立柱建物15 平面・断面

表11 A区 掘立柱建物15 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR2/1黒色シルト	AT細粒・2.5Y3/2黄灰黄色シルトブロック含む	41	10YR2/1黒色シルト	ロームブロック(径-10cm)多量
2	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)含む	42	ブロック状のロームにAT、10YR2/1黒色シルトが混じる	
3	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-1cm)含む	43	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)含む、炭片含む
4	ブロック状のロームにATブロック、10YR2/1黒色シルトが混じる		44	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)多量
5	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(細粒主体)含む	45	5YR2/1黒色シルト	ローム、ATブロック(径-3cm)多量
6	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)含む	46	7.5YR3/1黒褐色シルト	ローム(径-1cm)多量
7	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5cm)含む	47	7.5YR2/1黒色シルト	AT細粒多量
8	10YR2/1黒色シルト	ATブロック多量	48	7.5YR1.7/1黒色シルト	ロームブロック(径-2cm)多量
9	10YR2/1黒色シルト	ATブロック多量	49	7.5YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少量
10	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック多量、炭片含む	50	10YR1.7/1黒色シルト	ロームブロック(径-3cm)多量
11	ブロック状のロームにATブロック、10YR2/1黒色シルトブロックが混じる		51	7.5YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-4cm)、ATブロック(径-2cm)多量
12	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm)多量、炭片を含む	52	ロームと7.5YR3/1黒褐色シルトの混在にATブロック(径-5cm)多量	
13	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(細粒主体)含む	53	2.5Y4/1黄灰黄色シルト	ATブロック(径-2cm)少量
14	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック少量	54	ロームのブロック	
15	10YR2/1黒色シルト	ローム、ATブロック含む	55	7.5YR2/1黒色シルト	ローム、ATブロック(径-5cm)多量
16	10YR2/1黒色シルト	AT細粒多量	56	7.5YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)少量
17	ブロック状のロームにATブロック、10YR2/1黒色シルトが混じる		57	7.5YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)多量
18	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)多量	58	7.5YR2/1黒色シルト	ロームブロック(径-1cm)、ATブロック(径-3cm)多量
19	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-2cm)、2.5Y3/2黒褐色シルトブロック含む	59	ロームと7.5YR2/1黒色シルトの混在	
20	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)、10YR3/1黒褐色シルトブロック含む	60	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm)含む
21	10YR2/1黒色細砂混シルト	ATブロック含む、炭片	61	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)含む
22	ブロック状のロームに10YR2/1黒色シルト、ATブロックが混じる		62	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm)多量
23	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック含む	63	ロームにAT、10YR3/1黒褐色シルトが混じる	
24	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm)少量	64	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm)多量
25	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-6cm)、2.5Y3/2黒褐色シルトブロック含む	65	10YR2/1黒色シルト	炭粒主体
26	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-1cm)少量	66	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)含む、炭片含む
27	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-2cm、細粒主体)含む	67	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-6cm)多量
28	10YR2/1黒色細砂混シルト	ATブロック(径-3cm)含む、炭片含む	68	67に比べ基礎層ブロックが少ない	
29	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm)多量	69	10YR2/1黒色シルト	ローム、ATブロック(径-8cm)多量、ロームブロックが多い
30	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm)多量、29よりブロック多	70	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-10cm)含む、確合
31	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-2cm)含む	71	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-10cm)含む、70より基礎層ブロック多
32	10YR2/1黒色シルト	AT、2.5Y3/2黒褐色シルトブロック(径-6cm)多量	72	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-10cm)多量
33	10YR2/1黒色シルト		73	10Y2/1黒色シルト	AT、2.5Y3/2黒褐色シルトブロック(径-3cm)含む
34	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-6cm)多量	74	10Y3/1黒褐色シルト	AT、2.5Y3/2黒褐色シルトブロック(径-3cm)含む
35	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm、細粒主体)含む	75	10Y2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)含む、炭片含む
36	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-10cm)多量	76	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-2cm)少量
37	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm)含む	77	10Y2/1黒色シルト	AT、2.5Y3/2黒褐色シルトブロック(径-5cm)多量
38	ブロック状のロームにATブロックが混じる		78	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm)含む
39	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)含む	79	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)少量
40	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm)含む			

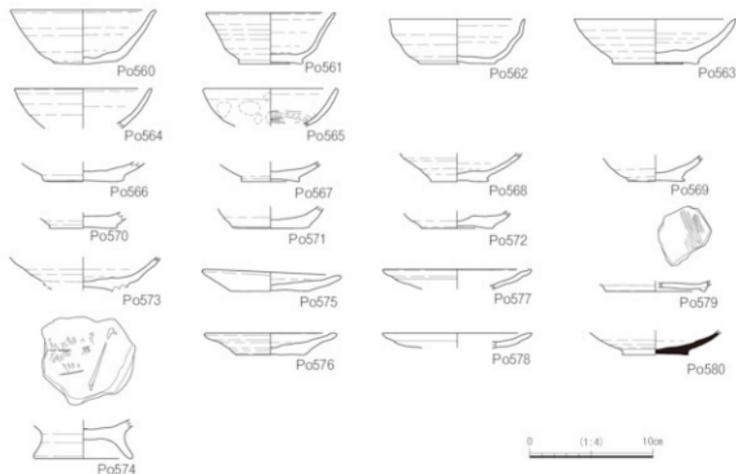
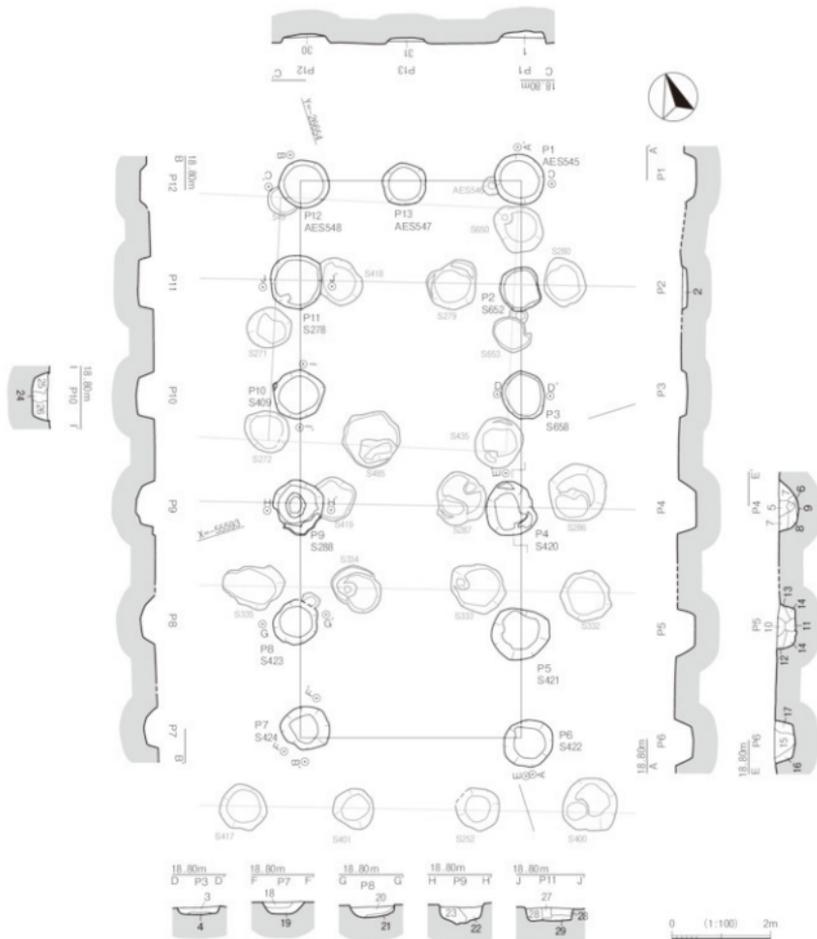


図196 A区 掘立柱建物15 出土遺物



- | | |
|---|---|
| 1 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(~5cm)、ローム細粒多含 | 17 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(~3cm、細粒主体)多含 |
| 2 10YR2/1黒色シルト ローム細粒合 | 18 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(~2cm)合 |
| 3 10YR2/1黒色シルト AT、2.5Y3/2黒褐色シルトブロッカ(~3cm)合 | 19 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~2cm)合 |
| 4 2.5Y2/1黒色シルト ATブロッカ(~2cm)多含 | 20 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~2cm)合 |
| 5 10YR2/1黒色シルト ロームブロッカ(~5cm)合 | 21 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~3cm)合、20よりブロッカ多 |
| 6 10YR2/1黒色シルト 2.5Y3/2黒褐色シルト、ATブロッカ(~3cm)合 | 22 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~3cm)多含 |
| 7 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロッカ(~3cm、細粒主体)多含 | 23 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロッカ(~3cm)合 |
| 8 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロッカ(~7cm)多含 | 24 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(~3cm)合 |
| 9 ローム(ブロッカ状)に10YR2/1黒色シルトが混じる | 25 10Y2/1黒色シルト ATブロッカ(~3cm)合 |
| 10 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~3cm)合 | 26 10Y2/1黒色シルト AT、ロームブロッカ(~5cm)多含 |
| 11 10YR3/1黒褐色シルト ローム、ATブロッカ(~3cm)合 | 27 10YR2/1黒色シルト AT、2.5Y3/2黒褐色シルトブロッカ(~2cm)合 |
| 12 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(~2cm、細粒主体)合 | 28 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~6cm)合 |
| 13 10YR3/1黒褐色シルト ATブロッカ(~3cm、細粒主体)多含 | 29 AT(ブロッカ状)に10YR2/1黒色シルトに混じる |
| 14 10YR2/1黒色シルト 2.5Y3/2黒褐色シルト、ATブロッカ(~3cm)合 | 30 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~10cm)合 |
| 15 10YR2/1黒色シルト ATブロッカ(~3cm)合 | 31 10YR2/2黒褐色シルト ATブロッカ(~10cm)合 |
| 16 10YR2/1黒色シルト AT細粒少含 | |

図197 A区 掘立柱建物16 平面・断面

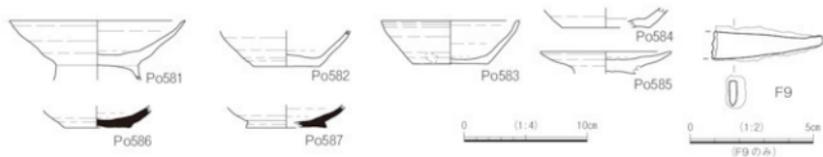


図198 A区 掘立柱建物16 出土遺物

の柱であるP15～17はやや小型で浅い。

掘方平面での検出作業では明瞭ではなかったものの、掘方の堆積状況を観察すると多くに柱の痕跡を確認することができ、径0.2～0.3mの柱が据えられていたことが分かった。P16では柱痕跡の埋土に拳大の礫が含まれており、柱を抜き取った後に埋め戻した可能性がある。身舎の柱の間隔にはばらつきがあり、桁行では2.04～2.30(平均2.19)m、梁行が2.36mである。

掘方埋土は基盤層ブロックを多く含む黒色～黒褐色シルトを基本としており、埋土内からは土師器、須恵器、黒色土器が出土した。土師器環には底部からの立ち上がり丸みを帯びるPo560や体部が外反するPo561に混じって、体部が内湾するPo564・565がある。Po565は内面にハケ調整が見られ、外面に指オサエが残る。土師器皿には回転台を用いたものに混じって手づくね成形のPo577・578が出土した。Po577は口縁端部を水平に近い形につくり出す。高台環Po574の内面には木の葉と思われる圧痕がある。黒色土器Po579は平底の底部に低い高台が貼り付けられる。Po580は平高台の腕の底部で、播磨からの搬入品と思われる。

出土遺物と建物の前後関係から、建物の時期は10世紀代でも新しい段階と考えた。(田中)

掘立柱建物16(図197・198、PL.54)

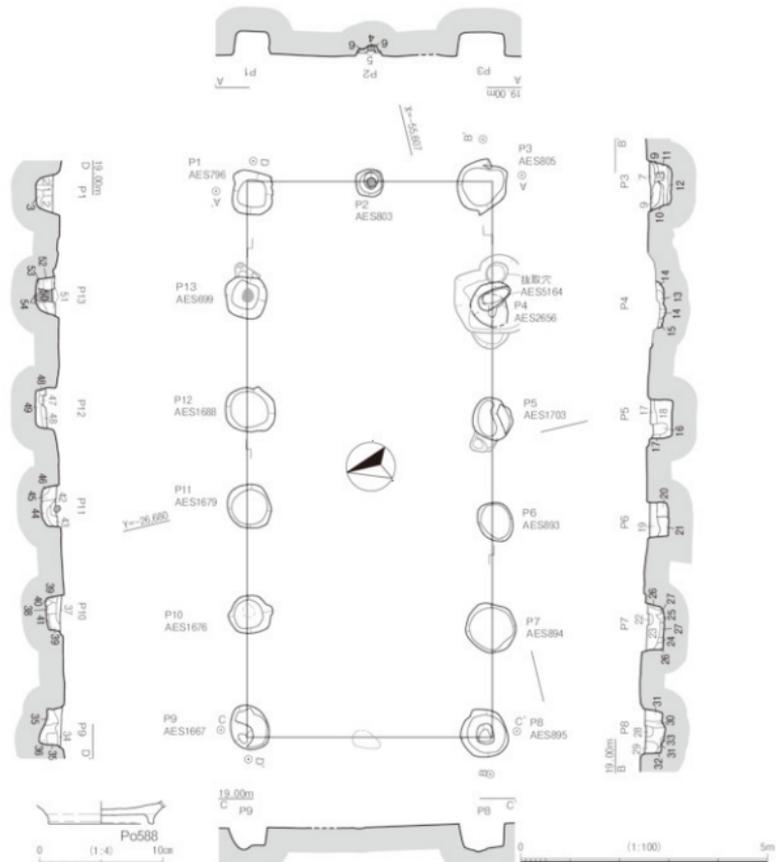
N6、O6で検出した桁行5間、梁行2間の南北棟の建物である。南側柱列の中央では柱穴を確認できなかったが、南側に同規模の柱穴掘方が確認できなかったことから、南端を確定した。規模は桁行11.37m、梁行4.49mと推定し、建物の主軸方向はN-18°Eである。この建物の柱穴掘方は掘立柱建物12、13の柱穴を壊しており、これらの建物よりも後に建てられたと考える。

柱穴掘方の平面形は楕円形を呈し、長径0.85～1.06(平均1.02)m、検出面からの深さが0.10～0.43(平均0.29)mある。掘方の底面標高をみると、桁行の北端(P1、P12)は南端(P6、P7)に比べてやや低く(東側柱列0.08m、西側柱列0.15m)、両側とも北側の掘方ほど底面標高が低くなる傾向があった。そのため、建物を構築する段階で地面が南から北へ下る傾斜があり、掘方は構築面からほぼ同じ深さになるように掘削されたと考えた。

平面検出では柱の明確な痕跡は確認できなかったが、P10、11の堆積状況を精査すると柱痕跡と思われる堆積(24、27層)があり、径0.2m前後の柱が据えられたと考えられる。建物想定線での掘方の芯々間距離は桁行で2.09～2.56(平均2.27)mでばらつきがあり、梁行は北辺で東側が広がる(東から2.39m、2.10m)。なお、P10とP11の柱痕跡の間隔は2.2m程度ある。

柱穴掘方埋土からは土師器、須恵器が出土した。土師器高台環Po581は環部の器高が低く底径に対して口径が大きい。土師器環Po583は体部がゆるく屈曲する。須恵器平底の環の他に平高台の底部が出土した。

出土遺物や建物の前後関係から、建物の時期は10世紀代でもやや新しくなると考える(田中)



- | | | |
|----|--------------------------------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR2-1黒色シルト | ATブロック(厚~2cm)合 |
| 2 | 10YR2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~5cm)合 |
| 3 | 10YR3-1黒褐色シルト | ATブロック(厚~8cm)多合 |
| 4 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)少量 |
| 5 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~3cm)少合 |
| 6 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATがブロック(厚~5cm)に混じる |
| 7 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~3cm)合 |
| 8 | 2.5Y2-1黒色シルト | 7層に比べてブロック多 |
| 9 | 10YR2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~7cm)多合 |
| 10 | 10YR2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)多合 |
| 11 | ロームに10YR3-1黒褐色シルトがブロック状(厚~3cm)に混じる | |
| 12 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~5cm)合 |
| 13 | 10YR2-1黒色シルト | ロームブロック、ATブロック(厚~5cm)合 |
| 14 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~2cm)合 |
| 15 | 10YR3-1黒褐色シルト | ロームブロック多合 |
| 16 | 10YR2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~5cm)合 |
| 17 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~10cm)合 |
| 18 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)合 |
| 19 | 10YR2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~5cm)合 |
| 20 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)合 |
| 21 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック、ロームブロック(厚~5cm)合 |
| 22 | 10YR2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~2cm)合 |
| 23 | 2.5YR2-1黒色シルト | ローム、ATブロック(厚~5cm)多合 |
| 24 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT細粒合 |
| 25 | 2.5Y2-1黒色シルト | |
| 26 | 10YR3-1黒褐色シルト | AT細粒合 |
| 27 | 2.5Y2-1黒色シルト | 25.2より6cmが細かく均一 |
| 28 | 10YR2-1黒色シルト | ロームブロック(厚~5cm)合 |
| 29 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)合 |
| 30 | 10YR2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm、細粒主体)合 |
| 31 | 10YR3-1黒褐色シルト | ATブロック(厚~5cm)、ロームブロック(厚~3cm)多合 |
| 32 | ブロック状のロームにAT、10YR3-1黒褐色シルトが混じる | |
| 33 | 10YR3-1黒褐色シルト | ATブロック(厚~5cm)合 |
| 34 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT(厚~3cm)合 |
| 35 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT、ローム(厚~5cm)合 |
| 36 | ブロック状のロームに10YR3-1黒褐色シルトが混じる | |
| 37 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT(厚~7cm)合 |
| 38 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT、2.5Y3-2黒褐色シルト(厚~7cm)合 |
| 39 | 10YR2-1黒色シルト | AT、2.5Y3-2黒褐色シルト(厚~5cm)多合 |
| 40 | 10YR3-1黒褐色シルト | ATブロック(厚~2cm)少合 |
| 41 | 10YR2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)少合、41.2号ブロック少 |
| 42 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT細粒合 |
| 43 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~6cm)多合 |
| 44 | 10YR2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)少合 |
| 45 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~5cm)多合 |
| 46 | 10YR2-1黒色シルト | ATブロック(厚~3cm)少合、41.2号ブロック少 |
| 47 | 10YR2-1黒色シルト | AT、ローム(厚~2cm)合 |
| 48 | 2.5Y2-1黒色シルト | AT、ローム(厚~7cm)合 |
| 49 | ATと10YR2-1黒褐色シルトがブロック状(厚~5cm)に混じる | |
| 50 | 2.5Y2-1黒色シルト | ATブロック(厚~2cm)合 |
| 51 | 10Y2-1黒色シルト | AT、ロームブロック(厚~5cm)合 |
| 52 | 10YR3-1黒褐色シルト | ATブロック(厚~5cm)合 |
| 53 | 10YR2-1黒色シルト | ATブロック(厚~5cm)多合 |
| 54 | ブロック状(厚~8cm)のATにロームに10Y3-1黒褐色シルトが混じる | |

図199 A区 掘立柱建物17

掘立柱建物17(図199、PL.55)

P 8・9で検出した桁行5間、梁行2間の東西棟の建物である。西側柱列の中央で明確な柱穴を確認できなかったが、中間付近に暗褐色シルトが皿状に薄く堆積していた箇所があり、これが柱穴の残骸の可能性ある。規模は桁行11.26m、梁行4.88mと推定し、建物の主軸方向はN-77°-Wである。

柱穴の平面形は楕円形が多く、不整形が混在する。長径は0.61~1.07(平均0.93)m、検出面からの深さは0.17~0.57(平均0.42)mで、東側柱列中央のP2は他に比べて小型である。また、検出面からの深さにばらつきがあるが、これは検出面が南西から北西へ傾斜しているためで、底面の標高値をみると17.9mの前後0.1mではば収まる。

遺構検出後、柱穴全体を数cm掘り下げて精査し、その後柱穴断面を観察したところ、P2、11で柱痕跡が確認でき、直径0.2~0.3mの柱が据えられていたことが想定できた。また、P4を壊す南北に長い穴AES5164があり、柱抜取坑と判断した。桁行の柱穴掘方の芯々間距離は1.99~2.47(平均2.25)mでばらつきが大きい。

柱穴掘方からは須臾器と土師器が出土した。図化した土師器高台坏の他に底部外面を篋切りした坏の小片が出土したが、底部を回転糸切りした土師器は確認できていない。

出土遺物が乏しく、他の建物の前後関係が確認できないが、他の建物と一連であることを考慮して10世紀代の建物と考えておきたい。(田中)

掘立柱建物18(図200、PL.55)

Q 8・9、P 8・9で検出した桁行5間、梁行2間の東西棟の建物である。規模は桁行11.90m、梁行4.05mと推定し、建物の主軸方向はN-75°-Wである。掘立柱建物17とはほぼ平行しており、建物の間にほとんど空間がないことから、この2棟で建て替えが行われたと判断した。

柱穴の平面形は楕円形と不整形が混在する。規模は長径が0.62~1.17(平均0.88)m、検出面からの深さが0.15~0.61(平均0.38)mで、西側柱列中央のP9は他のものに比べてかなり浅い。

遺構検出後、柱穴全体を数cm掘り下げて精査し、その後柱穴断面を観察したところ、P1、11、13で柱痕跡と思われる堆積が確認でき、直径0.2~0.3mの柱が据えられていたと考えられる。桁行の柱穴掘方の芯々間距離は1.96~2.70(平均2.38)mでばらつきがあるが、北側柱列の西半分では2.4m前後で間隔が揃っている箇所も見受けられる。

柱穴掘方内からは土師器や須臾器が出土した。土師器坏Po589・590は体部の外傾の度合いが強い。

出土した遺物から掘立柱建物17よりも後に建てられたと考え、建物の時期は10世紀中頃としておきたい。(田中)

掘立柱建物19(図201、PL.55)

Q 6・7で検出した梁行1間の東西棟の建物である。東側は近世以降の土地改変によって失われており、桁行2間分が残存する。規模は桁行4.8m以上、梁行4.6mで、建物の主軸方向はN-70°-Wである。なお、建物南西のP3が掘立柱建物20の柱穴に壊されており、掘立柱建物20よりも前に建てられたことが分かる。

柱穴の平面形はややいびつな楕円形で、長径0.82~1.13(平均0.95)m、検出面からの深さ0.26~0.44(平均0.34)mである。遺構検出後、柱穴全体を数cm掘り下げたところ、北辺のP4とP5で柱の痕跡と思われるものが確認でき、P2でも柱痕跡の可能性のある堆積がみられた。検出した形状から直径0.15~0.3mの柱が据えられていたと考えられる。P6では掘方の中央に拳大程度の礫が数個入った

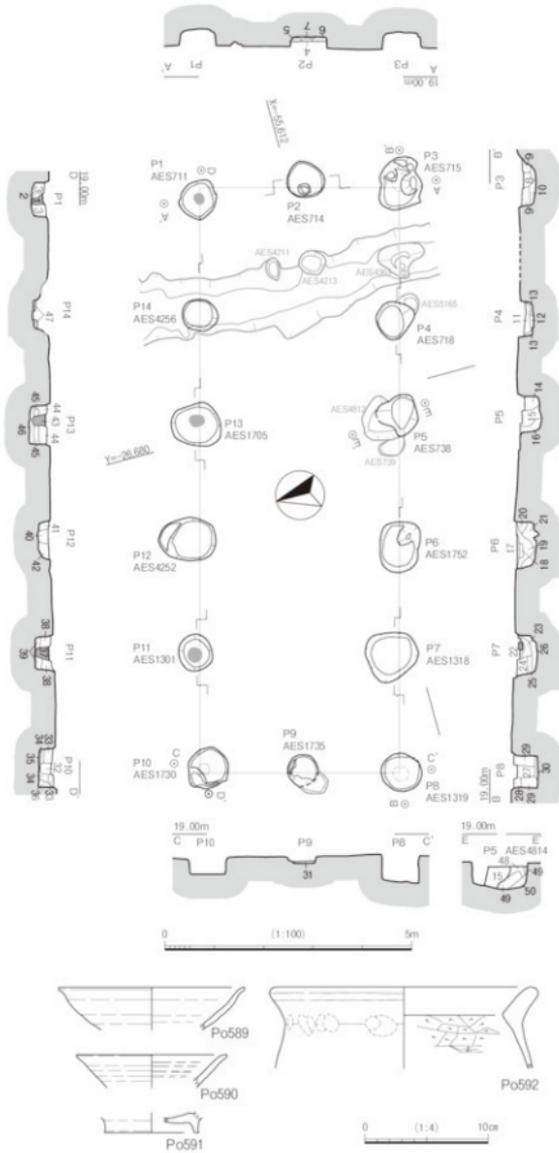
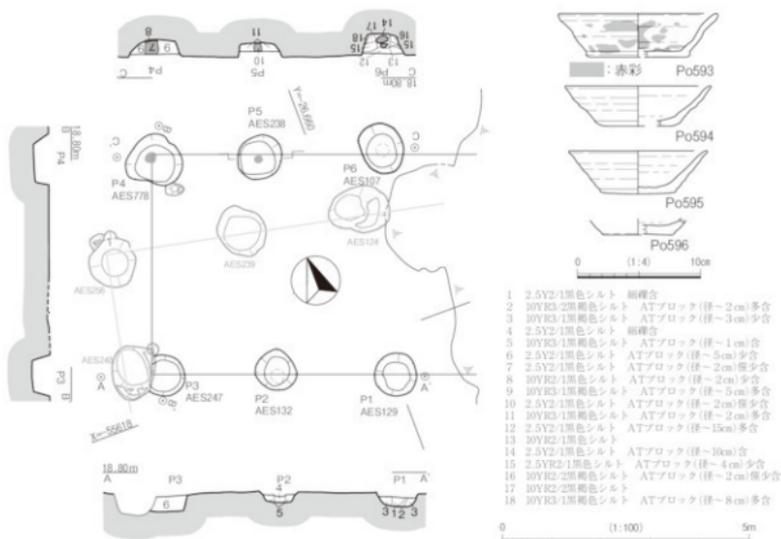


図200 A区 据立柱建物18 平面・断面・出土遺物

表12 A区 掘立柱建物18 土層注記

番号	土色・土質	備考
1	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)多量
2	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=10cm)少量
3	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径=5cm)多量
4	2.5YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=4cm)少量
5	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)多量
6	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm, 縦柱主体)少量
7	ブロック状のAT1.2.5Y2-1黒色シルトブロック(径=3cm)が少量混じる	
8	2.5Y2-1黒色シルト	AT縦柱
9	10YR2-1黒色シルト	AT縦柱少量
10	2.5Y2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=3cm)多量
11	AT, ロームと10YR2-1黒色シルトの混生	
12	10YR2-1黒色シルト	AT縦柱
13	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=10)
14	10YR1.7-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm, 縦柱主体)少量
15	10Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)少量
16	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=4cm)少量
17	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=10cm)少量
18	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=5cm)少量, 16.2リブブロック多量
19	2.5Y2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=5cm)多量, 嵌合
20	10Y2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=1cm)少量
21	10YR2-1黒色シルト	ローム, ATブロック(径=5cm, 縦柱主体)少量
22	10YR2-1黒色シルト	AT, ローム(径=5cm)少量
23	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=4cm)多量
24	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=10cm)少量, 22.1リブブロック多量

番号	土色・土質	備考
25	10Y3-1黒褐色シルト	ATブロック(径=4cm)多量
26	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=8cm, 縦柱主体)少量
27	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)多量
28	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)多量
29	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)少量
30	10YR2-1黒色シルト	ロームブロック(径=5cm)少量
31	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)少量
32	10YR2-1黒色シルト	AT(径=5cm)少量
33	2.5Y2-1黒色シルト	AT, ローム(径=4cm)少量
34	10YR2-1黒色シルト	AT(径=3cm)少量
35	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(縦柱主体)少量
36	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(縦柱主体)少量
37	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)少量
38	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(縦柱主体)少量
39	2.5Y2-1黒色シルト	ATブロック(径=4cm)多量
40	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)少量
41	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)少量, 40よりブロック少量
42	2.5Y2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=5cm)少量
43	2.5YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)少量
44	2.5YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=8cm)少量
45	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)少量
46	ATと10YR3-1黒褐色シルトがブロック状(径=5cm)に混じる	
47	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径=2cm)少量
48	10YR3-1黒褐色シルト	ローム, ATブロック(径=1cm)少量
49	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=10cm)少量
50	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径=1cm)少量



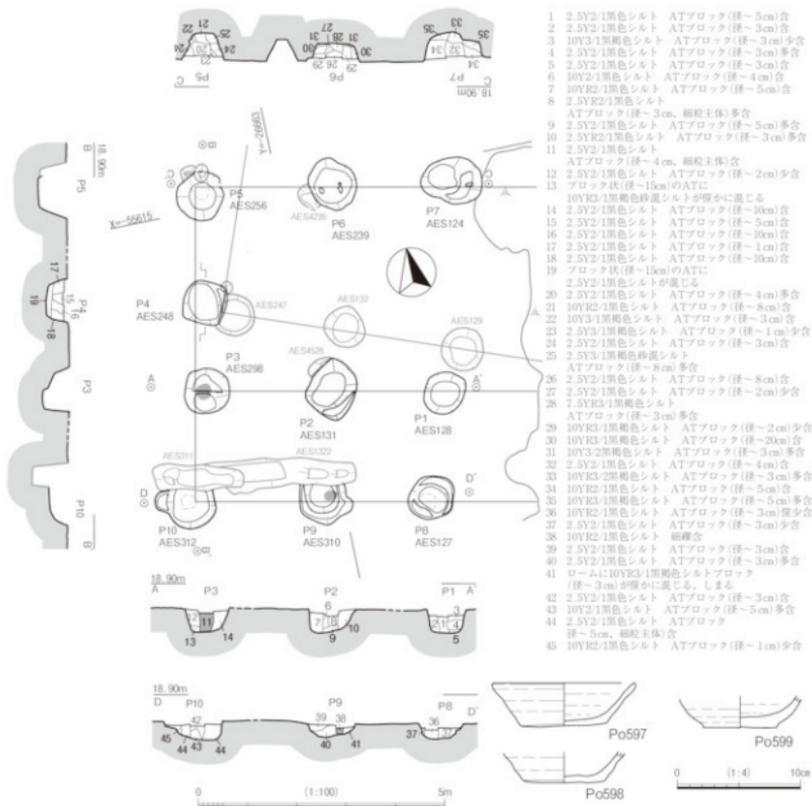


図202 A区 掘立柱建物20 平面・断面・出土遺物

掘立柱建物20(図202、PL55)

Q6・7、R6・7で検出した建物で、東側は近世以降の削平によって失われている。桁行2間以上、梁行2間の東西棟で、南側に廂が付く。規模は身舎で桁行5.00m以上、梁行4.17mで、廂の出は2.26mある。廂の柱穴は身舎の柱穴より少し西にずれる。建物の軸方向はN-79°-Wである。

柱穴の平面形は不整形が多く、楕円形が混在する。柱穴の規模は長径0.88~1.27(平均1.05)m、検出面からの深さは0.35~0.63(平均0.47)mで、廂の柱穴は身舎のものより浅い。検出後に柱穴全体を数cm掘り下げて精査し、その後掘方の断面を観察すると、P3、9で柱の痕跡を確認できたことから、身舎で径0.3m前後、廂で径0.2m前後の柱が立てられていたと考えた。柱痕跡が確認できない柱穴で想定線上の中央で計測した間隔は、桁行では西側(2.8m前後)が東側(2.00~2.40m)に比べて広く、身舎の梁行は北側(2.40m)が南側(1.77m)より広がる。

柱穴掘方埋土からは土師器、須恵器が出土した。Po597・598は底部切り離しが鋭切りで、体部は直

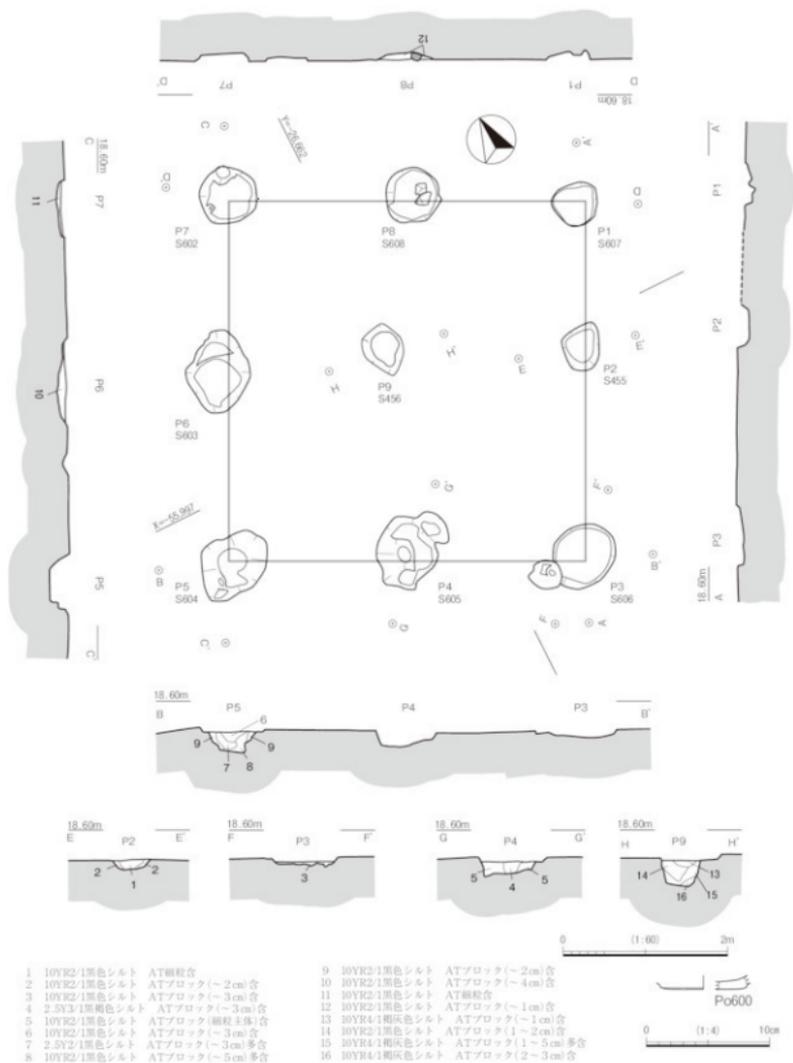


図203 A区 掘立柱建物21 平面・断面・出土遺物

線的で外傾する。一方、Po599は底部切り離しが回転糸切りで、体部は内湾する。

出土した土器から10世紀代でも新しい段階の建物と考える。(田中)

その他の掘立柱建物

掘立柱建物21(図203)

O7で検出した桁行、梁行はともに2間で総柱建物である。規模は一辺4.32mの正方形で、建物の主軸方向はN-26°Eである。

柱穴の平面形は不整形のものが多く、規模は長径が0.55～1.02(平均0.79)m、検出面からの深さが0.07～0.37(平均0.21)mで、全体に浅い。土層の観察をしたが、ほとんどの柱穴に柱の痕跡が見られず、P4で径0.2mの柱の痕跡の可能性のある堆積が確認できたのみである。

掘方埋土からは土師器の小片が出土しており、回転糸切りの底部片が含まれることから平安時代の建物と考える。(田中)

掘立柱建物22(図204)

M7・8、N7・8に位置する、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行6.76m、梁行4.45mと推定し、建物の主軸方向はN-16°Eである。

柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は最大径が0.52～0.93(平均0.75)m、深さは0.14～0.35(平均0.24)mある。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。柱痕跡は平面観察からP1、6、7で確認でき、0.2～0.3mの柱が掘えられたと考える。柱穴の芯々間距離は桁行で2.08～2.44(平均2.25m)、梁行で2.15～2.30m(平均2.22m)である。

埋土からは底部切り離しが回転糸切りの土師器が出土していることから、10世紀代の建物と考える。

(岡田)

掘立柱建物23(図205)

L7・8、M7・8に位置する、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行6.16m、梁行3.84mで、建物の主軸方向はN-17°Eである。

柱穴の平面形はほぼ円形または隅丸方形を呈する。各柱穴の規模は、長径が0.44～0.78(平均0.64)m、深さは0.11～0.48(平均0.40)mある。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴の中心間を結んだ柱間間隔は、桁行で1.74～2.24(平均2.02)m、梁行で1.80～1.96(平均1.90)mである。

時期を決定する遺物は出土していないが、建物の規模や方位が掘立柱建物22と類似することから平安時代の建物と考えておきたい。(岡田、田中)

掘立柱建物24(図206)

L9、M9に位置する、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行4.68m、梁行3.16mで、建物の主軸方向はN-15°Eである。梁方向の南側柱筋(P4～6)は掘立柱建物25の梁方向の北側柱筋を壊しており、本建物が掘立柱建物25より後に築かれたと考える。

柱穴の平面形は円形または楕円形を呈しており、規模は、円形のものの直径が0.36～0.58(平均0.49)m、楕円形のP2、4の最大径がそれぞれ0.62mと0.70mである。深さは0.20～0.40(平均0.32)mである。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。段下げ状況や埋土観察から、P8で柱痕跡を、P3、6で柱痕跡の可能性のある堆積を確認

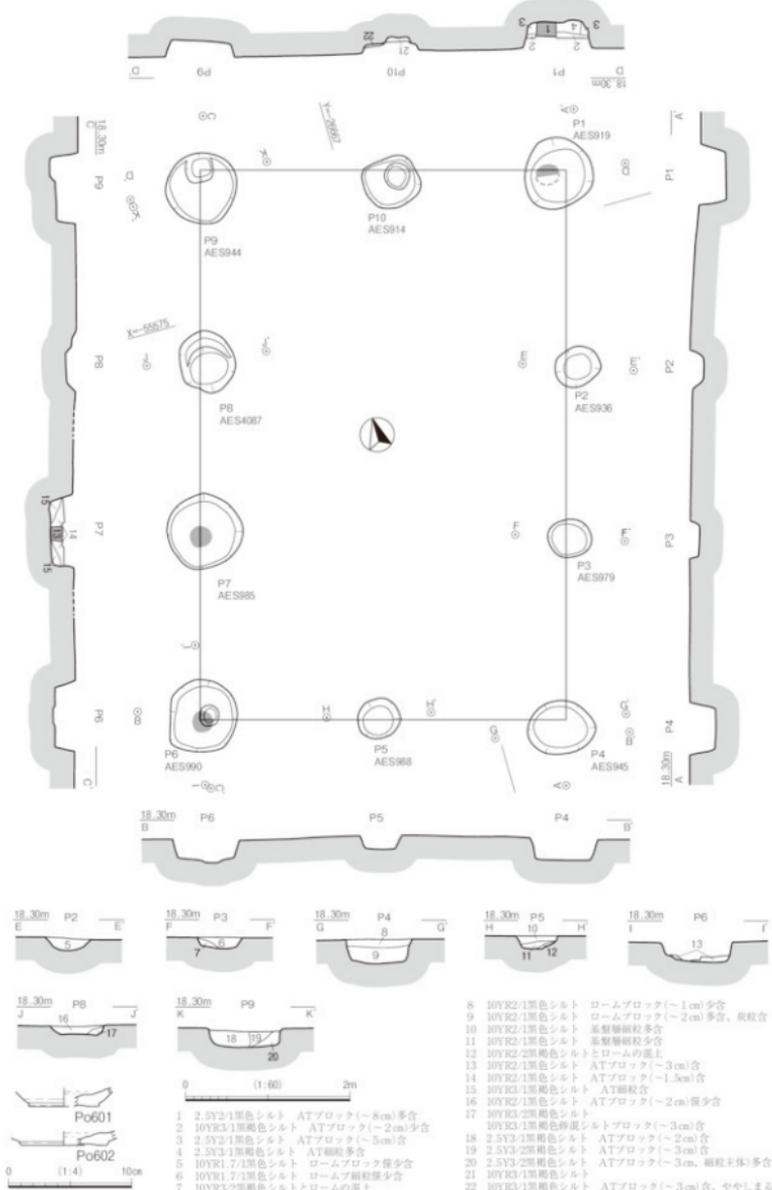
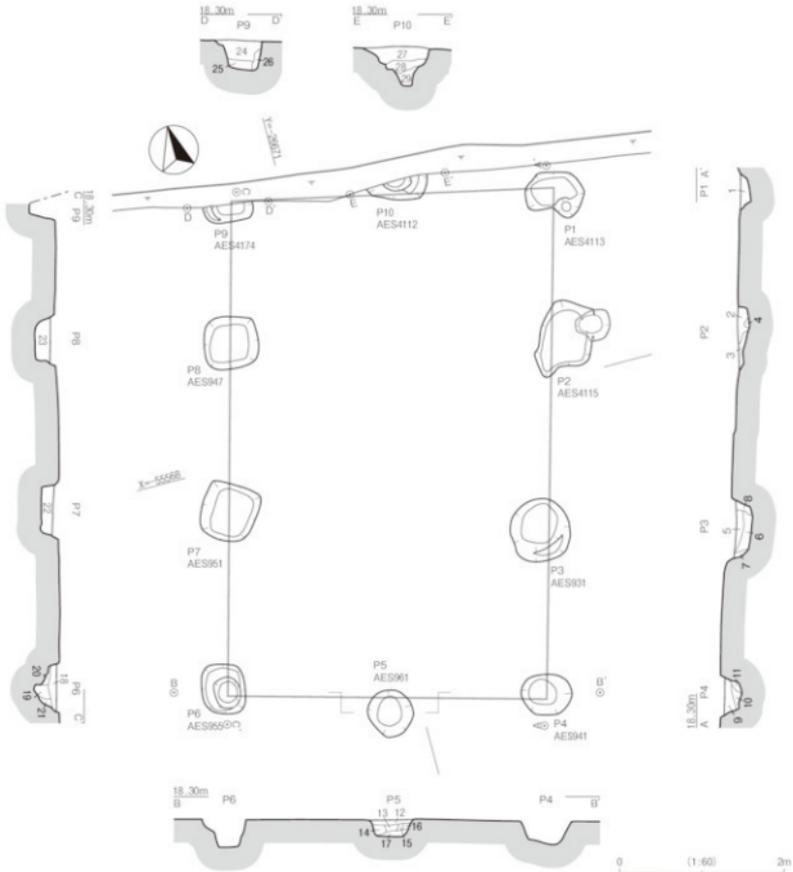


図204 A区 掘立柱建物22 平面・断面・出土遺物



- | | | |
|-----------------------|-------------------|----------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト | 16 10YR2/1黒色シルト | ATブロック(～2cm)少含 |
| 2 10YR2/1黒色シルト | 17 10YR3/1黒褐色シルト | ATブロック(～5cm)多含 |
| 3 10YR2/2黒褐色シルトとATの混土 | 18 10YR1/7/1黒色シルト | ATブロック(～2cm)少含 |
| 4 10YR3/1黒褐色シルトとATの混土 | 19 10YR2/1黒色シルト | ATブロック(～1cm)多含 |
| 5 10YR2/1黒色シルト | 20 10YR2/1黒色シルト | AT細粒多含 |
| 6 10YR3/1黒褐色シルト | 21 10YR3/1黒褐色シルト | AT細粒多含 |
| 7 10YR2/1黒色シルト | 22 10YR2/1黒色シルト | ATブロック(～1cm)少含 |
| 8 10YR2/2黒褐色シルト | 23 10YR2/1黒色シルト | ATブロック(～2cm)少含 |
| 9 10YR1/7/1黒色シルト | 24 10YR2/1黒色シルト | AT細粒少含、ややゆるい |
| 10 10YR2/1黒色シルト | 25 10YR1/7/1黒色シルト | AT細粒多含、ややゆるい |
| 11 10YR4/3褐色シルトとATの混土 | 26 10YR1/7/1黒色シルト | AT細粒少含 |
| 12 10YR1/7/1黒色シルト | 27 10YR2/1黒色シルト | AT細粒多含 |
| 13 10YR2/1黒色シルト | 28 10YR1/7/1黒色シルト | ATブロック(～1cm)少含 |
| 14 10YR3/1黒褐色シルト | 29 10YR3/1黒褐色シルト | AT細粒多含 |
| 15 10YR2/1黒色シルト | | |

図205 A区 掘立柱建物23 平面・断面

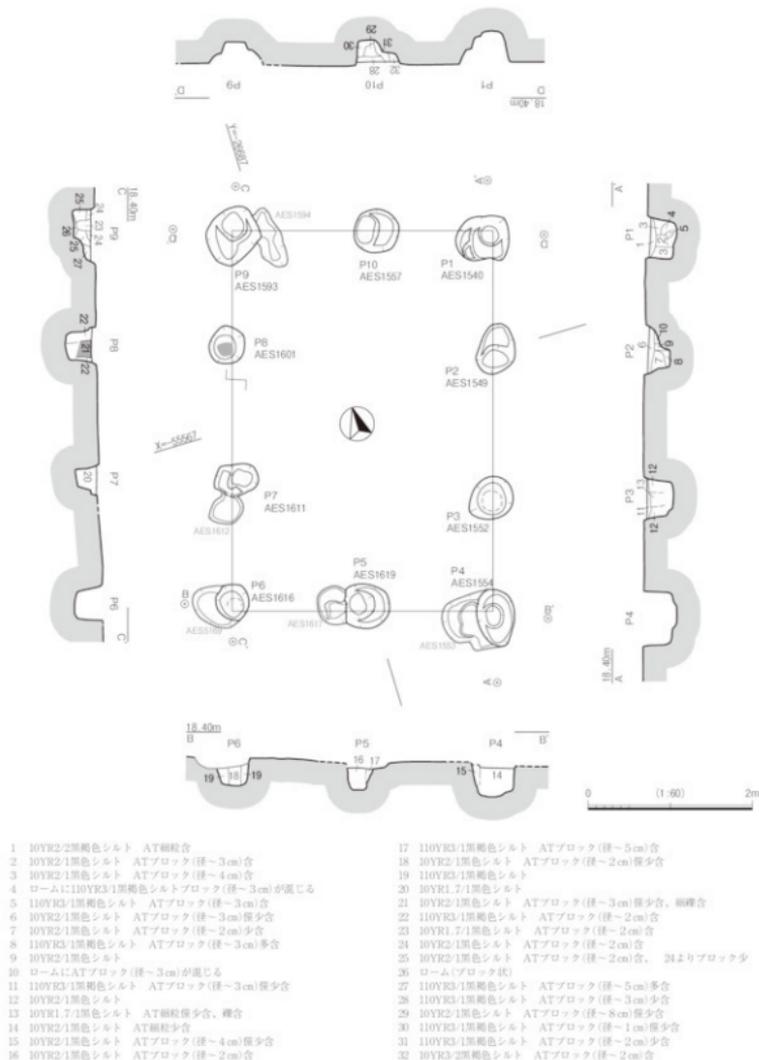


図206 A区 掘立柱建物24 平面・断面

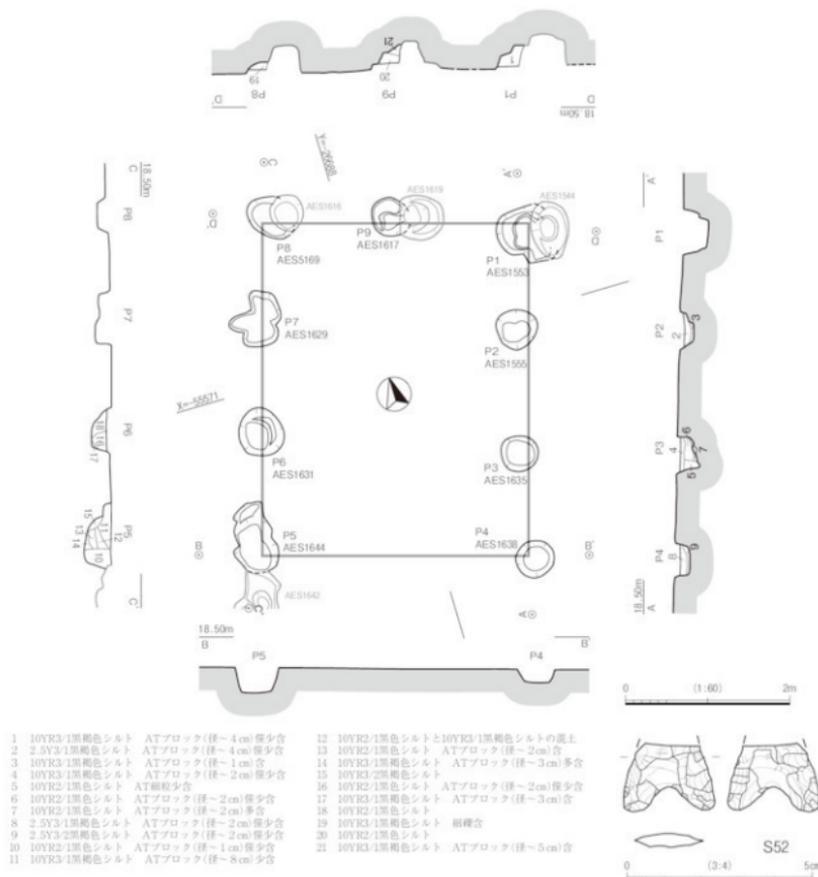


図207 A区 掘立柱建物25 平面・断面・出土遺物

したことから、柱の直径は0.10~0.20m程度と考える。

柱痕跡および柱穴の中心間を結んだ柱間隔は、桁行で1.40~1.74(平均1.55)m、梁行で1.46~1.70(平均1.57)mとばらつきがある。

柱穴掘方から時期を判断しうる遺物は出土しなかったが、規模や方位から奈良時代の建物と考えておきたい。(岡田)

掘立柱建物25(図207、PL56)

L9、M9に位置する、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行4.12m、梁行3.24mで、建物の主軸方向はN-18°Eである。

梁方向の北側柱筋(P1、8、9)は、掘立柱建物24の梁方向の南側柱筋によって壊されることから、本建物は掘立柱建物24に先行すると考える。ただし、P9は南側柱筋に対応する柱穴が検出できない

ため、本建物の柱穴ではない可能性がある。

柱穴の平面形は円形を呈するが、桁方向の西側柱筋のP5、7は攪乱または他遺構に壊されるため不整形を呈する。円形をとどめる柱穴の規模をみると、直径は0.46～0.60(平均0.52)mある。全体の柱穴の深さは0.16～0.33(平均0.23)mある。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴の中心間を結んだ柱間隔は桁行で1.24～1.50(平均1.36)mでばらつきがみられる。

柱穴掘方埋土からは土師器、須恵器が出土したが、小片のため図化に耐えるものがない。このほか、建物の時期とは異なるがP5から石蕨が1点出土した。S52はサマカイト製の石蕨で、全体を丁寧に押圧して仕上げている。上半の欠損は比較的新しい。

規模や方位から建物の時期は奈良時代と考える。(岡田)

掘立柱建物26(図208、PL56)

L9・10、M9・10に位置する、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行4.08m、梁行2.90mで、建物の主軸方向はN-12°-Eである。

梁方向の南側柱列の柱穴のP5は柱列の中央よりやや東に寄る。

柱穴の平面形は基本的に円形を呈するが、西側柱列では、攪乱または他遺構に壊されるため、P6～8は不整形または楕円形を呈する。これらとP5を除く柱穴の直径は0.42～0.58(平均0.50)mで、検出面からの深さは0.22～0.42(平均0.33)mある。柱穴の中心間を結んだ柱間隔は、桁行で1.06～1.62(平均1.36)mである。

柱穴掘方の埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。

掘方の埋土からは土師器、須恵器が出土したが、小片のため図化に耐えるものがない。規模や方位から建物の時期は奈良時代と考える。(岡田)

掘立柱建物27(図209)

L10に位置する、桁行2間以上、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行4.70m以上、梁行3.06mで、建物の主軸方向はN-18°-Eである。

柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は直径が0.53～0.72(平均0.68)m、深さは0.14～0.34(平均0.21)mである。

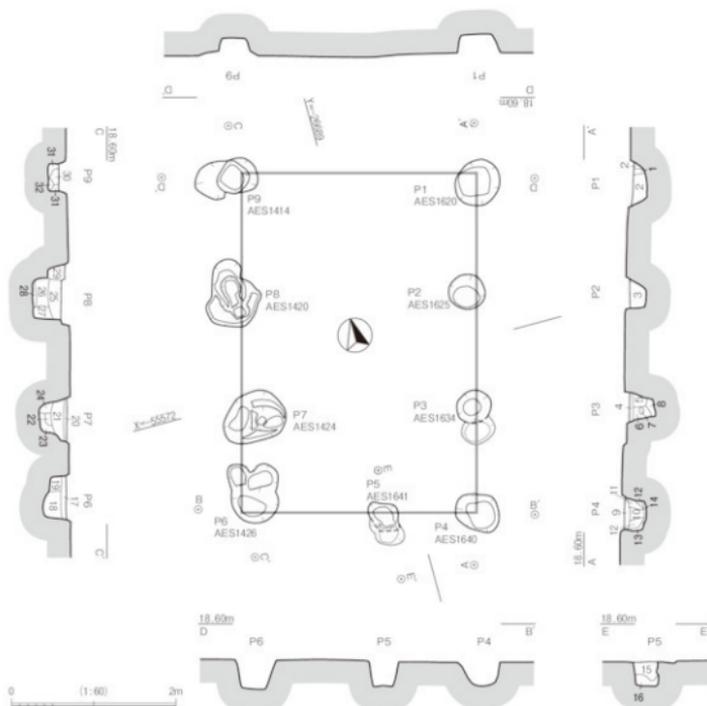
柱穴埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。埋土観察でP1、7で柱痕跡と思われる堆積が確認でき、直径は0.20～0.25m程度の柱が立てられたと考えた。柱痕および柱穴の中心間の間隔は、桁行で1.96～2.66(平均2.33)m、梁行で1.70～1.94(平均1.82)mとばらつきがある。

柱穴掘方埋土からは土師器、須恵器が出土しており、土師器を1点図化した。Po603は内外面ともミガキ調整で赤彩を施す。

出土遺物や建物の規模、方位から奈良時代の建物と考える。(岡田)

掘立柱建物28(図210・211、PL56)

L10、M10に位置する、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行6.22m、梁行4.16mで、建物の主軸方向はN-14°-Eである。



- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1 10YK3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5cm)極少含 | 18 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-5cm)含 |
| 2 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-2cm)含 | 19 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-2cm)極少含 |
| 3 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-1cm)極少含 | 20 10YK3/1黒褐色シルト |
| 4 10YK3/1黒褐色シルト | 21 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-1cm)極少含 |
| 5 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-3cm)極少含 | 22 10YK3/1黒褐色シルト ATブロック(径-3cm)少含 |
| 6 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-1cm)極少含 | 23 10YR2/1黒色シルトと10YK3/1黒褐色シルトの混土 |
| 7 10YK3/1黒褐色シルトとATブロック状(径-3cm)に混じる | 24 ATブロック(径-4cm)少含 |
| 8 10YK3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5cm)多含 | 25 10YK3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5cm)少含 |
| 9 10YK3/1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少含 | 26 10YR2/1黒色シルト AT(径-2cm)極少含 |
| 10 10YR2/1黒色シルトと10YK3/1黒褐色シルトの混土
ATブロック(径-2cm)少含 | 27 10YK3/1黒褐色シルトとATブロック状(径-5cm)に混じる |
| 11 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-1cm)極少含 | 28 10YK3/1黒褐色シルト |
| 12 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-2cm)少含 | 29 10YR2/1黒色シルト AT顆粒少含 |
| 13 10YR2/1黒色シルト | 30 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-2cm)少含 |
| 14 ロームと10YK3/1黒褐色シルトがブロック状(径-3cm)に混じる | 31 10YR2/1黒色シルト |
| 15 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-2cm)含 | 32 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-5cm)多含 |
| 16 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-5cm)含 | |
| 17 10YK3/1黒褐色シルト | |

図208 A区 掘立柱建物26 平面・断面

桁方向の東側柱列では柱穴の切り合い関係と埋土観察から、南から北へと柱を据え替えたと考える。一方、西側柱列では北から2番目の柱穴であるP7とP17において少し位置を変えた形で柱穴の切り合い関係がみられたのみで、他の柱穴ではほぼ同位置で柱の建て替えであったと考える。

柱穴掘方の平面形は隅丸方形を呈するが、建て替えや他の遺構と切り合い関係にあるため、不整形となるものがほとんどである。建物の古段階(南側の柱穴)について、一部のみでも形状が把握できる柱穴の規模をみると、長さが0.28～0.47(平均0.39)mである。深さはP15、19が0.68mと0.57mでやや深く、その他の柱穴は0.30～0.50(平均0.39)mである。

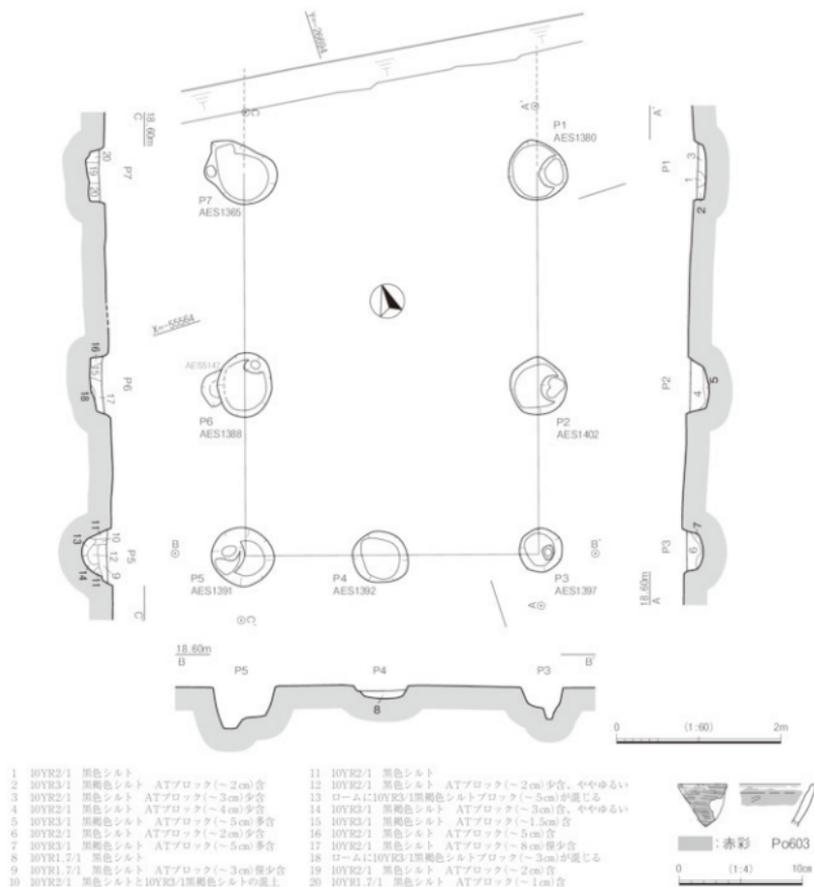


図209 A区 掘立柱建物27 平面・断面・出土遺物

埋土は、旧地表土由来の黒色～黒褐色シルト主体で、基盤層由来のブロックが混じる。埋土観察から柱痕跡が明瞭にわかるものはなかった。P9、12、13、14では礫を検出し、根石などの可能性があるが、いずれも原位置から動いていると考える。

新段階の柱穴について、そのほぼ中心を結んだ柱間隔は、桁行で1.80～2.32(平均2.09)mとばらつきがあり、梁行で1.90～2.18(平均2.02)mある。

埋土中からは土師器(赤色塗彩されたものを含む)、須恵器が出土し、3点図化した。これらの出土遺物の時期は7世紀後半～8世紀前半頃のものであるが、建物の規模では他の奈良時代の建物よりも大きく、平安時代の建物に近い。そのため、建物の時期は平安時代としておきたい。(岡田、田中)

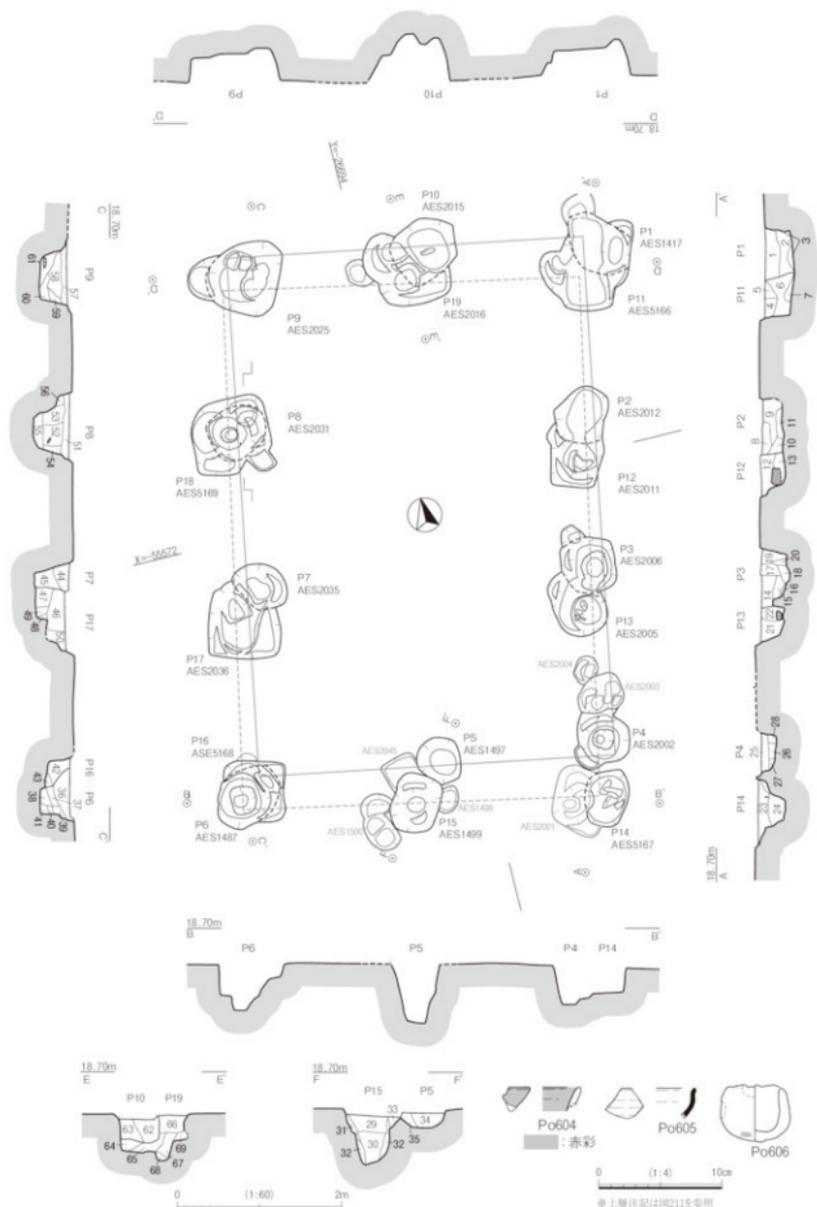
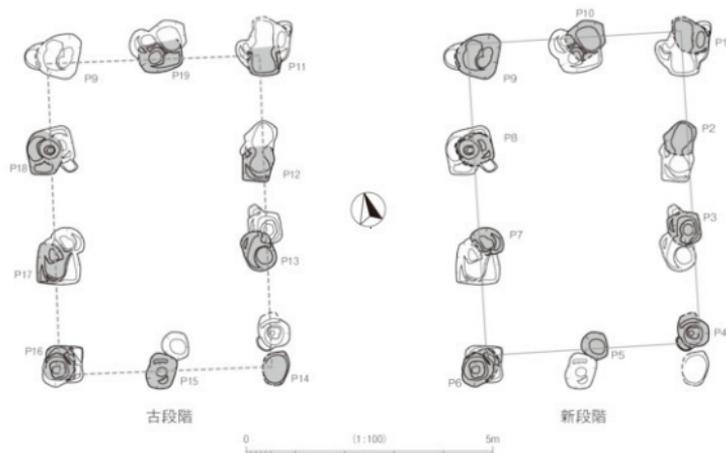


図210 A区 掘立柱建物28 平面・断面・出土遺物



- | | |
|--|---|
| 1 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)僅少含) | 36 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)少含) |
| 2 10YR2-1黒色シルト | 37 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)含) |
| 3 10YR2-2黒褐色シルト | 38 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)含、並よりブロッカ少) |
| 4 10YR2-2黒褐色シルト(ATブロッカ(径-2cm)僅少含) | 39 10YR2-1黒色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混土 |
| 5 10YR2-1黒色シルトと10YR2-2黒褐色シルトの混土 | 40 10YR2-1黒色シルト |
| 6 10YR2-2黒褐色シルト(ATブロッカ(径-5cm)多含) | 41 10YR2-1黒色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混土(細粒含) |
| 7 ロームと10YR3-1黒褐色シルトの混土(径-5cm)のブロッカ状) | 42 10YR3-1黒褐色シルト(ATブロッカ(径-3cm)少含) |
| 8 10YR2-2黒褐色シルト(ATブロッカ(径-8cm)含) | 43 10YR2-1黒色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混土(ATブロッカ(径-3cm)含) |
| 9 10YR2-2黒褐色シルト(AT細粒少含) | 44 10YR2-1黒色シルト |
| 10 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-4cm)少含) | 45 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)含) |
| 11 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)少含) | 46 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-4cm)僅少含) |
| 12 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-8cm)少含) | 47 10YR3-1黒褐色シルト(ATブロッカ(径-4cm)少含) |
| 13 10YR2-1黒色シルト | 48 10YR2-2黒褐色シルト |
| 14 10YR2-2黒褐色シルト(ATブロッカ(径-2cm)僅少含) | 49 ロームと10YR2-1黒褐色シルトがブロッカ状(径-5cm)に混じる。 |
| 15 10YR2-1黒色シルト | 50 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-4cm)少含) |
| 16 ロームと10YR3-1黒褐色シルトの混土(径-3cm)のブロッカ状) | 51 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-5cm)僅少含) |
| 17 10YR2-2黒褐色シルト(AT細粒少含) | 52 10YR2-1黒色シルト(AT細粒含) |
| 18 10YR2-2黒褐色シルト(AT細粒少含) | 53 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-8cm)少含) |
| 19 10YR2-1黒色シルト | 54 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)少含) |
| 20 10YR2-2黒褐色シルト(AT細粒少含) | 55 10YR3-1黒褐色シルト(ATブロッカ(径-5cm)僅少含) |
| 21 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)僅少含) | 56 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)含) |
| 22 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)少含) | 57 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-4cm)僅少含) |
| 23 10YR3-1黒褐色シルト、ブロッカ状ほとんど含まない。 | 58 10YR2-2黒褐色シルト |
| 24 10YR2-1黒色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混土(AT細粒少含) | 59 10YR3-1黒褐色シルト(ATブロッカ(径-2cm)含) |
| 25 10YR3-1黒褐色シルト(ATブロッカ(径-2cm)僅少含) | 60 10YR3-1黒褐色シルト(ATブロッカ(径-5cm)多含) |
| 26 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)少含) | 61 10YR3-1黒褐色シルトと10YR2-2黒褐色シルトの混土 |
| 27 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)含) | 62 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)含) |
| 28 10YR2-2黒褐色シルト(細粒含) | 63 10YR2-2黒褐色シルト(ATブロッカ(径-2cm)含) |
| 29 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-2cm)僅少含) | 64 10YR3-2黒褐色シルト(ATブロッカ(径-φ1.5cm)多含) |
| 30 10YR3-1黒褐色シルト(ATブロッカ(径-5cm)含) | 65 10YR3-1黒褐色シルトと10YR2-2黒褐色シルトがブロッカ(径-8cm)多含) |
| 31 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)少含) | 66 10YR2-1黒色シルトと10YR2-2黒褐色シルトの混土(ATブロッカ(径-1.5cm)少含) |
| 32 10YR3-1黒褐色シルトとロームがブロッカ状(径-5cm)に混じる | 67 10YR2-1黒色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混土(ATブロッカ(径-2cm)僅少含) |
| 33 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)含) | 68 10YR3-2黒褐色シルト |
| 34 10YR2-1黒色シルト(ATブロッカ(径-3cm)少含) | 69 10YR2-2黒褐色シルト |
| 35 10YR2-1黒色シルト(AT細粒含) | |

図211 A区 掘立柱建物28 変遷図

掘立柱建物29(図212)

M10、N10で検出した桁行き3間、梁行2間の南北棟の建物である。南側柱列の中央に柱穴は確認できなかったが、桁行の柱列が南に続かないことから建物規模を確定した。柱穴掘方の中央付近を通るように建物を復元すると桁行4.55m、梁行3.33mとなり、建物の主軸方向はN-15°Eである。

柱穴の形状は四隅および梁行のものと桁行のもので異なる。四隅と北側柱列のP5は平面形が楕円形を呈し、規模の確定できる北側柱列の柱穴で長径は0.46-0.55mある。一方、桁行のP2、7、8は南北に長い不整形を呈し、規模が確定できるP7、8の長軸は0.81m、1.06mある。南の隅に当たるP1、9の北側には柱穴を切る穴P10、11がある。P7、8では埋土の差を確認できなかったが、2つの

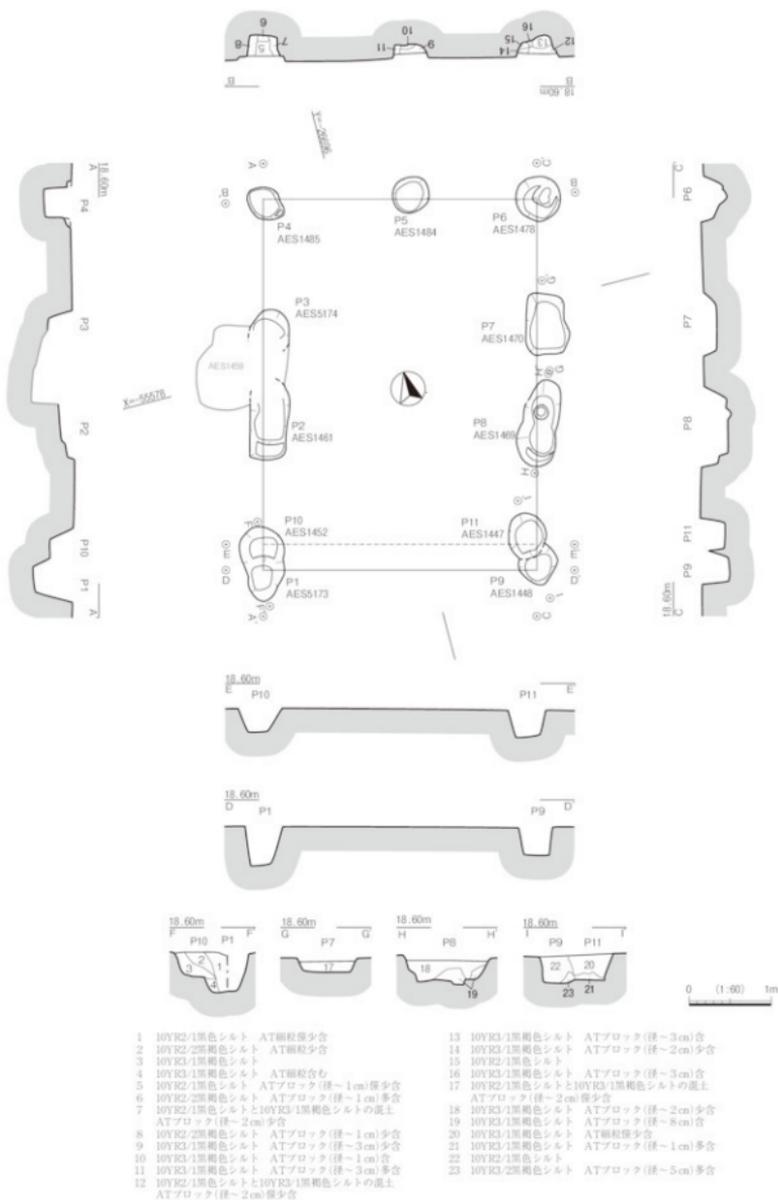


図212 A区 掘立柱建物29 平面・断面

柱穴が重複しており、北側柱列を変えず桁行を4.2m前後に縮小した建物に建て替えを行った可能性がある。掘方の検出面から深さはP2、4、7が0.20m前後で浅く、それ以外は0.31~0.47(平均0.37)mある。P4の堆積の中で5層は柱痕跡の可能性があり、これが柱痕跡であれば0.15m前後の柱が立てられたことになる。

柱穴掘方埋土には奈良時代のものと思われる赤色塗彩された土師器の小片が含まれており、周辺の同規模の建物と同様に奈良時代の建物と考える。(田中)

掘立柱建物30・31(図213)

Q11、R11で検出した建物で、2棟がほぼ同じ場所で建てられていた。柱穴掘方の切り合い関係から掘立柱建物31が先行することが確認できた。建物の主軸方向はN-20°Eである。

掘立柱建物30は桁行2間、梁行2間の南北棟と思われる。建物の規模は桁行3.97m、梁行3.43mで、東側柱列中央の柱穴は地下式坑22の陥没によって失われていた。

柱穴の平面形は楕円形と不整形が混在する。柱穴の長径は0.49~0.95(平均0.68)m、検出面からの深さは0.16~0.43(平均0.32)mで、各辺の中央の柱穴が隅の柱よりも浅くなる。P4、5で柱の痕跡を確認しており、直径0.15m前後の柱が据えられたと考える。

桁行の柱穴の芯々間距離は西側柱列では北側が広く(北から2.12m、1.85m)が、東側柱列は等間または南が広くなると考える。一方梁行の間隔は南側柱列で東側がやや広くなり(東から1.76m、1.67m)、北側柱列も同様だったと考える。

掘立柱建物31は桁行3間、梁行2間の南北棟である。南東隅の柱穴は掘立柱建物30のP2によって、東辺の北から2本目の柱穴は地下式坑22の陥没によって失われていた。建物の規模は桁行4.83m、梁行3.32mと推定した。

柱穴の平面形は円形または楕円形で、ややいびつなものも含まれる。柱穴の長径は完存するもので0.45~0.72m、検出面からの深さは0.14~0.32mで、柱穴の底面標高は掘立柱建物30の柱穴より高い。また、梁行の側柱列の各中央にあるP10、14は他の柱穴に比べて浅い。P9で柱の痕跡を確認でき、直径0.2m程度の柱が据えられたと考える。柱穴の間隔は桁行は一定しておらず、梁行は中央の柱穴が東に偏る。

柱穴掘方の埋土からは土師器、須恵器の小片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。時期の判断ができる遺物はなかったが、規模や方位から奈良時代の建物と考えておきたい。(田中)

掘立柱建物32(図213)

R11で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。北にある掘立柱建物31と一直線に並び、梁行幅や柱穴の底面標高が共通する。東側柱列の柱穴は溝状遺構AES1938に上部が壊されており、北側柱列中央の柱穴は袋状土坑AES2807の埋土にあつた可能性が高いが、平面・断面で判別することができなかった。建物の規模は桁行5.06m、梁行3.22mと推定した。

柱穴の平面形は楕円形で、一部壊されていた東側柱列を除いた柱穴の長径は0.42~0.61(平均0.51)m、検出面からの深さは0.19~0.34(平均0.27)mある。四隅の柱穴が他のものに比べて底面の標高が低く、四隅の柱をより深く据えた可能性がある。一部の柱穴では柱の痕跡を確認でき、直径0.2m前後の柱が据えられたと考える。柱穴の芯々間距離は桁行で1.59~1.75(平均1.69)mで、梁行の南側柱列では中央の柱が西に偏る(東から1.86m、1.46m)。

柱穴掘方の埋土からは土師器、須恵器の小片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。時期

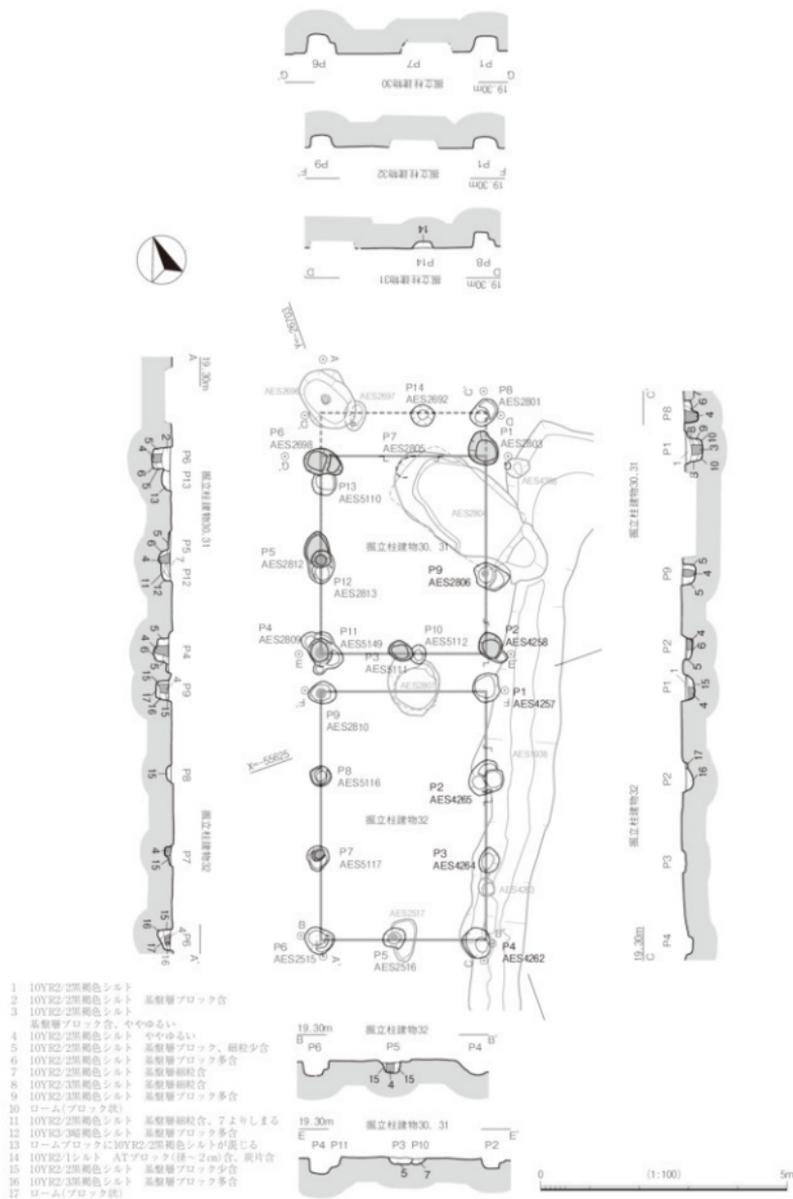


図213 A区 掘立柱建物30～32 平面・断面

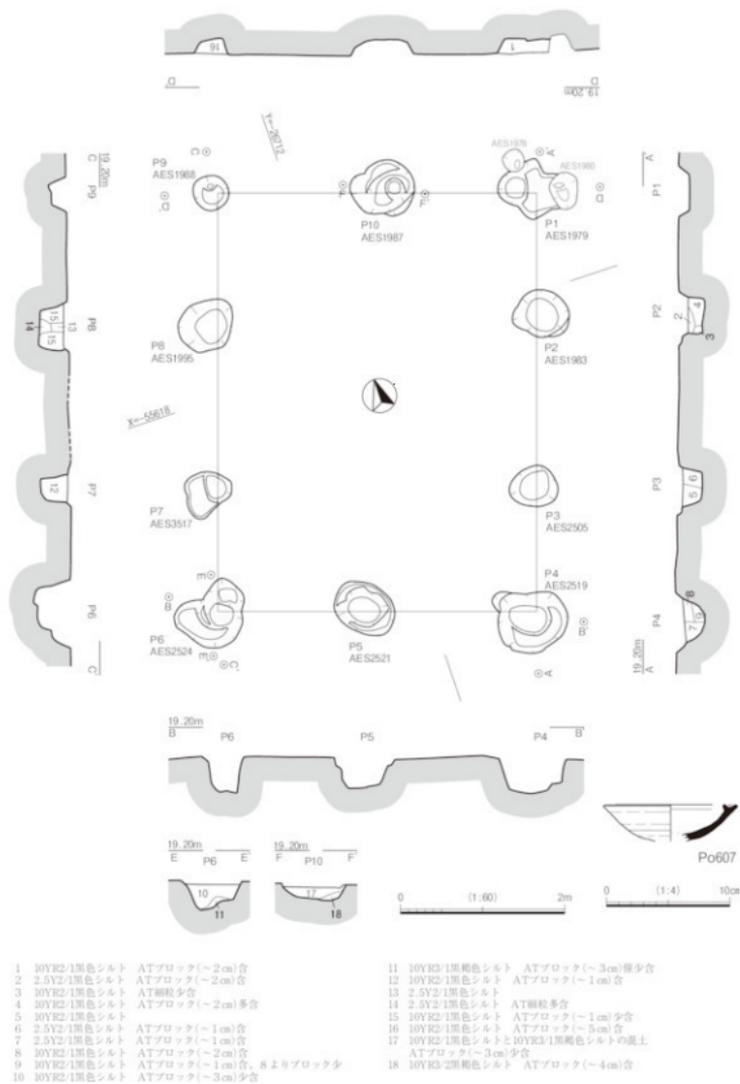


図214 A区 掘立柱建物33 平面・断面・出土遺物

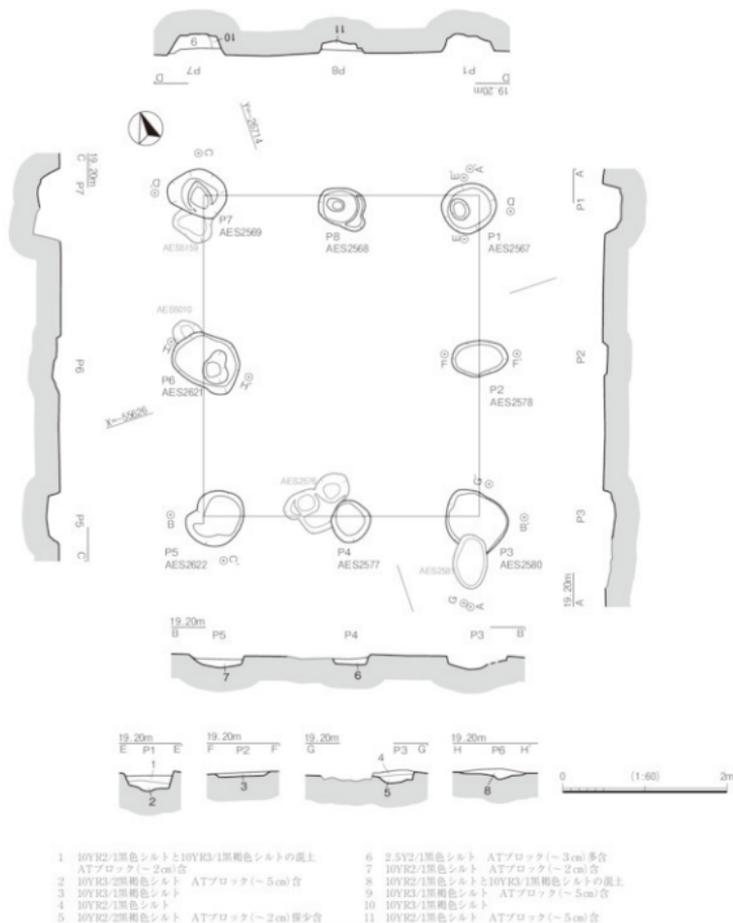


図215 A区 掘立柱建物34 平面・断面

の判断ができる遺物はなかったが、規模や方位から奈良時代の建物と考えておきたい。(田中)

掘立柱建物33(図214)

Q11・12、R11・12で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。建物の規模は桁行5.14m、梁行3.87mで、建物の主軸方向はN-19°-Eである。

柱穴の平面形は楕円形と不整形が混在しており、長径が0.40~0.89(平均0.68)m、検出面からの深さは0.22~0.47(平均0.36)mある。桁行の柱穴の芯々間距離は1.47~2.11(平均1.71)mで、真ん中の柱間が広がる。梁行は北辺のP10が東に(東から2.04m、1.83m)、南辺のP5は西に(東から1.77m、2.10m)偏る。

掘方埋土からは受部の低い須恵器坏身が出土した。出土した遺物が少なく、時期の特定が難しいが、

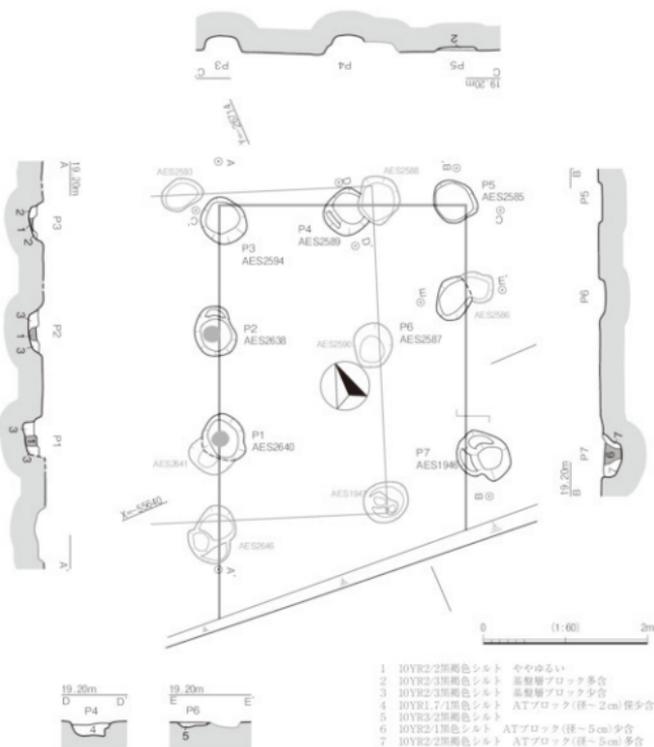


図216 A区 掘立柱建物35 平面・断面

規模や方位から奈良時代の建物と考えておきたい。(田中)

掘立柱建物34(図215)

R12で検出した桁行2間、梁行2間の建物で、南北棟と思われる。建物の規模は桁行3.86m、梁行2.12mで、建物の主軸方向はN-19°-Eである。この建物の東側柱列は北側にある掘立柱建物33の東側柱列と揃っている。

柱穴の平面形は楕円形で、長径が0.57~0.83(平均0.68)m、検出面からの深さが0.07~0.28(平均0.18)mある。柱穴の配置は、桁行では真ん中の柱穴がほぼ中央にあるのに対し、梁行は北側柱列で中央に柱穴があるが、南側柱列では東に偏る。

柱穴掘方埋土からは土師器、須恵器の細片が出土しており、中には古代の土師器甕の破片を含む。出土遺物や規模や方位から奈良時代の建物と考えておきたい。(田中)

掘立柱建物35(図216)

S12、T12で検出した建物で、東西2間、南北2間分を確認した。南側柱列となり得る柱穴は確認できないものの、西辺で南に続く柱穴が確認できていない。確認できる柱穴の芯々間距離は最大で

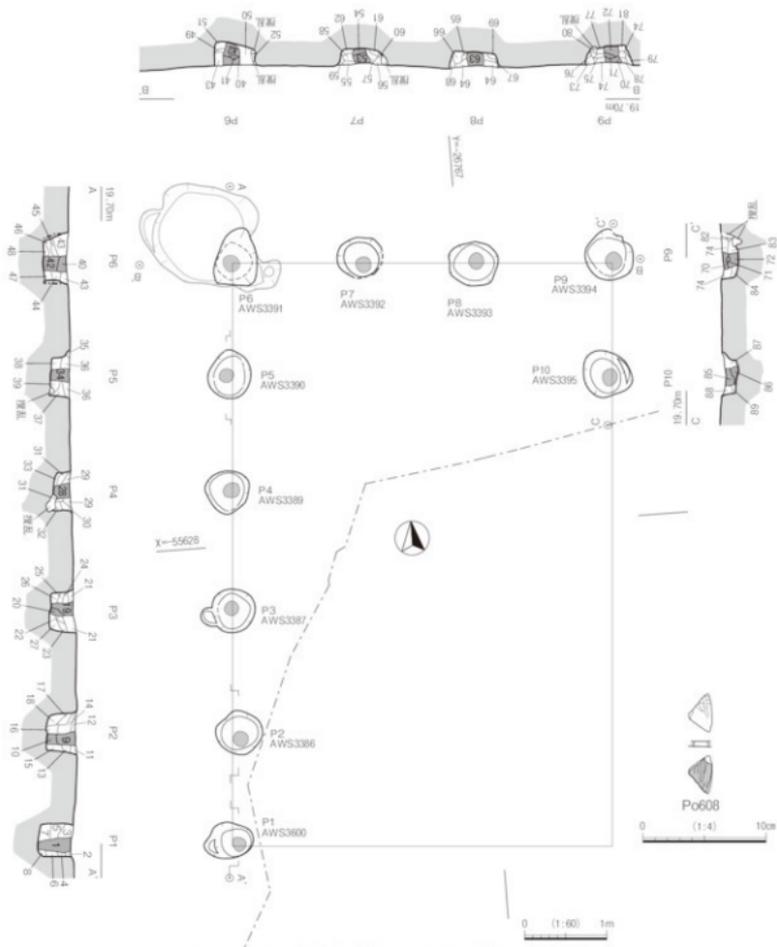


図217 A区 掘立柱建物36 平面・断面・出土遺物

2.00mあり、仮に柱列が続くとすると柱穴が調査区外となる。そのため建物は調査区の南側に延びるものとして、桁行4.92m以上、梁行2.89mの南北棟と考える。建物の軸方向はN-22°-Eである。

建物の柱穴は掘立柱建物45の柱穴に壊されており、掘立柱建物45に先行することが分かる。

柱穴の平面形は楕円形で、長径0.52～0.60(平均0.56)m、検出面からの深さ0.04～0.25(平均0.16)mある。柱穴はほぼまっすぐ並ぶが、東側柱列のP7は外側にずれる。完存する柱穴の芯々間距離は東側柱列のP5-P6間が1.13m、西側柱列のP2-P3間が1.49mでばらつきがあり、北側柱列中央のP4は東に偏る。P1、2で柱痕跡が確認でき、0.2m前後の柱が立てられていたと考える。P1-P2の柱間は1.3mある。掘方埋土は基盤層ブロックを多く含んだ黒褐色シルトである。

表13 A区 掘立柱建物36 土層計誌

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量, ややゆらぎ	45	HOYR2-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
2	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量	46	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
3	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm)極少量	47	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)極少量
4	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	48	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
5	HOYR4-1褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	49	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
6	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	50	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
7	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	51	HOYR1-7/1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
8	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量	52	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)多量
9	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm, 径-5mm)極少量	53	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
10	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)多量	54	HOYR1-7/1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
11	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)極少量	55	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm)極少量
12	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	56	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm, 径-5mm)極少量
13	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	57	HOYR1-7/1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
14	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	58	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
15	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	59	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
16	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)多量	60	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
17	HOYR4-1褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm)少量	61	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm)少量
18	HOYR4-1褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多量	62	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量
19	HOYR4-2/9黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	63	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
20	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	64	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量
21	HOYR4-2/9黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm, 径-1cm)極少量	65	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
22	HOYR4-2/9黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	66	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
23	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	67	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
24	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量	68	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量
25	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	69	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
26	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量, ややゆらぎ	70	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
27	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	71	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
28	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	72	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
29	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量	73	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
30	HOYR4-2/9黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量	74	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)多量
31	HOYR4-2/9黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm)多量	75	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
32	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量	76	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
33	HOYR4-2/9黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	77	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
34	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm, 径-5mm)極少量	78	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少量
35	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	79	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
36	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm, 径-5mm)極少量	80	HOYR1-2/8黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
37	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多量	81	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
38	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-4cm, 径-1cm)極少量	82	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
39	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	83	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量, 径-5mm)極少量
40	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	84	HOYR1-7/1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
41	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)多量	85	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
42	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	86	HOYR3-2黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)多量
43	HOYR3-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	87	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm)極少量
44	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	88	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
			89	HOYR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量

柱穴掘方埋土からは土師器、須恵器の細片が出土し、P1に壊されているAES2641から8世紀後半頃の須恵器蓋の細片が出土した。出土遺物と規模から奈良時代の建物と考える。(田中)

掘立柱建物36(図217)

R17・18, S17・18に位置する南北棟の建物で、主軸方位はN-4°-Eである。表土下のⅢ層中から掘り込まれた遺構であるが、当該層と埋土との色調類似から検出が困難であったため、Ⅳ層及びⅤ層まで掘り下げて検出した。本建物の南東側は調査区外のため未検出となるが、検出状況から桁行、梁行共にこれ以上延びることは無いと判断され、桁行5間、梁行3間に復元される。平面規模は桁行7.16m、梁行4.61mである。

側柱P1～10における柱掘方の平面形は円形及び楕円形状を呈し、平面規模は径0.45～0.69mである。検出面からの深さは0.21～0.44mで、底面標高は桁行で見て南側へ漸次低くなる傾向にあるが、顕著ではない。

柱痕跡は全ての柱穴において確認した。そこから柱材の径は0.15～0.19m程度に復元される。柱筋の通りはP2が若干位置を外すものの、全般には概ね良好である。柱間寸法は1.3～1.6mとややばらつきを有するが、総じて短く特徴的である。この点や方位の違いにより、掘立柱建物41・42等平安時代帰属の建物群とは異なるグループの建物と想定する。

出土遺物は細片が多く、良好な資料には恵まれなかった。P1出土のPo608を図示した。黒色土器の細片で、外面には赤色顔料が塗布され、内面には黒色処理が為されている。この資料だけで本遺構の帰属時期比定は困難だが、先述の特徴及び方位的な相違から、平安時代前半頃(9世紀代)の可能性を考えておきたい。(加藤)

掘立柱建物37(図218)

P17・18、Q17・18に跨がり位置する建物で、表土下の基盤層V層又はVI層において検出した。本遺構の北東側は圃場整備による改変が著しく、柱掘方は遺存せず、全貌は不明である。把握できたのは桁行2間、梁行2間で、方位は南北棟とした場合N-8°-Wである。柱掘方の遺存状況、周辺の遺構配置から、梁行は2間で、桁行は3間以上となる可能性がある。なお、P1・2間の柱穴は、現代用水路の掘方と重複し、消失したと考えられる。平面規模は桁行3.52m以上、梁行3.12mある。

柱掘方の平面形は、円形又は楕円形である。平面規模は径0.41～0.74mと個体差が大きいが、遺存状態の差を反映したものと捉えられ、径0.5～0.6mが主体であろう。検出面からの深さは、遺存状況が不良であるP1を除き0.4m台ある。底面標高をみると、P1の高さが目立つ。P1については、配置的に柱掘方と判断している。北側において他の柱穴が検出されなかったことは、総じて北側における柱掘方の底面標高が南側よりも高かったことを反映したものであろう。

柱痕跡はP2・3においてのみ確認した。そこから柱材の径は0.2m弱と考えられる。柱穴の配置から、柱間寸法は比較的小さく、1.5m強前後に復元される。柱筋の通りについては、柱痕跡を把握できた柱穴が少なく判断としないが、柱穴の配置においては整然さをやや欠いており、良好とは言い難い。

出土遺物は僅少であるため、厳密な帰属時期判断は困難だが、P2から出土した土器器口の口縁部片を図示した。器面が摩滅しており調整の詳細は不明だが、赤色顔料が塗布されており、奈良時代を上限とした帰属が想定される。平安時代帰属を考えている建物群とは方位を異にしている点も考慮し、本建物の年代についてはやや古く評価しておきたい。(加藤)

掘立柱建物38(図219)

M18・19、N18・19で検出した桁行3間、梁行1～2間の東西棟の建物で、西側の梁間P6に対応する東側の柱は確認できていない。規模は桁行7.3m、梁行4.6mで、主軸方位はN-83°-Wである。

柱穴の芯々間距離は、梁行の西側柱列がP5-P6間が2.35m、P6-P7間が2.15m、東側柱列中央の柱は竪穴建物03の壁溝と重複しているのか、確認できない。桁行は南側柱列のP2-P3間が2.5m、P3-P4間が2.35m、P4-P5間が2.75m、北側柱列のP7-P8間が2.4m、P8-P9間が2.2m、P9-P1間が2.55mである。

柱穴の平面形は不整な円形で、P1・P3・P7はやや大きく径0.46m～0.64m、他は0.28～0.49mである。検出面からの深さはP1が0.32m、P2が0.29mであるが、他は0.04m～0.19mと遺存状況はよくない。埋土は黒色から黒褐色シルトを主体とし、褐色シルトのブロックを含む。いずれも柱痕跡は確認できない。

遺物は南東隅の柱穴P2から出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。

柱穴の形状や規模及び埋土、建物の構造等から古代の掘立柱建物と考える。(八峠)

掘立柱建物39(図220、PL57)

N19・20に位置する桁行3間、梁行2間の東西棟の建物で、主軸方位はN-77°-Wである。平面規模は桁行6.50m、梁行4.67mが想定される。表土直下のV層において検出した。本遺構は、規模、方位

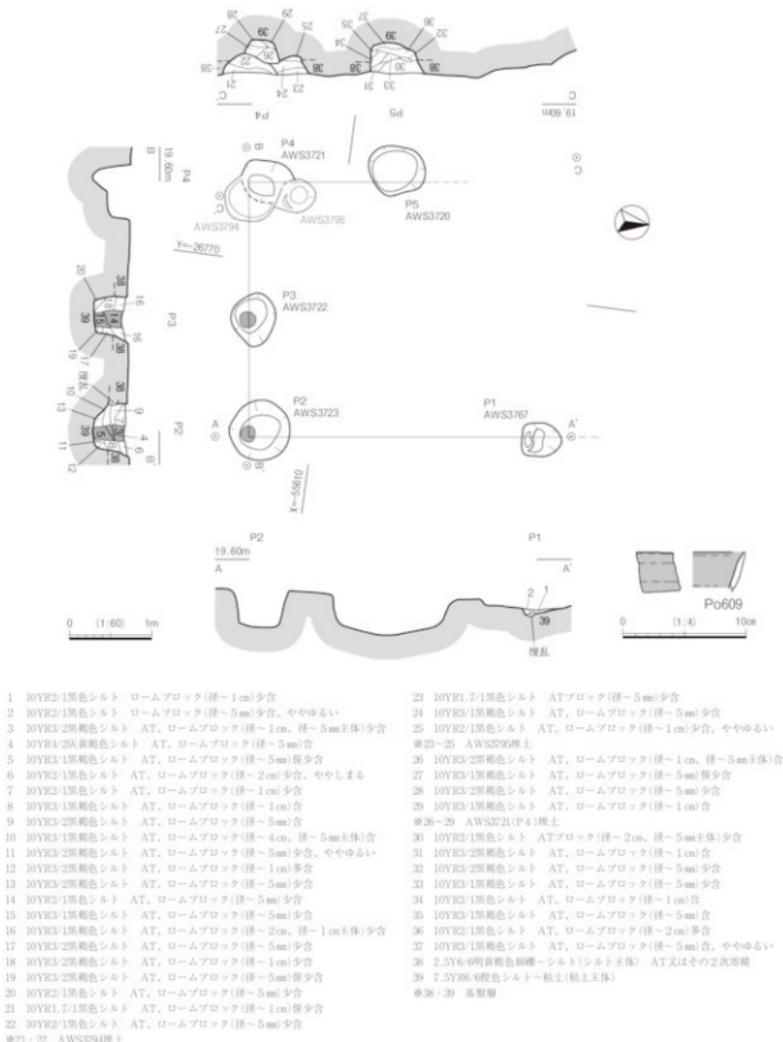
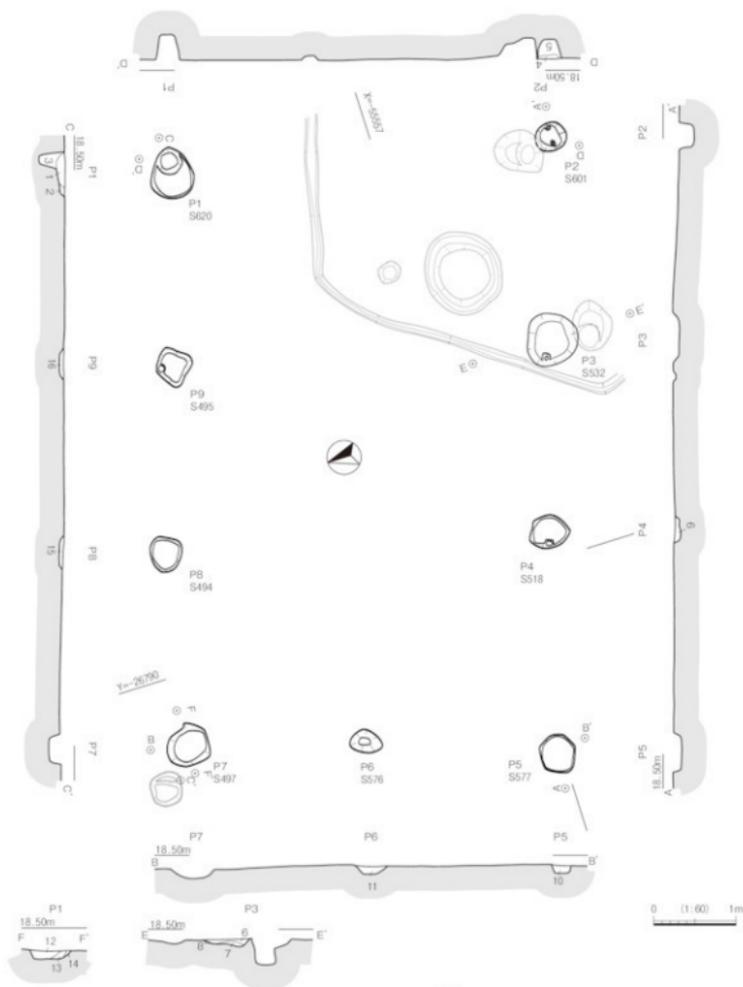


図218 A区 掘立柱建物37 平面・断面・出土遺物

共に段丘面西端に位置する掘立柱建物41・42と近似しており、関連性の高さが窺われる。本遺構の近辺では北東側に7m程度離れて掘立柱建物38を検出しており、想定される平面規模、方位は近似する。また、南西側には桁行3間、梁行1間の掘立柱建物71が位置するが、やや方位を異にしている。

本建物の柱穴掘方も上位が改変により大きく失われているが、遺存状況は比較的良好で検出面から



- [P1]
 1 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト小ブロックを含む
 2 10YR4/6褐色シルト 10YR2/1黒色シルトブロックを含む
 3 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルトブロックを含む
 [P2]
 4 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルト粒を多量に含む
 5 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト粒を含む
 [P3]
 6 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト小ブロックを含む
 7 10YR3/1黒褐色シルト
 8 10YR3/1黒褐色シルト 10YR4/6褐色シルト小ブロックを多量に含む

- [P4]
 9 10YR3/1黒褐色シルト
 [P5]
 10 10YR2/1黒色シルト
 [P6]
 11 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト粒を含む
 [P7]
 12 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト粒を含む
 13 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルトブロックを含む
 14 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト小ブロックを含む
 [P8]
 15 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト小ブロックを含む
 [P9]
 16 10YR2/1黒色シルト 10YR4/6褐色シルト小ブロックを含む

図219 A区 掘立柱建物38 平面・断面

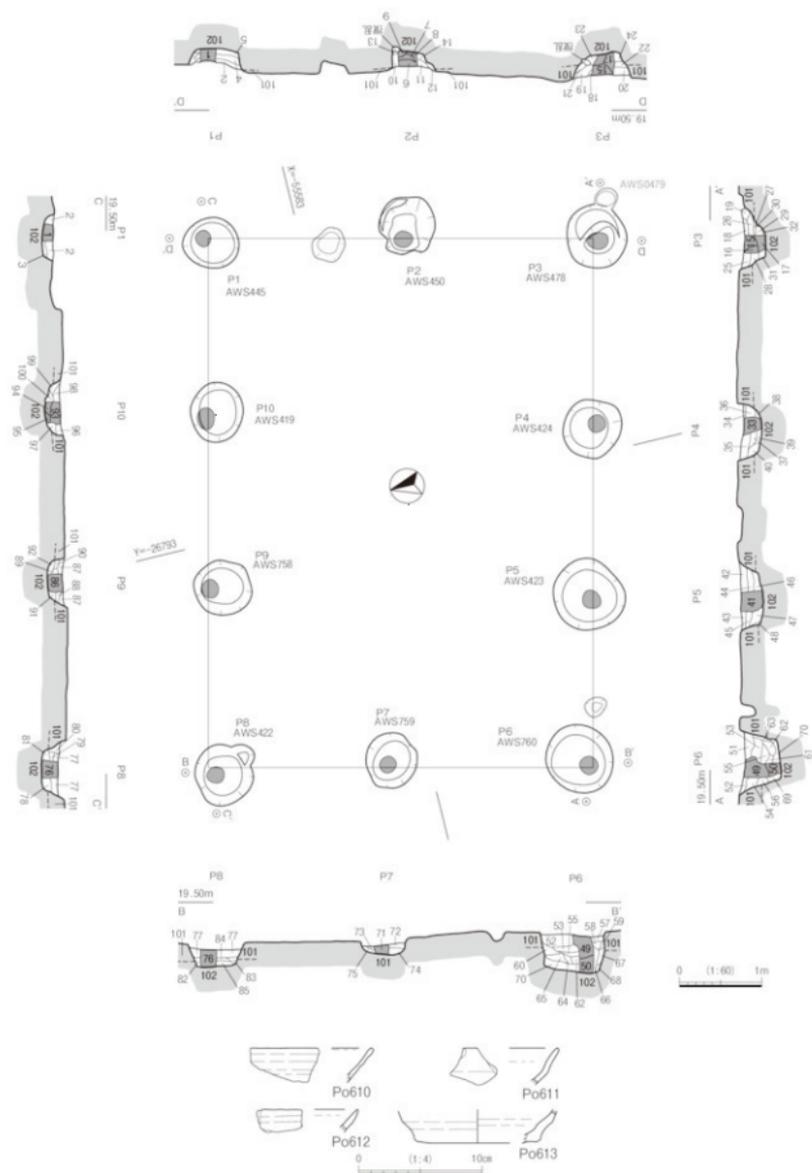


図220 A区 掘立柱建物39 平面・断面・出土遺物

表14 A区 掘立柱建物39 土層注記

番号	土層・土質	備考
1	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
2	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-1cm主体)多含
3	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
4	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
5	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3mm)少含
6	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm、径-5mm主体)少含、ややゆるい
7	10YR4/1暗灰色シルト	ロームブロック(径-1cm)多含
8	10YR4/2黄褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)多含、ややゆるい
9	7.5YR6/6棕色シルト -粘土(シルト)主体	10YR3/1黒褐色シルトブロック(径-2cm)少含 ローム由来土を主体とする層相
10	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
11	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
12	7.5YR6/6棕色シルト -粘土(シルト)主体	10YR3/1黒褐色シルトブロック(径-2cm)少含 ローム由来土を主体とする層相
13	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少含、ややゆるい
14	10YR2/1黒色シルト	ロームブロック(径-5mm)少含
15	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
16	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
17	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
18	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-1cm主体)多含
19	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
20	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
21	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-2cm)多含
22	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-2cm)多含
23	7.5YR6/4に濃い褐色 シルト-粘土(シルト)主体	10YR3/1黒褐色シルトブロック(径-1cm)少含 ローム由来土を主体とする層相
24	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
25	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
26	10YR2/1黒色シルト	ロームブロック(径-1cm)多含
27	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)多含
28	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
29	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
30	10YR4/2黄褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
31	7.5YR6/4に濃い褐色 シルト-粘土(シルト)主体	10YR3/1黒褐色シルトブロック(径-1cm)少含 ローム由来土を主体とする層相
32	10YR4/1暗灰色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)多含
33	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
34	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径-1cm主体)多含
35	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)少含
36	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
37	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)多含
38	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
39	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
40	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-4cm)少含
41	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径-1cm主体)多含
42	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
43	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
44	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
45	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少含
46	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
47	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
48	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
49	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm、径-5mm主体)多含
50	7.5YR6/6棕色シルト	ATブロック(径-1cm)少含
51	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-4cm、径-1cm主体)多含

番号	土層・土質	備考
52	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
53	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm)多含
54	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
55	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
56	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm)少含
57	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
58	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
59	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)多含
60	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
61	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)多含
62	10YR2/6明褐色シルト	10YR2/1黒褐色シルトブロック(径-1cm)少含 ローム由来土を主体とする層相
63	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
64	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
65	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
66	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)很少含、ややゆるい
67	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
68	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-3mm)少含
69	10YR1/2暗色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)很少含
70	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
71	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少含、ややゆるい
72	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm、径-5mm主体)少含
73	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)少含
74	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)很少含
75	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)很少含
76	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少含、ややゆるい
77	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm)少含
78	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径-3cm)少含
79	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
81	10YR2/6明褐色シルト	10YR3/1黒褐色シルトブロック(径-1cm)少含 ローム由来土を主体とする層相
82	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含、ややゆるい
83	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)很少含
84	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm、径-1cm主体)多含
85	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm、径-1cm主体)多含
86	10YR1/7.1暗色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
87	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm、径-1cm主体)多含
88	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)很少含
89	10YR2/6明褐色シルト	10YR2/1黒褐色シルトブロック(径-1cm)很少含 -粘土(シルト)主体
90	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
91	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
92	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
93	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-1cm主体)多含
94	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
95	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
96	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm、径-1cm主体)多含
97	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
98	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-1cm主体)多含
99	10YR3/2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
100	10YR2/1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
101	2.5Y7/6明黄褐色細礫 -シルト	ロームを挟むローム層 AT又はその2次堆積
102	7.5YR6/6棕色シルト -粘土(粘土)主体	橙色を挟むローム層
103	10Y2	土層

の深さは0.25m以上あり、最大はP6の0.51mである。掘立柱建物42のように顕著ではないが、四隅の柱穴掘方が他よりもやや深くなる傾向にある。各柱穴の底面標高をみると、P6・8といった西側柱列の柱穴の方が深さに比例して低くなっているが全般的にみて明瞭な差はない。掘方の平面形は概ね円形を呈し、径0.62～0.87mである。

柱痕跡については全ての柱穴において確認した。ここから柱材は径0.2m強に復元される。柱筋の通りは概ね良好だが、柱間寸法は柱穴の配置からも分かるように2.0～2.5mとやや幅を持つ。遺存した掘方を見る限り、建替えの痕跡などは認められない。

出土遺物は柱穴から少数出土し、4点を図示したがいずれも土師器の坏である。Po610はP10の柱痕跡より出土した。口縁部から体部にかけての破片で、強い回転ナダが施される。他は柱穴埋土からの出土で、Po613は底部切り離しが回転ヘラ切りである。

本遺構の出土遺物中には底部回転糸切りの資料は無かったが、掘立柱建物41・42との形態的・規模

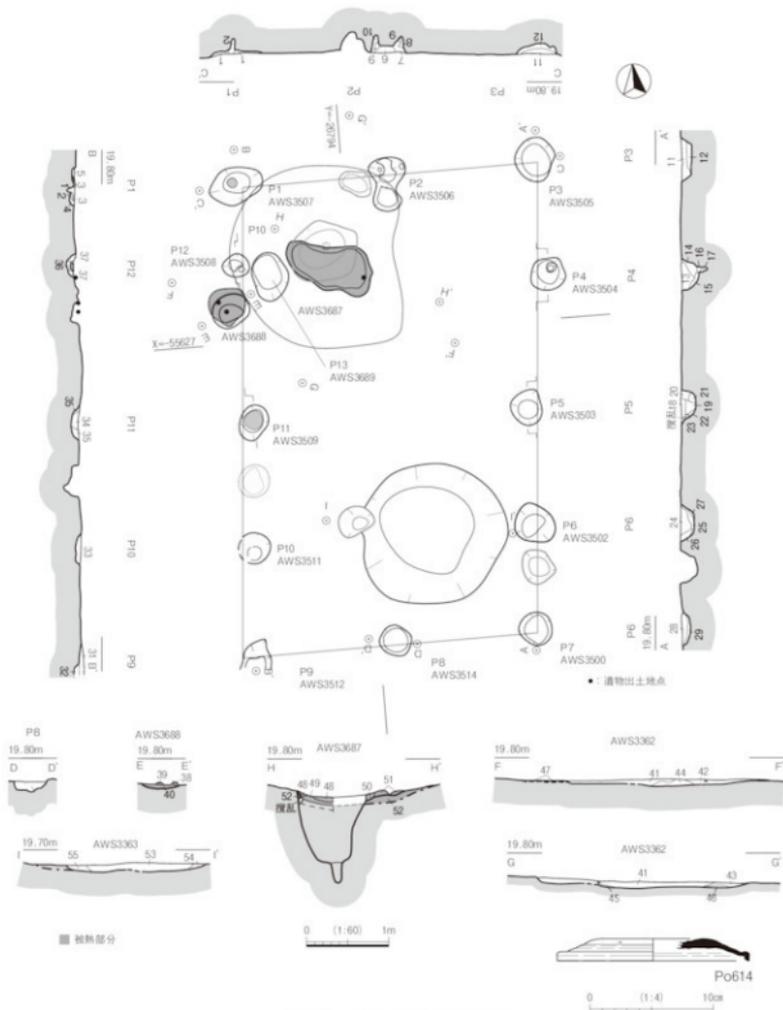


図221 A区 掘立柱建物40

的な親縁性を考慮すると、同様に平安時代中頃以降の帰属が想定される。(加藤)

掘立柱建物40(図221、PL.57)

R20、S20で検出した桁行4間、梁行2間の南北棟の建物である。桁方向の側柱列、梁方向の側柱列同士はほぼ平行するが、桁方向と梁方向の柱列は直交せず、建物の平面形は平行四辺形形状になると思われる。桁行5.8m、梁行3.6mで、桁行を基準とした方位はN-1°-Eである。

桁行の側柱列の柱穴芯々間距離は東側がP3-P4間が1.35m、P4-P5間が1.75m、P5-P6間

表15 A区 掘立柱建物40 土層注記

番号	土色・土質	備考
P1(AWS307)		
1	2.5Y2/1黒色シルト	ロームブロック(径=1cm)含
2	10YR4/1褐色シルト	ロームブロック(径=2cm, 径=5mm土体)多量
3	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=5mm)径2cm, ややゆるい
4	10YR3/2暗褐色シルト	ロームブロック(径=5mm, 径=3mm土体)少量
5	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=2cm, 径=5mm土体)含
P2(AWS309)		
6	10YR2/1黒色シルト	ロームブロック(径=5cm, 径=5mm土体)多量
7	10YR3/2暗褐色シルト	ロームブロック(径=5mm)径少量
8	10YR3/2暗褐色シルト	ロームブロック(径=3cm)多量
9	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=3mm)含
10	10YR3/2暗褐色シルト	ロームブロック(径=3mm)含
P3(AWS309)		
11	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=1cm, 径=3mm土体)少量
12	10YR4/1褐色シルト	ロームブロック(径=1cm)少量, ややゆるい
P4(AWS304)		
13	10YR2/2暗褐色シルト	ロームブロック(径=1cm)少量 ATブロック(径=3cm, 径1=3mm土体)含
14	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径=3cm)少量
15	10YR2/2暗褐色シルト	ATブロック(径=2cm, 径1=3mm土体)多量
16	10YR2/1黒色シルト	ややゆるい
17	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=1cm, 径1=3mm土体)含 ややゆるい
P5(AWS303)		
18	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径=1cm, 径1=2mm土体)含
19	10YR2/2暗褐色シルト	ATブロック(径=2cm, 径=1cm土体)少量
20	10YR3/2暗褐色シルト	ATブロック(径=1cm, 径=3mm土体)含
21	10YR3/2暗褐色シルト	ATブロック(径=5cm, 径=5mm土体)多量
22	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR3/2暗褐色シルトブロック(径=1cm)少量 シルト+粘土
23	2.5Y3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=2cm)含
P6(AWS302)		
24	10YR2/1黒色シルト	ロームブロック(径=2cm)少量
25	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=3cm)少量
26	10YR2/1黒色シルト	ロームブロック(径=2cm)少量
27	10YR2/4暗褐色細砂+シルト	10YR3/1黒褐色シルトブロック(径=2cm)少量
P7(AWS300)		
28	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=2cm, 径5mm土体)少量
29	10YR4/1褐色シルト+粘土	ロームブロック(径=3cm)少量 ATブロック(径=5cm)含, ややゆるい

番号	土色・土質	備考
P8(AWS304)		
30	2.5Y2/1黒色シルト	ATブロック(径=2cm, 径5mm土体)少量
P9(AWS302)		
31	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=5mm)少量
32	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=2cm)少量
P10(AWS311)		
33	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=1cm, 径=5mm土体)少量
P11(AWS309)		
34	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径=1cm)少量
35	10YR3/2暗褐色シルト	
P12(AWS308)		
36	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径=5mm)径少量
37	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=5mm)径少量
AWS368		
38	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=2cm)径少量 焼土ブロック(径=5cm), 炭化物(径=1cm)含
39	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=5mm)少量 焼土ブロック(径=1cm), 炭化物(径=5mm)少量
40	2.5Y6/8明褐色細砂+シルト(シルト主体)	
AWS302		
41	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径=3cm, 径1=1cm土体)少量
42	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径=5cm)径少量
43	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=3cm, 径=5mm土体)少量
44	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=2cm, 径=5mm土体)少量
45	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径=1cm)少量
46	10YR2/1黒色シルト	焼土ブロック(径=3cm, 径=1cm土体)含
47	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=2cm, 径=5mm土体)少量 焼土ブロック(径=1cm), 炭化物(径=5mm)少量
AWS387		
48	7.5YR6/8暗褐色細砂+シルト(シルト主体)ブロック 10YR2/1黒色シルトブロック(径=3cm)少量	5YR6/8暗褐色細砂+シルト(シルト主体)ブロック 10YR2/1黒色シルトブロック(径=3cm)少量
49	10YR2/1黒色シルト	AT、焼土ブロック(径=5mm)少量
50	5YR6/8暗褐色細砂+シルト(シルト主体)	10YR2/1黒色シルトブロック(径=3cm)少量 ややゆるい
51	5YR6/8暗褐色細砂+シルト(シルト主体)	
52	2.5Y6/6明褐色細砂+シルト(シルト主体)	
AWS303		
53	10YR2/1黒色シルト	ATブロック(径=1cm)径少量 土層間(径=5mm)少量, 炭(径=5mm)径少量
54	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=5mm)少量
55	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径=5mm)少量

が1.4m、P6-P7間が1.3mで、P4-P5間が広く、西側は、P9-P10間が1.3m、P10-P11間が1.6m、P11-P12間が1.8m、P12-P13間が1.1mで、東側と同様にP11-P12間が広い。梁行のP2、8はほぼ中央にある。

建物と重複するように3箇所で被熱面及び焼土の範囲を検出した。

焼土AWS3688はP12と重複し、P11の上面からも被熱面を検出したが、これらはいずれも建物の廃絶後に形成されている。焼土AWS3687は浅い落ち込みのAWS3362の中央付近で、さらに落とし穴AWS3929の窪みがあり、その直上に被熱による硬化面が形成される。これについては柱穴の内側に位置していることから、建物の機能時に伴う可能性がある。鍛冶等、鉄関連の遺構が推測されたため精査したものの、金属薄片等の遺物は確認していない。ほか、柱穴の範囲内に土坑AWS3363や複数のピットを検出したが、建物との関係は不明である。

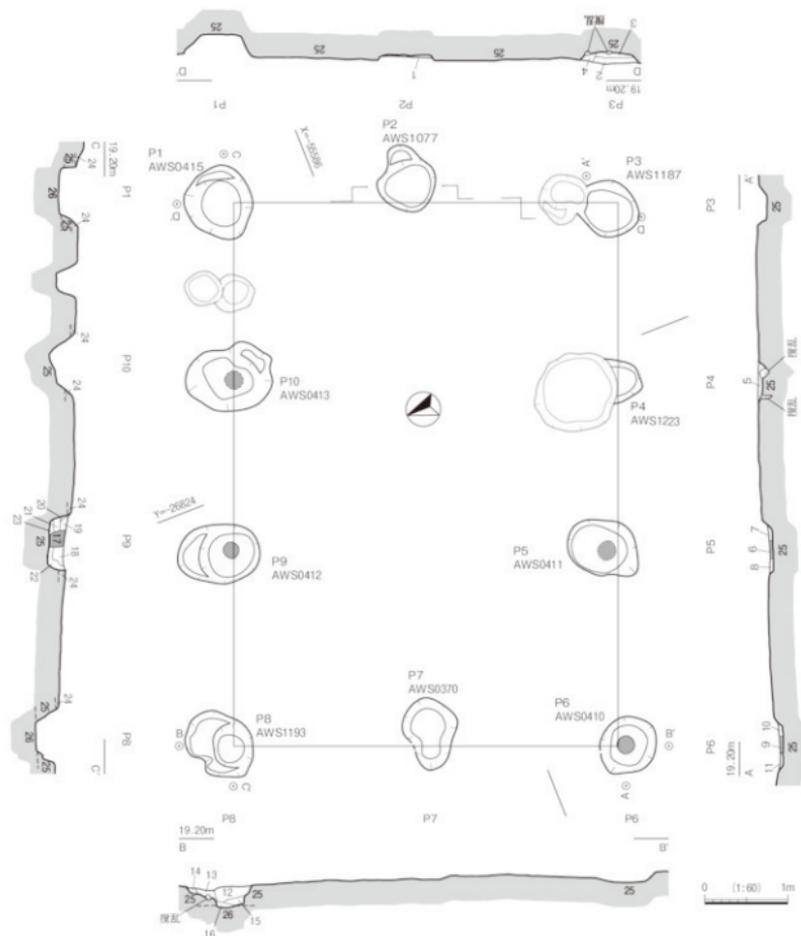
柱穴埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームブロック、炭化物や焼土粒を含む層が多い。

遺物はP3・P4・P7・P10・P12・P13・AWS3362・AWS3363から出土したもののいずれも小片である。浅い落ち込みのAWS3362に伴うP13から出土した須臾器蓋P614を図化した。

出土遺物のほか柱穴の形状や規模及び埋土、建物の構造等から古代の掘立柱建物と考える。(8峠)

掘立柱建物41(図222・223、PL58・59)

N23の段丘面西側に位置する桁行3間、梁行2間の東西棟の建物で、主軸方位はN-69°-Wである。表土下に露出するV層、又はV層の上位に局所的に堆積が確認される、黄褐色を呈するローム層において検出した。建物の規模は桁行6.68m、梁行4.66mと想定した。4m程距離を置いた南西隣には、



- | | |
|--|--|
| 1 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-5cm、径-1cm主体)合 | 17 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少合 |
| 2 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)合、ややしまる | 18 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)合 |
| 3 10YR2-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)多合、ややしまる | 19 10YR1-2黒色シルト ATブロック(径-1cm)少合 |
| 4 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-5mm)多合 | 20 10YR2-1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少合 |
| 5 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)合 | 21 10YR2-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少合 |
| 6 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm、径-1cm主体)少合 | 22 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少合 |
| 7 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少合 | 23 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-5mm)少合 |
| 8 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少合 | |
| 9 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少合 | 24 10YR5-3/2に赤・黄褐色シルト 10YR3-1黒褐色シルトブロック(径-3cm)少合 |
| 10 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少合 | 土壌化が進行しつつあるローム層 |
| 11 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)合 | 25 2.5Y7.6明黄褐色組織-シルト(シルト主体) AT又はその2次堆積 |
| 12 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-3cm、径-1cm主体)合 | 26 7.5Y8.6暗褐色シルト-粘土(粘土主体) |
| 13 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)多合 | ※24-26 基盤層 |
| 14 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少合 | |
| 15 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-1cm)少合 | |
| 16 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-5mm)合 | |

図222 A区 掘立柱建物41 平面・断面

本遺構と同規格の建物である掘立柱建物42が両妻側柱列を揃えて並列する。

側柱P1～10における柱穴掘方の平面形はやや不整な円形及び楕円形を呈し、平面規模は短径が0.67～0.83m、長径が0.83～1.05mである。検出面からの深さは0.05～0.31mに過ぎず、本遺構が位置する一帯は大きく後世の改変を受けていることが分かる。底面標高は18.36～18.89mと0.5m余りの差が認められ、谷地形へと降る西側へ漸移的に標高値が低くなっており、原地形も谷方向へ向かって僅かに勾配を持っていたと考えられる。

柱穴掘方の遺存状況が悪かったこともあり、柱痕跡を確認できたのは一部に止まった。柱間寸法は2.1～2.4m程度、柱の規模は径0.2m前後と推定される。各側柱の位置関係と一部確認できた柱痕跡から勘案して、柱筋の通りは良好とは言えない。また、上述のとおり、本建物の柱穴掘方の上位は大きく失われているため判然としない部分もあるが、建替えに伴う痕跡はない。

遺物は、僅少なながら柱掘方埋土より出土している。Po615・616は土師器の坏で、いずれも底部切り離しは回転糸切りである。Po615は口縁端部を欠くが、口径は12cm弱に復元できよう。これらの出土から本遺構の帰属時期は、平安時代中頃以降に求められる。(加藤)

掘立柱建物42(図224、PL.58・59)

O23・24の段丘面西端近くに位置する桁行3間、梁行2間の東西棟の建物である。建物の主軸方位はN-71°-Wで、本遺構の北東約4mには同規格の掘立柱建物41が並列する。表土直下のV層にて検出し、規模は桁行6.98m、梁行4.85mと想定した。

掘立柱建物41と同様に柱穴掘方の遺存状況は不良で、後世の改変が著しい。検出面からの深さは0.05～0.39mで、P6を除けば軒並み0.25mを下回る。側柱のうち、四隅以外の柱掘方はやや浅くなっており、P2、P4は平面的な検出すら覚えないほどである。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形状を呈し、平面規模は、遺存状況の悪いP2、P4を除くと径0.7～0.9mの範囲に収まる。各柱穴の底面標高差は最大で0.34mとなり、並列する掘立柱建物41と同様、谷地形斜面側の西へと漸移的に低くなる傾向が看取できる。

柱痕跡についてはP2を除き確認した。ここから、柱の規模は径0.2m前後に復元される。柱間寸法は2.3m近辺が主体となるが、梁行の中間柱であるP2・P7が南寄り位置するほか、P4が相対するP10に対し西側へ大きくずれるなど、かなり不揃いとなる。柱筋の通りも良好とは言えず、とりわけ南側桁と東側梁において顕著である。柱穴掘方が大きく失われている現状では判然としないが、建替えに伴う痕跡は認められない。

出土遺物は少ないが、2点を図化した。いずれも土師器の坏である。Po618の底部切り離しは回転糸切りで、体部～口縁部はやや丸みを持ちながら外傾する。Po619は底部を欠く資料で、強い回転ナデにより器壁が波打つ。同様に底部は回転糸切り離しの可能性が高い。これら出土遺物から、本建物の帰属時期は平安時代中頃以降と考えられる。(加藤)

掘立柱建物43～46(図225～231、PL.60・110)

概要 丘陵尾根部西側のQ23～25、R23・24において、まとまって検出された4棟の建物群である。表土直下に露出するV層において検出した。建物群は、東西棟が2棟、南北棟が1棟、どちらか判断で

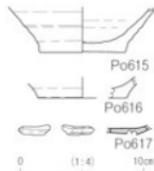


図223 A区 掘立柱建物41
出土遺物

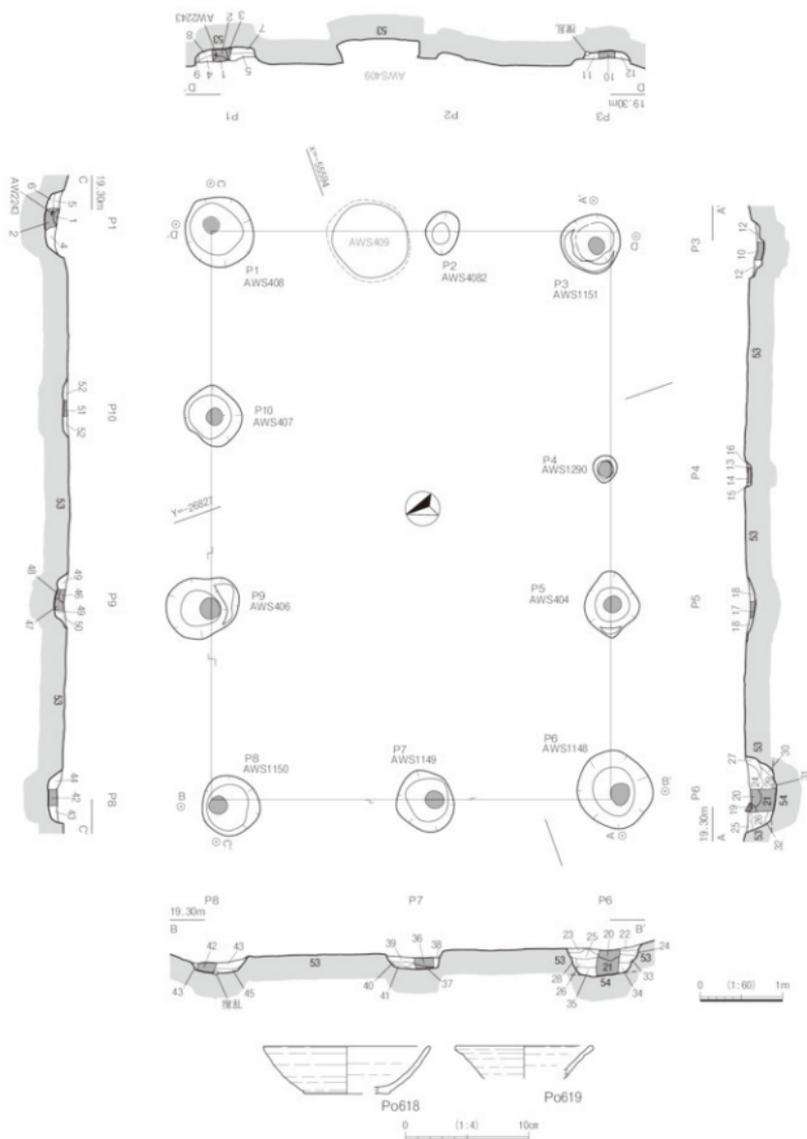


図224 A区 掘立柱建物42 平面・断面・出土遺物

表16 A区 掘立柱建物42 土層注記

番号	土色・土質	備考
1	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)合
2	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)合
3	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-4cm)合
4	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm、径-5mm主体)合
5	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-4cm、径-5mm・径1-2cm主体)合
6	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少合
7	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)合
8	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少合
9	10YR2/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)多合
10	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)合
11	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5cm、径-1cm主体)多合
12	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm、径-1cm主体)多合
13	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
14	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)合、ややしまる
15	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)合
16	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)合
17	10YR3/1黒褐色シルト	(径-5mm)少合、炭(径-5mm)少合
18	10YR2/1黒褐色シルト	(径-1cm)少合
19	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)合
20	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少合
21	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)合
22	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
23	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)少合
24	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)合
25	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)合
26	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少合
27	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少合
28	10YR2/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少合
29	10YR2/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-1cm主体)合

番号	土色・土質	備考
30	10YR2/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少合
31	10YR3/1黒褐色シルト	ロームブロック(径-1cm)少合
32	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-5mm主体)少合
33	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少合
34	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少合
35	10YR3/1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm)少合
36	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少合
37	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
38	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)少合
39	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)合
40	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
41	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
42	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)合
43	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)多合
44	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)多合
45	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)多合
46	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
47	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)合
48	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
49	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm、径-5mm主体)多合
50	10YR3/2黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)多合
51	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少合
52	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少合
53	2.5Y6/8明黄褐色砂礫	AT又はその二次堆積
54	7.5YR6/6褐色シルト	→柱上粘土主体
	●53・54	不明層

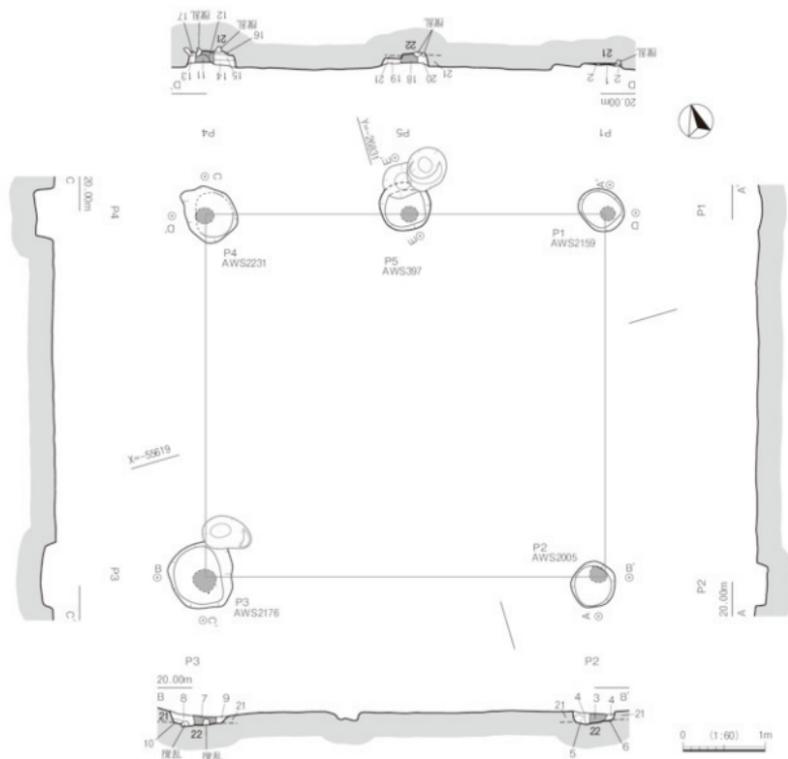
きない1棟から成るが、それぞれの方位は近似もしくは直交に近い形に対応しており、互いの関連性は高いと考えられる。また、各建物の身舎は著しく接近、重複しており、規模及び建物の向きを変化させつつ、同一敷地において4次に亘る建替えを経たものと理解される。具体的には柱穴掘方の重複関係から、掘立柱建物45が掘立柱建物43・46に後出することが判明しているが、それ以上は判然としない。各建物からの出土遺物を見る限り、いずれも平安時代以降の帰属と想定できるが、そこから更に詳細な構築順を導き出すのは困難である。そこで、方位や平面規模の類似性をもとに勘案すると、南北棟の掘立柱建物44から長軸が不明な掘立柱建物43へと遷り、次いで掘立柱建物41・42と方位・規模が似通る掘立柱建物46が構築され、その後掘立柱建物46と西側梁を重複し、桁行が拡張され長尺となる掘立柱建物45に至る変遷案を提示しておきたい。以下、各建物について詳細を述べる。

掘立柱建物43(図225・226) Q23・24、R23・24に跨がり、当該建物群の中では最も東側に位置する。検出できた銅柱は5基で、現状では桁行2間、梁行2間の規模に復元できる。この場合、3基の柱穴が後世の改変により消失した可能性が考えられるが、本遺跡で検出した平安期の掘立柱建物は桁行3間が主体となることから、柱穴掘方を更に消失している可能性が残る。方位は東西棟とした場合、N-74°-W、桁行、梁行共に2間とした場合の規模は桁行4.45m、梁行4.46mである。なお、本建物の柱穴P5が掘立柱建物45の柱穴P1と重複し、掘り込まれている。

銅柱P1～5の平面形は円形で、規模は径0.55～0.81m、検出面からの深さはP4を除いて0.2m以下、P1に至っては僅かに0.06mである。底面標高の差は0.19mで、顕著ではない。

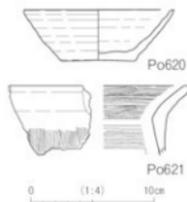
柱痕跡は検出した柱穴5基の全てにおいて確認し、その限りでは柱筋の通りは概ね良好である。柱間寸法は、柱穴が失われていないP1・P5・P4間でみると2.4～2.5mである。柱痕跡から想定される柱材の径は、0.2m程度が主体となる。

出土遺物は細片が多数を占めるが、2点を図示した。Po620は土師器の坏で、P4の柱痕跡(12層)からの出土である。遺存状態が良好で、且つ底面付近での検出のため、人為的に納められた可能性が高い。底部切り離しは回転系切りで、体部は概ね直線的に外傾して口縁部へ至るが、体部下半において



- | | |
|---|---|
| 1 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-1cm)少含 | 13 10YR3/1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-5mm)少含 |
| 2 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm主体)含 | 14 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-3cm, 径-1cm主体)含 |
| 3 10YR3/1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-3cm, 径-1cm主体)含 | 15 10YR3/2黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-1cm)少含 |
| 4 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-2cm)含 | 16 10YR3/1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-5mm)含 |
| 5 10YR3/2黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-2cm)多含 | 17 10YR3/2黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-5mm)少含 |
| 6 10YR4/2K黄褐色シルト AT, ロームブロック(径-1cm)多含 | 18 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-5mm)少含 |
| 7 10YR3/1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-1cm)少含 | 19 10YR1/7-1黒色シルト AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm主体)少含 |
| 8 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-5cm, 径-5mm主体)少含 | 20 10YR3/1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-1cm)少含 |
| 9 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-3cm, 径-1cm主体)少含 | 21 2.5Y7.6明黄褐色細礫-シルト(シルト主体) AT又はその2次堆積 |
| 10 10YR3/1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-1cm)少含 | 22 7.5YR6.6褐色シルト-粘土(粘土主体) |
| 11 10YR2/1黒色シルト AT, ロームブロック(径-3cm, 径-5mm主体)少含 | ※21-22 土製煉瓦 |

図225 A区 掘立柱建物43 平面・断面

図226 A区 掘立柱建物43
出土遺物

僅かに丸みを持つ。Po621は土師器の甕で、断面「く」字状の口縁部片である。Po620の土師器環は底部切り離しと器形から平安時代中頃以降の可能性が考えられ、本遺構の帰属時期を示すものとする。

掘立柱建物44(図227・228) Q24, R24に位置する桁行3間、梁行1間の南北棟の建物で、規模は桁行6.19m、梁行3.47mと想定した。ただ、検出できた柱穴は7基で、1基は後世の改変により失われたと考える。身舎の大半が掘立柱建物45・46と重複しているが、先述のように柱掘方土士の切り合いはなく、厳密な先後関係は不明である。建物の主軸

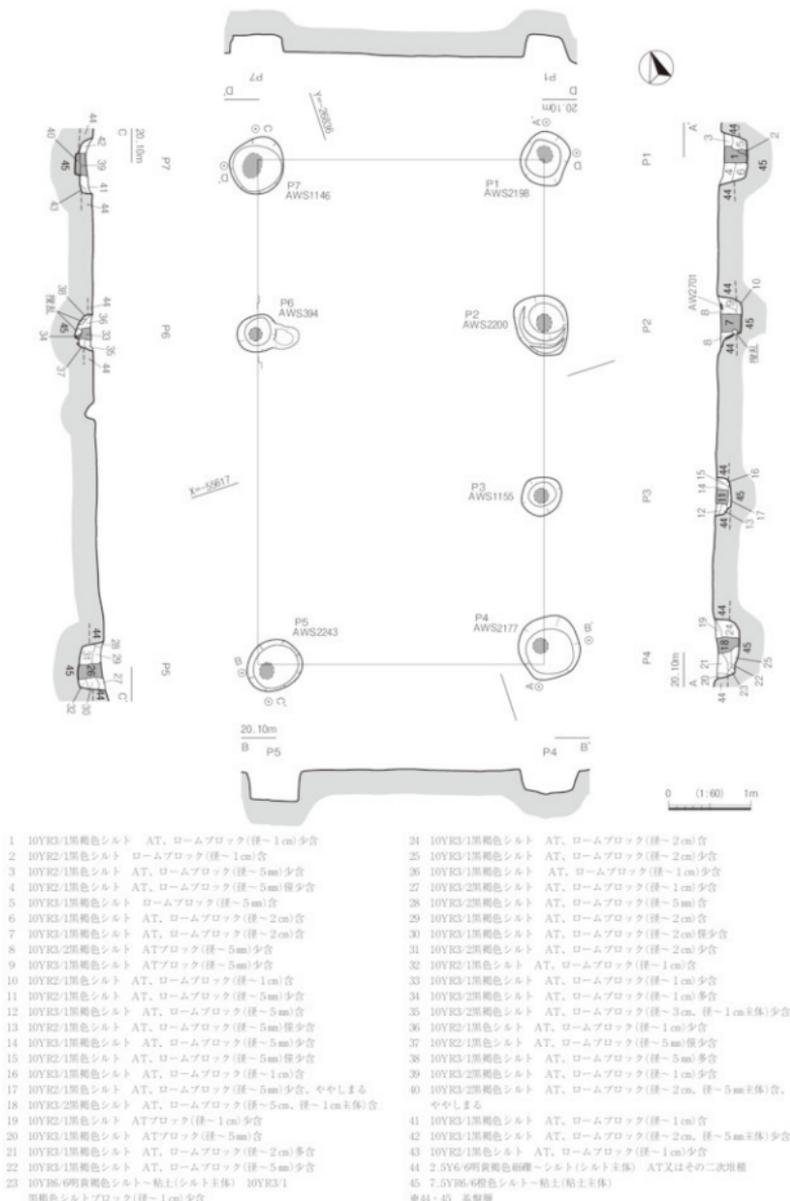


図227 A区 掘立柱建物44 平面・断面

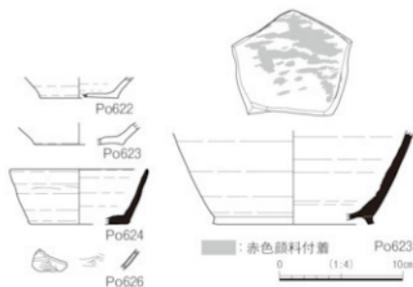


図228 A区 掘立柱建物44 出土遺物

柱痕跡は検出した全ての柱穴において確認した。柱筋の通りについては、桁行は悪くないが梁行はややずれが目立ち、全般的に揃っていないと言いはれない。柱間寸法は1.85~2.1m程度で2.0~2.1mが主体である。梁間は3.4~3.5m程度と桁間に比してかなり大きい。中間に柱が本来はあった可能性も残るが、その場合、柱間は狭きに過ぎる印象である。使用された柱材は柱痕跡から径0.2m前後と推定される。

遺物は各柱穴から出土し、5点を図示した。Po622・623は土師器の坏である。いずれも底部資料であるが、底部切り離しは回転糸切りである。詳細は不明ながら本遺構の時期比定における上限を示す資料と言えよう。Po624は須恵器で、無高台の坏。焼成がやや不良である。Po625は須恵器の壺で、長頸壺の底部片と考えられる。内面に赤色顔料が付着しており、パレット様に二次使用されたものと考えられる。Po626は緑釉陶器の細片である。器種は判然としませんが、内外面に施釉後ヘラミガキが施される。以上より、本建物の帰属時期は大雑把ながら平安時代中頃以降と考えられる。

掘立柱建物45(図229・230) Q24・25、R24に亘り検出された建物である。桁行5間、梁行2間の東西棟で、調査区西側で検出の掘立柱建物としては珍しい長舎である。検出した柱穴はP1~13の13基で、東側梁中間の柱穴は消失したため未検出である。方位はN-70°-Wで、規模は桁行10.65m、梁行4.67mである。先述のとおり柱穴掘方の重複関係により、掘立柱建物43・46に後出することが判明している。

側柱P1~13における柱穴掘方の平面形は円形、楕円形状を呈し、平面規模は径0.34~0.74mと幅があるが、多くは0.5m以下で建物規模の割に柱穴は小規模である。検出面からの深さは0.18~0.43mだが多くは0.2m台で、本調査区における掘立柱建物の例に漏れず遺存状態は悪い。各柱穴の底面標高差については0.16mと比較的小差に止まっている。

柱痕跡は、P2を除いた柱穴において確認した。P2については、掘り下げ前の精査で柱痕跡の位置を特定できず、埋土掘削が進んだ段階において判明したため、平面図・土層断面図に反映できていない。柱筋の通りは概ね良好だが、柱間寸法は1.95~2.55mと一定しない。また、両桁間で相対する柱穴掘方の位置関係についても、P5とP11のようにズレが顕著な箇所が認められる。柱痕跡からみた柱材の規模は、径0.15~0.2mに概ね復元できる。

遺物出土量は全般に低調であったが、P2から比較的多数の出土があった。ただ、いずれも破片で器形全体が復元できるような資料はなく、柱穴掘方埋土に混入したものと考えられる。Po627は土師器坏の底部資料で、底部切り離しは回転糸切りである。体部下位が丸みをもち底部より立ち上がる。復元

方位はN-18°-Eである。

本建物の柱穴掘方の平面形は円形で、規模は0.45~0.73mと個体差がある。これは掘方上半が削平され、下位のみで遺存であることが要因の一つであろう。つまり、多くの柱掘方の断面形態は逆台形を呈しているため、その度合いが検出面における平面規模に反映すると思われる。検出面からの深さは0.17~0.33mである。各柱穴における底面標高の最大差は0.23mで、目立った傾向は見出せない。

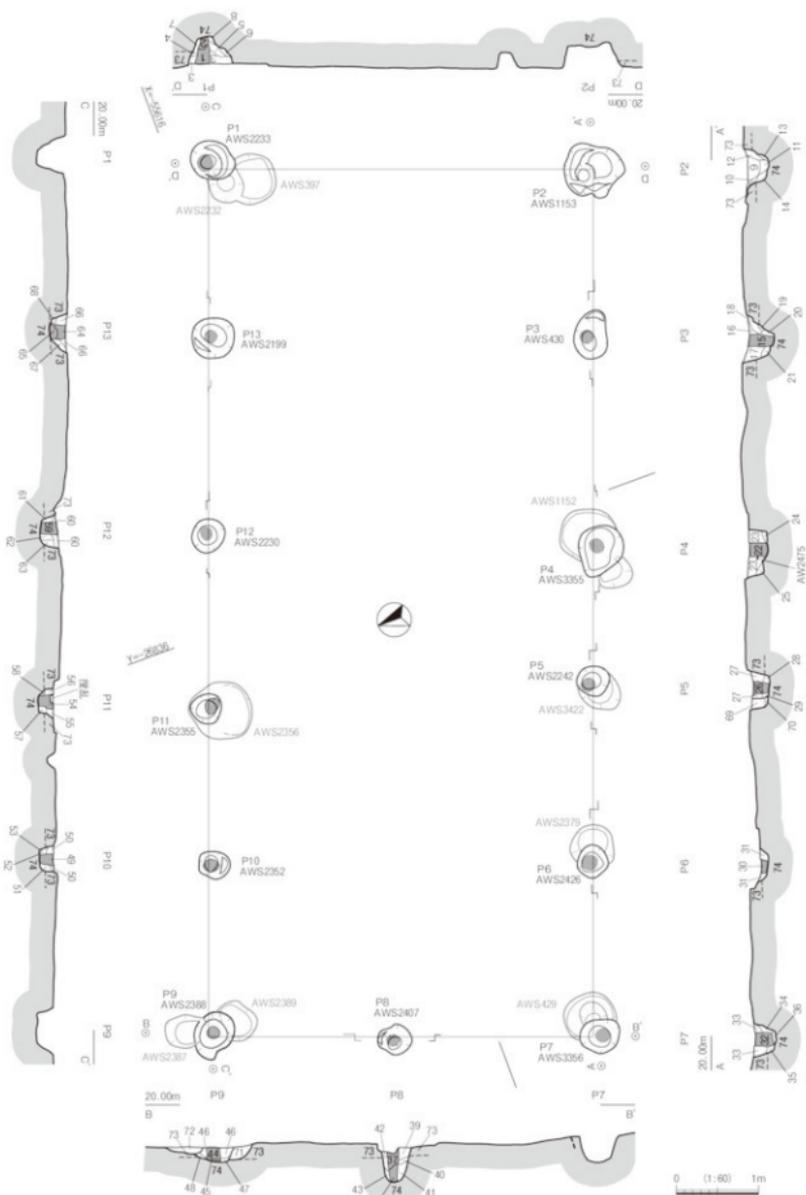


図229 A区 掘立柱建物45 平面・断面

表17 A区 掘立柱建物45 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	39	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
2	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	40	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
3	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	41	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
4	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	42	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
5	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	43	10YR2-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
6	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)多含	44	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm, 径-5mm土体)少含
7	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	45	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm土体)少含
8	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	46	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少含
9	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm, 径-1cm土体)少含	47	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含
10	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	48	10YR2-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含
11	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	49	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm土体)少含
12	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	50	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含
13	10YR4-1褐色土	AT, ロームブロック(径-1cm)多含	51	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多含
●9-13 柱状穴埋土か			52	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含
14	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少含	53	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)多含
15	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	54	10YR2-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含
16	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	55	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含
17	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	56	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
18	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	57	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含
19	10YR4-2R黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含, ややゆるい	58	10YR2-1黒色シルト	ロームブロック(径-1cm)少含
20	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多含	59	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含
21	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少含	60	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
22	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm, 径-5mm土体)少含	61	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含
23	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm, 径-5mm土体)少含	62	10YR2-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)極少含
24	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	63	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
25	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	64	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含
26	10YR1-7.1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含	65	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含
27	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含	66	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
28	10YR2-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	67	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
29	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	68	10YR2-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)極少含
30	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	70	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含
31	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm, 径-5mm土体)少含	●69-70 AWS342埋土(掘立柱建物15 P.4)		
32	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	71	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm, 径-5mm土体)少含 ●AWS289埋土(掘立柱建物15 P.8)
33	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	72	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm, 径-5mm土体)少含 ●AWS289(ピット埋土)
34	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含	73	2.5Y7.6明黄褐色硬質シルト(土体)	AT又はその2次崩壊
35	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含	74	7.5YR7.6褐色シルト-粘土(粘土土体)	褐色を呈するローム層
36	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多含, ややしみる	●73-74 基盤層		
37	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少含			
38	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少含			

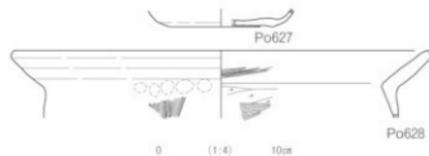


図230 A区 掘立柱建物45 出土遺物

掘立柱建物46(図231) Q24・25に位置する桁行3間、梁行2間の東西棟の建物で、規模は桁行5.90m、梁行4.80mである。方位はN-71°-Wで、掘立柱建物45とは西側梁と両桁行全体が重複しており、掘立柱建物45は本建物と同一場所に桁行を増す形で建て替えられている。また、本建物は方位、規模共に北側に位置する掘立柱建物41・42と近似し、同時期性、関連性の高さが窺える。

側柱P1～10における柱穴掘方の平面形は円形で、規模は径0.46～0.77mである。検出面からの深さは、最大で0.4mだが、ほとんどが0.3mを切りP10は僅か0.05mに止まる。底面標高の最大差は0.22mで、他の建物とさほど変わらないが、各柱掘方を比較すると不揃いな印象である。

柱痕跡は、全柱穴のうち半数の確認に止まった。柱穴掘方の遺存状態の悪さに加え、掘立柱建物45の柱穴掘方に掘り込まれていることも影響している。柱痕跡は直線状に綺麗には並ばず、柱筋の通りは良好とは言えない。柱痕跡から復元される柱材径は0.18～0.19m程度と推測される。柱間寸法は、梁行における数値だが2.1m前後である。

ながら底径は8.7cmと大きく、口径は15～16cm程度的大型品と考えられる。Po628は土師器の甕で、断面「く」字状を呈する口縁部片である。良好な出土状況を示す資料を欠くが、底部回転糸切り離しの土師器坏出土から、平安時代中頃に比定される。

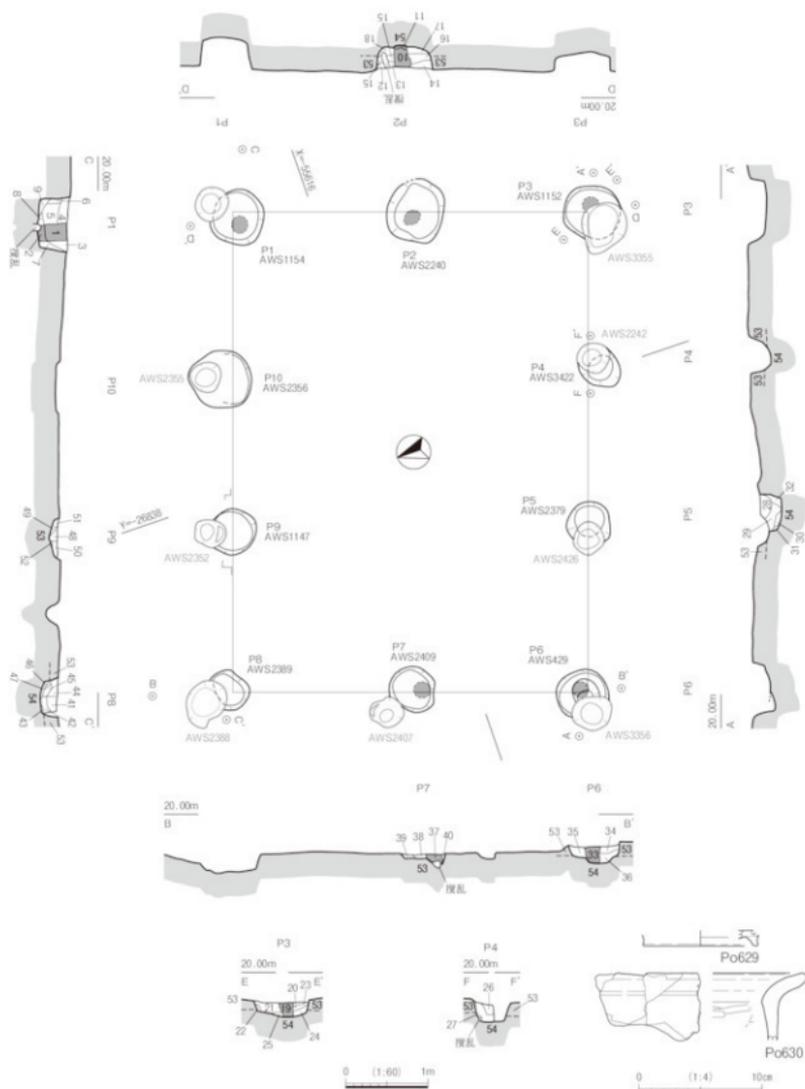


図231 A区 据立柱建物46 平面・断面・出土遺物

出土遺物は僅少で、2点を図示した。Po629は土師器の高台坯の底部、Po630は土師器甕の口縁部。両者ともに破片資料で良好な遺物の出土がなく、詳細な時期比定は困難だが、近接する建物群の年代視と齟齬を生じるものではなく、平安時代中頃以降に帰属すると考えられる。(加藤)

表18 A区 掘立柱建物46 土層計誌

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm)少含	30	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)多含
2	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)含	31	10YR7-6明黄褐色シルト ～粘土(シルト)多	10YR3-2黒褐色シルトブロック(径-5mm)少含
3	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm、径-5mm)多 少含	32	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)僅少含
4	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含	33	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)含、ややゆるい
5	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-1cm)多 含	34	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)僅少含
6	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含	35	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm、径-5mm)多 含
7	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)僅少含	36	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
8	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含	37	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
9	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)含	38	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)僅少含
10	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含	39	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)含
11	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)僅少含	40	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含
12	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含	41	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含
13	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-3cm)少含	42	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm、径-5mm)多 少含
14	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)少含	43	10YR7-6明黄褐色砂 ～シルト(シルト)多	10YR2-1黒色シルトブロック(径-5mm)僅少含
15	10YR2-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含	44	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
16	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm、径-1cm)多 含	45	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
17	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)僅少含	46	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含
18	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含	47	10YR7-6明黄褐色砂 ～シルト(シルト)多	10YR2-1黒色シルトブロック(径-5mm)少含
19	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)含	48	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm、径-5mm)多 少含
20	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含	49	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少含
21	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含	50	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-5cm、径-1cm)多 少含
22	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)多 含	51	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-1cm)含
23	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)含	52	10YR4-2灰黄褐色シルト	ATブロック(径-1cm)多含
24	10YR3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含	53	2.5YR6-6明黄褐色細砂 ～シルト(シルト)多	AT又はその二次用規
25	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含	54	7.5YR6-4(土)黄褐色シルト ～粘土(シルト)多	AT又はその二次用規
26	10YR3-2黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-1cm)少含			
27	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-5mm)少含、 ややしまる			
28	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-5mm)少含			
29	10YR2-1黒色シルト	AT、ロームブロック(径-2cm)多含			

掘立柱建物47(図232、PL.61)

M24・25、N25で、段丘面の西端に位置する掘立柱建物である。本遺構の一部は、現代における浄水場設置、道路敷設等の改変により失われている。平面規模は桁行4間、梁行1間で、身舎の平面形は細長く特徴的な形態を示す。本建物の北側は、現代の道路敷設に起因する改変により大幅に掘削されているため、桁行は更に北側へ延びていた可能性がある。建物の主軸方位はN-21°Eで、現状で遺存する身舎は桁行10.23m、梁行2.40mである。

本遺構は、南西～北東方向へ延びる平安時代帰属の道路遺構と重なって位置し、本建物柱掘方の一部(P1～3、8・9)は道路遺構の盛土(第2段階)を掘り込む。また、道路遺構は側溝の走向から、一部道路幅員を拡張した箇所を持つと判断しているが、本建物は当該拡張部において側溝と方位を概ね揃えて位置する。さらに、本建物に面した側溝の埋土中より多数の土器が出土したことから、本建物は道路遺構機能時に構築されたと想定するに至った。

本遺構を構成する柱穴はP1～9で、P3～P4間に後世の改変により消失した1基を見込む。各柱穴掘方の平面形は円形ないし楕円形で、径は0.32mから0.60mと幅があるが、0.3、0.4m台が主体となる。検出面からの深さは0.65～0.95mで、多くは0.8m以上と柱穴掘方の平面規模からすると大きな数値を示す。建物付近は道路遺構の盛土が遺存しており、比較的后世の削平が少ないことを差し引いても、この深さは特異である。本遺構の周辺では比較的多数の小穴が検出されており、これらは平面規模が径0.2～0.3m台程度にも関わらず、深さは0.5m以上あるものが多く、類似した特徴を示す。ただ、柱穴掘方とした柱穴に比べると規模が若干小さく、補助的な柱穴といった機能が想定されるものの、配置的に判然としにくい。各側柱掘方における底面標高の最大差は0.32mであるが、数値以上に各柱穴底面は不揃いで、規格性は低い。

柱痕跡の把握は果たせなかった。掘方の平面規模が小さい割に深いことも手伝い、半截後の埋土堆積状況の把握が困難であった。ただ、全般に埋土の締まりが弱いこと、掘方の平面規模が小さいこと

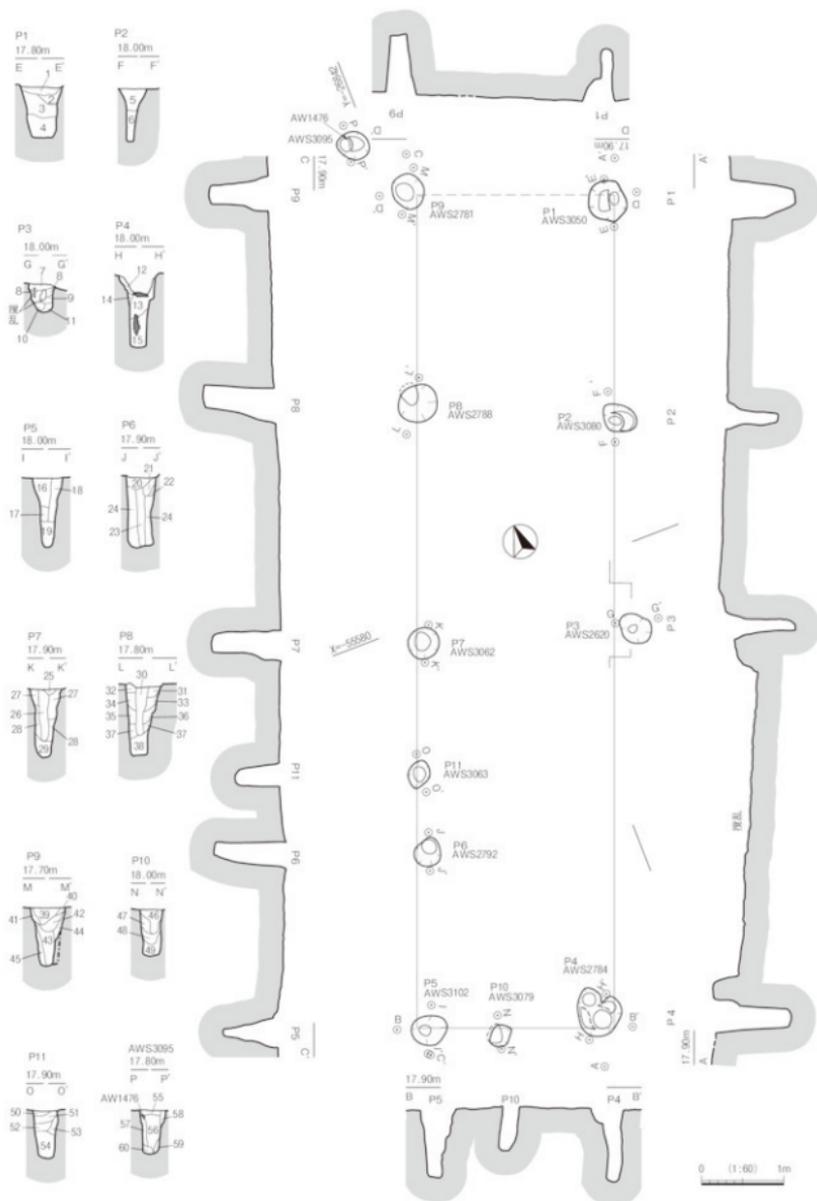


図232 A区 掘立柱建物47

表19 A区 掘立柱建物47 土層注記

P1			P8		
番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	2.5Y3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5cm)少	30	10YR3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少
2	10YR6-4(土)黄褐色シルト	ATブロック(径-2cm)少	31	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)多
3	10YR6-4(土)黄褐色シルト	ATブロック(径-5cm)少	32	10YR3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-2cm)少
4	2.5Y4-2黄灰黄色シルト	ATブロック(径-10cm)少	33	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-1cm)少
P2			P9		
番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
5	2.5Y3-2黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)少	35	10YR1-7.1黒褐色シルト	ATブロック(径2-3mm)少
6	2.5Y3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm、径2-3mm土塊)少	36	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5cm)少
7	2.5Y2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-1cm)少	37	10YR2-1黒褐色シルト	ATブロック(径-5cm)少
8	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)多	38	10YR2-1黒褐色シルト	
9	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)少			
10	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)少			
11	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)少			
P4			P10		
番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
12	2.5Y2-1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm、径1-2mm土塊)少	39	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少
13	10YR4-2R黄褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)多	40	10YR1-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少
14	2.5Y3-1黒褐色シルト	AT、ロームブロック(径-5cm)多	41	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少
15	10YR4-2R黄褐色シルト	ATブロック(径-5cm)少	42	10YR2-2黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少
			43	10YR3-2黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少、ややゆるい、柱痕跡の可能性有り
			44	10YR3-2黒褐色シルト	ロームブロック(径-5mm)少
			45	10YR4-2R黄褐色シルト	ロームブロック(径-2cm)少、ややゆるい
P5			P11		
番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
16	10YR3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-5cm)少	46	2.5Y3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-2cm)少
17	10YR4-2R黄褐色シルト	ロームブロック(径-3cm)少	47	2.5YR2-2黒褐色シルト	ロームブロック(径-10cm)少
18	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)少	48	2.5YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径1-2mm)多
19	2.5Y3-1黒褐色シルト		49	10YR6-4(土)黄褐色シルト	ATブロック(径-3cm)少
P6			P12		
番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
20	2.5Y3-1黒褐色シルト	ATブロック(径1-2mm)少	50	2.5Y3-1黒褐色シルト	ATブロック(径2-3mm)少
21	2.5Y3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm、径1-2mm土塊)少	51	2.5Y3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-2cm)少
22	2.5Y4-2黄灰黄色シルト	ATブロック(径-5cm)少	52	2.5Y3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)少
23	2.5Y3-1黒褐色シルト		53	2.5Y3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)多
24	2.5Y3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm、径1-2mm土塊)少	54	2.5Y2-1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)少
P7			AWS306		
番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
25	2.5Y4-1黄灰色シルト	ATブロック(径-3cm、径1-2mm土塊)少	55	10YR2-1黒褐色シルト	ロームブロック(径2-3mm)少
26	2.5Y3-1黒褐色シルト		56	10YR1-7.1黒褐色シルト	
27	2.5Y3-2黒褐色シルト	AT径(径2-3mm)少	57	10YR2-2黒褐色シルト	ロームブロック(径2-3mm)少
28	2.5Y3-2黒褐色シルト		58	10YR2-1黒褐色シルト	
29	2.5Y2-1黒褐色シルト		59	2.5Y3-1黒褐色シルト	
			60	2.5Y2-1黒褐色シルト	

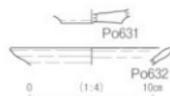


図233 A区
掘立柱建物47
出土遺物

から、柱材をほぼ掘方に接して据えた可能性が想定される。柱穴の配置からも看取できるように、柱間寸法は揃わず、2.5m前後が主体を占めるものばらつきが目立つ。また、良好な柱筋の通りを期待できるような柱穴掘方の配置にはない。このように、本遺構は規格的な建物とは言い難く、先述のとおり至近の偏溝から土器が多数出土したことを勘案すれば、祭事など特殊な用途に伴う、臨時的な施設の可能性がある。

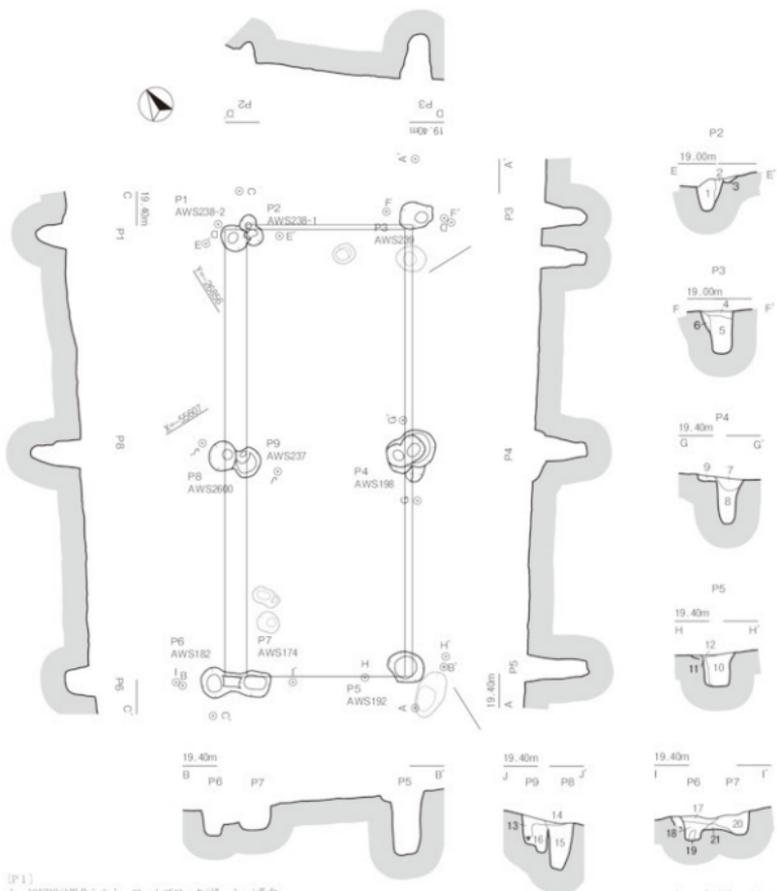
柱穴掘方埋土から出土した遺物は僅少であったが、2点を図示した。Po631は土師器の坏又は皿の底部資料。底部切り離しは回転糸切りである。Po632は土師器坏の口縁部小片。これらだけでは詳細な時期比定は困難だが、道路遺構出土遺物の帰属時期と齟齬を生じるものではない。既述のように、同遺構との強い関連性が窺えることから、平安時代後半の帰属と評価したい。(加藤)

掘立柱建物48(図234)

P26、Q26で検出した建物で、北東から南西に延びる道路遺構の東側に沿うように位置する。

建物は桁行2間、梁行1間の東西棟で、規模は桁行5.5m、梁行2.1mである。建物の主軸方位はN-30°-Eである。西側柱列はいずれも重複して柱穴があり、土層も切り合うことからP7はP6へ、P9はP8に立て替えられたと考える。

柱穴掘方の芯々間距離は、北側柱列のP1-P3間が2.3mとなるが、南側柱列ではP5-P6間が2.5m、P5-P7間が1.9mである。東側柱列ではP3-P4間が2.8m、P4-P5間が2.7mであるのに比べ、西側柱列はP7-P9・P6-P8が隣立し、間隔は2.8m・2.7mである。またP1とは、P8・P9



- [P1]
- 1 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径~1cm)多含
 - 2 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径~2cm)多含
 - 3 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径~2cm)少含
- [P2]
- 4 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径~1cm)少含
 - 5 10YR2/1黒色シルト
 - 6 10YR3/1黒褐色シルト ローム粒多含
- [P3]
- 7 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径~2cm)多含
 - 8 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径~1cm)少含
 - 9 10YR3/1黒褐色シルト ローム粒多含
- [P4]
- 10 10YR2/1黒色シルト
 - 11 10YR3/1黒褐色シルト ローム粒多含
 - 12 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径~1cm)少含
- [P5]
- 13 10YR2/1黒色シルト ロームブロック少含
 - 14 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径~1cm)多含
 - 15 10YR2/1黒色シルト
 - 16 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック多含

- [P6]
- 17 10YR2/1黒色シルト ローム粒含
 - 18 10YR2/1黒色シルト ロームブロック少含
 - 19 10YR4/4褐色シルト 10YR4/7褐色シルト含
 - 20 10YR3/1黒褐色シルト ローム粒極少含
 - 21 10YR4/1褐色シルト ロームブロック多含



図234 A区 据立柱建物48 平面・断面・出土遺物

が対応し、間隔は2.7m・2.8mである。このうち東側の軸に対応するのはP7-P9-P1で、P6-P8-P1ではさらに5°東に振る。建て直しの柱が外側に位置するのも考えにくいので、P2・P6・P8は補助柱穴と推測する。

柱穴の形状は不整な円形で、径は0.21m~0.45m、検出面からの深さは0.25m~0.87mとばらつきがあることから、必ずしも柱を抜き取るのではなく、新たな柱を添えた可能性もあるだろう。埋土は黒色または黒褐色シルトを主体とし、ロームブロックを含む。いずれも柱痕跡は確認できない。

遺物はP3・4・8・9から出土しており、P3出土のPo633、P4出土のPo634を図化した。

出土遺物のほか柱穴の形状や規模及び埋土、建物の構造等から平安時代の建物と考える。(八峠)

その他の遺構

AES205(図235~239、PL.62・110)

N7で検出した遺構である。

機械掘削後、基盤層の上面に広がる黒色シルトの範囲を精査していたときに完形の銭貨1枚(銭貨No.1)と破片1枚(銭貨No.3)が出土した。周辺をさらに精査すると、2枚の銭貨(No.2、4)が立った状態で埋まっており、その周辺で土が白くなっていた状況が確認できた。銭貨の一部が白く脆くなっていたことから、土が白くなっているのも銭貨が劣化したものの可能性が考えられた。そのため、銭貨が出土した部分とその周辺を一辺約0.3m、厚さ約0.2mの範囲で土ごと切り取って持ち帰った。

その後、室内で土を少し除去して立っていた完形の銭貨No.2と割れていた銭貨No.4の上半分を取り外すことができたが、かなり脆弱であることから、No.4の下半分を含めてこれ以上の銭貨の取り出しは行わないこととした。

完形の銭貨2点のうち、No.1については左側の文字が不鮮明ながら銭文が判読でき、「延喜通寶」と考えられる。No.2は銭文が不明瞭ながら、右側の字形がNo.1と類似しており、「延喜通寶」の可能性が高い。

検出した段階から、銭貨の保存状態が良くなく、劣化が進んでいたことから、非破壊で行える分析で土中の状況などを把握することとした(以下、遺構切り取りの分析などは銭貨No.1~3とNo.4の上半分を外した状態で実施)。

まず、当センターにおいて軟X線透過撮影を下記の条件で実施した。

撮影装置：SOFTEX社製	管電圧：120kVp	管電流：2mA
照射時間：180秒	使用フィルム：富士フィルム	FR

遺構切り取り(写真1)は、土の厚さがあり全体にX線の透過がよくないが、銭貨と周りの白い部分を中心にはほとんど透過しなかった。そのため、検出できたもの以外にも土中に銭貨が残っている可能性が考えられた。また、取り上げることが出来た銭貨を撮影すると(写真2)、比較的残存状況が良さそうなNo.1に比べて劣化が進むNo.2、3の方がX線は透過しなかった。

銭貨でX線の透過に差があったことから、取り上げることが出来た完形の銭貨2点(No.1、2)について、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で表面の蛍光X線分析を下記の条件で実施していただいた。

撮影装置：エネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製EAGLEⅢ)		
励起用X線源：モリブデン(Mo)管球	管電圧：40kV	管電流：30μA

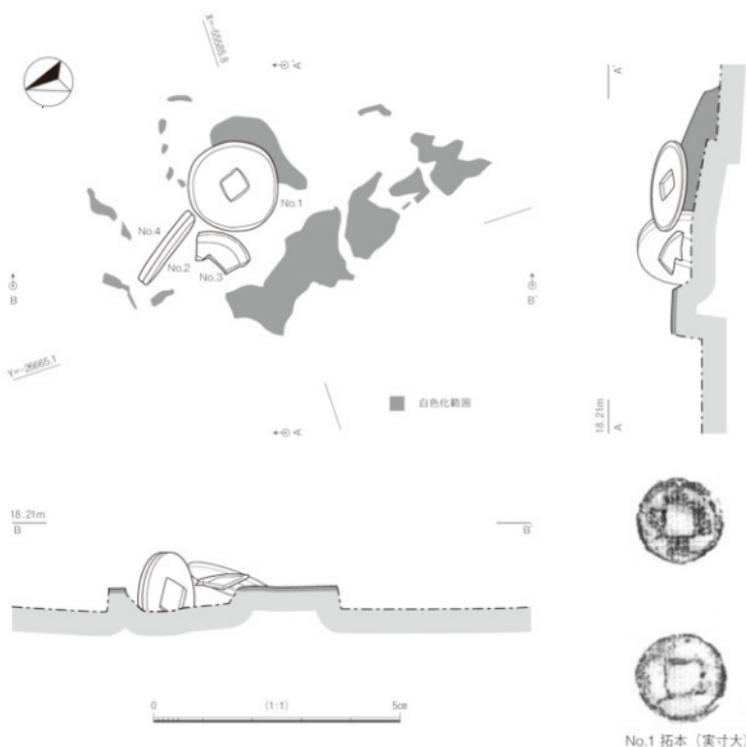
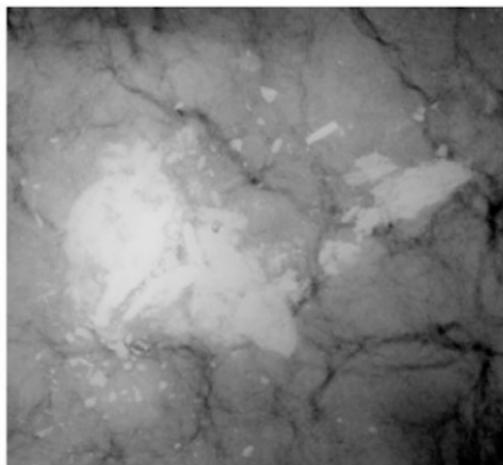


図235 A区 AES205

測定時間：100秒 X線照射径：75 μ m 測定雰囲気：大気

分析結果は図236に示した。いずれも表面で鉛(Pb)が顕著に検出される点で共通するが、No.1は銅(Cu)が強く検出されているのに対し、No.2では銅の検出強度がきわめて小さい。いずれの資料も複数の測定箇所について同様の分析を実施したが、同様の傾向が認められた。X線透過撮影の画像においても、No.1よりもNo.2の方が資料の厚みが薄いかかわらず、X線の吸収が大きいため、No.1のほうが銅の含有量が多く、相対的に鉛の含有量が少ないと推定される。なお、No.1ではヒ素(As)が検出されており、銅原料に伴う成分と考えられる。ただし、それぞれの成分の含有量については、表面の非破壊測定のため、この分析では明らかにすることはできない。特にNo.1の表面から検出された鉛については、No.2を含めた残余の銭のほとんどが鉛を主成分とすると推定されるため、周囲からの汚染の影響も大きいと考えられる。

さらに、遺構を切り取ったものの中にどのような形で銭貨が残っているかを調査するため、X線CT撮影および画像解析を実施することとした。蛍光X線分析の結果から、鉛を多く含有する銭貨が含まれることから、より高エネルギーの撮影装置を用いることとし、銭文の確認も行えるよう高精細な撮影を行うこととした。撮影条件は以下のとおりである。



左：写真1

A区 AES205遺構切り取り

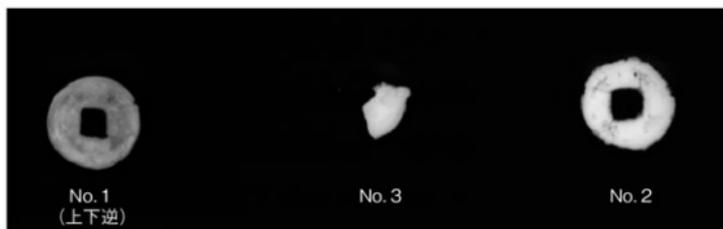
X線透過写真(ほぼ実寸大)

図235とほぼ同方向

下：写真2

A区 AES205出土銭貨

X線透過写真(ほぼ実寸大)

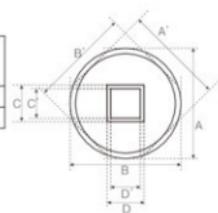
No. 1
(上下逆)

No. 3

No. 2

表20 A区 AES205 出土銭貨計測値

	銭種	寸法(mm)							平均 銭厚 (mm)	重量 (g)	
		A	B	A'	B'	C	D	C'			D'
No.1	延喜通寶	19.28	19.08	14.88	14.84	7.31	7.59	5.88	5.85	1.80	1.99
No.2	延喜通寶	19.21	19.28	14.70	14.53	7.67	7.67	6.84	6.51	1.55	2.33



撮影装置：(株)日立製作所製HiXCT-9M-SP

X線最大エネルギー：9MeV

撮影方式：HiBrid方式

(高精度・日立オリジナル)

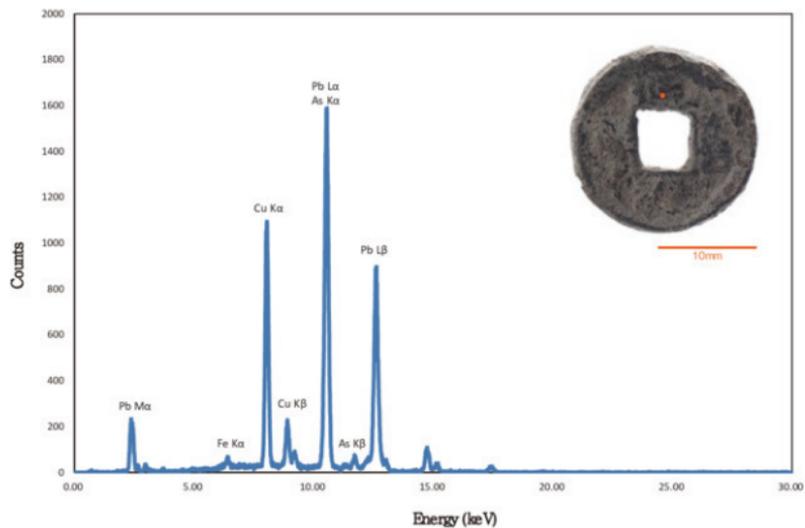
スライス厚：0.5mm

CT画像サイズ：3000×3000pixel

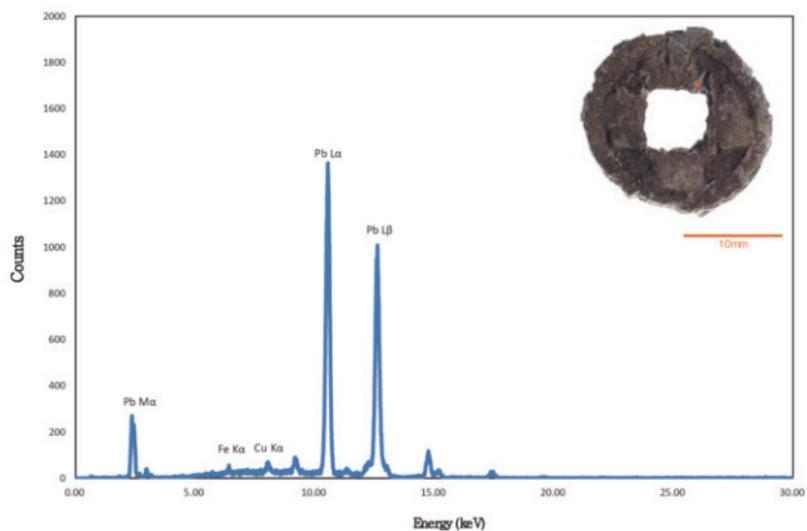
画素サイズ：0.2×0.2mm

X線CT画像を基に作成した三次元CGを図237に示した。銭貨は検出面から0.02mの間のごく浅い部分にのみ分布しており、そのほとんどが割れてばらばらになっていた。そのため、後世の耕作などの攪乱によって当初の状況は壊されてしまったと判断した。一方、立った状態で見つかった銭貨No.2、4の横にもう1枚(埋没銭貨B)が立っており、反対側にも傾いた形で1枚(埋没銭貨A)が埋没していることが確認できた。そのため、当初は銭貨が1箇所にまとまっていた可能性がある。

銭文については、銭貨が細片化していたことや劣化が進んでいたことから判読するのが困難であった。その中で埋没銭貨Bについては下に「通」と思われる文字が確認でき、銭貨No.1と同様に「延喜



錢貨 No. 1



錢貨 No. 2

図236 A区 AES205出土錢貨蛍光X線スペクトラル

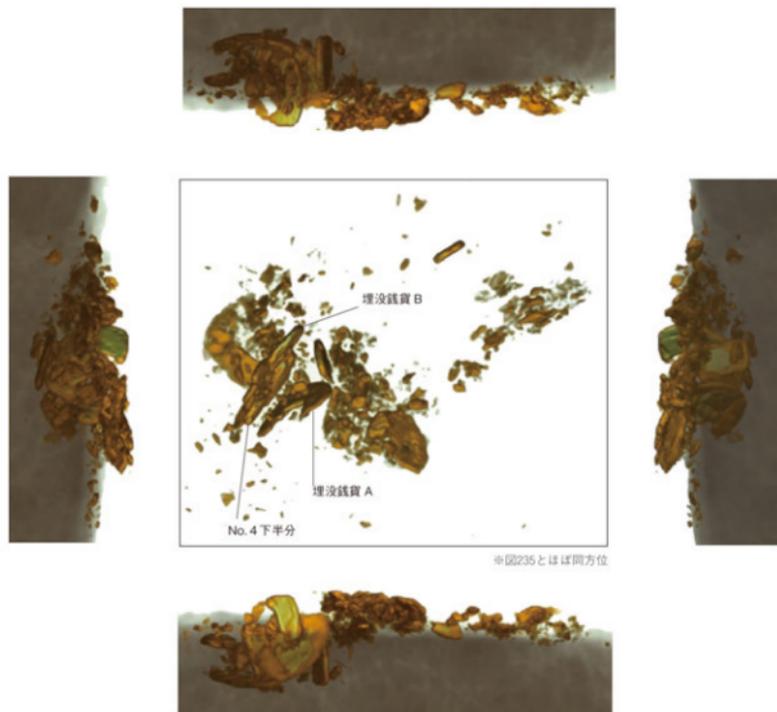


図237 A区 AES205 遺構切り取り内銭貨 三次元CG(ほぼ実寸大)

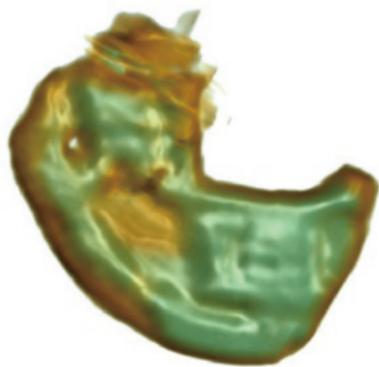


図238 A区 AES205 遺構切り取り内 埋没銭貨B 三次元CG(ほぼ5倍)

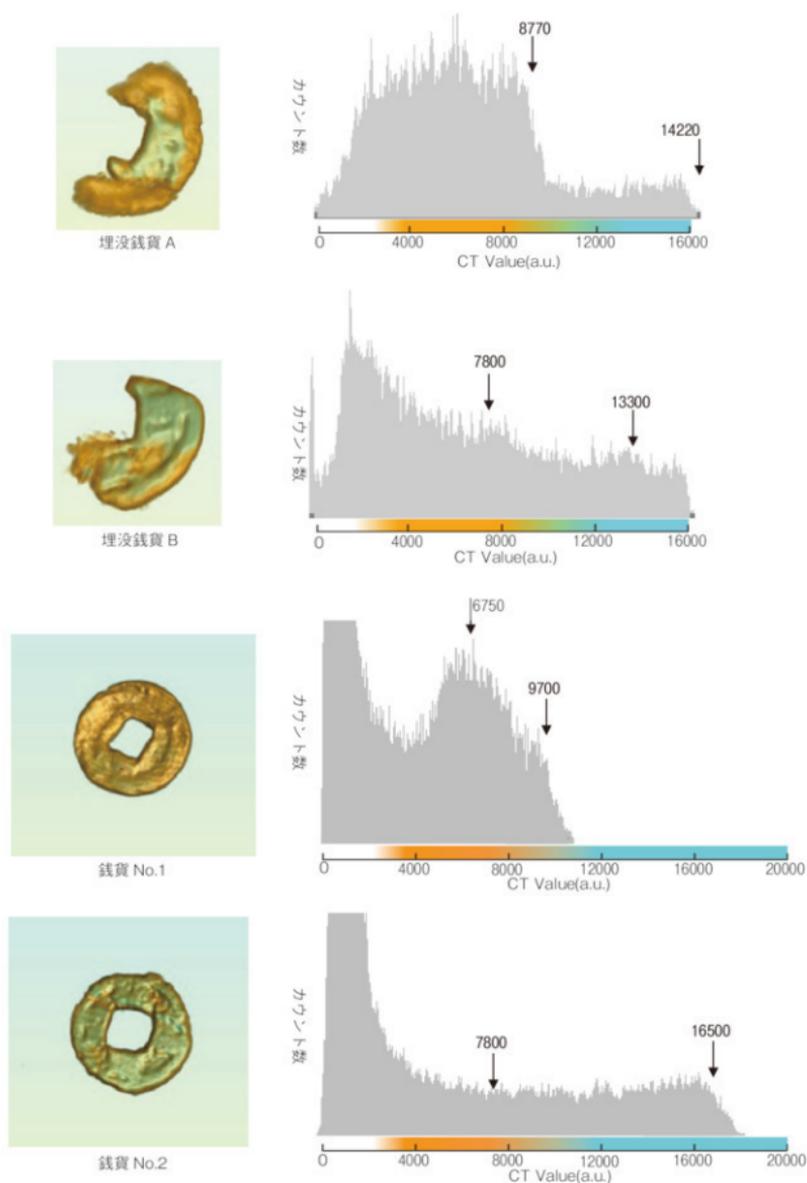
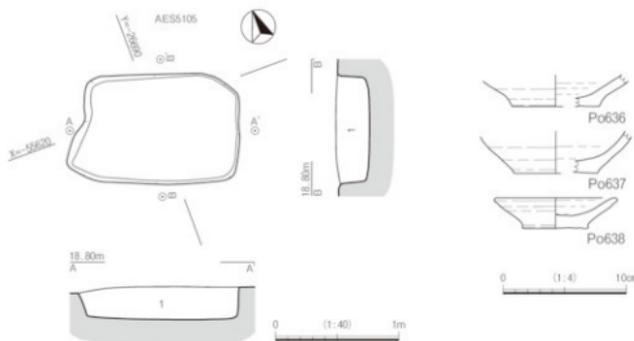
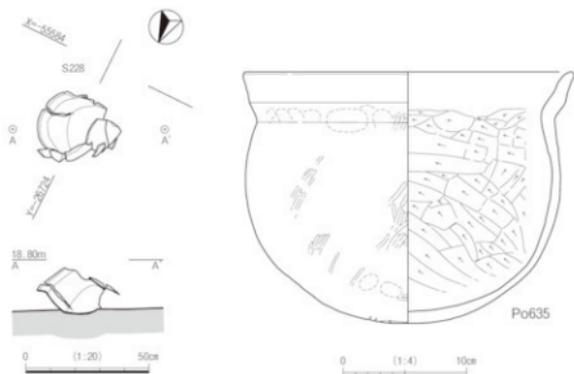


図239 A区 AES205出土銭貨 CTヒストグラムとカラーマッピング



1 10YR2-1黒色シルト ATブロック(=10cm)多含

図240 A区 S228・AES5105 平面・断面・出土遺物

通寶」の可能性が高い(図238)。

また、土中の銭貨について、CT値のヒストグラムとCT値の分布を色分けしたカラーマッピングを行った。その結果、傾向の異なる2種類があることが確認できた。図239に代表的な銭貨のヒストグラムとカラーマッピングを示した。1つはCT値が8000a.u.前後までが多く、それよりも高いものが少なくなるもので、もう1つはCT値が10000a.u.以上の高いものを多く含むものである。蛍光X線分析を行った銭貨2枚との対応関係を知るためにNo.1とNo.2についても密度の分析を行ったところ、No.1は前者、No.2は後者に該当することが分かった。

CT値は試料の密度に比例しており、密度の高い鉛で18000前後、鉛よりも密度の低い銅で10000前後となる。銭貨は劣化が進んでいるので、本来の状態よりも密度が低くなっていると考えられるが、No.2ではCT値が鉛とほぼ同じものも分布していることが確認できる。蛍光X線分析の結果と合わせて考えると、高いCT値のものを多く含むものについては、鉛を多く含む銭貨である可能性が高い。

遺構の周辺は大型掘立柱建物の掘立柱建物12~15があり、その中の掘立柱建物12の中にあたる。延

喜通寶の初鋳が延喜7(902)年であり、大型掘立柱建物が造られた時期に近いことから、いずれかの建物を造る時に地鎮などの祭祀が行われた可能性がある。(田中)

S228(図240、PL.62・110)

N13で検出した。機械掘削後にⅢ層を人力掘削していると、土師器甕がやや傾いた状態で出土した。検出した甕は口縁部から体部の一部が失われていたが、全体の2/3以上が残っていた。おそらくⅢ層中にあった生活面から掘られた穴に据えたものと思われるが、穴などは明確に確認できなかった。そのため、Ⅲ層をすべて除去した状態で記録を行った。甕の中からは遺物は出土しなかった。

Po635は体部が全体に丸みを帯び、口縁部の外傾の度合いは緩い。口径に対して器高はやや低い。

遺構は古代のものであるが、この土器のみで詳細な時期を判断するのは難しい。(田中)

AES5105(図240)

R10杭付近で検出した土坑で、平面形は長軸1.34m、短軸0.88mの隅円方形を呈する。断面形は長軸の西壁がやや外傾し、それ以外の壁面はほぼ直立する。検出面からの深さは0.26mある。

平面形状から木棺墓の可能性を考えて平面、断面の観察を行ったが、埋土は基盤層ブロックを多く含む黒色シルトの単層で、棺の痕跡や裏込め土の痕跡は確認できなかった。

埋土からは土師器の坏や皿の破片が出土した。図化したものはすべて底部切り離しが回転系切りである。

出土遺物から平安時代中期の遺構であることは確認できるが、用途については土墳墓の可能性もあるものの、はっきりしない。(田中)

S531(図241)

N18中央北側で検出した遺構で、東側で竪穴建物11の壁溝を掘削する。

検出した平面は不整な楕円形で、径0.81m～0.92m、検出面からの深さは0.11mで、底面はローム層中である。断面形は不整な皿状で、底面は概ね平坦である。平面は不整な楕円形で、径0.52m～0.73mである。

埋土は黒色シルトの単層で、褐色シルトブロックを多量に含む。

遺物は埋土から出土し、土師器の坏Po639を図化した。

出土遺物及び埋土から平安時代の土坑と考える。(八峠)

AWS3357(図241、PL.62)

Q16中央東側で、竪穴建物10の内側に位置し、壁溝の一部を掘削する。

平面は北西から南東方向に軸をもつ不整な楕円形で、黒褐色シルトの不整な広がりの中に、土師器の甕Po640が横倒しになり上部を欠損した状態で検出した。径0.65m～0.83m、検出面から底までの深さは0.38mあり、底面はローム層中である。

断面形は北側に段をもち、南側が柱穴状に深くなる不整形で、底面には起伏が大きい楕円形である。掘方の径は0.41m～0.69mある。

埋土は平坦面を境に上下に分かれ、ピット状の下層は底面に黄灰色シルトが、上にAT・ロームブロックを含む黒～黒褐色シルトが堆積する。平坦面より上は人為的に2層で埋め、甕が置かれたと考える。検出した段階には遺構の上部が掘削されていたため、本来の甕の遺存状況までは明らかではない。

出土遺物及び埋土から奈良時代から平安時代の土坑と考える。(八峠)

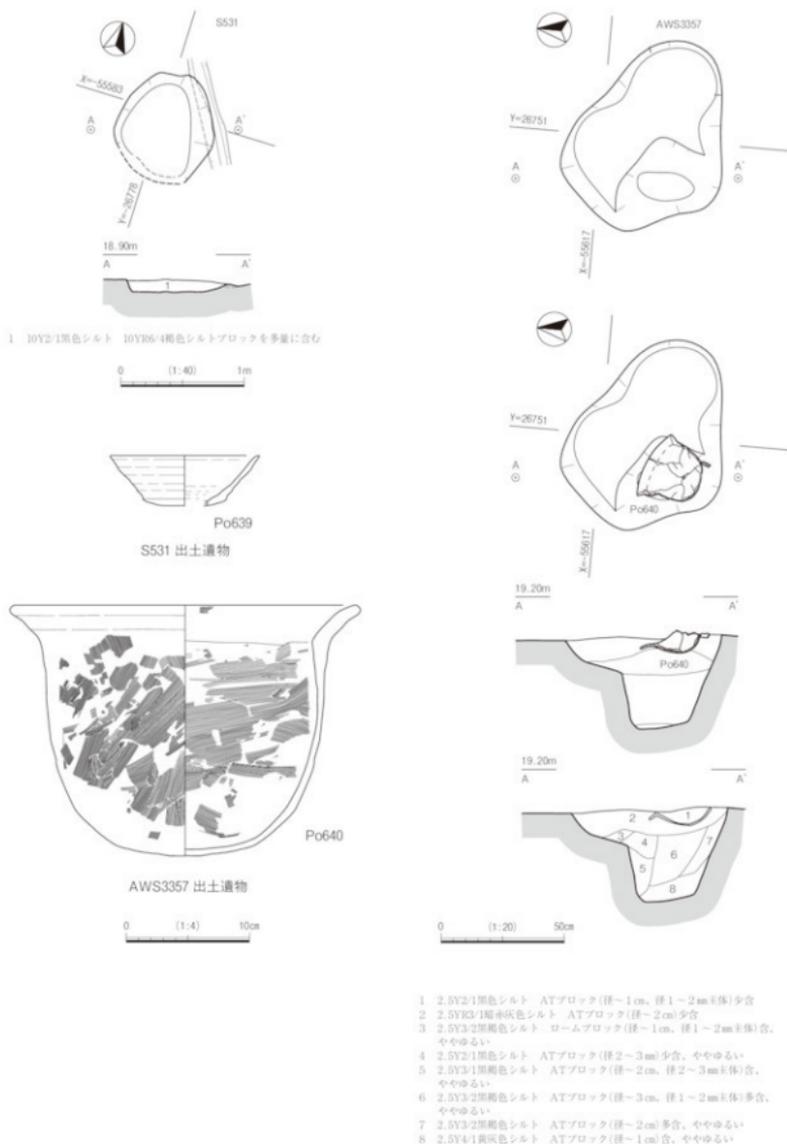


図241 A区 S531・AWS3357 平面・断面・出土遺物

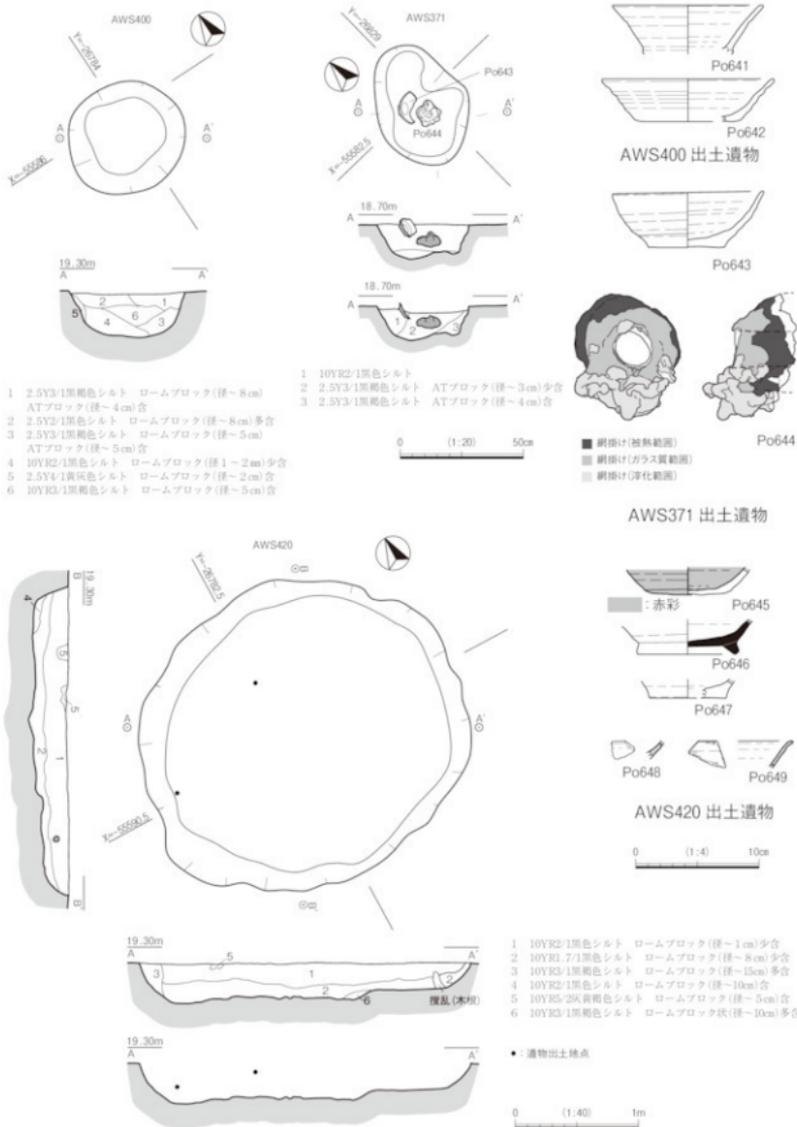


図242 A区 AWS371・400・420 平面・断面・出土遺物

AWS400(図242)

N19の中央で検出した。検出時の平面は不整な円形で、径0.89m～0.97m、検出面からの深さは0.36mで、底面はローム層中である。

断面形は椀状で、底面には木根状の窪みのほか、多少の起伏がある。壁面の立ち上がりは緩やかである。底面は平面が不整な隅丸方形、長軸0.64m、短軸0.61mである。

埋土は弥生時代の遺構埋土よりも明るい黒褐色シルトを主体とする。底面西側に4層があり、東側の検出面まではロームブロックを含む小単位の堆積が認められる。1～3・6層には大粒のブロックを含む。

遺物は埋土中から出土し、土師器の坏Po641・642を図化した。

出土遺物及び埋土から平安時代の土坑と考える。(八峠)

AWS420(図242)

N19、O19境の東側で検出した。

検出した平面は東西方向に軸をもつ不整な楕円形で、長径2.86m、短径2.44m、検出面からの深さは0.32mで、底面はローム層中である。

断面形は皿状で、底面は木根状の攪乱ほか起伏が認められる。底面の平面は楕円形で、長径2.39m、短径2.09mである。

埋土は黒色シルトが主体で、ロームブロックの多少で上下に分層できる。上層は細粒のブロック、下層は大粒のブロック主体で、水平方向に堆積する。周縁部には基盤層ブロックを多く含む層がある。

遺物は掘り下げ中に細片が出土し、5点を図化した。

出土遺物及び埋土から平安時代の土坑と考える。(八峠)

AWS371(図242、PL.63)

N23の北西側で検出した遺構で、東側約1mに掘立柱建物41がある。

検出した平面は南北方向に軸をもつ不整な楕円形で、径0.38m～0.51m、検出面からの深さは0.15mで、底面はATまたはその2次堆積土である。

断面形は起伏が大きく、さらに中央部分が窪む不整形である。底面も検出面と同じ形状で、径0.31～0.43mである。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体とし、底面から壁面にかけてATブロックを含む。

遺物は中央に輪羽口Po644、西隣に土師器の坏Po643が出土した。羽口は遺構の中央で送風口を斜め上部に向け、坏も傾いた状態で出土した。掘方の平面、断面ともに不整形であり、遺物も正位置では出土していないことから、廃棄されたと考える。

出土遺物及び埋土から平安時代の土坑と考える。(八峠)

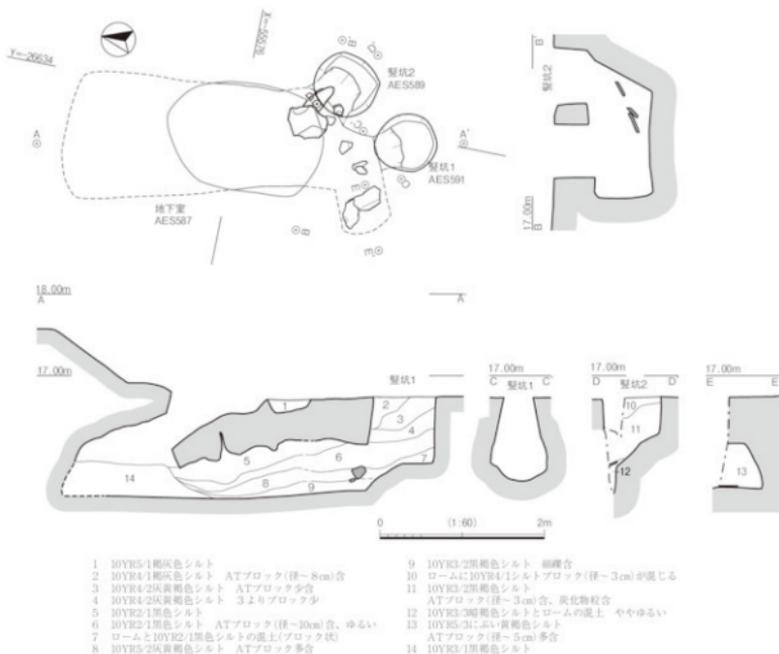


図243 A区 地下式坑1 平面・断面

第6節 中世以降の遺構

中世以降の遺構としては地下式坑と土墳墓、溝状遺構がある。地下式坑は調査区の東側で確認した。調査地東側の段丘下で昭和56年度に実施された調査でも多くの地下式坑が確認されており、県内で有数の地下式坑の集中域であることが確認できた。

地下式坑

地下式坑1(図243、PL.63)

M4の中央よりやや南寄りに位置する。竪坑は2箇所検出しており、地下室の南側にやや離れて竪坑1が、南東側に近接して竪坑2があり、竪穴1が地下室の主軸線上にある。地下室の天井部は奥壁側の3分の1程度と、地下室と竪坑間のトンネル状通路を除きほとんど崩落するが、地下室内への埋土流入後に崩落しており、検出面より天井がやや落ち込む程度で残存していた。

地下室底面の平面形は奥壁側が広い楕形を呈し、奥行きが3.34m、幅が入口側で1.20m、奥壁側で1.52mある。地下室の入口付近、トンネル状通路の西側に向けて、底面の平面形が円形に近く、断面が半アーチ形となる小横穴状の掘り込みを検出した。この掘り込みは底面の奥行きが0.51m、最大幅が0.30mで、開口部の高さが0.53cmあり、底面では平たい礫を検出した。閉塞石として用いられていたものが倒れた可能性がある。

竪坑の平面形は竪坑1・2ともに円形を呈し、径がそれぞれ0.70mと0.78mである。竪坑1の検出

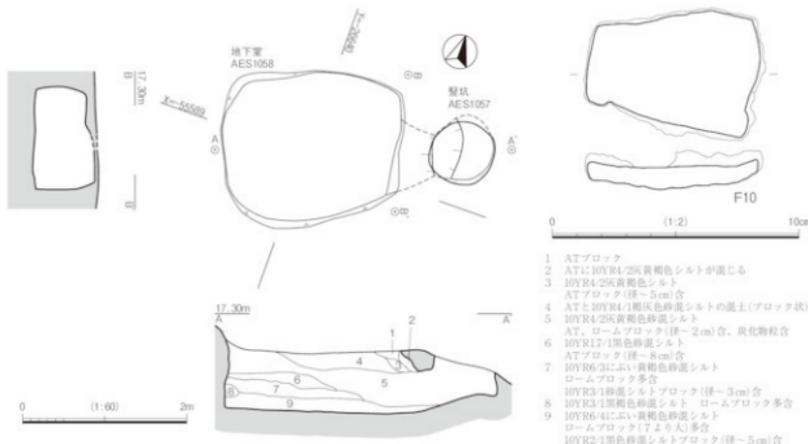


図244 A区 地下式坑2

面から地下室底面までの深さは1.23mある。竪坑底面は、竪坑1・2ともに地下室床面よりも高い位置に設けられ、いずれも緩い傾斜面を設けるが、地下室側の半分は傾斜が急になる。地下室から竪坑1までの主軸長は2.24mあり、主軸方向はS-11°Eである。

地下室内の埋土は大きく5層に分かれる。2~6層は竪坑1からの流入土であり、旧地表土由来の褐灰色系シルトまたは黒褐色シルトを主体とする。14層は2~5層よりも先に堆積している。

地下室内の竪坑2側の入口付近で、竪坑側に倒れかかるようにして、長さ約0.50m、最大幅0.20m程度の紡錘形に近い平たい礫と、長さ0.48m、最大幅0.42mの不整形の平たい礫が重なった状態で出土しており、閉塞石であったと考える。また、奥壁には工具による加工痕がみられた。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑2 (図244)

N4の南西隅からN5の南東隅にかけて位置する。地下室の北東側にやや離れて竪坑がある。後世に大部分が削平されており、底面と壁面の一部、およびトンネル状通路の天井部の一部のみ残存している。

地下室底面の平面形は縦長方形を呈し、奥行きが2.08m、横幅が1.75mある。竪坑の平面形は円形を呈し、直径が0.75mで、竪坑の検出面から地下室底面までの深さは0.37mある。竪坑底面の東半分は地下室底面よりもやや高く、竪坑から地下室に向かってスロープ状に緩く傾斜する。地下室から竪坑までの主軸長は3.28mで、主軸方向はN-70°Eである。

地下室の埋土は上部にATブロックを多く含む堆積、下部にロームブロックを多く含む堆積があり、その間に黒色の土壌層が挟まれていた。下部の堆積はロームブロックが大きめであることから天井崩落に伴うものの可能性が高い。一方、上部の堆積は下部のものに比べて基盤層ブロックが細かく、陥没した箇所を埋め戻した可能性がある。

遺物は、陶磁器の小片が出土したほか、地下室の入り口付近の埋土中から鉄鍋と思われる鉄製品の破片F10が見つかった。

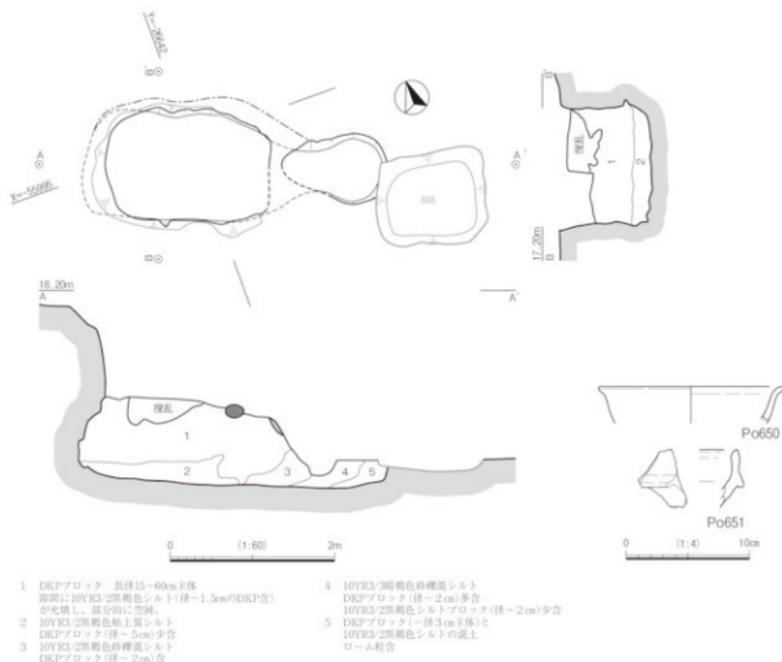


図245 A区 地下式坑3

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑3 (図245)

O4・5で検出した。地下室の平面形状は縦長の隅丸方形、堅坑の平面形状は卵形である。堅坑から連結部にかけては、後世の耕作地造成のため斜めに削られており、本来の堅坑の平面形状はほぼ円形と推定される。地下室と堅坑は羽子板状に連結する。規模は全長3.69m・堅坑幅0.85m・地下室幅1.55m、残存部分の深さ1.11mで、遺構の主軸はN-70°-Wである。天井部も後世の耕作地造成により破壊されており、地下室の天井部の形状は不明であるが、残存部分では地下室の横断面の形状はほぼ方形である。地下室の奥壁はドーム状になっており、加工痕が残る。

埋土は大きくは天井部崩落土の上層(1層)と天井部崩落までに堆積した下層(2~5層)に2つに分けられる。埋土からの出土遺物は、上層から備前播鉢・国産磁器・磁器製の動物像の破片が出土した。

遺構の帰属時期は不明だが、天井部が崩落した時期は出土遺物から近世以降に比定できる。(荒川)

地下式坑4 (図246)

O5、P5で検出した。地下室の平面形状は奥壁の幅が狭い方形で、堅坑が段状に連結する。堅坑の南東隅に小穴が連結するが、この小穴は堅坑と切り合う別の小穴である可能性がある。規模は全長3.01m・堅坑幅0.77m・地下室幅2.58m、残存部分の深さ1.43mで、遺構の主軸方向はN-73°-Wである。天井部と堅坑の大部分は、後世の耕作地造成により破壊されており、地下室の天井部の形状は不



図246 A区 地下式坑4

明であるが、残存部分では地下室の横断面は、逆台形の掘方の上がわずかにドーム状となる形状である。地下室の奥壁もわずかにドーム状になっており、ドーム状になっている部分には所々に加工痕が残る。奥壁は側壁よりもドームの膨らみ大きい。

埋土は大きくは天井部崩落土の上層(1～6層)、天井部崩落までに堆積した中層(7～9層)、堅坑埋土(10～13層)、下層(14～17層)に分けられる。埋土からの出土遺物は、中層の7層から糸切り痕の残る土師器・備前鉢の破片・青花皿Po652、9層上面から石製品臼S53、下層の15層から備前鉢の破片・破砕礫各1点が出土している。9層上面で石製品臼が出土していることから、9層上面は最終的な機能面であったと考えられ、その上位の7層から出土した陶磁器は廃絶時に投げ込まれたものと

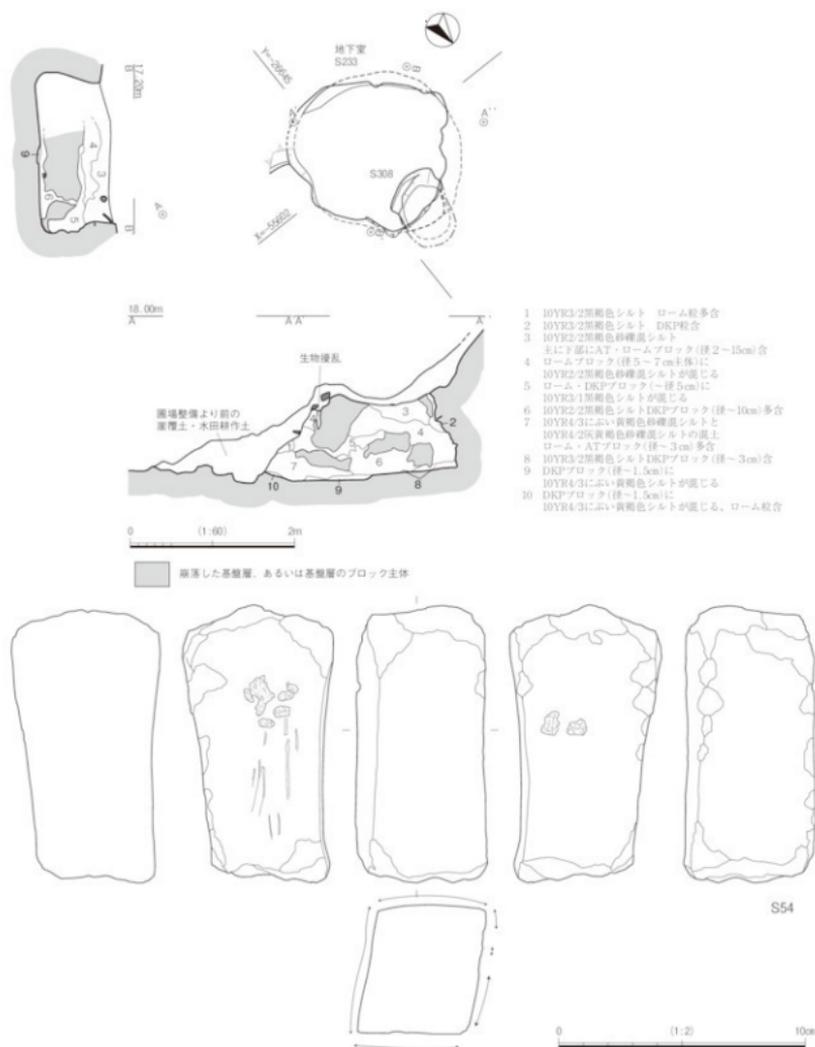


図247 A区 地下式坑5

推定される。

遺構の機能時期・廃絶時期は、出土遺物から16世紀後半以降近世前期までに比定できる。(荒川)

地下式坑5 (図247)

P5で検出した。検出長1.97m・地下室幅1.70m、残存部分の深さ1.08mで、遺構の主軸方向はN-48°-Wである。堅坑があったと推定される部分から通路にかけては、後世の耕作地造成によりほぼ

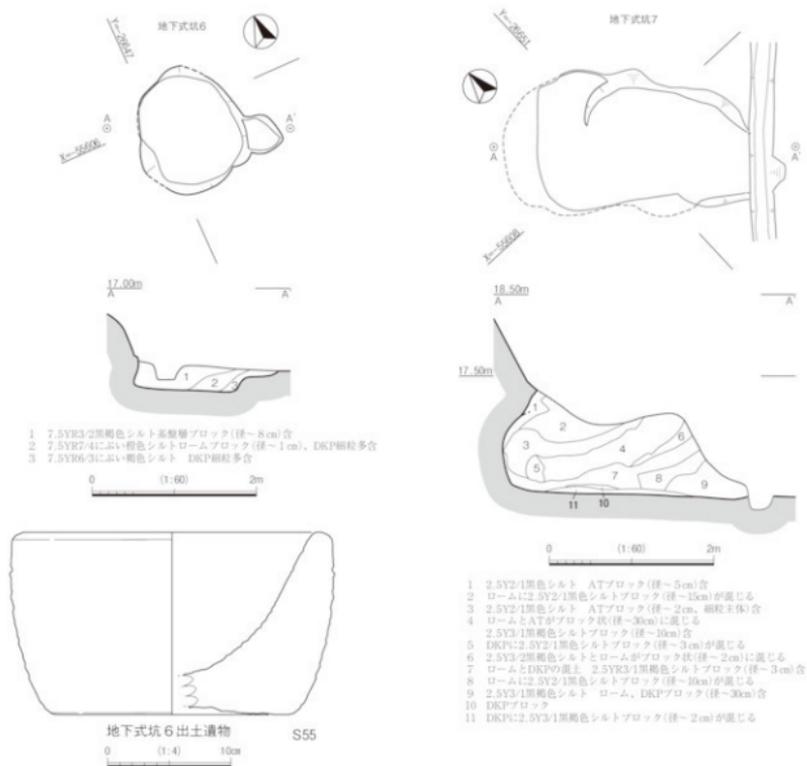


図248 A区 地下式坑6・7 平面・断面・出土遺物

破壊されており、通路の底が長さ0.24m・幅0.30mの規模でわずかに残る。地下室の天井部も同様に破壊されており、天井部の形状は不明であるが、残存部分では床面から壁がドーム状に立ち上がることが確認できる。奥壁には加工痕が顕著に残る。埋土は天井部と見られる基盤層の大小のブロックを主体とする土、または黒褐色シルトと基盤層のブロックの混土からなる。埋土からの出土遺物は、埋土上部出土の土師器・須臾器の破片数点、磁石(S54)である。

奥壁際の床面には土坑(S308)が掘られている。北側に大きく袋状に掘られており、全長0.93m・幅0.69m、地下室床面からの深さは0.41mある。

埋土は基盤層の丸い粒・ブロック(径3cmまで)を主体とし、隙間に黒褐色シルトが充填する。奥の袋状部分の上位は空洞で埋土上面に黒褐色シルトの薄層が堆積する。穴からの出土遺物はない。

遺構の帰属時期は詳らかにできないが、遺構の切合いなどから、近世前期よりは古い。(荒川)

地下式坑6(図248、PL.111)

P5の中央よりやや南西寄りに位置する。地下室の東側に接して堅坑がある。後世に削平を受けており、わずかに底面付近のみが残っていたため、底面形状等から地下式坑と判断した。地下室底面

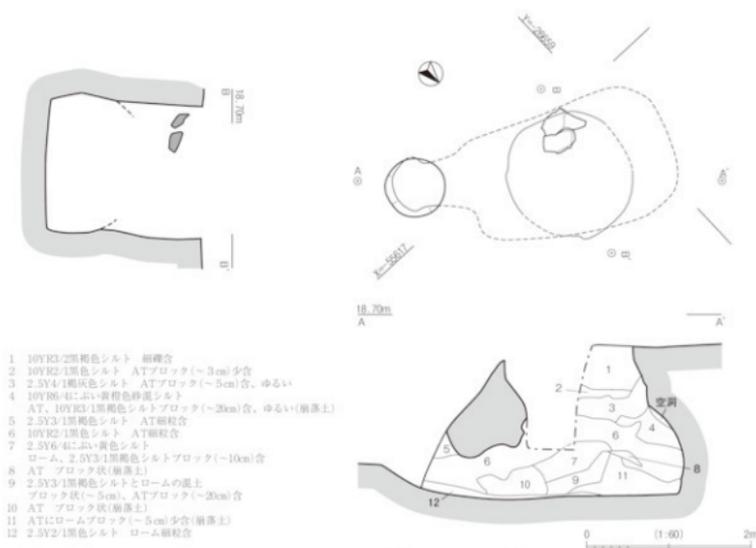


図249 A区 地下式坑8 平面・断面

の平面形は不整形な円形を呈し、奥行きが1.24m、横幅が1.34mある。竪坑底面の平面形は不整形を呈し、長さが0.40mある。検出面から地下室底面までの深さは0.30mある。竪坑底面は地下室底面よりもやや高く、竪坑から地下室に向けて段になる。地下室から竪坑までの主軸長は1.62mあり、主軸方向はS-66°-Eである。

残存する地下室の埋土は3層に分かれる。いずれも基盤層由来の黄褐色系の砂混シルトブロックやロームブロックを多く含んでおり、後世の削平時に埋没したと考える。

埋土1層からは石鉢が出土したが、時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑7 (図248)

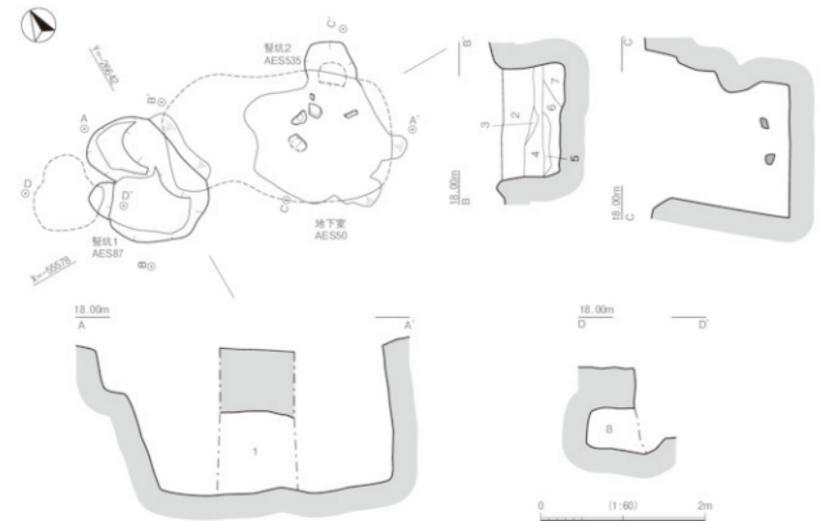
P5・6で検出した。天井はすべて崩落し、後世に行われた土地改変によって特に南東部の上部についてはほとんど残っていない。また、検出状況や埋没状況の観察で竪坑の痕跡が認められず、竪坑は土地改変によってすべて失われたと判断した。遺構の主軸はN-43°-Wである。

地下室の平面形は竪坑側から奥側に向かって幅が広がり、奥壁が円くなる。地下室の規模は底面で残存長3.00m、幅は竪坑側で0.72m、奥側の最も広いところで1.78mある。底面は奥側に0.1mの段差があるものの概ね水平で、竪坑に近い所では竪坑に向かって高くなる緩い傾斜がある。

地下室の壁面は底面から0.4m程度はやや外側に広がり、それより上は内側にせり出す。奥壁には掘削した工具の痕跡と思われる凹凸が残っていた。

埋土は基盤層ブロックを主体とした天井崩落土の間に黒色系の土壤に基盤層ブロックを含んだ堆積(1、3、6、9層)が挟まれており、天井が一度にすべて崩落したのではなく、徐々に崩落しつつ外から土壌が流入したと推測される。

底面付近からは遺物は出土しておらず、遺構の時期ははっきりしない。(田中)



- 1 10YR3/1黒褐色シルト(ロームブロック(径~20cm)、ATブロック(径~5cm)多含)
- 2 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~8cm、径~2cm主体)多含)
- 3 10YR3/1黒褐色シルト(ややゆるい)
- 4 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~2cm)少含)
- 5 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~2cm)少含)
- 6 10YR4/1黒灰色シルト(ATブロック(径~5cm)多含)
- 7 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(径~5cm)少含)
- 8 2.5Y3/1黒褐色シルト(ATブロック(径~5cm)、ロームブロック(径~1cm)多含)

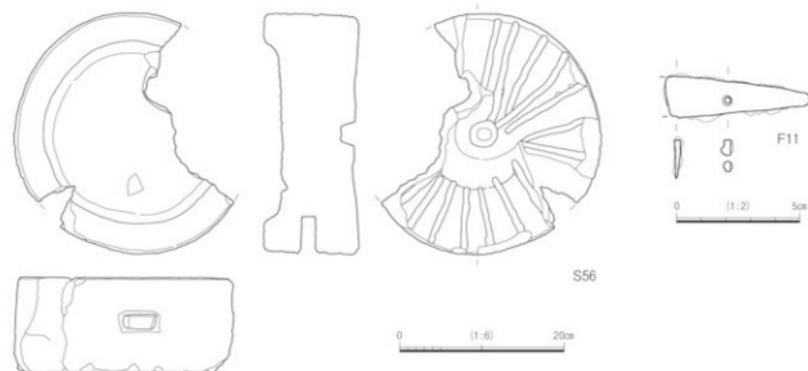


図250 A区 地下式坑9 平面・断面・出土遺物

地下式坑8 (図249)

Q6で検出した地下式坑で、遺構の主軸はN-80°-Wである。

堅坑の平面形は径0.72mの円形を呈し、土地改変により堅坑の上部が失われており、仮に段丘面から掘り込まれていたとすると深さは1.5m程度あったことになる。堅坑と地下室をつなぐ通路の底面は地下室側に向かって下っており、幅0.6m、長さ0.3m程度ある。通路の天井は崩落せずに残存しており、高さは地下室の入り口付近で0.45m前後ある。

地下室の平面形は奥側が広くなる隅円台形状を呈し、奥行きは2.55m、幅は奥側の最も広いところで1.65m、入り口側が1.20mある。通路は地下室の南寄りに取り付く。地下室の天井は大半が崩落しているものの、奥壁から天井へせり出している状況が確認でき、高さが1.1m以上あったことが分かった。地下室の壁面には工具で掘った痕跡が残されており、刃先の比較的真っ直ぐなもので掘られたことが確認できた。

埋土は上部に天井が崩落した時または崩落後に流入した土壌(1~3層)があり、1層の下面付近で人頭程度の礫が数個確認できた。流入土の下には天井崩落土(7~11層)が堆積し、天井崩落前の堆積(12層)はごく薄い。堅坑と通路部分の堆積(5、6層)は天井崩落土の上に堆積していることから、地下室の天井が崩落した後に堅坑が埋没したことが分かった。

崩落前の土からは遺物が出土せず、用途や機能した時期は不明である。(田中)

地下式坑9(図250、PL111)

M5に位置する。地下室の西側に接して堅坑1が、地下室東端付近で北側に接して堅坑2がある。堅坑1は地下室からの主軸線上にある。天井部は中央付近で残存するほかは崩落していた。

地下室底面の平面形は縦長方形を呈し、奥行きが2.78m、横幅が最大で1.62mある。堅坑の平面形は堅坑1・2ともに円形を呈し、それぞれ径が0.78mと0.60mである。堅坑1の検出面から地下室底面までの深さは1.80mある。堅坑底面はいずれも地下室底面よりも高い位置にあり、地下室底面と堅坑1と堅坑2の底面の段差はそれぞれ0.28mと0.3~0.4m程度ある。地下室から堅坑までの主軸長は3.72mあり、主軸方向はN-60°-Wである。

堅坑1のすぐ南側で、検出面から約0.3m下に長さ0.95m、幅0.63mの平面長方形に近いテラス面があり、そこから西側に向かって小横穴状の掘り込みを検出した。この掘り込みは平面形がひょうたん形、断面形が横長方形を呈しており、奥行きが0.70m、最大幅0.92m、開口部の高さは0.55mある。

地下室の埋土は入口付近を除けばほぼ単層で、旧地表土由来の黒褐色シルトを主体として天井や壁崩落によるブロックを多く含む。埋土観察から天井崩落層は確認できなかった。地下室の東側の埋土中では礫の集積を確認した。

地下室埋土中から石臼や刀子の基部が出土したが、時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑10(図251、PL64・111)

N5の中央に位置する。1基の堅坑が2基の地下室の入口となる構造である。地下室の天井部はいずれも崩落しており、地下室と堅坑間のトンネル状通路のみ天井部が残存する。

堅坑の南側の地下室1は底面の平面形が隅丸の縦長方形を呈し、奥行きが2.47m、横幅が1.54mある。堅坑の東側の地下室2は底面の平面形が縦楕円形を呈し、奥行きが2.35m、横幅が1.79mある。堅坑の平面形は不整形円形を呈し、径が0.89~0.97m、開口部から地下室底面までの深さが1.30mある。堅坑底面は地下室の底面よりもやや高く、堅坑から地下室の底面に向かってスロープ状に傾斜がつく。地下室1における主軸長は3.28mあり、主軸方向はN-21°-Eである。また地下室2における主軸長は1.68mあり、主軸方向はN-93°-Wである。

地下室1の埋土は大きく5層に分かれる。8層上面付近には礫が集積しており、この上層の1層が旧地表土で、その下層の9層が旧地表土に天井崩落土のブロックが混じる。10層は天井崩落土である。地下室1に堅坑埋土の流れ込みはみられない。地下室2の埋土は7層に分かれ、3~5層は天井崩落土である。1・2層は旧地表土であり、8・9層は堅坑からの流入土と考える。

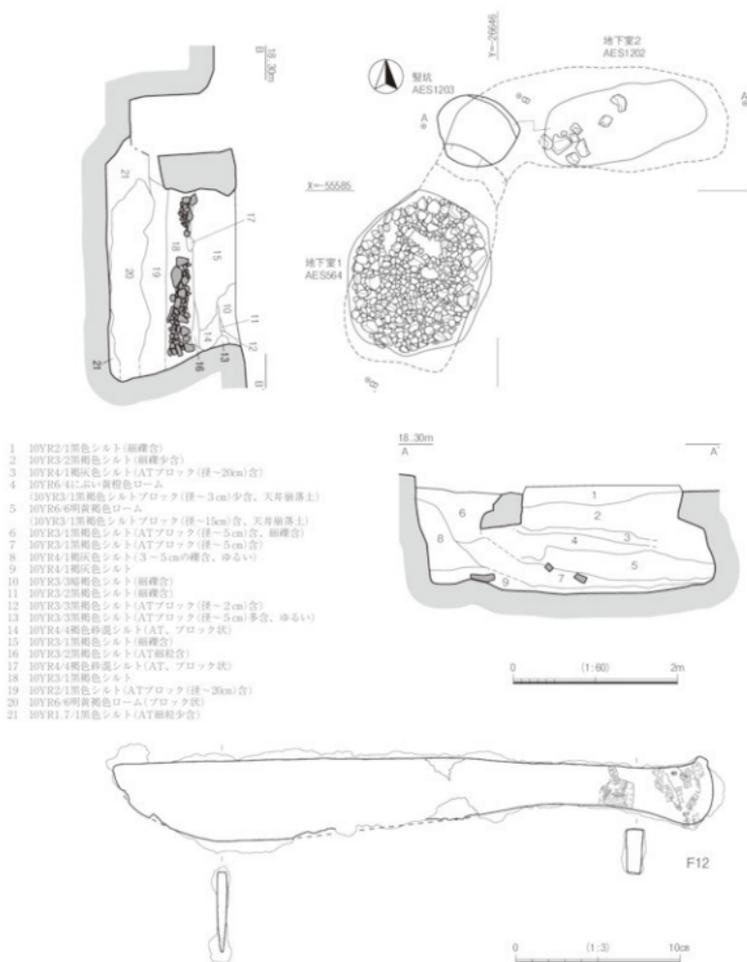


図251 A区 地下式坑10

遺物は、トンネル状通路の底面直上で鉞F12が出土した。柄あたりに繊維の痕跡がみられ、柄に布などを巻いて使用していた可能性がある。これ以外に埋土には土器片が僅かに含まれたが、時期を決定する遺物は出土していない。

なお、地下室1と地下室2の築造における先後関係は不明だが、堅坑から地下室2への埋土の流入がみられる一方、地下室1は天井崩落により堅坑埋土が流入しないことから、地下室1の方が先に廃棄されたと考える。(岡田)

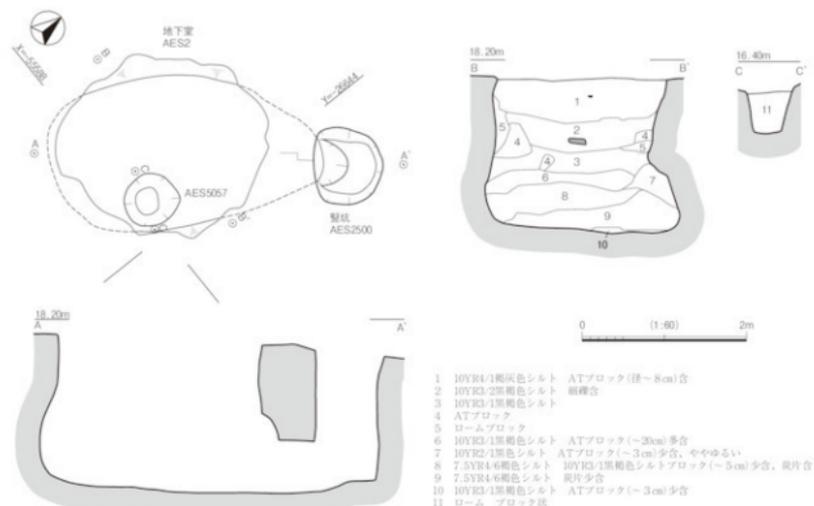


図252 A区 地下式坑11 平面・断面

地下式坑11(図252、PL.64)

N5の中央よりやや南寄りに位置する。地下室の北東側にやや離れて堅坑がある。地下室の天井部はほとんど崩落しており、地下室と堅坑間のトンネル状通路のみ天井部が残存する。

地下室底面の平面形は縦楕円形を呈し、奥行きが2.90m、横幅が1.88mある。地下室の南隅では、平面円形で、径が0.62m、深さが0.56mのピット状掘り込みAES5057を検出した。

堅坑の平面形は円形を呈し、径が0.83~0.94m、開口部から地下室底面までの深さが1.74mある。堅坑底面の北東半分は地下室底面よりもやや高く、堅坑から地下室に向かってスロープ状に緩く傾斜する。地下室から堅坑までの主軸長は4.17mあり、遺構の主軸方向はN-39°Eである。

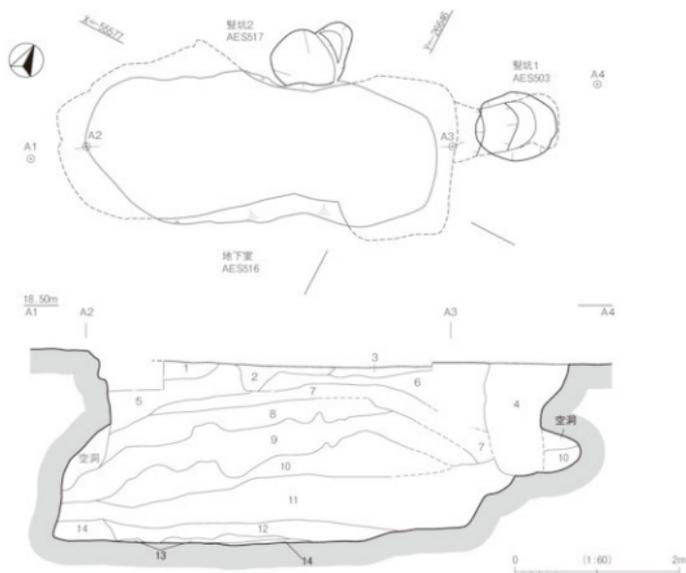
地下室の埋土は10層に分かれる。1~3層は旧地表土由来の黒褐色シルトを主体とし、4・5層は壁崩落土である。6~9層は天井崩落土と考える。堅坑の埋土はブロックをあまり含まない黒褐色シルトの単層であり、地下室への流れ込みはみられないことから、天井が崩落し、地下室が埋没した後で、堅坑が埋没したと考える。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑12(図253)

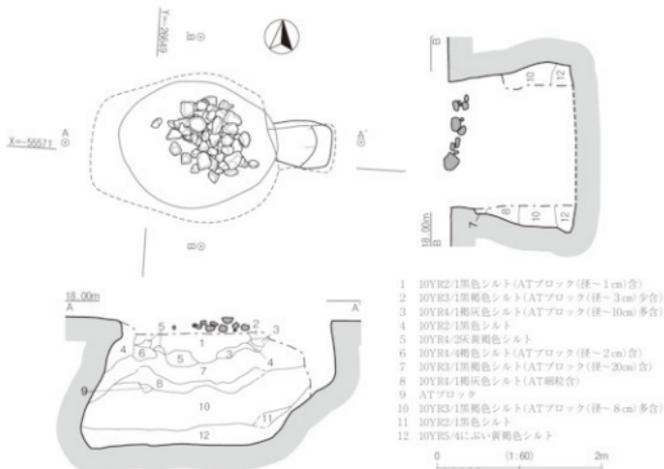
M5の南東隅付近に位置する。地下室の北東側にやや離れて堅坑1が、地下室中央付近の北側に接して堅坑2があり、堅坑1が地下室の主軸線上にある。地下室の天井部はほとんど崩落しており、地下室と堅坑1間のトンネル状通路のみ天井部が残存していた。

地下室底面の平面形は縦長方形に近い不定形を呈し、奥行きが4.84m、横幅が最大で2.15mある。堅坑の平面形は、堅坑1が楕円形で長径0.96m、堅坑2が円形で径0.73mある。堅坑1の検出面から地下室底面までの深さは2.20mある。堅坑底面はいずれも地下室底面より高く、底面の半分を平坦につくり、地下室側の半分を階段状につくる。堅坑1の底面北東壁には、底面の平面形が横楕円形の小



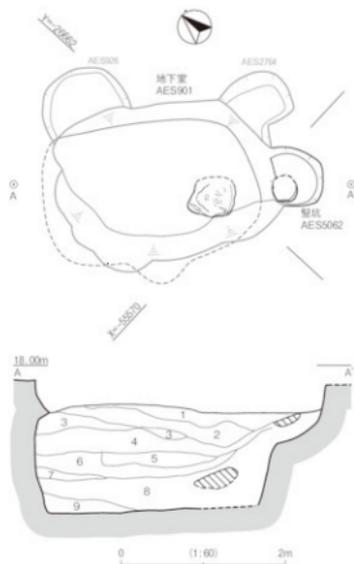
- | | |
|--|--|
| 1 10YR5/4にふい黄褐色シルトと10YR7/3ロームの混土 | 8 AT1:10YR3/1黒褐色シルトブロック(厚~3cm)が少し混じる 天井崩落土 |
| 2 10YR4/1黒灰色シルト ロームブロック(厚~5cm)含、ややゆるい | 9 ブロック状のロームに10YR3/1黒褐色シルトブロック(厚~5cm)が少し混じる 天井崩落土 |
| 3 10YR4/1黒灰色シルト ロームブロック(厚~3cm)含、ややゆるい | 10 ローム(ブロック状) 天井崩落土 |
| 4 10YR2/2黒褐色シルト
ロームブロック(厚~1cm)多含、ややしまる、壱塚層上 | 11 2.5Y3/1 黒褐色シルト |
| 5 10YR3/2黒褐色シルト 細礫含 | 12 AT1:2.5Y3/1黒褐色シルトブロック(厚~10cm)が混じる |
| 6 AT ブロック状、天井崩落土 | 13 2.5Y3/1 黒褐色砂混シルト AT細粒含 |
| 7 10YR3/1黒褐色シルト 10YR3/2黒褐色シルトブロック(~15cm)含 | 14 2.5Y3/1 黒褐色シルトとATの混土 |

図253 A区 地下式坑12 平面・断面



- | |
|-----------------------------------|
| 1 10YR2/1黒色シルト(ATブロック(厚~1cm)含) |
| 2 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(厚~3cm)少含) |
| 3 10YR4/1黒灰色シルト(ATブロック(厚~10cm)多含) |
| 4 10YR2/1黒色シルト |
| 5 10YR4/2灰黄褐色シルト |
| 6 10YR4/4褐色シルト(ATブロック(厚~2cm)含) |
| 7 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(厚~20cm)含) |
| 8 10YR4/1黒灰色シルト(AT細粒含) |
| 9 ATブロック |
| 10 10YR3/1黒褐色シルト(ATブロック(厚~8cm)多含) |
| 11 10YR2/1黒色シルト |
| 12 10YR5/4にふい黄褐色シルト |

図254 A区 地下式坑13 平面・断面



- 1 10YR3-1原褐色シルトと10YR3-2原褐色シルトの混土
- 2 2.5Y2-1原色シルト ATブロック(厚=30cm)少
- 3 2.5Y2-1原色シルト ATブロック(厚=5cm)少
- 4 2.5Y2-1原色シルトと2.5Y3-1原褐色シルトの混土
ATブロック(厚=2cm)少
- 5 2.5Y2-1原色シルトと2.5Y3-1原褐色シルトがブロック状(厚=30cm)に混じる
ATブロック(厚=10cm)少
- 6 ATブロック(厚=40cm) 2.5Y3-1原褐色シルトブロック(厚=10cm)少
ゆらぎ(天井崩落土)
- 7 ロームに2.5Y3-1原褐色シルトブロック(厚=2cm)少
- 8 2.5Y2-1原色シルト ATブロック(厚=20cm)少
- 9 ロームに2.5Y3-1原褐色シルトブロック(厚=5cm)少

図255 A区 地下式坑14 平面・断面

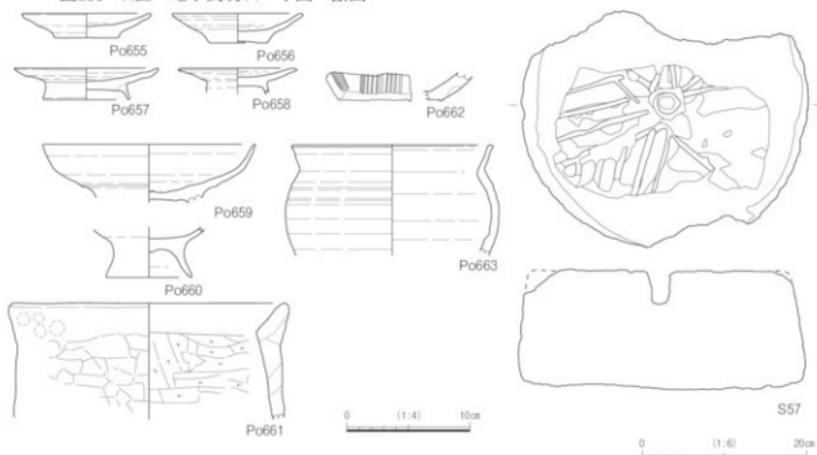


図256 A区 地下式坑14 出土遺物

横穴状の掘り込みがあり、奥行きが0.43m、長径が0.69m、開口部の高さが0.54mある。地下室から竪坑1までの主軸長は6.08mあり、主軸方向はN-59°-Eである。

地下室の埋土は大きく7層に分かれ、表層付近は現代の攪乱をかなり受けていた。5・6層は天井崩落土で、4層は旧地表土に天井崩落土のブロックが混じる。7層は竪坑からの流入土と考える。竪坑の埋土は竪坑1・2ともに単層である。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑13(図254)

M5の北西隅に位置し、地下室の東側に接して竪坑がある。地下室天井部はほとんど崩落していた。

地下室底面の平面形は不整な縦楕円形を呈し、奥行きが2.20m、横幅が1.83mある。竪坑底面の平面形は長方形を呈し、長さが0.76m、最大幅が0.59mある。竪坑検出面から地下室底面までの深さは1.68m、竪坑底面までの深さは約0.6mあり、竪坑底面は地下室底面よりもかなり高い位置にある。地下室から竪坑までの主軸長は2.96mあり、主軸方向はN-86°-Eである。

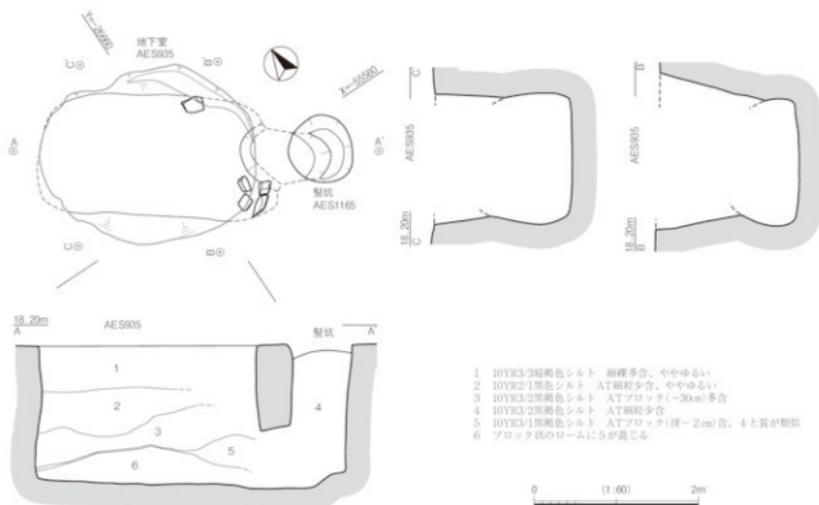


図257 A区 地下式坑15 平面・断面

地下室の埋土は大きく6層に分かれる。8層以下は天井崩落土で、8・9層は崩落時に天井の基盤層がブロック状になり旧地表土が混じる。7層以上は旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とし、7層には天井崩落時の基盤層ブロックが多く混じる。1層中には20～40cm大の円礫・角礫が多く集積していた。天井崩落時に旧地表土とともに落ち込んだと考える。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑14(図255・256、PL.65)

L7の南西隅からM7の北西隅にかけて位置する。地下室の南東側に接して竪坑がある。地下室の天井部はほとんど崩落していた。

地下室底面の平面形は縦長方形を呈し、奥行きが2.62m、横幅が1.62mある。竪坑底面の平面形は円形を呈し、径が0.71mある。竪坑検出面から地下室底面までの深さは1.60m、竪坑底面までの深さは0.34mあり、竪坑底面は地下室底面よりもかなり高い位置にある。地下室から竪坑までの主軸長は3.48mあり、主軸方向はS-43°-Eである。

地下室の埋土は9層に分かれる。5～7・9層は天井崩落土であり、8層は竪坑からの流入土と考える。すなわち、9層崩落後、竪坑からの土の流れ込みがあり、その後5～7層が崩落したと推定する。4層以上は旧地表土由来の黒色シルトを主体とし、2層には天井および壁崩落による基盤層ブロックが多く混じる。

8層上層の竪坑付近と地下室内の入口付近で、それぞれ長さが0.60mと1.04mの隅丸方形の平たい礫を検出しており、地下室への入口を塞ぐ閉塞石の可能性があり、地下室壁面には工具による加工痕がみられ、北壁側でよく観察できた。

埋土中からは、須恵器や土師器が多量に出土した。出土した須恵器や土師器は平安時代に位置づけられるが、これらは掘立柱建物9・10およびその周辺から流れ込んだものであり、遺構の時期を示す

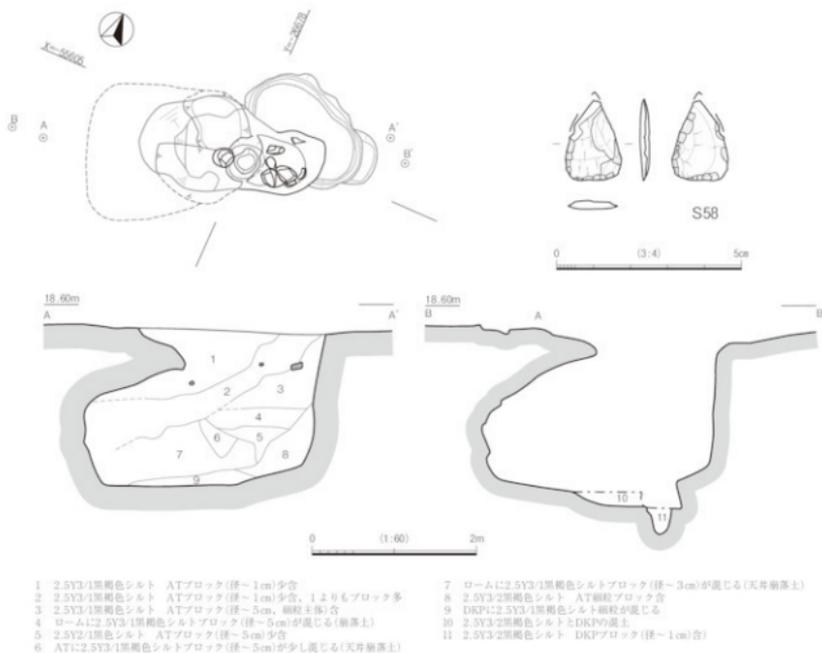


図258 A区 地下式坑16

ものではないと考える。遺構の時期に関連する遺物として、地下室の8層から備前焼の播鉢の底部片が出土した。酸化焼成によって赤褐色を呈するが、一部に灰色を呈する箇所があり、胎土に砂粒を含む。1点の遺物のみで判断することになるが、室町時代頃の遺構と考える。(岡田・田中)

地下式坑15(図257)

M6・7、N6・7にまたがって位置する。地下室の南東側にやや離れて堅坑がある。地下室の天井部はほとんど崩落しており、地下室と堅坑間のトンネル状通路のみ天井部が残存する。

地下室底面の平面形は縦長方形を呈し、奥行きが2.78m、横幅が1.48mある。堅坑の平面形は円形を呈し、径が0.78~0.84m、開口部から地下室底面までの深さが1.73mある。堅坑底面は東側でスロープ状に傾斜する。地下室から堅坑までの主軸長は1.86mあり、主軸方向はS-56°-Eである。

地下室の埋土は5層に分かれる。3・5層は天井崩落土で、間層として4層があることから、5層崩落后、間層を空けて3層が崩落したと考える。1・2層は旧地表土である。堅坑埋土はトンネル状通路まで流入し、4層もそれに相当する可能性がある。

地下室底面の入口付近では、長さか0.80m、幅か0.25m程度の平らな礫を検出しており、閉塞石の可能性もある。また地下室の壁面には工具による加工痕を観察できた。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

地下式坑16(図258)

P8で検出した。地下室の天井部は半分程度崩落して堅坑とつながった状態になっていた。遺構の

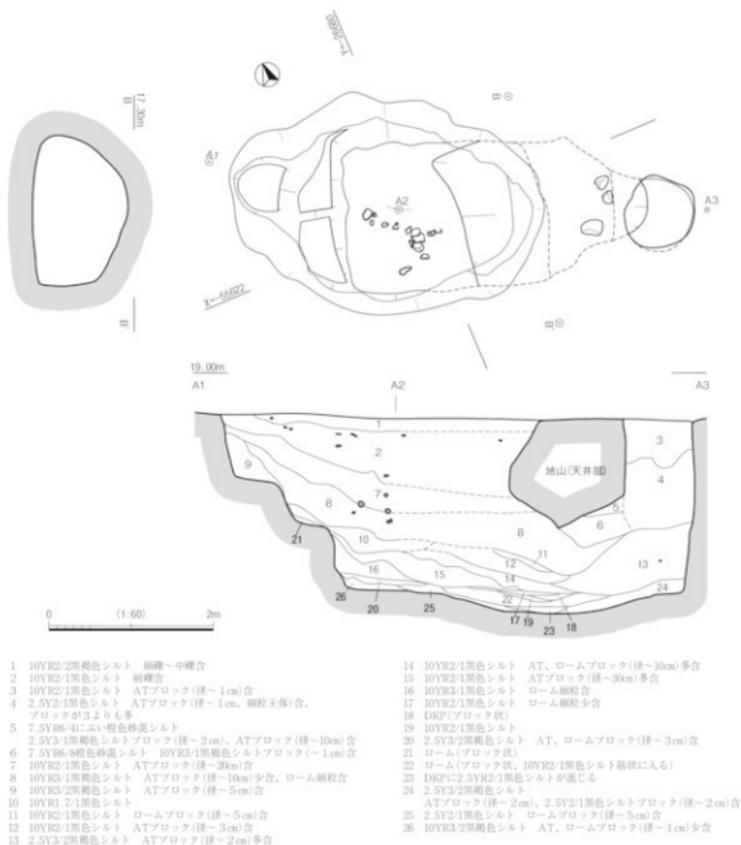


図259 A区 地下式坑17 平面・断面

主軸N-74°-Eである。

竪坑の平面形は円または楕円形で南北方向の径は検出した面で0.80mある。竪坑の底面は地下室側を下る傾斜があり、検出した面からの深さは地下室側で1.67m、入り口側で1.46mある。

地下室の平面形は奥壁側が広い隅円台形を呈し、底面で奥行き1.98m、幅は奥壁側の最も広い部分で1.66m、竪坑側で1.26mある。床面の竪坑側には深さ0.2mの窪みがあったが、窪みにはDKPを主体とした10層が堆積していたことから、築造時に掘削した後に埋め戻してほぼ平らな床面が造られたと判断し、竪坑底面と地下室底面の間には段差などはなかったと考えた。また9層もDKPを主体とした堆積で、地下室底面を整えるために敷かれた可能性がある。その場合、地下室底面は奥側に向かって下る傾斜があったことになる。奥壁側には天井が崩落せずに残っており、地下室の高さが1.1m前後あったことが確認できた。また奥壁には工具によって掘削された痕跡が確認でき、平刃で刃先が真っ直ぐなものが使われたと推測される。

なお、地下室と堅坑の境に当たる所に長径0.42m、深さ0.6m前後の小穴が確認できたが、用途については不明である。

埋土は天井崩落土と崩落後の流入土のみで、地下式坑が機能していた頃の土壌などは認められなかった。流入土である1～3層に人頭大までの礫が数個含まれていたが、地下式坑が機能した段階との関連は不明である。

遺構の時期とは異なるが、遺構内の流入土から石鏃が1点出土した。(田中)

地下式坑17(図259、PL65)

R8からR9にまたがる形で検出した。遺構の主軸はN-63°-Wである。

堅坑の平面形は長径0.94m、短径0.79mの楕円形を呈する。堅坑は検出面からの深さは2.19mあり、壁面はほぼ垂直になっていた。堅坑底面は通路と接続する北西側が傾斜しているが、それ以外はほぼ水平である。

堅坑と地下室をつなぐ通路は地下室側が広くっており、底面の幅は地下室側で1.20m、堅坑側で0.74mある。通路の底面は地下室に向かって下る傾斜がある。天井部は若干崩落しているものの元の形状を残していると考えられ、底面とはほぼ平行に地下室側へ傾斜していたものと考えた。通路の長さは0.52mで、高さは0.8m程度と考える。

地下室の平面形は隅円長方形を呈し、底面で幅が1.61～1.70m、長さは2.85mある。底面は奥壁から通路に向かって下る傾斜があり、地下室の入り口付近が最も低くなっていた。天井は大半は崩落していたが、入り口付近で残っており、側壁が0.6m程度ほぼ垂直に立っており、その上がドーム状になっていたことが分かった。

奥壁には段が確認できた。段は奥壁のほぼ全体にわたるもので、底面から0.75m高く、奥行きは最大で0.5mほどある。段の面は奥側から手前側を下る傾斜がある。さらに段の奥の北寄りの部分に幅の狭い段が存在した。この段は手前の段よりも0.44m高く、幅0.71m、奥行きが0.5mほどあった。この段の面も奥側から手前側を下る傾斜がある。

埋没の状況を観察すると、天井が大きく2回崩落したと推測された。底面の直上には基盤層ブロックを少量含む黒色系のシルト(24～26層)が堆積しており、地下室として機能した段階に堆積した土壌と考える。これを覆うようにロームあるいはDKPの堆積(21～23層)がある。これが1回目の天井崩落土である。このときは天井表面が剥落した程度だったようで堆積は薄い。またこの上の一部に薄く土壌層(19、20層)が堆積することから、1回目の崩落後も地下室として機能したと考えた。

この上に堆積する14、15層は大きな基盤層ブロックを多量に含むもので、2度目の天井崩落土と考えた。この上に堅坑側からの流入土(13層)が厚く堆積していることから、この段階で地下室が放棄されたとみられる。これより上の堆積は天井崩落時あるいはそれ以後に流入した土壌である。

奥壁側の段については、棚状の作り出しと東側堅坑とは別の入り口の可能性が想定された。埋没状況を見ると、段の上に堆積した土壌層(8層)の上に基盤層ブロックを含む堆積(7層)が認められ、この堆積を天井崩落に伴う堆積と考えた。もし奥側に堅坑があるとすれば、段の上に崩落土が堆積することは考えにくく、棚状の作り出しの可能性が高いとみている。

遺物は天井崩落以降の流入土から少量出土したが、底面に堆積した土壌層からは出土しなかった。

(田中)

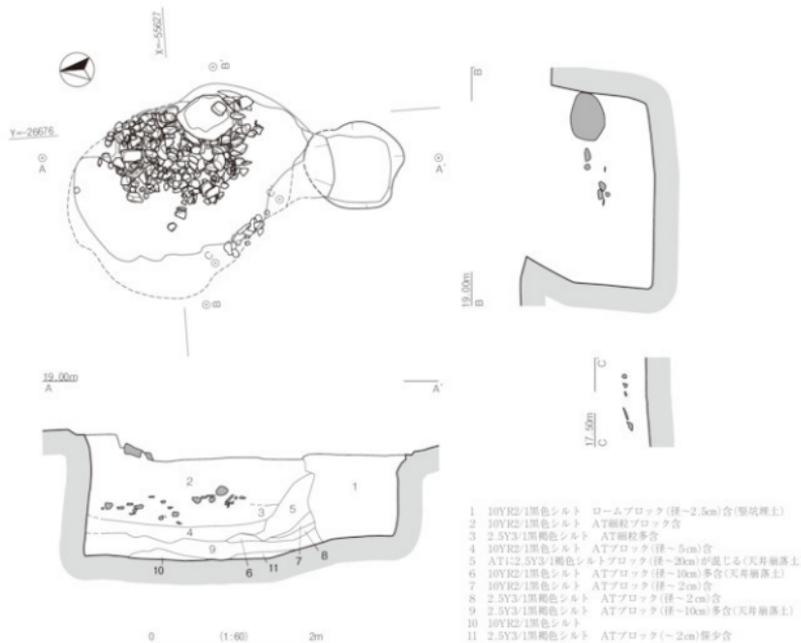


図260 A区 地下式坑18 平面・断面

地下式坑18(図260・261, PL.66・112)

R 8で検出した。天井部はすべて崩落しており、堅坑と地下室がつながった状態だったが、地下室の流入後の流入土と堅坑埋土に差があったことから、堅坑の平面形が把握できた。

堅坑の検出面での平面形は長径1.24m、短径1.08mのややいびつな楕円形を呈し、主軸はN-9°-Eである。検出面からの深さは1.00mあり、底面はほぼ水平で隅円方形に近い形状となっていた。堅坑は当初隅円方形で掘られており、使用段階以降に崩れるなどして上部が円形に近づいたと考える。地下室へは地下室側を下る緩やかな斜面によって連結しており、明瞭な通路はない。

地下室の平面形は長径2.94m、短径1.12mの楕円形を呈し、主軸はN-34°-Wである。底面は南側で堅坑から続く緩やかな下りの斜面が続いており、北半分程度がほぼ平坦であった。天井部はほとんどが崩落していたが、西側の一部で内側にせり出した状況が確認できた。このせり出しも地下室の天井そのものではなかったものの、底面から0.9m程度垂直またはやや内に傾く壁があり、そこから天井部が造られたと推測できた。

堆積状況を見ると、底面に機能段階に堆積した土壌(10、11層)があり、その上に天井部が崩落したものの(5、6、9層)が堆積していた。崩落土の中に基盤層ブロックの比較的少ない堆積(7、8層)がみられるので、天井部の崩落が段階的に起こったものと推測される。崩落土の上は崩落当時の土壌または崩落後の流入土である。

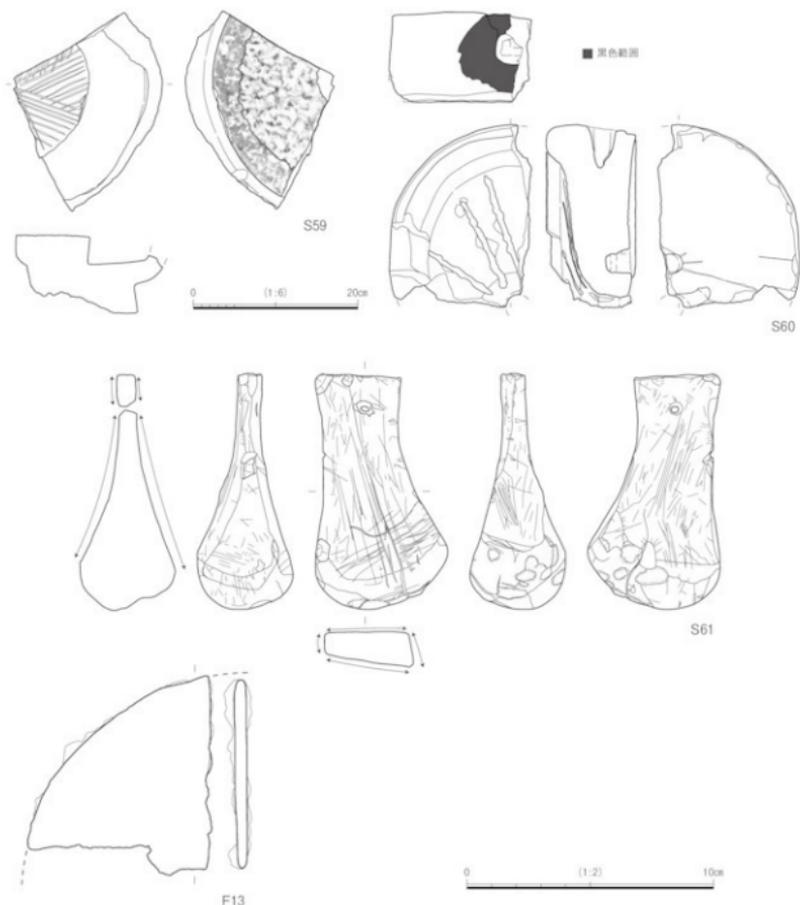


図261 A区 地下式坑18 出土遺物

地下室の底面から0.5～0.6m上の2層の下面から3層にかけて多数の碟が面的に広がった状態で検出された。碟は長径が0.2m前後のものが中心だが、中には0.7m程の巨大なものも含まれていた。また、碟の形状も円碟や角碟、平たいものまで様々で、石臼S60も含まれていた。

碟は前述のもの以外にも、検出面付近や碟群の南西側の底面から0.2m上でも出土した。これらの碟が一連のものだとすると、地下室の天井が崩落した時に南西部の碟が流入した可能性があり、碟群は天井が崩れる前にすでにあったと考えることもできる。

遺物は、前述の碟群から出土した石臼の他、茶臼、砥石、円盤状の鉄製品を図化した。S59・61は碟群の下にある土壌層(4層)から、F13は底面近くの10層から出土した。S59は底面以外の表面が平滑に仕上げられている。S61は孔が1つ穿たれている。

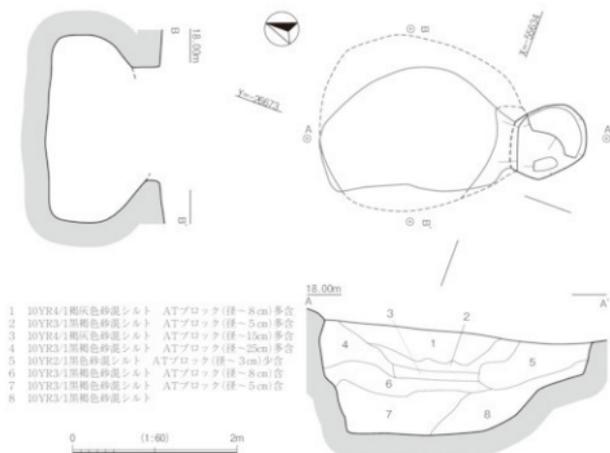


図262 A区 地下式坑19 平面・断面

時期を決定しうる遺物は出土しなかった。(田中)

地下式坑19(図262)

S8で検出した。主軸方向はN-26°-Wである。

堅坑の平面形は長径0.90m、短径0.86mの楕円形を呈する。底面は南東部分はほぼ平坦であるのに対し、北西側は地下室に向かって下る。後世の土地改変により上部が失われており、検出時に深さは南東部の平坦面で0.38mで、北西部の傾斜の下端は平坦面から0.24m下になる。

地下室は堅坑に直接つながる形になっていた。地下室の平面形は奥側が広い卵形を呈しており、長径2.41m、短径2.16mある。堅坑と地下室の底面には段差があり、地下室の底面は堅坑の傾斜下端から0.42m下になる。地下室の天井は中央部が崩落していたが、側壁から天井へせり出す状況が確認できた。側壁は底面から0.6mほどほぼ垂直に立ち上がり、その上がドーム状になっていたようで、中央部の最も高いところで底面から約1.1m程度あったと推測した。

埋土は基盤層ブロックを多く含む堆積と、基盤層をほとんど含まない堆積に大別できた。堆積状況を見ると、まず堅坑から流入した8層が堆積した後、天井が崩落したと考えられる5、7層が堆積する。おそらくこの段階では完全に天井は崩落しておらず、崩落後に堅坑から流入した6層が堆積した後に再び崩落したことで1~4層が堆積したと考えた。以上のことから、地下室を使用しなくなった後しばらく放置され、その後天井が複数回にわたり崩落したと推測される。

底面付近では遺物は出土しなかった。(田中)

地下式坑20(図263)

S8で検出した地下式坑で、地下式坑19の西側に位置する。地下室部分の天井部は崩落していた。

堅坑の平面形は長径0.99m、短径0.78mのややいびつな楕円形を呈する。堅坑底面は地下室側を下る傾斜があり、最も浅い南端は検出面から0.38m下になる。また堅坑南側の壁面は底面付近が検出面の上端よりも外側に広がっていた。

堅坑から地下室へは長さ0.5m程度の通路でつながっており、天井部が崩落せずに残っていた。通路

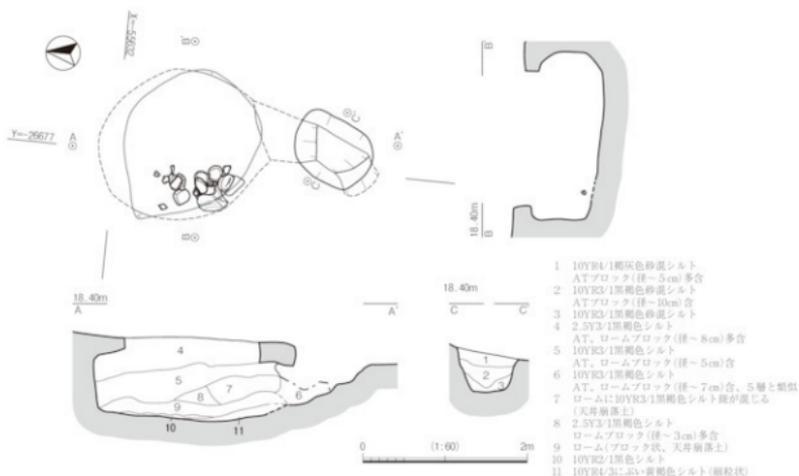


図263 A区 地下式坑20 平面・断面

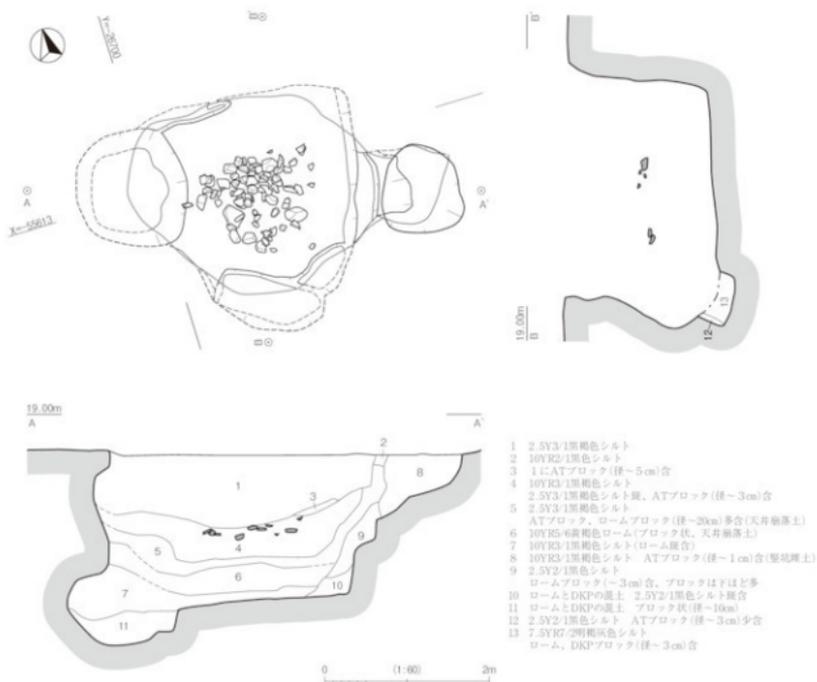


図264 A区 地下式坑21 平面・断面

は堅坑から北に延びており、中央部分で幅0.7m前後、高さ0.5m前後ある。通路の底面は地下室側を下る傾斜があるため天井までの高さは地下室側ほど高くなる。通路の主軸方向はN-9°-Eである。

地下室は底面の平面形が長径2.00m、短径1.78mの楕円形を呈し、主軸はN-34°-Wである。高さは奥側の天井が崩落していない箇所では0.75mある。底面は入り口側に低くなるように緩く傾斜していた。

堆積状況を観察すると、地下室の底面入り口側に細かいブロック状で基盤層に類似した11層があり、地下室掘削後に一部整地した可能性がある。地下室底面奥側の10層は地下室が機能した段階の堆積で、これより上は天井が崩落した時の堆積またはそれ以降に流入した土壌である。なお、地下室西側の5層を中心に径0.3mまでの礫が出土したが、隣接するAES485の底面付近からも同様の礫が出土していることから、天井崩落時に流入したと判断した。

地下室の底面付近からは遺物は出土しなかった。(田中)

地下式坑21(図264)

Q10から11にまたがる形で検出した。天井部がすべて崩落しており、堅坑と地下室がつながった状態で検出したが、地下室の崩落後の流入土と堅坑埋土に明瞭な差があったため、堅坑の平面形を把握することができた。遺構の主軸はN-70°-Wである。

堅坑の平面形は長径1.09m、短径0.97mの楕円形を呈する。堅坑は検出面から0.3~0.4m下で比較的平坦な面が造られおり、この面からは地下室側へ0.4m程度下る斜面がある。斜面の下には狭い平坦面があり、そこから直接地下室へとつながっていた。狭い平坦面から地下室の底面の段差は0.6m程度ある。ただ、面的な状況を確認できなかったが、段差の部分にはDKPとロームを主体とした混土(10層)が堆積しており、土を盛って階段状にしていた可能性がある。

地下室の平面形は堅坑側が広い隅円の台形を呈し、底面で奥行き2.90m、幅が地下室側で2.50m、奥側で1.68mある。地下室の底面は堅坑側から奥側に僅かに低くなっていた。天井が完全に崩落していたために上部の形状は不明であるが、底面からある程度の高さまでは壁がほぼ垂直に立ち上がっていたと考えた。

地下室は西と南に1段階掘り下げて拡張したと思われる部分が確認できた。西側では地下室底面から深さ0.3~0.4m、長径1.42m、短径1.35mの楕円形に掘り下げており、地下室の壁面から0.3m程度外側に拡張していた。南側では地下室底面から深さ0.2m、長軸1.53m、短軸0.68mのやや崩れた隅円方形に掘り下げられており、地下室の壁面から0.2m程度外側に拡張していた。これらの拡張部は、地下室の床面付近まで基盤であるDKPやロームがブロック状になったものを主体とした堆積で埋没しており、地下室として機能していた段階に段差があったかは不明である。

埋没状況から、堅坑から流入してきた土壌(7、9層)で床面付近が埋没した後に天井部の基盤層(6層)が当時の土壌(5層)とともに崩落したと考える。これより上は、崩落当時の土壌または崩落後の流入土である。そのうち、4層の上部で拳大を中心に長径0.4m程度までの礫がまとまって出土した。ほとんどは特に加工されていないが、石臼の破片が1点含まれていた。

地下室および底面付近からは時期や機能を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

地下式坑22(図265)

R11で検出した。地下室の天井部はすべて崩落しており、堅坑と地下室がつながった状態で検出した。遺構の主軸方向はN-33°-Wである。

堅坑部分は地下室の崩落部分とはほぼ同じ土壌が堆積していたが、底面の形状から平面形は円形また

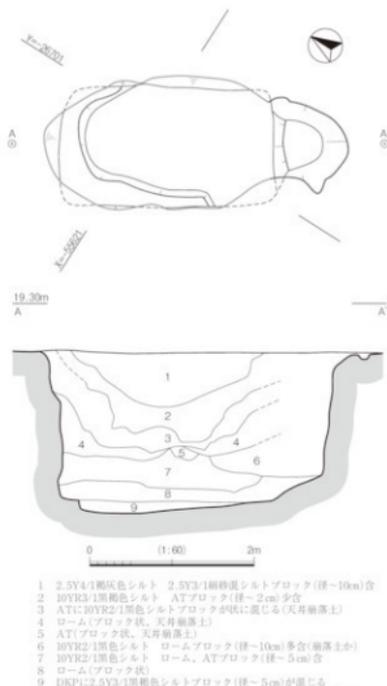


図265 A区 地下式坑22 平面・断面

0.76mで、長軸方向はほぼ全体の範囲にロームブロックを多く含む1層が見られ、北側には1に比べてロームブロックの少ない2層が確認できた。当初、南側に寄せた形で棺が納められていた可能性を考え、南側部分を先行して調査を行った後に、北側の中央で土層堆積を確認することとした。その結果、若干横方向で土色やロームのブロックの量に差があるが、堆積の層厚が一致しており、堆積内での土質の差と捉えるべきと判断した。

一方、東西方向の堆積状況を観察すると、底面付近にロームの細粒を含む8層があり、その上に大きめの基盤層ブロックを多く含む6、7層が西側に厚く堆積する。基盤層をあまり含まない3、4層を挟んで基盤層ブロックを多く含む1層があり、この層から人頭大までの礫が東側にまとまって出土した。

以上の状況から、当初は木棺(あるいは棺を用いず蓋板だけ)の空洞の西側が先に流入土で埋没し、その後残りの空洞が陥没する時に標石として置かれた礫が墓壇内に埋没したと考えた。

遺物は1~4層から陶器の欠片が出土した。

副葬品などがいないため、時期は不明である。(田中)

AES3331(図267、PL112)

O13の中央やや東寄りに位置する。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し、検出面における長軸長が1.20m、短軸長が0.87m、底面における長軸長が1.00m、短軸長が0.73mである。断面形は長軸・短

は楕円形であったことが推測される。検出面から堅坑底面までの深さは1.5~1.7mで、堅坑底面は地下室側に低くなる傾斜がある。

地下室の平面形は長さ2.55m、幅1.47mの隅円方形を呈する。底面は奥側にはほぼ平坦で、手前側は奥側の平坦面よりも0.2m前後窪んでいた。

堆積状況を観察すると、底面にはブロック状の基盤層(8、9層)が堆積していたことから、掘削後に基盤層で整地して堅坑と地下室の底面をそれぞれ平坦にして、地下室と堅坑の間に0.2m程度の段差を設けたと考えた。整地層の上には地下室として機能しなくなった後に流入したと思われる土壌(7層)が堆積し、その上に天井が崩落した様子が観察できた。

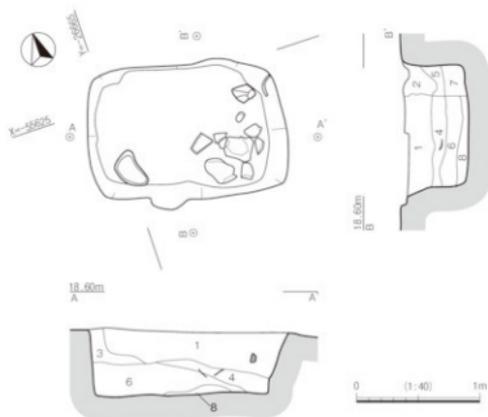
地下室の底面付近の堆積からは遺物は出土しなかった。(田中)

土壌墓・木棺墓

AES333(図266)

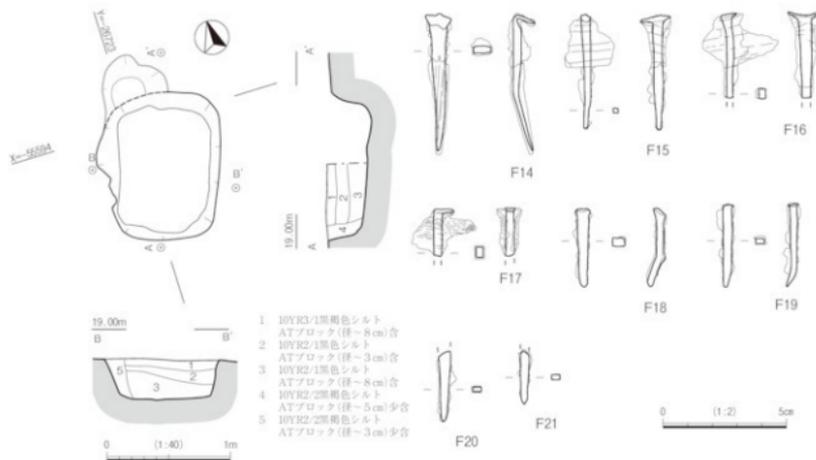
R7で確認した土坑で、掘方の平面形は隅円方形を呈する。規模は長軸1.62m、短軸1.08m、検出面からの深さは0.57mある。

掘方内を少し掘り下げると、南に寄った幅



- 1 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径-3cm)多含
- 2 2.5Y2/1黒色シルト ロームブロック(径-2cm)多
- 3 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少含
- 4 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-1cm)少含、2よりブロック多
- 5 2.5Y2/1黒色シルト ローム細粒含
- 6 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径-10cm)多含
- 7 2.5Y2/1黒色シルト ローム、ATブロック(径-5cm)多含
- 8 10YR3/2黒褐色シルト AT細粒多含

図266 A区 AES333

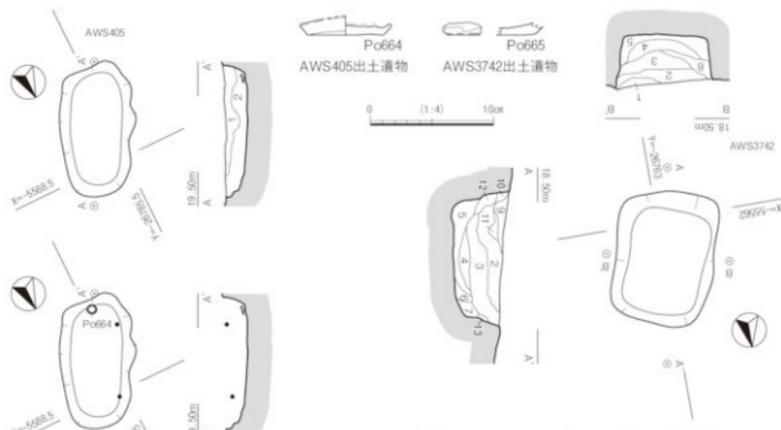


- 1 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径-8cm)含
- 2 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-3cm)含
- 3 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-8cm)含
- 4 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック(径-5cm)少含
- 5 10YR2/2黒褐色シルト ATブロック(径-3cm)少含

図267 A区 木棺墓AES3331

軸方向ともほぼ長方形を呈し、底面までの深さは0.32mある。主軸方向はN-18°-Eである。

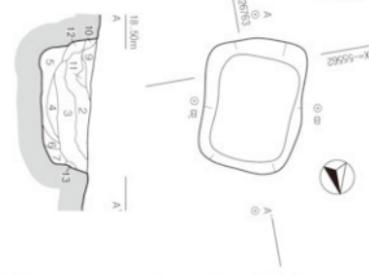
埋土は旧地表土由来の黒色～黒色シルトを主体とする。棺内の埋土は3層からなり、いずれもATブロックを多く含む棺蓋崩落時に流入したと考える。4・5層は木棺の小口板と側板および底板の腐植土と推定され、南東隅付近の埋土からは鉄釘(F16・18・19・21)が出土した。断面の棺痕跡から木棺短軸の大きさが推定でき、検出面では内法で0.70mある。



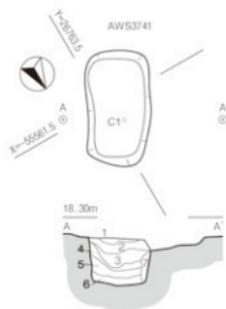
- 1 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-3cm、径2-3mm主体)合
- 2 10YR2/2黒色シルト ATブロック(径2-3mm)多合



0 (1:4) 10cm



- 1 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm、径-1cm主体)多合、ややゆるい
- 2 10YR2/2黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm、径-5mm主体)合、ややゆるい
- 3 10YR1/7/1黒色シルト ロームブロック(径-5cm、径1-2mm主体)合、ややゆるい
- 4 10YR2/2黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm、径-5mm主体)合
- 5 10YR3/3暗褐色シルト ロームブロック(径-10cm、径-1cm主体)多合
- 6 10YR3/3暗褐色シルト ロームブロック(径-5cm)層少合、ゆるい
- 7 10YR3/4暗褐色シルト ゆるい
- 8 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径-1cm)少合
- 9 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径-5cm、径-1cm主体)多合
- 10 10YR3/3暗褐色シルト ロームブロック(径-5mm)少合
- 11 10YR3/3暗褐色シルト ロームブロック(径-2cm、径1-3mm主体)合
- 12 10YR3/3暗褐色シルト ロームブロック(径-5mm)少合、ややゆるい
- 13 10YR3/3暗褐色シルト ロームブロック(径1-3mm)合、ややゆるい



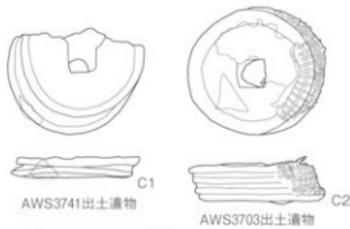
- 1 10YR3/2黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm、径-5mm主体)合
- 2 10YR3/2黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm)多合
- 3 10YR7/4/1.5黄褐色シルト
- 4 10YR3/2黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm、径1-3mm主体)少合
- 5 10YR3/3暗褐色シルト ロームブロック(径-3cm、径-5mm主体)多合
- 6 10YR2/2黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm、径1-3mm主体)合
- 7 10YR3/2黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm)多合

0 (1:40) 1m



●: 遺物出土地点

- 1 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-5mm)少合
- 2 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-2cm)合
- 3 10YR3/1黒褐色シルト AT、ロームブロック(ローム主体、径-3cm)多合
- 4 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロック(ローム主体、径-1cm)多合
- 5 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロック(径-3cm)少合
- 6 10YR2/1黒色シルト ロームブロック(径-1cm)多合
- 7 10YR2/1黒色シルト AT、ロームブロック(径-5cm、径-2cm主体)多合



0 (1:11) 5cm

図26 A区 AWS405・3703・3741・3742

埋土からは、先述のもの以外にも鉄釘が出土しており、中には棺材の木質が残るものもある。

時期を決定する遺物は出土していないが、中世の木棺墓と考える。(岡田)

AWS405(図268, PL.67)

P24中央北側に位置する。検出時の平面形は南北方向に軸をもつ不整な楕円形で、長軸1.11m、短軸0.62m、検出の深さは0.20mで、底面はローム層である。

断面は浅い逆台形で、底面には生物擾乱による窪みが認められるものの概ね平坦で、壁面の立ち上がり際は緩い。底面の平面形は南北方向に軸をもつ隅丸長方形で、長軸0.92m、短軸は南側で0.41m、北側で0.35mで、南側が広い。遺構の主軸方向はN-22°-Eである。平面・断面ともに木棺の痕跡は確認できない。

埋土は、底面付近に粒状のロームブロックを含む黒褐色シルトが堆積し、中央南端には土師皿が正位置で置かれる。検出面までの上層はブロックの少ない黒色シルトであった。

人骨は遺存しないが遺物や遺構の形状、埋土から鎌倉時代の土壌墓と考える。(八峠)

AWS3703(図268, PL.67・112)

K17南東に位置する。検出時の平面形は南北方向に軸をもつ方形で、AT・ロームブロックの入り方が明瞭のため攪乱坑の可能性も想定された。長軸0.94m、短軸0.72m、検出の深さは0.43mで、底面はローム層である。

断面形は長方形で、底面・壁面ともに起伏はなく平滑である。底面の平面形は南北方向に軸をもつ隅丸方形で、長軸0.63m、短軸0.54m、主軸はN-11°-Eである。

埋土は黒～黒褐色シルトを主体とする層と、ロームブロックを多く含む層が船底状に堆積する。ロームブロックを含む人為的な堆積ではあるが、平面・断面ともに木棺の痕跡はなく、釘も出土していない。

底面中央の直上から、銭貨C2が出土した。6枚が重なっており、うち銭文が確認できる1枚は皇宋通寶(真書)である。

人骨は遺存していないが遺物や遺構の形状、埋土から室町時代の土壌墓と考える。(八峠)

AWS3741(図268, PL.67)

L17北東に位置する。遺構の北西隅が区画溝の埋土を掘り込む。検出時の平面形は南北方向に軸をもつ不整な長方形で、長軸0.95m、短軸0.51m、検出の深さは0.40mで、底面はローム層下の基盤層である。

断面形は長方形で、底面・壁面ともに起伏はなく平滑である。底面は南北方向に軸をもつ隅丸長方形で、底面の形状隅丸長方形で、長軸0.79m、短軸は南側0.45m・北側0.38mで南側が広い。遺構の主軸方向はN-30°-Eである。平面・断面ともに木棺の痕跡は確認できない。

埋土は底面と検出面に黒褐色シルトが、間にロームブロックを多く含む2・3層がいずれも船底状に堆積する。ロームブロックを含む人為的な埋土もみられるが、平面・断面ともに木棺の痕跡はなく、釘も出土していない。

底面中央から、東ねた銭貨C1が出土した。

人骨は遺存していないが遺物や遺構の形状、埋土から室町時代の土壌墓と考える。(八峠)

AWS3742(図268)

L17中央西側に位置する。南東隅でAWS3226に掘削され、北側では区画溝を掘削するものの、現代

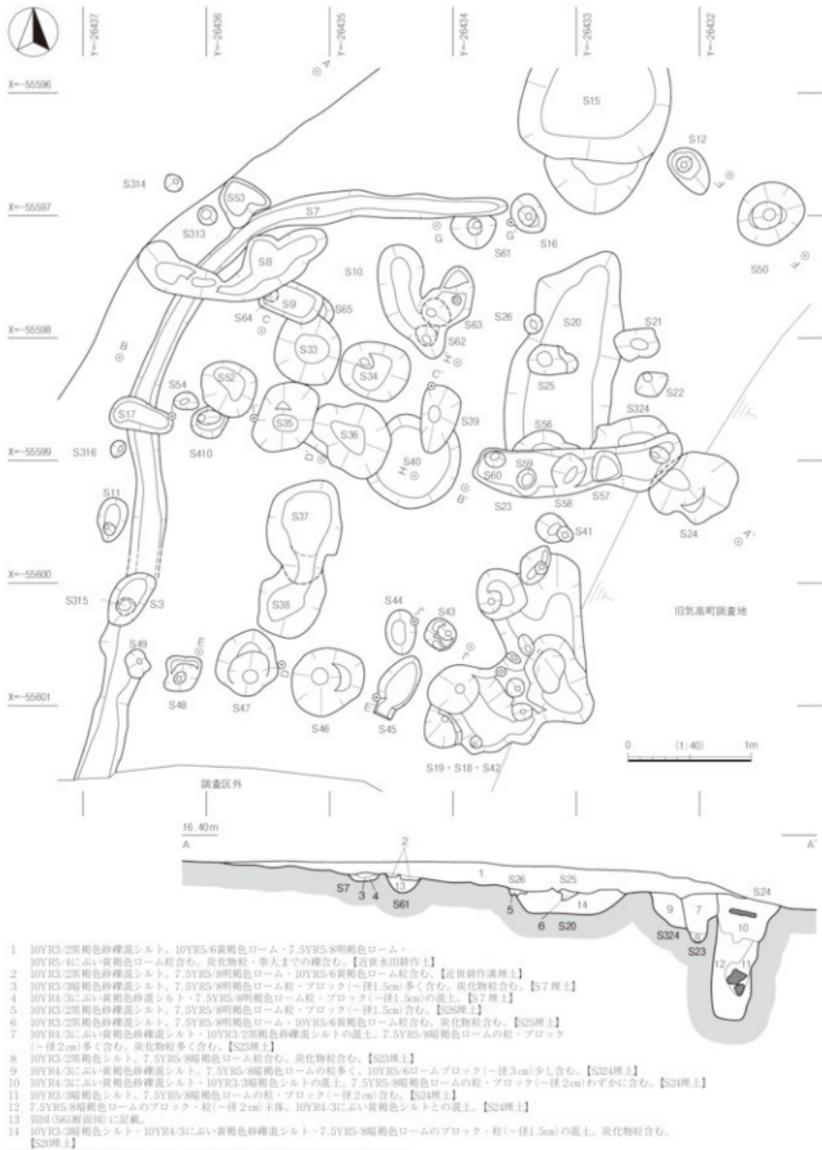


図269 A区東端部 平面・断面

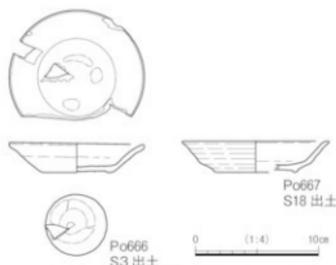


図270 A区東端部遺構 出土遺物

南側が若干広い。遺構の主軸方向はN-24°-Eである。平面・断面ともに木棺の痕跡は確認できない。

埋土は黒褐～暗褐色シルトを主体とし、西側の底面付近と検出面付近の南東側にロームブロックの多い範囲があるほか、ブロックを含む層が船底状に堆積する。人為的な埋土とみられるものの平面・断面ともに木棺の痕跡はなく、釘も出土していない。

遺物は埋土中から土器片が出土したものの小片のため図化に耐えない。人骨は遺存していないが遺構の形状や埋土から室町時代の土壌墓と考える。(八時)

その他の遺構

S7 (図269、PL.68)

O4、P4で検出したほぼ南北方向の溝で、北端部は東側に曲がり、東に少し伸びる。検出長6.98m・最大幅0.3m、検出面からの深さ0.17mである。断面形状は場所により異なるが、北部では浅いU字形ないし逆台形で、南側にいくにしたがって方形になる。

埋土は下層埋土(4層)は部分的で、概ね上層埋土(3層)のみの単層である。埋土からの出土遺物はない。

遺構の詳しい帰属時期は不明であるが、東側にある小穴S3に切られており、S3から中世末の瀬戸美濃小皿が出土していることから、それ以前の遺構であることがわかる。

この溝の東側に遺構が密に分布することや、南東側に方向に傾斜する開く形状から、段丘崖が近世以降の水田耕作地造成により削られる以前に、これらの遺構の一部を伴って南東側に傾斜する段丘崖の傾斜地に造られた段状遺構の壁溝と推定される。(荒川)

東端部の遺構群 (図269～271、PL.68)

A区東端部では、多くの小穴が検出された。S7によって区画された段状遺構に伴う可能性があるが、遺物を伴うものはほとんどなく、その時期や性格を詳らかにすることができないものが多い。ここでは若干の所見を記載する。

小穴のうち、S33・S34、S35・S36、S37・S38、S47・S48は、2つの同規模の小穴が近接するか切り合うような形で、東西方向あるいは南北方向に並ぶ。S35・S36は別個の2つの穴として掘られているが、S35上層(図271B-B'断面3層)はS36の上部に大きく被っており、同時に埋め戻された可能性がある。S37・S38は平面形状と埋土の堆積状況から考えて、異なる時期に別個に掘られた穴が切り合うのではなく、2つの穴を指向して同時に掘られ、埋められた後、部分的にもう一度掘られたことが窺える。S47・S48は埋め戻された時に拳大から人頭大の礫が入れられている。

他に、建物を構成しないが、S28・47・50には柱状の痕跡が認められ、S61・24には柱状のものを抜

の耕作土を除去した段階で、区画溝と同時に確認した。

検出時の平面形は南北方向に軸をもつ不整な長方形で、長軸1.17m、短軸0.78m、検出の深さは0.46mで、底面はローム層下の基盤層である。

断面形は逆台形で、壁面は概ね平滑であるものの底面には起伏が多く、南に向かい緩く下る。底面の平面形は南北方向に軸をもつ隅丸長方形で、長軸0.86m、短軸は南側0.64m、北側0.61mで、



図271 A区東端部 遺構断面

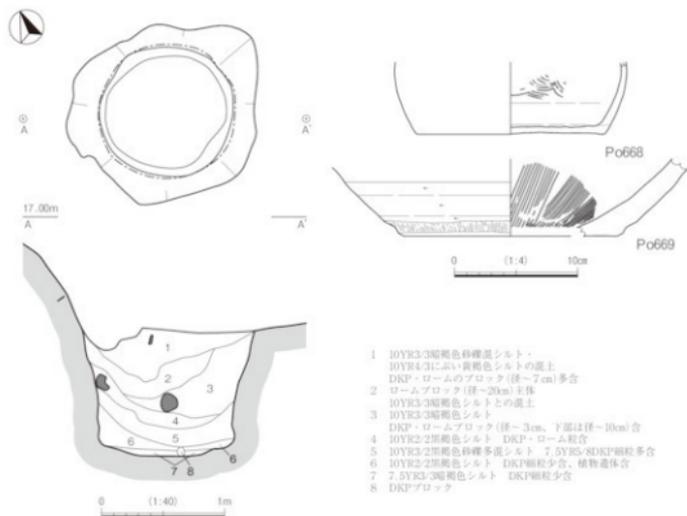


図272 A区 S66

き取った痕跡が認められる。また、埋土が単層で径が小さくて深い小穴(S314・64・54・315・49・48)は、杭状のものが打設され引き抜かれた穴と考えられる。

上記の遺構以外に、平面形状が不整形な遺構5箇所(S8・10・17・53・18)を検出した。S18については、遺構内に規模の様々な小穴を検出したが、斜めに深く入っているものが認められる。埋土から瀬戸美濃小皿(Po667)が出土している。S8・10・17・53については、検出面からの深さがかなり浅く、近世水田耕作土の形成より古い時期にあった上位層の攪乱の痕跡と考えられる。埋土からの出土遺物はない。(荒川)

S66(図272)

O4で検出した。平面形状はほぼ円形で、長径1.62m・短径1.46m、検出面からの深さ1.31mである。上部は後世の耕作地造成により破壊されており、本来の構築面はより上位にあったと推定できる。断面形状は逆台形で、下部はわずかにオーバーハングしている。埋土は大きくは基盤層ブロックを多く含む上層(1~3層)と基盤層ブロックを含まず泥がちな下層(4~7層)の2つに分けられる。上層は埋め戻し土で、下層は機能時・廃絶後に流入した土であると考えられる。埋土の上層・下層ともに拳大前後の礫を含み、埋積・埋め戻しの過程で投げ込まれたと考えられる。埋土からの出土遺物は、上層から土師器・須恵器の細片、鉄製品釘、下層から土師器の細片・須恵質摺鉢(Po669)、備前甕または壺(Po668)、輸入磁器の破片・石錘が出土している。埋土下層下部の堆積状況や下部がオーバーハングしていることから、機能時には水が溜まっていたことが窺える。

遺構の帰属時期は、埋土下層の出土遺物と近世以降の耕作土層に切られることから、中世後期以降で近世前期までに比定できる。(荒川)

AES485(図273)

S8・9にまたがって位置する遺構で、東は地下式坑20の地下室の天井が崩落した穴によって失わ

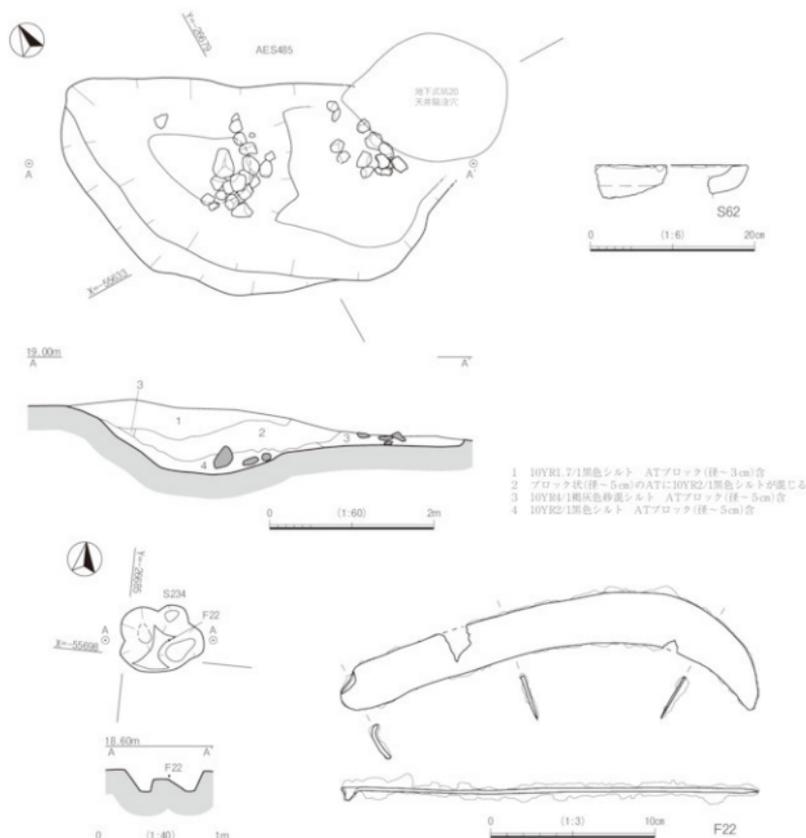


図273 A区 AES485・S234

れていた。

平面形は隅円台形状を呈し、長軸4.74m以上、短軸2.57mある。底面は東側半分が検出した面から0.1m前後ではほぼ平らになるのに対し、西半分は検出した面からの深さが約0.8mの掘鉢状になる。

東側の平坦面と掘鉢状になった部分の東斜面部には大きさが0.4mまでの礫がまとまった形で出土した。いずれの礫も遺構底面から僅かに離れた状態で出土したので、遺構が埋没し始めた段階のものと思われる。

埋土は、深くなる西側底面に黒色シルト主体の4層が堆積し、その上にATブロックをやや多く含む3層と細かいブロック状になったATを主体とした2層が堆積する。2層は人為的な埋め戻しを行った堆積の可能性が高い。最上層の1層は周辺の土壌が流入した堆積と考える。

遺物は1、2層から少量の土器が出土しており、1層からは土器に混ざって茶臼の破片S62が出土した。S62は表面が平滑に加工されており、地下式坑18で出土したS59と材質が似ている。

遺構の時期や性格を示す遺物は出土しなかったが、最終的な埋没層に茶白を含むことから中世の遺構と考えておきたい。(田中)

S234(図273、PL112)

O7で検出した小穴で、平面形は長径0.48m、短径0.45mの不整形を呈する。底面は生物擾乱の影響が凹凸があり、検出面から最も深い所で0.16mで浅い。

埋土はATブロックを含む黒色シルトの単層で、遺構の底面近くで鉄製の鎌F22が出土した。F22は刃先が大きく湾曲し、着柄側の角をほぼ直角に折り曲げる。

中世の遺構と考えるが、鎌以外には土器の小片が出土したものの時期を判断できるものがない。用途についても不明である。(田中)

調査区東側の溝群

比較的浅い溝が4条確認できた。いずれも直角に近い角度に折れ曲がる箇所があり、四角く区画することが目的だったと思われる。埋土は基盤層ブロックを含む黒色シルトを基本とする。

埋土内からは古代までの遺物が出土するものの、大型掘立柱建物群の柱穴を切っており、建物廃絶後に掘削されたものである。また、調査区南東部で検出したAES2867の埋土からは中世から近世の陶磁器が出土しており、近世以降の耕作区画に伴うものと考えた。

ほとんどの溝は黒色シルトのみで埋没していたが、AES1938(図274)だけは状況が異なる。

AES1938はR10からT11にかけてコの字状に延びる溝状遺構で、東側は圃場整備による削平によって失われていた。南北方向の長さは20.5m前後あり、北端はほぼ直角に折れ曲がり、南端はややカーブを描くように曲がっていた。溝の幅は1.3~1.6m程、検出面からの深さは削平を受けていない南北方向で0.25~0.30mあり、底面は北から南へ0.15m前後下がっていた。

埋土は基盤層のブロックを含む黒色シルトが主体であるが、一部に基盤層ブロックを主体とした埋土(中層)を挟んでおり、大きく3層に分けることが出来た。中層は何らかの事情で溝を埋め戻したと考えた。(田中)

調査区西側のテラス状遺構(図275、PL68)

AWS3029・AWS3030・AWS3045・AWS3047・P1~P4・AWS3047は西側の段丘下でテラス状遺構を形成する。

AWS3029・AWS3030はN26南西側で、東側の段丘面と西側の段丘下との間に位置する。いずれも溝状の遺構で、N-33°-Eの軸をもち、直線に延びる。AWS3029は長さ1.3m、最大幅0.3m、検出面からの深さは0.1m、AWS3030は長さ4.5m、最大幅0.35m、検出面からの深さ0.19mで、ともに底面は基盤層である。

断面は皿状で、埋土は明るい黒褐色シルトを主体とする。

遺物は埋土中から土器片が出土したものの、小片のため図化に耐えない。

AWS3045・AWS3047・P1~P4はN26中央からO26南西、東側の段丘面と西側の段丘下との間に位置する。

AWS3045は溝状の遺構で、N-31°-Eの方位に12.2m、N-50°-Wに屈曲して1.8m延び、土坑AWS3047に取り付く。最大幅は0.75m、検出面からの深さは0.46mある。底面は基盤層中で、南東から北西方向に向かい、底面レベルが下がることから排水を目的とした遺構と考える。

断面はやや深い皿状で、埋土は黒褐色シルトを主体とする。

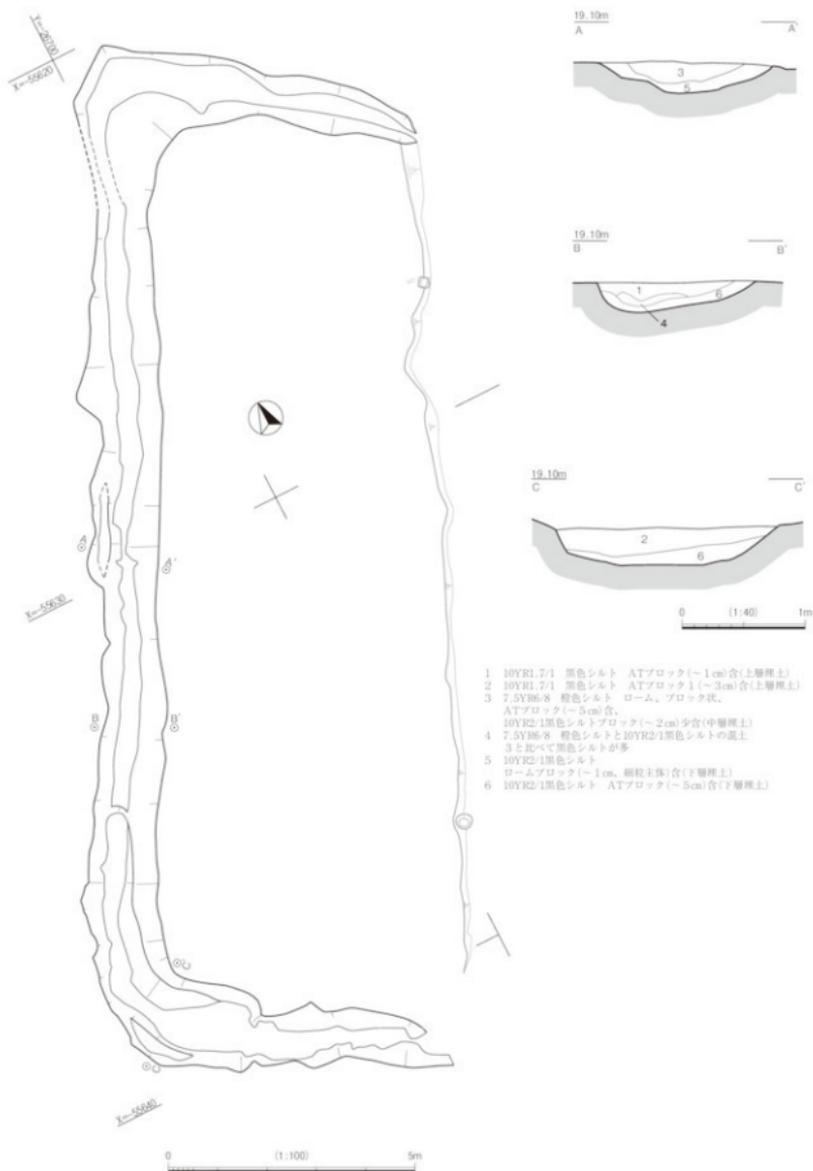


図274 A区 AES1938

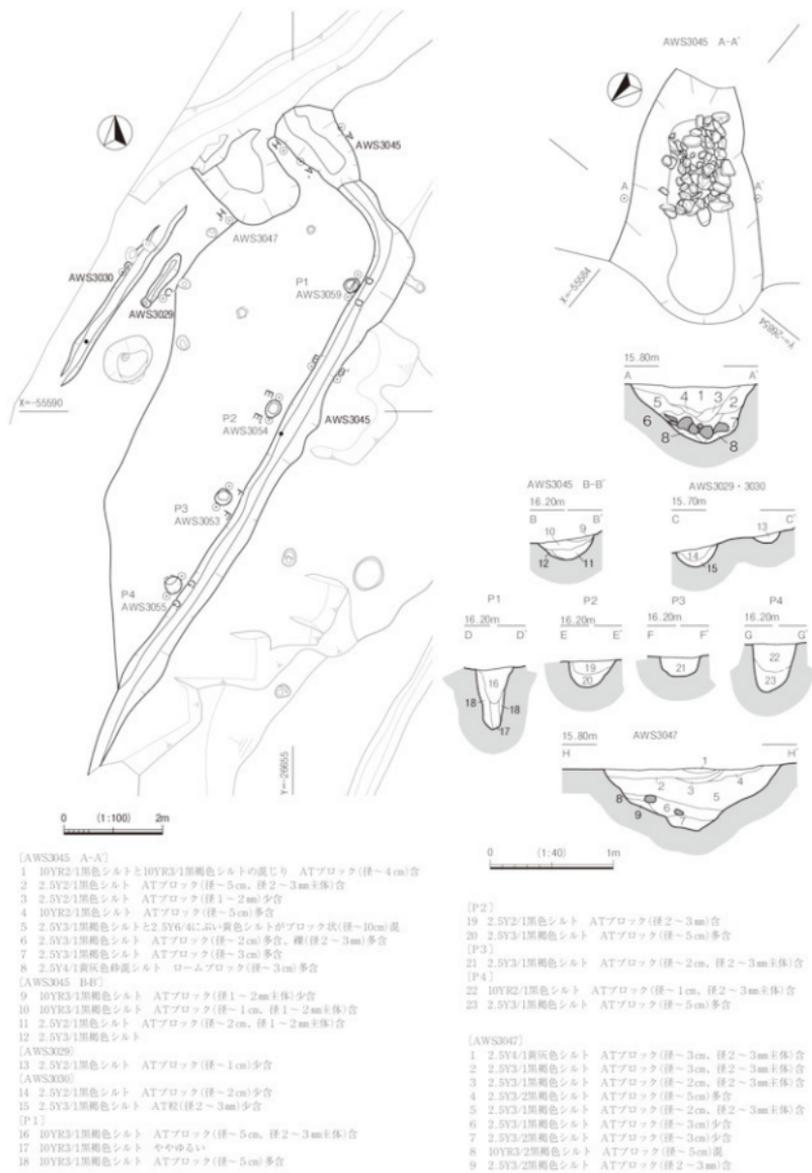


図275 A区西側テラス状遺構

遺物は埋土中から土器片が出土したものの、小片のため図化に耐えない。

土坑AWS3047は南東側で溝状遺構AWS3045が取り付く、一連の遺構である。

西側を耕地段差により掘削されており、不整な隅丸長方形の範囲として検出した。長軸は残存値で1.70m、短軸1.43m、検出面からの深さは0.53mで、底面は基盤層である。

断面形は不整な逆三角形形で、壁面には起伏が認められる。底面は検出面に比べ小さく、南東から北西方向に軸をもつ楕円形で、長軸は残存値で0.92m、短軸は最大値で0.45mある。

埋土は上下に分かれ、検出面付近は黄灰色でATブロックを多く含み、下層は黒褐色シルトを主体に、ATブロックや大粒の礫を含む。いずれも由来は東側の丘陵と考える。

遺構の南東側の底面上に石のまとまりが出土した。拳大から人頭大までの石が尖底を埋めるように入れられていた。廃棄されたものとしては北西下がりの底に崩れることなく出土したことから、廃棄とは考えにくい。排水を目的とした溝状遺構AWS3045と、何らかの関わりがあると推察する。

P1～4は溝状遺構AWS3045の西際で添うように検出されたため、一体の遺構として調査した。いずれも平面は不整な円形、径0.28m～0.38m、検出面からの深さは0.15m～0.49mである。P1-P2間が3.1m、P2-P3間、P3-P4間がともに2mある。

埋土はいずれも黒褐色シルトを主体とする。いずれのピットからも遺物は出土していない。

AWS3047はN26中央、AWS3045の南西隣にある。長軸は残存値で1.7m、短軸は1.43m、底面は基盤層である。

断面形は不整な逆三角形で、壁面には起伏が認められる。

遺構の下層から拳大の石が出土したが、北東隣にあるAWS3045程のまとまりは認められない。

埋土は黒褐色シルトを主体とする。遺物は埋土中から土器片が出土したものの、小片のため図化に耐えない。

これらの遺構の時期を特定する遺物はないが、室町時代以降の遺構群と考える。(八峠)

第7節 時期不詳の遺構

本節は、出土遺物がほとんどないことなどから時期が判断できなかった遺構について記述する。

掘立柱建物

掘立柱建物49(図276、PL69)

O6、P6で検出した桁行3間の南北棟の建物である。梁行は1間で、棟持柱の穴が妻側柱筋のすぐ外側にある近接棟持柱建物である。建物の規模は桁行5.45m、梁行3.32mと推定し、棟持柱の穴の芯々間距離は6.05mである。建物の主軸方向はN-29°-Eである。

柱穴の平面形は楕円形で、長径が0.37～0.48(平均0.41)mであるのに対して、検出面からの深さは0.45～0.79(平均0.56)mあり、穴の平面規模に対して深い。桁行の柱穴の芯々間距離は1.75～1.89(平均1.82)mで、棟持柱は梁行のほぼ中央にある。

柱穴掘方は土器の小片が数点出土したが、時期を判断しうる遺物はなかった。(田中)

掘立柱建物50(図277)

M6・7、N6・7に位置する桁行4間、梁行3間の南北棟の建物である。規模は、桁行が5.74m、梁行が4.66mと推定し、建物の主軸方向はN-17°-Eである。

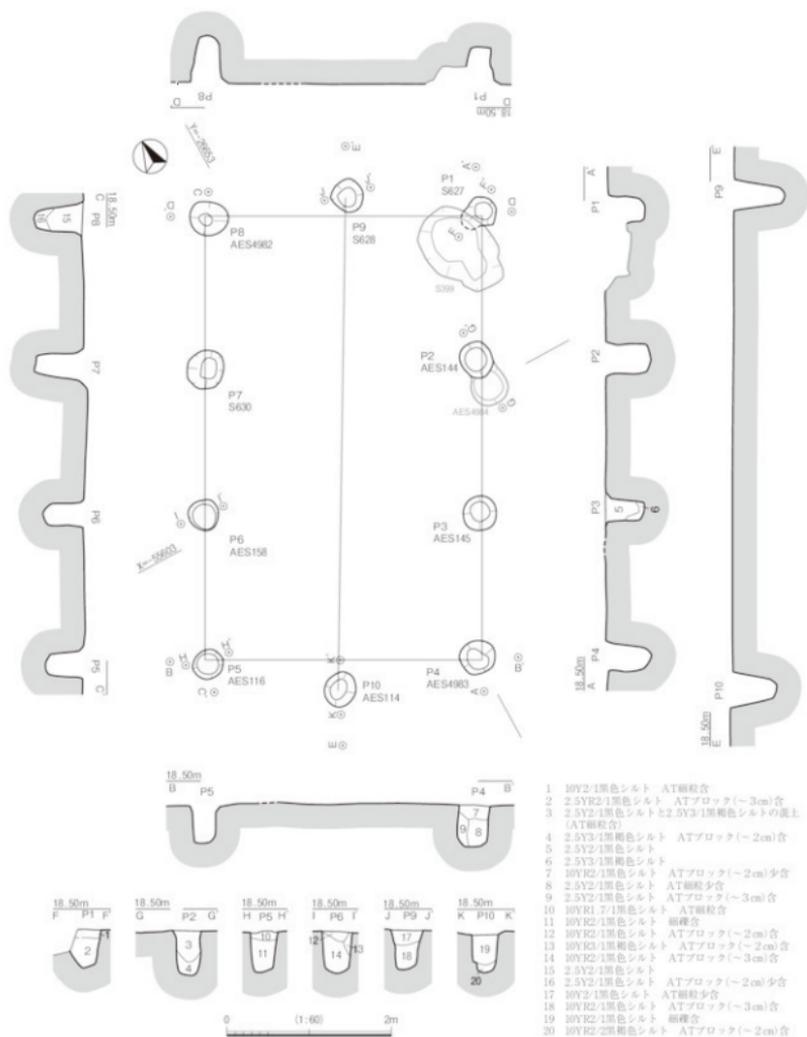
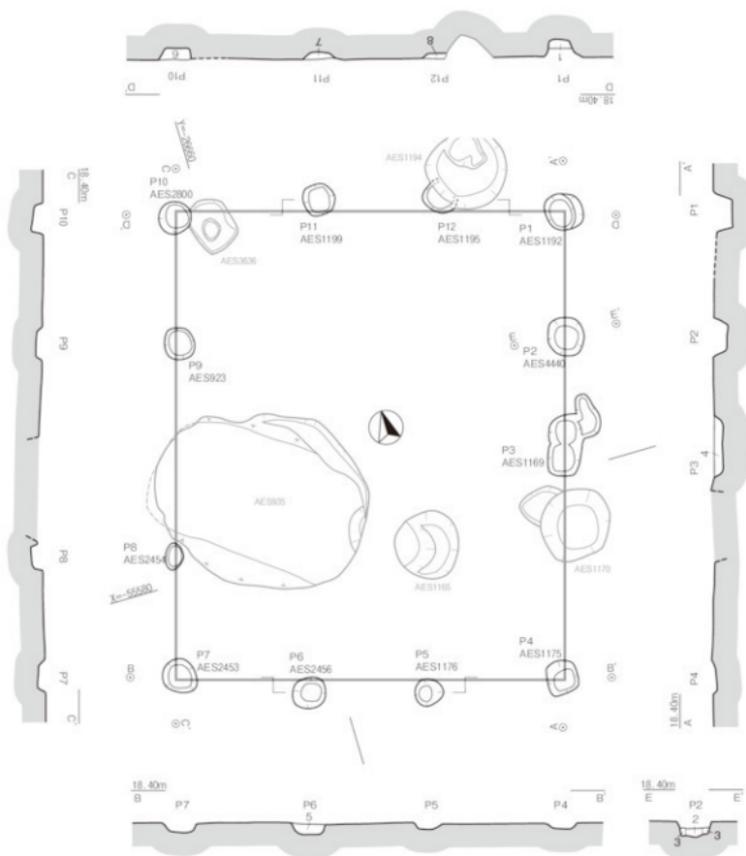


図276 A区 掘立柱建物49 平面・断面



1 10YR2-1黒色シルト
 2 10YR3-1黒褐色シルト AT細粒少含
 3 10YR2-1黒色シルト ATブロック細粒少含
 4 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(厚=1cm)含
 5 10YR2-1黒色シルト 粗粒含
 6 10YR2-1黒色シルト AT細粒少含
 7 10YR2-1黒色シルト
 8 10YR2-1黒色シルトと10YR3-1黒褐色シルトの混土

図277 A区 掘立柱建物50 平面・断面

柱穴の平面形はいずれもほぼ円形を呈しており、規模は最大径が0.32~0.48(平均0.40)mあり、検出面からの深さは0.08~0.20(平均0.12)mある。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。柱痕は確認できなかった。

柱穴の芯々間距離は桁行で1.18~1.54(平均1.40)m、梁行で1.42~1.78(平均1.56)mある。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

掘立柱建物51(図278)

O9で検出した桁行4間、梁行3間の南北棟の建物である。柱の痕跡は確認できず、柱穴掘方の中央を通るように推定すると桁行5.19m、梁行4.12mとなり、建物の主軸方位はN-14°-Eである。

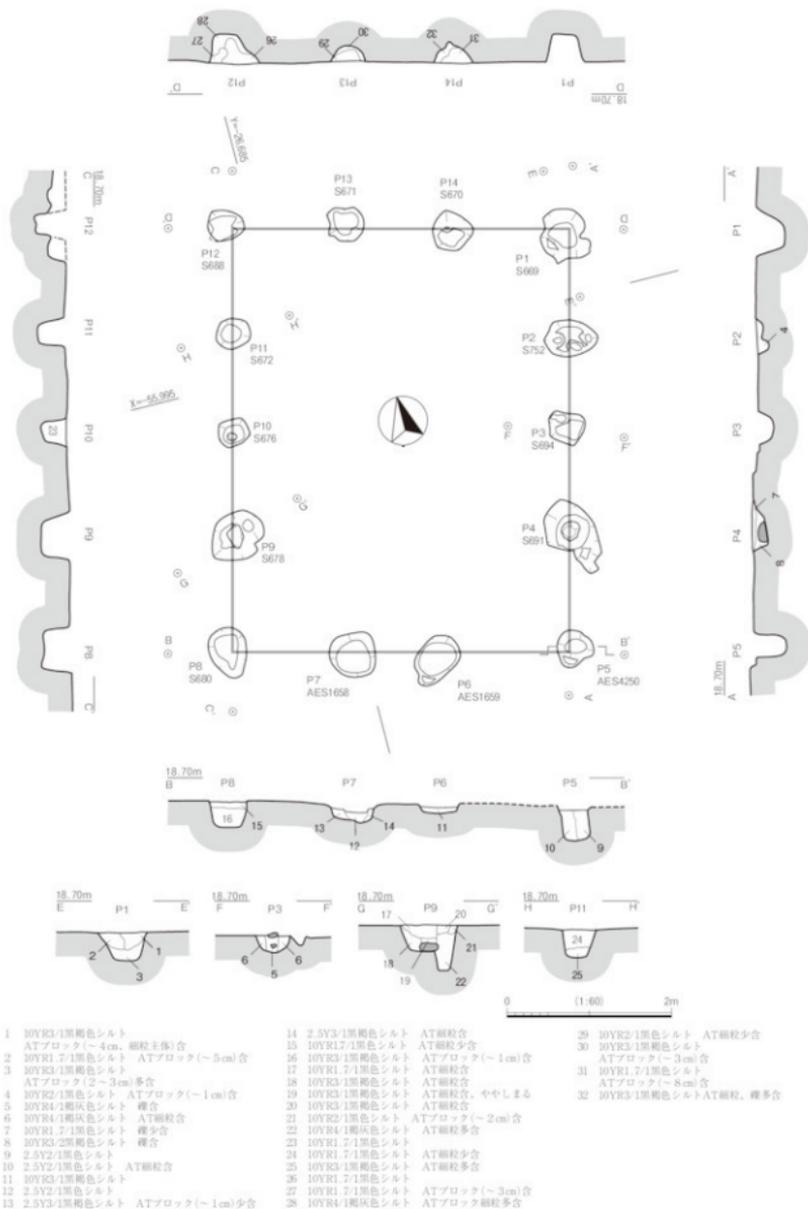


図278 A区 掘立柱建物51 平面・断面

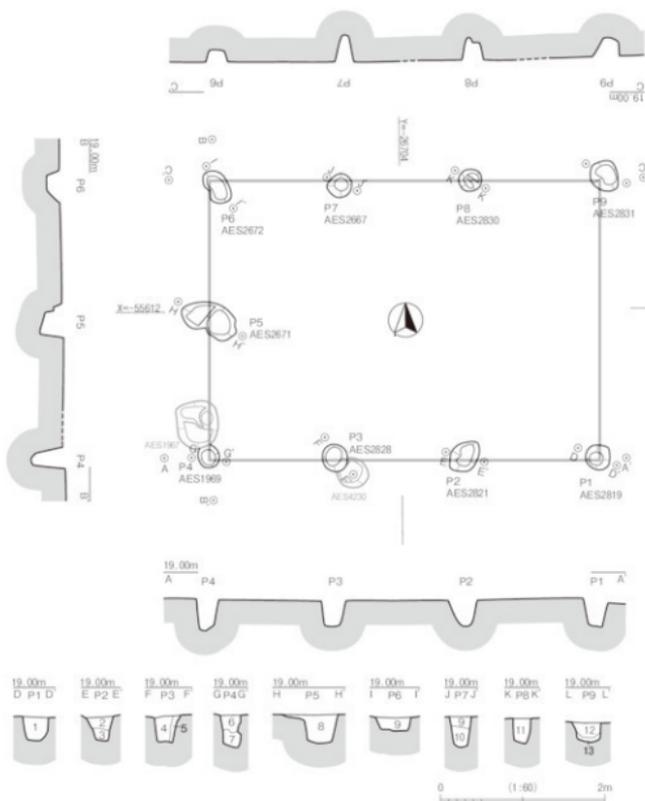


図279 A区 掘立柱建物52

柱穴の平面形は楕円形または不整形で、規模は長径が0.37～0.99(平均0.58)m、検出面からの深さが0.22～0.55(平均0.29)mでばらつきが大きい。P4、9では底面に長径0.2～0.3mの磔が出土しており、この上に柱が乗せられた可能性があるが、土層断面を視察では柱痕跡は認められなかった。推定線上的で柱穴の芯々間距離は桁行で1.12～1.55mで、最も南側の柱間が他よりも広くなり、梁行では1.05～1.60mで中央の柱間が狭くなる。

建物の軸や梁行の規模が掘立柱建物8に近く、同時期の建物の可能性があるが、掘方埋土からは弥生土器、土師器の細片が出土したものの時期を判断しうる遺物に乏しい。(田中)

掘立柱建物52(図279)

Q11で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟の建物である。東側柱列の中央の柱穴は確認できない

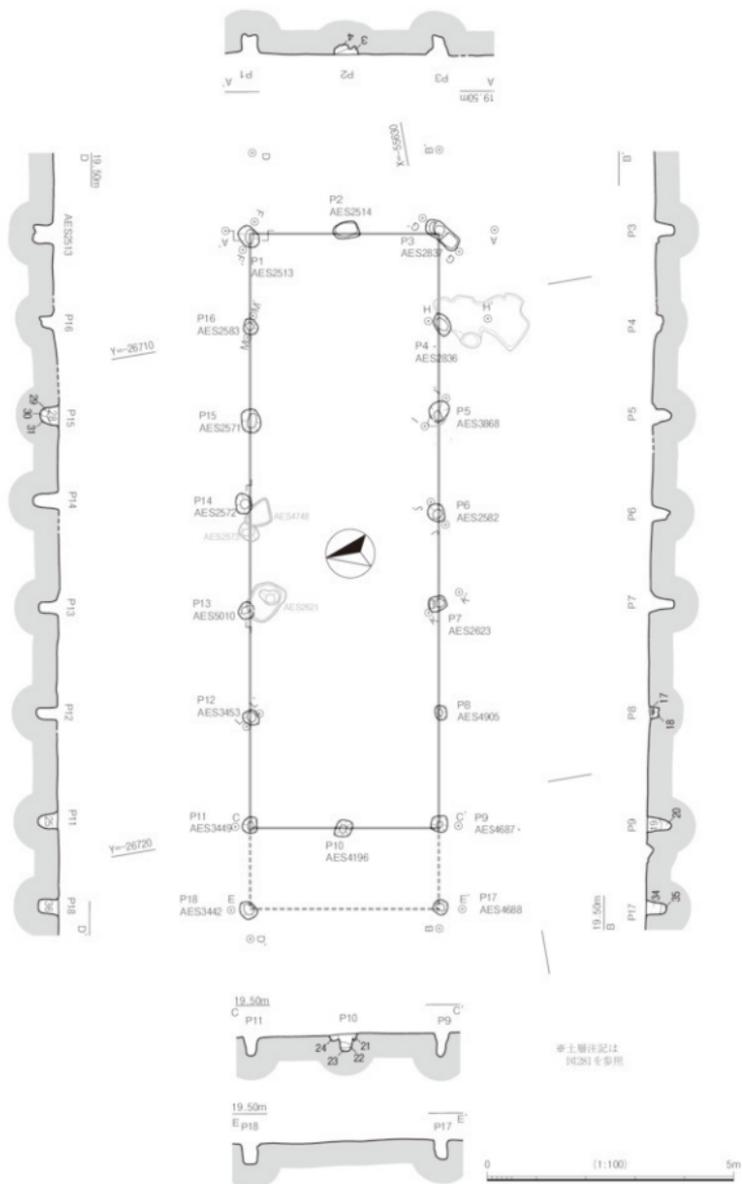


図280 A区 掘立柱建物53 平面・断面



図281 A区 掘立柱建物53 柱穴断面

が、さらに東側にあるピットの距離が離れすぎていることから、建物規模を確定した。規模は桁行が4.75m、梁行が3.42mと推定し、建物の主軸方位はN-89°-Wである。

柱穴の平面形は楕円形でややいびつなものもみられる。長径は0.27~0.46(平均0.37)m、検出面からの深さは0.25~0.40(平均0.31)mある。桁行の柱穴の芯々間距離は1.49~1.67(平均1.58)mで、梁行は西辺の真ん中の柱がやや南に偏る(北から1.75m、1.67m)。

柱穴掘方埋土からは土器の小片が出土したが時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

掘立柱建物53(図280・281、PL.69)

S11・12・13で検出した桁行6間、梁行2間の東西棟の建物である。規模は桁行12.17m、梁行3.87mで、建物の主軸方位はN-80°-Wである。

柱穴の平面形は楕円形と不整形が混在しており、長径が0.32~0.59(平均0.41)m、検出面からの深さが0.13~0.52(平均0.35)mある。柱穴の並びは比較的まっすぐ通っており、北側柱列のP13、14だけがやや外側にずれる。柱痕跡は確認できず、桁行の柱穴の芯々間距離は1.71~2.25(平均2.03)mで、西側の2間分が他より広くなる。梁行は西側柱列のP10はほぼ中央にある(北から1.89m、1.98m)のに対し、東側柱列のP2は南に偏る(北から2.00m、1.87m)。

なお、建物の西側には、桁行の柱筋の延長線上にP17、18がある。芯々間距離は建物西端の柱間とはほぼ同じ(北1.74m、南1.72m)で、建物に付随する可能性がある。

柱穴掘方からは土器の小片が出土したが、時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

掘立柱建物54(図282)

S11・12で検出した東西棟の建物で、桁行6.80m、梁行3.63mと推定した。確認できる柱穴の数でいえば、桁行3間、梁行2間となるが、桁行の西端の柱穴の芯々間距離が2.8m以上あり、やや不自然である。この間には皿状のごく浅い窪みがあり、これらが柱穴の残骸だった可能性がある。その場合、桁行は4間になる。建物の主軸方位はN-68°-Wである。

柱穴の平面形は楕円形で、長径が0.45~0.58(平均0.51)m、検出面からの深さが0.06~0.25(平均0.14)mである。柱穴の並びはあまりよくなく、特に北側柱列は中央が外側に大きくずれる。柱穴の芯々間距離は桁行(西端を除く)で1.61~2.32m、梁行で1.63~2.00mで、ばらつきが大きい。

柱穴掘方からは土器の小片が出土したが、時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

掘立柱建物55(図283)

S12、T12で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟の建物である。西側柱列の中央に柱穴は確認で

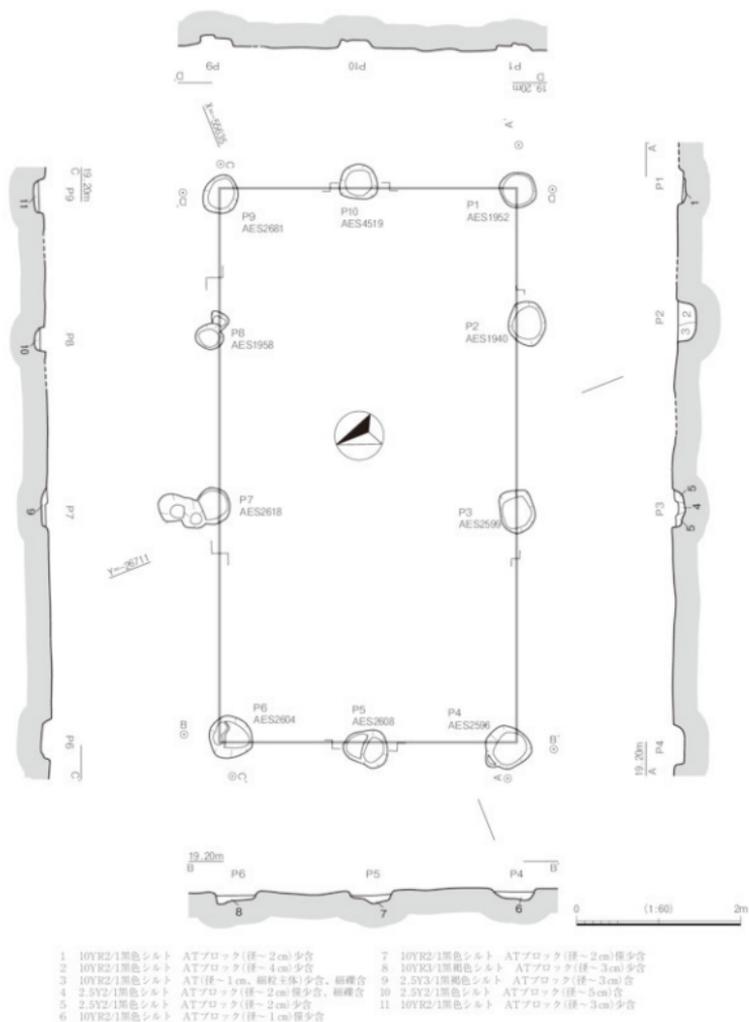


図282 A区 掘立柱建物54 平面・断面

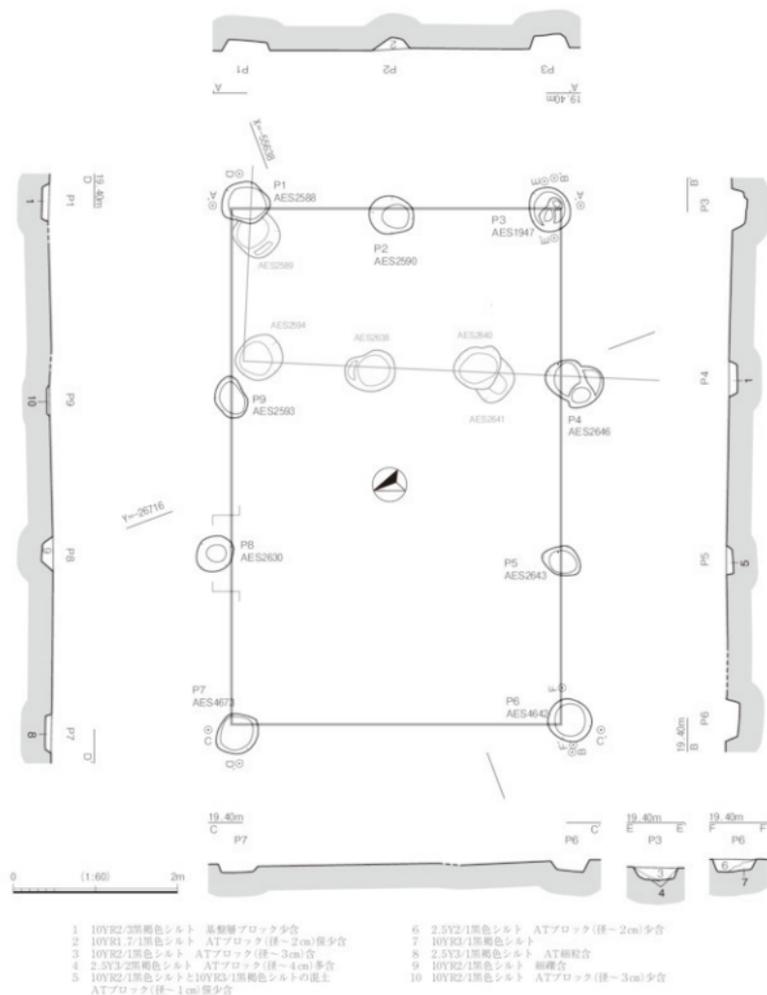


図283 A区 掘立柱建物55 平面・断面

きなかったが、桁行の柱列が西に続かないことから、建物規模を確定した。規模は桁行6.38m、梁行4.03mと推測し、建物の主軸方位はN-70°-Wである。

柱穴の平面形はややいびつな楕円形で、長径が0.44~0.71(平均0.54)m、検出面からの深さが0.04~0.21(平均0.14)mで、全体に浅い。柱の並びはあまりよくなく、北側柱列のP8は外側にずれる。桁行の柱穴の芯々間距離は1.99~2.23(平均2.13)mで、梁行の東側柱列のP2は中央よりやや南に偏る(北から2.05m、1.98m)。

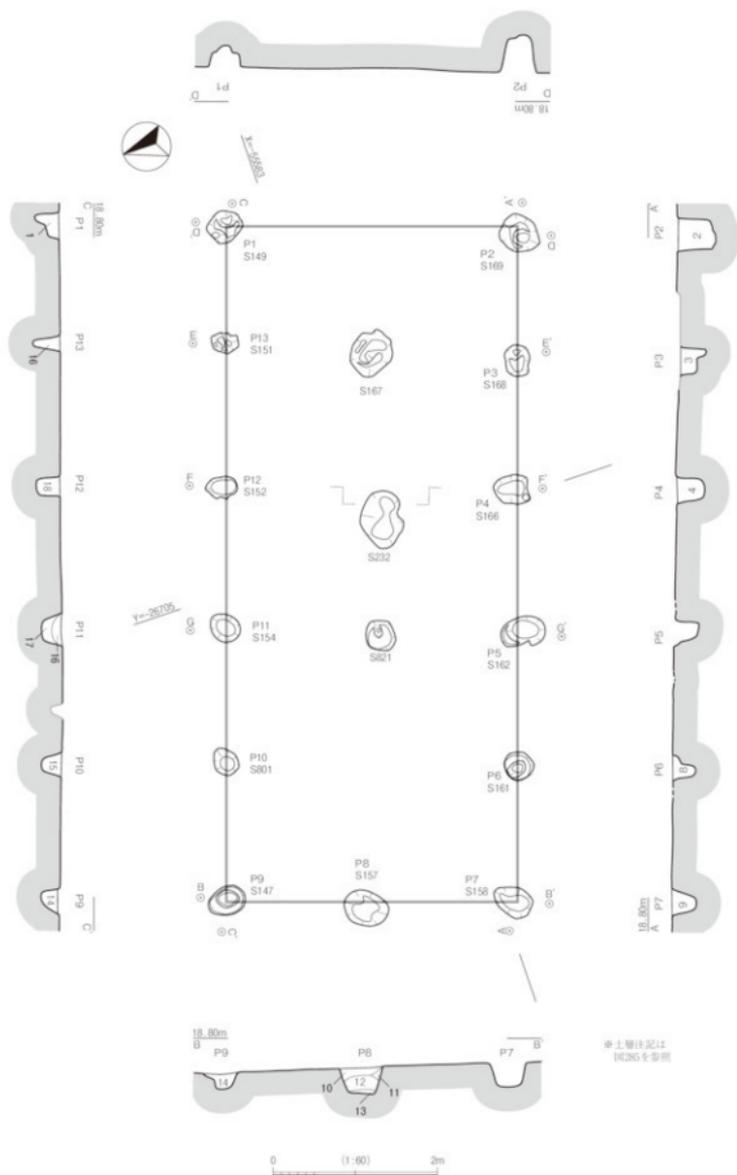


図284 A区 掘立柱建物56 平面・断面

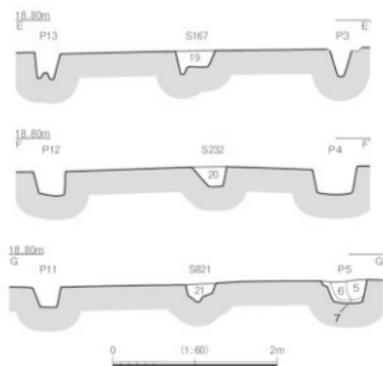


図285 A区 掘立柱建物56(2)

- 1 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～3cm)合
- 2 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～5cm)合
- 3 HYR2-1黒色シルト 細砂合
- 4 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～2cm)合
- 5 HYR2-1黒色シルト AT細砂合
- 6 HYR2-1黒色シルト 細砂合
- 7 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～2cm)合
- 8 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～2cm)合
- 9 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～2cm)合
- 10 HYR2-1黒色シルト
- 11 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～3cm)合
- 12 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～3cm)合
- 13 AT(ブロック状)
- 14 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～2cm)少合
- 15 HYR1-7-1黒色シルト ATブロック(～3cm)合
- 16 HYR2-1黒色シルト
- 17 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～4cm)合
- 18 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～1cm)合
- 19 HYR2-1黒色シルト AT細砂合
- 20 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～5cm)合
- 21 HYR2-1黒色シルト ATブロック(～2cm)合

柱穴掘方からは土器の小片が出土したが、時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

掘立柱建物56(図284・285)

N11で検出した桁行5間、梁行2間の東西棟の建物である。柱痕跡などが残っておらず、柱穴掘方の中央をなるべく通るように推定すると、桁行8.30m、梁行3.54mになり、建物の主軸方位はN-71°-Wである。また、建物東側中央の柱穴は検出されなかった。

柱穴の平面形は不整形が多く、長径0.32～0.53(平均0.43)m、検出面からの深さは0.25～0.47(平均0.32)mある。建物の推定線上での掘方の芯々間距離は桁行で1.44～1.77mとばらつきがあり、西側の梁行は北側が狭い(北から1.69m、1.85m)。

なお、建物の推定中軸線上で柱穴掘方と規模の近い穴を3基確認した。特にS821とP5、P11は直線に並んでおり、間仕切りの柱穴の可能性はある。

柱穴掘方からは弥生土器または土師器の細片が数点出土したのみで、時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

掘立柱建物57(図286、PL70)

M12杭付近で検出した東西棟の建物で、建物の主軸方位はN-67°-Wである。

調査当初は2列の柱列と認識していたが、その間に柱列の掘方と規模の近い穴があることから、掘立柱建物と判断した。また、調査時には1棟の建物と考えていたが、掘方の間隔を検討した結果、建物の西側柱列がほぼ同じ位置で桁行長が異なる2棟が存在すると想定した。以下、桁行が長いものを建物A(実線の推定線)、短いものを建物B(破線の推定線、柱穴アミカケ)と呼称して記述する。

なお、建物西側柱列の掘方(P10～12)はそれぞれで2つの掘方が重複したものと思われ、P10とP12の底面には東側が0.1m低くなる段差がある。それぞれの建物柱穴の掘方底面を比較すると、建物Aのものよりも建物Bのものの方が深い傾向があり、南側柱列の断面図でみると、P10の西側底面とP3の底面を結んだ線上にほとんどの掘方底面があり、B1-B2断面でP10の東側底面とP24の底面と結んだ線上にはP25とP29の底面がある。これらのことから、P10とP12の底面の段差がそれぞれの建物柱穴の掘方底面に対応しており、西側が建物Aに、東側が建物Bに対応する可能性がある。ただし、調査時に検出面での切り合い関係は判別できておらず、各段階の掘方の平面規模は不明である。P12の堆

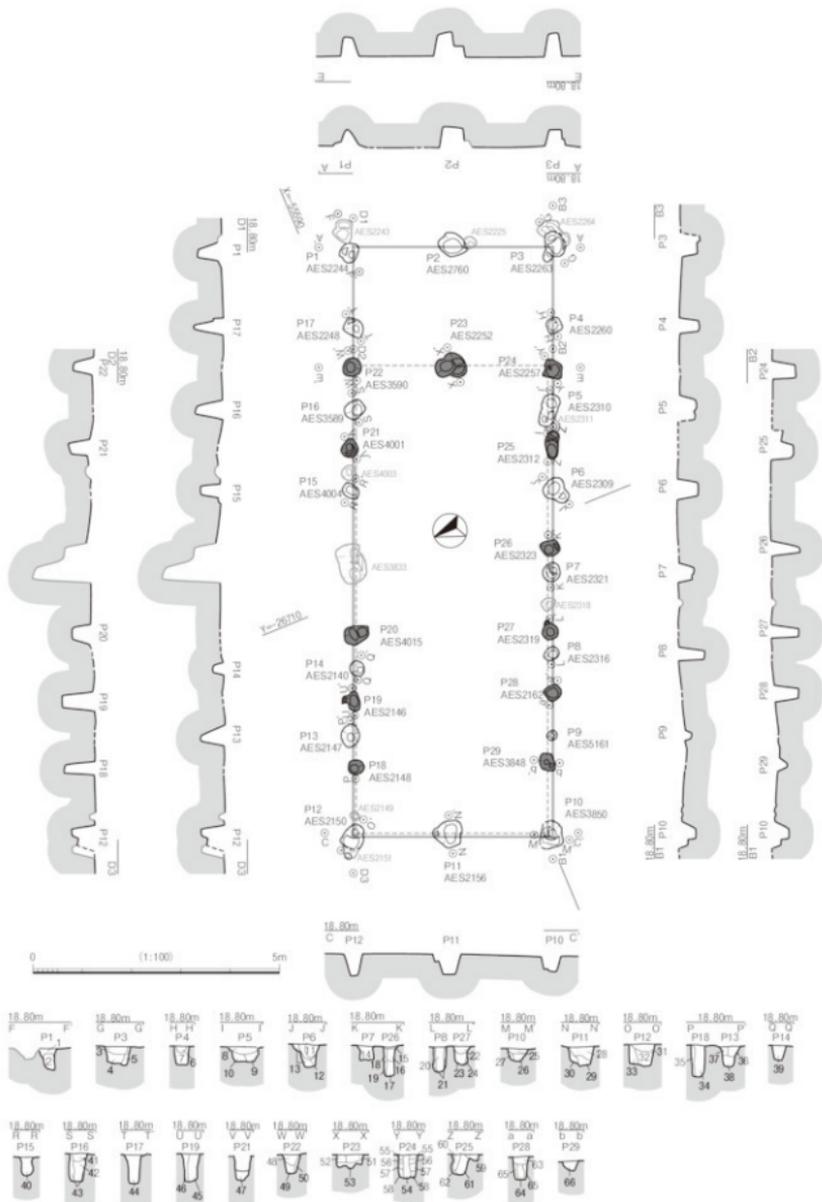


図286 A区 掘立柱建物57 平面・断面

表21 A区 掘立柱建物57 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	2.5Y2-1黒色シルト	(ATブロック(~4cm)少含)	34	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)少含)
2	2.5Y2-1黒色シルト	(AT細粒含)	35	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(~3cm)含)
3	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~2cm)少含)	36	10YR2-1黒色シルト	(炭粒含)
4	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~5cm)少含)	37	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)含)
5	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(~2cm)多含)	38	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)含、炭よりブロック多)
6	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)少含)	39	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~5cm)含)
7	10YR2-1黒褐色シルト	(ATブロック(~3cm)多含)	40	10YR1-7-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)少含)
8	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~3cm)少含)	41	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(~2cm)少含)
9	10YR2-1黒色シルト		42	10YR2-1黒色シルト	
10	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~2cm)含)	43	10YR3-1黒褐色シルト	
11	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)少含)	44	10YR2-1黒色シルト	(細粒含)
12	10YR2-1黒色シルト		45	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~1cm)多含)
13	10YR3-1黒褐色シルト	(AT細粒少含)	46	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~1cm)多含)
14	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)少含)	47	10YR1-7-1黒色シルト	(AT細粒多含、ややゆるい)
15	10YR3-1黒褐色シルト		48	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~2cm)少含)
16	10YR2-1黒色シルト		49	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~3cm)少含)
17	10YR2-2黒褐色シルト		50	10YR3-2黒褐色シルト	(ATブロック(~3cm)少含)
18	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(~3cm)少含)	51	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)少含)
19	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~3cm)含)	52	10YR3-1黒褐色シルト	
20	10YR2-1黒色シルト		53	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~5cm)多含)
21	10YR2-2黒褐色シルト		54	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~1cm)含)
22	10YR2-1黒色シルト		55	10YR3-1黒褐色シルト	
23	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~3cm)少含)	56	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~2cm)含)
24	10YR3-2黒褐色シルト	(ATブロック(~1cm)含む)	57	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~2cm)少含)
25	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~5cm)含)	58	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~2cm)含)
26	10YR2-1黒色シルトと10YR3-2黒褐色シルトの混在	(ATブロック(~3cm)含)	59	10YR3-1黒褐色シルト	
27	10YR3-4-1赤黄褐色シルト	(10YR3-1黒褐色シルトとブロック(~3cm)含)	60	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~2cm)少含)
28	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~3cm)少含)	61	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(~5cm)少含)
29	10YR2-2黒褐色シルト	(ATブロック(~1cm)含)	62	AT1-10YR2-2黒褐色シルトとブロック(~3cm)含、ややゆるい	
30	10YR3-1黒褐色シルト	(ATブロック(~3cm)多含)	63	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~1cm)含)
31	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~2cm)少含)	64	10YR1-7-1黒色シルト	
32	10YR2-1黒色シルト		65	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~5cm)含)
33	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~5cm)少含)	66	10YR2-1黒色シルト	(ATブロック(~3cm)含)

積状況では、土質に大きな差はないものの、西側の埋土を切るような形で東側の埋土があるので、建物Bが建物Aの後に建て直された可能性がある。

建物Aは桁行7間、梁行2間で、規模は桁行12.10m、梁行4.08mと推定した。なお、北辺のほぼ中央(P14とP15の間)にあるべき掘方は堅穴建物10の主柱穴掘方AES3833の地点にあったと思われるが、調査時には埋土の差を判別できなかった。

柱穴掘方の平面形は楕円形で、長径が0.23~0.58(平均0.42)m、検出面からの深さは0.12~0.65(平均0.43)mある。建物推定線上で桁行の掘方芯々間距離は、西端の1間目がやや広く(北側柱列2.03m、南側柱列2.08m)、北側柱列の西から2間目がやや狭い(1.40m)ものの、それ以外で確認できるものは1.60~1.73mでばらつきが小さい。

建物Bは桁行6間、梁行2間で、規模は桁行9.54m、梁行は建物Aと同じ4.08mと推定した。この建物も北側柱列の中央(P20とP21の間)にあるべき掘方がAES3833と重複していたと思われるものの、平面形状の検出はできなかった。

掘方の平面形は楕円形または不整形で、長径は0.33~0.65(平均0.42)m、検出面からの深さは0.20~0.64(平均0.51)mある。建物推定線上での桁行の掘方芯々間距離は東側と西側で大きく異なる。P26よりも西側の芯々間距離は1.25~1.66(平均1.40)mであるのに対し、東端の1間は1.72m、南側の東から2間目は2.03mとかなり広がる。東と西で建物の構造が異なる可能性もあるが、間仕切りの柱穴掘方などは確認できなかった。いくつかの掘方で柱の痕跡と思われる堆積がみられ、径0.1m前後の柱が立てられたと思われる。

柱穴掘方内からは土器の細片が出土したが、時期を特定しうる遺物は出土しなかった。そのため建物の時期は判然としなが、P10が堅穴建物11の周壁溝を切ることから、古代以降の建物と判断した。

(田中)

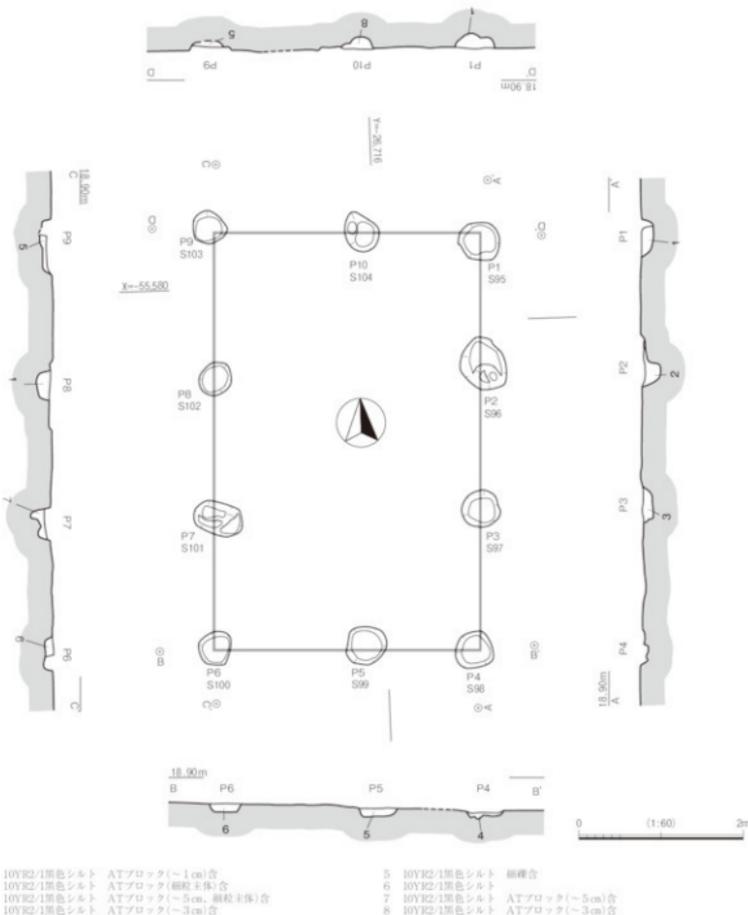


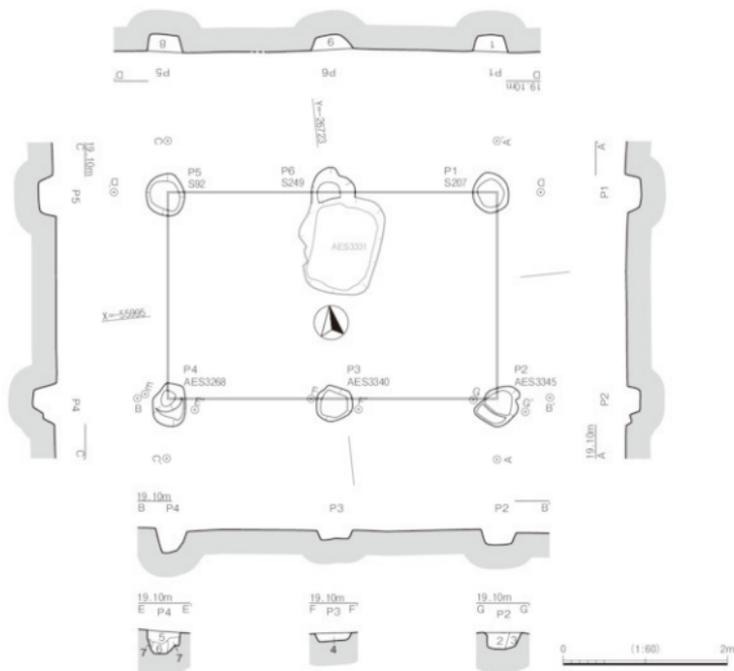
図287 A区 掘立柱建物58 平面・断面

掘立柱建物58(図287)

M12、N12で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。柱の痕跡などが残っておらず、柱穴掘方の中央をなるべく通るように推定すると桁行5.11m、梁行3.24mになり、建物の主軸方位はN-2°-Eである。

柱穴の平面形は楕円形で、規模は長径0.40~0.66(平均0.49)m、検出面からの深さ0.10~0.49(平均0.20)mある。桁行の柱穴芯々間の距離は1.56~1.81(平均1.70)mである。また梁行の中央の柱穴は推定される建物の中心より0.2m程度東に寄る。

柱穴掘方からは弥生土器または土師器の細片が数点出土したのみで、時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)



- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1 30YR2/1黒色シルト ATブロック(～3cm)多含 | 6 30YR3/1黒褐色シルト ATブロック(～3cm)多含 |
| 2 30YR2/2黒褐色シルト ATブロック(～1cm)僅少含 | 7 30YR2/1黒褐色シルト ATブロック(～5cm)多含 |
| 3 30YR2/1黒色シルト ATブロック(～3cm)僅少含 | 8 30YR2/1黒色シルト 細礫含 |
| 4 30YR2/2黒褐色シルト ATブロック(～2cm)僅少含 | 9 30YR2/1黒色シルト 細礫含 |
| 5 30YR2/1黒色シルト ATブロック(～1cm)少含 | |

図288 A区 掘立柱建物59 平面・断面

掘立柱建物59(図288)

O13の中央やや東寄りに位置する桁行2間、梁行1間の東西棟の建物である。規模は桁行が4.00m、梁行が2.52mと推定し、建物の主軸方位はN-84°-Wである。北側柱列の中央の柱穴P6は中世の木棺墓AES3331に壊される。

柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は最大径が0.43～0.52(平均0.48)mで、深さは0.20～0.41(平均0.33)mある。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含んでいる。柱痕は確認できなかった。柱穴の芯々間距離は桁行で1.96～2.02(平均1.99)mある。

柱穴掘方から時期を決定する遺物は出土しなかった。(岡田)

掘立柱建物60(図289)

O13・14、P13・14に位置する、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物である。規模は桁行が4.58m、梁行が3.30mと推定し、建物の主軸方位はN-10°-Eである。北西隅の柱穴は、削平のため確認できなかったが、他の柱穴の配置と柱穴の底面レベルから判断して、建物を復元した。

柱穴の平面形はほぼ円形を呈しており、規模は最大径が0.30～0.50(平均0.41)m、深さは0.13～

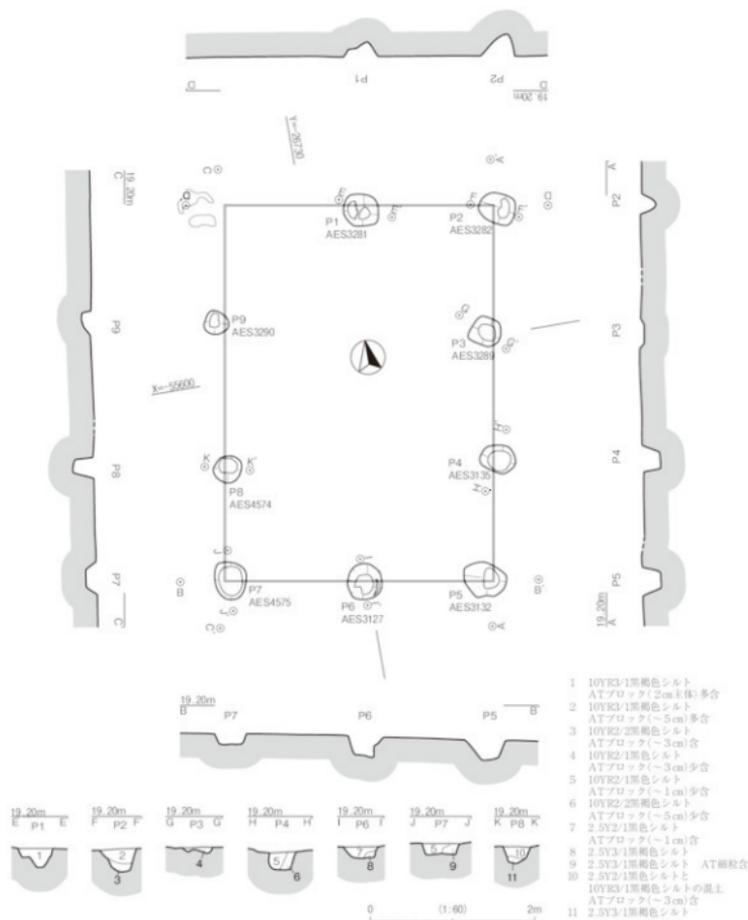


図289 A区 掘立柱建物60 平面・断面

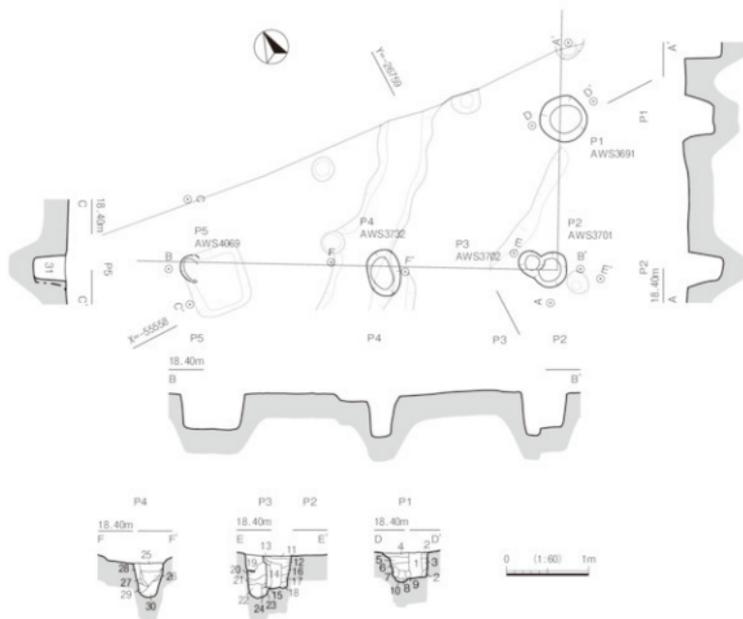
0.25(平均0.17)mある。

埋土は、いずれも旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかった。柱穴の芯々間距離は桁行で1.42~1.76(平均1.55)m、梁行は1.55~1.76(平均1.63)mである。

柱穴掘方から時期を決定する遺物は出土しなかった。(岡田)

掘立柱建物61(図290)

K16・17で検出した建物である。P4の上部は区画溝の掘り下げ後に検出したものの断面で切り合い関係を把握していない。P5は東側を中世墓AWS3703に切られ、西側の一部のみ検出し、北部分は調査範囲の外になる。



[P1]

- 1 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-1cm, 径-5mm主体)合
- 2 10YR6-4Lにふい黄褐色シルト 10YR3-1黒褐色シルトブロック(径-3cm)少合
- 3 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-1cm)少合
- 4 10YR4-1黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm, 径1-3mm主体)合
- 5 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm, 径-5mm主体)多合
- 6 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm, 径1-3mm主体)合
- 7 10YR2-2黒褐色シルト-粘土 ロームブロック(径-2cm, 径-5mm主体)合
- 8 ロームブロック
- 9 10YR4-2灰黄褐色シルト ロームブロック(径-1cm, 径-5mm主体)合
- 10 10YR7-4Lにふい黄褐色シルト-粘土 10YR3-1黒褐色シルトブロック(径-2cm)少合

[P3]

- 11 10YR3-1黒褐色シルト ローム殻(径1-3mm)少合
- 12 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm, 径-5mm主体)多合
- 13 10YR3-1黒褐色シルトとロームがブロック状(径-5cm)混
- 14 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm, 径-5mm主体)少合
- 15 10YR4-1黒褐色シルトとロームがブロック状(径-15cm)混 ややゆるい

- 16 10YR4-1黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm)多合, ややゆるい
- 17 10YR3-1黒褐色シルトとロームがブロック状(径-2cm)混 ややゆるい
- 18 2.5Y2-1黒褐色細砂-シルト ゆるい
- 19 2.5Y2-1黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm, 径-5mm主体)合
- 20 7.5YR7-4Lにふい黄褐色シルト-粘土 10YR3-1黒褐色シルトブロック(径-5cm)合
- 21 7.5YR7-4Lにふい黄褐色シルト-粘土 10YR4-1黒褐色シルトブロック(径-5cm)合, ややゆるい
- 22 10YR4-2灰黄褐色細砂-シルト ややゆるい
- 23 10YR7-4Lにふい黄褐色細砂-シルト ゆるい
- 24 10YR4-2灰黄褐色シルト

[P4]

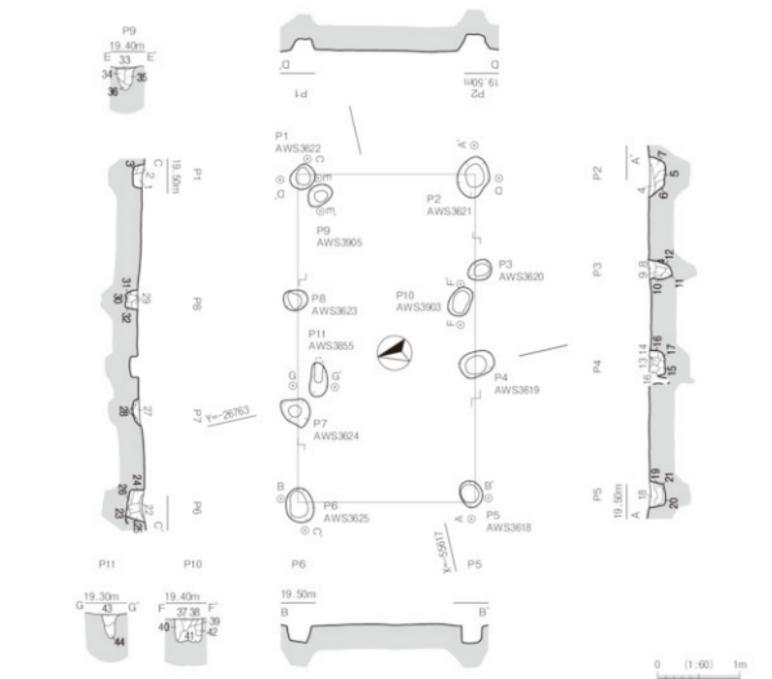
- 25 10YR3-1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-5mm)少合
- 26 10YR2-1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-5mm)少合
- 27 10YR3-2黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-5mm)少合
- 28 10YR4-2灰黄褐色シルト AT, ロームブロック(径-2cm, 径-1cm主体)合
- 29 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-1cm)少合, ややゆるい
- 30 10YR4-1黒褐色シルト ロームブロック(径-5mm)少合, ややゆるい
- 31 10YR3-1黒褐色シルト AT, ロームブロック(径-5cm)多合

図290 A区 掘立柱建物61 平面・断面

柱穴の芯々間距離は、P1-P2間は1.9m、P2-P3間が2m、P3-P4間が2.2mであることから、桁行は東西方向で2間以上、梁行は南北方向で1間以上の東西棟と考える。規模は心々で桁行4.4m以上、梁行1.9mで、建物の主軸方位はN-29°-Wである。

柱穴の平面は形状、規模とも不揃いである。P2・P3が隣接し、P3が古く、最終的な柱痕跡はP2の14層である。P1の掘方は平面円形で、径は0.54m～0.57mあるが、土層や平面の段差から建て替えも考えられる。P4の平面は楕円で0.39m～0.57m、P5は中世墓AWS3703の北壁で僅かに確認した。検出面からの深さはP3が0.54mとやや深いのが、他は0.36m～0.42mと同程度である。

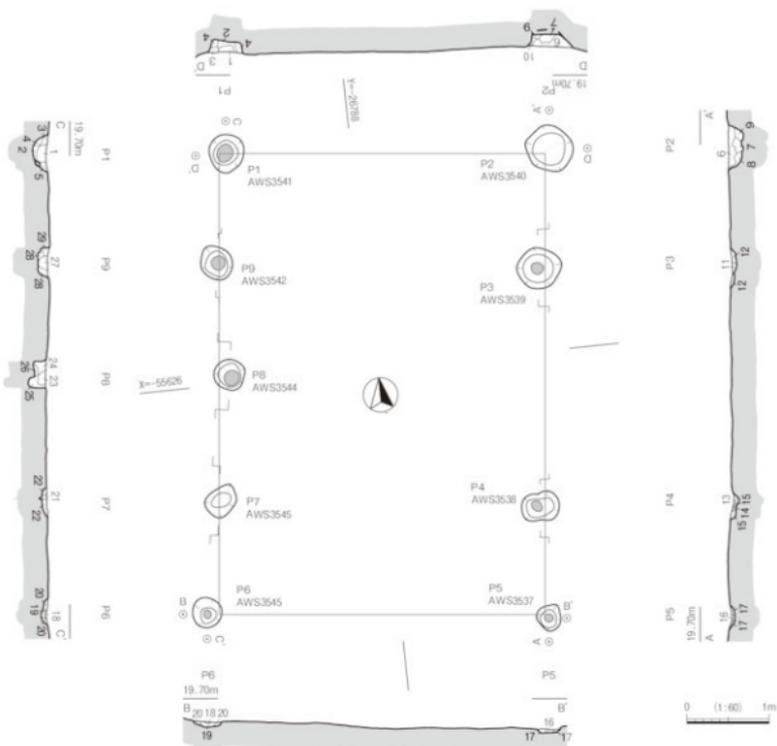
埋土は黒色・黒褐色シルトを主体に、ロームブロックを含む。P1の1層は柱痕跡か。ほかの柱穴では柱痕跡は確認できない。



- [P1]
- 1 2.5Y2/1黒色シルト ATブロッカ(径-2cm)少含
 - 2 10YK3/2黒褐色シルト AT粒(径-5mm)少含
 - 3 10YK3/3暗褐色シルト ロームブロッカ(径-2cm, 径-5mm主体)含
- [P2]
- 4 2.5Y2/1黒色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5mm主体)含
 - 5 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径1-3mm主体)含
 - 6 10YR4/2黄褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 径-2cm主体)多含
 - 7 2.5Y3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5mm主体)少含
- [P3]
- 8 2.5Y2/1黒色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5mm主体)含
 - 9 10YK2/2黒褐色シルト AT粒(径-5mm)少含
 - 10 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-5cm, 径1-2mm主体)含
 - 11 2.5Y3/1黒褐色シルト AT粒(径1-3mm)含
 - 12 10YK3/2黒褐色シルト AT粒(径1-3mm)僅少含
- [P4]
- 13 10YK3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-1cm, 径1-3mm主体)多含
 - 14 10YK3/1黒褐色シルト ローム粒(径-5mm)少含
 - 15 10YR4/1黄褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径-5mm主体)含
 - 16 10YK3/3暗褐色シルト ローム粒(径-5mm)少含
 - 17 10YK3/2黒褐色シルト AT粒(径-5mm)少含
- [P5]
- 18 10YK3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径-1cm主体)含
 - 19 10YK2/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径-5mm主体)含
 - 20 2.5Y2/1黒色シルト AT粒(径1-3mm)含
 - 21 10YK3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm, 径-5mm主体)含

- [P6]
- 22 2.5Y2/1黒色シルト ロームブロッカ(径-3cm, 径1-3mm主体)含
 - 23 10YK3/2黒褐色シルト ローム粒(径-5mm)少含
 - 24 10YK3/3暗褐色シルト ロームブロッカ(径-2cm, 径1-3mm主体)少含
 - 25 10YK2/3黒褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径1-3mm主体)含
 - 26 10YK3/1黒褐色シルト-粒上とロームがブロッカ状(径-3cm)混
- [P7]
- 27 2.5Y3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-4cm, 径1-3mm主体)含
 - 28 2.5Y4/1黄褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径-5mm主体)含
- [P8]
- 29 10YK3/2黒褐色シルト AT粒(径-5mm)少含
 - 30 10YK3/1黒褐色シルトとロームがブロッカ状(径-5cm)混 ややゆるい
 - 31 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-3cm)少含
 - 32 10YR4/2黄褐色シルト ローム粒(径-5mm)多含
- [P9]
- 33 10YK3/1黒褐色シルト AT粒(径-5mm)少含
 - 34 10YK3/2黒褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径-5mm主体)少含
 - 35 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径-5mm主体)含
 - 36 10YK2/2黒褐色シルト
- [P10]
- 37 10YK2/1黒色シルト ロームブロッカ(径-1cm, 径-5mm主体)少含
 - 38 10YK2/1黒褐色シルト ローム粒(径-5mm)多含
 - 39 10YR4/1黄褐色細砂-シルト AT粒(径-5mm)少含、ややゆるい
 - 40 10YK2/2黒褐色シルト ローム粒(径-5mm)少含
 - 41 10YR4/2黄褐色シルト ATブロッカ(径-2cm, 径1-3mm主体)多含
 - 42 10YK3/2黒褐色シルト AT粒(径-5mm)少含
- [P11]
- 43 2.5Y4/1黄褐色シルト ロームブロッカ(径-3cm, 径-5mm主体)含
 - 44 10YK3/2黒褐色シルト ロームブロッカ(径-1cm, 径-5mm主体)少含

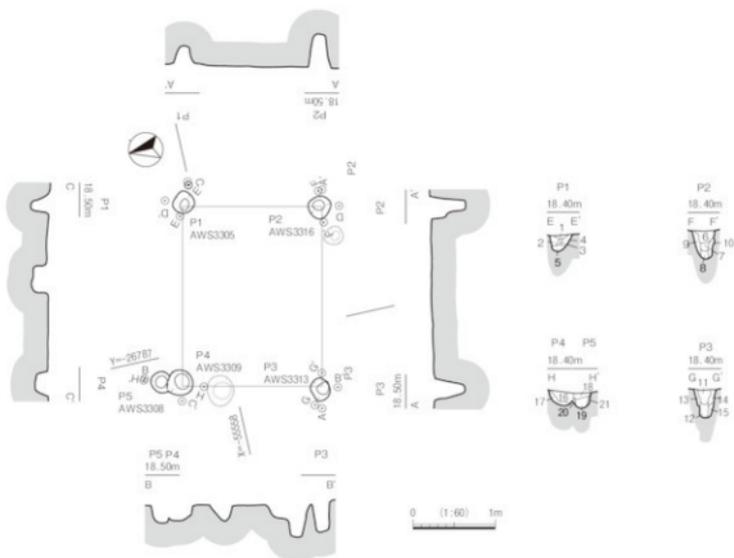
図291 A区 掘立柱建物62



- [P1]
 1 10YR2-2黒褐色シルト ATブロック(径~2cm, 径1~3mm主体)含
 2 10YR3-1黒褐色シルト ローム粒(径1~3mm)少含
 3 10YR4-1黒灰色シルト AT粒(径~5mm)少含
 4 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径1~3mm主体)含
 5 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径~5cm, 径~2cm主体)含
- [P2]
 6 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径~2cm, 径1~3mm主体)含
 7 2.5Y3-1黒褐色シルト ローム粒(径~5mm)含
 8 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径~3cm, 径1~3mm主体)含
 9 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~3cm, 径~1cm主体)含
 10 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~1cm, 径1~3mm主体)含
 ATブロック(径~2cm, 径~5mm主体)含
- [P3]
 11 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~5cm)含
 12 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径~5cm, 径~1cm主体)含
- [P4]
 13 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径~1cm, 径1~3mm主体)少含
 14 2.5Y4-1黄灰色シルト~粘土 ATブロック(径~2cm)含
 15 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径~1cm, 径~5mm主体)含

- [P5]
 16 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径~5mm主体)多含
 17 2.5Y3-2黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径~5mm主体)含
 [P6]
 18 2.5Y3-1黒褐色シルト AT粒(径~5mm)少含
 19 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm)含
 20 2.5Y3-2黒褐色シルト ATブロック(径~3cm)含
 [P7]
 21 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径~1cm, 径1~3mm主体)含
 22 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径~1cm, 径1~3mm主体)含
 [P8]
 23 10YR3-2黒褐色シルト AT粒(径~5mm)少含
 24 10YR3-3暗褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径1~3mm主体)含
 25 10YR6-4(土)黄褐色シルト~粘土 10YR4-2(灰)黄褐色シルトブロック(径~1cm)少含
 26 10YR7-4(土)黄褐色シルト~粘土 10YR3-1黒褐色シルトブロック(径~1cm)少含
 [P9]
 27 10YR2-2黒褐色シルト ATブロック(径~4cm, 径~5mm主体)含
 28 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径~1cm, 径1~3mm主体)含
 29 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径~5cm)含

図292 A区 掘立柱建物63 平面・断面



- [P1]
- 1 10YK3-2黒褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)少含
 - 2 10YK3-1黒褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)含
 - 3 10YK4-2灰黄褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)少含
 - 4 10YK3-2黒褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)少含
 - 5 10YK4-2灰黄褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)含、ややゆるい。
- [P2]
- 6 10YK3-2黒褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)少含
 - 7 10YK3-1黒褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)僅少含
 - 8 10YK4-2灰黄褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)少含、ややゆるい。
 - 9 10YK5-3にぶい黄褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)含
 - 10 10YK4-2灰黄褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)少含

- [P3]
- 11 10YK3-1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少含
 - 12 10YK3-2黒褐色シルト 基盤層ブロック(径-5mm)僅少含
 - 13 10YK4-2灰黄褐色シルト ATブロック(径-1cm)少含
 - 14 10YK3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含
 - 15 10YK3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)含
- [P4]
- 16 10YK3-1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含
 - 17 10YK3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)含
 - 18 10YK4-2灰黄褐色シルト ATブロック(径-5mm)僅少含
 - 19 10YK3-1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含
 - 20 10YK3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)含
 - 21 10YK4-2灰黄褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含

図293 A区 掘立柱建物64 平面・断面

遺物は柱穴P1・P2から小片が出土したものの、図化に耐えない。

中世墓AWS3703より遡ることから、古代の建物の可能性がある(八峠)

掘立柱建物62(図291)

Q17南東で検出した桁行3間、梁行1間の東西棟の建物で、規模は桁行3.9m、梁行2.1mある。建物の主軸方位はN-14°-Eである。

桁行の柱穴の芯々間距離は1.1~1.65(平均1.32)mでばらつきがあり、特に南側柱列のP4-P5間が広い。

柱穴の形状は不整な楕円形状で、大きさには大小ある。小型はP1・P3・P5・P8で径0.25m~0.33m、大型はP2・P4・P6・P7で、径は0.3m~0.5m、検出面からの深さは0.1m~0.39mとばらつきがある。

P9・P10・P11は補助柱穴である。P1にはP9でP1の西隣で添柱として、P10はP3北西、P11はP7南東にあり、いずれも支柱からやや離れ、支柱の上方向に向かい平面は楕円、断面も斜めに掘り込まれる。建物南北の桁を内側から補強したと考える。

埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームのブロックを含む。いずれも柱痕跡は確認できない。

遺物はP7の埋土から出土したものの、小片で図化に耐えない。(八峠)

掘立柱建物63(図292)

R19・20で検出した建物で、西側に掘立柱建物40がある。

建物は桁行3または4間、梁行1間の南北棟である。西側にはP6とP8の間にP7があるものの、東側では検出できていない。規模は桁行5.7mあり、建物の主軸方位はN-8°-Eである。

桁行の柱穴の芯々間距離は、P3-P4間の柱穴は確認できないものの、1.35m~1.5mで概ね等間隔である。

柱穴の形状はP4・P7は不整な楕円形で径は0.31m~0.46m、P5・P6は小型の円形で径は0.27m~0.37m、ほかは不整な円形で径は0.36m~0.59mである。検出面からの深さはP8が0.22mで最も深く、ほかは0.05~0.15mである。検出面からの深さは南側が浅いが、これは南から北に下る地形の傾斜に対応すると考える。

埋土は黒褐色シルトを主体に、ATやロームのブロックが含まれる。いずれも柱痕跡は確認できない。

遺物は柱穴の埋土が僅かで、P8から小片が出土したものの、図化に耐えない。

建物の規模などから古代の建物の可能性がある。(八峠)

掘立柱建物64(図293)

K19の南で検出した建物である。

建物は南東側のビツから桁が延びることが想定できたが、北東側に対応する箇所は耕地段差による掘削のため確認できていない。そのため竪穴建物ではなく、桁行1間、梁行1間の東西棟とした。規模は桁行2.2m、梁行1.7mと推定し、建物の主軸方位はN-13°-Eである。

柱穴の芯々間距離は東西軸が、東側P1-P2間が1.65m、西側P3-P4間が1.75m、南北軸が南側P2-P3間が2.25m、北側P4-P1間が2.15mである。P5はP4の北側に隣接する。

柱穴の形状は不整な円形で、P1~P3の径は0.22m~0.28mである。P4とP5の切り合いは断面でも明瞭に確認できない。検出面からの深さは0.19m~0.35mで、P4は0.19m、P5は0.20mと、ともに浅い。

埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATのブロックを含む。P3の11・12層は柱痕跡ともみえるが明瞭には確認できない。

遺物はいずれの柱穴からも出土していない。(八峠)

掘立柱建物65(図294)

K19南西からK20南東にかけて検出した桁行2間、梁行1間の南北棟の建である。規模は桁行4.4m、梁行2.3mと推定し、建物の主軸方位はN-31°-Eである。

P7とP8は主柱穴の軸上に位置し、北側の梁P1・P2と近い間隔に位置することから補助的な柱と考える。

桁行の柱穴の芯々間距離は東側P2-P3間が2.25m、P3-P4間が2.2m、西側P5-P6間が2.2m、P6-P1間が2.1mで、P4が建物推定線からやや南にずれる。P7はP1の西側0.7m、P8はP2の西側0.6mにあり、概ね南北軸上に位置することから補助柱穴と考える。

補助柱穴を除いた柱穴の平面形は不整な円形で、P1が他より大きい径0.28m~0.34m、他は0.23

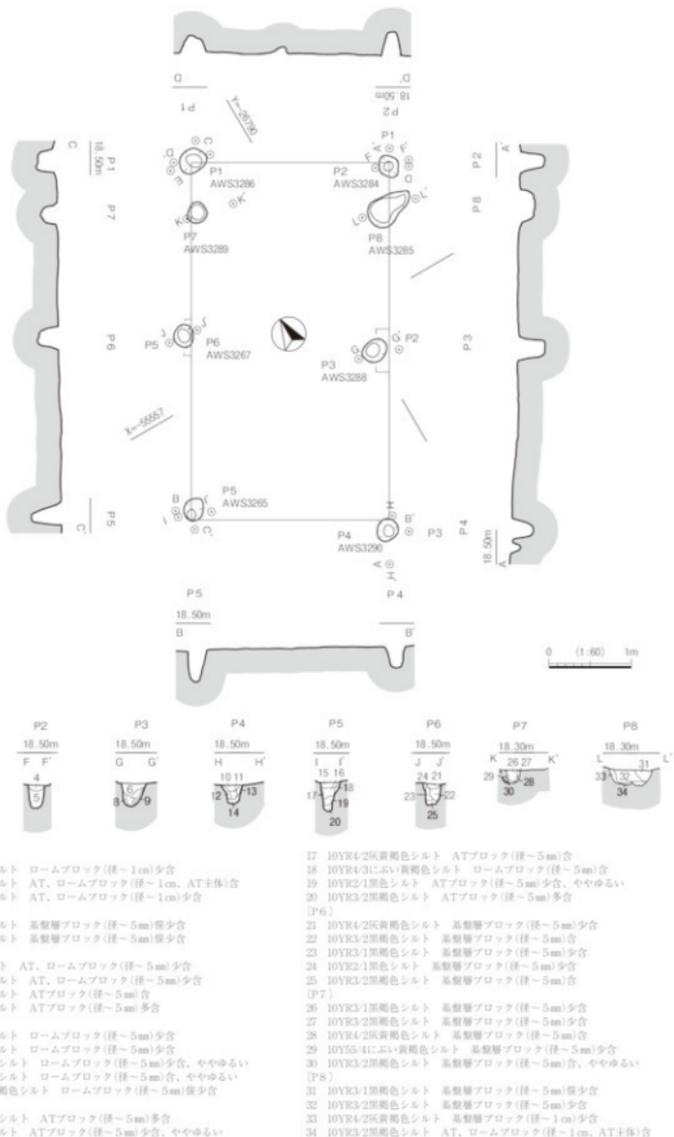


図294 A区 掘立柱建物65 平面・断面

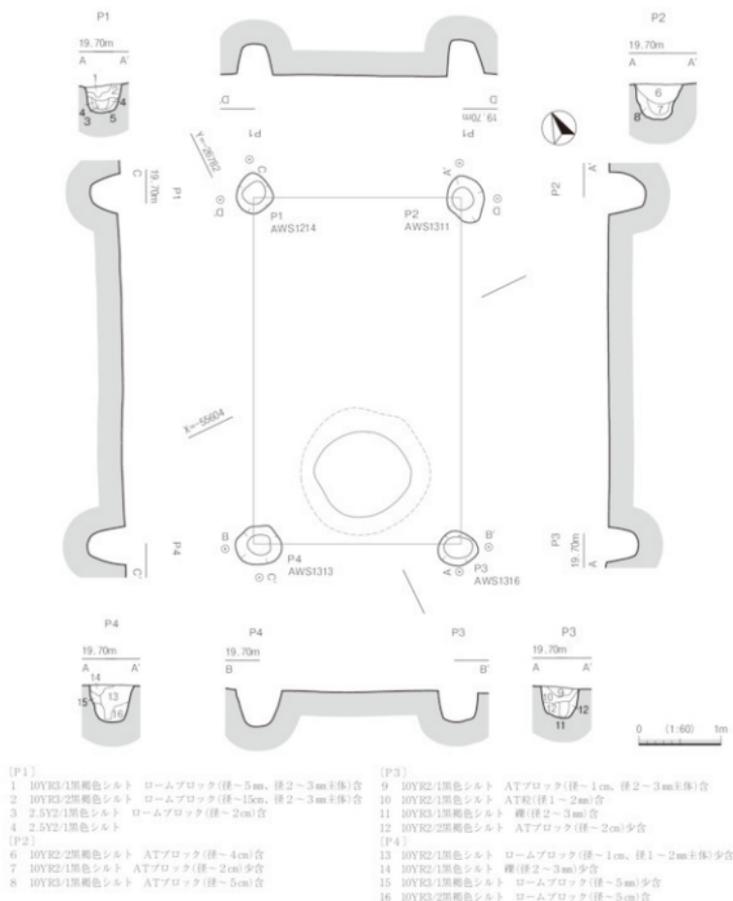


図295 A区 掘立柱建物66 平面・断面

m~0.32mである。検出面からの深さは0.21m~0.37mある。

柱穴埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームのブロックを含む。いずれも柱痕跡は確認できない。

遺物はP1・2・3・4・7・8から出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。(八峠)

掘立柱建物66(図295)

P18・19に位置し、袋状土坑AWS2482が建物の南西側の柱穴間に位置するが、両者の関係は不明である。

建物は桁行・梁行ともに1間の南北棟である。竪穴建物に比べ柱穴間が長いこと、東側に柱が延びることが想定されたため、掘立柱建物と判断した。ただし周辺は削平が顕著で東側や建物の南北主軸

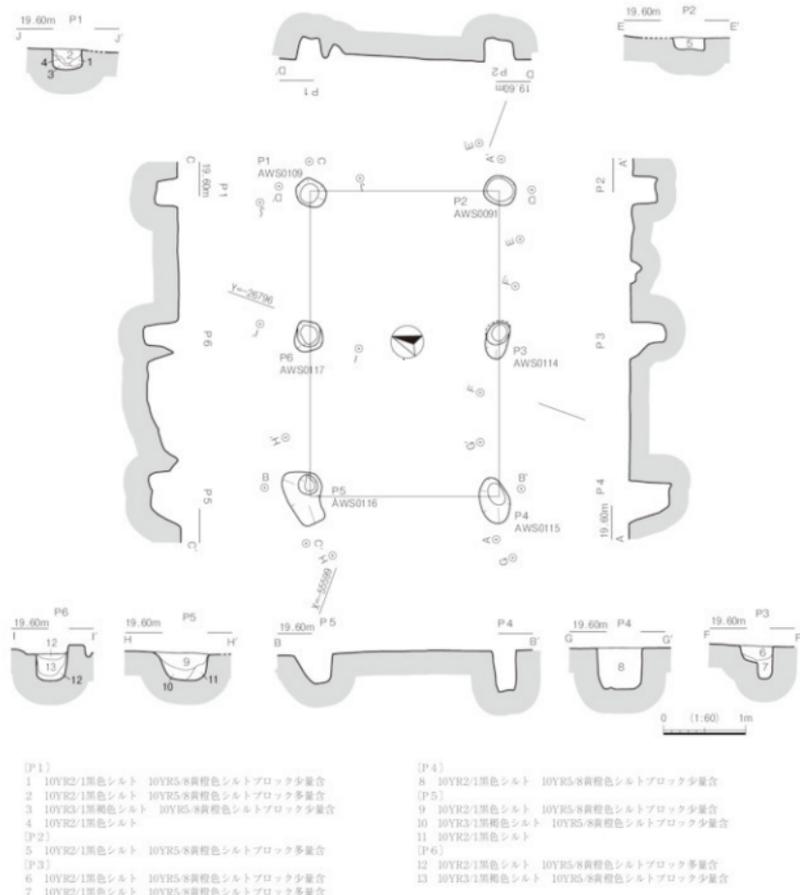


図296 A区 掘立柱建物67 平面・断面

上では柱穴は確認できない。

柱穴の芯々間距離は桁行4.3m、梁行2.5mで、建物の主軸方位はN-22°-Eである。

柱穴の平面はP2は不整な楕円形、他は不整な円形で、径0.42m～0.50m、深さも0.35m～0.46mで概ね揃う。柱穴間は南北方向がいずれも3.55m、東西間はP1-P2間が2.15m、P3-P4間が2.05mである。

埋土は黒色から黒褐色シルトを基本とし、ロームやATのブロックを含む。いずれも柱痕は確認できない。

遺物は柱穴P4から出土したが、小片で図化に耐えない。(八峠)

掘立柱建物67(図296)

O20、P20で検出した建物で、北東側で竪穴建物12と重複し、南東隅のP2は壁溝内に位置する。ただし竪穴建物12の埋土は遺存せず、遺構の切り合いもない。

建物は桁行2間、梁行1間の東西棟である。規模は桁行3.6m、梁行2.3mで、建物の主軸方位はN-29°-Eである。桁行の柱穴の芯々間距離はP1-P6間が1.75m、P5-P6間が1.85m、P2-P3間が1.75m、P3-P4間が1.85mである。

柱穴の平面形はP1・P2・P6は径0.33m～0.38mの円形、ほかは短軸が0.26m～0.46m、長軸が0.45m～0.72mの東西方向に長い楕円形である。検出面からの深さは0.27m～0.52mで、西側に比べ東側の掘方が浅いが、周囲の西下がりの地形と対応すると考える。

埋土は黒色シルトを主体とし、黒褐色シルトやロームもしくはAT主体のブロックを含む。いずれも柱痕跡は確認できない。

遺物は柱穴P1・P2・P3から出土しているものの、いずれも小片で図化に耐えない。(八峠)

掘立柱建物68(図297)

P20南西で検出した桁行2間、梁行1間の南北棟の建物で、西側の柱穴は竪穴建物13と重複するものの切り合いは不明である。

建物の規模は桁行3.8m、梁行2.7mで、建物の主軸方位はN-35°-Eである。

桁行の柱穴の芯々間距離は東側P2-P3間が2.05m、P3-P4間が1.65m、西側P5-P6間が1.55m、P6-P1間が2.25mで、P3・P6が桁の中央よりやや南に位置する。

柱穴の平面形は不整な楕円形で、P6は径0.25m～0.30mと小型で、他は0.33m～0.53mである。検出面からの深さはP4が0.1mで浅く、他は0.23m～0.43mである。

埋土は黒色から黒褐色シルトを主体とし、褐色シルトやATおよびロームブロックを含む。いずれも柱痕跡は確認できない。

柱穴から遺物は出土していない。(八峠)

掘立柱建物69(図298)

P20、Q20で検出した建物で、西側で掘立柱建物68と重複する。

建物は桁行2間、梁行1間の南北棟である。規模は桁行が3.2m、梁行は北側が2.6mであるのに対し、南側が3.0mでP1がやや東側にある。建物の主軸方位はN-17°-Eである。

桁行の柱穴の芯々間距離は西側がP5-P6間が2.05m、P6-P1間が1.10mで、P6が北寄りにあり、東側はP2-P3間が1.55m、P3-P4間が1.60mで概ね等しい。梁行方向ではP1が建物の推定線よりやや東側にある。

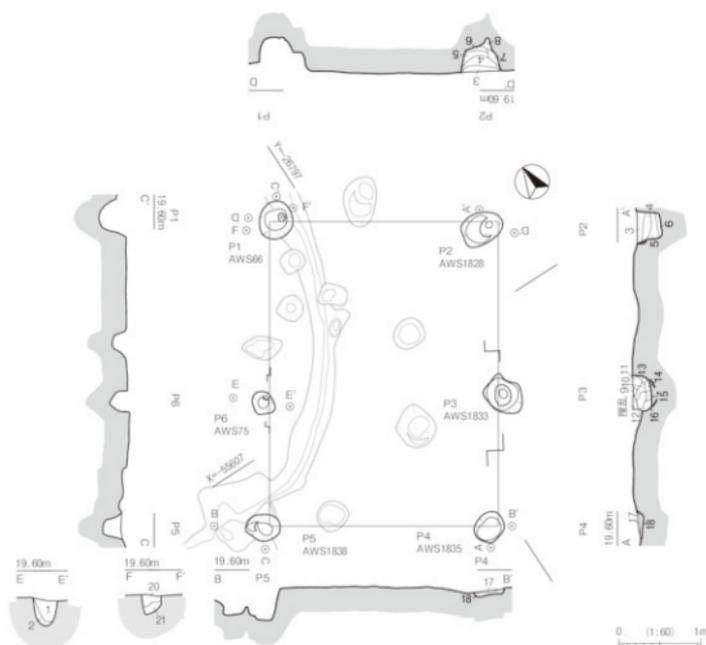
柱穴の形状はいずれも不整な円形で、P4の径が0.28m～0.32mと小さく、P6が0.44m～0.52mと大きい、ほかは0.31m～0.40mである。検出面からの深さはP5のみ0.60mで深く、P4が0.07mで浅い。ほかは0.10m～0.22mで、全体的に遺存状況はよくない。

埋土は黒色から黒褐色シルトを主体とし、ATとロームのブロックを含む。いずれも柱痕跡は確認できない。

遺物はP6から小片が出土したが、図化に耐えない。(八峠)

掘立柱建物70(図299)

Q21、R20・21に位置する東西棟の建物で、南東側を現代帰属の用水路により失っている。一帯はⅢ



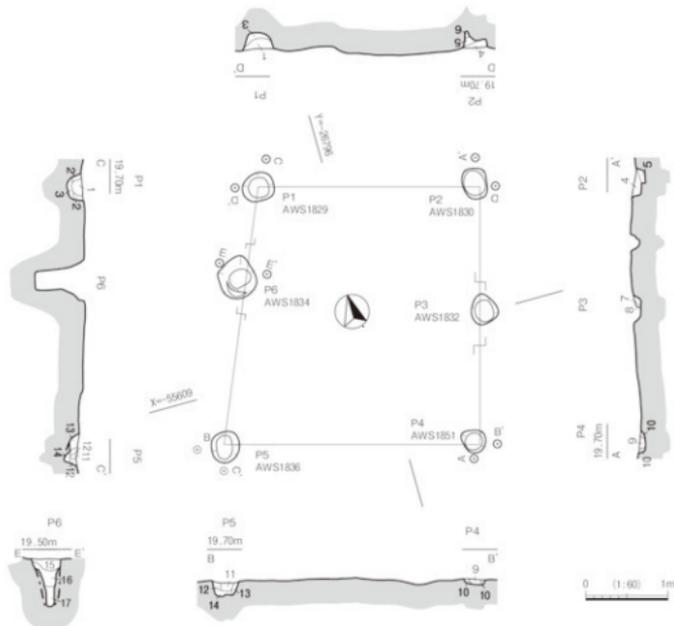
- [P1]
- 1 10YR2-1黒色シルト 10YR5-8黄褐色シルトブロック少量含
 2 10YR2-1黒色シルト 10YR5-8黄褐色シルトブロック多量含
- [P2]
- 3 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径~3cm, 径1~3mm主体)少含
 4 10YR2-2黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径~5mm主体)少含
 5 10YR2-1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径~1cm主体)少含
 6 10YR2-2黒褐色シルト-粘土 ロームブロック(径~5cm, 径~5mm主体)多含
 7 10YR2-2黒褐色シルト ATR(径~5cm)含
 8 10YR2-3黒褐色シルト ATR(径~5cm)含
- [P3]
- 9 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径~3cm, 径1~3mm主体)少含
 10 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径~5cm, 径~5mm主体)含
 11 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径~1cm, 径~5mm主体)少含
 12 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径~3cm, 径~5mm主体)少量含
- 13 10YR4-1黒褐色シルト ATブロック(径~4cm, 径1~3mm主体)含、ややゆるい
 14 10YR4-1黒褐色シルト ロームブロック(径~3cm, 径1~3mm主体)多含、ややゆるい
 15 2.5Y4/1黒褐色シルト ロームブロック(径~2cm)少含
 16 2.5Y2/1黒色シルト ロームブロック(径~1cm)少含
- [P4]
- 17 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径~1cm主体)多含
 18 10YR4-1黒褐色シルトとATがブロック状(径~3cm)混
- [P5]
- 19 10YR3-2黒褐色シルト 10YR5-8黄褐色シルトブロック含
 20 10YR2-1黒色シルト 10YR5-8黄褐色シルトブロック少量含
 21 10YR2-1黒色シルト 10YR5-8黄褐色シルトブロック多量含

図297 A区 掘立柱建物68 平面・断面

層が遺存していたが、埋土との峻別困難のため同層を掘り下げ、IV層又はV層において検出した。平面規模は桁行、梁行共に2間であるが、柱穴間の距離は東西方向が長い。なお、桁行は3間となる可能性が残るが、その場合、配置的に南東隅の柱穴が攪乱範囲を超えて位置すると考えられ、当該位置において柱穴は確認されなかったため、現状では梁行、桁行共に2間である蓋然性が高い。建物の規模は桁行4.79m、梁行3.49mと復元される。建物の主軸方位はN-74°-Wである。

検出した側柱P1~6における柱穴掘方の平面形は円形又は楕円形で、その平面規模は0.39~0.50mである。検出面からの深さは、0.15~0.35mと遺存状態は良くない。底面標高については、最大差が0.31mと総じてばらつきがあり、規格性を欠く。

柱痕跡が確認できたのはP2に止まった。柱材の径は0.2m弱程度と考えられる。柱筋については判断不能だが、柱穴の並びを見ると大きく逸脱した柱穴は少ない。



- [P1]
 1. 2.5Y2/1黒色シルト ロームブロック(径-5cm)含、ATブロック(径-1cm、径1-3mm主体)含
 2. 10YK3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含
 3. 10YK3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5cm、径-1cm主体)多含
- [P2]
 4. 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径-1cm、径-5mm主体)含
 5. 2.5Y3/1黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm、径-5mm主体)多含
 6. 10YR7/4にふい黄色シルト-粘土(シルト主体) 10YK3/1黒褐色シルトブロック(径-3cm)含
- [P3]
 7. 10YR1.7/1黒色シルト ロームブロック(径-5mm)少含
 8. 10YR2/2黒褐色シルト

- [P4]
 9. 10YR1.7/1黒色シルト ロームブロック(径-2cm、径1-3mm主体)含 ややゆるい
 10. 10YR7/4にふい黄色細砂-シルト(シルト主体) 10YK3/1黒褐色シルトブロック(径-3cm、径1-3mm主体)含
- [P5]
 11. 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径-1cm、径1-3mm主体)少含
 12. 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含
 13. 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)含
 14. 2.5Y3/2黒褐色シルト ロームブロック(径-5mm)少含 ややゆるい
- [P6]
 15. 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-5cm、径-1cm主体)含
 16. 10YK3/1黒褐色シルトと2.5Y6/4にふい黄色砂混シルトがブロック状(径-10cm)含
 17. 2.5Y6/4にふい黄色砂混シルトと10YK3/1黒褐色シルトがブロック状(径-20cm)含

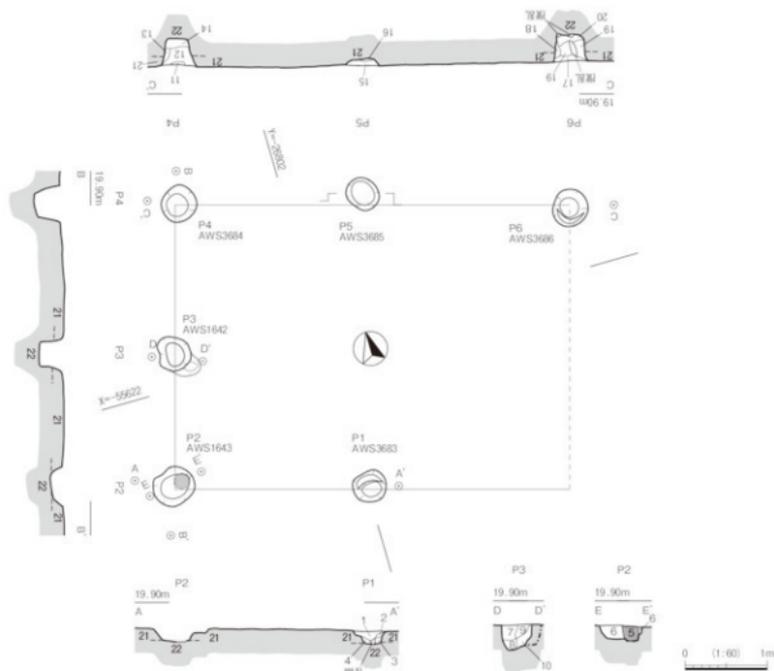
図298 A区 掘立柱建物69 平面・断面

各柱穴掘方埋土からの出土遺物は土器細片に止まり、本遺構の帰属時期は不明である。(加藤)

掘立柱建物71(図300)

N21に位置する桁行3間、梁行1間の東西棟の建物である。建物の主軸方位はN-64°-Wで、規模は桁行6.29m、梁行2.65mである。表土下のV層において検出した。北東に4m程度離れて掘立柱建物39が、やや距離を置き西側に約13m離れて掘立柱建物41・42が存在する。これらはいずれも平安時代帰属と目される建物であるが、本建物の方位とは若干異なっている。

掘立柱P1～8における柱穴掘方の平面形は円形、楕円形で、平面規模は径0.37～0.82mと個体差が大きい、平均的には概ね0.5～0.6m程度となる。検出面からの深さは、後世の変更により遺存状況が悪いP6を除けば(0.21m)、0.4～0.5m台が主体となる。各柱穴の底面標高差を比較すると、最大で0.19mと顕著な差はない。



- | | |
|---|--|
| 1 10YK3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm、径-5mm主体)少含 | 12 10YK2-1黒色シルト AT、ロームブロック(径-3cm、径-1cm主体)多含 |
| 2 10YK3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)少含 | 13 10YK3-1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-2cm、径-5mm主体)多含 |
| 3 10YK3-2黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-1cm)多含 | 14 10YK2-1黒色シルト AT、ロームブロック(径-5mm)多含、ややゆるい |
| 4 10YK3-1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-1cm)多含 | 15 10YK3-2黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)少含 |
| 5 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm、径1-2mm主体)含、ややゆるい | 16 10YK3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5mm)含 |
| 6 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm、径1-2mm主体)含 | 17 10YK3-1黒褐色シルト ATブロック(径-3cm、径-5mm主体)少含 |
| 7 10YK2-1黒色シルト ATブロック(径-2cm、径2-3mm主体)含 | 18 10YK2-1黒色シルト AT、ロームブロック(径-5mm)少含 |
| 8 10YK3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm)多含 | 19 10YK3-2黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-1cm)多含 |
| 9 10YK2-2黒褐色シルト ATブロック(径-2cm)含、しまる | 20 10YK3-1黒褐色シルト AT、ロームブロック(径-5mm)含 |
| 10 2.5Y2-1黒色シルト ロームブロック(径-5cm)含、しまる | 21 2.5Y6-6明黄褐色細礫-シルト(シルト主体) AT又はその二次堆積 |
| 11 10YK2-1黒色シルト AT、ロームブロック(径-5mm)併少含 | 22 7.3YR7-6褐色シルト-粘土(シルト主体) |
- ※21-22 基盤層

図299 A区 掘立柱建物70 平面・断面

柱痕跡はP5・P6を除く柱穴において確認した。確認できた範囲で判断すれば、柱の通りは概ね良く、柱間寸法も桁行では2.1m前後に収まっている。梁行の柱間寸法は桁側よりもやや大きく、約2.6mとなる。柱痕跡から想定される柱材の径は0.15m程度とみられる。建替えの痕跡は、特に認められない。

本遺構からの出土遺物については土器が少数出土したもののいずれも小片で、帰属時期を窺う素材に乏しい。(加藤)

掘立柱建物72(図301、PL70)

O21・22で検出した桁行2間、梁行2間の南北棟の建物で、建物中央にも柱がある総柱建物と考える。規模は桁行5.2m、梁行4.3mで、建物の主軸方向はN-21°-Eである。

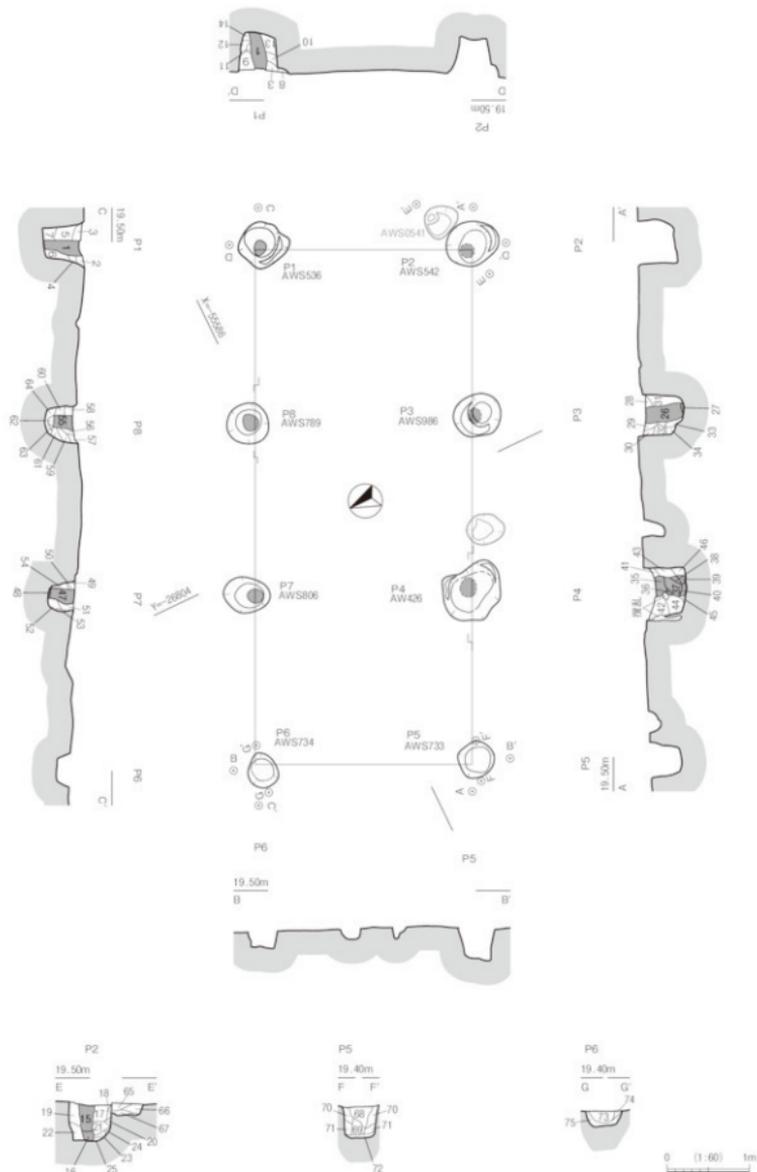


図300 A区 掘立柱建物71 平面・断面

表22 A区 掘立柱建物71 土層注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-3mm)少量, ややゆるい	39	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
2	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm, 径-5mm)少量	40	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)多量, ややしめる
3	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	41	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少量, ややゆるい
4	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	42	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm)少量
5	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量	43	10YR1-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多量
6	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	44	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
7	10YR1-7/1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)僅少量	45	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多量
8	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-3cm, 径-5mm)少量	46	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm)多量
9	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm, 径-5mm)少量	47	10YR1-7/1黒色シルト	ATブロック(径-5mm)少
10	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	48	10YR1-7/1黒色シルト	ATブロック(径-5mm)少量, ややしめる
11	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少量	49	10YR4-2R黄褐色シルト	ATブロック(径-5mm)僅少量
12	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	50	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-5mm)少量
13	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	51	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-5mm)僅少量
14	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	52	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
15	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	53	10YR4-2R黄褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少量
16	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)多量, ややしめる	54	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
17	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm)少量	55	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量
18	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量	56	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量
19	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)少量	57	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)僅少量
20	10YR4-2R黄褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量, ややゆるい	58	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-5mm)少量
21	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	59	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)僅少量
22	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)多量	60	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少量
23	10YR4-1R灰黄色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	61	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)多量
24	10YR4-2R黄褐色シルト	AT, AT, ロームブロック(径-1cm)多量 ロームブロック(径-1cm)多量	62	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-2cm)多量, しめる
25	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多量	63	10YR1-7/1黒色シルト	ATブロック(径-1cm)多量, ややしめる
26	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)多量	64	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少量, ややしめる
27	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	65	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少量
28	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少量	66	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少量
29	10YR3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-1cm)少量	67	10YR2-1黒色シルト	ATブロック(径-2cm)少量
30	10YR3-2黒褐色シルト	ATブロック(径-5mm)少量	68	2-5Y3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm, 径-3mm)少量
31	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量	69	10YR3-1黒褐色シルト	
32	10YR2-1黒色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	70	2-5Y3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm)多量
33	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-1cm)少量	71	2-5Y3-1黒褐色シルト	ロームブロック(径-2cm)少量
34	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)多量	72	10YR6-4/1黄褐色シルト	2-5Y3-1黒褐色シルトブロック(径-2cm)少量
35	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)少量			
36	10YR3-2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-5mm)多量, ややゆるい	73	2-5Y3-1黒褐色シルト	ATブロック(径-2cm)多量
37	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-3cm, 径-1cm)少量	74	2-5Y4-2R灰黄色シルト	ATブロック(径-4cm)少量
38	10YR3-1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(径-2cm)多量	75	10YR5-4/1黄褐色シルト	ATブロック(径-3mm)多量

柱穴の芯々間距離は桁方向が2.5~2.65m、梁方向が2.1m~2.25mである。平面はいずれも不整な円形で、径は0.2m~0.4m、検出面からの深さは0.09m~0.43mでややばらつきがある。なお、建物西側柱列の0.1m内側と同規模の穴P10~12が並んでいることが確認できた。建て替えの可能性があるものの、他の柱穴掘方ではこうしたものがなく、詳細は不明である。

埋土は黒色系のシルトに基盤層ブロックが入る埋土が中心となる。いずれも柱痕跡は確認できない。

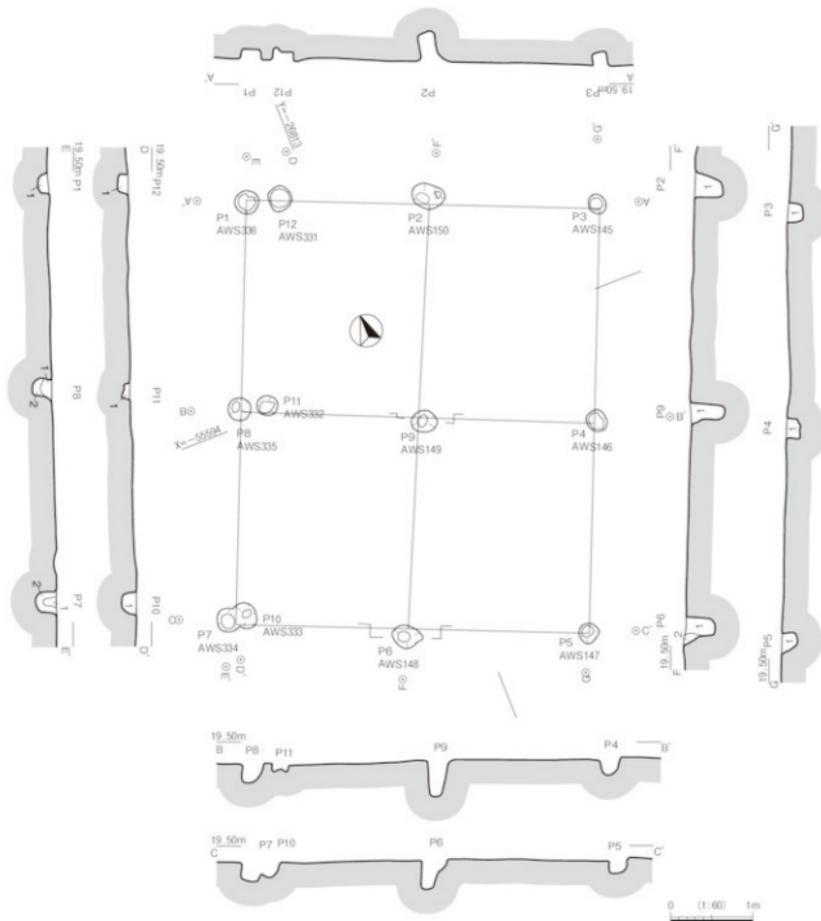
遺物はP6・P7・P8・P11から出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。(濱本・八峰)

掘立柱建物73(図302、PL71)

P22・23、Q22・23に跨がって位置する桁行3間、梁行1間の東西棟の建物である。建物の主軸方向はN-80°-Wで、規模は桁行9.38m、梁行3.60mに復元される。検出層位は表土直下に露出する基盤層V層である。北西側には掘立柱建物41・42が、南西側には掘立柱建物43~46が所在するが、本遺構は両者のほぼ中間に位置する。建物の主軸方向はこれら平安時代帰属の建物に近似するが、帰属時期不明の掘立柱建物71と同様や異にしている。

柱穴掘方の平面形は円形及び楕円形で、円形を呈するものが多い。平面規模は径0.61~0.83m、検出面からの深さは0.27~0.50mで、掘方の上位を大きく失っているのは他遺構と同様である。柱穴間の底面標高差は最大で0.23mとさほど大きくなく、その他特に目立った傾向は認められない。

柱痕跡はP6を除き確認した。加えて本建物では、P3以外の柱穴掘方底面に平面形が円形を呈する変色箇所を認め、柱痕跡位置と概ね重なることから柱の当たりと断定した。本調査区で検出された掘立柱建物において、柱の当たりが明確に検出されたのは本遺構のみである。これらから導き出せる柱材の径は、柱痕跡を参考にすると0.2m程度、柱の当たりを見ると0.25m前後と、柱の当たりの方が



- 1 10YR2/1黒色シルト ATブロック少数
- 2 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック多数

図301 A区 掘立柱建物72 平面・断面

やや大きな数値を示す結果となっている。柱筋の通りは良くなく、とりわけ両桁行において相対する位置関係にある側柱P4・P7は、揃って桁行の柱筋から北側へ大きくずれている。全般的にみても各柱穴の平面配置はやや整然さを欠く。柱間寸法は桁行で3.0～3.2m程度、梁行では3.5～3.7mあり、平安時代帰属と想定される建物と比較すると大きい数値となっており、先述した方位をやや異にすること併せて、関連性は低いと考える。柱穴掘方に重複する掘り込みは現状では皆無で、柱の当たりは単一であることから建替えはないと想定できる。

本遺構からの出土遺物は、P3・P6・P7などからの土器があるが、いずれも細片で帰属時期を比

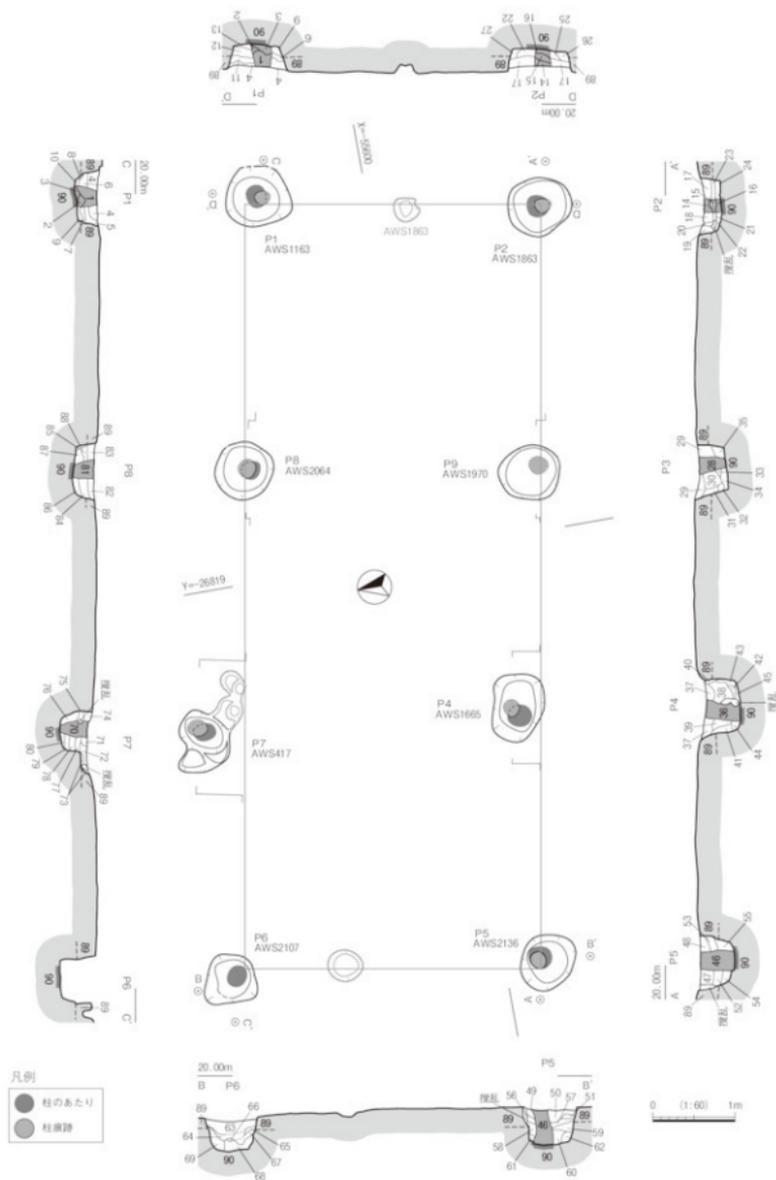


図302 A区 掘立柱建物73 平面・断面

表23 A区 掘立柱建物73 土層記

番号	土色・土質	備考
1	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
2	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)多量
3	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)厚少量
4	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-3cm, 厚-5mm)主体
5	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm)多量
6	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm)多量
7	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm, 厚-1cm)主体多量
8	10YR4/2黄褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm)多量
9	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)含む
10	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)厚少量
11	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
12	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5cm, 厚-5mm)主体含む
13	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)多量
14	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(厚-5mm)少量
15	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(厚-5mm)厚少量
16	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)含む
17	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm, 厚-5mm)主体少量
18	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)少量
19	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(厚-5mm)少量
20	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)含む
21	10YR2/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量
22	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
23	10YR1/7/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
24	10YR1/7/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
25	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
26	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
27	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
28	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm, 厚-5mm)主体
29	10YR3/1黒褐色シルト	ATブロック(厚-1cm)含む
30	10YR2/1黒褐色シルト	ATブロック(厚-2cm, 厚-5mm)主体少量
31	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
32	10YR2/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
33	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量
34	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
35	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
36	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)厚少量
37	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
38	10YR1/7/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量
39	10YR1/7/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
40	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
41	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
42	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量
43	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
44	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
45	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
46	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm, 厚-5mm)主体少量
47	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量
48	10YR1/7/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量

番号	土色・土質	備考
49	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm, 厚-5mm)主体少量
50	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-3cm)少量
51	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
52	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)厚少量
53	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)少量
54	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm, 厚-5mm)主体多量
55	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm, 厚-5mm)主体多量
56	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm)含む
57	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-3cm, 厚-1cm)主体少量
58	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
59	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)含む
60	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm)多量
61	10YR1/7/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
62	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
63	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
64	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-3cm, 厚-5mm)主体少量
65	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
66	7.5YR6/6黄色シルト 粘土シルト(堆積)	10YR3/1黒褐色シルトブロック(厚-1cm)厚少量
67	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量
68	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)含む
69	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)多量
70	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm, 厚-5mm)主体含む
71	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
72	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-2cm, 厚-1cm)主体含む
73	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
74	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
75	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
76	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)多量
77	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)厚少量
78	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
79	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
80	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
81	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)少量
82	10YR2/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)厚少量
83	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)少量
84	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm, 厚-5mm)主体少量
85	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)多量
86	10YR3/1黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)少量
87	10YR3/2黒褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-1cm)含む
88	10YR4/2黄褐色シルト	AT, ロームブロック(厚-5mm)含む
89	2.5Y6/4明黄褐色細砂-シルト(シルト主体)	AT又はその二次堆積
90	7.5YR6/4Cに近い褐色シルト 粘土(粘土主体)	

定できる資料はない。(加藤)

掘立柱建物74(図303)

K22に位置する桁行2間、梁行1間の東西棟の建物である。建物の主軸方位はN-69°-Eで、規模は桁行3.51m、梁行2.95mに復元される。梁行が1間にもかかわらず距離があり特徴的である。表土直下に露出するV層で検出した建物で、近辺には平面規模、方位の類似する建物は検出されていない。

検出層位が示唆するように柱掘方の遺存状況は良好ではない。四隅以外の柱掘方は概して浅く、P6のように検出面からの深さが0.1mを切るものもある。そのため梁行の柱に関しては1間としたものの、2間であった可能性も残る。いずれにせよ、柱間寸法における桁側、梁側の違いは明瞭である。柱掘方の平面形は円形・楕円形で、規模は径0.37~0.61mある。各柱穴の底面標高差は最大で0.24mあるが、先述の四隅柱とそれ以外の掘削深度の相違が多分に影響している。

柱痕跡は検出した全ての柱穴において確認した。そこから復元すると柱材の径は0.15~0.19mと想定される。柱筋の通りは不良で、とりわけ桁側が顕著である。柱替えの痕跡は認められない。

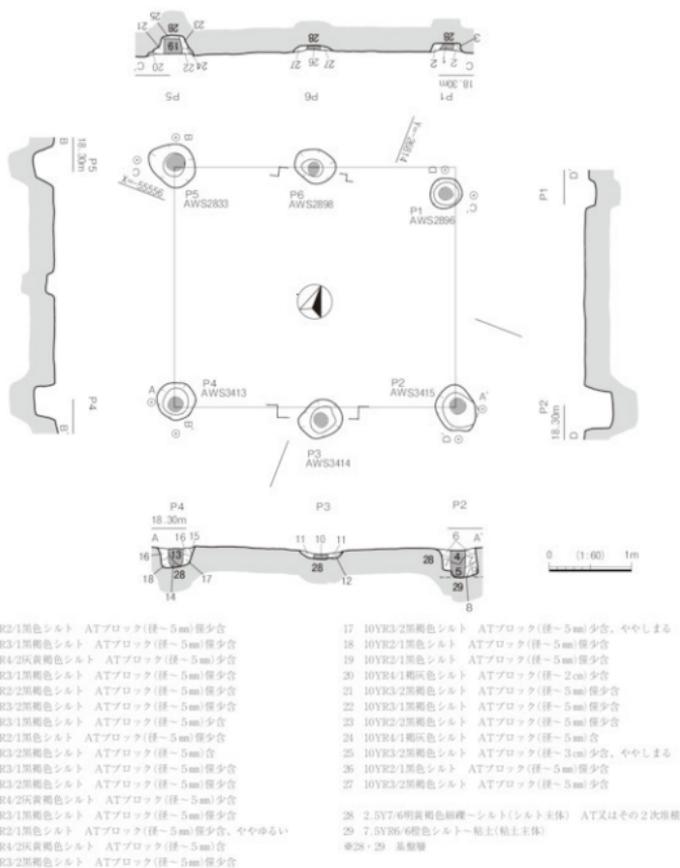


図303 A区 掘立柱建物74 平面・断面

遺物は各柱穴より僅少なから出土したが、いずれも細片であった。また、本遺構の平面規模及び方位についても周辺に近似する遺構が無く、帰属時期をはじめとする詳細は不明である。(加藤)

竪穴建物

竪穴建物31(図304)

N5・6に位置する。壁溝等は確認できなかったが、柱穴配置等から竪穴建物と判断した。

柱穴P1～P4の規模は、最大径が0.36～0.52(平均0.41)m、深さが0.30～0.60(平均0.45)mある。

柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に2.5m、2.2m、2.5m、2.3mである。

柱穴埋土は旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とする。柱痕跡は確認できなかった。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

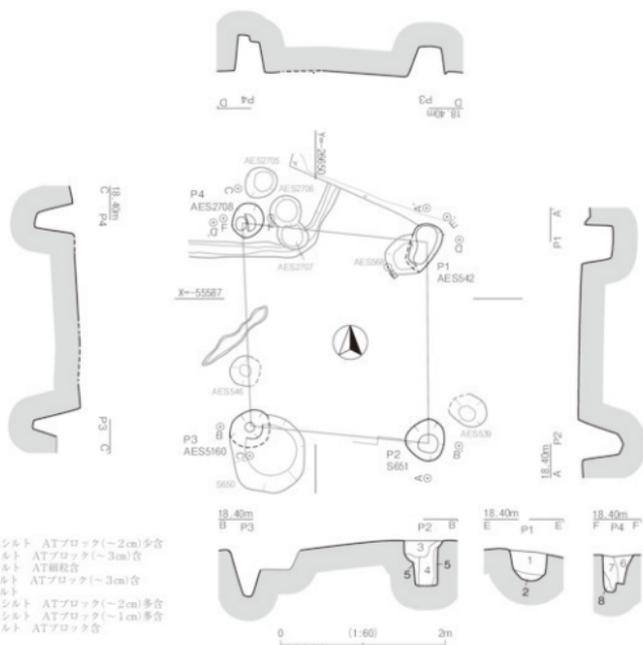


図304 A区 竪穴建物31 平面・断面

竪穴建物32(図305)

N5・6、O5・6にまたがって位置する。壁溝等は確認できなかったが、柱穴配置や被熱面から竪穴建物と判断した。

柱穴P1～P4の規模は、最大径が0.34～0.42(平均0.37)m、深さが0.36～0.40(平均0.39)mある。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に2.5m、2.7m、2.7m、2.8mである。

柱穴埋土は旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかった。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

竪穴建物33(図306)

R9、S9で検出した建物である。竪穴部分はすべて失われ、検出面で周壁溝や被熱面は確認できなかった。

主柱穴は4本で、P3は竪穴建物2古段階の周壁溝を切っており、P4は木棺墓AES3482に切られる。掘方底面の中心で結ぶとP2の角はほぼ直角になるが、対面する辺は平行しない。掘方の芯々間距離はP1から右回りに2.64m、2.54m、2.82m、2.20mある。掘方の平面形は楕円形で、長径はP1、4は0.3m前後でやや小さく、P2、3は0.4mある。検出面からの深さは0.38～0.52mで、底面の標高はP2、4が他のものより0.1m低い。

遺構の切り合い関係から弥生時代中期以降の建物であることは確かであるが、主柱穴掘方埋土には

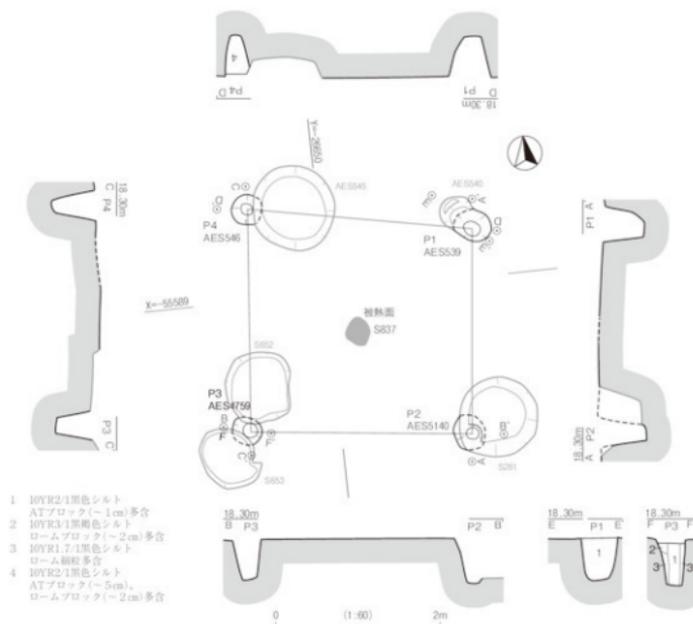


図305 A区 竪穴建物32 平面・断面

土師器の小片が含まれるだけで時期が特定できる遺物は含まれていなかった。(田中)

竪穴建物34(図307、PL.72)

S11で検出した遺構で、竪穴部分はすべて失われ、周壁溝のみが残っていた。平面形は長軸3.65m、短軸3.14mのややいびつな隅円方形を呈する。周壁溝は幅が0.2m前後で西側の一部がやや広く(最大0.4m)なり、深さは0.1m前後ある。

主柱穴は3本と考えた。このうちP1は複数の遺構が重複した可能性があるが、調査時には確認できなかった。P2、3は長径が0.3m程度で、検出面からの深さは0.2～0.3mある。P1の柱穴部分もこれらとはほぼ同じ規模だったと推測する。

柱穴からは時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

竪穴建物35(図308)

L10、M10Cに位置する。壁や壁溝等は残存しないが、柱穴の配置と被熱面から竪穴建物と判断した。

柱穴P1～P4の規模は最大径が0.34～0.47(平均0.41)m、深さが0.31～0.47(平均0.39)mある。いわゆる中央ピットは確認できなかった。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に1.6m、1.7m、1.8m、2.1mである。

柱穴埋土は旧地表土由来の黒色または黒褐色シルトを主体とし、基盤層由来のブロックを含む。柱痕跡は確認できなかった。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

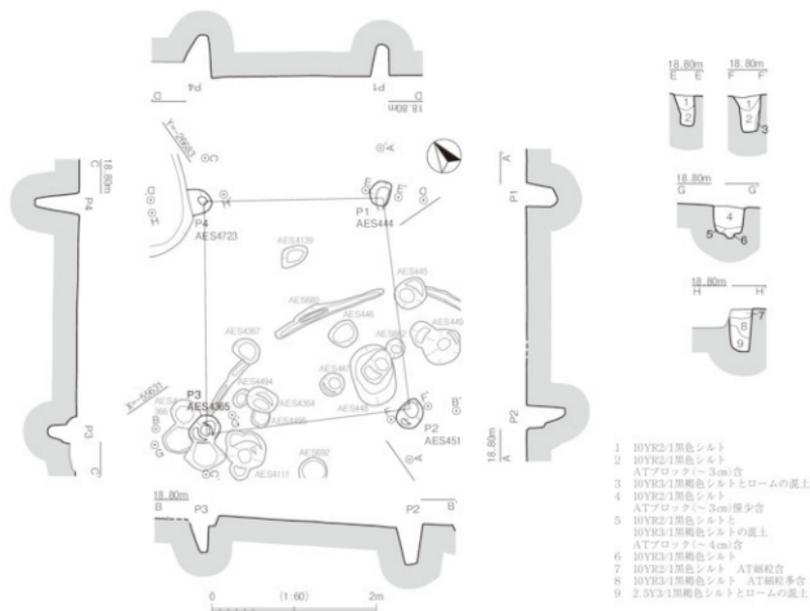


図306 A区 竪穴建物33 平面・断面

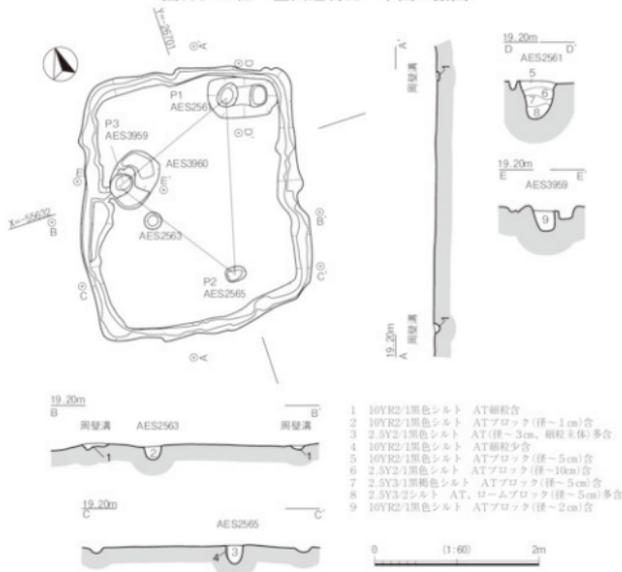


図307 A区 竪穴建物34 平面・断面

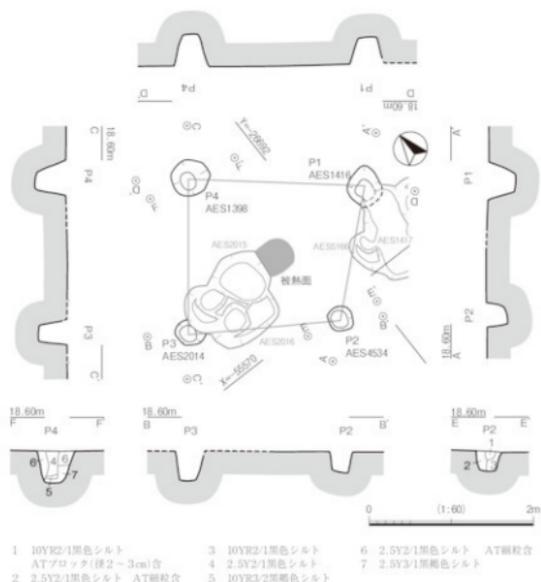


図308 A区 竪穴建物35 平面・断面

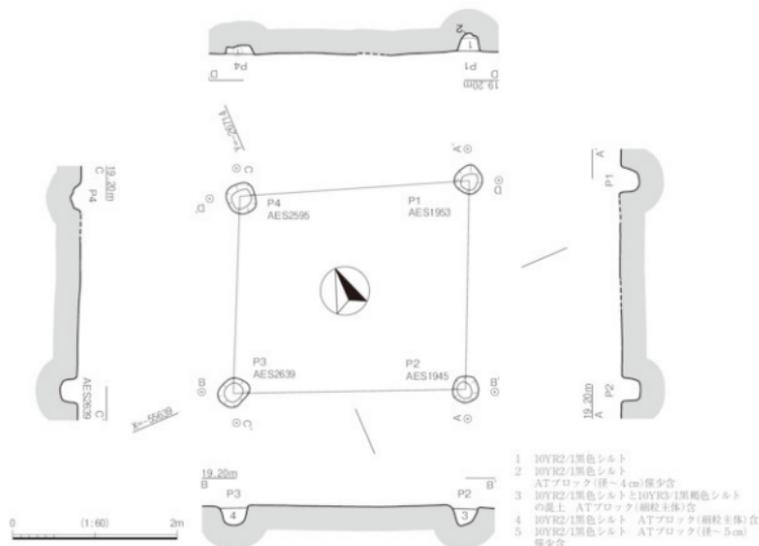


図309 A区 竪穴建物36 平面・断面

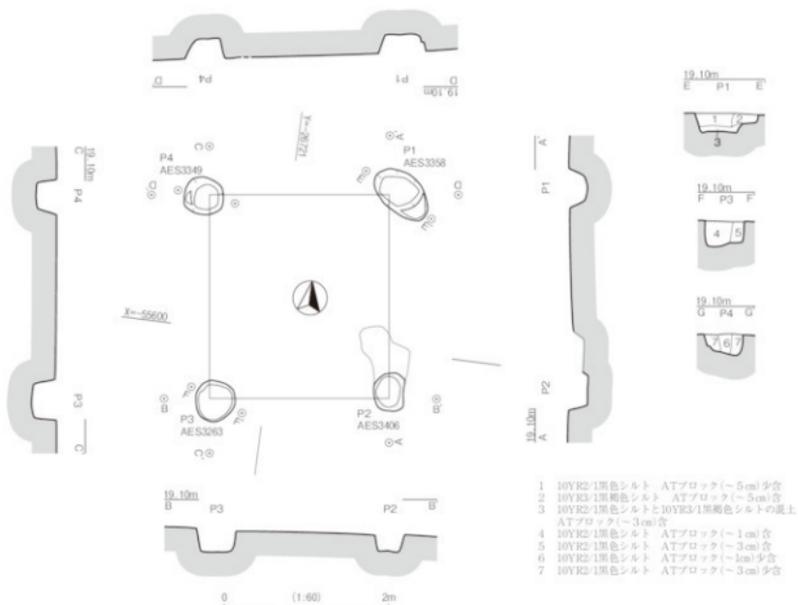


図310 A区 竪穴建物37 平面・断面

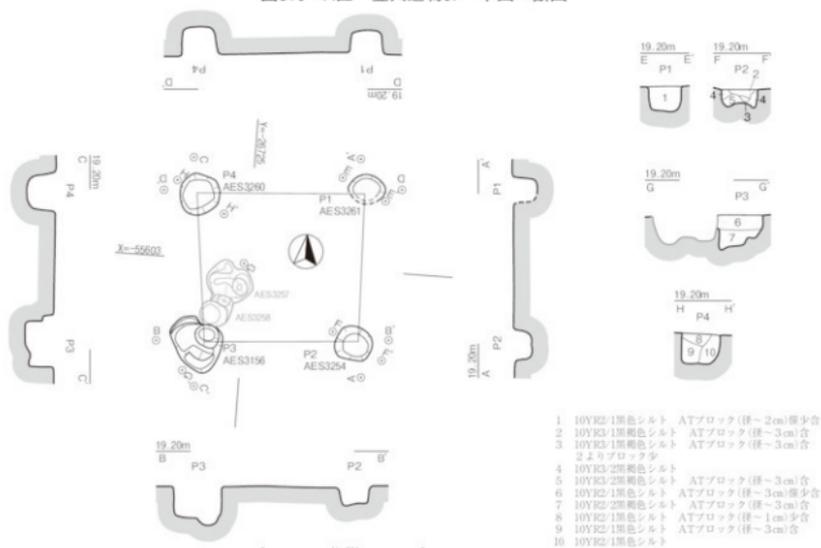


図311 A区 竪穴建物38 平面・断面

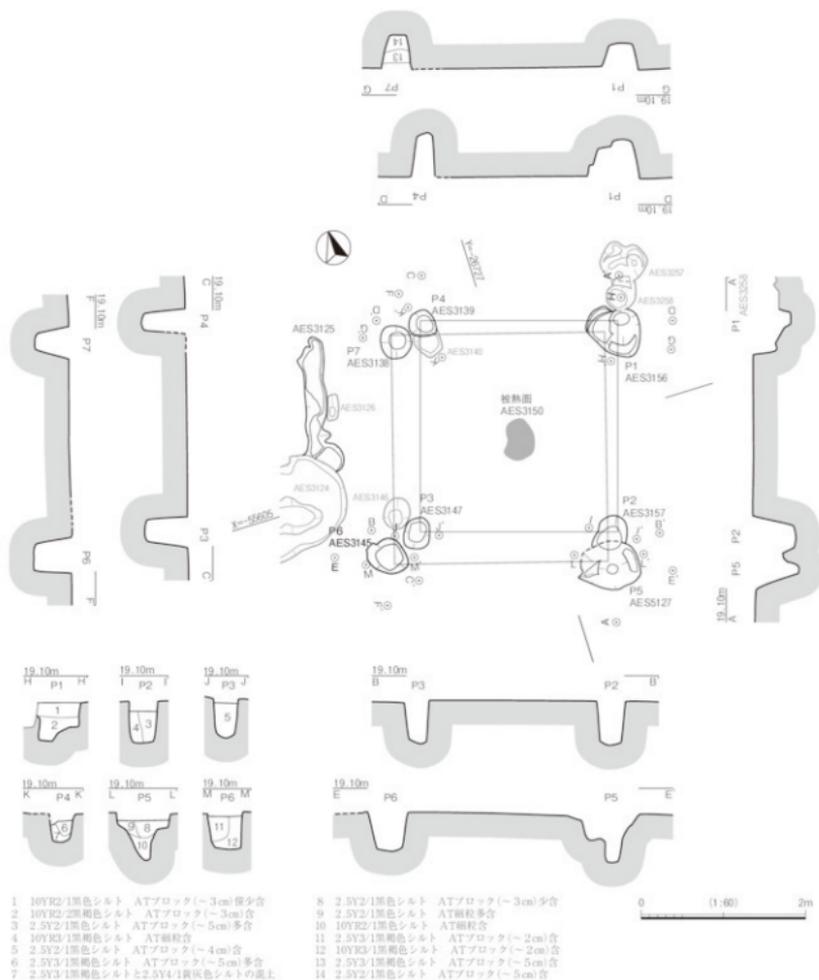


図312 A区 竪穴建物39・40

竪穴建物36(図309)

S12で検出した建物で、竪穴部分はすべて失われ、検出面で周壁溝や被熱面は確認できなかった。

主柱穴は4本で、柱穴の中心で結ぶと東辺と西辺はほぼ平行するが、北辺と南辺は平行せず、ややいびつな四辺形となる。柱穴の芯々間距離は東西方向は2.8m前後で、南北方向は東辺(2.57m)が西辺(2.42m)より長くなる。掘方の平面形は長径0.34~0.39mの楕円形で、検出面からの深さは0.3m前後あり、ほぼ同じ規模である。

柱穴埋土から時期の判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

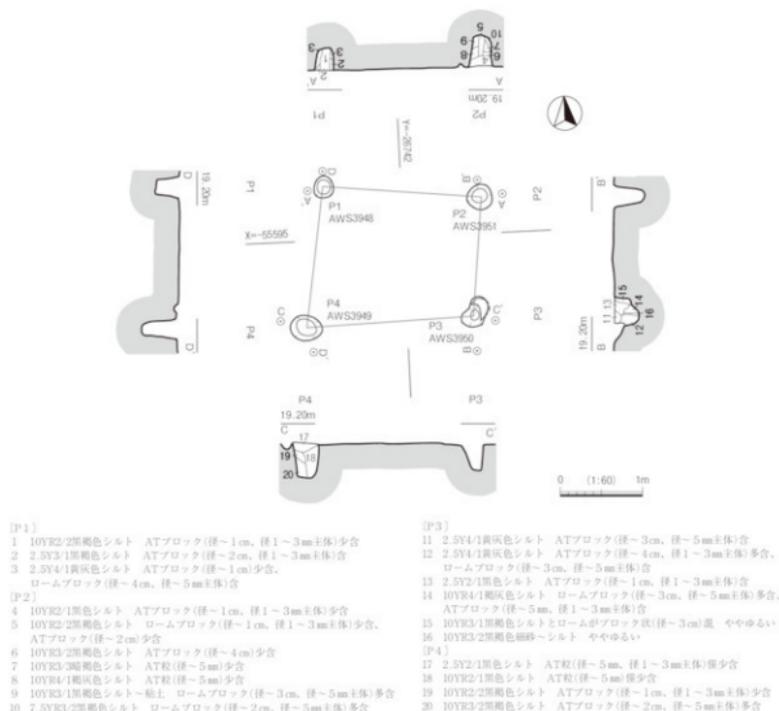


図313 A区 堅穴建物41 平面・断面

堅穴建物37(図310)

O12・13、P12・13に位置する。壁や壁溝等は残存せず、柱穴配置から堅穴建物と判断した。

柱穴の規模は、最大径が0.47~0.52(平均0.49)mで、深さが0.20~0.31(平均0.25)mある。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に2.5m、2.1m、2.5m、2.3mである。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

堅穴建物38(図311)

P13に位置する。壁や壁溝、被熱面等は残存せず、柱穴配置から堅穴建物と判断した。

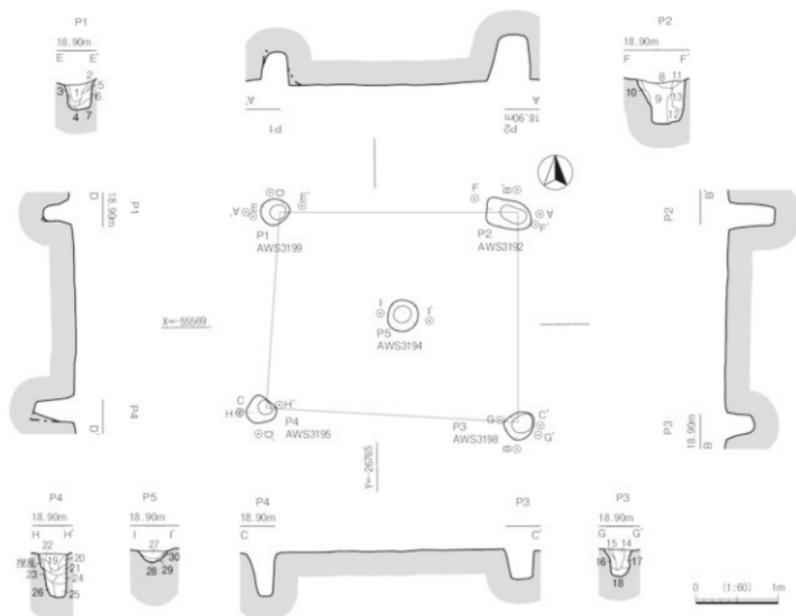
柱穴の規模は、最大径が0.40~0.51(平均0.46)m、深さが0.21~0.31(平均0.29)mある。柱穴間の距離は、P1から時計回りの順に1.8m、2.0m、1.8m、2.1mである。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

堅穴建物39・40(図312、PL72)

P13の中央西寄りに位置する。壁や壁溝等はほとんど残存せず、柱穴と焼土面のみを検出した。ただし、西側の溝AES3125が壁溝に相当する可能性があり、そうすると平面方形または隅丸方形の建物に復元できる。

柱穴はP1~P4(堅穴建物39)と、P5~P8(堅穴建物40)があり、P5がP1を壊すことから、



[P1]

- 1 10YR2-1黒色シルト ロームブロック(径~5mm)少含、ややゆるい
- 2 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)含
- 3 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含
- 4 10YR2-1黒色シルト ロームブロック(径~5mm)含、ややゆるい
- 5 10YR4-2灰黄褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含
- 6 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含
- 7 10YR4-1褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含、ややゆるい

[P2]

- 8 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径~1cm)僅少含
- 9 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm、径~1cm主体)少含
- 10 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含、ややゆるい
- 11 10YR3-2黒褐色シルト AT・ロームブロック(径~5mm)含
- 12 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)少含、ややゆるい
- 13 10YR3-2黒褐色シルト AT・ロームブロック(径~1cm)多含

[P3]

- 14 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)少含
- 15 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)含、ややゆるい

- 16 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~1cm)含、ややゆるい
- 17 10YR3-1黒褐色シルト AT・ロームブロック(径~1cm)含
- 18 10YR4-1褐色シルト ロームブロック(径~5mm)含、ややゆるい

[P4]

- 19 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)少含
- 20 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含
- 21 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)少含
- 22 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~1cm)含
- 23 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含
- 24 10YR4-2灰黄褐色シルト ロームブロック(径~5mm)含
- 25 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)少含
- 26 10YR4-2灰黄褐色シルト ロームブロック(径~5mm)含、ややゆるい

[P5]

- 27 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径~1cm)少含
- 28 10YR4-1褐色シルト ロームブロック(径~5mm)含、ややゆるい
- 29 10YR3-2黒褐色シルト ロームブロック(径~5mm)少含、ややゆるい
- 30 10YR4-2灰黄褐色シルト ロームブロック(径~5mm)多含

図314 A区 竪穴建物42 平面・断面

竪穴建物39から竪穴建物40へと建て替えられたと考える。

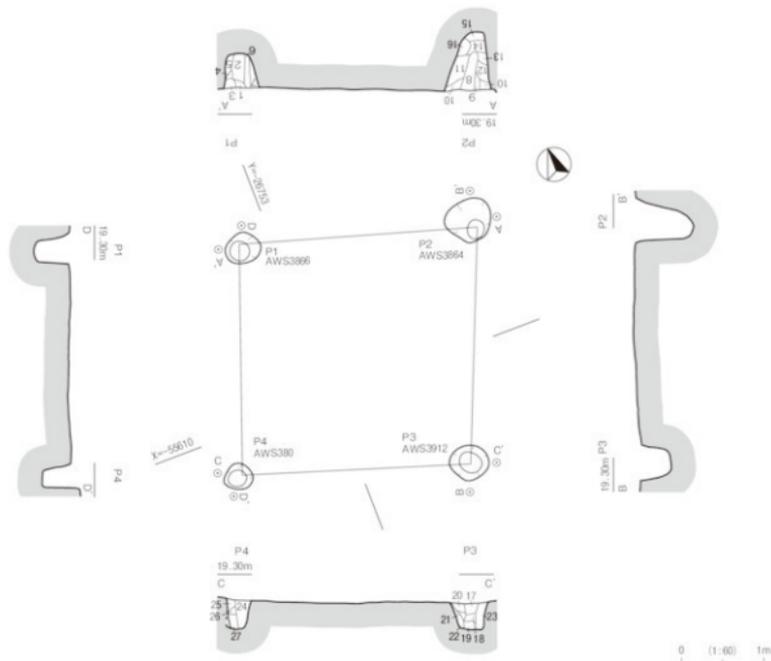
柱穴の規模は、竪穴建物39はP1を除き最大径が0.38~0.44(平均0.41)m、深さが0.38~0.42(平均0.40)mある。竪穴建物40は最大径が0.32~0.52(平均0.41)m、深さが0.50~0.51(平均0.51)mある。

柱穴間の距離は、竪穴建物39ではいずれも2.7m、竪穴建物40ではP5から時計回りの順に2.6m、2.4m、2.6m、2.4mである。

時期を決定する遺物は出土していない。(岡田)

竪穴建物41(図313)

O15に位置する建物である。建物の西側は大きく削平されるものの対応する柱穴は確認できないため、壁溝と中央ピット、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。



- [P1]
- 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径-5cm, 径-5mm主体)多含
 - 10YR2/2黒褐色シルト AT粒(径-5mm)少含
 - 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径-5cm, 径1-3mm主体)多含
 - 10YR3/1黒褐色シルト AT粒(径-5mm)含
 - 10YR3/2黒褐色シルト-粘土とロームがブロック状(径-5cm)混
 - 10YR3/2黒褐色シルトATブロック(径-1cm, 径-5mm主体)含
 - 2.5Y3/2黒褐色シルトATブロック(径-1cm, 径-5mm主体)多含
- [P2]
- 10YR2/1黒色シルト ATブロック(径-2cm)少含
 - 10YR3/2黒褐色シルト ATブロック(径1-3mm)少含
 - 10YR3/2黒褐色シルト ATブロック(径1cm)多含
 - 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径-5mm)多含
 - 2.5Y2/1黒褐色シルト ロームブロック(径-5mm)多含
 - 10YR3/1黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm)含
 - 10YR2/2黒褐色シルト ロームブロック(径-5cm)含
 - 10YR2/2黒褐色シルト-粘土 ATブロック(径-1cm, 径1-3mm主体)
 - 10YR4/1黒褐色シルト-粘土 ロームブロック(径-3cm)多含

- [P3]
- 2.5Y3/1黒褐色シルト ロームブロック(径-3cm, 径1-3mm主体)少含
 - 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm)含, ロームブロック(径-1cm)含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色シルト-粘土 ATブロック(径-1cm, 径1-3mm主体)多含
 - 2.5Y4/1灰黄色シルト ATブロック(径-5cm)少含, ロームブロック(径-5cm, 径-1cm主体)多含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色シルト ロームブロック(径-2cm, 径1-3mm主体)含, ややゆるい
 - 7.5YR6/4L-5R黄褐色シルト-粘土 2.5Y3/1黒褐色シルトブロック(径-1cm)少含
 - 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm, 径-1cm主体)多含
 - 10YR3/2黒褐色シルト ATブロック(径-2cm, 径-5mm主体)含, ローム粒(径-5mm)含
 - 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm, 径-5mm)含
 - 10YR3/1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm, 径-5mm)含
 - 10YR3/2黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm, 径-5mm)多含
 - 2.5Y2/1黒色シルト AT粒(径-5mm, 径1-3mm主体)多含

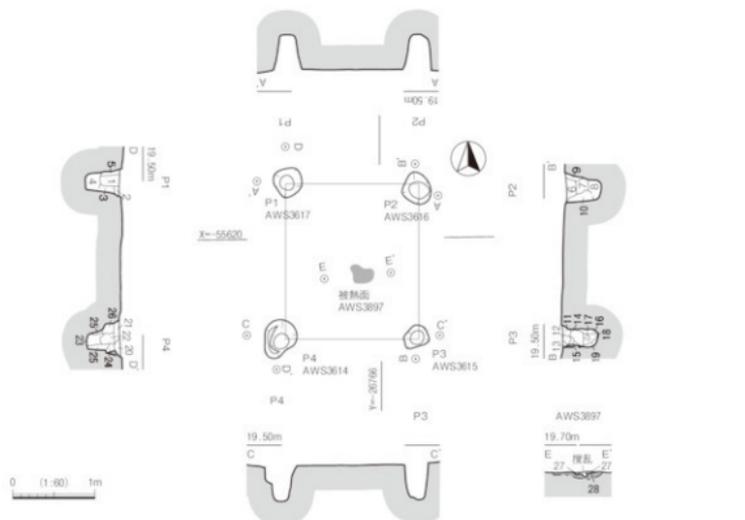
図315 A区 竪穴建物43 平面・断面

主柱穴の芯々間距離はP1から時計回りに1.9m、1.45m、2.05m、1.7mで、P4がやや西側に位置する。

主柱穴の平面はP1が小型の円形で径が0.24m～0.27m、他は不整な円形または楕円形で、径が0.23m～0.39mである。検出面からの深さは、P1が0.28m、P3が0.3mとやや浅いが、P2は0.4m、P4は0.44mある。

主柱穴の埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームのブロックを含む。

遺物はいずれの柱穴からも出土していない。(八峠)



- [P1]
- 1 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径-1cm, 径1-3mm主体)多
 - 2 10YR4-1黒灰色シルト ロームブロック(径-3cm, 径-1cm主体)多
 - 3 10YR4-2S黄褐色シルト ATブロック(径-2cm, 径-1mm主体)多
 - 4 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-1cm, 径1-3mm主体)少, ややゆるい
 - 5 10YR3-3暗褐色シルト ロームブロック(径-2cm, 径-5mm主体)多
- [P2]
- 6 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm, 径-5mm主体)少
 - 7 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-1cm)少, ややゆるい
 - 8 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径-1cm)少
 - 9 10YR3-2暗褐色シルト ATブロック(径-3cm, 径-1cm主体)多
 - 10 2.5Y4-1黄灰色シルト ATブロック(径-8cm, 径-5mm主体)多
- [P3]
- 11 10YR3-2暗褐色シルト AT粒(径-5mm)多
 - 12 10YR3-1黒褐色シルト ローム粒(径-5mm)多
 - 13 10YR3-2暗褐色シルト ロームブロック(径-5cm, 径1-3mm主体)多
- [P4]
- 14 10YR2-2暗褐色シルト ATブロック(径-1cm, 径1-3mm主体)多
 - 15 10YR2-1黒色シルト ローム粒(径1-3mm)多
 - 16 10YR3-2暗褐色シルト ロームブロック(径-3cm, 径-5mm主体)多
 - 17 10YR3-1黒褐色シルトとロームがブロック状(径-3cm)混 ややゆるい
 - 18 10YR3-2暗褐色シルト ローム粒(径1-3mm)多
 - 19 10YR3-2暗褐色シルトとロームがブロック状(径-3cm)混 ややゆるい
- [P4]
- 20 10YR3-2暗褐色シルト ATブロック(径-1cm, 径-5mm主体)多
 - 21 10YR3-1黒褐色シルト ロームブロック(径-2cm, 径-5mm主体)多
 - 22 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm, 径1-3mm主体)多
 - 23 10YR3-3暗褐色シルト ATブロック(径-3cm, 径1-3mm主体)多
 - 24 10YR4-2灰黄褐色シルト ATブロック(径-2cm, 径-5mm主体)多
 - 25 10YR3-2暗褐色シルト ATブロック(径-1cm, 径-5mm主体)多
 - 26 10YR4-2灰黄褐色シルト ロームブロック(径-5cm, 径-1cm主体)多
- [AWS387]
- 27 7.5Y6/4L2灰黄色細粒シルト(シルト主体)被熱により赤化
 - 28 2.5Y6/8黄褐色細粒シルト(シルト主体) AT又はその二次堆積

図316 A区 竪穴建物44 平面・断面

竪穴建物42(図314, PL.72)

L17, M17に位置する建物である。建物の壁溝と被熱面、貼土等は確認していないものの、中央ビットがあることから、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離はP1から時計回りに2.9m, 2.55m, 3.15m, 2.4mである。

主柱穴の平面はP2が不整な楕円形で径0.34m~0.59m, 他は不整な円形で0.3m~0.37mである。検出面からの深さはP1が0.36m, P3が0.33m, P2・P4が0.53mである。

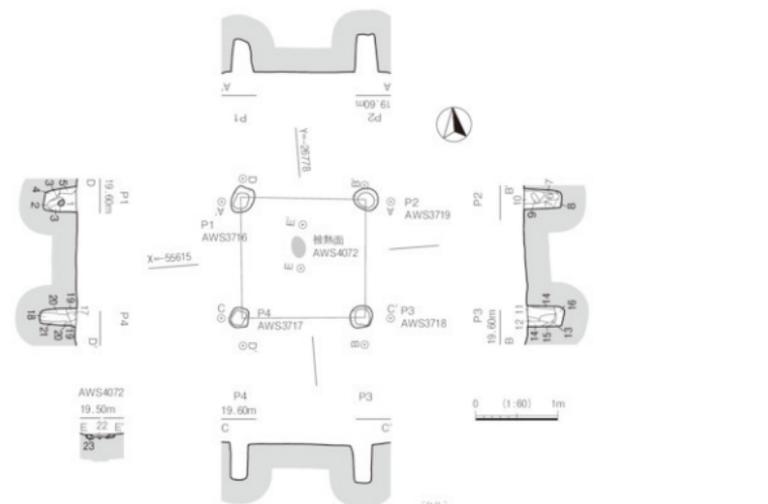
中央ビットは柱穴間のほぼ中央に位置する。平面形はほぼ円形で径は0.36m~0.39m, 断面形は皿状で検出面からの深さは最大0.32mである。

主柱穴の埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームのブロックを含む。明瞭な柱痕跡はなく、ややゆるい層が混じることから、いずれも抜き取られたと考える。

遺物はP4から出土したものの、小片で図化に耐えない。(八辨)

竪穴建物43(図315)

P17, Q17に位置する建物である。建物の周囲に対応する柱穴は確認できないこと、壁溝と中央ビッ



[P1]

- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径~2cm, 径1~3mm主体)多含, ややゆるい
- 2 2.5Y3/2黒褐色シルト AT粒(径~5mm)多含, ゆるい
- 3 2.5Y4/1黄灰色シルト ATブロック(径~3cm)含, ややゆるい
- 4 2.5Y4/2黄灰色シルト ゆるい
- 5 10YR6/4にふい黄褐色シルト 2.5Y3/1黒褐色シルトブロック(径~2cm)含

[P2]

- 6 10YR2/3黒色シルト ATブロック(径~1cm)少含, ロームブロック(径~1cm, 径1~3mm主体)少含
- 7 2.5Y4/1黄灰色シルト ATブロック(径~2cm, 径1~3mm主体)多含, ややゆるい
- 8 2.5Y3/1黒褐色シルト ロームブロック(径~5cm, 径~5mm主体)多含
- 9 2.5Y3/2黒褐色シルト
- 10 2.5Y4/2黄灰色シルトとロームがブロック状(径~2cm)混 ややゆるい

[P3]

- 11 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径~2cm, 径1~3mm主体)多含
- 12 2.5Y3/1黒褐色シルト AT粒(径~5mm)少含
- 13 2.5Y4/1黄灰色シルト ロームブロック(径~2cm, 径~5mm主体)多含
- 14 2.5Y4/2黄灰色シルト ローム粒(径1~3mm)含
- 15 2.5Y4/1黄灰色シルトとロームがブロック状(径~3cm)混 ややゆるい
- 16 2.5Y2/1黒色シルト~粘土 ATブロック(径~2cm, 径~3mm主体)含

[P4]

- 17 2.5Y2/1黒色シルト ATブロック(径~3cm, 径~5mm主体)含
- 18 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径~1cm, 径1~3mm主体)含
- 19 7.5YR6/4にふい褐色シルト~粘土 2.5Y3/1黒褐色シルトブロック(径~2cm)少含
- 20 2.5Y4/2黄灰色細碎~シルト 2.5Y4/1黄灰色シルトブロック(径~2cm)少含
- 21 2.5Y3/1黒褐色シルト ATブロック(径~3cm, 径1~3mm主体)含 [AWS472]
- 22 10YR6/4にふい黄褐色細碎~シルト(シルト主体) 2層が被熱面により変色したものの
- 23 2.5Y6/6明黄褐色細碎~シルト(シルト主体) AT又はその二次遺構

図317 A区 竪穴建物45 平面・断面

ト、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴間の芯々間距離はP1から時計回りで2.9m、2.85m、2.85m、2.75mである。

主柱穴の平面はいずれも不整な円形で、P2は0.4m~0.55mと大きい、他は0.32m~0.44mである。深さもP2が0.71mで、他は0.34m~0.43mである。

埋土は黒色および黒褐色シルトを主体に、ATやロームのブロックを含む。柱痕跡とみられる堆積はP1の2層、P2の8層、P4の24層である。またP2では掘方の底に粘土質の層を確認した。

遺物はP1・P2・P4から出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。(八峠)

竪穴建物44(図316)

Q17、R17に位置する建物である。建物としては被熱面を中心に、平面方形に並ぶ四本の柱を検出した。周辺に柱穴の広がりはなく、壁溝と中央ビット、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離はP1から時計回りに1.7m、1.8m、1.65m、1.9mである。

主柱穴の平面は不整な円形、P3がやや小さい径0.25m~0.33m、他は0.33m~0.49mである。検

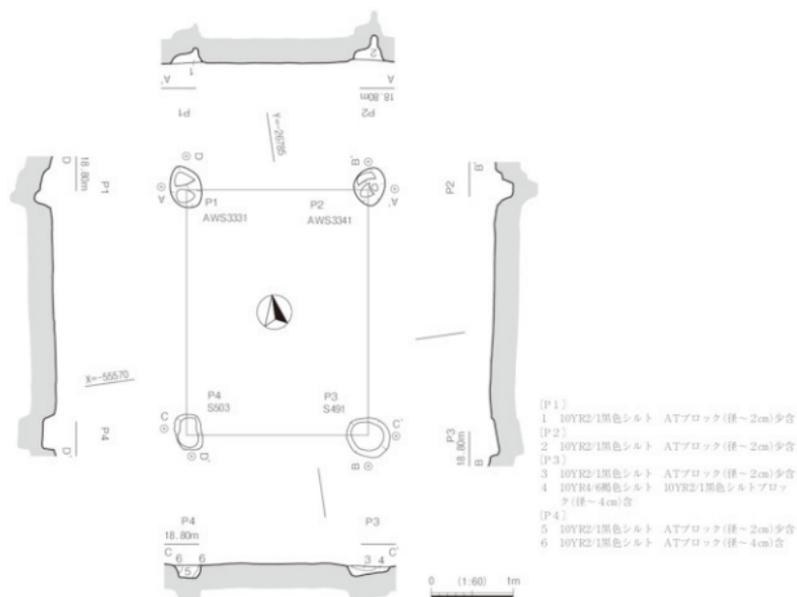


図318 A区 竪穴建物46 平面・断面

面からの深さはいずれも0.43m~0.45mで、ほぼ均一である。

中央やや北で被熱面を検出した。平面形は不整で遺存している範囲は0.25m~0.31mである。

主柱穴の埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームのブロックを含む。P4の22層・23層を除いて明瞭な柱痕跡は確認できない。

遺物はP2から出土しているものの小片で図化に耐えない。(八峠)

竪穴建物45(図317)

Q18西側に位置する建物である。東側にピット群があるものの規模が異なる。中央やや北でかろうじて被熱面が検出できた。建物に壁溝と中央ピット、貼床等は確認していないものの、床面付近まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離は東西方向が1.5m、南北方向が1.45mでほぼ正方形に配置される。

主柱穴の平面はいずれもやや不整な円形で、径が0.21m~0.34m、検出面からの深さは0.4m~0.46mである。被熱面は主軸を南北にとる楕円形状で、径が0.17m~0.27mある。

主柱穴の埋土は黒褐色シルトを主体とし、ATやロームのブロックを含む。柱痕跡とみられる堆積はP4の17層がある。他は土層の乱れから抜き取られたと考える。

遺物はP2から出土したものの、図化に耐えない。(八峠)

竪穴建物46(図318)

L19、M19に位置する建物である。建物の東側に区画溝があるものの対応する柱穴は確認できないことから、壁溝と中央ピット、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削さ

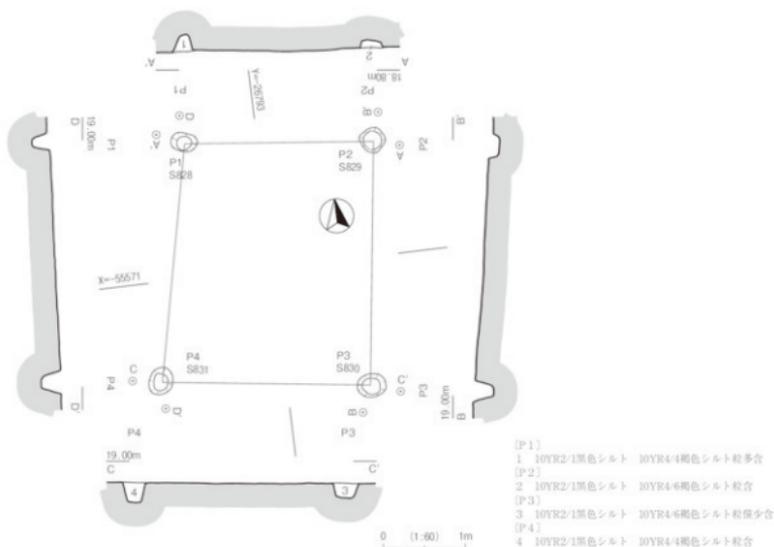


図319 A区 竪穴建物47 平面・断面

れた竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離はP1から時計回りに2.3m、3.03m、2.2m、2.95mである。

主柱穴の平面はP3が不整な円形で径0.48m～0.53m、他は不整な楕円形で径0.33m～0.53mである。検出面からの深さはP2が0.33mであるが、他は0.15m～0.2mと浅い。

主柱穴の埋土は黒色シルトを主体とし、ATブロックを含む。

遺物はいずれの柱穴からも出土していない。(八峠)

竪穴建物47(図319)

L20、M20に位置する建物である。建物の壁溝と中央ピット、被熱面や貼床等は確認していないものの、周囲に対応する遺構がないことから床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離はP1から時計回りに2.3m、3m、2.55m、2.95mである。

主柱穴の平面は不整な円形で、径は0.23m～0.35mであるが、検出面からの深さは0.17m～0.27mで北側が浅い。

主柱穴の埋土はいずれも単層で、黒色シルトを主体とし、褐色シルトのブロックを含む。柱痕跡は確認できない。

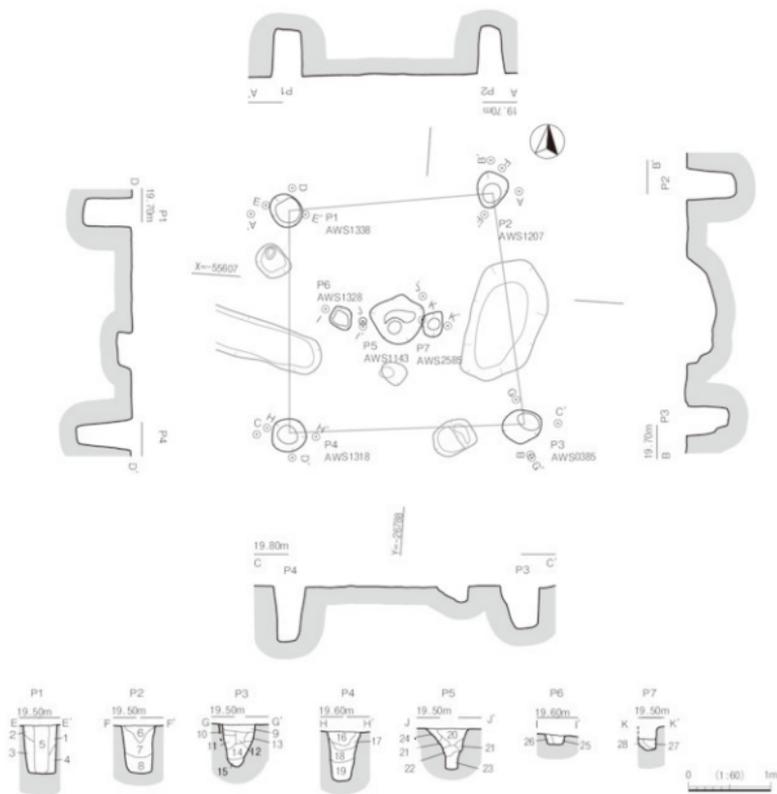
遺物はいずれの柱穴からも出土していない。(八峠)

竪穴建物48(図320)

P19南西に位置する建物である。建物の中央ピットとそれに伴う小ピットが確認できたことから、壁溝や被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離はP1から時計回りに2.5m、2.85m、2.85m、2.75mである。

主柱穴の平面はいずれも不整な円形で、径が0.34m～0.48m、検出面からの深さは0.52m～0.61m



[P1]

- 1 10YR2-1黒色シルト ATブロック(径-3cm)少含
- 2 2.5Y2-1黒褐色シルト
- 3 2.5Y4-1黄灰色シルト ロームブロック(径-2cm)少含
- 4 10YR4-2灰黄褐色シルト ATブロック(径-3cm)含
- 5 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径-2cm)含

[P2]

- 6 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径-2cm)含
- 7 2.5Y2-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm)含
- 8 2.5Y2-1黒色シルト

[P3]

- 9 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径-10cm)含
- 10 2.5Y4-2暗灰黄色シルト ATブロック(径-5cm, 径2-3mm主体)多含
- 11 2.5Y4-2暗灰黄色シルト ATブロック(径2-3mm主体)多含
- 12 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径-3cm, 径1-2mm主体)含
- 13 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径-10cm)含
- 14 2.5Y4-1黄灰色シルト ATブロック(径-3cm, 径2-3mm主体)含
- 15 2.5Y2-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm)含

[P4]

- 16 10YR2-1黒色シルト 礫(径2-3mm)含
- 17 2.5Y2-1黒色シルト ATブロック(径-15cm)含
- 18 2.5Y2-1黒色シルト
- 19 2.5Y3-1黒褐色シルト

[P5]

- 20 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-4cm, 径2-3mm主体)含
- 21 10YR3-1黒褐色シルト ATブロック(径-5cm)多含
- 22 10YR3-1黒褐色シルト A7粒(径2-3mmまで)少含
- 23 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径-3cm)含
- 24 2.5YR4-2灰黄色砂質シルトブロック

[P6]

- 25 2.5Y3-1黒褐色シルト ATブロック(径-2cm)少含
- 26 2.5Y3-2黒褐色シルト

[P7]

- 27 10YR3-2黒褐色シルト ATブロック(径-5cm, 径2-3mm主体)含
- 28 10YR4-2灰黄褐色シルトと2.5Y6/4に赤い黄色シルトの混じり

図320 A区 竪穴建物48 平面・断面

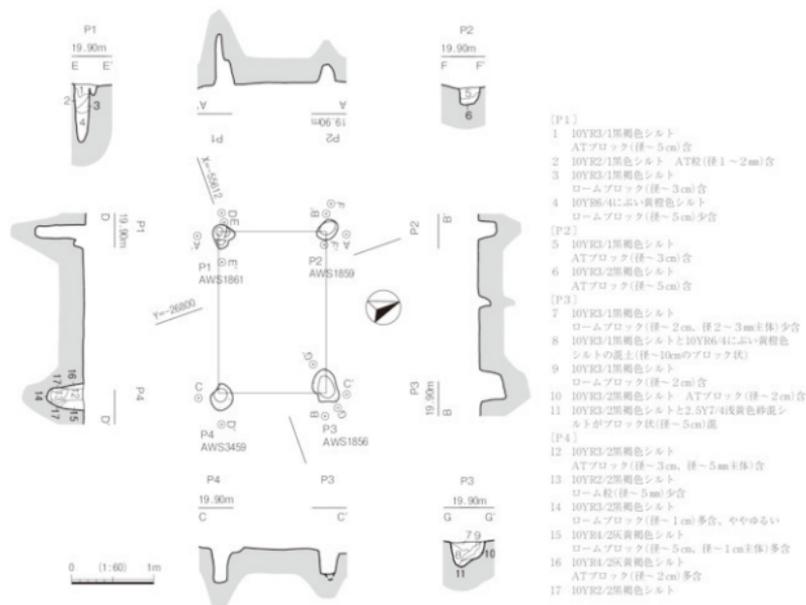


図321 A区 竪穴建物49 平面・断面

ある。主柱穴の埋土は黒色または黒褐色シルトを主体とし、ATやルームのブロックを含む。

P5は中央ピットである。径は0.58m~0.61mで、主柱穴に比べやや大きく、検出面からの深さは0.49mあるが緩く立ち上がる。西隣にP6、東隣にP7の小穴を検出した。平面は不整な円形で、径は0.23m~0.31m、検出面からの深さはP6が0.13m、P7が0.27mである。埋土は黒褐色シルトを主体とし、位置的にみて中央ピットと何らかの関係があると判断した。

遺物はP2・P4・P5から出土したものの、いずれも小片で図化に耐えない。

遺物からは判断できないが、中央ピットの両側に関連する小穴を伴う形態は調査区内の弥生時代の竪穴建物でみられる特徴であり、この建物も弥生時代に建てられた可能性が高い。(八峠)

竪穴建物49(図321)

Q20、Q21北側に位置する建物である。建物の周囲に対応する柱穴は確認できないこと、壁溝と中央ピット、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離は東西方向が1.3m、南北方向が1.9mである。

主柱穴の平面は不整な円形で、径は0.24m~0.41mである。検出面からの深さは一定せず、P2が0.21m、P3が0.32m、P4が0.45m、最も深いP1は0.7mある

主柱穴の埋土は黒褐色シルトを主体に、ATやルームのブロックを含む。いずれも明瞭な柱痕跡は確認できない。P4の13層は柱痕跡の可能性がある。

遺物はいずれの柱穴からも出土していない。(八峠)

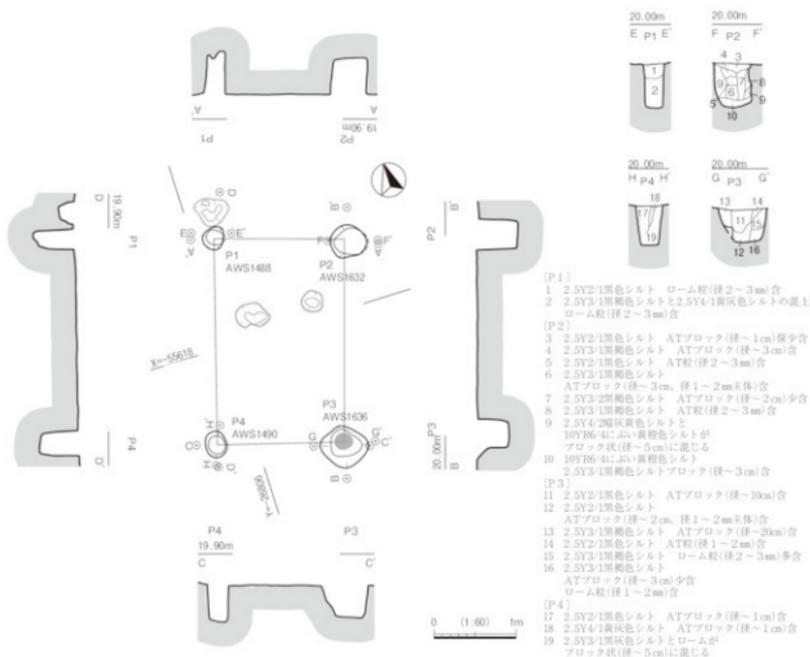


図322 A区 竪穴建物50 平面・断面

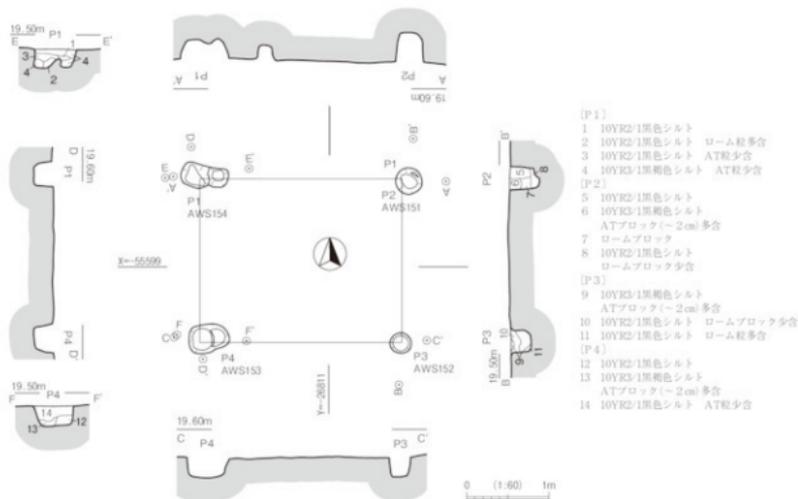


図323 A区 竪穴建物51 平面・断面

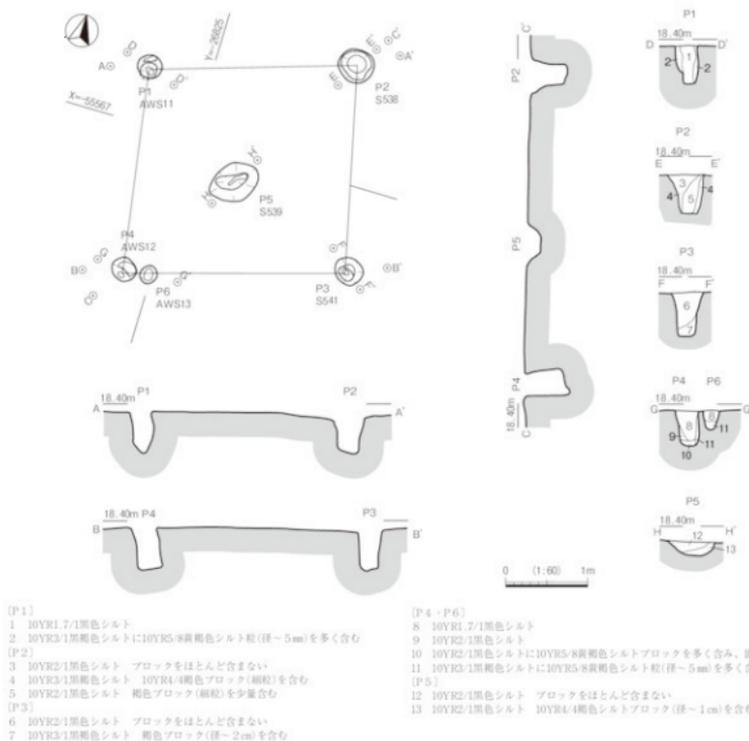


図324 A区 竪穴建物52 平面・断面

竪穴建物50 (図322)

Q21南側に位置する建物である。建物は壁溝と中央ビット、被熱面、貼床等は確認していないものの、床面以下まで上位を掘削された竪穴建物と考えた。

主柱穴の芯々間距離は東西方向はP1から時計回りに1.65m、2.45m、1.55m、2.5mである。

主柱穴の平面は、P1・P4が小型の円形で、径が0.23m～0.31m、P2・P3が不整な楕円形で径が0.39m～0.59mである。検出面からの深さはP3が0.42mで、他は0.54mある。

埋土は黒色および黒褐色シルトを主体に、ATやロームのブロックを含む。P3で柱痕跡を確認した。遺物はP1から出土したものの小片で図化に耐えない。(八峠)

竪穴建物51 (図323)

O21・22、P22に位置する建物である。

建物のP1とP4は埋土の観察や掘方から2基のビットが切り合っている。切り合っているビットは、P1、P4とも東側が古く、西側が新しい。建て替えに伴い、西側に拡張したと考えられる。

柱穴の芯々間距離は南北方向が2m、東西方向は古段階が2.2～2.3m、新段階が2.5mである。検出面からの深さはP1、3、4が0.24～0.28mでほぼ揃うが、P2は0.39mで他の柱穴と比較してやや深

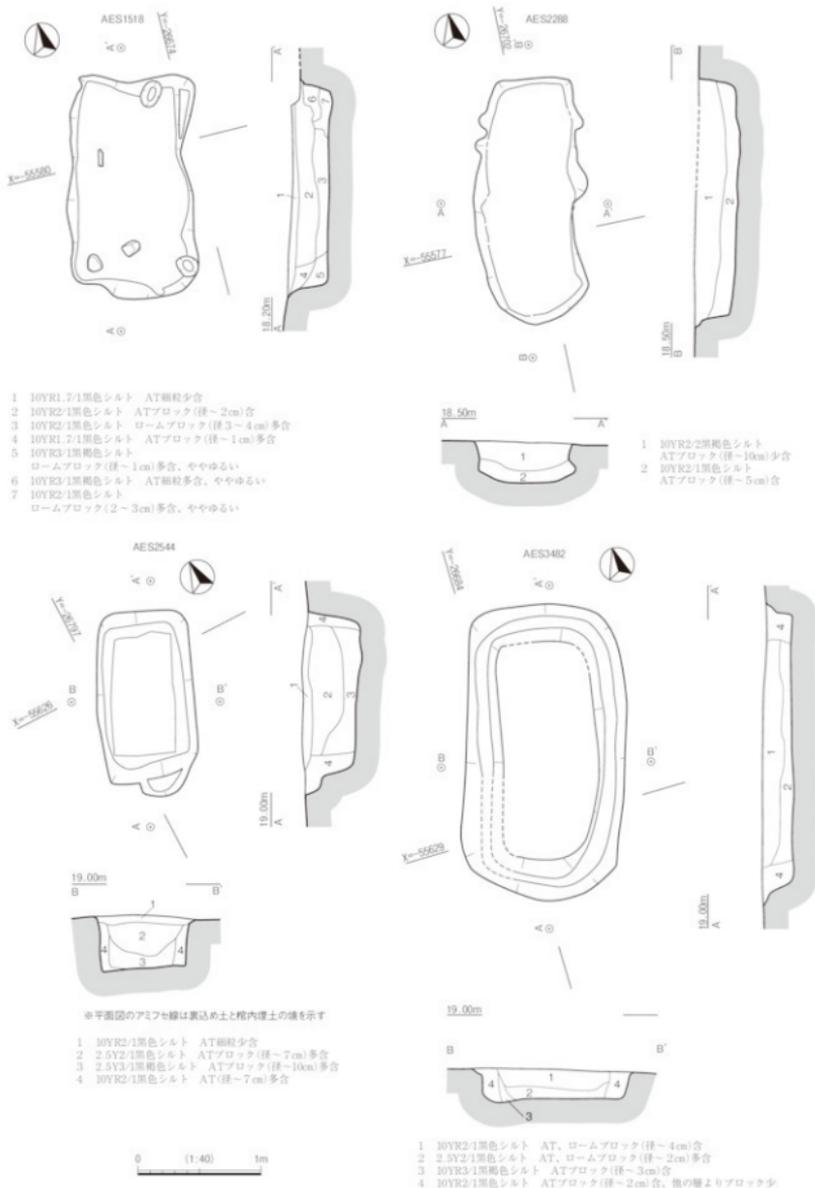


図325 A区 AES1518・2288・2544・3482 平面・断面

い。

埋土は黒色系のシルトに基盤層の粒が混じる。

遺物は出土しなかった。(濱本、八峠)

竪穴建物52(図324)

L23に位置する建物である。建物の壁溝や被熱面、貼床等は確認していないものの、本来の旧地表面が削平を受けている可能性がある。

柱穴の芯々間距離をみるとP1～P3、P6が概ね2.5mであるが、P6は他のピットと比較して平面プランも小規模である上、検出面からの深さもP1～P4が0.45m～0.57mとほぼ揃うのに比べP6は0.24mと浅い。このことから、P3～P4間が2.7mとやや西に張り出す形になるものの、支柱穴はP1～P4であったと考える。

P5は中央ピットである。平面は楕円形で径0.32m～0.39m、検出面からの深さは0.22mある。

いずれの遺構からも遺物は出土しておらず、遺構の時期を決定する根拠に乏しい。(濱本・八峠)

土墳墓・木棺墓

AES1518(図325)

N8の北端中央に位置する。平面形は長方形を呈し、検出面における長さは1.80m、幅は1.00mで、底面における長さは1.52m、幅は0.92mである。断面形はほぼ長方形を呈し、最も深いところでの深さは0.32mある。遺構の主軸方向はN-17°-Eである。

埋土は7層からなり、いずれも旧地表面由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。3・6・7層では基盤層ブロックをやや密に含んでおり、とくに7層は大きなブロックを密に含んでいた。これらが木棺の裏込め土または棺上埋土の可能性があるが、断面で棺材の痕跡はなく、底面に小口材を据えるための穴などは見られなかった。

時期を決定する遺物は出土していないが、竪穴建物22の南西部分を壊すことから、遺構はそれ以降のものである。(岡田)

AES2288(図325)

M11の西端中央よりやや南寄りに位置する。平面形はほぼ長方形を呈するが、右に向かってわずかに湾曲する。検出面における長さか2.00m、幅か0.80mで、底面における長さか1.89m、幅か0.69mある。断面形は長軸側が逆台形状で、短軸側は検出面から底面に向かって湾曲して広がり、底面中央がやや低くなる形状である。最深部での深さは0.34mある。遺構の主軸方向はN-12°-Eである。

埋土は2層からなり、いずれも旧地表面由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。ATの大ききなブロックを多く含んでいる。

時期を決定する遺物が出土しておらず、遺構の形状から木棺墓や土坑墓と考えるが根拠に乏しい。

(岡田)

AES2544(図325)

R10で検出した土坑で、掘方の平面形は南側にやや張り出す部分があるものの、概ね長軸1.50m、短軸0.80mの隅円方形を呈し、検出面からの深さは0.42mある。

遺構検出を行ったところ、掘方ラインのやや内側でロームブロックをほとんど含まない1層が平面的に広がり、外側にロームブロックを多量に含む4層がみられた。検出状況と掘方の平面形を考へ合

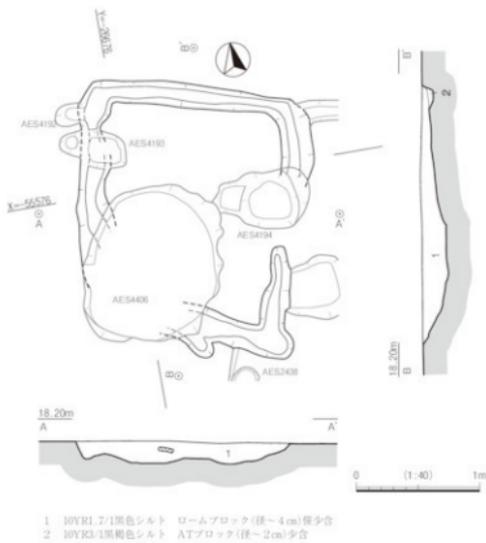


図326 A区 AES1261 平面・断面

平面形は南辺がやや円弧状になるが長軸2.52m、短軸1.30mの概ね隅円方形を呈する。検出面からの深さは0.24mある。

掘方中央に十文字の土層確認畔を設定して掘り下げていくと、底面で掘方壁面に沿うように幅0.15m程度の溝状の窪みが巡ることが確認できた。堆積状況を確認すると、平面検出時には不明瞭であったものの、内側に比べてロームのブロックが少ない4層が掘方の外縁にあることが判明した。溝状の窪みの平面形は四隅が円みを帯びることから、棺材を据えた痕跡と考えるよりも据える為に掘りくぼめたと考えた方がよいと考えている。なお、堆積状況から棺材の痕跡は確認できなかった。窪みの内側部分を棺内と考えるとすると、棺の内法は長さ1.84m前後、幅0.77m前後となる。

埋土から判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

その他の遺構

AES1261(図326)

M8の中央に位置する。平面形は長方形を呈し、検出面における長軸は2.08m、短軸は1.72mある。底面の周囲には、幅0.12～0.26m程度の溝が巡っている。後世の削平のため、壁は残存しない。堅穴建物22の北西隅を壊している。またAES4406の上面もこの遺構が壊しているが、埋土が類似していたことからこの部分で平面形の検出ができなかった。

埋土はほとんど残存しないが、旧地表土由来の黒色～黒褐色シルトを主体とする。

時期を決定する遺物は出土しておらず、遺構の性格は不明である。(岡田)

堅穴状遺構(図327、PL.73)

S17・18に位置する。一帯は旧地表面を担ったと想定されるⅢ層が一定の厚みをもって遺存してお

わせると、木棺墓の可能性が考えられたため、1段掘り下げて改めて平面で木棺痕跡の検出を実施した。すると、1層は上面に薄く堆積しているのみで、全面がロームブロックを含む堆積が全面に広がっていた。しかし内側と外側で僅かに色調が異なり、北辺ではその境と1層と4層の境と一致することから、この差を木棺の内外の埋土差と捉えた。内側の範囲は長軸1.05m、短軸0.57mの長方形を呈し、棺材の痕跡は認められなかった。また、底面に材を据える為の小穴などは確認できなかった。

埋土から判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

AES3482(図325、PL.73)

R9で確認した遺構で、掘方の平

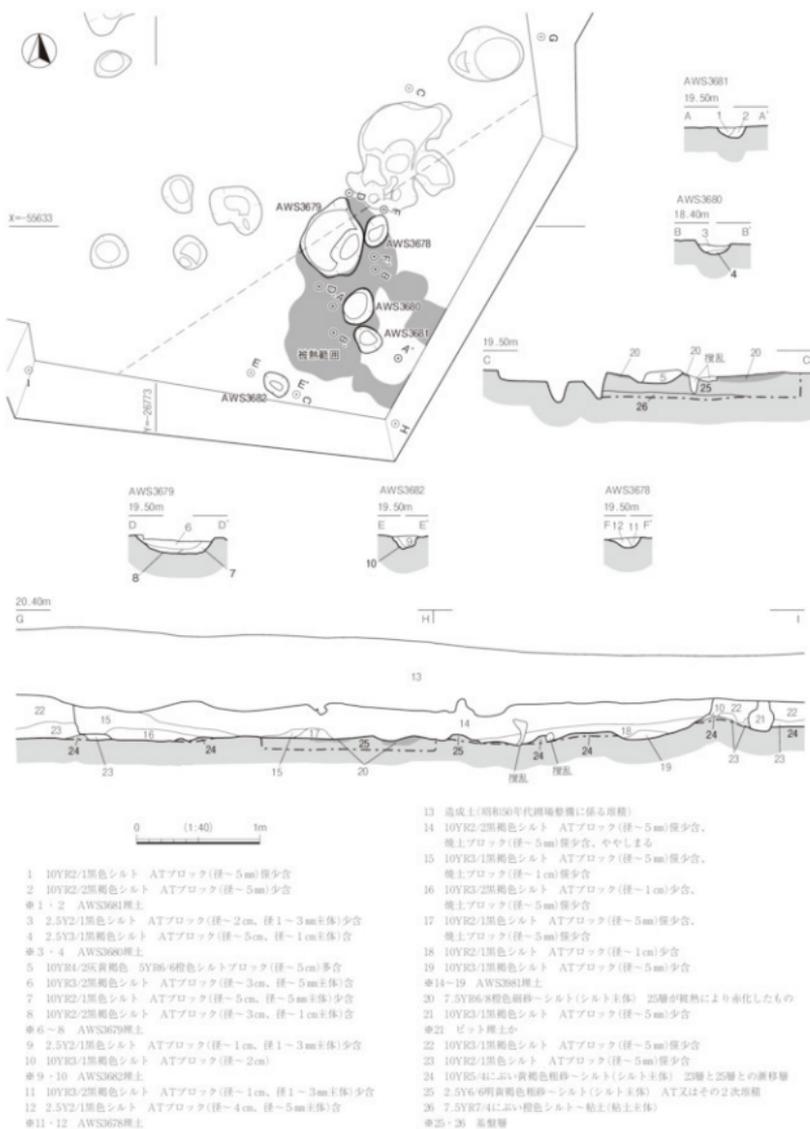


図327 A区 竪穴状遺構 平面・断面

り、同層と遺構埋土との峻別が困難であったことから、基盤層であるV層もしくはⅢ・V層の中間層であるIV層まで掘削して遺構検出を行った。掘り下げの過程において、掘削土中に焼土ブロックの包含が若干認められたものの、詳細は不明であったためIV層もしくはV層まで掘り下げたところ、基盤層であるV層において被熱により赤化した範囲が平面的な広がりをもって検出された。そこから、当該箇所が遺構掘方の底面であることが窺えたため、調査区南東壁の土層断面を精査したところ、規模的に堅穴建物に近似した掘方を確認した(G-H-Iセクション)。本遺構の検出面からの深さは0.3m前後と推定される。断面観察から想定される本遺構の床面範囲において、支柱穴等、一定の規則性が窺える遺構配置が認められなかったことから、堅穴建物とは分類せず、堅穴状遺構として取り扱うこととした。本遺構に明確に伴うピット等の判別は困難で、被熱範囲近辺に位置するものを中心として掲載した。

本遺構からの出土遺物は僅少で良好な出土状況を示すものは無く、帰属時期については不明である。(加藤)

第8節 包含層等出土遺物(図328～334)

本節では主に包含層掘削中に出土した遺物について記述するとともに、性格不明の小穴、土坑から出土した遺物と、中世以降の遺構から出土した平安時代の施釉陶器について触れる。

包含層からは縄文時代から江戸時代に至る遺物が出土したが、多くは弥生時代から平安時代にかけての遺物である。縄文土器については第2節で記述している。

図328は土器と陶磁器を掲げた。Po671は弥生時代中期の器台脚部で、類似する胎土の器台の破片はS69でも出土している。Po674・675は須恵器の平高台底部で、Po674が高台部分が明瞭であるのに対し、Po675は高台部分が低く、体部との境も不明瞭である。Po677の土師器甕は口縁部がくの字に屈曲し、区画溝などで出土するものに比べて体部が外側に膨らむ形状をしている。Po678・679は手づくね土器で、Po679は平底になっている。土錘は大小様々なものが出土しており、Po682はその中で最大のものである。中世の遺物も僅かに出土しており、Po684は勝間田焼の甕の体部である。

図329は中世以降の遺構や包含層から出土した施釉陶器を掲載した。

Po686は中世以降の溝状遺構S246から出土した緑釉陶器の瓶の底部である。高台は段状になっており、劣化により釉が剥落しているが、外面は全面に緑色の施釉がされていたと思われる。9世紀中頃のものとする。Po685は時期不明の小穴AES8から出土した緑釉の口縁部で、口縁端部が露胎でそれ以外は淡緑色の施釉が施される。Po687は地下式坑15の天井崩落土内から出土した緑釉陶器の底部である。高台には段があり、内外面に濃緑色の施釉が施されており、10世紀後半の近江産と考える。

Po688～692は包含層から出土した緑釉陶器である。Po688は須恵器に近い暗めの色調の胎土で、内外面ともミガキを行った上に緑色の施釉が施される。Po689～692は淡い色調の胎土に淡緑色～黄緑色の施釉が施される。Po689は削り出し高台である。これらは9世紀後半～10世紀前葉の京都産と考える。Po693は包含層から出土した灰釉陶器で、高台は三日月状を呈する。9世紀末の黒笹90号窯期第3段階のものとする。

図330～333は石器である。石庵丁S63・64はともに孔が3つ穿たれており、S63ではさらに穿孔途中のものが1つある。S66～69は磨製石斧である。S66は側面に敲打が確認でき、敲石に再利用されたと

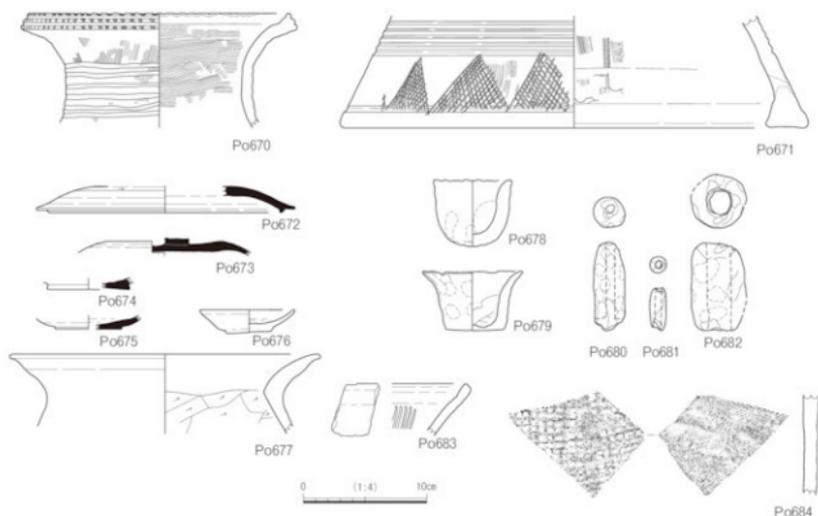


図328 A区 包含層出土土器

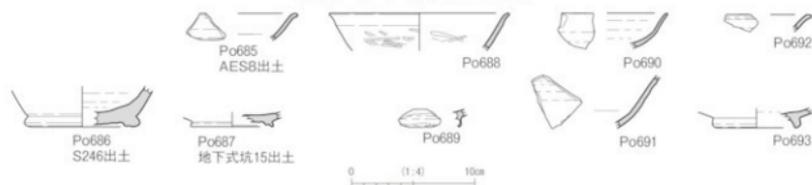


図329 A区 包含層等出土施釉陶器

考える。S67は着柄していたと思われる部分が研磨されていない。S68はO11の長径0.3m、検出面からの深さ0.2mの小穴S186から出土した定角式磨製石斧で砂質頁岩製。使用によって刃部の大半を欠失した後に、欠損部からの剥離で再刃付けを試みたものの不規則となって放棄したもの。敲石として再利用されており、基部近くの表裏両側面に計5群の敲打痕が残る。S69は大型で幅広扁平な磨製石斧の基部側破片。緑色片岩製で全面がよく磨き上げられている。割れは一侧面を起点に本体を斜めに横断しており、扁平石斧ではあるが、鉞のような使用法が想定される。S70、71は敲石で、S70は棒状の礫の上下と側面のうち1面で、S71はやや平たい円礫の表と裏の2面で敲打を行っている。

S72～74は石鏃である。S73はサヌカイト製でやや厚みがある。S74は大型のサヌカイト製で、二次加工は周辺にとどまり両面に素材面を多く残す。S75は玉髓の火打石で、厚い剥片の背面側後線を中心に細かな潰れが多数認められる。主剥離面からの剥離面もあるので、もっと大きな火打石からの剥片をさらに使用したものであろう。S76は玉髓の剥離物でほぼ四角錐形を呈する。ごく小さくて複数の縁部に細かな潰れがあるので、石核ではなく、火打石と考えられる。

図334は鉄製品と鉄滓である。F23は鉄鏃で、鏃身は先端部が欠損するが陽拵を持つ柳葉形と思われる。F24は刀子の基部で、関部は刃側と比べて鋒側の方が段差が明瞭になる。包含層からは製鉄関連

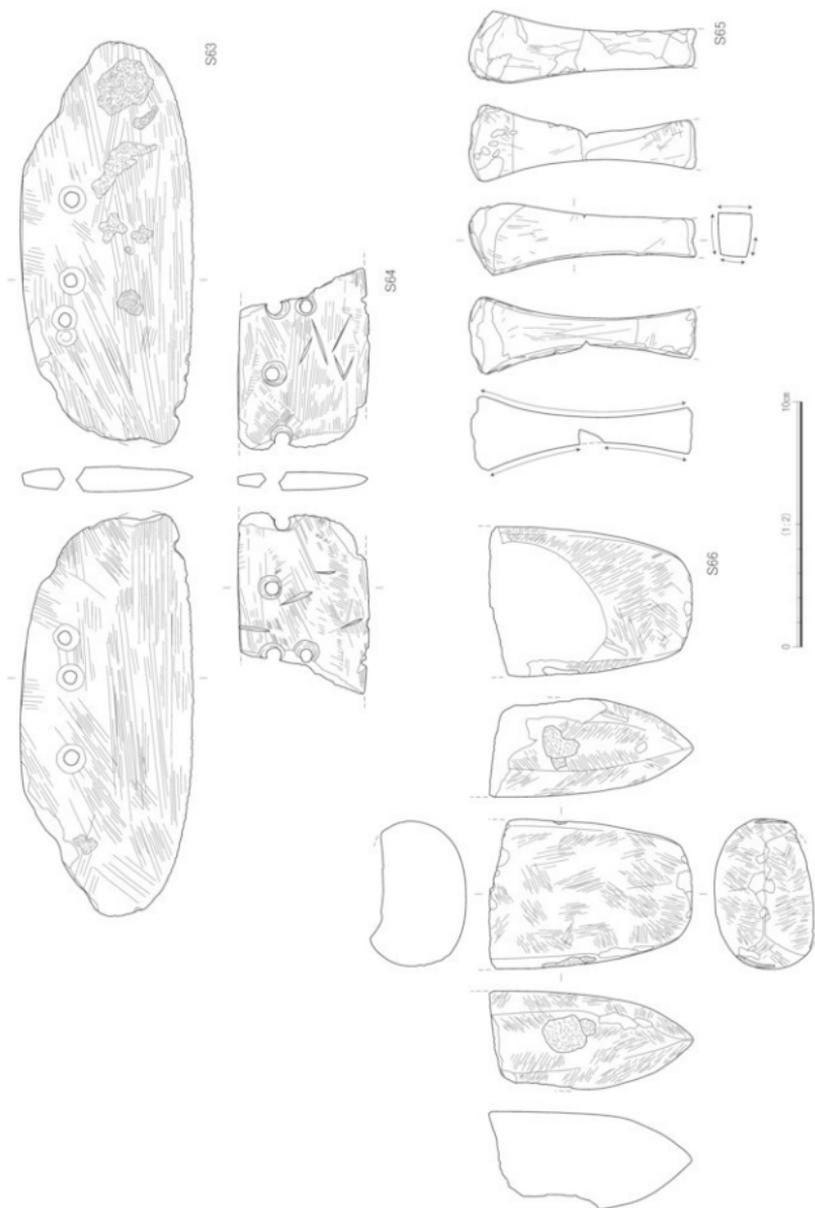


図330 A区 包含層出土石器(1)

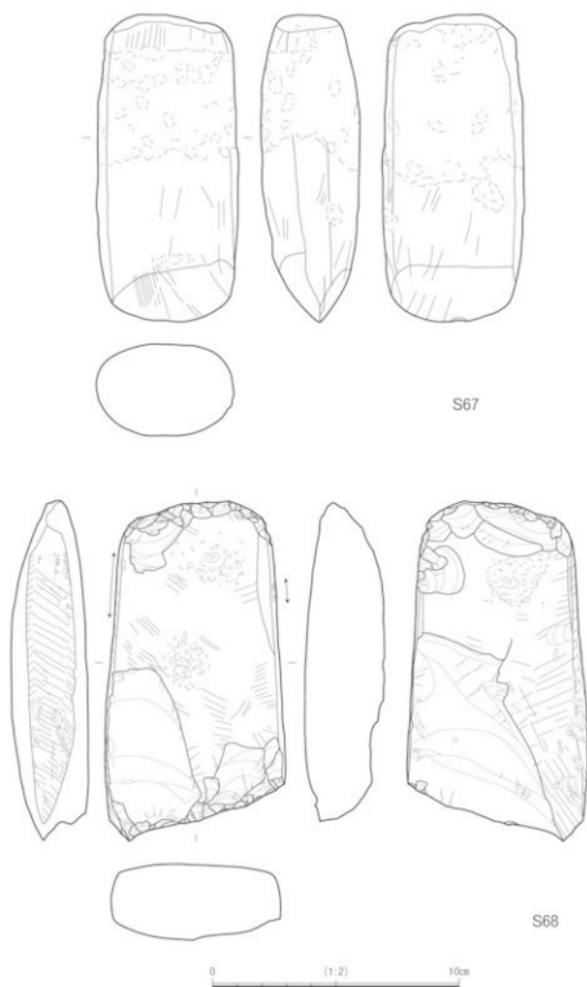


图331 A区 包含層出土石器(2)

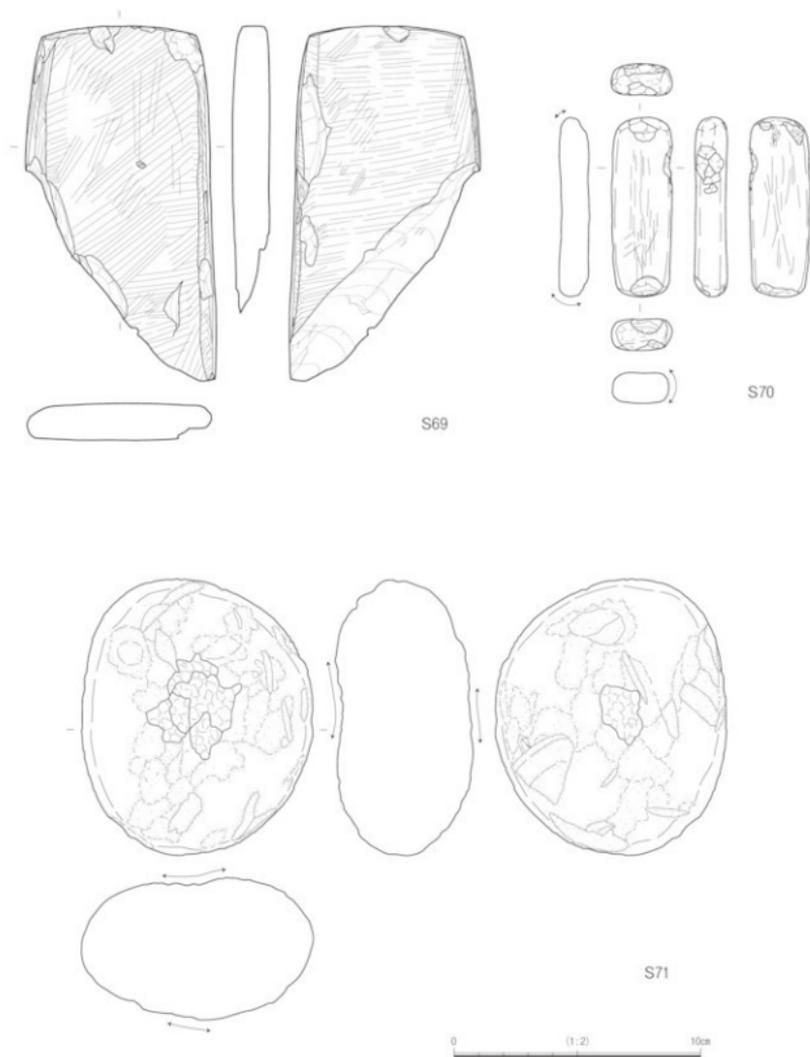


図332 A区 包含層出土石器(3)

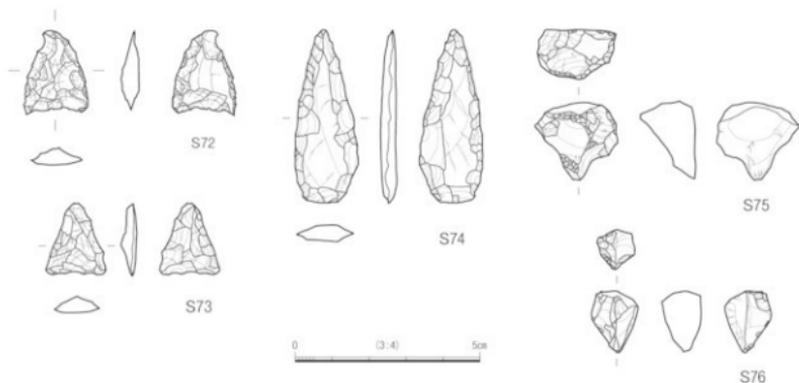


図333 A区 包含層出土石器(4)

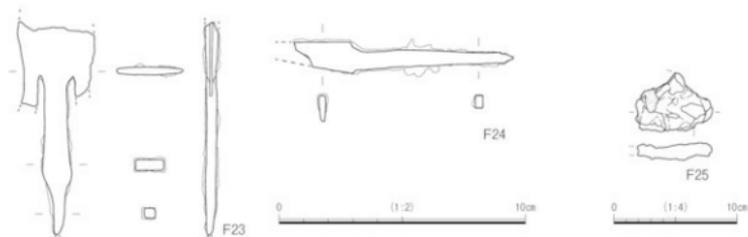


図334 A区 包含層出土鉄製品・鉄滓

遺物も出土しており、比較的残りの良い椀形鍛冶滓のF25を図化した。(田中)

第4章 AR区の調査

第1節 地形と層序(図335～337, PL.74)

AR区は、A区とB区の間に位置する狭小な調査区である。現況では、段丘面(A区)と谷部(B区)との間に農道が南西～北東方向に敷設されているが、AR区はその農道下に該当する。農道は造成土により大きく嵩上げされ、段丘面の標高に迫る数値を示すが、旧地形においては概ね谷部へと降りた地点、すなわち斜面裾部に該当する。造成土の下には、谷側(B区側、西側)を中心に近世帰属の耕作土と考えられる堆積が遺存する(A-A' セクション：2～4層、B-B' セクション：1層)。なお、調査区南東側に確認できる、南西～北東方向に走る溝は、農道敷設前に営まれていた近現代水田に伴う暗渠の痕跡である。近世水田耕作土下には、中世帰属(A-A' セクション：5～10層、B-B' セクション：2層、C-C' セクション：1層)、古代帰属(A-A' セクション：11～15層、B-B' セクション：4・5層)と目される堆積があり、大きく3時期に亘る遺物包含層を確認した。これらは、西側に隣接するB区における層序と概ね整合するものである。また、植物珪酸体分析によると、イネ科の検出値が古代包含層以降急増し一定数認められ、本調査区における水田耕作が狭む土地利用を示唆する結果となっている(第9章参照)。上述の知見を踏まえ、本調査区の遺構検出面は近世耕作土下、中世包含層下、古代包含層下の計3面を想定し、それぞれを第1面、第2面、第3面と呼称する。

造成土下の標高は、14.5～15m程度と平坦に近い状況を示すが、斜面裾部という立地を反映し、A側は造成土直下に古代包含層又は基盤層が露出し、改変度合いの差異、すなわち旧地形における標高差を物語る。また、基盤層とする堆積も本調査区内において変化する。北東～東側にかけては斜面部から続くクロボク由来の堆積が認められ、当該堆積下ではローム層も一部で確認できる。一方、南西側を中心とした区域では、砂礫の混じるシルトを基調とした、谷部に特有な堆積への変化が見取れ、本調査区が地形の変換点にあることを追認できる。(加藤)

第2節 調査の概要

以下、遺構検出面ごとに調査概要を述べる。

第1面 基盤層由来のブロックを包含する、近世帰属の耕作土と目される堆積下に想定した遺構面である。上述したように、調査区北西部～南西部にかけて中世帰属の包含層が広がる。当該層も耕作に付随する可能性があるが、畦畔等、水田に関連する遺構は検出されていない。土坑やピット等の掘り込みも当該面においては見つかっていない。出土遺物も僅少である。

第2面 中世包含層下には、古代帰属の包含層がやや谷(B区)側に偏りながらも、一定の広がりをもって確認できる。当該箇所を中心として新たに遺構検出を行ったが、ここでも遺構は検出されなかった。出土遺物も引き続き僅少である。

第3面 上述の調査区南西側に堆積する古代包含層を掘り下げ、調査区全体が基盤層における遺構検出となる段階である。ここでは、土坑3基、ピット1基を検出した。以下、詳細を述べる。

ARS 4(図338, PL.75)

M26に位置する土坑である。A区寄りに位置し、中世包含層下の基盤層にて検出した。平面形はや

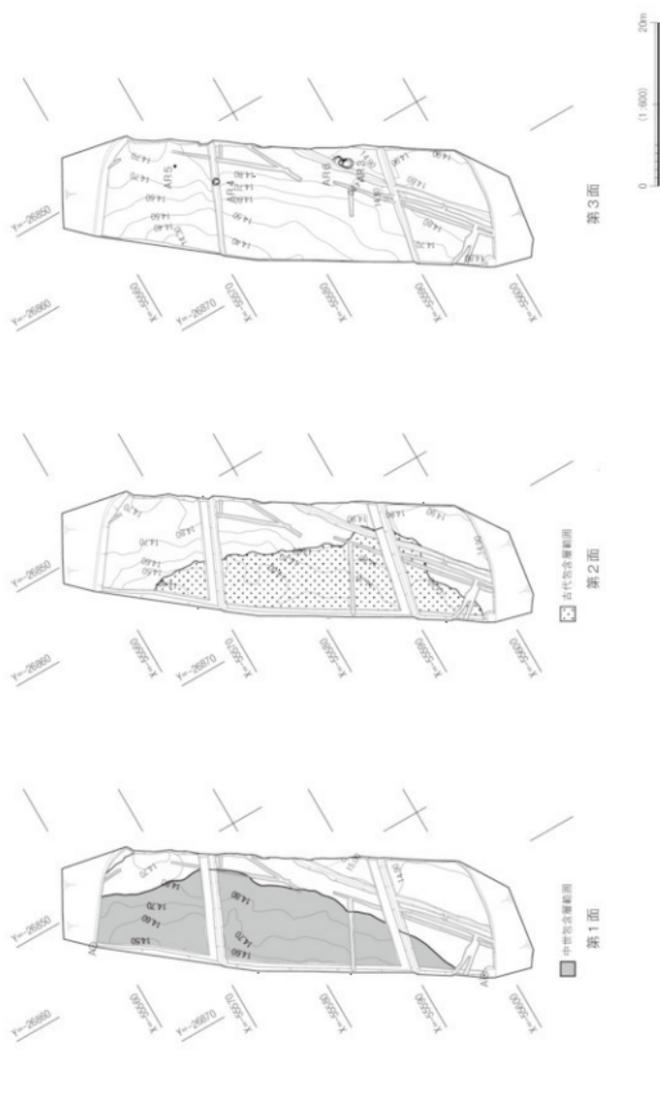


図335 AR区 遺構配置図

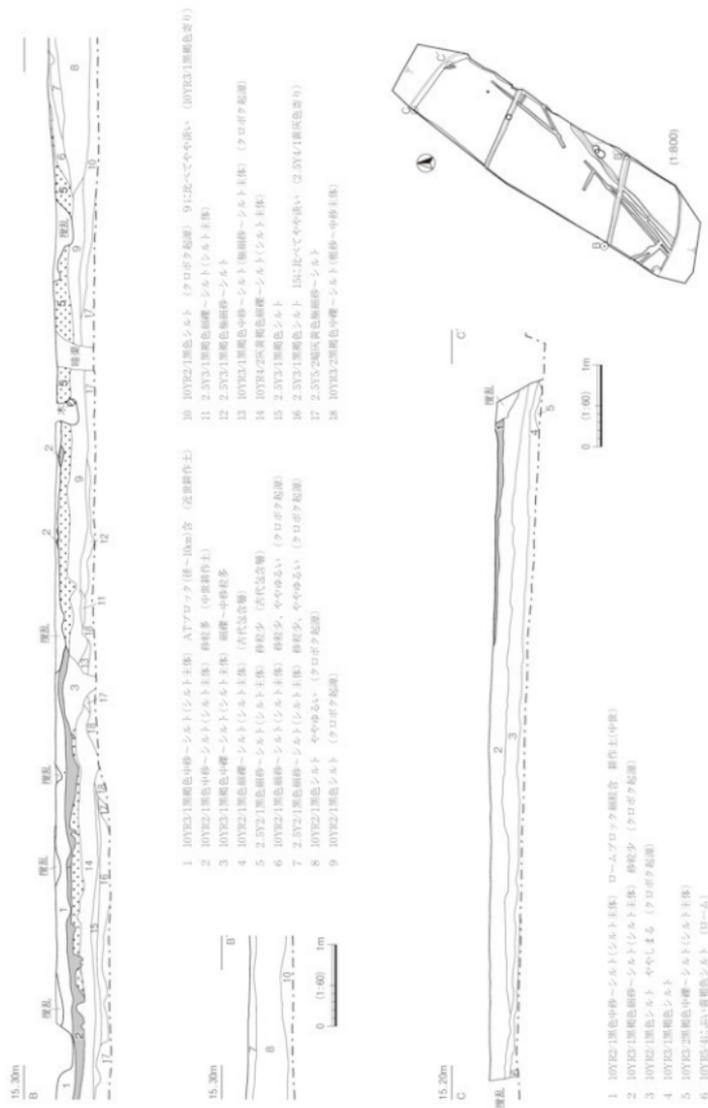


図336 AR区 土層断面(1)

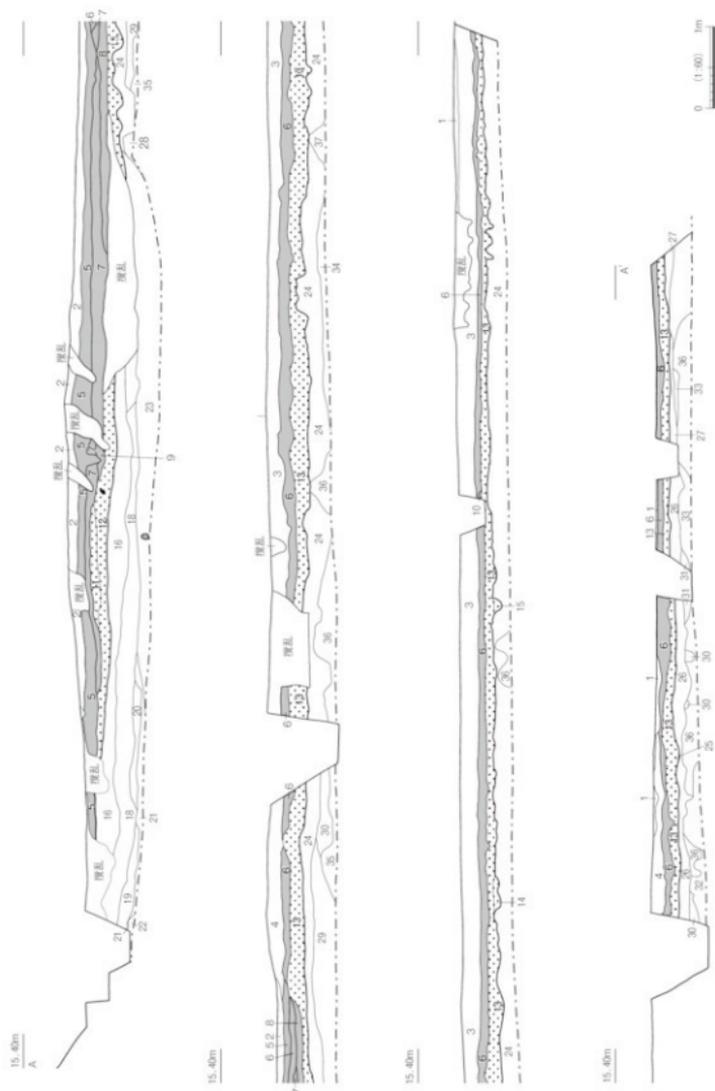


図337 AR区 土層断面(2)

表24 AR区 土層断面(2) 注記

番号	土色・土質	備考	番号	土色・土質	備考
1	2.5Y3/1黒褐色中砂～シルト(シルト主体)	田耕作土	19	10YR2/1黒色シルト	ややしまる 自然堆積(クロボク起源)
2	10YR2/2黒褐色中砂～シルト(シルト主体)	ロームブロック(径～5cm)含 耕作土(古積)	20	10YR3/1黒褐色中砂～シルト(シルト主体)	自然堆積
3	10YR3/1黒褐色中砂～シルト(シルト主体)	ロームブロック(径～10cm)含 耕作土(古積)	21	10YR3/1黒褐色シルト	自然堆積
4	10YR3/1黒褐色中砂～シルト(シルト主体)	耕作土(古積)	22	10YR3/2黒褐色中砂～シルト(シルト主体)	自然堆積
5	10YR2/1黒色中砂～シルト(シルト主体)	ロームブロック(細粒)含 耕作土(中積)	23	10YR3/1黒褐色中砂～シルト(シルト主体)	自然堆積
6	10YR2/1黒色中砂～シルト(シルト主体)	砂粒少 耕作土(中積)	24	10YR4/2黄褐色細砂～シルト(シルト主体)	ややしまる 自然堆積
7	10YR2/1黒色細砂～シルト(シルト主体)	砂粒少 耕作土(中積) やや赤い(10YR2/2寄り)	25	2.5Y4/2黄褐色細砂～シルト	自然堆積
8	10YR2/1黒色中砂～シルト(シルト主体)	砂粒少 6, 7に比べてしまる 耕作土(中積)	26	10YR4/1黄褐色細砂～シルト(シルト主体)	ややしまる 自然堆積 場所によりやや暗め(10YR3/1)の箇所あり
9	10YR3/1黒褐色細砂～シルト(シルト主体)	中砂粒多 耕作土(中積)	27	10YR4/1黄褐色シルト	ややしまる 自然堆積
10	10YR2/1黒色細砂～シルト(シルト主体)	細砂粒多 耕作土(中積)	28	10YR4/2黄褐色中砂～シルト(細粒砂～シルト主体)	自然堆積
11	10YR2/1黒色シルト	包含層(古代)	29	10YR2/2黒褐色細砂～シルト(シルト主体)	自然堆積
12	2.5Y2/3黒色細砂～シルト(シルト主体)	包含層(古代)	30	10YR3/1黒褐色細砂～シルト(シルト主体)	自然堆積
13	10YR2/1黒色細砂～シルト(シルト主体)	包含層(古代)	31	10YR3/1黒褐色細砂～シルト(シルト主体)	自然堆積
14	10YR3/1黒褐色細砂～シルト(シルト主体)	砂粒少 包含層(古代)	32	2.5Y3/1黄褐色中砂～シルト(中砂～細砂主体)	自然堆積
15	10YR3/1黒褐色細砂～シルト(シルト主体)	包含層(古代)	33	2.5Y3/1黄褐色細砂～シルト	自然堆積
16	10YR2/1黒色シルト	上層に比べてやや赤い 自然堆積(クロボク起源)	34	10YR2/1黒色シルト	ややしまる 自然堆積
17	10YR2/1黒色細砂～シルト(シルト主体)	自然堆積(クロボク起源)	35	10YR3/2黒褐色中砂～シルト(粗砂～中砂主体)	自然堆積
18	10YR3/1黒褐色細砂～シルト(シルト主体)	自然堆積(クロボク起源)	36	10YR3/2黒褐色中砂～シルト(粗砂～中砂主体)	自然堆積
			37	10YR4/2黄褐色中砂～シルト(シルト主体)	中砂～細砂粒多 自然堆積

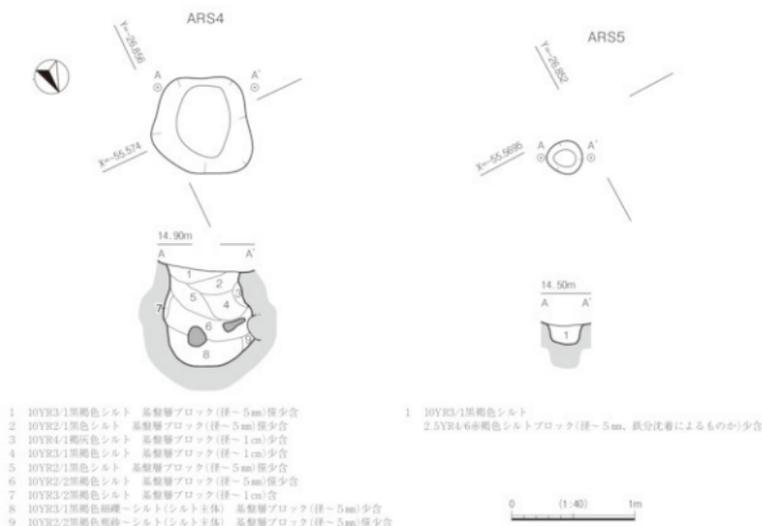


図338 AR区 ARS4・5

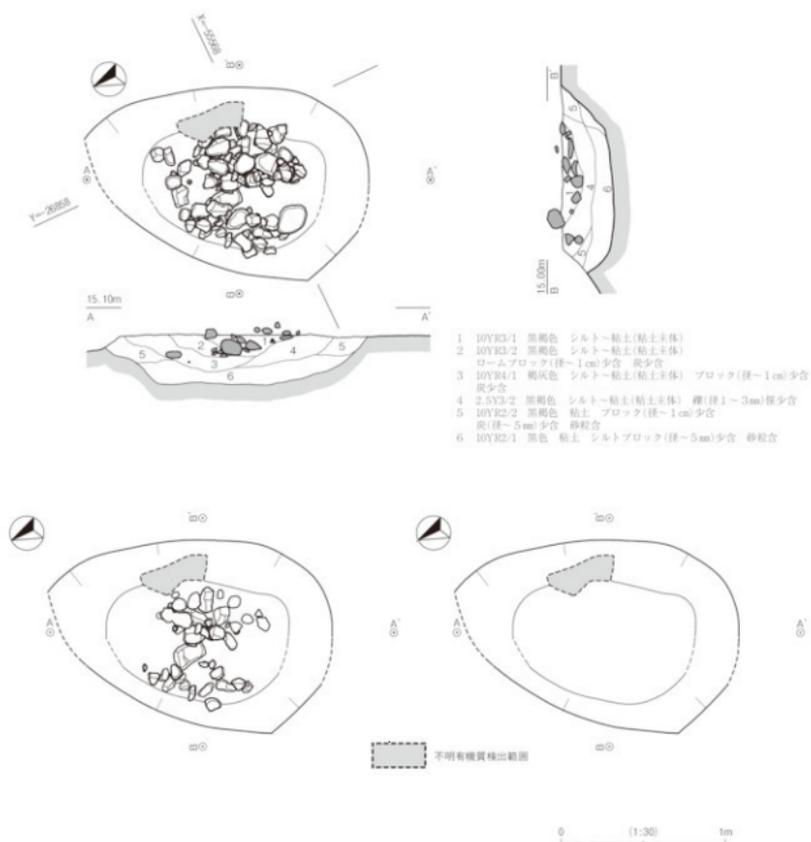


図339 AR区 ARS 3

や不整な円形を呈し、規模は径0.8m前後、検出面からの深さは0.79mある。埋土は黒色から黒褐色系を呈し、クロボク由来である。出土遺物は土器細片が僅かに出土するにとどまり、帰属時期は不詳である。掘方形態は、縄文時代に認められる落とし穴に近似する。落とし穴と考えられる遺構は、A区の東側においても散発的ではあるが検出されており、本遺構も該当する可能性が考えられる。(加藤)

ARS 5 (図338)

M26に位置する小穴である。本遺構は、中世包含層下の基盤層において検出したが、同包含層との先後関係は明らかではない。平面形は円形で、検出面における規模は径0.29m、深さは0.16mある。周辺に同様な遺構が確認できず、性格等詳細は不明である。また、出土遺物も皆無で、帰属時期についても不詳である。(加藤)

ARS 3 (図339、PL.76)

N27、A区寄りに位置する土坑で、造成土下の基盤層において検出した。平面形は不整な楕円形で、

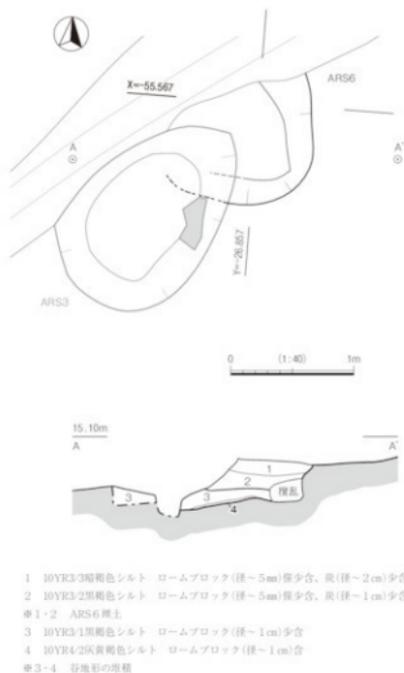


図340 AR区 ARS6

ARS6 (図340)

N27に位置する土坑で、造成土下に露出する基盤層において検出した。土坑ARS3と掘方を重複しており、ARS6に掘り込まれる。また、近現代暗渠にも切れ、掘方の一部を失っている。平面形はやや不整ながら円形を呈し、径1m程度と想定する。深さは最大で0.19mである。埋土中からの出土遺物は皆無で、性格、帰属時期共に不明である。(加藤)

第3節 出土遺物(図341、PL114)

各包含層より出土した資料を示した。出土遺物は全般に少ないが、近世耕作土からの出土が比較的多数を占めた。この層を掘削し、遺構検出した際(第1面)に出土した資料が多く、一部下位の中世包含層に帰属する可能性がある。Po695は陶胎染付の碗。直線のな体部から口縁部にかけての破片資料で、呉須による絵付が為され、やや内側へ折れ曲がる口縁端部には鉄軸が施されている。Po703・704は備前焼である。Po703は播鉢の破片資料で、口縁部は上方へはしっかりと拡張し、下端は突出する。備前市教育委員会による編年におけるIVB-2に該当する。Po704は甕の口縁部片。口縁部の断面形が楕円形状の玉縁となり、直立気味に立ち上がる。IVBに該当すると考えられる。Po702は瓦質土器の火桶か。外面に菊花文がスタンプされる胴部は外傾し、口縁端部を大きく肥厚させる。帰属時期等は不

検出面における規模は、長径1.76m、短径1.15m、深さ0.31mである。本遺構掘方は土坑ARS6と重複し、掘り込んでいる。埋土土層においては、大小の礫が多数検出された。礫の大きさは3~20cm程度とばらつきがあり10cm前後が最も多い。礫の配置は、平面的に見ると円弧状に見えるが間隙も多く、段階的に取り上げて状況を確認したが、意識的なものかは判断としない。また、礫と共に有機質の痕跡が検出され、平面的な広がり認められたが、厚みは数mm程度と遺存状態は悪く、その内容ははっきりしない。こうした礫を多数包含する土坑の事例としては、主に縄文時代に帰属する集石土坑が挙げられる。熟した礫を利用した蒸し焼き等、調理に供された可能性が指摘されているが、本遺構検出礫には明瞭な被熱痕跡が認められず、埋土中に炭化物を顕著に包含する訳でもなく、積極的な評価は難しい。また、礫以外に出土遺物は無く、本遺構の帰属時期についても不明である。

(加藤)

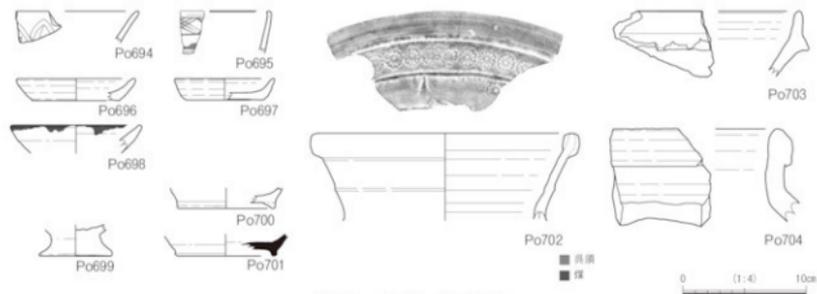


図341 AR区 出土遺物

詳である。Po696～698は土師器の皿である。Po696・697は器高が2cmを下回り低く、口径に対して底径が比較的大きい器形を示す。Po698は口縁端部にタール状のものが付着し、灯明皿としての使用が窺われる。Po694は輸入陶磁器の青磁碗である。外面に鎬連弁文を有する小片で、龍泉窯系青磁Ⅱb類に該当する。Po699は中世包含層より出土。土師器の柱状高台皿又は坏の底部資料である。Po700・701は古代包含層より出土した。Po700は土師器の高台坏。Po701は須恵器の高台坏である。いずれも底部切り離しは回転糸切りである。(加藤)

第5章 B区の調査

第1節 地形と基本層序(図342~348, PL.77)

B区はA区の段丘面とC・Dがある丘陵裾の平坦面の間に開析された谷にあたる。調査前の現況は水田で、調査区内で2筆に分かれており、北側の水田面が標高15.85m前後、南側の水田面が標高16.40m前後である。北側の水田面とA区の段丘面とは3.5m前後、C区とは2.5m前後の高低差がある。

調査区内は、昭和50年代の圃場整備の時に盛土がされていた。調査は重機で圃場整備の盛土と圃場整備前の耕作土(後述のⅢ層)の上部を除去した後に、人力で掘削を行った。

調査区内には南中央から北東へ抜ける圃場整備前まで使用されていた溝があり、これを境に東側はA区から続くロームが土壌化したもの(いわゆるクロボク)を主体としており、西側では河川堆積物を起源とした堆積が主体となる。そこで同時期と判断した層位には同じローマ数字を付し、ローマ数字の後ろに東(E)と西(W)の別をアルファベットで示し、細分出来る場合は枝番号で区別して記述する。

なお、土層断面図のうち、A断面以外は機械掘削後のⅢ層以下の状況である。また、調査区北側の東西断面(E断面)の東端付近にはV層下面の溝状遺構S834があるが、調査区壁面の崩落を防ぐために約0.5m内側までの掘削に留めたため、図347では遺構底面は反映していない。

I層：表土(現況水田耕作土)。

Ⅱ層：圃場整備による盛土と客土で、おもにロームとDKPが混在する。北側の中央部付近では圃場整備の際に掘削が行われているようで、後述するⅣ層の下面付近まで達する箇所も見受けられた。

Ⅲ層：圃場整備前の耕作土である。

Ⅲ-W層は10YR3/1~3/2黒褐色砂礫混シルトを基調とする最大3つの単層からなる。

調査区西壁を観察すると、それぞれの層に対応するようにロームの細粒を中心としたブロックを含む人為的な層が認められた。一方、調査区中央部ではローム細粒を含む堆積が認めなかった。調査区西側の水田を1段高くするために盛土を行った可能性がある。

Ⅲ-E-1層は黒褐色(2.5Y3/1)のシルトを主体とした堆積を基本とする。ロームのブロックを含まない。

Ⅲ-E-2層は黒色または黒褐色(10YR2/1~3/1)のシルト主体の堆積で、ローム(主にAT)ブロックを含む。ロームのブロックは南側では比較的多く、北側に行くに従って少なく、ブロックの大きさも小さくなる。人為的要因によるものと考えており、耕作地を造るための盛土、あるいは耕作されたとしても短期間だったとみている。なお、現代の溝より西側に当たるI26からJ28にかけても類似した堆積が見られ、同一段階の堆積と考えた。

Ⅲ-W層の最下層からは国産陶器などが出土しており、中世後期から近世初頭の耕作土と考えた。

Ⅳ層：中世の耕作土である。

Ⅳ-W-1層は黒褐色(2.5Y3/1)のシルトを主体とした堆積で、土質はⅢ-W層と似ている。調査区の北側から中央にかけては比

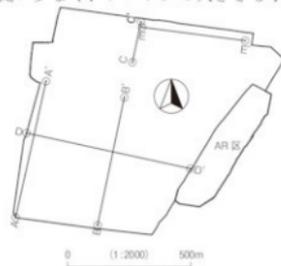


図342 B区土層断面位置

較的厚く堆積するが、南側では堆積は薄くなり、南端部ではほとんど確認出来なかった。また、後述するBS45、BS49の状況から、本来は複数の耕作土が累層したものと思われるが、調査では細分できなかった。IV-W-2層は黒褐色(10YR3/1)のシルト主体の堆積で、IV-W-1と比べてややしまっている。調査区中央部の1段低い部分で確認した。

IV-E層は黒色(10YR-2.5Y2/1)のシルト主体の堆積で、ロームのブロックはみられず、砂粒も少ない。AR区の西半分でもこの層が確認できるが、堆積は薄くなる。

V層：古代の包含層である。

V-W-1層は黄灰色(2.5Y4/1)のシルトを主体とした堆積で、調査区北西部ではやや暗めの色調(10YR3/1黒褐色)を呈する。調査区南側では堆積は薄くなる。

V-W-2層は黒褐色(2.5Y3/2)のシルトを主体としたもので、調査区の北西部を中心に堆積している。下面には耕起痕・踏込み痕と推測する凹凸が見られる。

V-E層は黒褐色(10YR-2.5Y3/1)のシルトを主体とした堆積である。この層は北側で厚く堆積するが、南側では薄くなり、南端部ではほとんど確認出来なかった。この堆積はB区とAR区の境辺りで途切れ、AR側で対応する堆積はこの堆積よりも高い位置で確認出来た。調査区境は圃場整備の際の溝が掘られているため確認出来なかったが、この辺りが耕地の境となっていた可能性がある。

VI層：黄灰色(2.5Y4/1)の泥質または粘土質のシルトを基本とする。調査区の東側では砂礫(小豆まで)を含み、一部では黒褐色に(10YR3/1)に変化する。また一部では細砂を主体とした葉理層が確認できた。V層に比べて堅くしまった堆積で、若干土壌化するが遺物は含まない。

VII層：黒色(10YR2/1)のシルトを主体とし、調査区の北東部にみられる。クロボクを起源とした堅くしまった堆積である。遺物は含まれておらず、自然堆積と判断した。

VIII層：2.5Y5/1黄灰色砂礫(卵大まで)の自然堆積層である。

VI層は若干の土壌化は認められるものの、サブトレンチで遺物が出土なかったことから、今回の調査ではV層の下面までを調査対象とした。(荒川、田中)

第2節 遺構面について(図349・350)

B区は、調査区両端でロームの基盤層が検出できたところ以外、いくつかの土壌層が自然堆積を介在しない形で堆積していた。そのため、土壌層を除去した後に検出した面は、被覆した土壌層の形成段階で耕作や生物擾乱によって当時の地表面を失った状態となっていた。

調査では、ロームの基盤層が検出できたところを除いてほぼ全面で水田耕作の痕跡を確認した。

検出した畦畔や耕地段差の痕跡には2種類あり、1つは検出した面で砂礫が溜まった窪みや砂礫を多く含む堆積が点在しており、大きくみれば筋状に延びるもの(以下「凹類」)である。溝状遺構の底面の残欠や動溝とするには砂礫の筋の方向にばらつきが大きく分布が散漫である。そのため、氾濫などで運ばれた砂礫が窪みに入り込み、その後の耕作で畦畔だった部分が耕耘されずに残されたものと考えた。もう1つは耕作土の下面で筋状の高まりや段差として確認できるもの(以下「凸類」)で、耕耘が耕作土の下の堆積まで及び、水田面の違いによって耕耘される深さが異なることで段差が形成されたり、畦畔の部分が耕耘されずに削り残されたりしたものである。

凸類の場合、痕跡が形成された段階の耕作土の残存状況によっては、耕作土の上面で筋状に畔の痕

16.20m



図344 B区西壁土層(2)



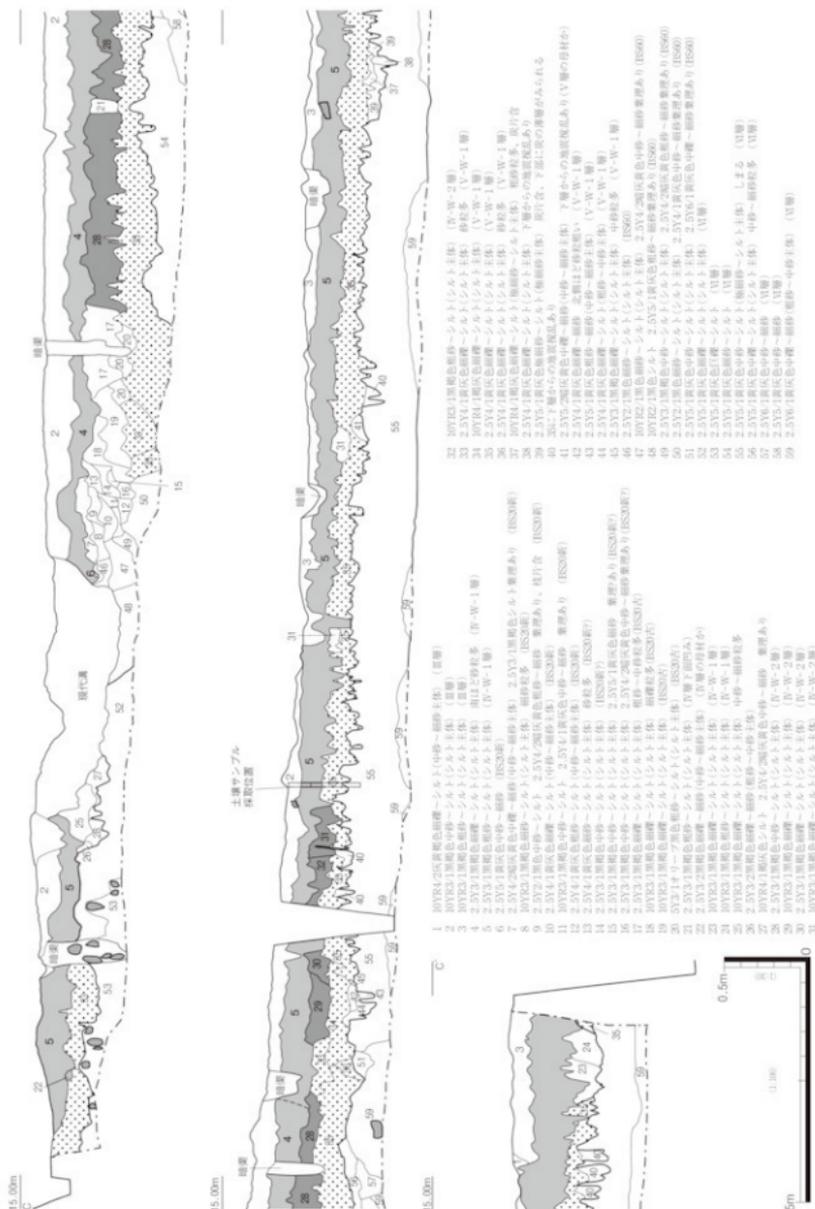


図345 B区調査区中央南北土層(南側)



- | | | |
|----|-------------------------|-----------------------------|
| 1 | 10YR2/3.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分低含有 (E-W層) |
| 2 | 2.5Y1.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (E-W層) |
| 3 | 10YR2/3.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (S825層土) |
| 4 | 10YR2/3.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 3.2.7和砂多 (S825層土) |
| 5 | 10YR2/3.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 3.2.7和砂多 (S825層土) |
| 6 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (S825層土) |
| 7 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (S825層土) |
| 8 | 10YR2/3.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (S825層土) |
| 9 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (S825層土) |
| 10 | 2.5Y2.2黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分低含有 (S825層土) |
| 11 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分低含有 (S825層土) |
| 12 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分含有 (S825層土) |
| 13 | 2.5Y2.2黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 4.5層部 (2.5Y2.2層より) |
| 14 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分含有 (S834層土) |
| 15 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 北へ有(1.2.7砂多 (S834層土)) |
| 16 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 北へ有(1.2.7砂多 (S834層土)) |
| 17 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 北へ有(1.2.7砂多 (S834層土)) |
| 18 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分含有 (S834層土) |
| 19 | 10YR4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 2.5Y4.2黄褐色細砂-シルト層部 (S834層土) |
| 20 | 10YR2/3.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分含有 (S834層土) |
| 21 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | 2.5Y3.1黄褐色細砂-シルト層部 (S834層土) |
| 22 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | 2.5Y4.2黄褐色細砂-シルト層部 (S834層土) |
| 23 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 2.5Y4.2黄褐色細砂-シルト層部 (S834層土) |
| 24 | 10YR2/3.1黄褐色細砂-シルト | 鉄分含有 (S834層土) |
| 25 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 鉄分含有 (S834層土) |
| 26 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分低含有 (S834層土) |
| 27 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分低含有 (S834層土) |
| 28 | 2.5Y4.2黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト層部 (S834層土) |
| 29 | 10YR4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 砂粒多 (S834層土) |
| 30 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 水行含 (E層) |
| 31 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 水行含 (E層) |
| 32 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 鉄分含有 (E層) |
| 33 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (E層) |
| 34 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | (E層内葉層) |
| 35 | 2.5Y2.2黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 葉層あり (E層内葉層) |
| 36 | 2.5Y2.2黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 葉層あり (E層内葉層) |
| 37 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 砂粒多 (E層) |
| 38 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 砂粒多 (E層) |
| 39 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 砂粒多 (E層) |
| 40 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルト | 砂粒多 (E層) |
| 41 | 2.5Y2.2黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 砂粒多 (E層) |
| 42 | 2.5Y2.2黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 砂粒多 (E層) |
| 43 | 2.5Y4.1黄褐色細砂-シルトシルト主体 | 葉層あり (E層) |
| 44 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | (E層内葉層) |
| 45 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | (E層内葉層) |
| 46 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | (E層内葉層) |
| 47 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | 水行含 (E層) |
| 48 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | 水行含 (E層) |
| 49 | 2.5Y2.1黄褐色細砂-シルト | 砂粒多 (E層) |

図346 B区調査区中央南北土層(北側)

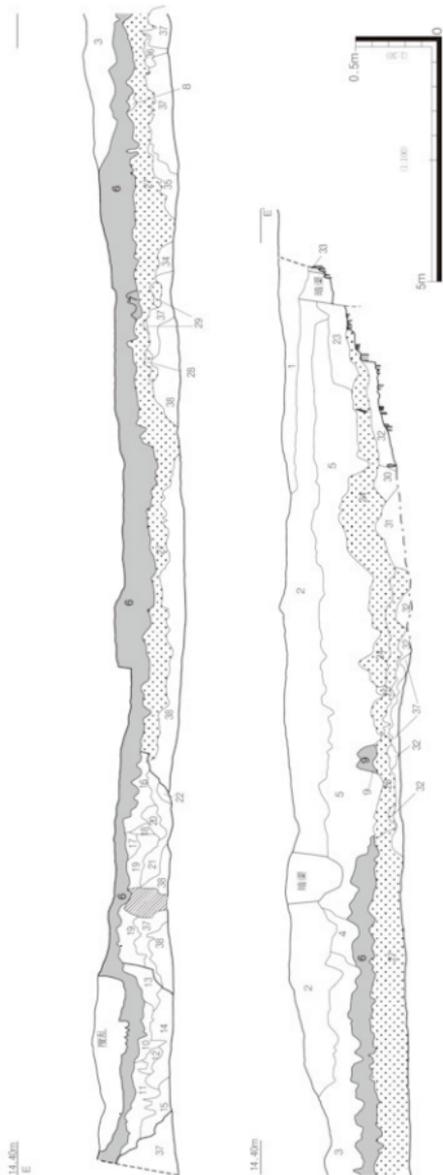


図347 B区調査区北側東西土層

- | | | | | | |
|------------------------|---------------|------------------------|-------|------------------------|---------------|
| 1. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体(黄層) | 25. 2.5Y2.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 26. 2.5Y2.1/1黒褐色細砂-シルト | 26に比べて砂粒多(黄層) |
| 2. 2.5Y2.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体(黄-W-1層) | 27. 2.5Y2.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 27. 2.5Y2.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 3. 2.5Y2.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体(黄-W-1層) | 28. 2.5Y2.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 28. 2.5Y2.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 4. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 29. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 29. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 5. 10YR3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 30. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 30. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 6. 10YR3.4/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 31. 2.5Y2.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 31. 2.5Y2.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 7. 2.5Y2.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体(黄-W-1層) | 32. 10YR3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 32. 10YR3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 8. 2.5Y2.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体(黄-W-1層) | 33. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 33. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 9. 2.5Y2.4/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 34. 10YR3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 34. 10YR3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 10. 10YR4.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 35. 10YR3.4/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 35. 10YR3.4/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 11. 2.5Y3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 36. 2.5Y3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 36. 2.5Y3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 12. 2.5Y3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 37. 2.5Y3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 37. 2.5Y3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 13. 2.5Y3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 38. 2.5Y3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 38. 2.5Y3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 14. 2.5Y3.4/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 39. 2.5Y3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 39. 2.5Y3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 15. 10YR3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 40. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 40. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 16. 10YR3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 41. 10YR3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 41. 10YR3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 17. 10YR3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 42. 10YR3.4/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | 42. 10YR3.4/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 |
| 18. 2.5Y2.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | | | | |
| 19. 2.5Y4.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | | | | |
| 20. 2.5Y3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | | | | |
| 21. 2.5Y3.2/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | | | | |
| 22. 2.5Y3.3/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | | | | |
| 23. 10YR3.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | | | | |
| 24. 2.5Y2.1/1黒褐色細砂-シルト | シルト主体 | | | | |



図348 B区調査中央東西土層

表25 B区調査区中央東西層 注記

番号	土色・土質	備考
1	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト (黒層) (シルト主体)	
2	10YR2/1黒褐色細砂-シルト (黒層) (シルト主体)	
3	2.5Y2/1黒色細砂-シルト (黒層) (シルト主体)	
4	10YR2/1黒色中砂-シルト 灰合 (黒層) (シルト主体)	
5	10YR3/1黒褐色細砂-シルト (黒層) (シルト主体)	
6	2.5Y2/1黒色シルト ATPロウ マク(径=1cm)含	
7	10YR3/1黒褐色中砂-シルト ATPアロク(径=5cm)含 (黒層) (シルト主体)	
8	10YR2/1黒褐色細砂-シルト ATPアロク(径=5cm)含 (黒層) (シルト主体)	
9	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト ATPアロク(径=1cm)僅少含 (黒層) (シルト主体)	
10	2.5Y3/2黒褐色粗砂-シルト 中砂-細砂较多 (N-W-1層) (シルト主体)	
11	2.5Y3/1黒褐色粗砂-シルト (N-W-1層) (シルト主体)	
12	2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト 枝片含 (N-W-1層) (シルト主体)	
13	5Y3/1オリーブ黒色細砂-シルト(N-W-1層) (シルト主体)	
14	2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト 砂粒少 (N-W-1層) (シルト主体)	
15	10YR3/1黒褐色中砂-シルト 細砂较多 (N-W-1層) (シルト主体)	
16	10YR3/1黒褐色細砂-シルト (N-W-1層) (シルト主体)	
17	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト (N-W-1層) (シルト主体)	
18	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 細砂-粗砂较多 互層積付設置の縦型網時か (シルト主体)	
19	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 細砂较多、下部に2.5Y4/1黄灰色粗砂-粗砂 葉理あり、枝片含 互層積付設置の縦型網時 (シルト主体)	
20	10YR3/1黒褐色細砂-シルト 中砂-細砂较多 互層積付設置の縦型網時 (シルト主体)	
21	2.5Y3/1黒褐色中砂-粗砂 互層積付設置の縦型網時(N層の母材か) (粗砂-中砂主体)	
22	10YR2/1黒色中砂-シルト 砂粒少 (N-E層) (シルト主体)	
23	2.5Y2/1黒色中砂-シルト (N-E層) (シルト主体)	
24	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 粗砂较多 (N-W-2層) (シルト主体)	
25	10YR3/1黒褐色粗砂-シルト 中砂-細砂较多 (N-W-2層) (シルト主体) 中砂-細砂较多	
26	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 有機物片含 (N-W-2層) (シルト主体)	
27	2.5Y2/1黒色粗砂-シルト (N-W-2層) (シルト主体)	
28	10YR3/1黒褐色細砂-シルト (N-W-2層) (シルト主体)	
29	10YR3/1黒褐色粗砂-シルト (N-W-2層) (シルト主体)	
30	10YR3/1黒褐色細砂-シルト 2.5Y5/1黄灰色中砂-シルト混含 (28の地質 シルト主体)	
31	2.5Y4/1黄灰色シルト HSD(新)理土	
32	2.5Y3/1黒褐色粗砂-シルト HSD(新)理土 (粗砂-中砂主体)	
33	10YR3/1黒褐色細砂-シルト 葉理あり HSD(新)理土 2.5Y4/1黄灰色細砂-粗砂	
34	10YR3/1黒褐色粗砂-シルト 中-粗砂较多、葉理あり HSD(新)理土 (シルト主体)	
35	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト HSD(新)理土 (シルト主体)	
36	10YR3/1黒褐色粗砂-シルト HSD(古)理土 (シルト主体)	
37	10YR3/1黒褐色細砂-シルト HSD(古)理土 (粗砂-中砂主体)	
38	2.5Y3/1黒褐色中砂-粗砂 (粗砂-中砂主体)	
39	10YR3/1黒褐色細砂-シルト 砂粒少 (N-W-2層) (シルト主体)	

番号	土色・土質	備考
40	10YR3/1黒褐色細砂-シルト (N-W-2層) (シルト主体)	
41	10YR3/1黒褐色中砂-シルト (シルト主体)	
42	2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト 2.5Y4/1黄灰色シルト混含 地質混入 (シルト主体)	
43	2.5Y3/1黄灰色細砂-粗砂 互層積付設置の縦型網時(互層母材) (粗砂-中砂主体)	
44	2.5Y3/2黒褐色中砂-シルト (粗砂-シルト主体)	
45	2.5Y3/2黒褐色中砂-シルト (シルト主体)	
46	2.5Y4/1黄灰色中砂-シルト 砂粒僅少 (V-W-1層) (シルト主体)	
47	2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト 中砂-粗砂较多 (V-W-1層) (粗砂-シルト主体)	
48	2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト (V-W-1層) (シルト主体)	
49	2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト 西ほど砂粒多 (V-W-1層) (シルト主体)	
50	2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト 砂粒多 (V-W-1層) (シルト主体)	
51	2.5Y4/1黄灰色粗砂-シルト (V-W-1層) (粗砂-シルト主体)	
52	2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト (V-W-1層) (シルト主体)	
53	2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト 2.5Y5/1黄灰色中砂-シルト混含 地質混入 (シルト主体)	
54	2.5Y3/2黒褐色粗砂-シルト (V-W-2層) (シルト主体)	
55	2.5Y3/2黒褐色粗砂-シルト 2.5Y4/1黄灰色中砂-シルトアロク(径=3 cm)含 (V-W-2層)	
56	2.5Y3/2黒褐色細砂-シルト 細砂-粗砂较多 (V-W-2層) (シルト主体)	
57	2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト 2.5Y4/1黄灰色中砂-粗砂アロク(径=3cm) 含 (V-W-1層) (粗砂-シルト主体)	
58	2.5Y3/2黒褐色中砂-シルト 中砂-粗砂较多 (V-W-2層) (シルト主体)	
59	2.5Y3/1黒褐色粗砂-シルト 炭片含 (V-W-1層) (シルト主体)	
60	10YR2/1黒色シルト (V-E層)	
61	2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト (V-E層) (シルト主体)	
62	10YR3/1黒褐色細砂-シルト (V-E層) (シルト主体)	
63	2.5Y4/1黄灰色粗砂-シルト	
64	10YR2/1黒褐色細砂-シルト (V-E層) (シルト主体)	
65	2.5Y2/1黒色粗砂-シルト 2.5Y4/2黄灰色中砂-粗砂 葉理あり HSD理土	
66	2.5Y3/1黒褐色粗砂-シルト 葉理あり HSD理土 (シルト主体)	
67	2.5Y2/1黒色細砂-シルト HSD理土 (シルト主体)	
68	2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト 細砂-粗砂较多 HSD理土 (シルト主体)	
69	2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト HSD理土 (シルト主体)	
70	10YR2/1黒色中砂-シルト HSD理土 (シルト主体)	
71	10YR4/3c.あい黄褐色細砂 (V層母材) 粗砂-粗砂-中砂主体)	
72	2.5Y3/1黄灰色中砂-シルト 砂粒やや多、ややしるる (互層) (シルト主体)	
73	2.5Y3/1黄灰色細砂-シルト 枝片含、しるる (互層) (シルト主体)	
74	2.5Y3/1黄灰色中砂-シルト しるる(互層) (粗砂-シルト主体)	
75	2.5Y3/1黄灰色粗砂-シルト有機物含(互層)	
76	2.5Y3/1黄灰色シルト (互層)	
77	2.5Y3/1黄灰色粗砂-シルト しるる (互層)	
78	2.5Y2/1黒色シルト-有機物含 (互層)	
79	2.5Y3/1黄灰色目録-粗砂 (互層) (粗砂-中砂主体)	
80	10YR3/2黒褐色中砂-シルト (粗砂-中砂主体)	

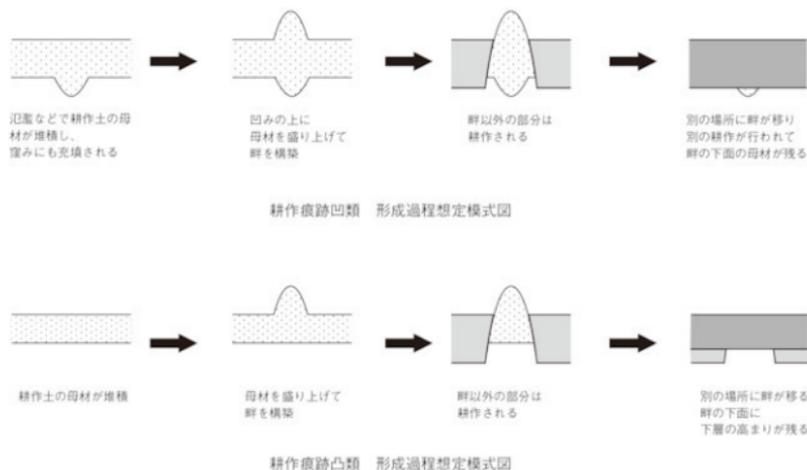


図349 耕作痕跡形成過程想定模式図

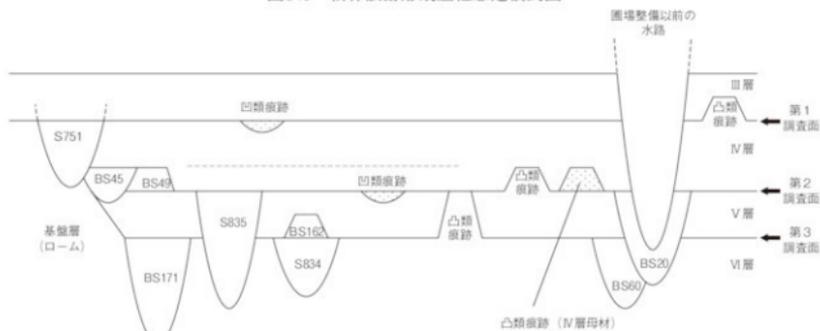


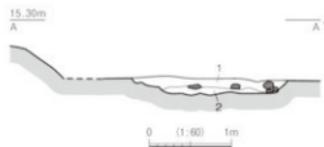
図350 B区基本層序・調査面模式図

跡が検出できる。例えば耕作土Aを除去後に耕作土Bを面的に遺構を精査した結果、凹型と凸型が同時に検出されたとすると、凹型は検出した面を被覆した耕作土Aの段階に伴うものであり、凸型は除去後に露出した耕作土Bの段階に伴うものとなる。

また、耕作土を除去した後に別の耕作土があり、その上面で溝状遺構や土坑が検出された場合、掘り込んだ耕作土が形成された後に遺構が造られたことになる。本来の地表面が上面の耕作によって残存しないので遺構が造られた時期と耕作が行われた時期が同時かどうかは不明だが、比較的近い時期に機能していた可能性が高いと考えた。

一方、現地での調査では、耕作痕跡は起因する耕作土を除去した後に記録を行っており、耕作痕跡とそれ以前に造られた溝や土坑などが同時に記録されている。

本書ではこうした状況を勘案して、耕作土が形成、機能した段階またはそれに近い時期の遺構を1つの図面にまとめる形で現地の記録を整理した図面を掲載し、これを元に報告を行う。(田中)



- 2.5Y3/1黒褐色砂礫シルト ロームブロック(厚3cm)合
- 2.5Y4/2灰黄色粘泥砂礫層(厚1cm前後)・粘土合、炭化物粘合
- 2.5Y3/2黒褐色シルト質砂礫 厚~32cmまでの硬合
- 10YR3/1黒褐色砂混シルト薄層(厚1cm前後)を部分的に挟む

図351 B区 S751 断面

第3節 III層耕作段階の遺構

現代水路より西側で第III層のうちⅢ-W-2層を除去後に確認した遺構と、調査区北東部のⅢ-E層を除去後に確認した遺構が該当する。溝状遺構と鋤溝や耕地段差など耕作痕跡を確認した。

S751(図351~353、PL.78・114)

調査区北西部で検出した溝で、南西から北東へほぼ真っ直ぐに延びる。調査区北西部には西側から下る崖があり、溝は崖際の一部を加工して開削されたと考えた。規模は、幅1.0~2.0m、検出面からの深さが0.25m前後で、上流と下流の底面の比高差は0.1m前後ある。なお、この遺構は最大3層に細分できるⅢ層のいずれかに対応するが、調査地点では堆積が収斂していたことから詳細は不明である。

埋土は2つに大別でき、上層は黒褐色(2.5Y3/1)の砂礫を含むシルトを基調とし、下層は粗砂~中砂を主体とする泥質砂礫層である。水口などの明確な痕跡は認められなかったが、溝の東側には水田が形成されたと思われるので、そこに水を供給する用水路と推測した。

埋土からは弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦質土器などが出土した。土師器甕は口縁部がナデ調整されるもの他に、口縁部から体部の内面に横方向のハケ調整を行うものがある。Po708は口縁部の形状から蓋としたが、皿の可能性もある。青磁碗Po718は口縁端部に輪花を有し、内面を工具による分割線がある。太宰府分類の龍泉窯系青磁I-4bと思われる。土師器皿は体部が外反またはやや内湾するものと底部からごく短い体部がほぼ直立するものがある。Po730は須恵器甕の底部で、外面はタタキ目、内面はナデ調整である。

上層埋土から国産陶磁器の細片が出土したことから、遺構の帰属時期は中世後期から近世と考える。

(田中)

調査区北西部の耕作痕跡(図351、PL.77)

J25からK26にかけての範囲で溝状の遺構群を検出した。溝は南東から北西に並行して延びる6条と、これに直交する1条を確認した。埋土はいずれもクロボクを起源とする黒褐色シルトにDKPのブロックを含んだものであった。

遺構群のすぐ東側は崖状に切り立っており、高低差は約1.5mある。遺構群を検出した面ではDKPが露出しており、耕作地を造成するときに大規模な切り土を行ったと推測される。法面の裾には圃場整備前まで使われた溝が掘られており、その下に前身と思われる溝BS139を確認した。BS139の埋土には水成堆積は認められず、用水路とは考えにくい。また、溝群を切ってピットが等間隔に整列した形で検出した。埋土は溝群と類似したDKPのブロックを含む土壌で、作物などを植え込むときに深掘りしたものと考え、畑作を行っていたと推測した。以上の状況から、溝群は植え込み穴よりも古い畑の畝間ではないかと考えた。

遺構の時期は遺物がほとんどないためはっきりしない。(田中)



図352 B区 Ⅲ層耕作段階 遺構平面

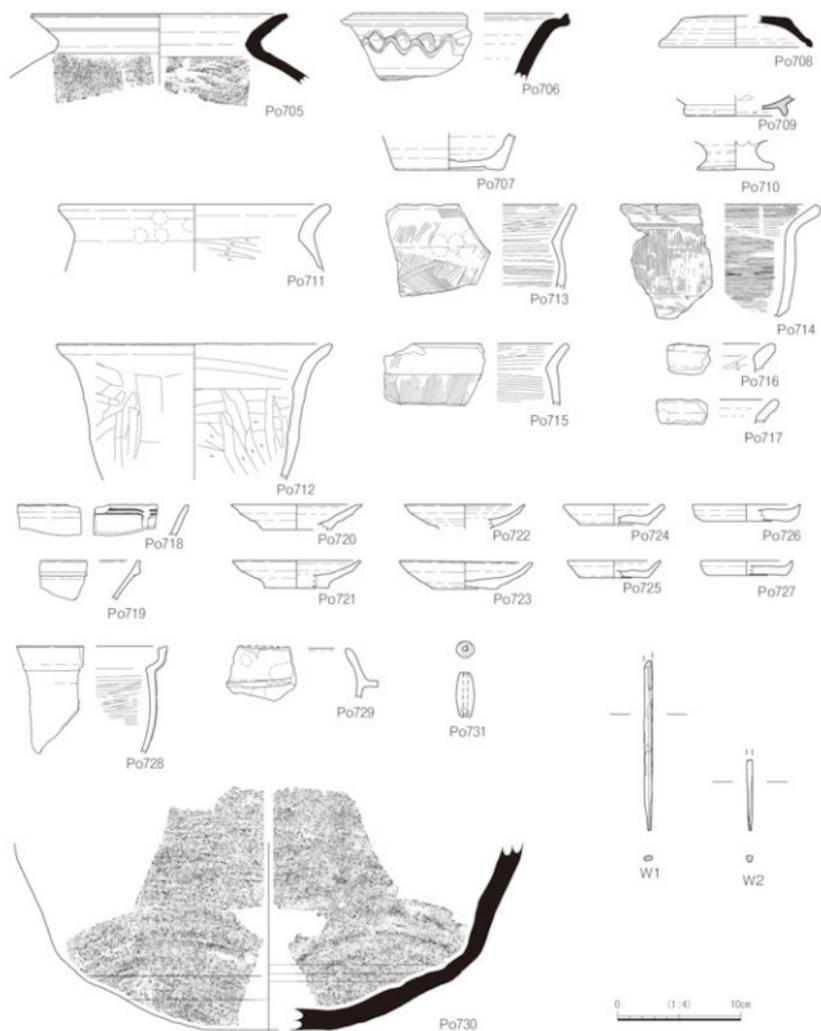


図353 B区 S751 出土遺物

耕地段差・木製構造物BS128(図354、PL.78)

調査区北側中央部で確認した。現地調査の時にはⅢ層下面の遺構として調査を行ったが、調査資料を精査した結果Ⅲ-E-2層に伴う遺構であることが判明した。そのため、Ⅲ層下面で検出した他の遺構よりも新しい段階に構築されたことになる。

段差の高さは0.2m程度あり、段の裾には浅い溝や小穴が認められた。また、上段の縁には丸木が置

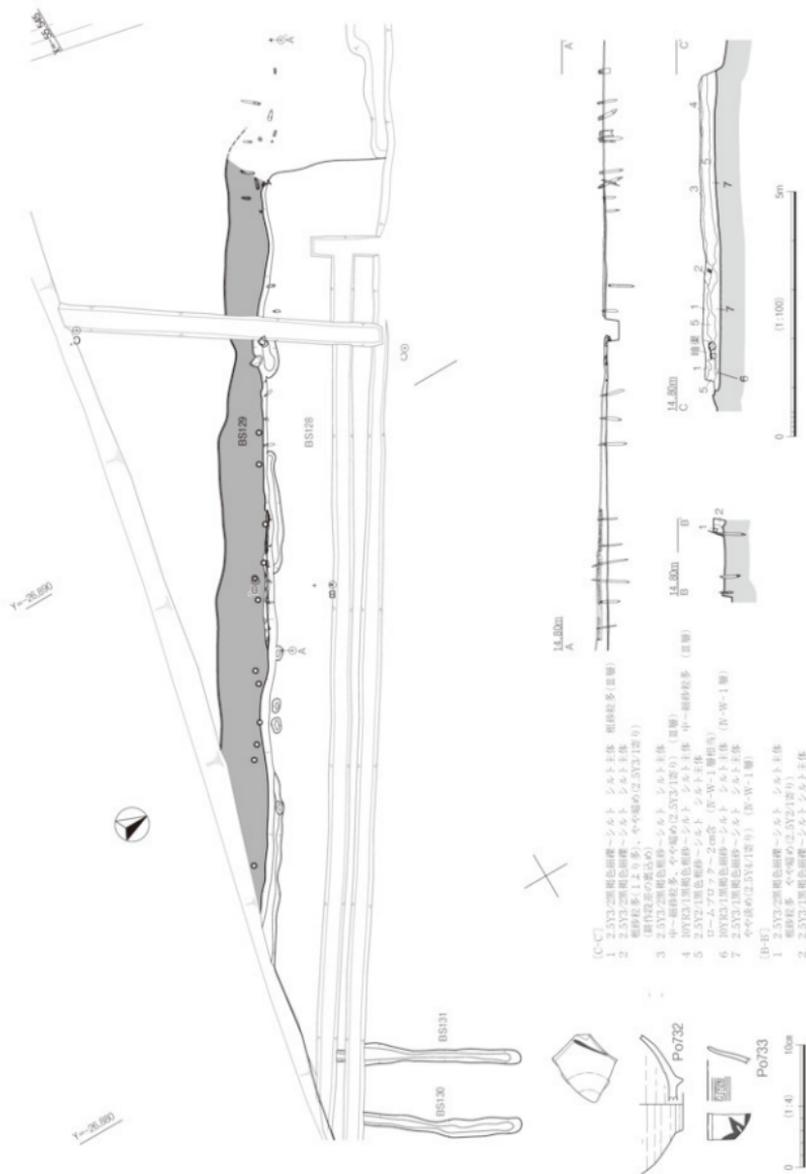


図354 B区 BS128

かれ、丸木の北側に杭が打設した構造物BS128が構築されていた。上段には幅0.8～1.0mの帯状に酸化して赤褐色化した部分(網掛け範囲)がみられ、畔の痕跡と考えた。土層堆積を観察すると、段差付近の堆積が耕作土であるⅢ-W-3層に比べて砂礫を多く含む2層が確認できた。

以上の状況から段の裾に礫を据えて2層を裏込めとして入れるとともに、上段にBS128を構築して畔の裾の土留めとしたと考えた。また、下の段の東側にはBS128の軸から直交する方向に延びる鋤溝BS130、131があり、これらもこの段階の耕作に伴うと思われる。

BS128の裏込め土内から近世後期の陶磁器が出土した。(田中)

耕地区画痕跡(図351)

調査区北東側では、BS128を除去した後に精査したところ、周辺より砂礫を多く含む堆積の筋や砂礫の点在する凹型区画痕跡と、方形の浅い落ち込み状の区画BS143を確認した。

調査区の南東ではⅢ-E-2層を除去する段階でⅣ-E層の高まりを確認した。前述したようにⅢ-E-2層はロームのブロックを含むことから、盛土または耕作を伴わずに調査区の東側にあるAR区やAW区から流入した堆積と考え、確認した高まりがⅣ-E層を耕作した段階の畔と判断して、中世の水田区画として調査を行った。

しかし、調査区北西部の調査で、Ⅲ-E-2層下面で耕作区画痕跡を確認しており、上面にこれに伴う畔を確認できなかった。そのため、Ⅲ-E-2が耕耘された可能性があり、その場合、検出した高まりはⅢ-E-2層の耕作が行われた凸型の区画痕跡となる。

BS3、4、6は調査区内の等高線にはほぼ平行しており、地形に合わせて造られたと考えられる。また、BS1、14、15の南北方向は現代の溝にはほぼ平行する。現代の溝は中世の溝BS42を踏襲して開削されたと考えられるので、南北方向はこうした溝の方向に合わせているとみられる。一方、BS5は他の畔と方向が異なり、幅がやや広い。BS5が大きな区画を区切り、その中を他の細めの畔によって細分した可能性がある。

BS15の南側には南が高くなる段差がある。段差の方向はBS3などとほぼ同じ方向であり、この段差も水田区画に伴うと考えた。

調査区南西側では凹型耕作痕跡を確認した。多くは砂礫の筋状または斑状の広がりとして認識できたもので、砂礫の堆積はごく薄く、Ⅲ-W層の母材がⅣ-W-1層上面にあった踏み込みなどの窪みに入り込んだものと思われる。

また、調査区北東部には不整形の浅い落ち込みBS140があるが、これについても小規模な耕作区画の可能性はある。

耕地区画は現在の溝に平行または垂直に近く、検出面の等高線の方向とも比較的類似していた。また、圃場整備前の水田区画と比較すると、水田の形状は異なるが畔の方向は近い。(田中)

第4節 第IV層耕作段階の遺構

調査区北西部と中央部の溝状遺構と、第IV層の掘り下げ中および第IV層下面で確認した耕作区画痕跡が該当する。なお、図355は凸型耕地区画痕跡の状況を示すために第IV層下面の標高を基にした等高線を表現した。そのため、一部の遺構は図355で示した標高よりも高い面で検出したものがある。

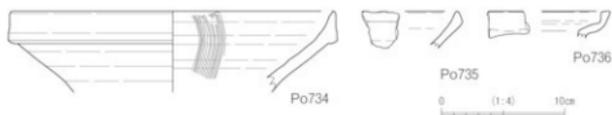


図355 B区 BS42出土遺物

BS42(図355・356)

現代の溝の西岸で確認した溝であるが、ほとんどが現代の溝によって失われていた。確認できたのは調査区の中央付近の西側の肩のみで、BS42は現代の溝の前身となったものと考えた。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)の砂礫で、酸化すると黄橙色に変化する。

埋土からは瓦質土器や備前焼挿鉢が出土しており、中世後期に機能していたと判断した。(田中)

BS45・BS49(図355・357～362、PL115・116)

BS45は調査区北西部の崖の裾に沿うように確認した溝である。溝はS751とほぼ同じ位置にあり、S751はこの溝を踏襲して開削されたものと考えた。遺構の南側はS751によって切られており、東肩の一部だけが確認できた。北側についてはS751が浅かったことから溝の形状が確認できた。残存状況のよい部分で計測すると溝は幅は0.74～1.52m、検出面からの深さ0.10m前後あり、北側19m区間で底面の標高差は0.09mある。

溝の埋土は下層にシルトを主体とした堆積、その上に中砂～細砂を主体とした堆積がみられた。その上にはロームブロックを含む砂混じりのシルトが堆積しており、溝が一度埋まった可能性がある。最上部の崖際付近には再び水流に伴うと思われる砂礫層が堆積していた。

溝に伴う遺構として、東岸の畔状遺構BS49がある。畔は残存状況のよい中央部付近で検出面での上端幅0.98～1.58m、残存する高さが0.2m前後あり、拳大までの円礫を含むシルトを盛って構築されていた。円礫は特に並べたり組んだりした様子は認められなかった。この畔は溝の土手としてだけでなく、IV層が耕作されていた時の水田畦畔を兼ねたようである。

なお、BS45の上面にはIV-W-1層が被覆していた。後述する出土遺物からこの遺構は中世のもので、これに付随するBS49はIV層耕作段階に機能したと判断できた。そのため、調査では確認できなかったが、本来はIV層の中でいくつかの段階があり、これらの遺構がその中でも古い段階に伴うと考えることができる。

BS45からは弥生時代から中世の遺物が多数出土した。

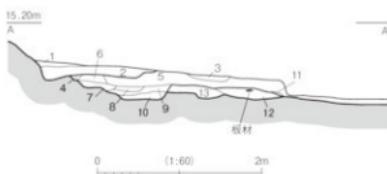
古代の土器はV層あるいは下層にあるBS171やBS203に伴うものであろう。Po741は底部切り離しがへら切り未調整で、体部の外傾が緩やかである。V層でも同様の皿が多く出土した。内面に漆が付着したPo762・763も古代の土器である。

溝が機能した段階と考える中世の遺物には土師器、須恵器、瓦質土器、白磁がある。Po743は手づくね成形の土師器皿で、底部内面に板状工具による調整痕がみられる。須恵器鉢(Po747～749)は口縁端部が拡張されずにほぼ直立しており、Po748には片口が作られていた。Po750～752は土師器甕で、内面には主に横方向のハケ調整が顕著である。瓦質土器鍋は口縁が内湾しつつ外傾するPo753と受け口状になるPo754・755がある。瓦質土器羽釜Po756～759は鉤がほぼ水平に延びるものが多いが、Po759のように鉤がやや上方向に傾くものもみられた。

一方、BS49からは古代を中心とした土器や木製品が出土した。これらも多くはV層またはV層下面



図356 B区 IV層耕作段階 遺構平面



- | | |
|---|---|
| 1 3PYK3-1黒褐色細粒～シルト(シルト主体) 中～細砂粒多 (B-W層) | 9 2.5Y3-2黒色中粒～細砂(中砂～細砂主体) (BS45) |
| 2 2.5Y3-1黒褐色細粒～シルト(粗砂～中砂主体) (S75) | 10 3PYK2-3黒色細粒～シルト(シルト主体) (BS45) |
| 3 3PYK3-1黒褐色細粒～細砂(粗砂～中砂主体) | 11 2.5Y3-1黒褐色中粒～細砂(中～細砂主体) |
| 4 2.5Y3-1黒褐色細粒～シルト(シルト主体) (B-W-1層) | 12 2.5Y3-1黒褐色中粒～シルト(シルト主体) (BS49) |
| 5 2.5Y3-1黒褐色細粒～シルト(シルト主体) 中～細砂粒多 (B-W-1層) | 13 3PYK4-1褐色細粒～シルト(シルト主体) 中～細砂粒多 (BS49) |
| 6 2.5Y3-1黒褐色細粒～シルト(シルト主体) ロームブロック(厚～10cm)含 (B-W-1層) | |
| 7 2.5Y3-1黒褐色細粒～細砂(中砂～細砂主体) 炭酸化 (7.5YK3-4暗褐色) (BS45) | |
| 8 2.5Y3-1黒褐色細粒～シルト(シルト主体) ロームブロック(厚～5cm)含(BS45) | |

図357 B区 BS45・49 断面

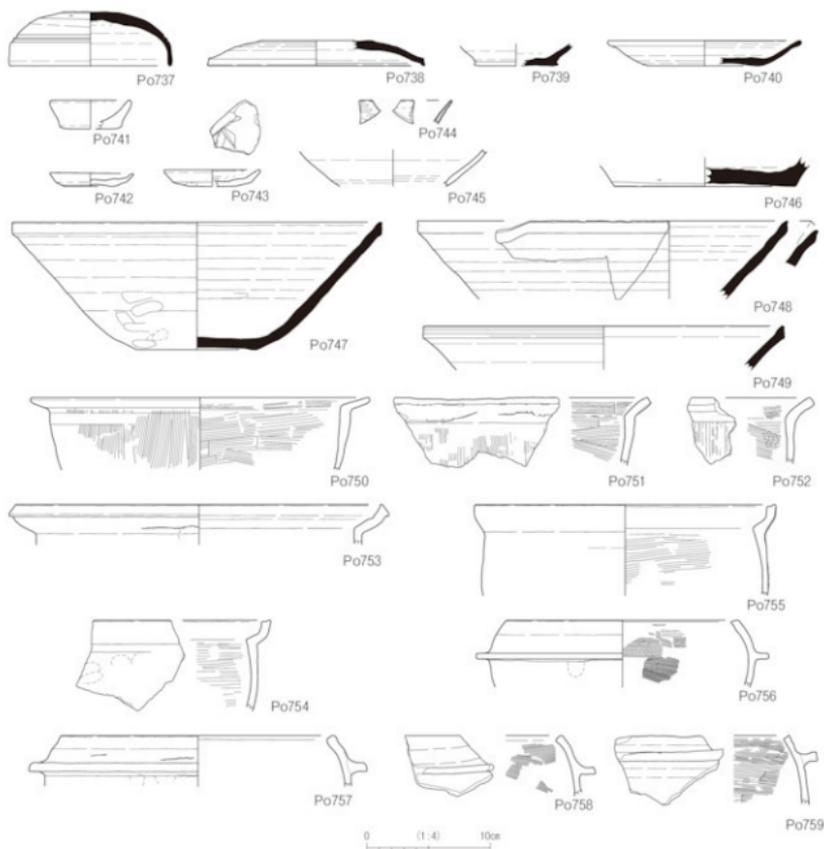
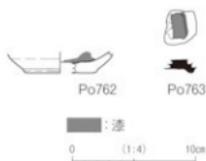
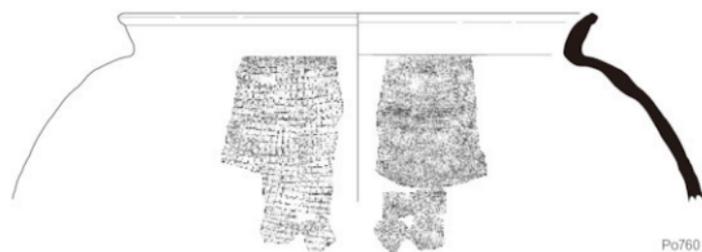
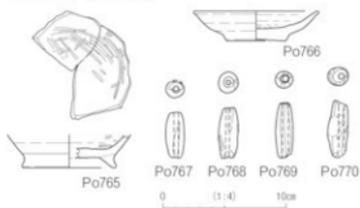
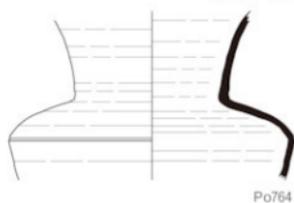


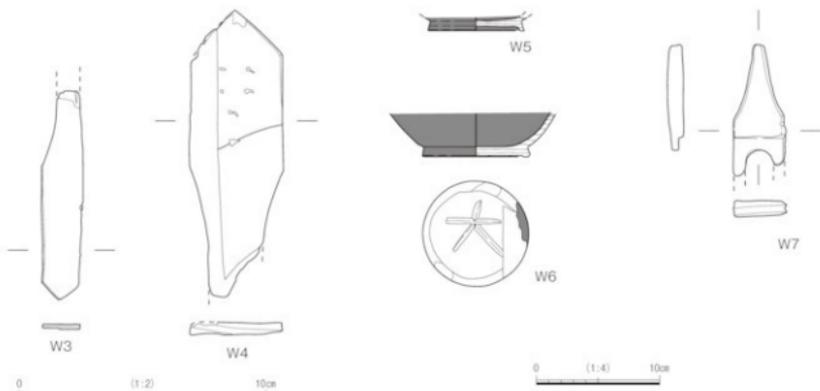
図358 B区 BS45出土遺物(1)



Po761
図359 B区 BS45出土遺物(2)



Po764
図360 B区 BS49出土土器



W3 W4 W5 W6 W7
図361 B区 BS49出土木製品(1)

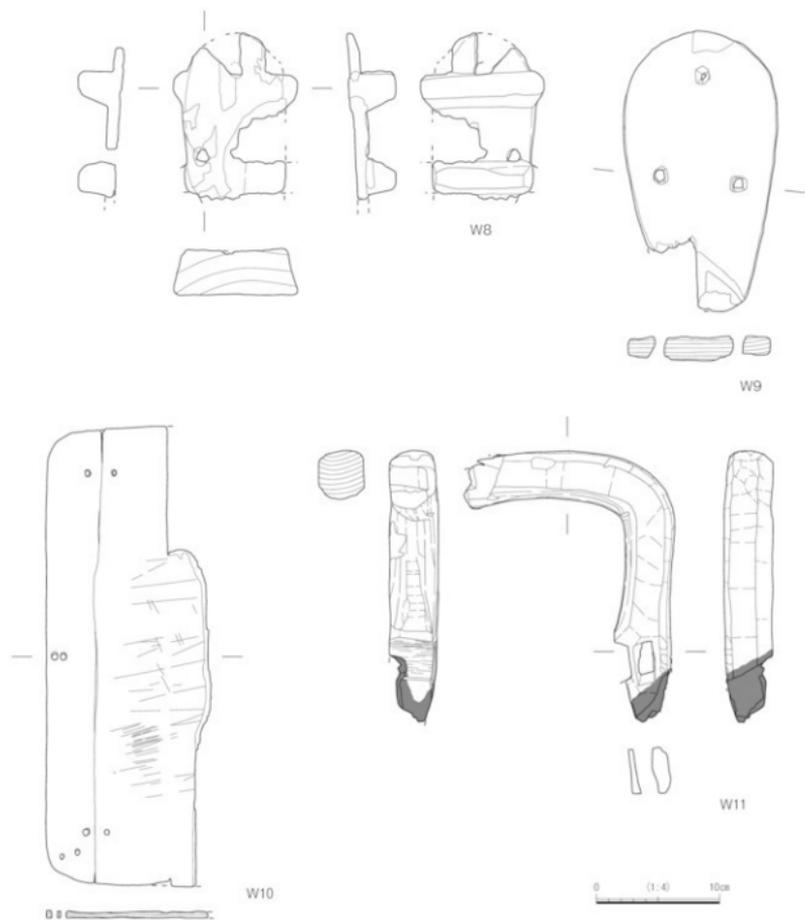


図362 B区 BS49出土木製品(2)

の遺構に伴うものとする。須恵器壺Po764は口頭部が大きく外反しており、同様の器形のものがBS203で出土している。木製品は木製祭祀具(刀形代W3、人形代W4)、漆器碗W5・6、糸巻W7、下駄W8、田下駄W9、折敷W10、把手状の不明木製品W11がある。W6の底部外面には「大」と陰刻される。W11は直角に近い角度で曲がる把手状の木製品である。両端とも欠損するが、片側の端はやや太くなりほぞ孔と切り欠き加工が確認でき、反対側の端にもほぞ孔の痕跡が残ることから同様の加工があった可能性がある。

出土遺物から中世前期に機能した遺構と判断しておきたい。(田中)

耕作区画痕跡(図355・363・364、PL.79)

調査区南側を除くほぼ全域で確認でき、主に第IV層下面の凸状の区画痕跡や段差で構成される。

調査区北西部では砂礫が他よりも多く含む堆積が低く凸状となる箇所があり、これを畦畔の痕跡と判断した。畦畔はBS45の東側に溝と平行または垂直に造り、長方形に区画したことが確認できた。

これらの区画痕跡の南側、平成24年度調査地の西側では、畦畔の芯材と見られる石・加工木を検出した(PL80)。周辺を精査したところ、部分的に周辺よりも砂礫を多く含む畦畔の盛土を検出し、下端の幅が0.87~1.22mあったことが確認できた。

畦畔の東側で、芯材と同じ方向に人頭大前後の礫が分布する石群1を検出し、その東側で拳大前後の礫を中心として長径0.44mまでの礫が密集する石群5箇所(石群2~石群6)を検出した。石群1は、畦畔の延長上に同じ方向で見られることから、畦畔の芯を構成するものであったと考えられる。石群2は、その南端が畦畔・石群1のほぼ延長上にあり、かつ畦畔・石群1と北側に直角にのびることから、関連のある石群と推定される。石群4・石群5・石群6は、南西~北東方向に帯状に分布し、関連のある石群と考えられ、畦畔の芯材(またはその残骸)と推定できる。あるいは、これらの石群、特に石群6は畦畔としては幅が広く、かつこれらの石群を境として東側では、上位の水田耕作土が見られず、別の土が堆積することから、西側の水田耕作に伴い耕作土中に含まれていた不要な石を耕作地の外に集積したものであるとも推定できる。

調査区南西側の耕作区画の多くはIV層が耕作された段階にV-W-1層が削り残された凸類である。段差は地形に沿う形で南が高く北が低いものと、溝状遺構BS42がある東側が低く西側が高いものを確認した。南北方向の段差の方向はN-60°-W前後のものが多い。東西方位の段差は南北方向の段差に直交するもの他、南側で確認したものではN-5°-E前後のものもみられる。

段差に伴う畦畔痕跡はV-W層が削り残されたものの他に、BS42から供給された砂礫の堆積が削り残されたもの(BS79、80、81)がある。畦畔痕跡の方向は多くが南北方向の段差の方向軸と一致する。

段差と方向が一致しない畦畔痕跡として北側中央のBS87、89と南西部のBS21がある。これらは他の畦畔痕跡と異なり幅が広く、この上を人が歩くことを意図した大畦畔の痕跡と思われる。BS21とBS87はほぼ並行しており、調査区北西部の区画の方向に近い。前述したように、北西部の区画はBS45の方向を基準に区画されており、調査区の西側にある崖の方向に規制されたものと言える。

調査区北東側では、V-W-1層が削り残された凸状の痕跡が確認でき、方向は南西側の南北方向の段差の方向軸とほぼ一致する。I30にある窪み状の耕作区画痕跡BS159では西側の区画線が他の区画とは異なる方向となる。この区画線の方向は西側にあるBS45を基準とした区画軸に沿うもので、I30付近で2つの区画軸が混在するようである。

平成24年度調査区の東側では明確な区画痕跡が確認できなかった。この辺りにはIV-W-2層が堆積しており、水田耕作が行われなかった可能性がある。

水田に伴うその他の遺構として溝状遺構のBS43がある。BS43はX=-55.560ライン付近で検出した東西方向の溝で、北側にある耕作区画痕跡BS28の裾に沿うように延びていた。埋土はIV-W-1層に類似したシルトを主体とした単層で、IV層が耕作されていた段階に開削した溝と考えた。溝は水田区画の低位側に開削されていたことになり、埋土に水が流れた痕跡がみられなかった。そのため、水田耕作に関わる施設と推測するものの、用水路とは考えにくく、用途については不明である。(荒川・田中)

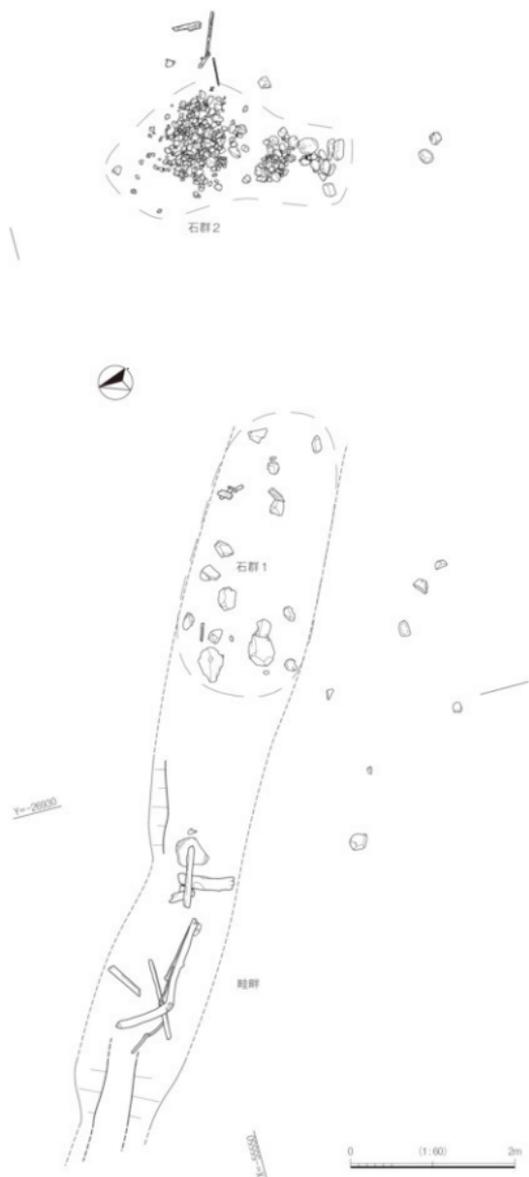


図363 B区 畦畔芯材 石群1・2



図364 B区 石群2～6



第5節 V層耕作段階の遺構

溝状遺構と耕作区画痕跡、土坑を確認した。図365では凸状耕地区画痕跡の状況を示すために、第V層下面の標高を基にした等高線を表現した。そのため、一部の遺構は図365で示した標高よりも高い面で検出したものがある。V層や遺構から出土した遺物から、ここで示した遺構群は10世紀から12世紀頃に機能したと考えた。

BS20(図365～367)

IV層下面で検出した溝状遺構で、調査区の南側中央から北東隅に延びる。大きく2段階に分けることができる。

新段階は、南西から北東方向へほぼ真っ直ぐに進み、調査区中央で東に折れ曲がり、約10m先で再び北東方向へ向くように折れ曲がる。折れ曲がった部分の北と南では溝の方向はほぼ同じで、溝を約3m東へ平行に移動させるために屈曲させたと考えられる。埋土には葉理がみられる砂礫層があることから、機能段階に水流があったことが分かる。

古段階は新段階の西側で西岸の肩を確認しており、新段階よりもやや西寄りに造られたと考えた。溝の位置は新段階と大きくは変わらないが、調査区の南端辺りで西に屈曲する箇所がある。埋土は砂粒が少ないシルト主体の堆積が多いが、葉理が見られる層があるので新段階同様に機能段階は水が流れていたことが分かる。

埋土からは古代までの土師器や須恵器とともに中世の瓦質土器や白磁碗、漆器、五輪(水輪)が出土したが量は少ない。

土師器皿は底部から内湾して立ち上がるPo773と直線的に外傾するPo774がある。Po779の瓦質土器鍋は口縁内面が明瞭な受け口状を呈するのに対し、外面は全体に丸みを帯びる。漆器W12は底部の細片で器種は不明である。漆の残りは良くないが全面に黒漆を施した後に赤漆で絵付けしたと思われる。水輪S77は一部に工具で彫られたと思われる筋状の凹みが見られた。

出土した遺物からは12～13世紀頃に機能した可能性が高いが、遺構が掘り込まれていたV層では中世の遺物がほとんど出土しない。そのため、機能した段階の土壌がすべてIV層の耕作で失われたと考ええる。(田中)

S835(図365・369～372, PL.79・80・116)

調査区北西部の第IV層下面で検出した溝状遺構である。溝は調査区西側のやや北寄りから南西～北東方向に進み、北側で西に向かって曲がる。I32では南岸側が浅くなり、2段階掘りの形状になっていた。遺構の幅は上流に当たるBS76で0.8～1.3m程度、下流側は3.0m程度と開くが、これは浅くなっている部分を含めたもので深くなる部分だけで見ると2m前後で上流側と大きく変わらない。検出面のIV層下面からの深さは上流側で0.25m前後、下流側で0.35m前後ある。

埋土はほとんどは黒灰色～黄灰色(10YR～2.5Y3/1)のシルトを主体とした堆積である。埋土の底面付近で葉理が認められたので水流があったことが分かるが、この層は薄いものなので、一時的なものだった可能性がある。

埋土からは土師器、須恵器、黒色土器、馬形代が出土した。図369は上流側のBS76から、図370～372は下流側で出土したものである。

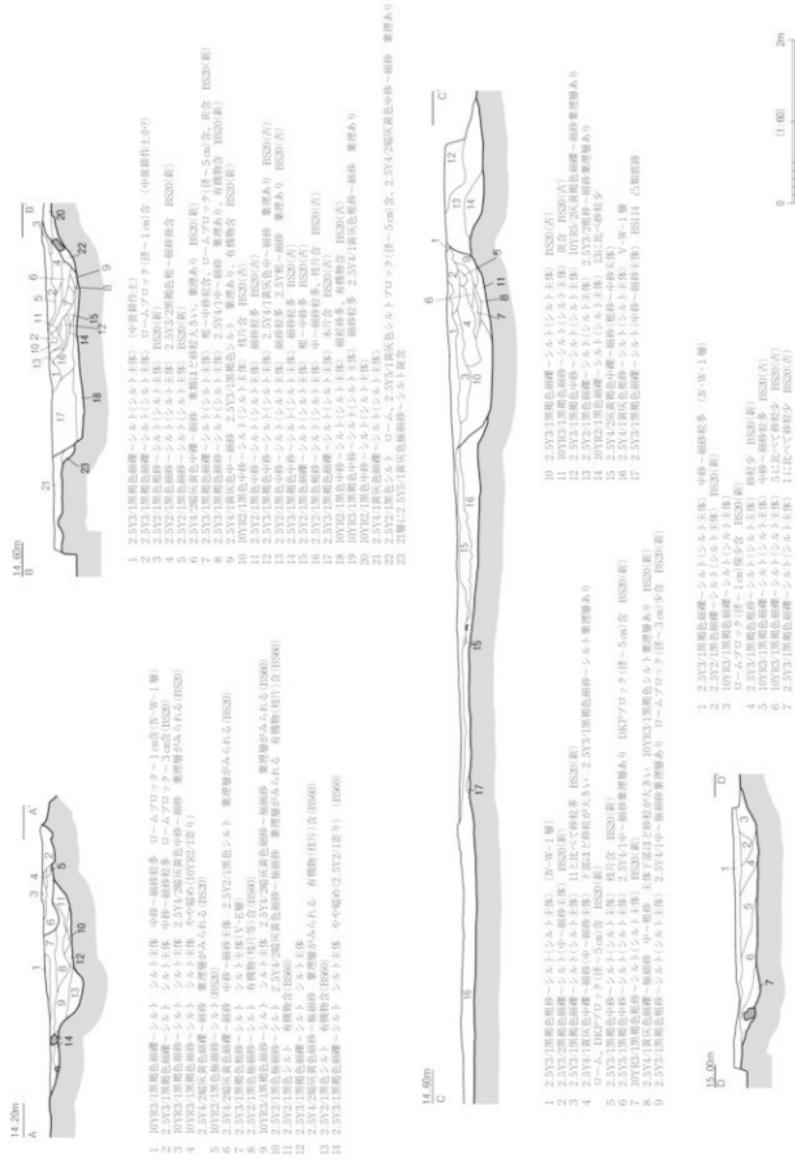


図366 B区 BS20・60 断面

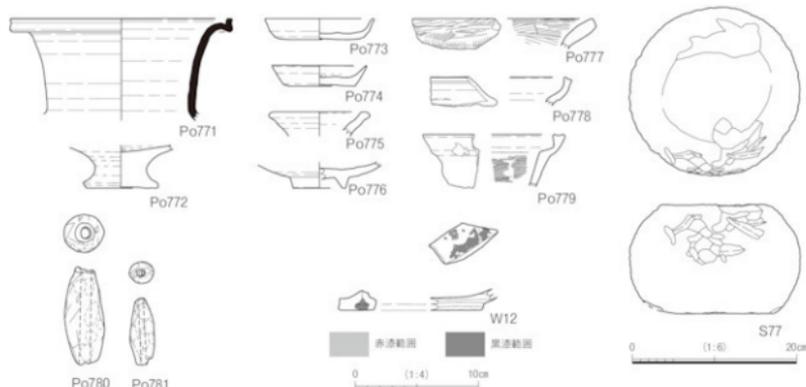


図367 B区 BS20 出土遺物

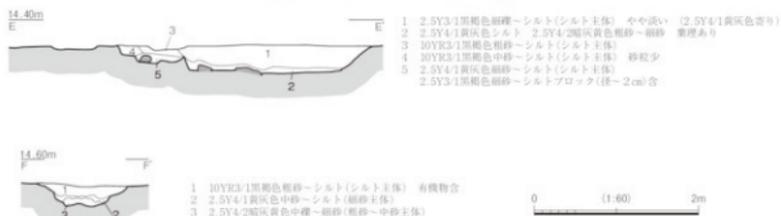


図368 B区 S835・BS76 断面

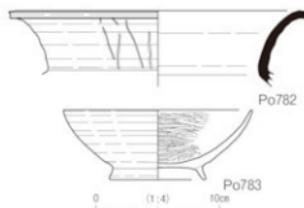


図369 B区 BS76 出土遺物

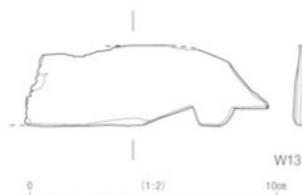


図370 B区 S835 出土木製品

BS76で出土した遺物として2点図化した。須恵器甕Po782は外面に数本の筋状の凹みがある。黒色土師器Po783は回転台整形した坏に高めの高台を貼り付けており、内面のミガキはためである。

次にS835で出土遺物について記述する。土師器高台坏Po784の坏部は底部からの立ち上がりやや丸みを帯び、体部は直線的に外傾しており、高台は高めである。土師器坏Po786は底部の立ち上がりが丸みを帯び、体部は直線的に外傾するが、Po784の坏部に比べて器高が高く、須恵器坏の器形に近い。Po788～790はJ32の底面付近で出土したほぼ完形の土師器坏で、平高台状の底部で体部が内湾する。祭祀などの何らかの行為に伴うものと思われる。Po792は内面に漆が付着する。Po794は底部外面がハケ調整される。土師器甕は口縁部が長いPo798と短いPo799・800があり、外傾の度合いはゆるめである。

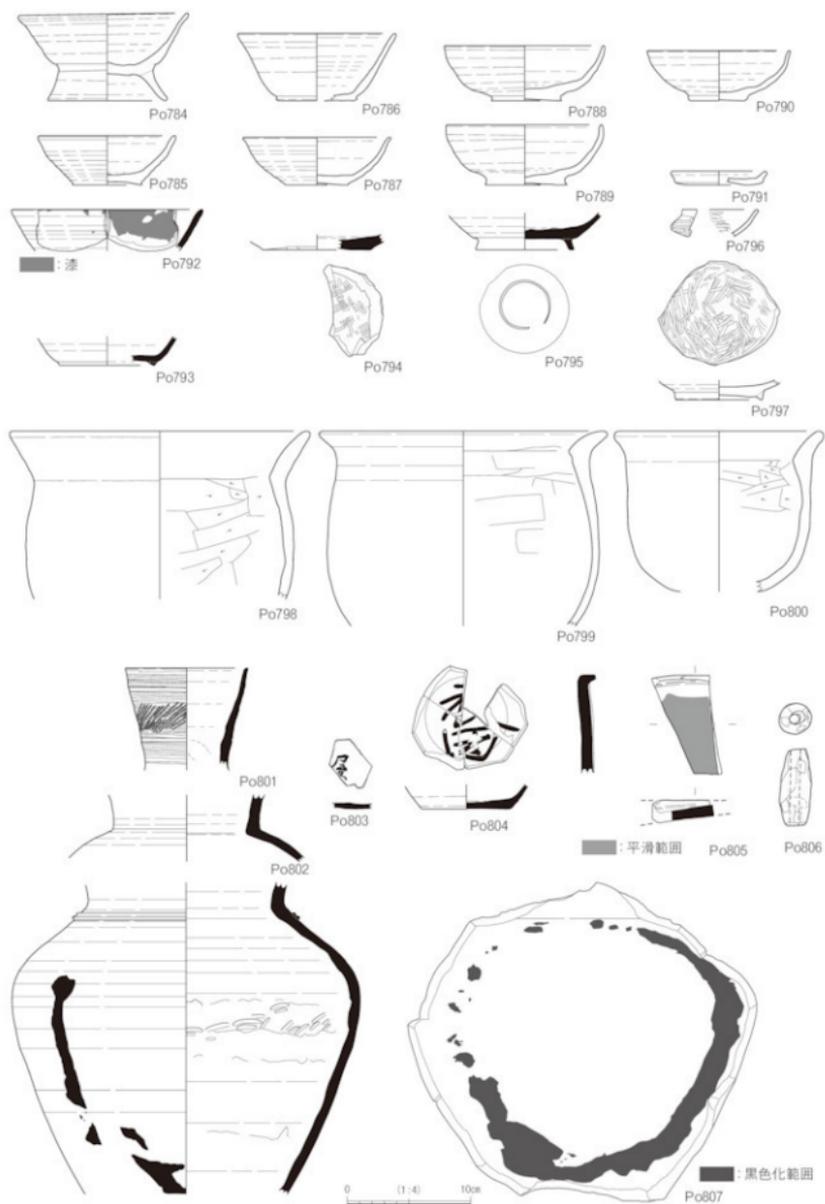


図371 B区 S835 出土土器

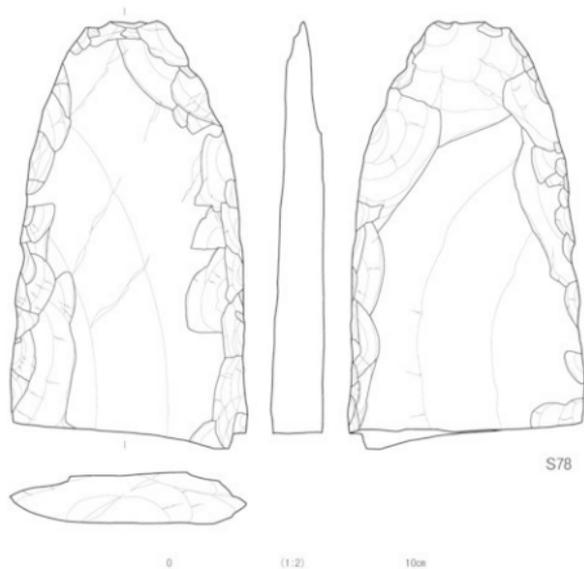


図372 B区 S835 出土石器

文字関係資料として墨書土器2点と陶硯がある。墨書土器はいずれも須恵器の底部内面に文字が書かれていた。書かれた文字はPo803が「屋」、Po804は「□田」で上の文字は「衣」の可能性がある。

Po807は溝の南岸付近で出土した須恵器壺の体部である。外面には破面付近に縦方向の粗い墨線があり、故意に壺を半割りにしたものを溝に据えた可能性がある。内面には帯状に黒色化する。

遺構の時期と関連しないが、遺構埋土から出土した石器を1点図化した。S78は大型の安山岩製石鋏で刃部を欠く。横形で板状の剥片を素材にしている。

出土遺物から平安時代中頃でもやや新しい段階に機能していたと考える。(田中)

耕地区画痕跡(図365・373～377)

第V層下面で検出したもので、大きく2つの方向軸の区画痕跡が混在していた。

1つはN-5°-E前後の南北線とこれに直交する東西線による区画(以下「A群」)である。この中で調査区北側中央にある畦畔痕跡BS162、174、183は後述する溝状遺構S834の上面にあり、畦畔はS834の方向を踏襲する形で造られていた。A群の区画はこのうちBS162の方向に一致しており、水田構築前にあったS834が埋没後にその方向に合わせて造成されたと考えた。S834の最終形態は途中で北寄りに屈曲しており、BS174とBS183はこれに方向を合わせて造られているため、BS162と方位が異なる。そのため、BS173、183やそれらと並行する構築区画痕跡は、S834を基準とした区画である点でA群と同じ原理でできた区画軸となる。

もう1つはN-30°-40°-Eの南北線とこれに直交する東西線による区画(以下「B群」)である。この区画軸は、水田耕作が行われた頃に機能したと考える溝状遺構BS20の方向にほぼ並行または直交し、溝状遺構を基準にB群の水田区画が行われた可能性が高い。



図373 B区 BS162 土器出土状況

調査区中央部ではB群の方向軸で長方形に区画された水田がA群の方向軸の畔によって細分されるようになっていた。長方形の区画をわざわざ三角形に細分するのは不自然で、すべてが同時に併存したと考えるのは難しいと考えた。前述したように、A群の区画軸は水田造成以前の溝状遺構が基準となっており、B群は水田耕作時に機能したと考える溝状遺構が基準となっている。また第IV層下面で確認した耕地区画痕跡はB群に近い区画軸が主体で、これに若干A群に類似する区画軸が混在する。2つの区画軸の区画痕跡の前後関係を示す切り合い関係などは現地調査で確認できず、水田構築前後の状況のみからの推測だが、当初はA群の区画軸で水田が構築され、その後B群の区画軸による整備が行われ、区画が改変されつつ一部でA群の区画が残されたと考えた。

水田区画は方形を基本とし、東西と南北の長さに極端な差がないものが大半であるが、調査区北東部の区画では東西に極端に長い区画で構成されていた。中にはBS181のような溝状遺構と捉えるべき



図374 B区 BS66・83・84・85

ものもあり、これらが耕作区画だったかは疑問が残る。

ほとんどの区画痕跡は主に第V層の耕作で下面にある第VI層や遺構埋土などが削り残された凸形の痕跡と段差であるが、調査区北側のBS162では溝の埋土である砂礫を盛り上げて畦畔としており、調査区南東では畦畔の芯材と思われる礫群(BS66、BS84、BS85)を確認できた。

BS162(図373、PL.81) J28からJ31にかけて延びる水田畦畔の痕跡で、前述したようにS834の直上に造られたものである。盛り上がっている部分の堆積を観察すると、砂礫にシルトが斑状に含む箇所があることから、遺構の一部はS834の上層に堆積したシルト葉理層を含む砂礫を溝のほぼ中央に盛ったと考えた。

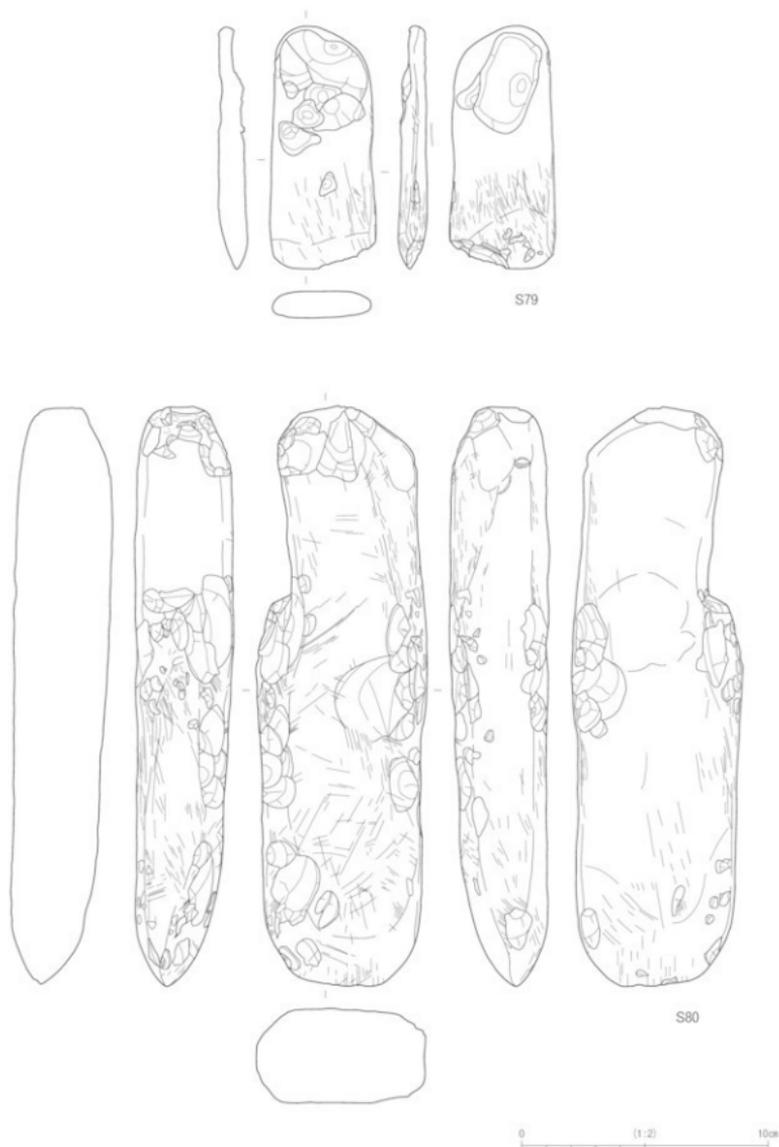


図375 B区 BS66 出土石器(1)

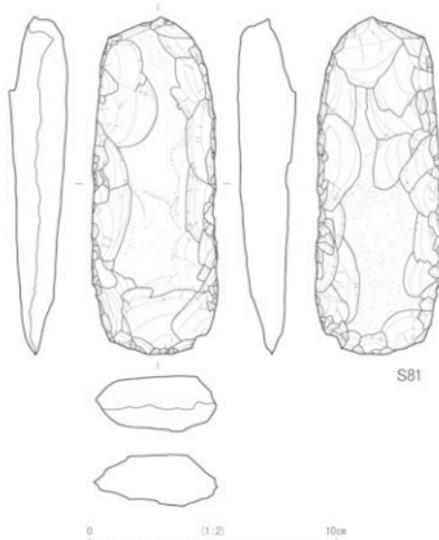


図376 B区 BS66 出土石器(2)

掘り下げていくと、西端辺りで土師器甕が出土した。甕は口縁部を下にし、その上に体部の破片が乗る形で検出された。出土状況から、完形の甕を伏せた状態で据え、その上を盛土で覆って畔を構築したもので、水田造成に際して行った地鎮祭祀に伴うと考えた。甕の中からは遺物は出土しておらず、中に供物などを入れていたとしても有機物だったとみられる。

なお、J33のS834上面のV層中から土師器甕の破片がまとまって出土しており、明瞭な水田区画痕跡は確認できなかったが、同様の地鎮祭祀が行われた可能性がある。

また、J30のBS162の南側に細い溝状遺構BS170を検出した。この溝は畦畔痕跡に沿って掘られており、畦畔痕跡が途切れた水口につながっていた。上位にある南側の水田から北側へ水を流す為に掘られたものであろう。

BS66(図374～376、PL.88・117) O30で検出したA群の区画軸に沿う遺構で、人頭大までの礫が5.4mの長さで帯状に延びていた。幅は南側3.7mの部分で1.0m程度あり礫も密に見られるが、北側は石がまばらで幅は0.4m程度に細くなる。帯状の礫群の東側には、ほぼ垂直に派生する礫群が2本ある。北側のものは幅0.8m程度で、区画段差の裾にほぼ沿っていた。本体ほどではないものの礫が比較的密に据えられていた。南側のものは拳大程度の礫が1列並んでいた。区画段差の上端に近く、これも畦畔の芯材の可能性はある。

出土遺物として、積まれた礫に含まれていた石斧と石銚を図化した。S79は扁平石斧で基部付近に被熱による剥離が認められ、刃部にある使用時と思われる剥離は片側に偏る。S80は長軸が長い両刃石斧で、側面や基部に研磨前の剥離面が多数残る。S81は安山岩製の石銚で、扁平礫を素材とし主に周辺加工で整形する。

BS84(図374、PL.88) O29で検出したA群の区画軸に沿う遺構で、周辺よりも0.1m高い筋状の高ま

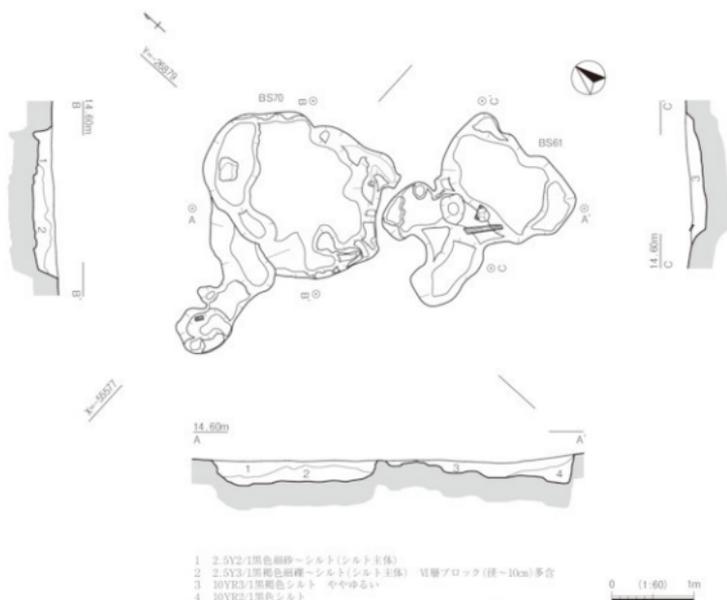


図377 B区 BS61・70 平面・断面

りの上に拳大までを主体とした礫が2.2mの長さで帯状に延びていた。礫群の幅は0.2~0.3mで、礫はややまばらながら、砂礫を主体としたものが礫群と同じ範囲で広がっていた。IV層は砂礫をあまり含まない堆積で、砂礫を主体としたものは遺構構築時に伴うものあるいはV層の母材と考えた。

BS85(図374, PL.88) N29で検出した遺構で、拳大のものを中心に人頭大までの礫が幅1.0m程度、長さ2.4m程度の範囲で広がっていた。図化していないが、礫群の南側にはⅦ層の礫が露出しており、東側にも長さ1.2m程度、幅0.7m程度の小規模な礫群があった。中心となる礫群と東側の礫群との間に礫のない空間があるが、Ⅶ層の礫と東の礫群が近接していることから、これらを含めて1つの遺構と捉え、A群の南北軸に沿う本体の礫群とその東側に派生する区画の痕跡と考えた。

礫はややまばらであるが、中心となる礫群の南側は小さな礫が密集する箇所がある。密集部分の礫上面は高さが比較的揃っており、少なくともこの部分については人為的に構築されたと考えている。

このほか、N29には卵大程度の礫が散在する箇所(BS83)があり、これも耕作区画に伴う構造物の残骸の可能性もある。また調査区西側にも3箇所で拳大までの礫が露出するが、周辺の凸類耕地痕跡との連続性が見だしにくい。

これらの耕地痕跡は、V層やS835が機能していた10世紀頃には耕作され、第IV層やBS20から出土する遺物から中世前期頃まで利用された可能性がある。

なお、V層について植物珪酸体分析を行った結果、調査区中央の試料(B区南)ではイネの植物珪酸体が2000個/g前後含むのに対し、調査区北側の試料(B区北)では検出されていない。ただ、北側のV層試料は花粉などの化石の保存状況が良くないため、遺構の状況から考えるとイネの植物珪酸体についても同様に残らなかった可能性が高いと思われる。(田中)

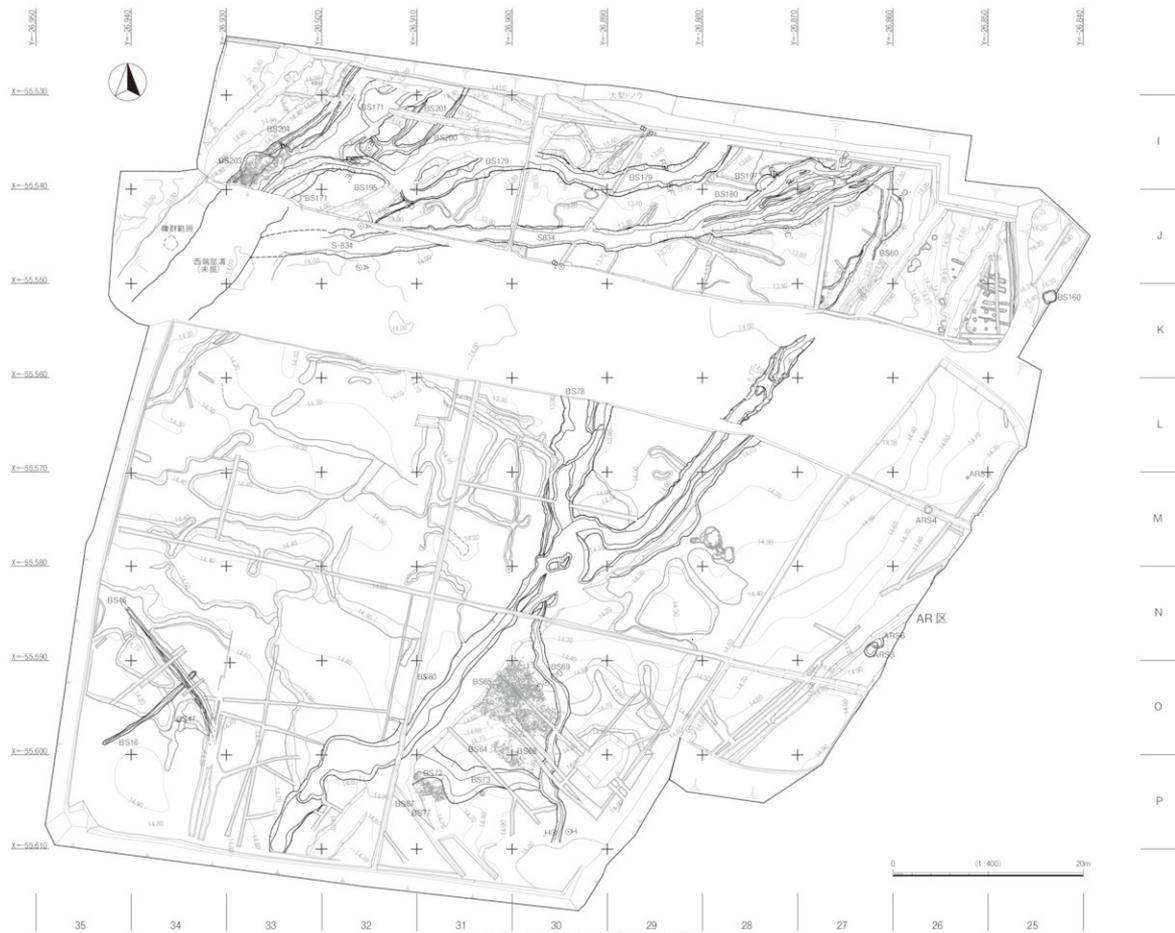


図378 B区 V層耕作以前 遺構平面

BS61、BS70(図377)

M28のV層下面で隣り合って検出した土坑である。埋土が上面のV-E層に類似することから、第V層堆積後に掘削されたと判断した。

BS70は検出時の平面形は長径1.20m、短径0.95mの不整形で、検出面からの深さは0.32mあり、底面は凹凸がある。壁面も凹凸が見られ、一部は土坑の上端よりも外側まで掘られていた箇所も認められた。

土坑はⅧ層上面付近まで掘られており、Ⅷ層にはほとんど掘り込まれていない。これは意図的にⅧ層のみを掘削していることを示しており、Ⅵ層のシルトを採取するための土坑と判断した。

埋土は上下2層に分割でき、下層は上層に比べて色調が薄く、Ⅵ層のブロックが含まれていた。

BS61は検出時の平面形は長径1.12m、短径0.84mの不整形で、検出面からの深さは0.33mあり、底面は凹凸があり、東側が1段深くなる。

土坑は深い東側ではⅧ層上面付近まで掘られていたが、西側はⅥ層の途中までしか掘られていなかった。BS70と同様に粘土を採取した土坑の可能性があるが、掘削が中途半端な感がある。

埋土は上下2層に分割でき、上層は下層に比べてしまりがゆるい。

BS70の埋土からは黒色土器の底部片が出土しており、平安時代以降の土坑と判断した。(田中)

第6節 V層耕作以前の遺構

第V層下面で検出した遺構のうち、第V層の耕作以前に造られたと推測した遺構群で、溝状遺構と木造の水利施設、礫敷状遺構を確認した。

溝状遺構**S834(図378～389、PL.83・117・118)**

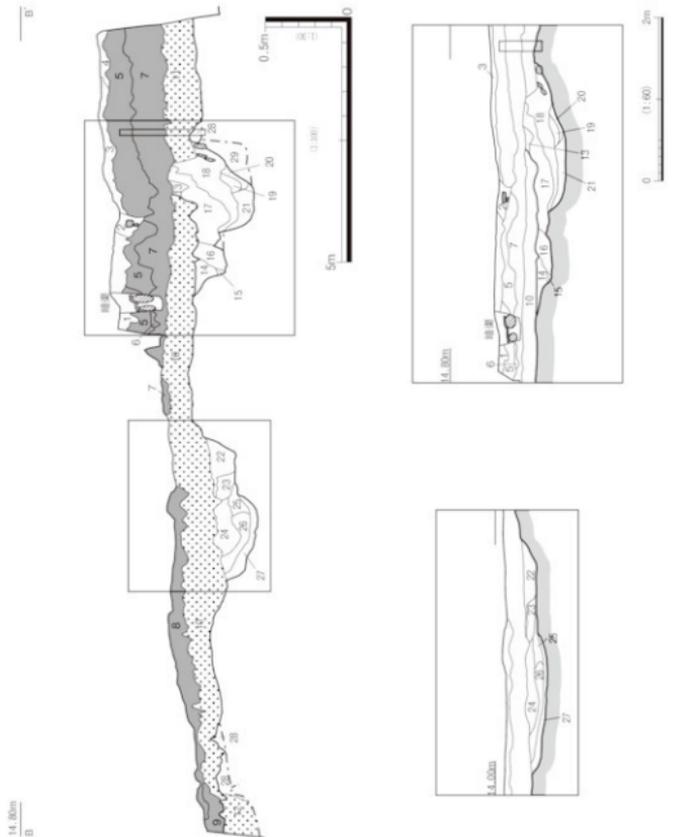
調査区西側中央辺りから北東隅辺りへ延びる溝状遺構である。

溝は調査区西側から北北東方向へやや蛇行しながら進み、K33で直角に近い角度で東北東方向へ向きを変え、ほぼ真直ぐ40m程進む。I27～J28では溝は3段階の変化をしていた。最初は北側に蛇行している(第1段階、BS180)が、次の段階では蛇行している両端を直線で結ぶ形(第2段階)となり、最終的には上流から真直ぐになるようにして途中で北に屈曲させる形(第3段階)となる(図381)。溝の西側では大きな形の変化はないものの、埋土の堆積状況から埋積後北側に開削し直されることが数回あったことが確認でき、東側の変化と対応するとみられる。前述したように、第3段階の上面には第V層耕作時に畦畔が構築され、耕地区画の一部がこの溝の方向を基準としており、耕地造成する以前からこの溝が土地の境界となっていた可能性がある。

なお、第2段階の北岸側付近には人頭大程度までの礫が点在しており、第1段階から付け替えた時に行われた護岸の部材の一部と考えた。

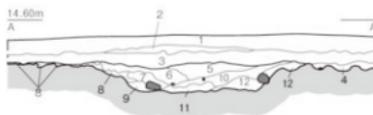
埋土からは弥生土器・土師器・須恵器・木製品・加工木が出土した。

図382・383は土器を掲載した。土師器環Po809は回転台を用いずにつくられたもので、内外面とも赤彩される。須恵器高台杯Po811はやや扁平な杯の底部のやや内側に高台を貼り付けており、高台は内端部のみが接地する。Po812はほぼ完形の須恵器高台杯で底部外面に墨書で「下」と書かれる。墨



- 1 2.537.2埋蔵色面砂-シルト主体 埋砂が多(埋-W層)
- 2 2.537.2埋蔵色面砂-シルト主体 埋砂が多(埋-W層)
- 3 2.537.2埋蔵色面砂-シルト主体 埋砂が多(埋-W層)
- 4 埋蔵層がみられる(埋-W層)
- 5 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 6 埋蔵層がみられる(埋-W層)
- 7 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 8 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 9 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 10 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 11 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 12 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 13 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 14 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 15 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 16 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 17 2.537.2埋蔵色面砂-シルト主体
- 18 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 19 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 20 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 21 埋蔵層がみられる(埋-W層)
- 22 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 23 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 24 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 25 埋蔵層がみられる(埋-W層)
- 26 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 27 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 28 2.537.1埋蔵色面砂-シルト主体
- 29 埋蔵層がみられる(埋-W層)
- 30 埋蔵層がみられる(埋-W層)

図379 B区 S834・BS197 断面

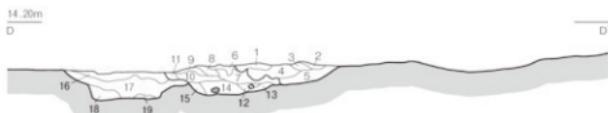


- 1 10YR3/2黒褐色砂礫混シルト 10YR5/3に多い黄褐色シルトブロック(厚~1.5cm)含 植物遺体・炭化物粒含(V-W-1層)
- 2 10YR3/2黒褐色シルト 10YR5/3に多い黄褐色シルトブロック(厚~1.5cm)含(H-W-1層)
- 3 10YR3/1黒褐色砂礫混シルト 10YR5/3に多い黄褐色シルトブロック(厚~1.5cm)含 植物遺体・炭化物粒含(V-W-2層)
- 4 2.5Y3/2黒褐色砂礫混シルト(V-W-2層)
- 5 10YR2/1黒褐色シルト 2.5Y3/1黄灰色砂礫(細礫)の薄層・2.5Y3/1黄灰色砂礫含 植物遺体・炭化物粒含
- 6 2.5Y3/1黒褐色シルト 2.5Y3/1黄灰色砂礫(細礫)・8層の底上含、植物遺体含
- 7 6層と同じで、含まれる砂礫・8層の底上多い。
- 8 10YR3/1黒褐色無細砂粘土質シルト 基盤層含、炭化物植物遺体含
- 9 2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト 基盤層・2.5Y3/1黄灰色砂礫含、炭化物粒含
- 10 5層と類似し、砂礫は状況に含まれる。貫層ブロック(厚~7cm)含、植物遺体含
- 11 2.5Y3/2黒褐色黄砂・2.5Y3/2黒褐色シルトの重層の互層
- 12 2.5Y4/1黄灰色砂礫粘土質シルト・2.5Y3/1黄灰色砂礫(細礫)底上含

砂礫は特に記載がなければ径8mm(粒の中程)まで



- 1 2.5Y3/1黒褐色細礫-シルト シルト主体 中砂-細砂粒多、やや浅め(2.5Y4/1寄り)(V-8層)
- 2 2.5Y5/2暗灰色細礫-細砂 粗砂-中砂主体 整理あり(第3段階)
- 3 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 中砂-細砂主体 下部ほど粗い 整理あり(第3段階)
- 4 2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト シルト主体 やや赤みを帯びる(10YR2/1寄り)
- 5 中-細砂粒多 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられる(第3段階)
- 6 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 中砂-細砂主体 2.5Y2/1黒色シルト 整理層がみられる(第3段階)
- 7 2.5Y4/2暗灰色細砂-無細砂 中砂-細砂主体 整理あり(第3段階)
- 8 2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト シルト主体 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂ブロック(厚~2cm)含(第3段階)
- 9 2.5Y2/1黒色無細砂-シルト 2.5Y4/2暗灰色中砂-無細砂 整理層がみられる(第3段階)
- 10 2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト 砂粒少 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂ブロック(厚~3cm)含(第3段階)
- 11 2.5Y2/1黒色無細砂-シルト(第3段階)
- 12 10YR2/1黒色無細砂-シルト(第2段階)
- 13 10YR3/1黒褐色細砂-シルト 砂粒少(第2段階)
- 14 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト シルト主体 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられるロームブロック(厚2cm)含(第2段階)
- 15 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 砂粒少 やや浅め(2.5Y4/1寄り) (第2段階)
- 16 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 砂粒少(第2段階)
- 17 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルトと2.5Y5/1黄灰色無細砂-シルトの混土(第2段階)
- 18 10YR3/1黒褐色中砂-シルト 砂粒少 2.5Y4/2暗灰色中砂-無細砂 整理層がみられる(第2段階)
- 19 2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト 細砂-無細砂主体 2.5Y4/2暗灰色細砂-細砂 整理層がみられる(第1段階)
- 20 2.5Y2/1黒色無細砂-シルト 無細砂-シルト主体 (第1段階)
- 21 2.5Y2/1黒色無細砂-シルト 砂粒少 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂ブロック(厚~5cm)または混含(第1段階)
- 22 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト シルト主体 同色の中砂-無細砂が状況にみられる2.5Y5/2暗灰色細礫-シルトブロック~2cm含(第1段階)
- 23 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 粗砂-中砂主体(第1段階)
- 24 10YR3/1黒褐色細砂-シルト シルト主体(第1段階)
- 25 2.5Y3/2暗灰色細礫-細砂 中砂-細砂主体 2.5Y2/1黒色細砂-シルトブロック~2cm含(第1段階)
- 26 10YR2/1黒色細砂-シルト シルト主体(第1段階)
- 27 2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト 無細砂-シルト主体(BS197)



- 1 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 粗砂-中砂主体(第3段階)
- 2 10YR2/1黒色シルト 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられる(第3段階)
- 3 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 中砂-細砂主体 2.5Y2/1黒色シルト 整理層がみられる(第3段階)
- 4 2.5Y3/1黒褐色中砂-シルト シルト主体 粗砂粒多 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられる(第3段階)
- 5 2.5Y4/1黄灰色中砂-シルト 細砂-無細砂主体
- 6 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられる ロームブロック~2cm含(第3段階)
- 7 2.5Y4/1黄灰色細砂-シルト シルト主体 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられる(第2段階)
- 8 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 砂粒少(第2段階)
- 9 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 中砂-細砂主体(第2段階)
- 10 2.5Y3/2暗褐色細砂-シルト シルト主体 粗砂粒多(第2段階)
- 11 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 細砂主体 2.5Y3/1黒褐色シルト 整理層がみられる ロームブロック~3cm含(第2段階)
- 12 2.5Y4/1黄灰色中砂-シルト シルト主体 粗砂粒多(第2段階)
- 13 2.5Y4/1黄灰色中砂-シルト シルト主体 粗砂粒多(第2段階)
- 14 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト シルト主体 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられる(第2段階)
- 15 2.5Y3/1黒褐色細砂-細砂 シルト主体 中砂-細砂粒多(第2段階)
- 16 10YR2/1黒褐色細砂-シルト シルト主体 10YR2/1黒色シルトブロック~3cm含(第1段階)
- 17 2.5Y3/1黒褐色細砂-シルト 細砂-無細砂主体
- 18 2.5Y4/2暗灰色細礫-細砂 整理層がみられる 2.5Y2/1黒色シルトブロック~2cm含(第1段階)
- 19 10YR3/1黒褐色細砂-シルト シルト主体 2.5Y4/2暗灰色細礫 整理層がみられる (第1段階)

図380 B区 S834 断面

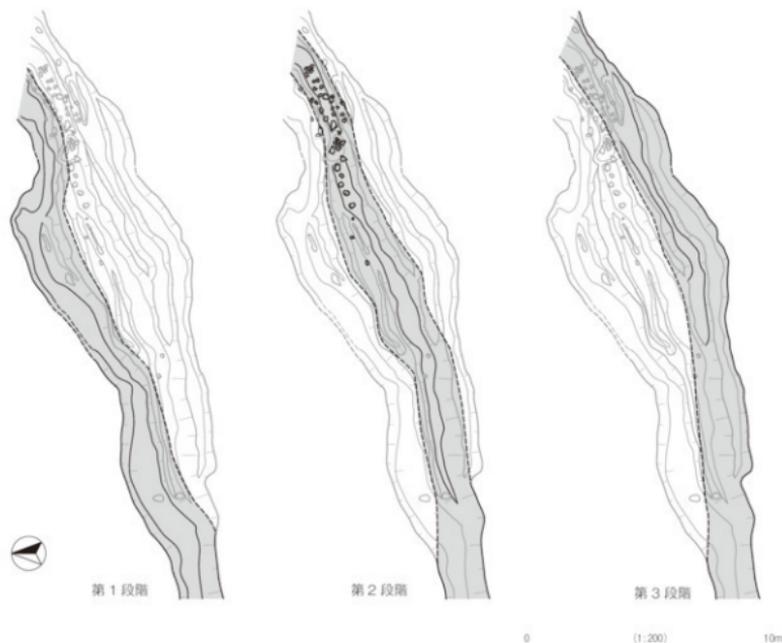


図381 B区 S834 北東部の変遷

書土器はこの他に体部外面に書かれたPo813や底部内面に書かれたPo814がある。須恵器甕は比較的小型のPo818や大型のPo819が出土した。須恵器壺Po821は体部に対してためて外反する頸部が付くものである。土師器甕Po823～832は大型品から小型品まで各種出土しており、口縁部の屈曲が明瞭で外傾の度合いが急なものが多い。

図384は石器である。S82はスクレーパーと思われ、剥片の2辺に調整がおこなれる。S83は打製石斧と思われるが、完成したものかどうかは不明である。

図385には大型の木材を掲載した。多くは板材でW18には長方形の孔が開けられる。

図386は斎車で、下端部はほとんどが板の両側を切って尖らせたものである。W20は数少ない上端部で、両側面に上下からの切り込みが複数ある。W27は両側面に細かい切り欠きが複数ある。図387は馬形代でいずれも鞍の表現が見られない。W32・34・35には下側に切り込みがある。図388は人形代、刀形代と祭祀具の可能性がある木製品を掲載した。W41・42は大型品と思われるもので、W42には工具の切り込みで顔が表現される。W45は下側を尖らせたもので、両側面に手を表現した切り込みの痕跡が残る。W46は両側面に手を表現した切り込みがあり、下側が欠損する。これらの木製祭祀具は遺構内に散在する形で見つかったことから調査区外の溝の上流で祭祀行為が行われて流れ込んだと考える。

図389はその他の木製品を掲載した。W50は漆器の刳物で、内外面に工具の加工によって出来た平らな面が確認できる。W51は羽子板状の板材の両側面に細かい切り欠きが多数ある。W54は紡錘と思われる、円盤の中央に孔があげられていて軸と思われる材が残る。W55は板材に孔があげられていて著状木

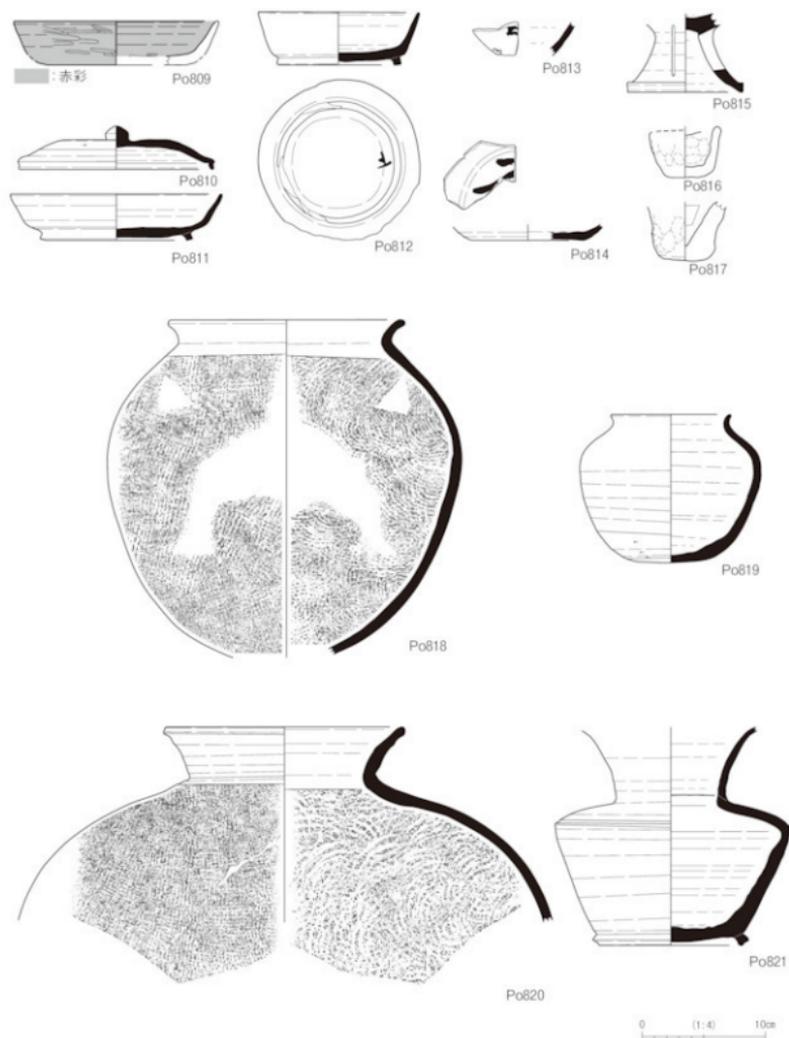


図382 B区 S834 出土土器(1)

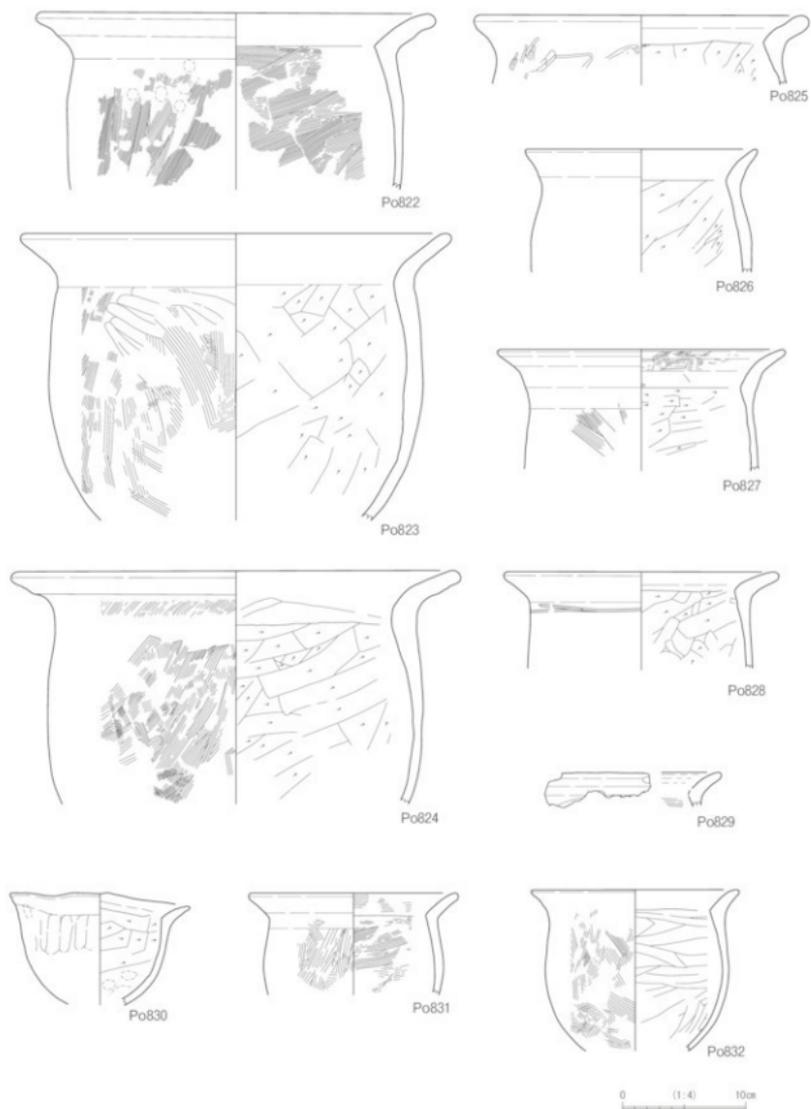


図383 B区 S834 出土土器(2)

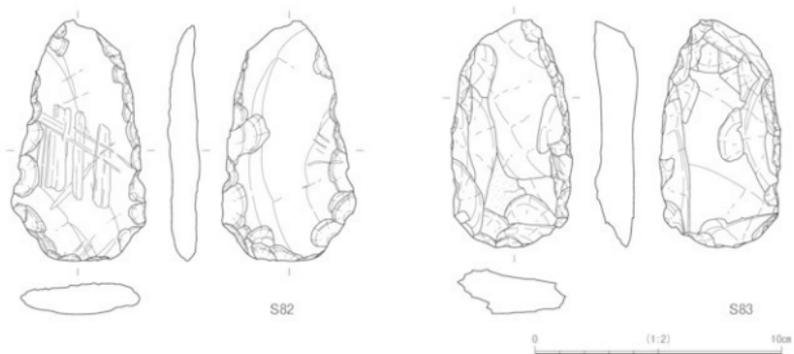


図384 B区 S834 出土石器

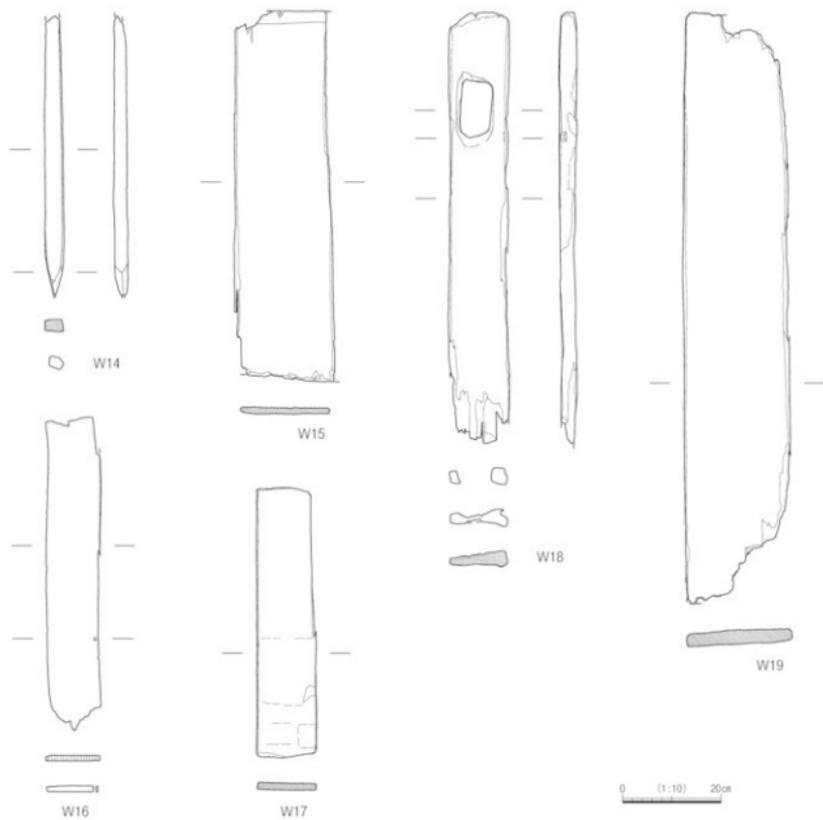


図385 B区 S834 出土大型木材

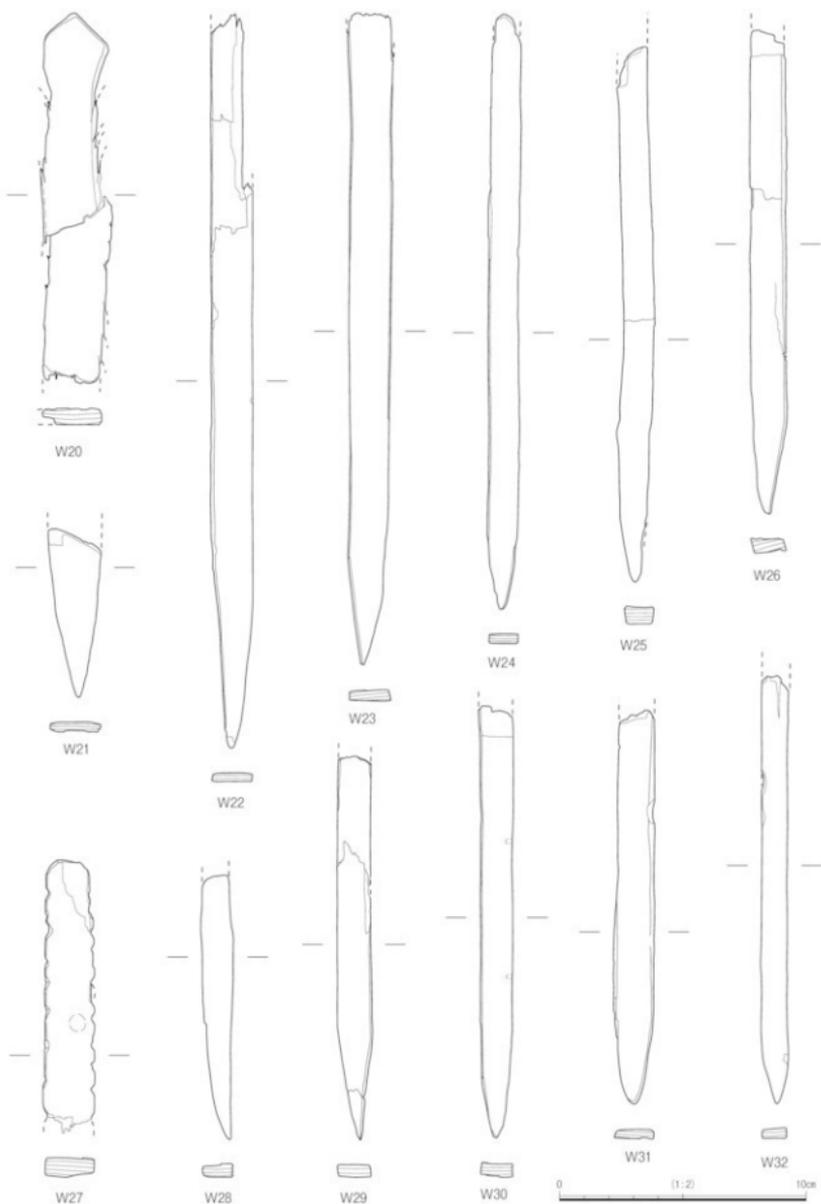


図386 B区 S834 出土斎串

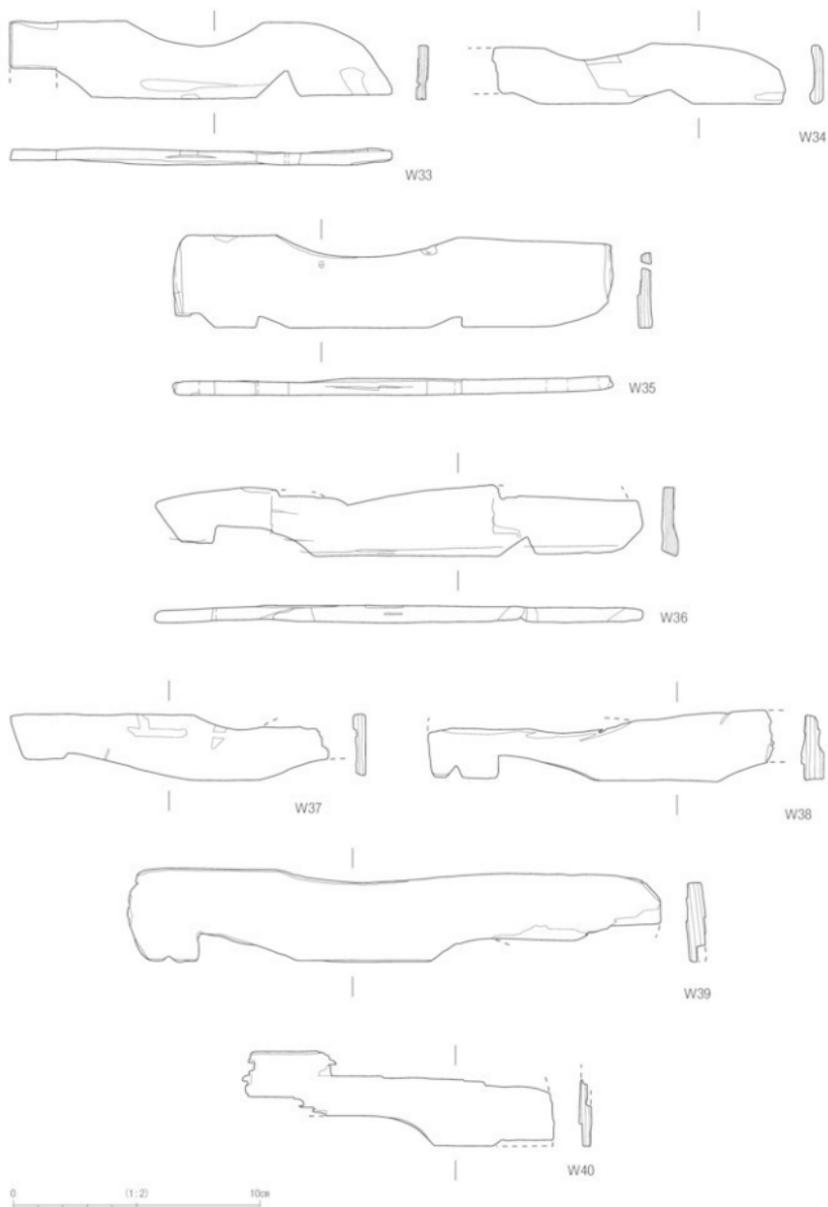


図387 B区 S834 出土馬形代

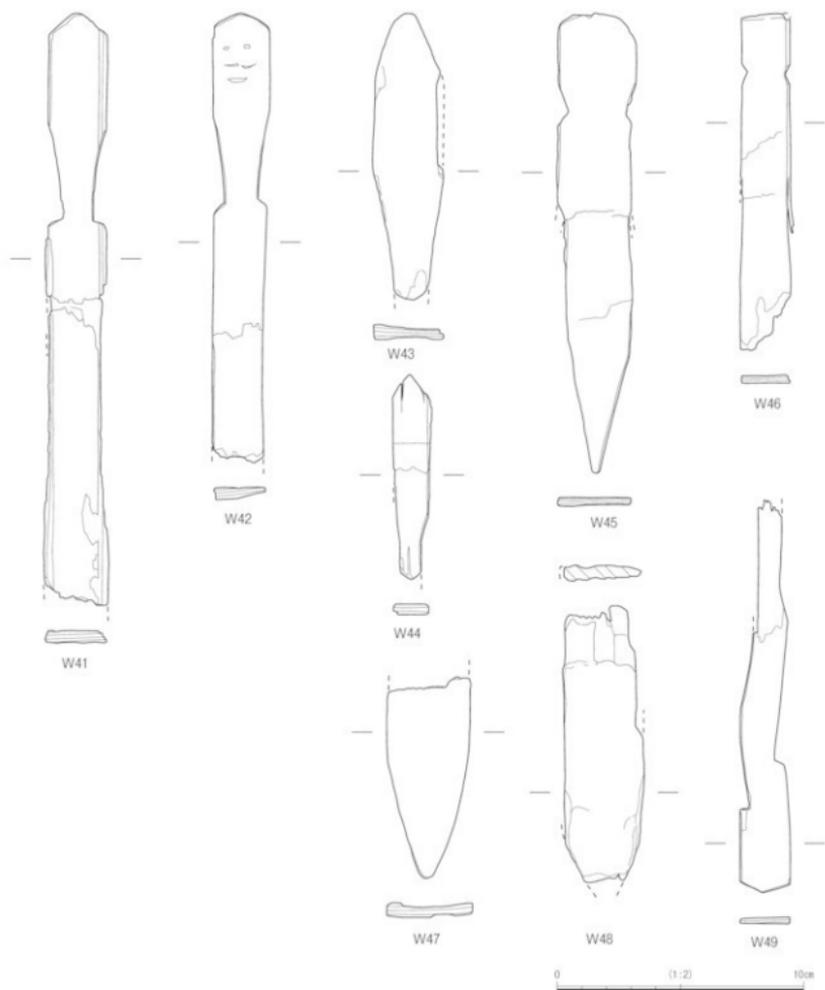


図388 B区 S834 出土人形代・刀形代他

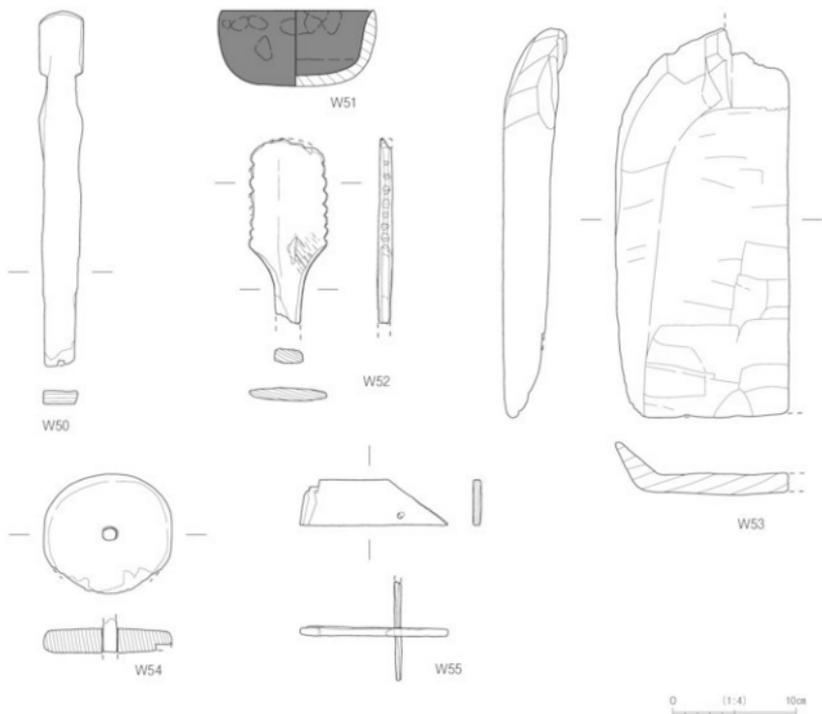


図389 B区 S834 出土木製品

製品が差し込まれている。W53はアカトリと考えるが、掏う部分が浅く確証に欠く。材質は樹種同定でスギと判明している。

出土した土器は奈良時代までのものであるが、木製祭祀具については平安時代になる可能性があるものが含まれており、IV層が機能した時期を考慮すると、遺構が機能したのは奈良時代から平安時代前期と考えておきたい。(田中)

BS60(図366・378)

第V層耕作段階の溝状遺構BS20の前身となったもので、BS20同様に調査区南側中央から北東方向へ延びるが、調査区北端辺りで座標北に近い向きに変わる。調査区北端ではかなり浅くなり、V層段階の耕作によって形状が不明瞭となるが、S834と合流すると考えた。BS20と比べて直線的ではなく、調査区南側と北東部で大きく蛇行する状況が確認できるので、自然流路の可能性が高いと考えた。遺構はBS20や現代の溝と大部分が重複しており、東側の底面からの立ち上がりと西岸の一部が残る程度である。

埋土が確認できる調査区北側ではシルトが主体で中砂～細砂の葉理層がみられる。

埋土からは若干の遺物が出土したが、中世の遺物が含まれていた。上層のBS20の遺物が混入したと思われる、これらの遺物が遺構の時期を示すものではないと判断した。そのため、遺構の時期は不明で

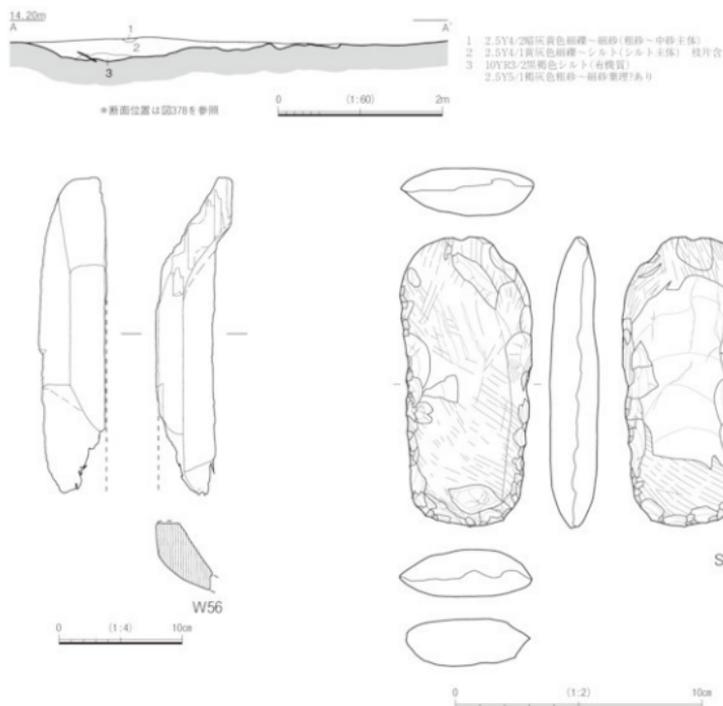


図390 B区 BS78

ある。(田中)

BS78(図378・390)

調査区中央のL30、M30で検出した遺構である。調査区の中央でBS60の西岸から分岐するように伸びていたが、北側でこれに対応するものが確認できなかった。そのため、恒常的な溝ではなくBS60からあふれた水が一時的に流れた痕跡と判断した。

遺構の幅は最大で5m程度、深さが0.3m程度あり、底面は東側が溝状にやや深くなる。埋土は大半がシルトを主体として細礫や枝片を含む堆積で、底面の深くなっている部分には有機質を多く含むシルトに砂の葉理層がはいる堆積がみられる。

遺構内から出土した遺物として盤と思われるW56と磨製石斧を図化した。S84は緑色片岩製の磨製石斧で、両端に刃部を設ける。片面の中央部を除いて大半を研磨するが、全体に雑な作りである。特に、本来の刃部である幅広側の端部は刃縁にくぼみがあって、使用された痕跡に乏しい。幅狭側の端部には刃こぼれとみられる小さな剥離面が集まるので、こちらを使用したのであろう。

遺構の時期を特定出来る遺物は出土しなかった。(田中)

BS86(図378)

調査区の中央北寄り付近で検出した溝または流路である。大半は現代の溝と重複しており、現代の溝の東側で東岸が確認できた。BS60との関連がはっきりしないため別の遺構としたが、BS60の形状が後世の遺構によって分からなくなっていた部分なので、流路の東岸の可能性も考えられる。

埋土はシルトを主体としたもので、砂粒はあまり含まれなかった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。(田中)

BS171(図390～410、PL84～86・119・120)

調査区北西部で検出した溝状遺構である。溝は調査区北西部を南西から北東へ比較的真っ直ぐに進み、調査区北端辺りで東に曲がっていた。溝は調査区西側の崖または斜面の裾付近に造られており、西岸は東岸よりも0.4m程度高い。溝の規模は幅が4.3～5.0m、東岸からの深さが0.47～0.53m、溝の北側17m分で底部の高低差が0.17mある。溝の北側では後述する堰と護岸施設と考える木製構造物が構築されていた。

溝の底面付近では砂礫を主体とした層があるが、木製構造物がある辺りでは兩岸の裾付近にしか見られない。おそらく、木製構造物が機能していた段階で浚渫を行ったとみており、浚渫した砂の一部を構造物を被覆する盛土として利用したのではないかと考えた。砂礫層の上には中砂～細砂の葉理層のあるシルト主体の層が堆積していた。

シルト主体の層が堆積した後、I33で東へ曲がってBS179へ流れが変わるが、その一方でBS179の北側で水成の砂礫が堆積する箇所があり、その上には細砂の葉理層のあるシルト主体の堆積が再びみられた。調査時においても降雨後に基盤層から水が湧くことが度々あり、他の所よりも湿った状態になりやすかった。そのため、BS179に流れが変わった後も、BS171北側には湧水などで水が流れていたと推測し、S834に付け替えられた後の南側も湿潤な状況であったと考えた。埋土上層からは奈良時代から平安時代の土器が出土しているが、V層から混入した可能性があるため、いつごろまで窪み状であったかは不明である。礫敷状遺構BS203はこの段階に構築されたかと推測した。

BS171内木製構造物

溝の北側で検出した木材と樹皮を用いて構築された構造物で、南側の流路の護岸施設と北側の堰に分けられる。

南側構造物(図394)

流路の西岸を護岸するために構築された構造物で、多数の建茶部材や梯子の破材、板材、丸木を置き、その東側に杭を打設して固定したと考える。構造物の分布範囲は南北7.4m、東西1.4～2.2mある。部材を固定する杭のうち、北側の杭はやや東に傾くものの立った状態で検出したが、南側のものは倒れており、最も南側の杭はほぼ水平な状態で出土した。そのため、特に南側の構造物については構造物が壊れた時に東側に移動したと考えた。また、北側の丸木の中に裂けて直角に折れ曲がったものがあり、構造物に大きな力が加わって壊れたと思われる。

構造物の南側で土層堆積を観察する(図393C-C')と、構造物は流路の水成堆積(13層)の上にある。これらの材は構造物が壊れたときに移動した可能性が高く、13層は構造物が機能していた段階の堆積の可能性がある。また、13層の下にも水成堆積の砂礫層(14層)があるが、構造物の下にも同様の堆積を確認できたところがあり、構造物は少なくとも14層堆積後に構築されたかと推測した。

13層の上には基盤層ブロックを主体とする7層がある。基盤層ブロックの量に差があるものの、構



図391 B区 BS171・195 平面

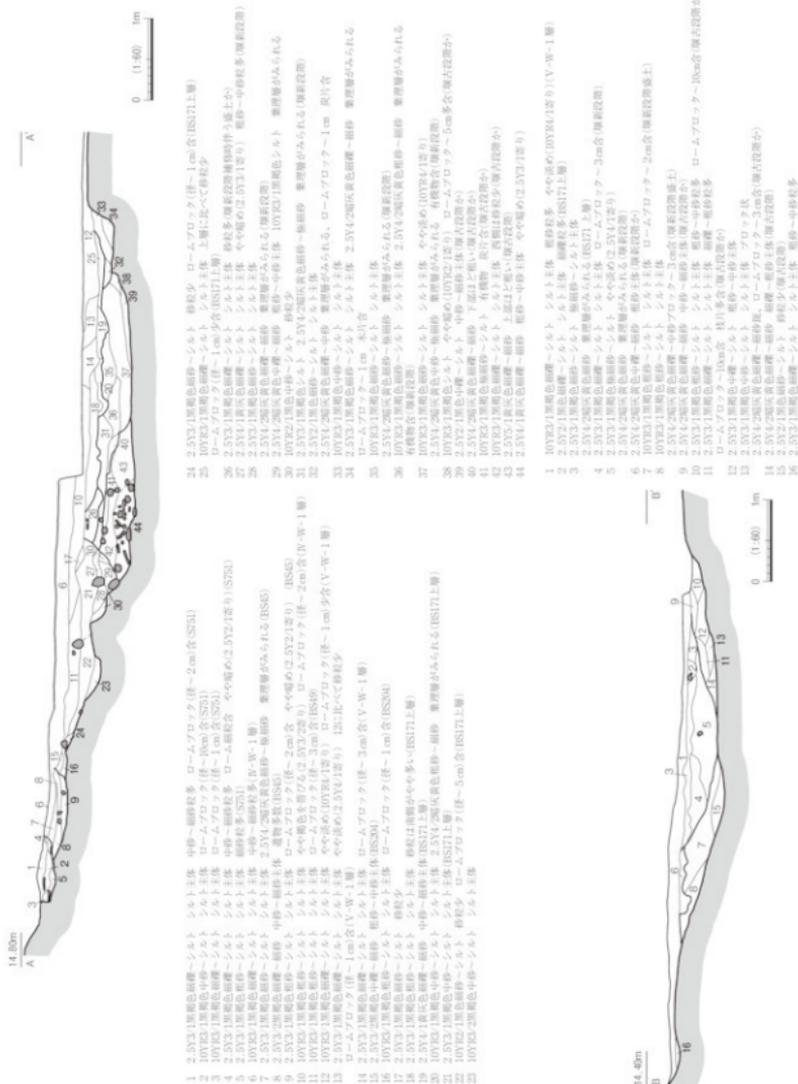


図392 B区 BS171断面

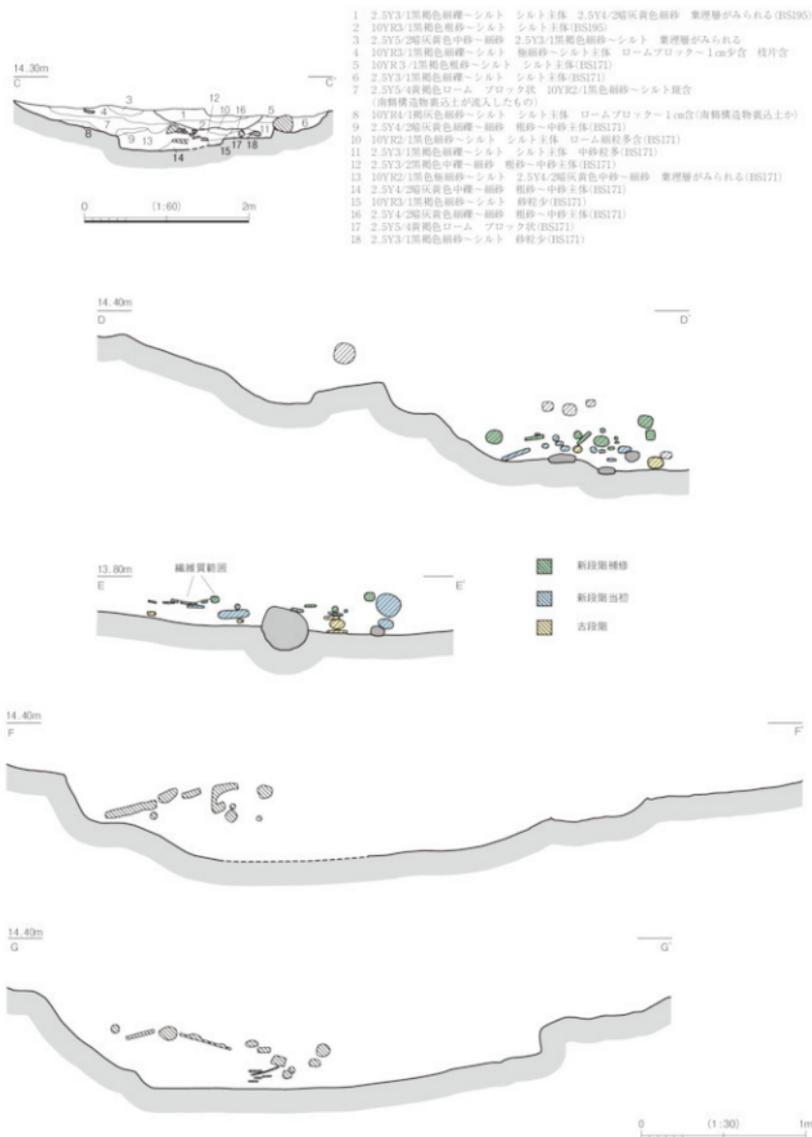


図393 B区 BS171・木製構造物 断面



図394 B区 BS171南側木製構造物 平面

造物は同様の堆積で埋設しているので、7層が構造物の裏込め土と考えた。構造材の周辺には拳大程度の礫が点在しており、これも裏込めの一部とみられる。

構造物の中央付近で完形の土師器鉢(Po837)が出土しており、構築時に何らかの祭祀行為が行われたと推測される。

北側構造物(図395～398)

北東方向に流れる溝から北側に取水することを目的に構築されたと考えられる構造物で、大きく2段階に分けられ、新段階の構造物は補修が行われたと考えた。

古段階

流路の底面で検出したもので、流路の方向に直交する構造物1と、流路の方向に近い方向の木材を中心とした構造材群を確認した。

構造物1は流路の方向に直交する構造物である。流路底面には概ね流路の方向に直交する形で数本の丸木があり、その上で流路の方向に並行する丸木杭が出土した。これらの構造材の下や北側には人頭大から長径1m前後までの礫が点在していた。

構造物1は流路の東岸に接しておらず、東側には流路に斜交する丸木が出土した。構造物1の底面材の中には、1本のみ他の材と異なる方向で両側に短い杭を打設して固定した丸木がある。この丸木と流路東岸付近の材はほぼ並行しており、間隔は0.7m程度ある。また、これらと同じ方向の材は東岸の丸木の延長上の流路底面にも2本みられた。

流路西岸の裾から1m程度流心側の底面には、流路の方向に並行する長い丸木があり、丸木の下や西側には人頭大程度の礫が点在していた。丸木の南端の西側と中央部の東側で、丸木に直交する杭を検出した。また、丸木の0.7～1.1m東側には、丸木に並行する短い木材が数点出土した。

破堤などによって構造材の多くが失われているが、この段階の構造物群を以下のように推測した。

まず、構造物を構築する部分に礫をばらまいて地盤を安定させ、この上に流路東岸に斜交する丸木と流路西岸に並行する丸木を据えて、盛土の裾の土留めとする。その後、底面幅が0.7m前後の盛土を行って、流路に直交する堰と、貯めた水を北側に分水するための堰を構築する。流路に直交する堰の南法面には構造物1が構築され、流路西岸の堰の西側法面にも杭を添わせている。いずれも盛土を水の浸食から保護することを目的としたと思われる。また、流路西岸の裾付近にも杭が点在しており、これらは流路西岸の基盤層の保護を目的に打設されたものとみられる。

新段階

古段階の構造物の上に構築されたもので、特に西側の構造物の位置と方向が異なる。溝の流れを遮る形で構築された構造物2と、構造物2の西側に連結する構造物3～5によって構成される。

構造物2は大きな改変は見られないのに対し、連結する構造物は構造物3から構造物4、5に再構築が行われたものと考えた。

当初段階

構造物2の基底となる丸木は流路の東岸にほぼ垂直になるように設置されていた。この材は柱を転用したもので、輪竈込に加工された上端側を溝の東岸に打ち込んでいた。本来は基底材の上流側に盛土が行われた上に構造材を組んでいたと思われるが、盛土の痕跡は残っておらず、構造材は基底材の直上に重なる形で検出した。

構造材は基底材に並行するように丸木を2本置き、その上に基底材に直交する形で丸木杭が並んで

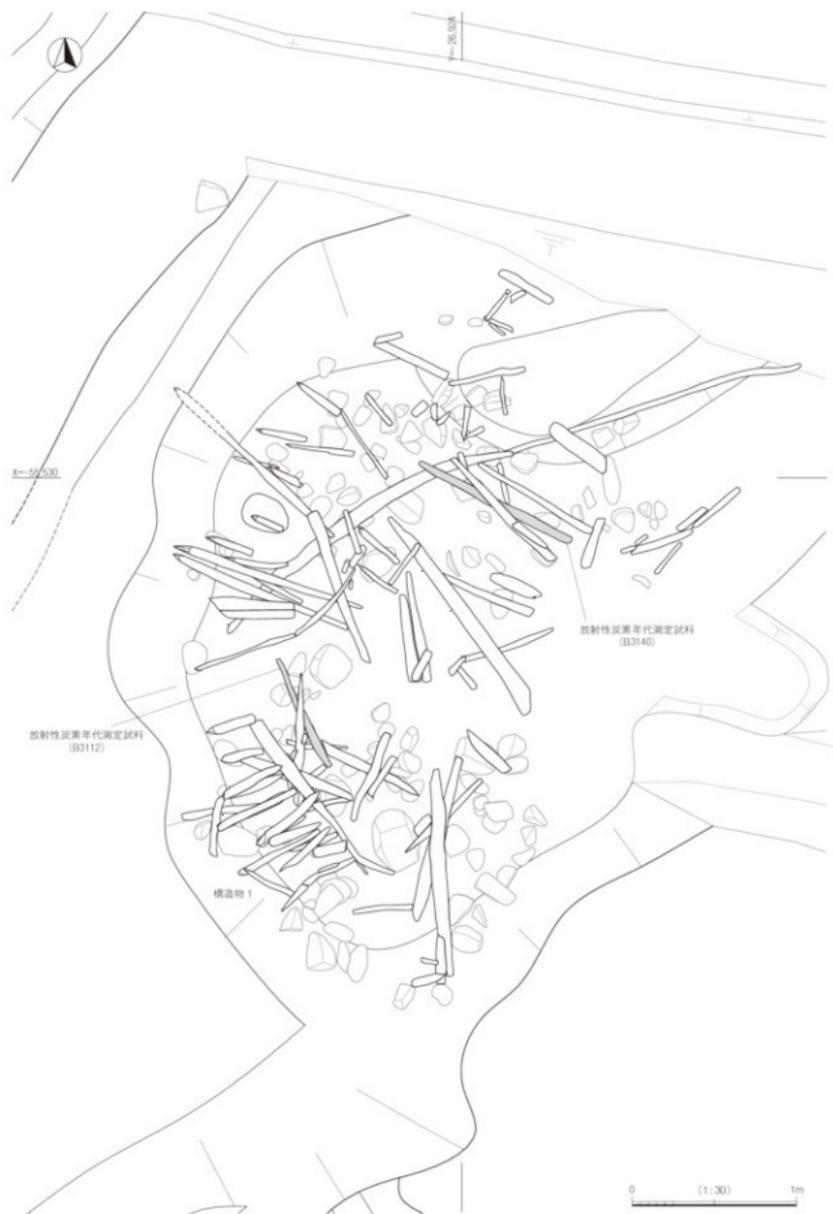


図395 B区 BS171北側木製構造物 古段階 平面

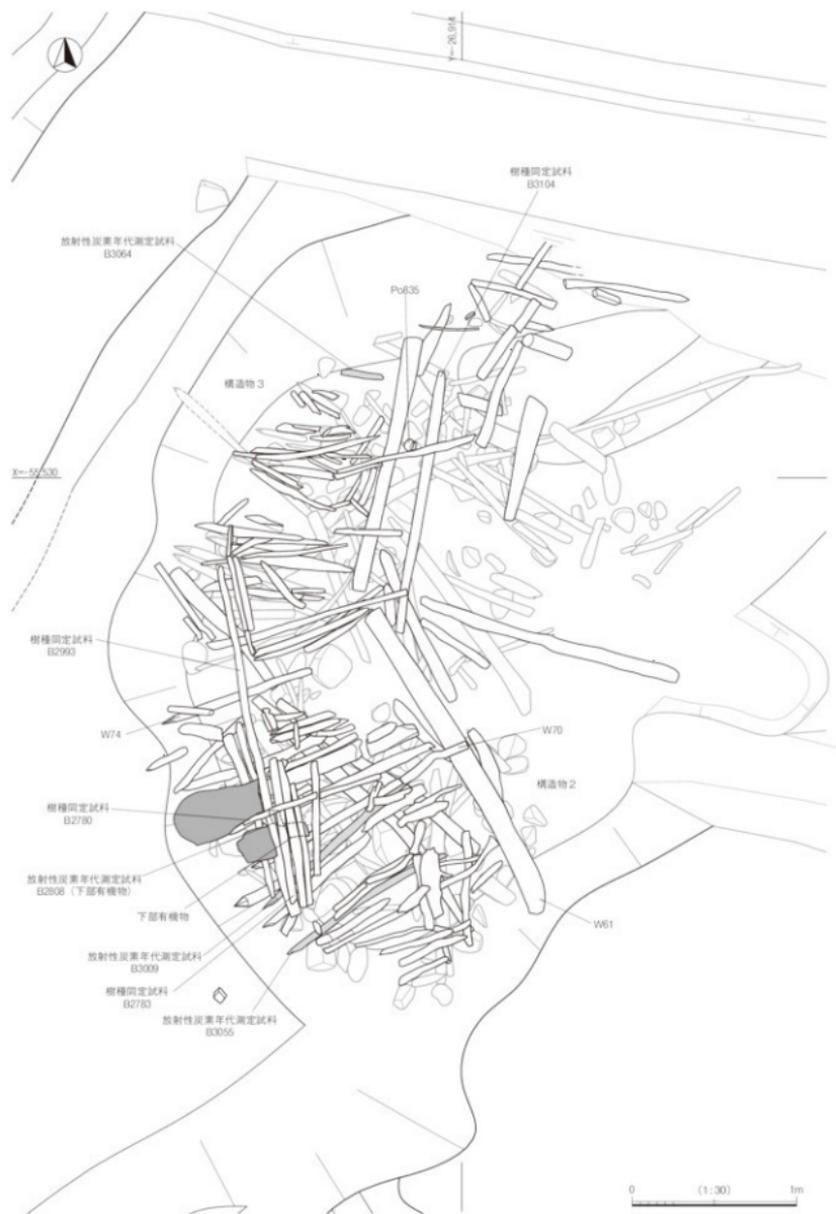


図396 B区 BS171北側木製構造物 新段階(当初) 平面

出土した。出土状況から、盛土の上に丸木を置き、丸木を固定するために盛土の法面に添わせる形で杭を打設したと考えた。

杭の根元付近の上面には樹皮と思われる有機物が認められた。検出できたのは狭い範囲であったが、本来はもう少し広い範囲で施されたもので、盛土を保護するための被覆材と考えた。この被覆材の上には、幅0.1m程度、厚さ0.01m前後の薄い板が杭の根元を保護するように杭に直交する方向に並べられた上に杭に並行する方向に1枚置かれ、さらにその上に樹皮と思われる有機物が確認できた。鳥取市高住井手遺跡の弥生時代の木製構造物では、一つの構造材には被覆材は1重であり、多重に行われたものがない。この事例を参考にすれば、上で確認した被覆材は盛土が破損などしたために補修を行ったと考えることもできる。

打設された杭は多くが長さ1.3～1.5mで先端部がほぼ一直線に並んでいるが、堰の西側の数本だけは先端部が他の杭よりも下流寄りであり並んでいた。この部分は構造物3と連結する部分に当たる。これらの杭がある辺りは平成26年度調査時に排水溝を掘削しており、この時に部材の多くを破砕してしまったことから、他との構造の差異があるかどうか判断としない。ただ、構造物の多くの材は岸側に比べて連結部分のほうが低くなる傾向があり、岸側と構造が異なる可能性がある。

構造物3は、流路の西岸に並行するように丸木が据えられており、北側の丸太は東側に丸木杭を打設して固定していた。北側の丸木の西側では盛土と思われる黒褐色シルトが見られ、丸木は盛土の基底部の土留めだった可能性が高い。南側の丸木も同様の目的で据えられたと考えられるが、周辺には明瞭な盛土が認められず、黄灰色砂礫(A-A'43層)が被覆していた。なお、南側に並ぶ2本の丸木の間から小型壺の完形品が出土しており、構築時に何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。

南側の基底材の西側には、丸木に直交する方向の杭を含む丸木が散在する。このうち、基底材の上に重なった状態で見つかったものについては盛土の法面に添わせて打設された可能性があるが、他の材については判断としない。一方、流路の西岸裾辺りに細めの杭が数本見られ、これらは西岸の保護を目的とした護岸の可能性がある。

補修・再構築

構造物3が破損、倒壊した後に補修、再構築した段階である。

構造物2では、当初段階の構造材の上に流れに対して直交する方向の部材が数本乗せられた上に樹皮と思われる有機物を敷いていた。これらの構造材や被覆材と当初段階の被覆材の間には砂礫を含む黒褐色シルト(A-A'42層相当)の堆積が認められるため、下の被覆材を設置した後しばらくしてから補修を行ったと推測した。

構造物2の北側には、構造物3の一部を覆っている黄灰色砂礫の上面に構造物4が構築される。複数の丸木や建築部材が構造物2の端の構造材の上に重なった状態で出土しており、これらの材の下からは長さ0.64mの丸木杭が倒れた形で確認できた。これらの出土状況から、壊れずに残った構造物2に構造材の端を乗せる形で据えて、構造材の東側に杭を打設して固定したと考えた。

芯材の西側には、芯材に直交する方向で丸木杭が並んで出土した。この杭群は多くが尖端側になる西側が東側よりも低くなっており、構造物2と同じように盛土の法面に添わせて打設したと思われるが、一部の芯材は杭の上に重なっていた。遺構が壊れた時に材が崩れたのか、補修が行われたかは不明である。

杭群の上には芯材と並行する方向で丸木や板材が出土しており、板材の上には被覆材と思われる有



図397 B区 BS171北側木製構造物 新段階(補修) 平面



図398 B区 BS171北側木製構造物 上層木材 平面

機物が確認できた。これは構造物2で見られた補修の状況と類似しており、構造物4の構築と構造物2の補修が同時に行われたと判断した。

構造物4の北西側には構造物5がある。数本の丸木や建築部材の破材が流路西岸の方向に近い向きで検出され、その西側に丸木杭が並んでいることから、構造物4と同様に芯材の上に盛土を施し、その法面に添わせて杭を打設したと考えた。これらの構造物材は構造物4より0.15m程度高く、芯材の南端は構造物4の構造物材の上に重なっていた。丸木杭は構造物4に比べて細めのものが多く、杭群に直交する細めの丸木が伴っており、丸木を杭で扶むように組まれていた箇所がある。

構造物4の南西には、流路の方向に直交する杭を含む丸木群が確認できた。これらは構造物材4よりもやや高く、杭の先端部の高さで比較すると0.1m前後高い。仮にこの杭が今の位置で垂直に立つと、上端部の標高は14.2~14.3mとなり、流路西岸の肩の高さよりやや高くなる。西岸には流路に並行する丸木や杭が確認でき、流路内の杭と一体で護岸施設が構築された可能性がある。

これらの堰が機能した段階の水生堆積としては上流側のA-A'の28、29層が該当するが、下流側のB-B'では認められなかった。B-B'の7、8層はシルトに砂礫ブロックを含む堆積で、構造物5は8層下面で検出したことからこの段階の構造物を被覆した盛土と推測した。そのため、B-B'では堰機能段階の水生堆積は古代の耕作(1層)によって削平されたと考えた。その場合、水生堆積の高さは上流側よりも下流側が0.2m以上高いことになる。

以上の状況から、構造物2と構造物4は流路の水を貯めて水位を構造物5がある高さまで上げるために構築された施設で、構造物5は貯まった水を流路の北側へ導水する水路に伴う施設と考えた。

構造物材の出土状況を見ると、構造物2の基底材や構造物4の芯材は連結部分へ向かって低くなっており、その他の構造物材も連結部分付近のものが低い傾向にある。そのため、構造物2と構造物4の連結部分から倒壊した可能性がある。ただし、堆積状況を観察すると、堰を倒壊させるような強い水流があった痕跡は確認できず、低くなった部分から水を越流させる構造も想定しうる。

なお、構造物4・5よりも0.1m前後上の埋土中から、構造物とは方位が異なる木材群が出土したが、これらは、BS171上層埋土埋没時に伴うものと考えられる。

出土遺物

Po833~844はI32で出土した土器で、木製構造物が機能した段階のものである。土師器甕は二重口縁のPo833・836と単純口縁のPo834・835があり、後者は口縁内面にハケ調整がみられる。Po835は構造物2の芯材内から出土した完形品で、単純口縁ながら、口頸基部外面に強めのヨコナデを施して外傾する二重口縁のような形状をしている。土師器鉢Po837・838は丸底で、口縁部は強い横ナデによって成形される。Po838は南側構造物の裏込め付近から出土した完形品である。高坏は坏部が直線的に大きく外傾する大型品Po839と坏部が内湾する小型品Po840があり、小型品の脚部は脚台部が大きく広がり内面に指頭痕が明瞭に残るものが多い。

Po845~869はI33を中心にI32南西部にかけての埋土から出土した土器で、BS179と重複する部分に当たる。調査時に厳密に分けることができなかったが、BS179から出土した遺物と接合するものがあり、これらの遺物はBS179に伴うものと考えた。須恵器坏蓋Po845~849は外面に稜や沈線が見られるPo845もあるが、ほとんどはそれらが見られず天井部外面のケズリの範囲は狭い。須恵器坏身Po850~858は底部が丸みを帯びるものと平らなものがあり、いずれも外面のケズリの範囲は狭めである。Po852・856はたちあがりを故意に打ち欠いた可能性がある。Po862の土師器高坏脚部は図399のものよ

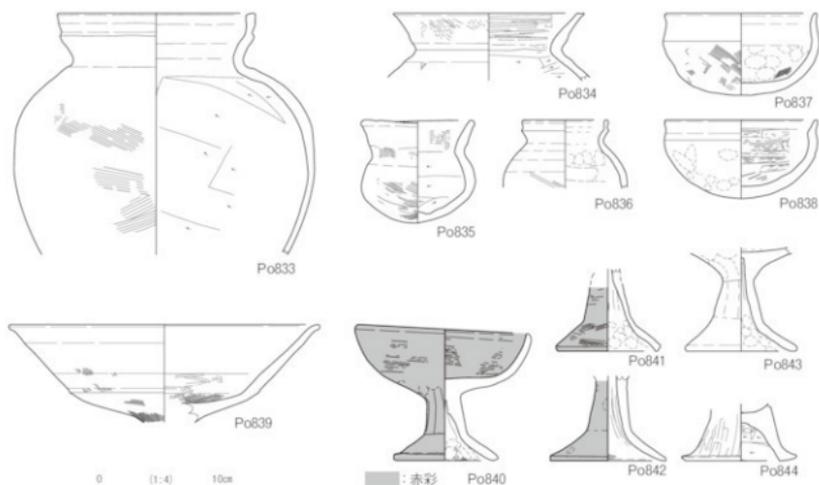


図399 B区 BS171 出土土器(1)

りも脚部が低く脚柱部が太い。Po861・868・867は奈良時代のものと思われ、BS179が埋没した段階の遺物と考える。

Po870～883は遺構の上層付近で出土したものが中心で、BS171の最終埋没段階の遺物と考えた。Po878～883は墨書された須恵器坏である。いずれも底部外面に墨書されるがPo878・879は内面にも墨書がみられる。Po881は「服」と判読できる。

Po884～890は出土層位が不明のもので、縄文土器、手づくね土器、土師器、須恵器、青磁を図化した。Po887は釉がやや暗めで濁った印象を受けるが、器形から越州窯系青磁碗と考える。

図402・403では埋土から出土した石器と鉄製品として楔形石器、石鏃、石錘、刀子と思われる鉄製品を図化した。S85、S86は玉髓の楔形石器で、S86は緑色に近いが辺材を用いており、玉作関連ではないであろう。S87、88は石鏃で、S87は黒曜石製、S88はサヌカイト製。

図404～407は大型の木材で、主に木製構造物の構造材に転用された建築部材である。W60は材の中央に1箇所穴があり、両端には段差が作られる。W61は構造物2の基底材として使用されていた柱で、上部端に輪産込の仕口を施す。W63は一部にはつりの痕跡が残る。W64は材の端に近い部分に切り欠きがあり、建物の横架材と考える。W66・67は垂木で、端部に切り欠きの仕口を施しており、W66はそれとは別にもう1箇所浅い切り欠きがある。W68は段差のある板材で、穴が2箇所あり、別の材が当たった痕跡と思われるものがみられる。

W70～76は主に木製構造物で使用された杭である。角材や板材などの加工材を転用したものもみられたが、特に北側構造物では径0.1m前後の丸木を用いたものが多い。先端部は角錐状に加工するものとW70・74のような一部加工せずに尖らせたものがある。

W77は横楕で、表面には泥よけを取り付ける段差があり、裏面には半円形の帯状に高くなる。材質はアカガシ亜属である。W78は泥よけで、柄を通す穴と横楕と接合するための穴の他に小さい円形の孔がいくつかある。このうち中央にある孔は泥よけが割れている箇所であり、補修するためのものと

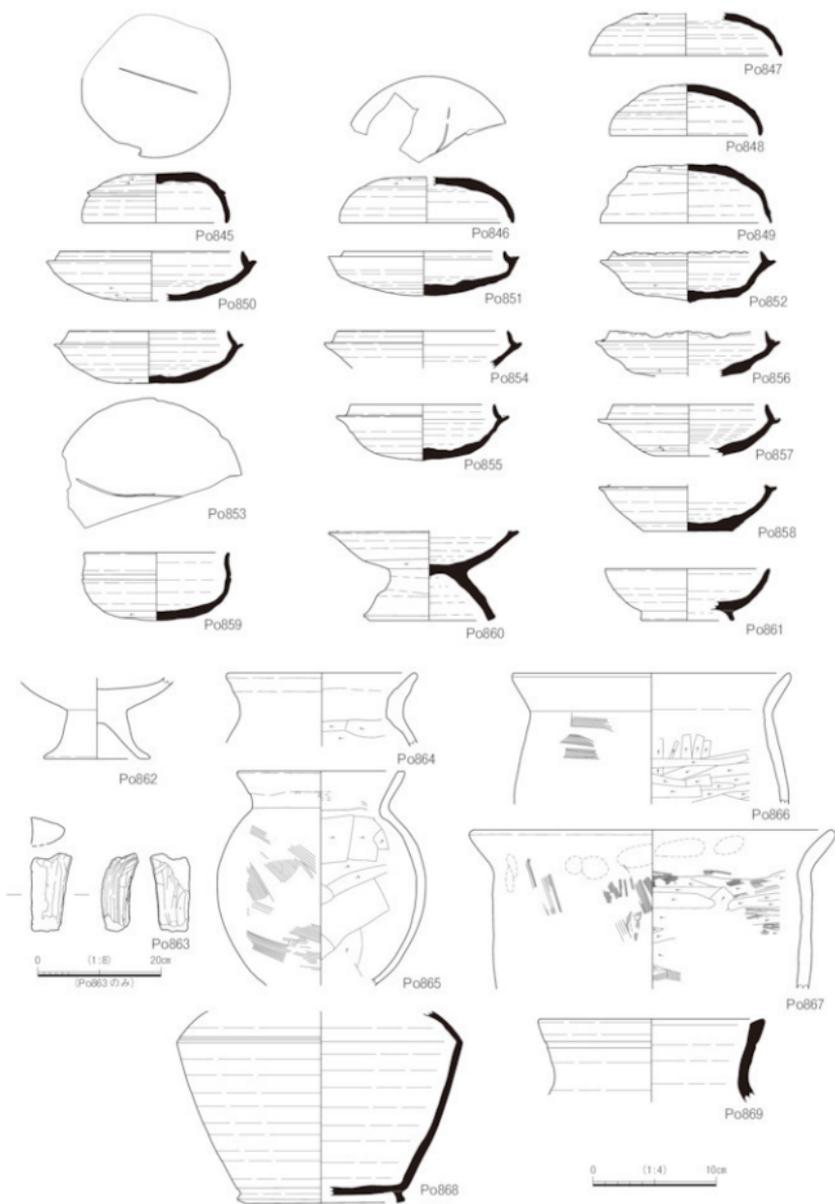


図400 B区 BS171 出土土器(2)

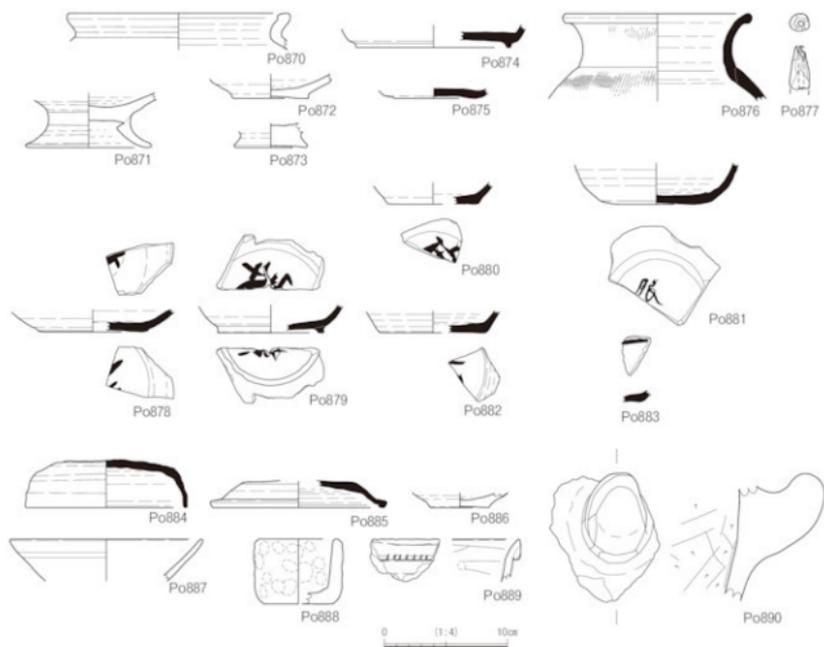


図401 B区 BS171 出土土器(3)

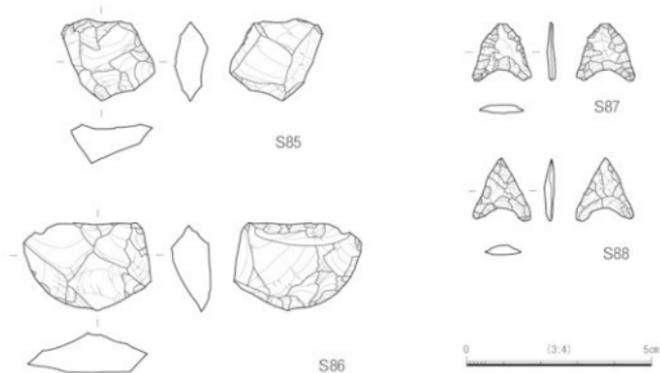


図402 B区 BS171 出土石器(1)

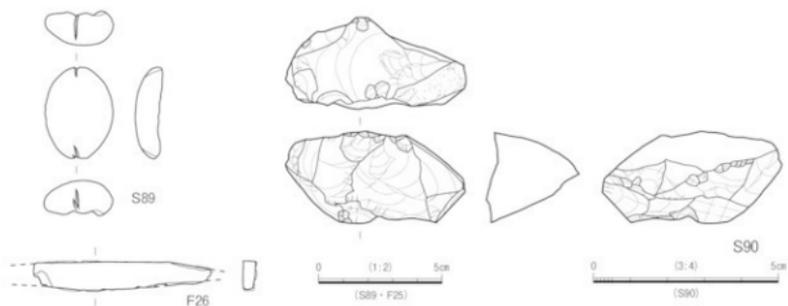


図403 B区 BS171 出土石器(2)・鉄製品

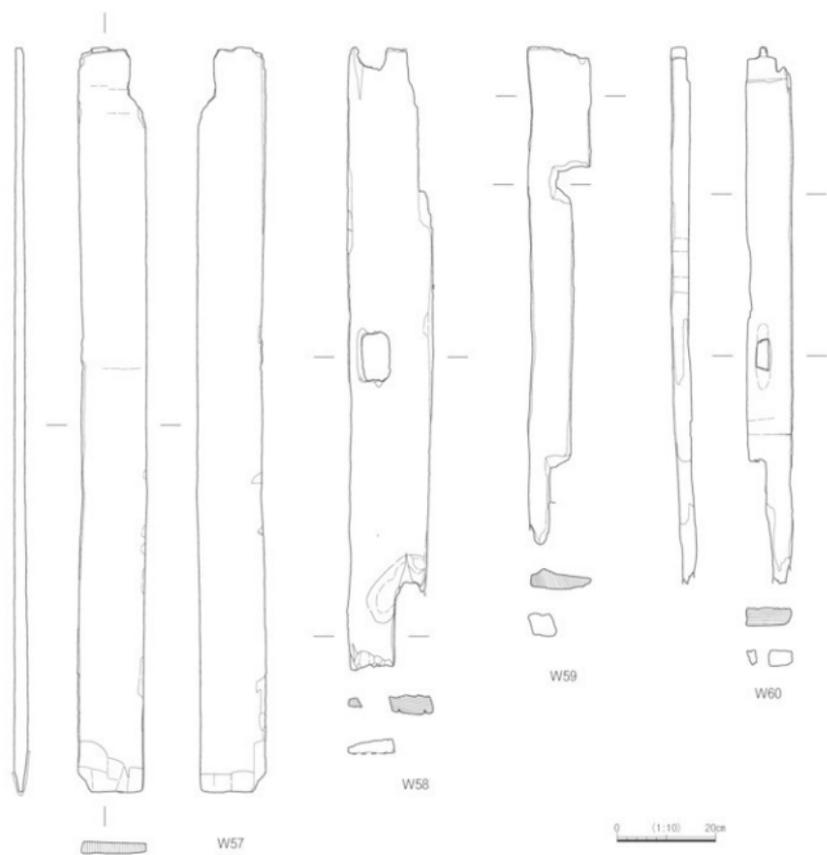


図404 B区 BS171 出土木材(1)

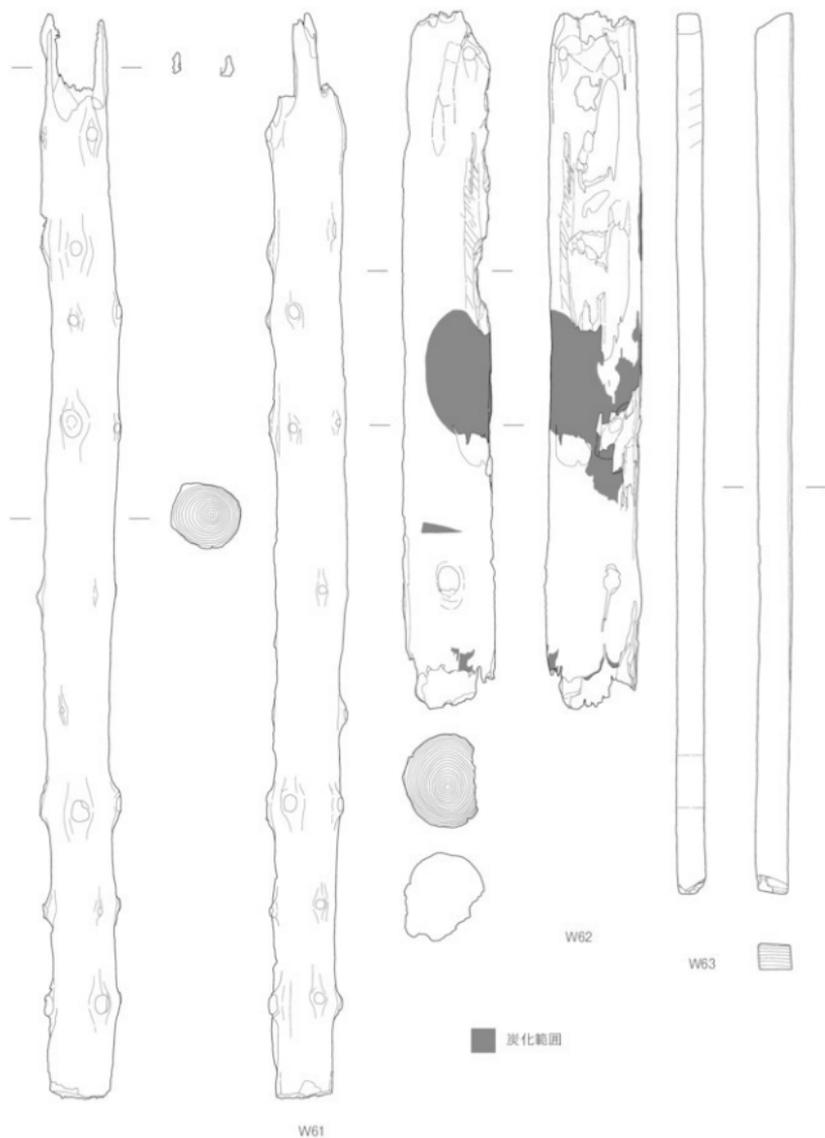


図405 B区 BS171 出土木材(2)

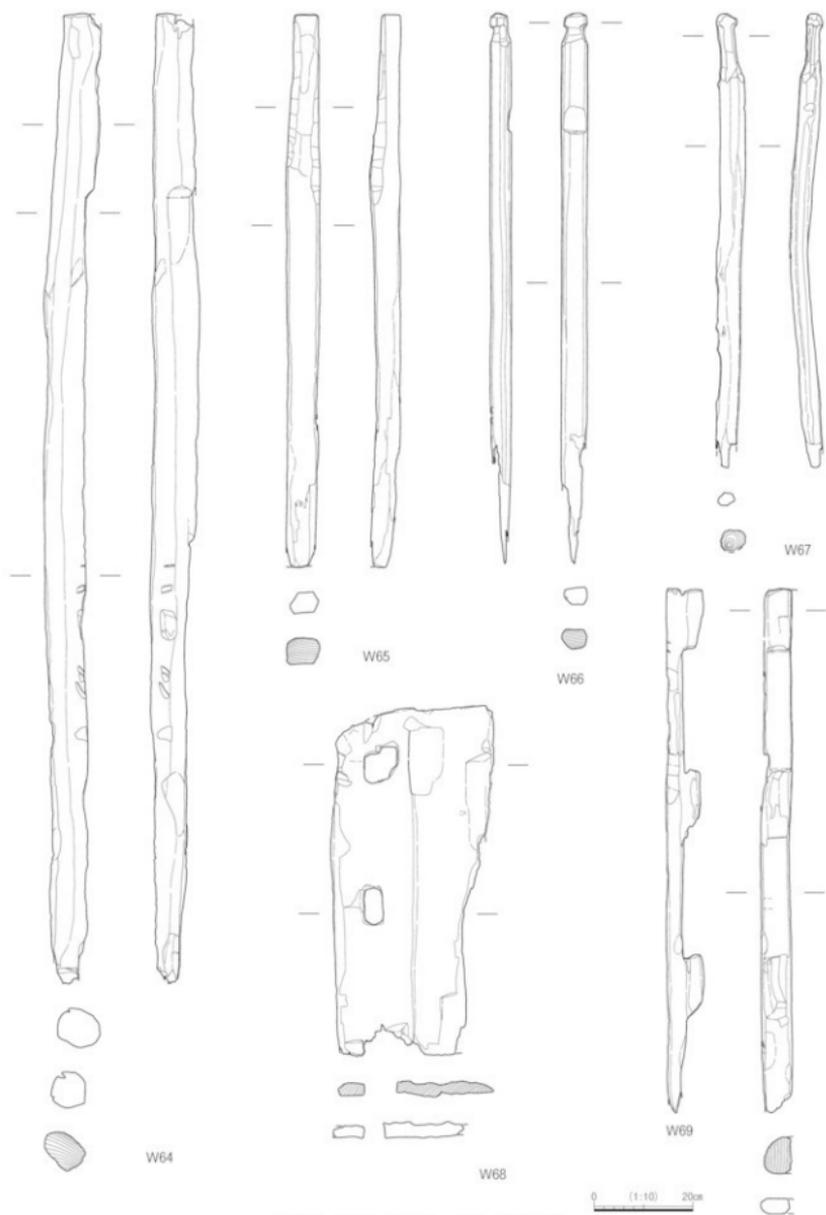


図406 B区 BS171 出土木材(3)

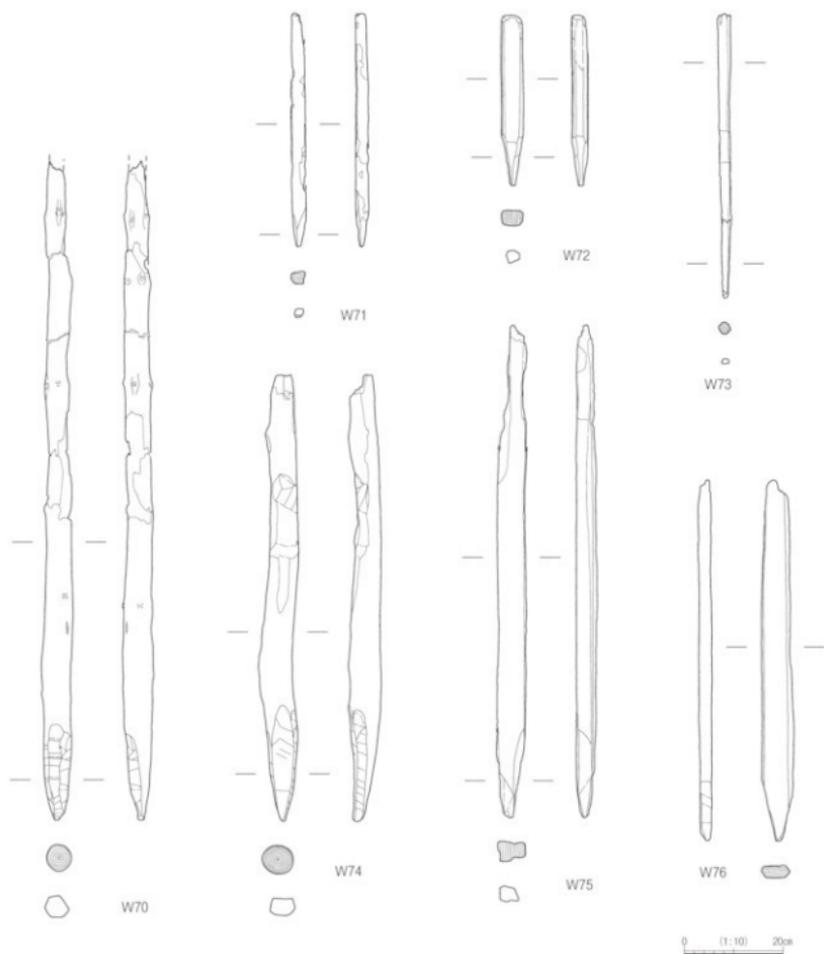


図407 B区 BS171 出土杭

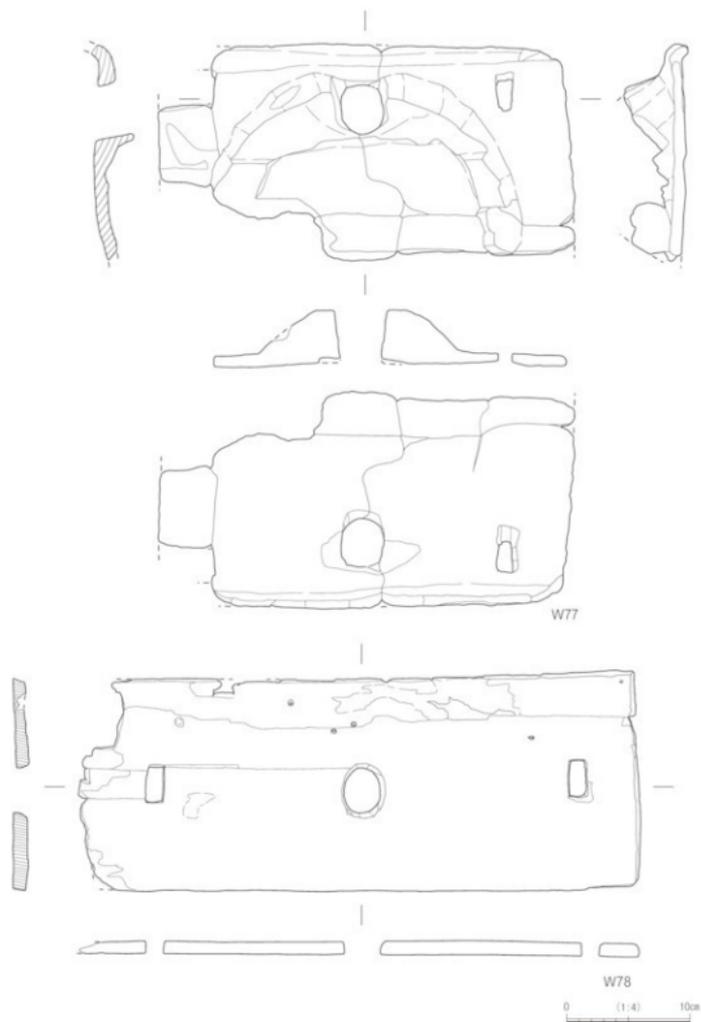


図408 B区 BS171 出土農具

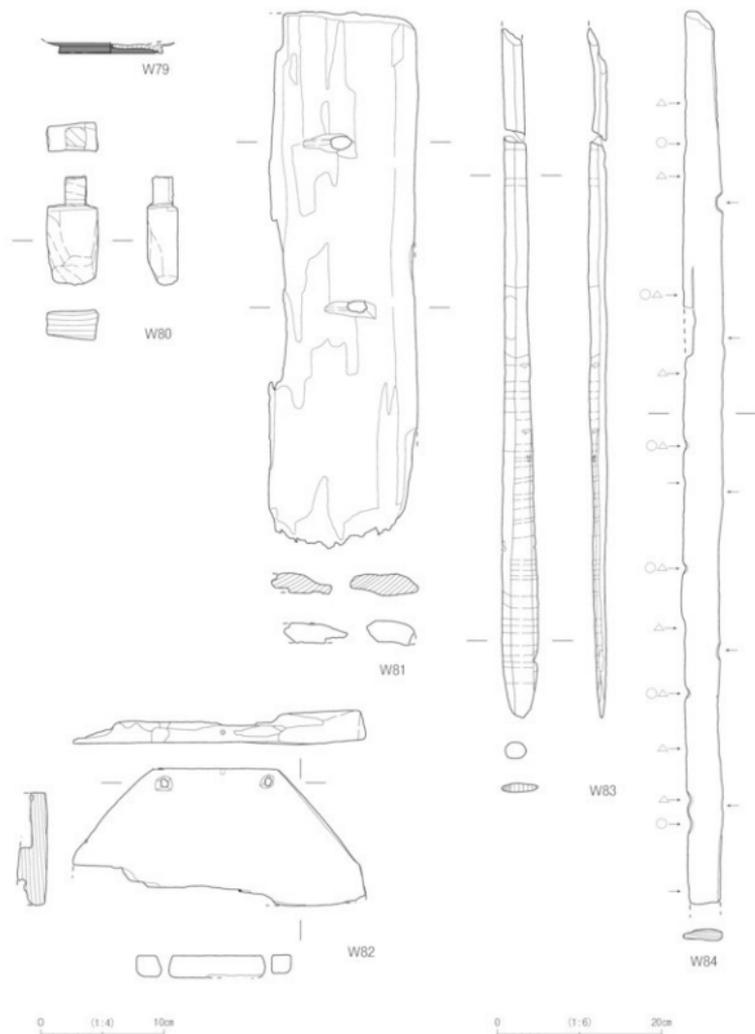


図409 B区 BS171 出土木製品

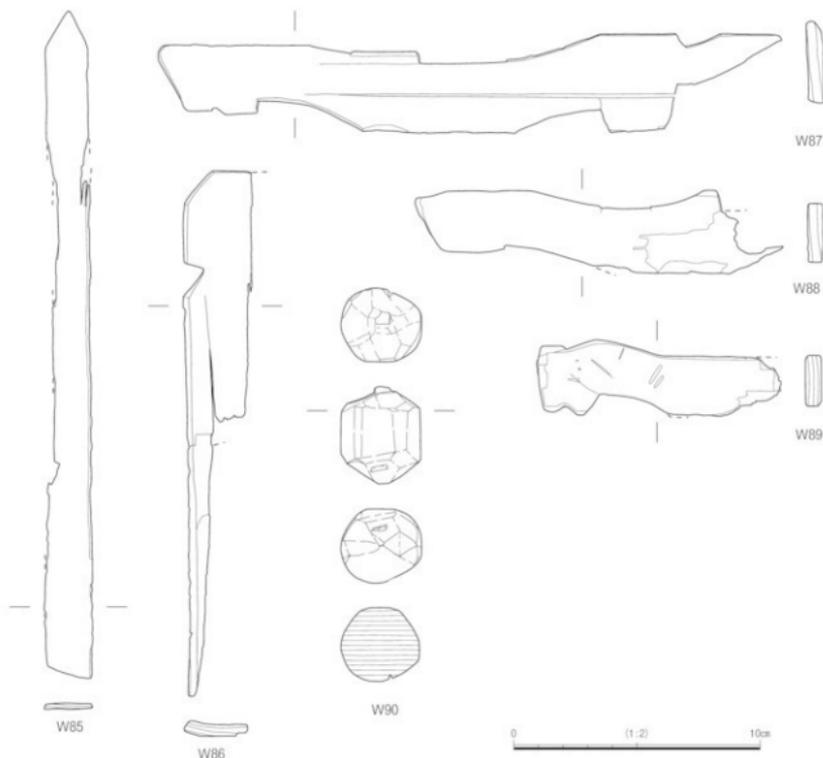


図410 B区 BS171 出土木製祭祀具

考える。

W79は埋土上層から出土した漆器の底部で、器壁が薄い。W80は調度品の脚部と思われる。W81・82は田下駄の部材と考えた。W83は櫛のような形状をしているが、先端部が小さく用途は不明である。W84は編台の目盛板で板材の両側に浅い切り欠きが多数確認できる。切り欠きの間隔は片側が約18cm、反対側は15cm前後(○)と7～8cm(△)のものが混在すると考える。

W85～90は埋土上層から出土した木製の祭祀関連遺物で、畜串、人形代、馬形代、独楽が出土した。

出土遺物からは、古墳時代中期頃に木製構造物が機能し、古墳時代後期にはBS197に流れが変わったと考えられる。木製構造物の部材については放射性炭素年代測定を実施しており、暦年較正年代で3世紀中葉から4世紀中頃という結果が出ている。年代測定と出土土器の年代観にはややずれがあるように思われるが、土器が出土しないものの比較的長期間にわたって構造物が機能していたと考えるべきなのかもしれない。(田中)

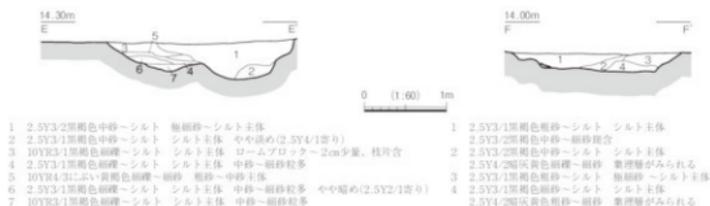


図411 B区 BS179 断面

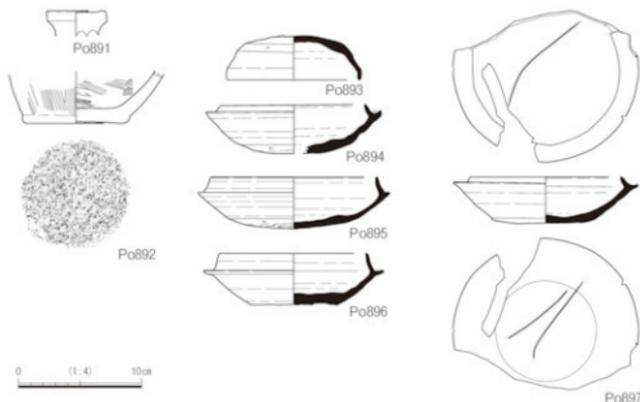


図412 B区 BS179 出土土器

BS179(図378・391・411～413、PL83・119)

BS171からI33で東に分歧して、蛇行しながら東北東方向へ向かう溝状遺構で、幅が1.5～2.1m、検出面からの深さが0.3m前後ある。

I33の北側には基盤層ブロックを多く含む堆積があり、これに遮られる形で方向を変えたことが確認できた(図391)。この堆積はBS171西岸側の護岸施設の裏込め土と類似しており、構造物が倒壊したときに流入したと考えた。BS179は蛇行しており、護岸を行った形跡は見られなかった。一方、埋土の堆積状況を観察すると、ある程度埋没した段階で1度浚渫を行ったことが確認できた。浚渫前の埋土には下層に砂礫を主体とした堆積があるが、浚渫後の堆積にはそうした堆積は見られない。

以上の状況から、計画的に開削したというより、BS171の南側木製構造物の倒壊によって塞き止められた水の営力でできた水の流れをそのまま溝として利用したと推測した。

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器、木製品が出土した。

須恵器坏蓋Po893は他の坏身に比べて小形で、口縁部と天井部の境に明瞭な稜は見られない。須恵器坏身Po894～897は底部が丸いPo894・895と平底で体部が直線的なPo896・897があり、いずれも底部外面のケズリの範囲は狭い。Po874・897は他に比べて立ち上がりが高い。

木製品は田下駄、人形代、不明木製品、杭を図化した。W91は角材の端を円く加工し、材の長辺に切り欠きを施す。W95は板材を加工した杭で、材の側面に切り欠きがある。

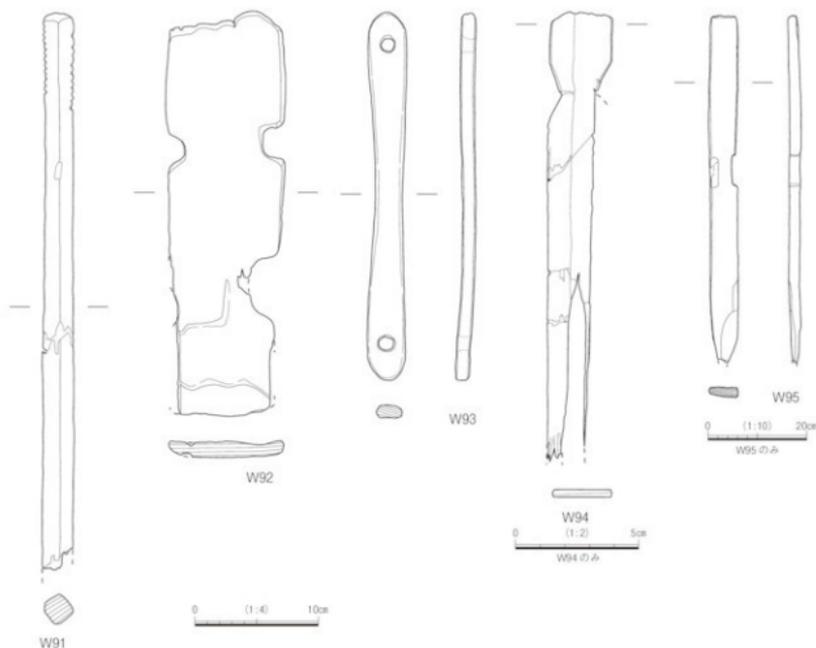


図413 B区 BS179 出土木製品

出土した土器から6世紀後葉から7世紀前半頃に機能した遺構と考える。遺構の南側にはS834がほぼ並行して延びており、BS179からS834に溝の付け替え、整備が行われたと考えられる。(田中)

BS200(図414)

I31・32で検出した溝状遺構である。埋土の切り合い関係からBS201よりも後に埋没し、BS171の上層埋土がBS200埋土よりも後に堆積したことが確認できた。溝はBS171の東岸からBS179に並行して4m程度延びてから北東へ方向を変える。溝の幅は0.43～0.65m、検出面からの深さは0.04～0.07m、底面の高低差は0.08mある。ごく浅いものの、平面形が直線的なので、人為的に構築されたものと考えた。

埋土は下流側の上面に薄く砂礫の堆積があり、その下はシルトを主体とした堆積であった。埋土内からは若干の遺物が出土しており、土錘を図化した。ただ、時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

BS201(図414)

H31からI32で検出した溝状遺構で、上面には埋土の砂礫が削り残された凸形の耕作痕跡BS193が確認できた。遺構はBS179の北岸からBS171に並行して延びており、埋土の切り合い関係からBS200が先に埋没したことが確認できた。溝の幅は0.56～1.15m、検出面からの深さは0.05～0.16m、底面の高低差は0.15m前後ある。

溝は砂礫堆積と砂を多く含むシルト堆積によって埋没していた。時期を判断しうる遺物は出土しな

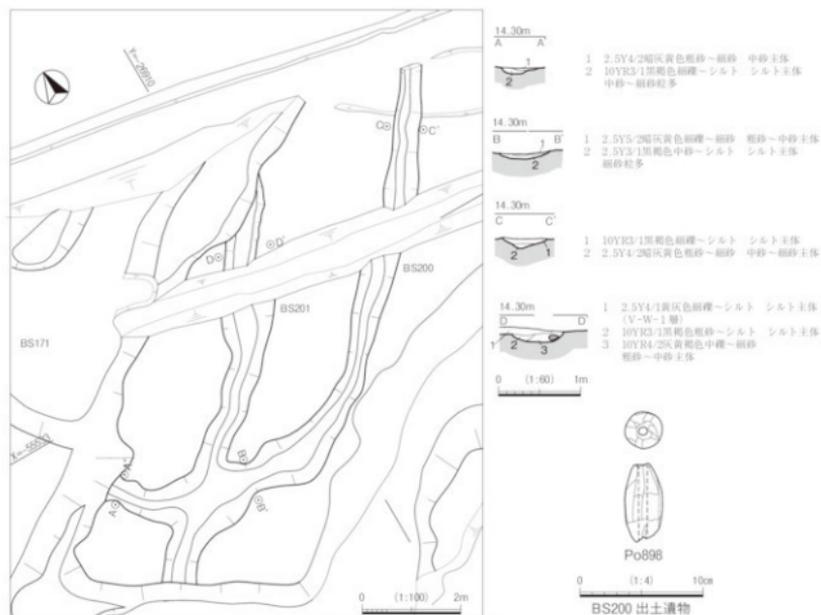


図14 B区 BS200・201



図15 B区 BS69断面

かった。(田中)

BS69(図378・415)

調査区南東隅から北へ向かう幅0.8～1.4mの溝で、現代の溝に切られるものの底面に僅かに痕跡が残っており、BS60と合流するようである。検出面からの深さは0.2～0.3mで、底面はⅦ層に達して礫が露出し、凹凸がある。南端とBS60の合流点との底面の高低差は0.7m程度ある。

溝は、調査区南東隅付近から若干蛇行しながら北へ向かい、後述する礫敷状遺構BS65の外縁を進むように北西に方向を変えてBS60へ向かっていた。

埋土を観察すると業理構造は認められず、最下層で砂粒を多く含むシルトが堆積していた。そのため、常時水が流れていた状況ではなく、雨などによる突発的な流水があった程度と考えた。

埋土からは時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

BS73(図422)

P30・31で検出した遺構である。後述する礫敷状遺構BS65を検出した段階ではV層の面的な広がりとしか認識できず、V層を除去することで幅2.0～3.6m、深さ0.1m程度のごく浅い溝状の窪みか

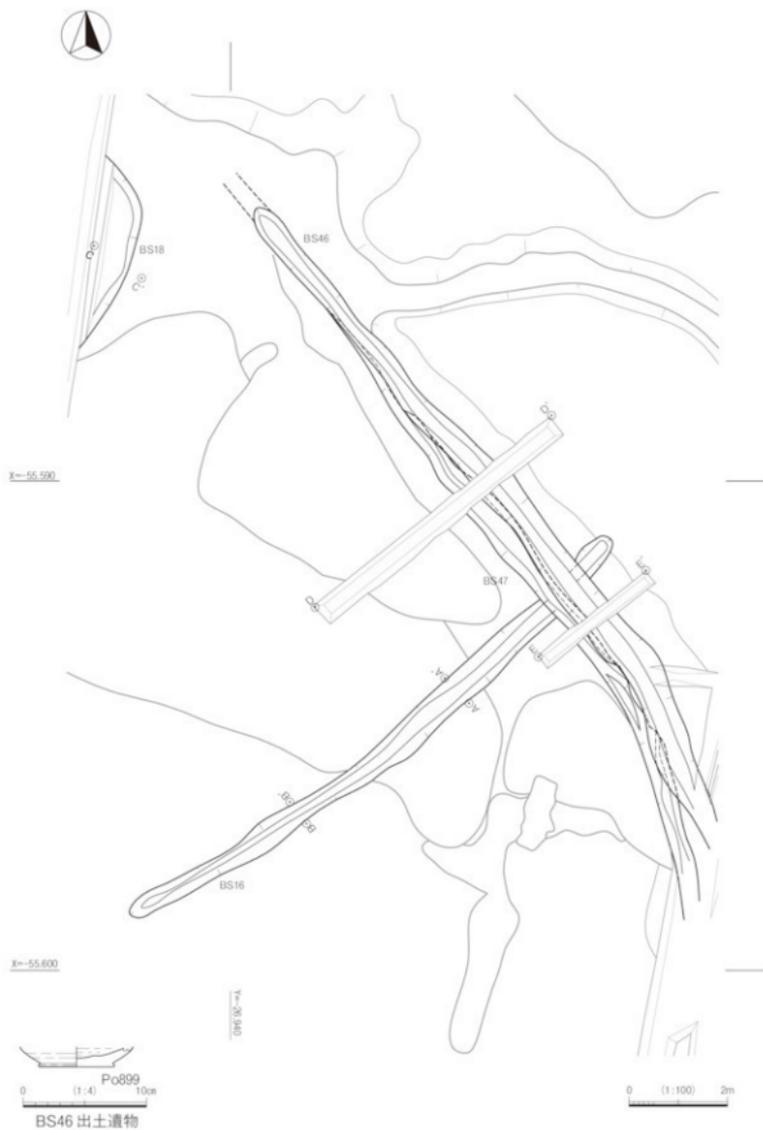


図416 B区 BS16・18・46・47 平面・出土遺物

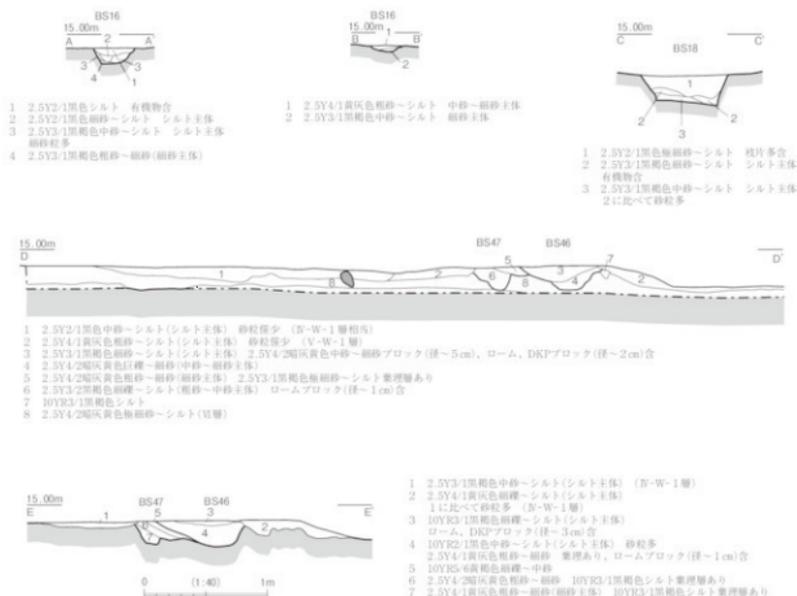


図417 B区 BS16・18・46・47 断面

確認できた。遺構に伴う明瞭な埋土は認められなかった。底面に凹凸が多く、人為的に構築したか疑わしいものの、BS69からほぼ垂直に延びていることから、北側のBS65等の碟状遺構がある場所を区画する意図で造られた可能性がある。(田中)

BS46・47(図416・417)

N34、O34で検出した溝状遺構で、BS47はBS46に切られる。溝の方向や深さが類似しており、BS47が先に造られ、埋没後に同じ目的でBS46が開削し直したと考えた。

BS46は幅0.7m程度、検出面からの深さは0.2m程度あり、北西から南東へ延びる約16m分を検出した。北西側に向かって浅くなり、西端は底面が検出面に直接つながる形で途切れる。さらに西側に延びていたものがV層の耕作によって失われたと考えられる。東端はⅢ層耕作段階の暗渠に切られ、その先が分からなくなっていた。両端の底面の高低差は0.06mある。埋土は主にロームブロックを含むシルトを主体としたもので、一部で底面付近に中砂～細砂を主体とした砂礫層が見られた。埋没状況から機能した段階には比較強い水流があり、不要となった段階で人為的に埋められた可能性がある。

BS47は、北側がBS46に切られているため、幅は不明であるが、断面の形状からBS46とほぼ同規模と推測した。埋土は中砂～細砂を主体とした砂礫層で、機能した段階にはBS46同様に比較強い水流があったと思われる。

BS46の埋土からは土師器坏の底部が出土しており、これらの遺構は平安時代中期に機能していたと考える。(田中)



図418 B区 BS203 平面

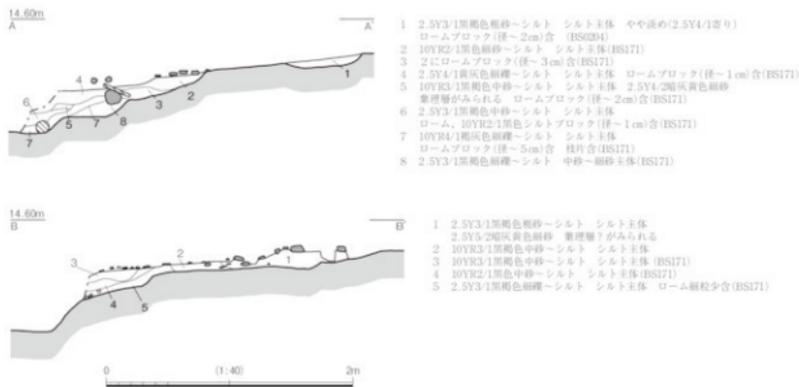


図419 B区 BS203 断面

BS0016(図416・417)

O34・35で検出した溝状遺構で、BS46、BS47に切られる。南西から北東に延びており、BS46、47とはほぼ直交する。長さは12.5m程度、幅が0.25～0.30mあり、底面の高低差は0.2m程度ある。両端とも底面が検出面に直接つながる形で途切れる。

埋土は主にシルト主体の堆積で一部に有機物を含む。底面付近には細砂を主体とする堆積があり、機能した段階に水流があった可能性が高い。

埋土からは時期を判断しうる遺物は出土しなかった。(田中)

礫数状遺構

BS203(図418～420、PL.87・121・122)

I33で検出した遺構で、人頭程度までの礫を中心に土器や木片が面的な広がっていた。礫の面は高さ比較的揃っており、人為的なものと判断した。ただ礫の広がり均質ではなく、小さめの礫が密集する箇所がある一方で北側では礫がまばらになっている。後世の耕作などの影響があるものの礫の密度には場所により差があるので、範囲を決めて均質に舗装を行ったというよりも、必要な部分を中心に礫等を敷きならしたと考えた。礫数の範囲は長軸8.5m、短軸2.6mで、BS171の西岸の一部を被覆しつつも同溝とほぼ同じ方向に延びていた。礫の面は西側が東側に比べて0.2m前後高いが、南北方向にはあまり傾斜していなかった。

南側のJ34では北端と同じように礫がまばらに分布する程度であるが、I33で出土した遺物と接合または同一個体と判断できたものが含まれていた。また、平成24年度調査地のS751下面の一部でも礫群を確認した。調査時は礫が溝の最下層に堆積したものと判断したが、検出状況を北側の礫群と比較すると類似することからこれも一連の遺構の可能性もある。

礫の上面では奈良時代を中心に平安時代までの須恵器や土師器とともに木製品、人形代が出土した。また礫群のすぐ外側で須恵質焼成の土馬Po904が出土した。礫群とほぼ同じ高さで出土しており、一連の遺物と判断した。土器は同一個体の破片が広い範囲に散らばった状態で出土したので、一部は礫とともに敷きならされたと考えられる。

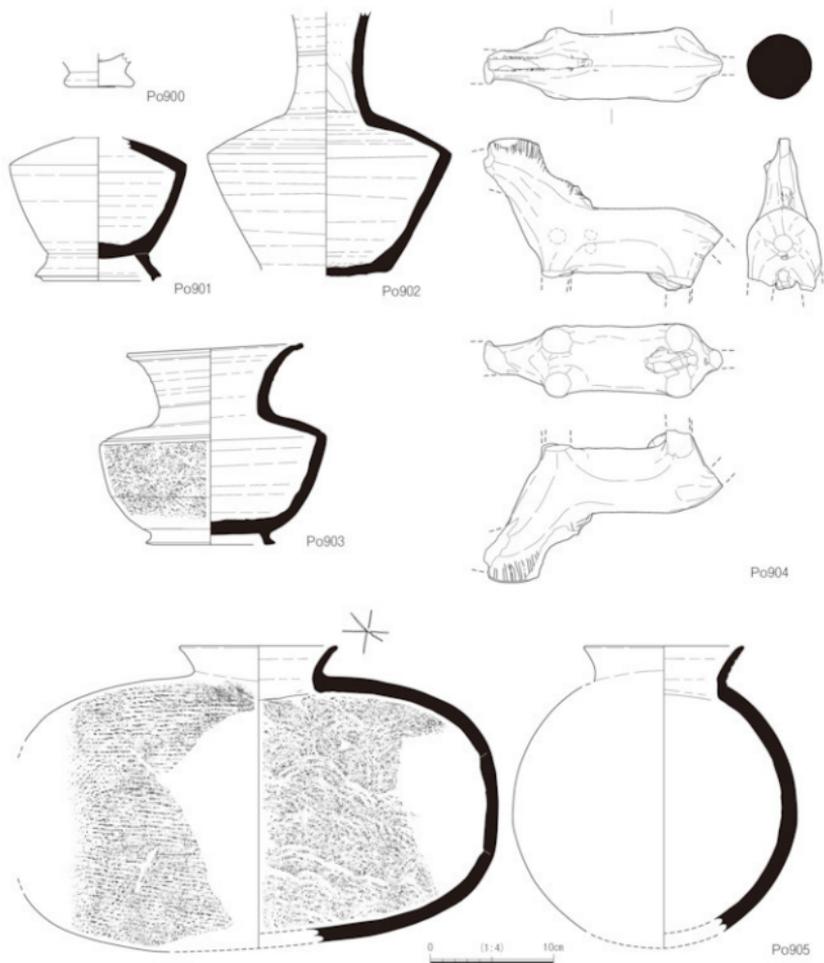


図420 B区 BS203 出土土器

土器は土師器柱状高台、須恵器壺、横瓶、土馬を図化した。Po903の体部下外面には平行タキ目が確認できる。Po905の肩部には匏書きの記号が確認できる。Po904は鬘の線刻が細く金属製の工具が用いられたと思われるが、頭や脚は欠損するが、性器や肛門の表現が確認できる。

木製品は挽物皿と不明木製品、人形代を図化した。W96は棒状の材のほぞ孔に別の材が差し込まれており、目釘を使って固定している。W99は側面形人形代の頭部と考えた。W100は完形品の人形代で、女性が着物の裾を手に持って女性器を露出させた姿を表現したと考える。顔や髪、衣服、指は墨書で、女性器は陰刻で表現する。こうした表現は人形代にほとんど例がなく、宮崎県新田原58号墳の人物埴

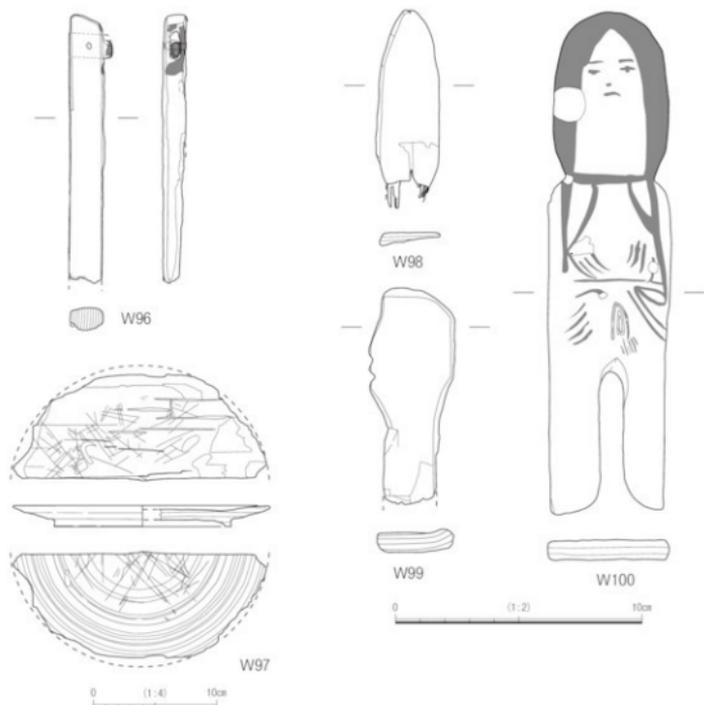


図421 B区 BS203 出土木製品

輪に同様の姿のものがある。女性器には強い力が宿るとする民間信仰などもあるので、依代というよりも魔除けのような意味合いのものかもしれない。

磔敷の機能として祭祀空間が考えられるが、同時期と考えるBS171の上層から出土する祭祀遺物の量は少なく、決め手に欠ける。(田中)

BS65(図422・423、PL.88)

O30・31で検出した、磔が面的に広がる遺構である。西側は現代の溝に接しており、一部はこの溝によって失われたと思われる。現存する部分の平面形は東西8.5m程度、南北6.5m程度の三角形あるいは台形を呈する。磔の大きさは直径数cmのものから人頭大のものまで様々である。北西部の10cmまでの磔が密集する部分は磔の上面の高さが比較的揃っており人為的に敷いた可能性が高い。一方、東側の一部などでⅧ層が露出した箇所がある。これらの状況から、遺構は自然堆積の磔が露出した箇所を活かしつつ、一部に磔を敷いて構築したと考えた。磔を敷いた理由として、構築されたⅧ層が水を含むと非常に軟弱な堆積であり、磔を敷いて足下を安定させるためと推測している。

磔の範囲内には礎石や掘立柱などは確認できず、建物などに伴うものではない。また、遺構の直上などで特徴的な遺物(たとえば祭祀具など)は出土しなかった。現代の溝によって壊されているが、磔敷きがBS60の東岸まで広がっていた可能性があり、川の水を使う何らかの作業の行うための場所だっ



図422 B区 BS65・67・68・72 平面

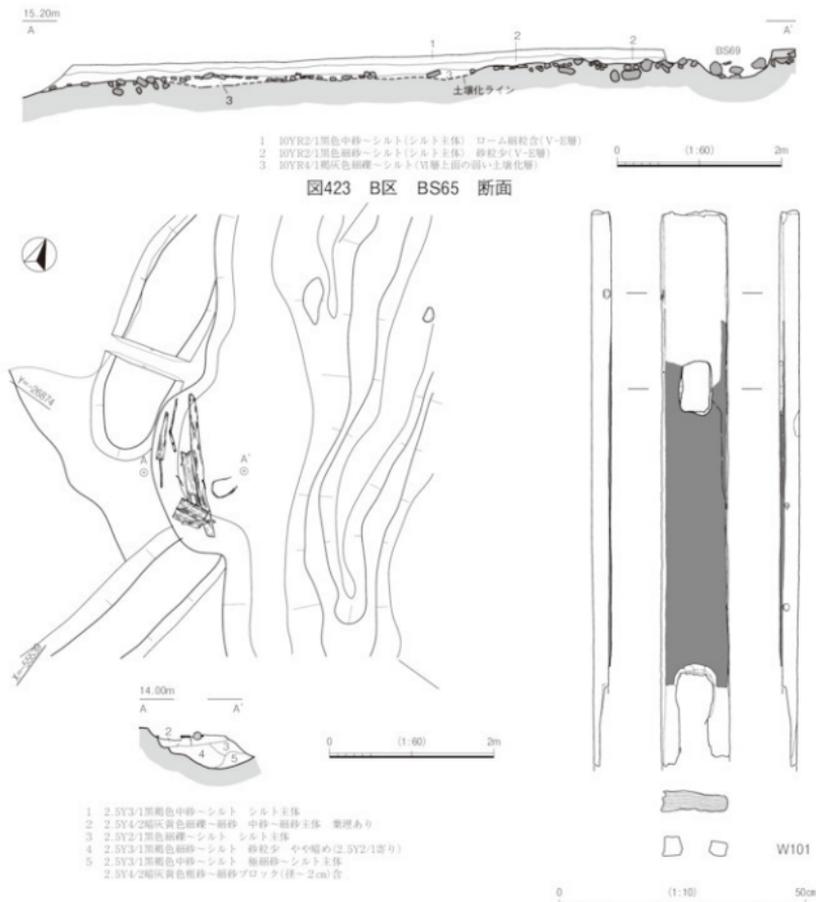


図424 B区 BS197

たとえることもできる。いずれにしても、用途を特定できる痕跡は見当たらず、この場の目的は不明である。(田中)

BS68(図422、PL88)

BS65の南側にある長径3.8m程度、短径1.5m程度の小規模な礫の広がりである。人頭大までの礫が広がるが、西側ほど礫は小さめになる。礫の上面の高さは特に揃っていなかった。遺構の東側にはⅤ層が露出した箇所(遺構と判断しなかったもの)があり、この遺構も一部は自然に露出したもの可能性がある。また、BS65に比べて礫はまばらである。

検出すると、径1.2m程度の範囲で礫が少ない部分(BS64)が確認できた。当初は土坑の周囲に礫を敷いた可能性を考えたが、礫が少ない部分を掘り下げるとごく浅く、下面ではⅤ層が露出したため礫

の広がりやの凹凸と判断した。

礫の上面から特徴的な遺物は出土しておらず、用途は不明である。(田中)

BS67(図422、PL88)

P31で検出した遺構で、長さ4.0m程度、幅1.0m程度の帯状の礫の広がりである。この遺構の南側ではV層下面が南へ低くなるように傾斜しており、V層を除去するとⅦ層が露出する。遺構はⅦ層が露出する北端部に当たり、露出したⅦ層に手を加えて構築したと考える。遺構は傾斜変換する地点に当たるため、区画を意図したものと考えている。

また、BS67はBS73の西岸に沿っており、BS73が人為的に構築されたものであれば、BS67はその土手として機能した可能性がある。(田中)

BS72(図422)

P31で検出した遺構で、人頭大の礫が北側に3個、南側に2個平行して並んでおり、西側はBS67に接する。Ⅶ層に食い込んでいるが、他のⅦ層の露出した礫に比べて高い位置で検出しており、人為的に構築されたものと判断し、小型の石室の可能性を考えた。しかし、石に囲まれた範囲内の埋土からは遺物が出土せず、用途は不明である。(田中)

その他の遺構

BS197(図424、PL122)

I28で検出した土坑で、南側はS834第1段階(BS180)に壊されていた。遺構の平面形は長軸2.10m、短軸1.18m以上の楕円形を呈し、検出面からの深さは0.42mある。

埋土は黒色～黒褐色のシルトを主体とし、最下層の5層には砂のブロックを含む。2層は水流を伴う堆積であるが、全体としては遺構の機能段階で水の流れを認められない。

遺構の最上層には建築部材や曲物などに用いる薄板の破材が出土したが遺構の機能に関するかどうか不明である。

出土した木材のうち、特徴的なものを1点図化した。W101は板材にはぞ孔が2つあり、長側面には径1cm程度の穴がけられていた。側面の穴は同じような板材を横につなぐためのものと思われる。

時期を特定しうる土器は出土しておらず、遺構の前後関係から奈良時代以前のものであることが確認できるととまる。(田中)

第7節 時期不詳の遺構

調査区東端はA区の段丘面から続く平坦面にあたり、表土直下で基盤層のロームが露出する。この面では土坑を1基確認したが、遺物がなく、時期の判断ができなかった。

BS160(図425)

K25で検出した土坑で、平面形が長軸1.44m、短軸1.27mのややいびつな隅円方形を呈する。検出面からの深さは0.73mあり、断面形は壁面が垂直に近い逆台形を呈する。遺構の上部は一部が現代の道路側溝によって壊されていたが、底面付近は攪乱などは受けていなかった。

検出面付近の掘方西寄りには長径0.6mまでの礫群が確認できた。礫の高さはほぼ揃っており、人為的に置かれたと推測した。

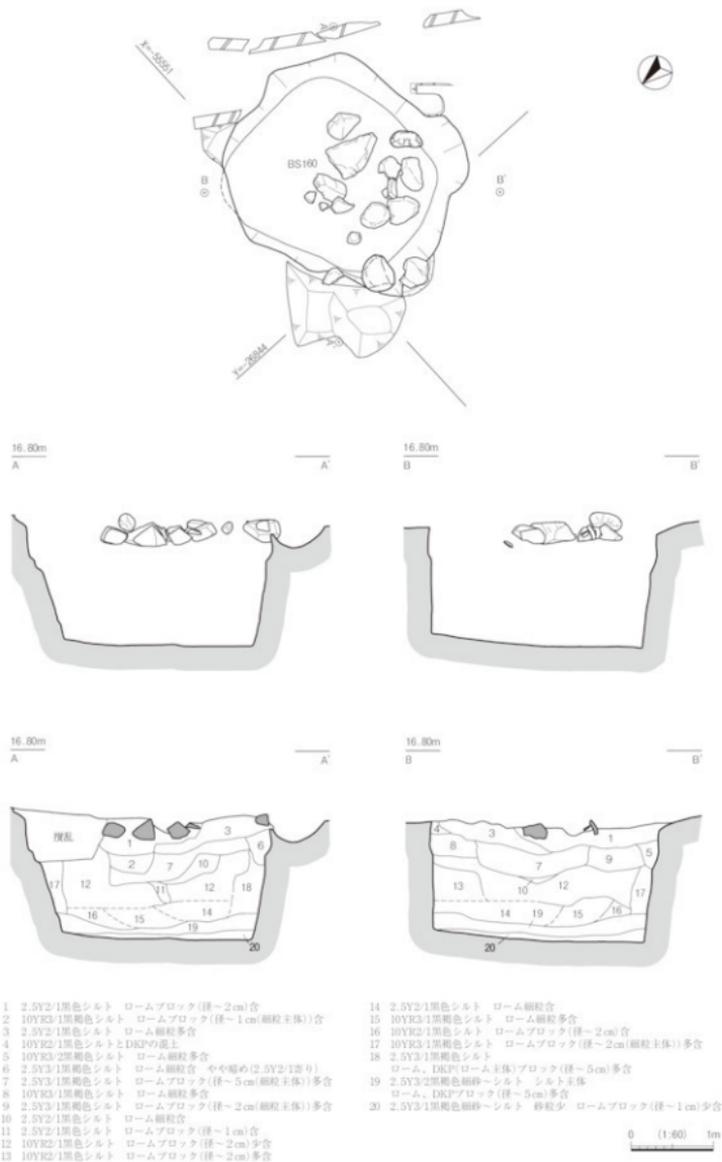


図425 B区 BS160 平面・断面

礫群を除去して、土層確認畔を残して埋土を少し掘り下げてから平面で精査を行ったところ、壁面に沿うように幅0.1～0.2mで基盤層のロームブロックを多く含む堆積が確認でき、調査当初は棺などの裏込め土の可能性を想定した。ただ、平面形を検出すると、基盤層ブロックを含む堆積の内側の形が不整形で、断面の堆積状況では壁面近くにある基盤層ブロックを含む堆積が一部で見られなかった。また、木製の棺などを据えた場合、木材の腐朽によって陥没するので、上面の礫群の高さが揃っているのも不自然である。

以上の状況から、この遺構が木棺墓とは考えにくく、検出面の礫を標石とすると直葬の土壇墓と考えるのが妥当であろう。

堆積状況を見ると、底面に基盤層ブロックが少ない20層と大きめの基盤層ブロックを多く含む19層がほぼ水平に堆積しており、掘削後に敷きならして機能面を形成した可能性がある。これらの上に、壁面近くには主に基盤層ブロックが多い堆積が、中央部には基盤層ブロックの少ない堆積があり、それらを覆うように基盤層ブロックの多い層(3～5層、7～9層)が堆積していた。(田中)

第8節 包含層出土の遺物

本節は包含層から出土した遺物について層ごとに記述する。なお、平安時代の施釉陶器と墨書土器は別項でまとめて触れる。

Ⅲ層出土遺物(図426、PL123)

土器は弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、備前焼を図化した。Po906は弥生土器の器台脚部で、外面に凹線と匏描きの鋸歯文を施す。Po907は内面に低いかえりが付く須恵器蓋で、内面に匏描きの「×」がある。土師器皿には灯明として使用した痕跡が残るものがあるが、Po911は全面に煤が付着しており、どのような用途で用いたかは不明である。Po913は手づくね成形の土師器皿である。底部内面に圓線が1条あり、18世紀頃の京都産の皿に器形が類似する。破面が薄い板状に剥離しており、在地の胎土ではみられない特徴である。Po919は瓦質の火鉢または風炉と思われる、外面にはスタンプで桐や菊、円の模様が施される。

石製品では硯と碁石と思われる円く平らな石を図化した。S92は硯の陸の破片で、縁の近くが使用によって平滑になっている。

木製品は著状木製品、孔があげられていた薄い板材、曲物の底板または蓋、卒塔婆を図化した。W104は片面が黒色に塗られている。W108は表面が平滑に仕上がられており、板材の側面に切り欠きがある。W105は卒塔婆の一部で空法輪から水輪までが表現される。文字等は確認できなかった。

攪乱層出土遺物(図426、PL129)

石器を1点図化した。S93は黒曜石の片面調整体。末端が蝶番状剥離を呈する横形剥片を素材とし、主剥離面からの打撃で背面側を調整する際に反転の連鎖を起こして途中で放棄したもの。尖頭器か大型の石鏃を意図したと考えられるが、技術的には稚拙である。表面は転磨を受けている。

Ⅳ層出土遺物(図427～436、PL123～125・128・129)

土器は縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器を図化した。

Po920は縄文土器で、外面に沈線で渦巻文を施す。須恵器甕Po923は体部外面は格子状タタキ目、内面に車輪状の当て具痕がみられる。Po924は須恵器高台皿で内面に炭化物が付着する。Po925は転用硯

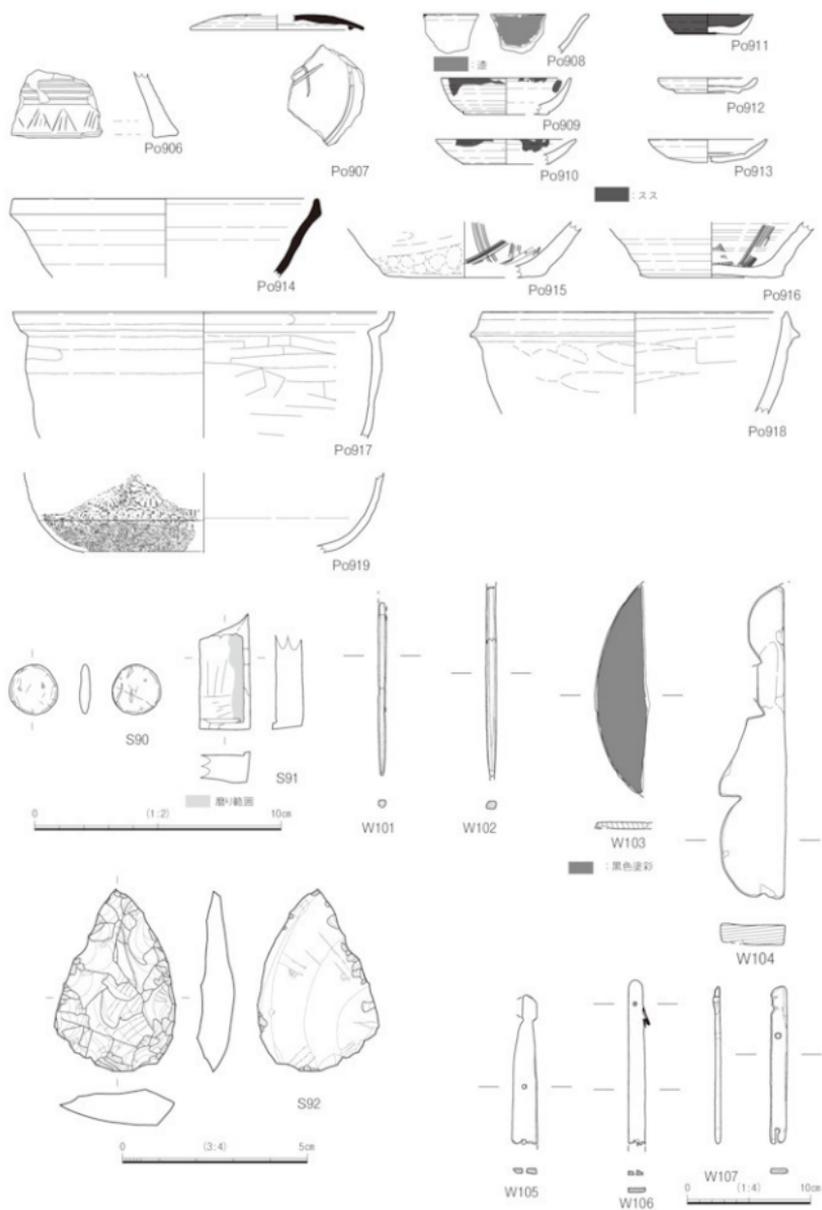


図426 B区 III層等 出土遺物

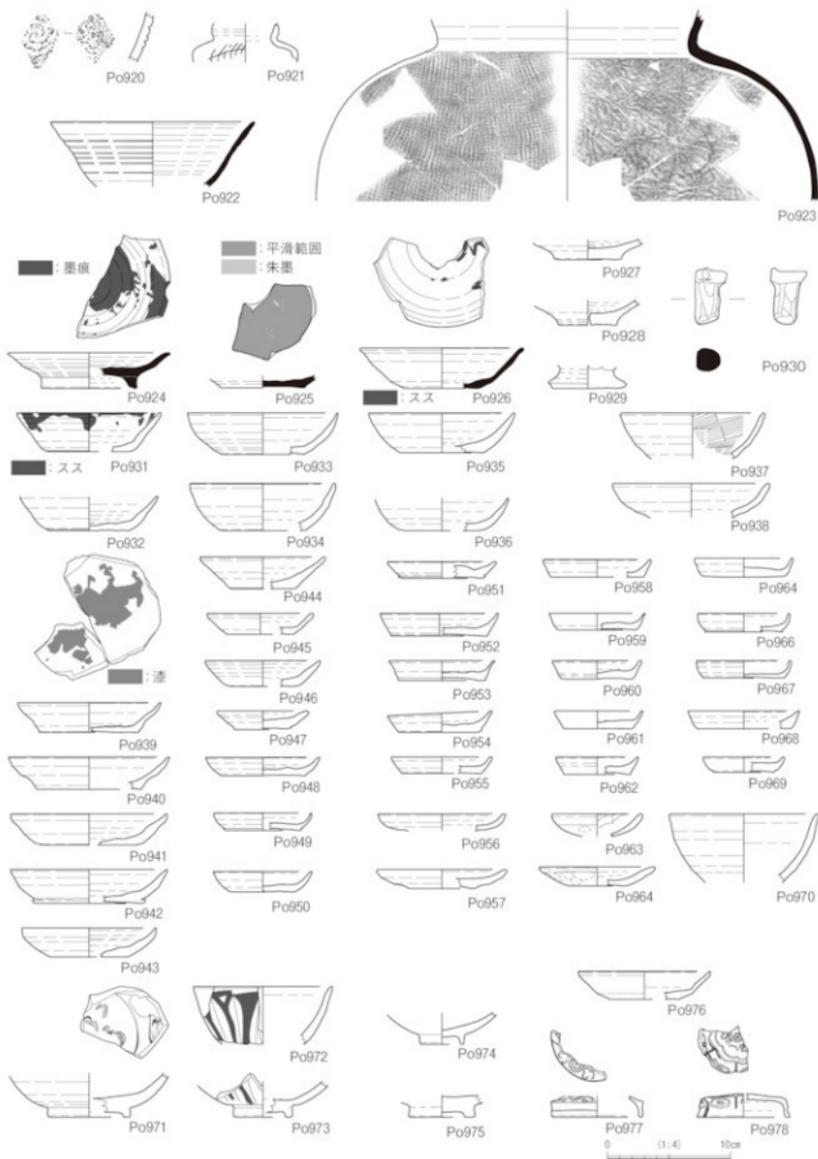


図427 B区 IV層 出土土器(1)

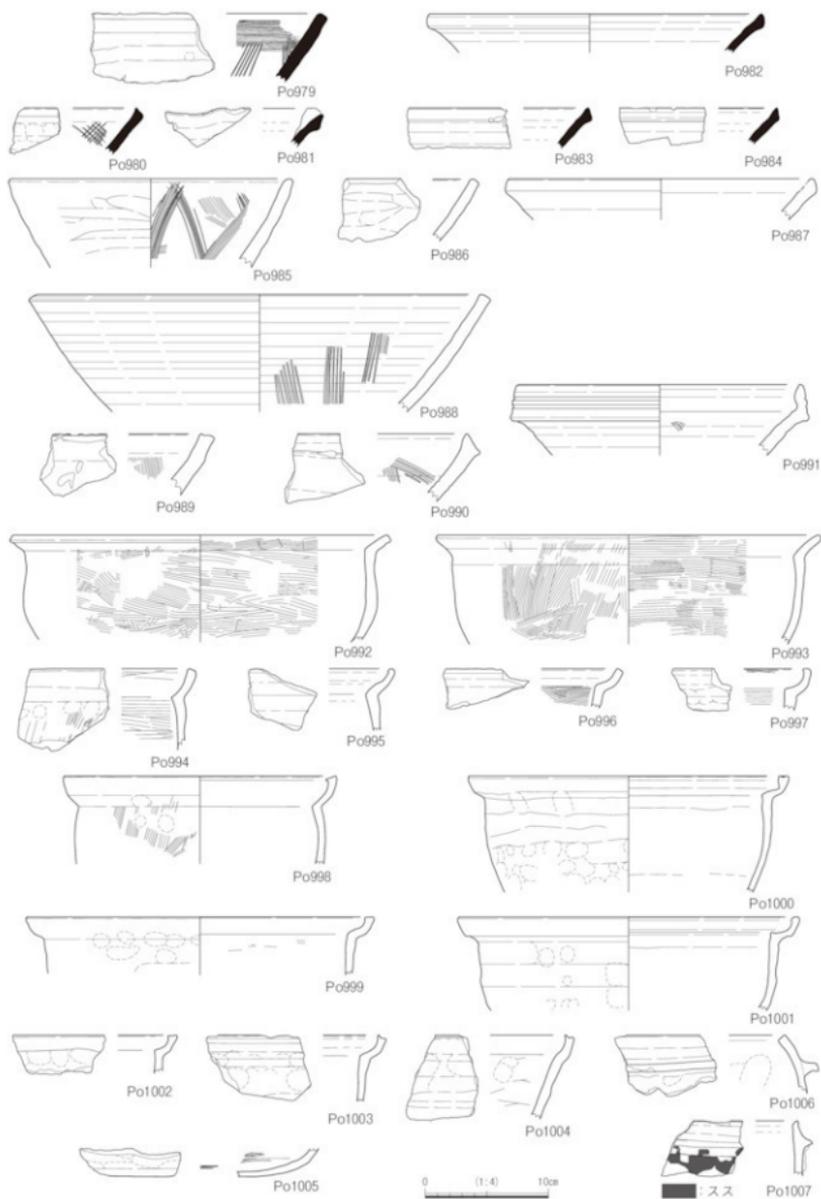


図428 B区 IV層 出土土器(2)

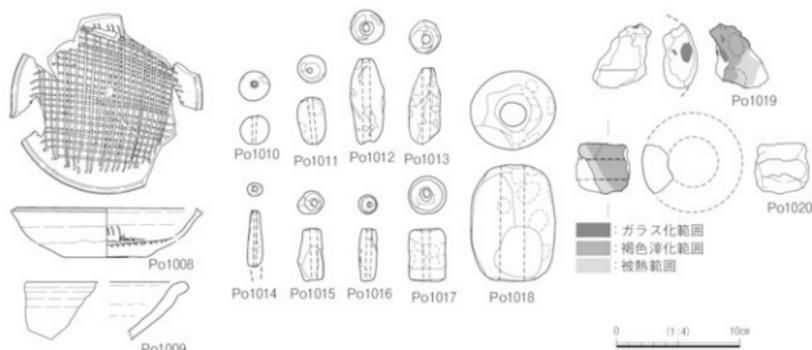


図429 B区 IV層 出土土器(3)

で、内面が平滑になっており、窪んだ部分に朱墨が僅かに残る。Po930は上面が平滑になっていることから、須恵器の碗の脚部と判断した。土師器環の中には灯明として使用されたとと思われるPo931が確認できた。土師器環のPo937は内面にハケ調整が施される。土師器皿は体部が屈曲するPo939～942、体部が直線的で底径比べて口縁径が大きいPo944～947、底径と口縁径に大きな差がないもので体部が内湾するPo948～950、体部が直線的なPo952～955・958～962等がある。Po963は手づくね成形で、内面に板状工具による調整痕跡が残る。

Po971～975は青磁で、Po971は内面に櫛刃による文様があり龍泉窯系青磁Ⅰ類、Po972・973は外面に渦連弁文があり龍泉窯系青磁Ⅱ類と思われる。Po976は白磁の皿で底部外面は露胎である。Po977・978は青白磁の合子蓋で、外面に浮き彫り状に花や草の模様がある。

Po979～984は須恵器の鉢または播鉢である。Po980は格子状の播目がみられるが、Po985のような播目が上端部で交差したものと思われる。Po985～997は瓦質土器の播鉢で、Po985・986は外面の調整が粗い。Po988～991は備前焼播鉢で、Po991は口縁端部が大きく拡張される。

煮炊具は土師器鍋、瓦質土器鍋・羽釜がある。Po992～997は土師器の鍋で、多くは体部内面に横方向のハケ調整を施す。口縁部はくの字に屈曲されたPo992・993と受け口状に作られたPo994～997があり、後者の形状にはバリエーションが多い。Po998～1004は瓦質土器鍋で、口縁端部の断面は凹状になるものが多い。Po1004は受け口の形状が不明瞭である。瓦質土器羽釜は瓦質土器鍋に比べて個体数が少なく、口縁部が高く鈎の幅がやや広いPo1006と口縁部が低く鈎の幅が狭いPo1007がある。

Po1008は瀬戸美濃の卸皿で、底部外面以外は灰軸が施される。片口は欠損するが僅かに形状が分かる部分が残る。Po1009は陶器鉢の口縁部で、小片ながら比較的大型のものとする。

土鍾は大小様々なものがあり、最も大きいPo1018で重さが358.7gある。Po1019・1020は櫛羽口で、外面に被熱によって変色・変質している箇所がある。Po1019では破面にガラス化した部分がある。

石器は打製石斧、石錘、砥石を図化した。S94、95は打製石斧の破片で、側縁に調整がみられる。S96は石錘で、平らな礫の側縁2箇所を打ち欠く。S97は石錘でサスカイト製。非対称で厚みがあり、歪んでいる。子どもなどの学習者が製作した可能性がある。砥石S98～101は四角柱状のものや平たいものがあり、後者は使用によって中央が窪む。

金属製品は刀子と思われる刃物、鉄釘、鉄鍬、銅銭を図化した。鉄鍬は鍬身が三角形のF30・31と

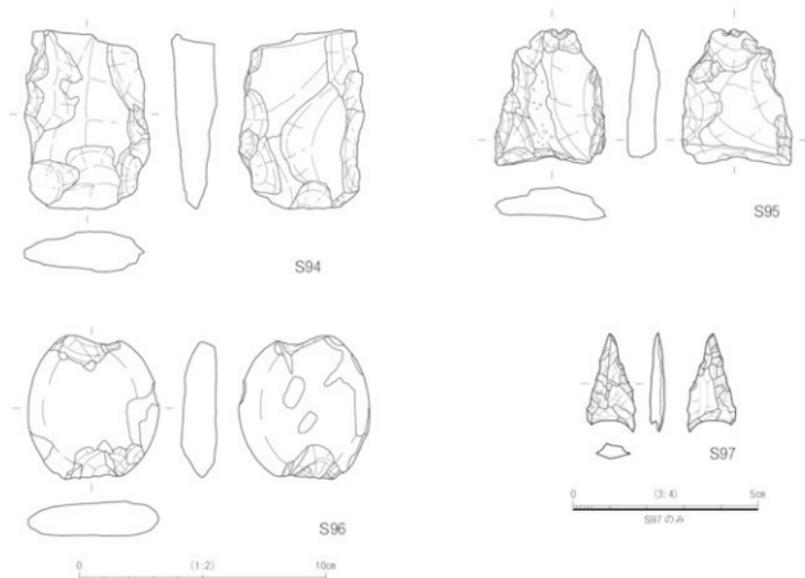


図430 B区 IV層 出土石器(1)

平頭のF32があり、頸部が長い。銅銭C3は4枚の銭が重なったもので、銭文は不明である。O34の凸類耕作痕跡上で出土しており、地鎮などの祭祀に関わる可能性がある。

木製品は著状木製品、杓子状木製品、調度品等の脚部、糸巻の部材、折敷、曲物の部材、木製祭祀具、その他不明木製品を図化した。

W116・117は板材に複数の木釘が刺さっている。W118は板材の短辺付近に穴が2つ穿たれており、端部は面取りされる。同様の板材と組み合わせて箱状にしたと考える。W119・120は糸巻の部材で、W119は1箇所W120は2箇所に穴が穿たれている。W121は杵の部材と考える。W124は台形の板材の上側に切り欠きがあり、組み立て形の下駄の歯と思われる。W125は机などの脚部で、ほぞは断面正方形、脚部は断面三角形に加工する。W126は小形の調度品の脚部で、ほぞは断面円形に加工する。W127は小片ながら折敷と思われる、表面に線状の工具痕がみられる。W128は曲物の蓋板と思われる、材の端近くに薄板を固定するための2個1対の穴が穿たれており、片面には材の縁に沿うように刃物によるけがき線がみられる。W129は曲物の底板または蓋板で、内外面に黒色の塗彩を施す。W130～132は曲物の底板と思われる、側面に穴があり木釘が刺さっている物もある。W133には片面に黒色塗彩を施す。W134は漆器椀で、全面黒漆塗りであり外面に赤漆で絵付けを行う。

木製祭祀具は人形代、馬形代、斎串を図化した。人形代はいずれも頭部のみが残存しており、W135・136には刃物で顔の表現がされている。馬形代は全体形が分かるものがほとんどなく、鞍の表現があるのはW144の1点のみである。下部後ろ側は三角形に小さく切り欠くW140・141と後ろ側全部を大きく切り欠くW142～144がある。斎串は薄い板材で下端を尖らせたものがほとんどである。W155はやや厚めの板材の両側に切り欠きが多数みられる。

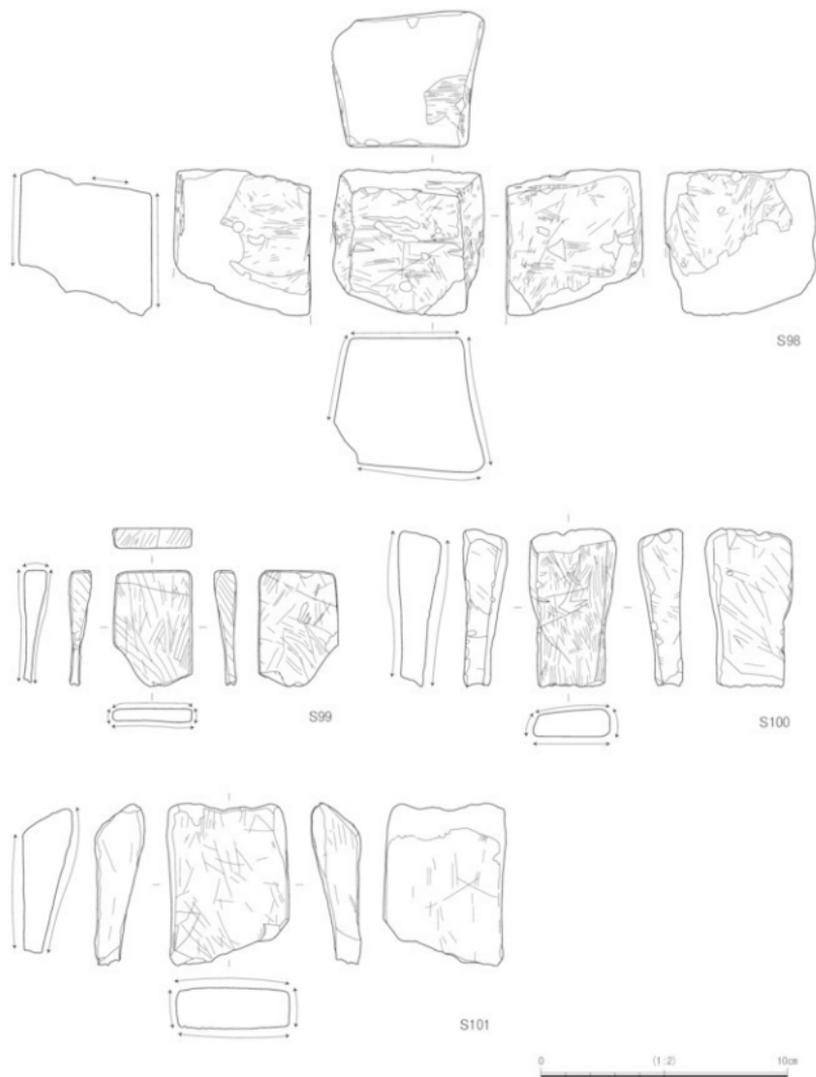


図431 B区 IV層 出土石器(2)

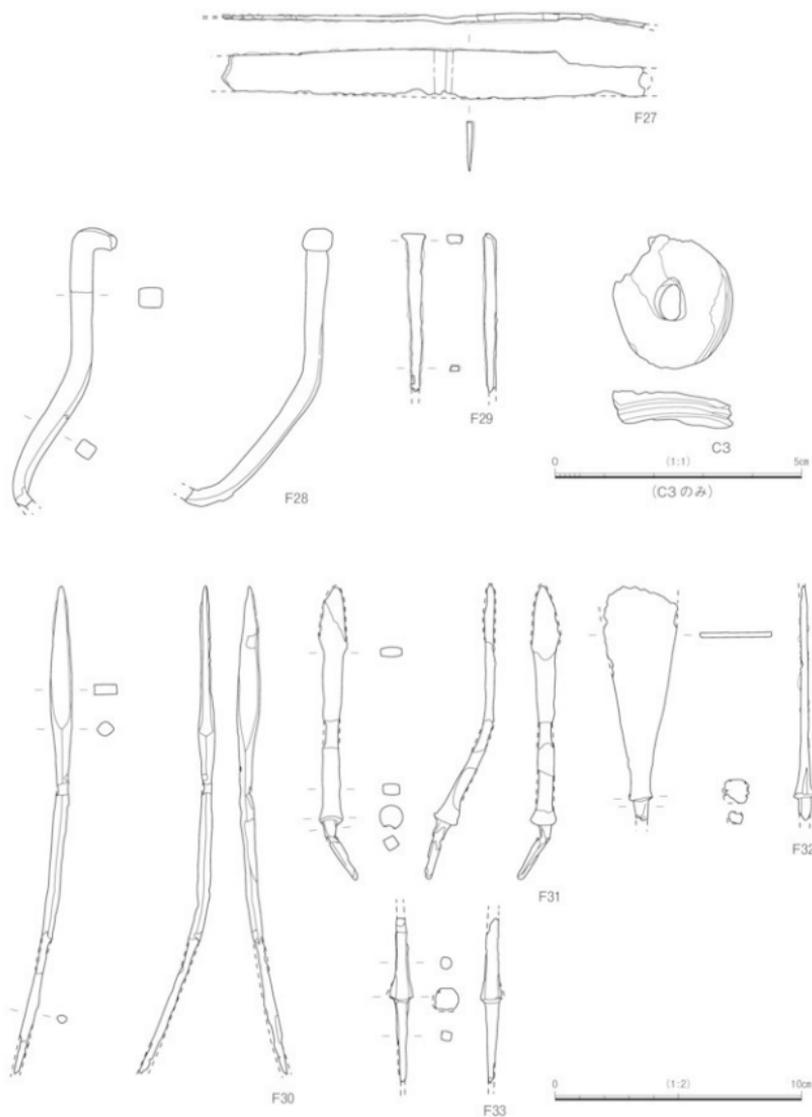


図432 B区 IV層 出土金属製品

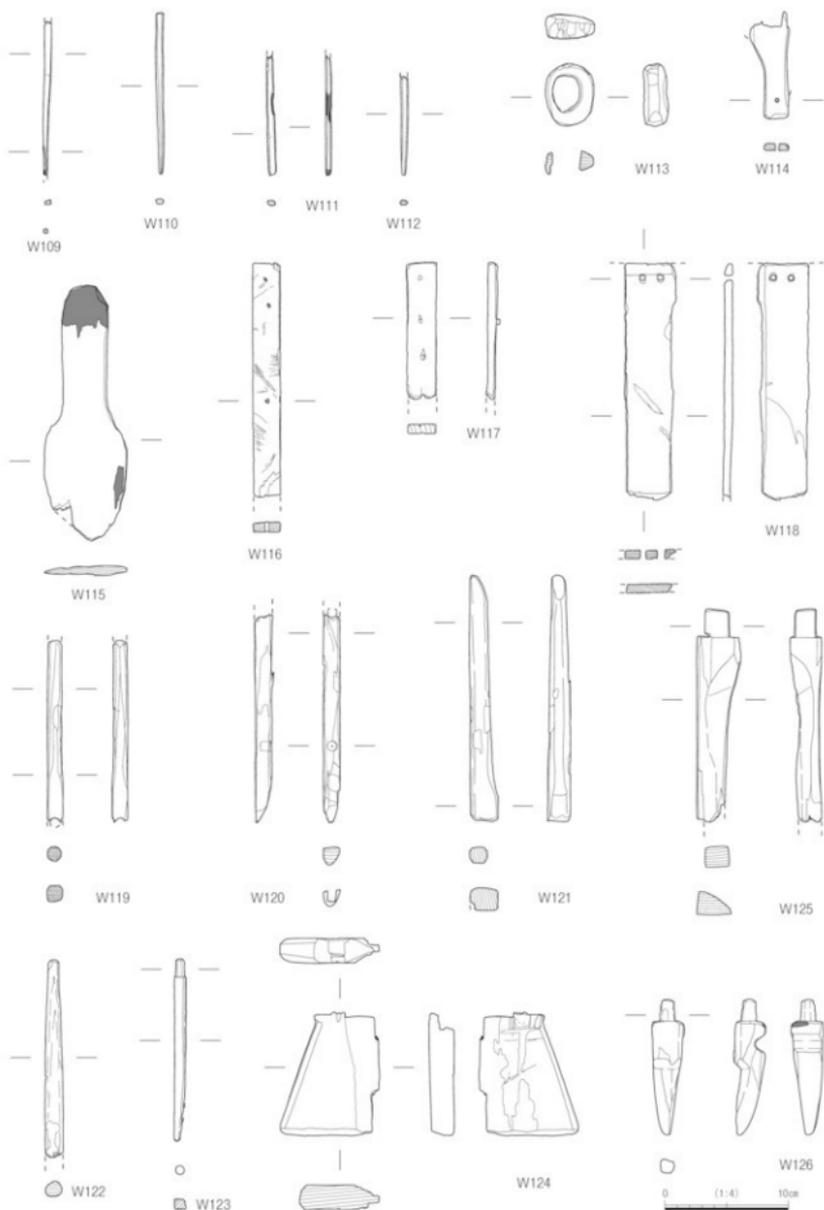


図433 B区 IV層 出土木製品(1)

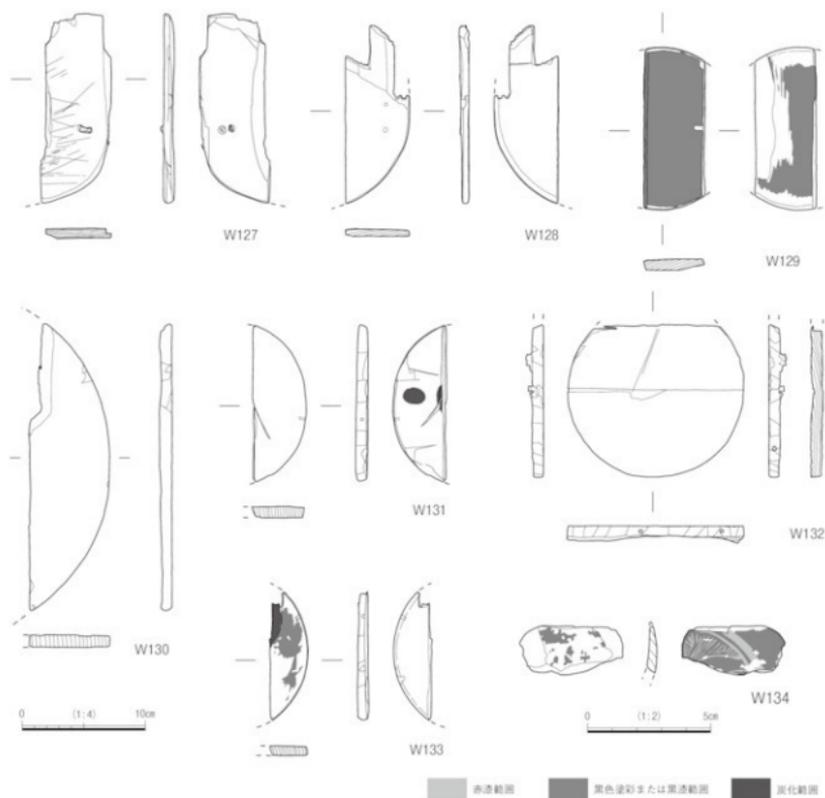


図434 B区 IV層 出土土製品(2)

V層遺物(図437～448, PL.125～129)

この層からは平安時代までの遺物が出土した。瓦質土器と白磁がごく少数見つかった(Po1110・1111)が、これらはIV層からの混入の可能性が高い。

土器は土師器、須恵器、黒色土器を図化した。須恵器蓋は輪状つまみで天井部が丸く口縁端部にかえりがあるPo1021があるが、多くは断面形が台形に近いものでPo1022・1025はつまみがない。Po1024・1025は口縁部が水平になる。須恵器環Po1026・1026は体部下半が内湾し高台が底部のやや内側に貼り付けられる。それ以外の須恵器環は体部が直線的で底部外縁付近に高台を貼り付ける。Po1036の高台は他のものに比べて低い。須恵器皿Po1042・1043は体部が直線的である。

Po1044～1046は回転台を用いずに作られた土師器環で、いずれもの内外面に赤色塗彩する。Po1044は体部内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文を施しており、Po1046は体部内面に放射状暗文を施す。Po1050～1057は回転台整形の土師器環である。Po1050・1051は体部下半がほぼ垂直に立ち上がり、上半は外反する。Po1053は体部が内湾するが、S835出土のものより底辺は平高台状になっていな

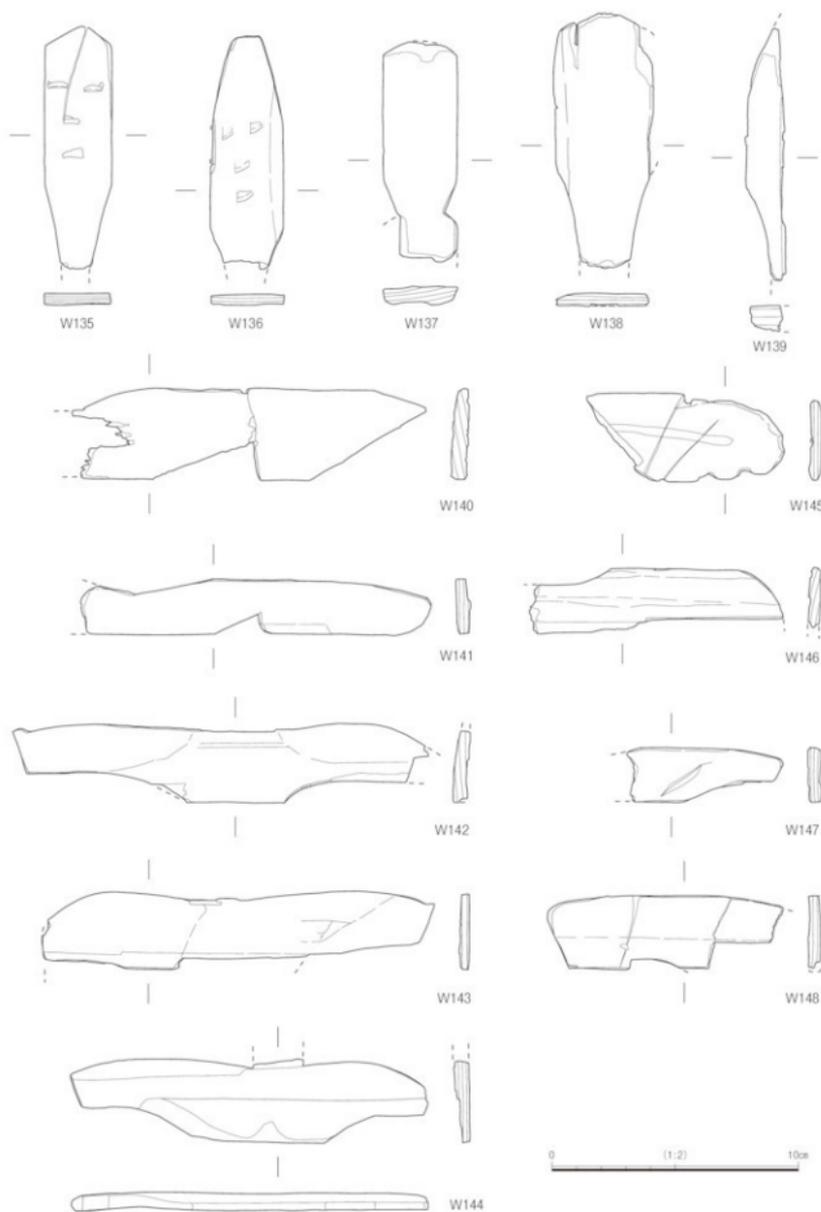


図435 B区 IV層 出土人形代・馬形代

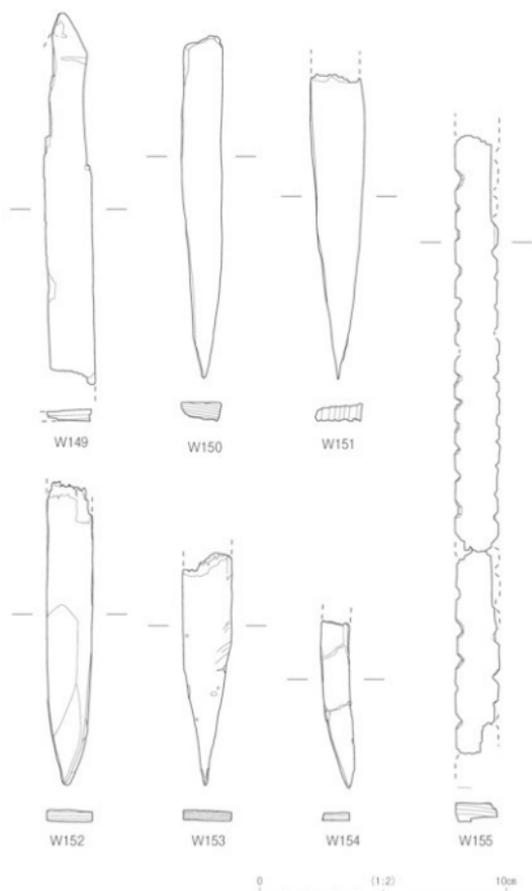


図436 B区 IV層 出土片断

い。Po1057は底径に比べて口径が大きくなり、体部は直線的に外傾する。Po1058～10601は土師器高台坏で、Po1058・1059は高台が高いのに対し、Po1060は低い。坏部の形状はPo1058が坏部の外傾の度合いが小さいのに対し、Po1059は外傾の度合いが大きくPo1057に近い。Po1061～1065は黒色土器である。Po1062は高台が付かない坏の底部と考えられ、外面が赤色塗彩される。土師器皿は底径と口径の差が小さく底部切り離しが寛切りのPo1066～1070、底径と口径の差が大きく底部外面が回転糸切りのPo1071～1075があり、後者は体部が直線的なものと同湾するものに細分できる。Po1076は器形が須恵器皿に近い。

煮炊具は土師器甕と土師器鍋を図化した。甕は口縁部の屈曲が比較的緩やかであるが、内面の口頸境は明瞭である。鍋はいずれも内面にハケ調整を施す。Po1082は小形の甕で、内外面とも赤色塗彩す

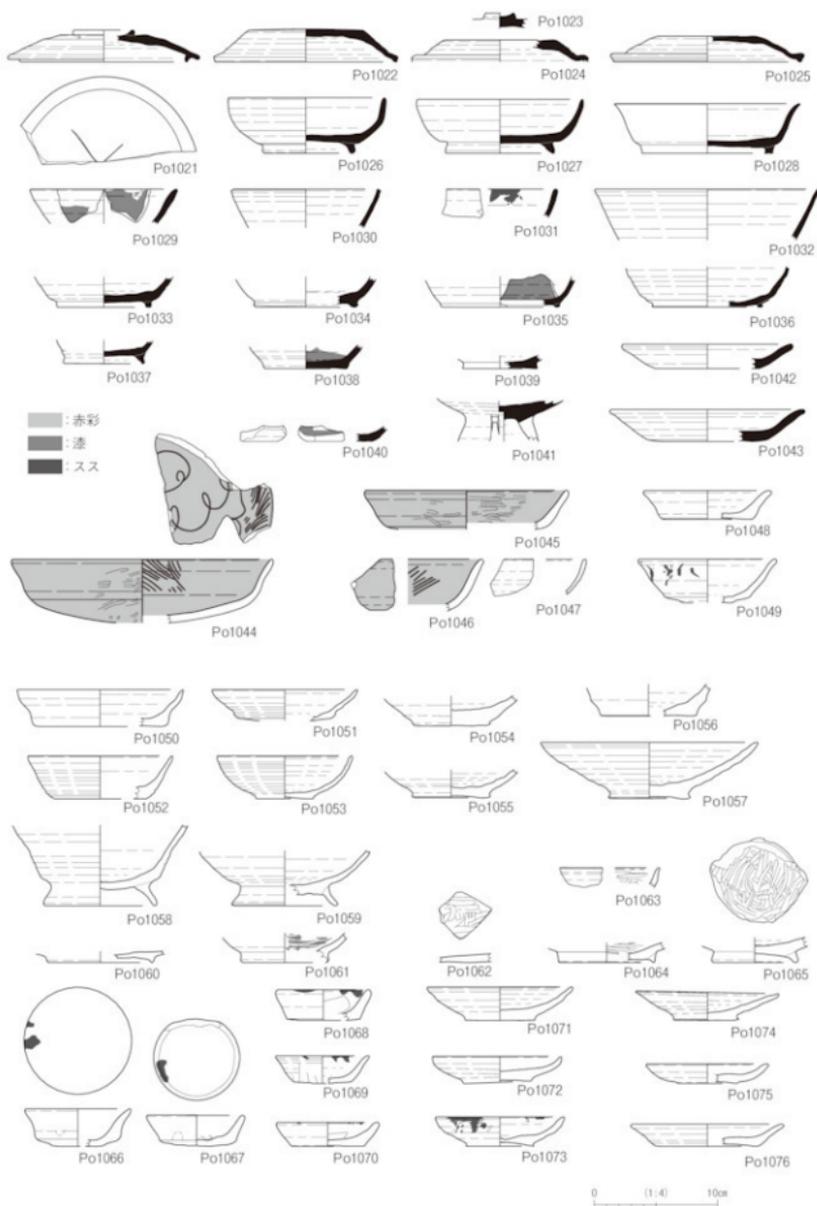


図437 B区 V層 出土土器(1)

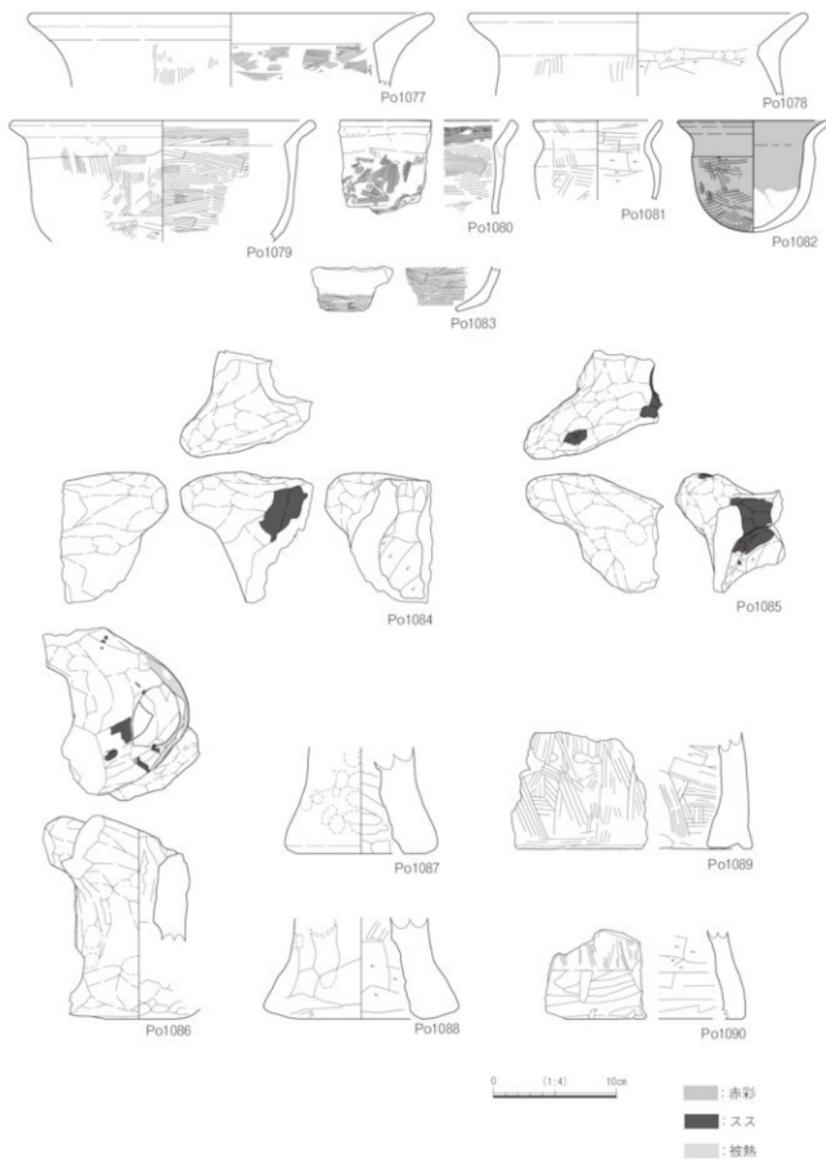


図438 B区 V層 出土土器(2)

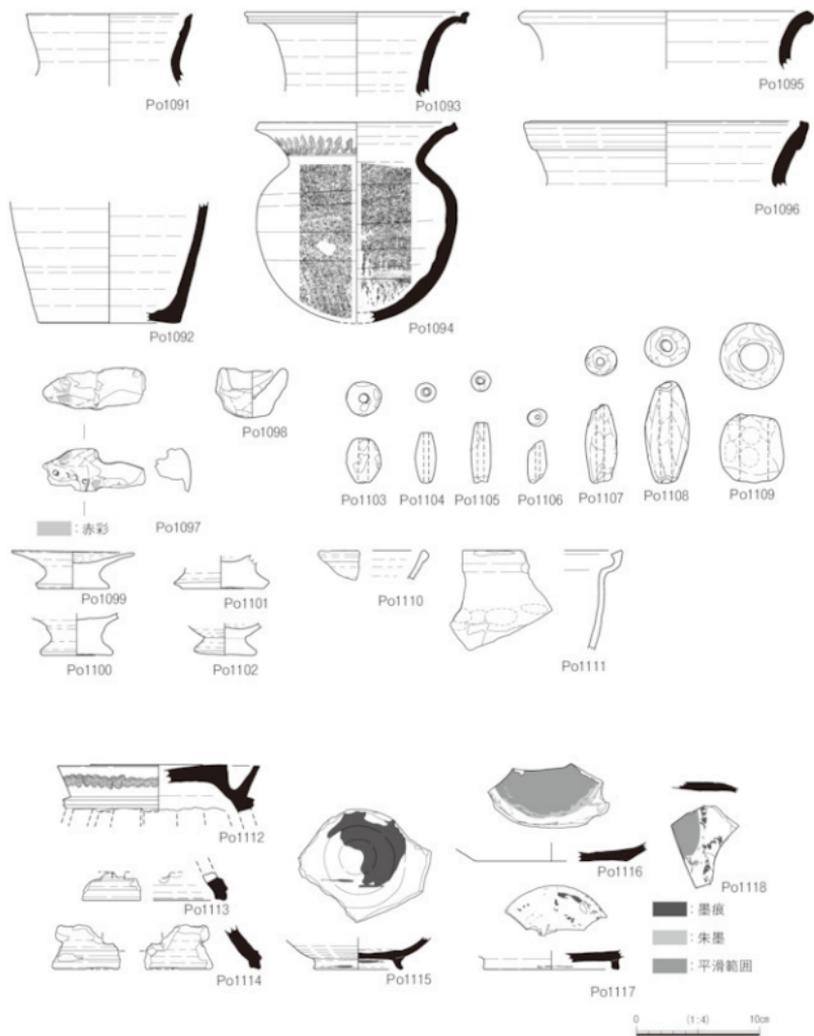


図439 B区 V層 出土土器(3)

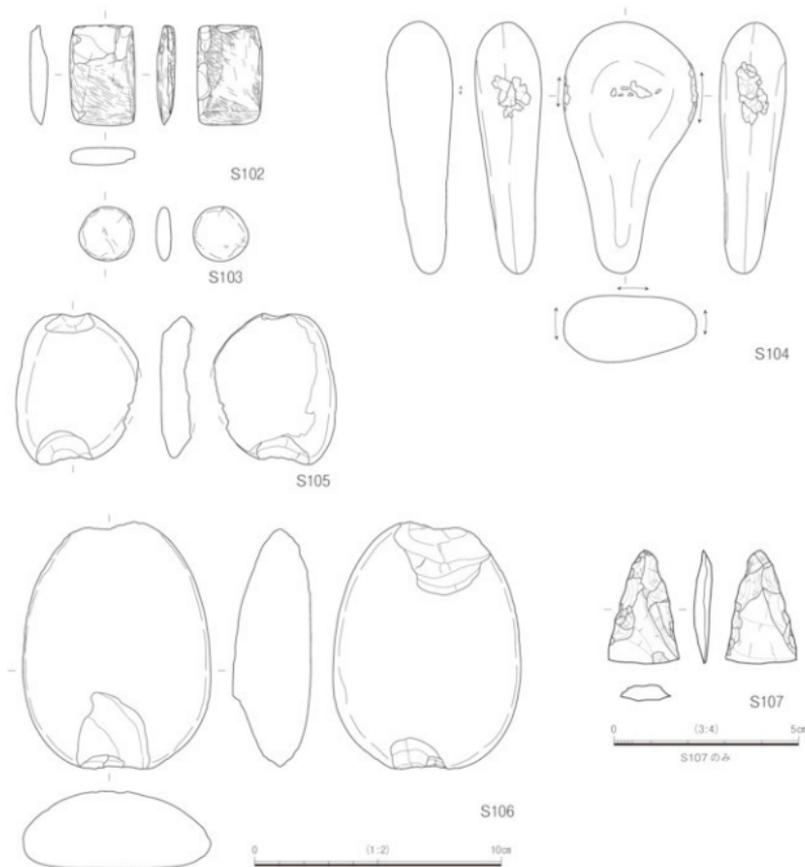


図440 B区 V層 出土石器

る。Po1084～1088は土製支脚で、脚部はいずれも中空である。Po1084～1086は被熱痕跡や煤の付着がみられ、Po1085は中空の脚部内面に煤と思われる炭化物が、Po1086は脚部の外面に煤と思われる炭化物や被熱痕跡がみられる。Po1089・1090は小片ではあるが竈の底部と考える。

Po1091～1093は須恵器壺で、Po1093は砂粒が少ない胎土で口縁が大きく外反する。Po1094～1096は須恵器甕である。Po1094は小形品で、体部下半にのみタタキ目が残る。

Po1097は土師器の土馬と思われる、赤彩が僅かに残る。Po1099は柱状高台皿で、皿部は浅い。

Po1112～1114は須恵器円面硯である。Po1112の陸は外縁よりも中心の方が低くなり、脚部の透かしは幅広な長方形を呈する。Po1113・1114は脚端部付近で、いずれの透かしも十文字だったと考える。

Po1115～1118は坏を硯に転用したもので、Po1116は朱墨を用いたものと考ええる。

石器は扁平片刃磨製石斧、敲石、石錘、石鎌を園化した。S103は碁石と思われる扁平な石で、僅か

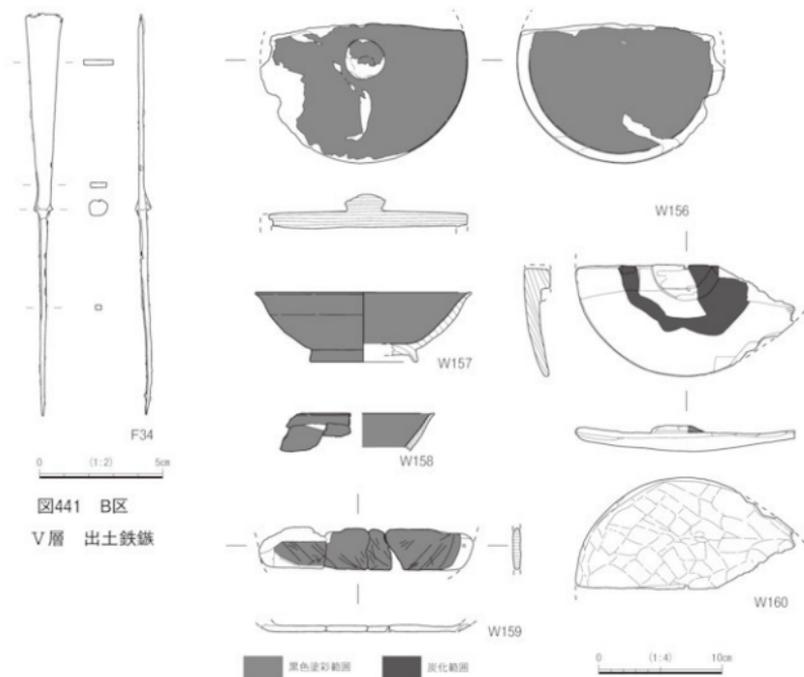


図441 B区
V層 出土鉄鍔

図442 B区 V層 出土木製品(1)

に研磨によると思われる線状痕がみられる。S105、106石錘でいずれも平らな石の側面を2箇所打ち欠いたものである。S107はサマサイト製の石鍔。剥片の2辺を調整して三角形に仕上げている。

金属製品は鉄鍔F34を図化した。調査時にはS751に伴う遺物としていたが、出土した堆積物が溝埋土とは異なりV層に近いものであったことから、包含層内の遺物とした。鍔身が平頭で茎部が長い。

木製品は漆器、曲物、糸巻き、火鑽臼、箸状木製品、杓子状木製品とその他の不明木製品を図化した。

W156～159は漆器である。W156は蓋で扁平な宝珠状のつまみが付き、須恵器の蓋の形状に近い。漆膜は他のものよりも厚い。W157・158は椀で、10世紀初頭から前半の緑釉陶器の形状に近い。W159は皿と思われ、内面に線状の工具痕が顕著である。

W160は蓋で、面的な工具痕がみられることから刳物と考える。断面形は端が上方に反るようになっており、中央に孔が1つある。

W161～166は曲物の底板または蓋板である。W161は板の端に薄板を固定するための2個1対の孔があり、蓋板の可能性が高く、W164は板の側面に穴があり底板の可能性が高い。W163は板の片面に黒色塗彩を施す。W166には孔が2個あるが、薄板を固定するためではなく持ち手を付けるためと思われる。W167は板の両面に線状の工具痕がある。大きさから折敷の一部の可能性もある。W168～170は薄い板材に線状の工具痕があるもので、曲物に使用された可能性がある。W168・169は細長い板材の片

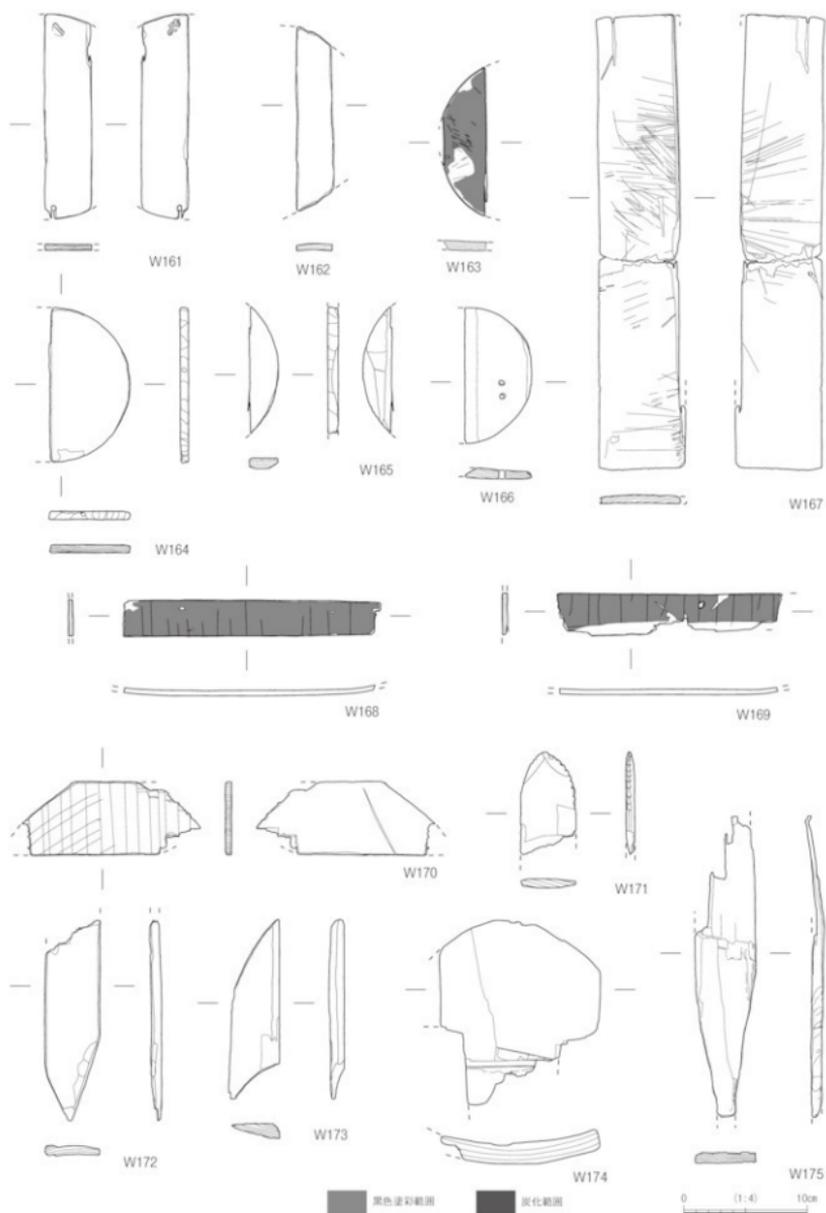


図443 B区 V層 出土木製品(2)

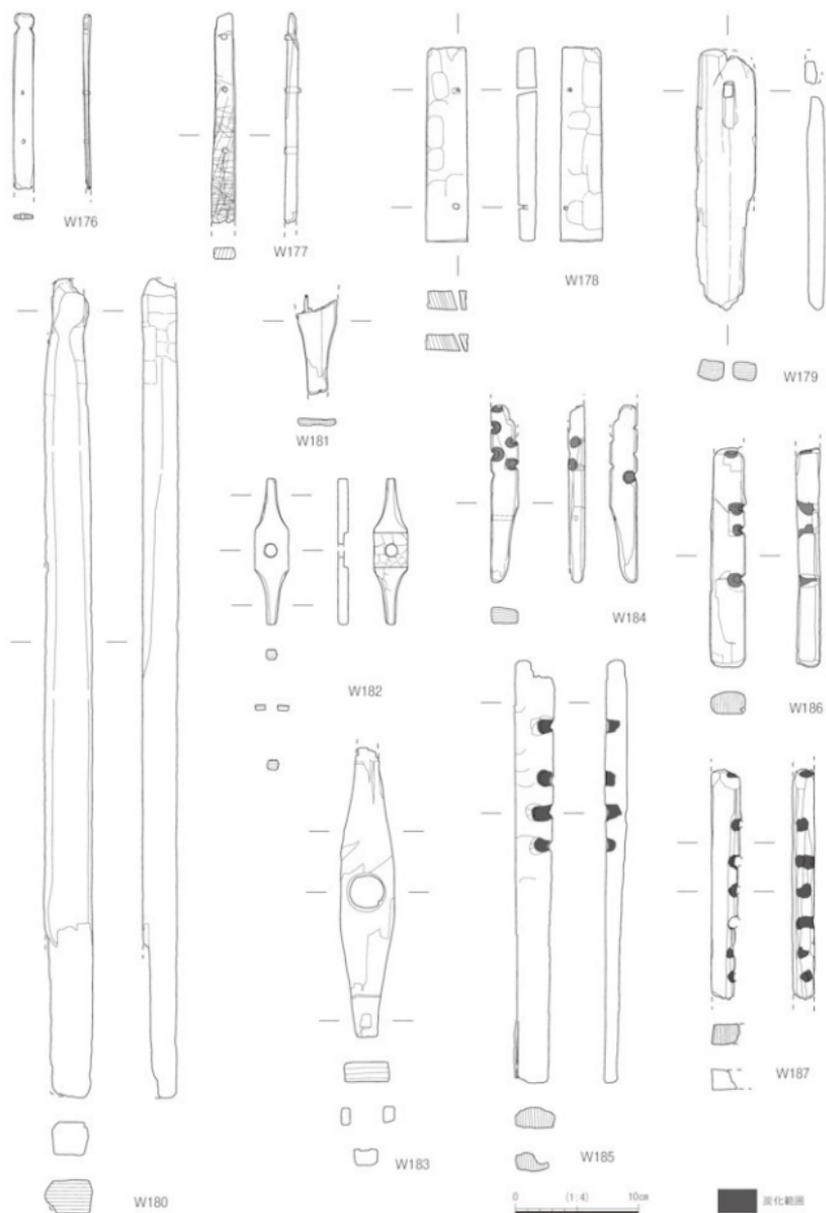


図444 B区 V層 出土木製品(3)

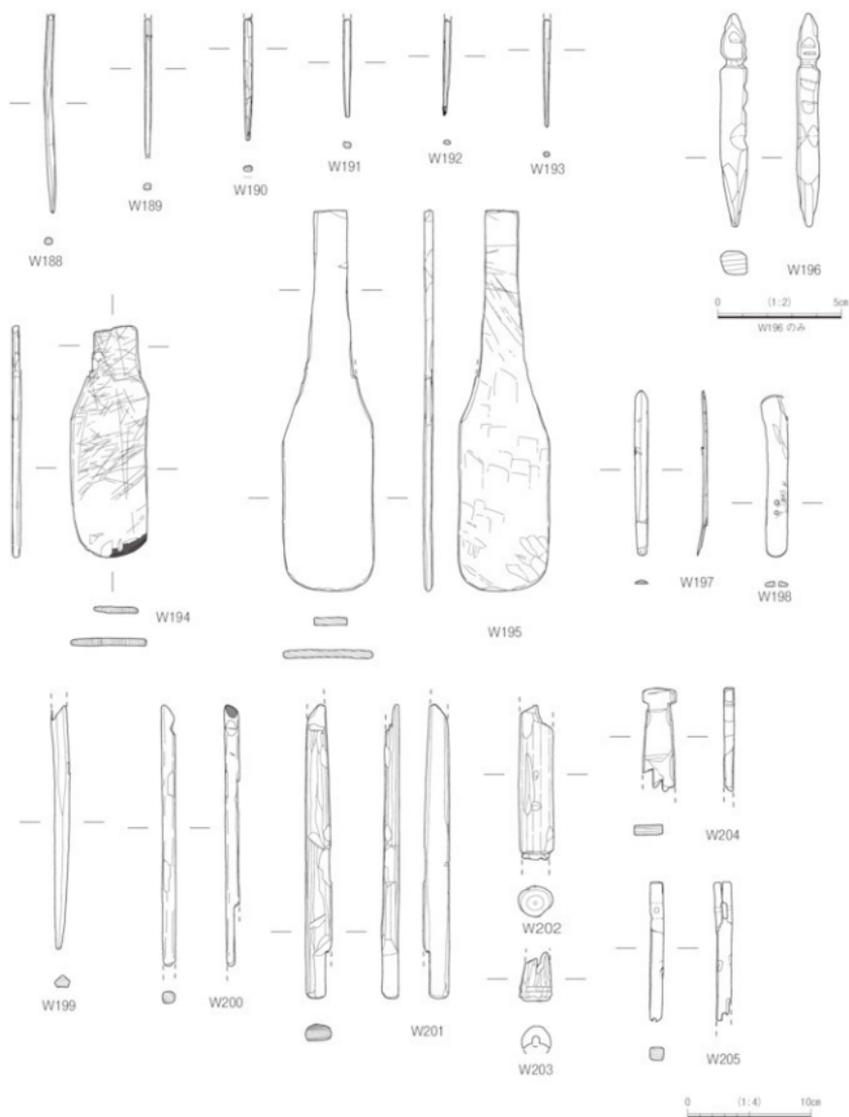


図445 B区 V層 出土木製品(4)

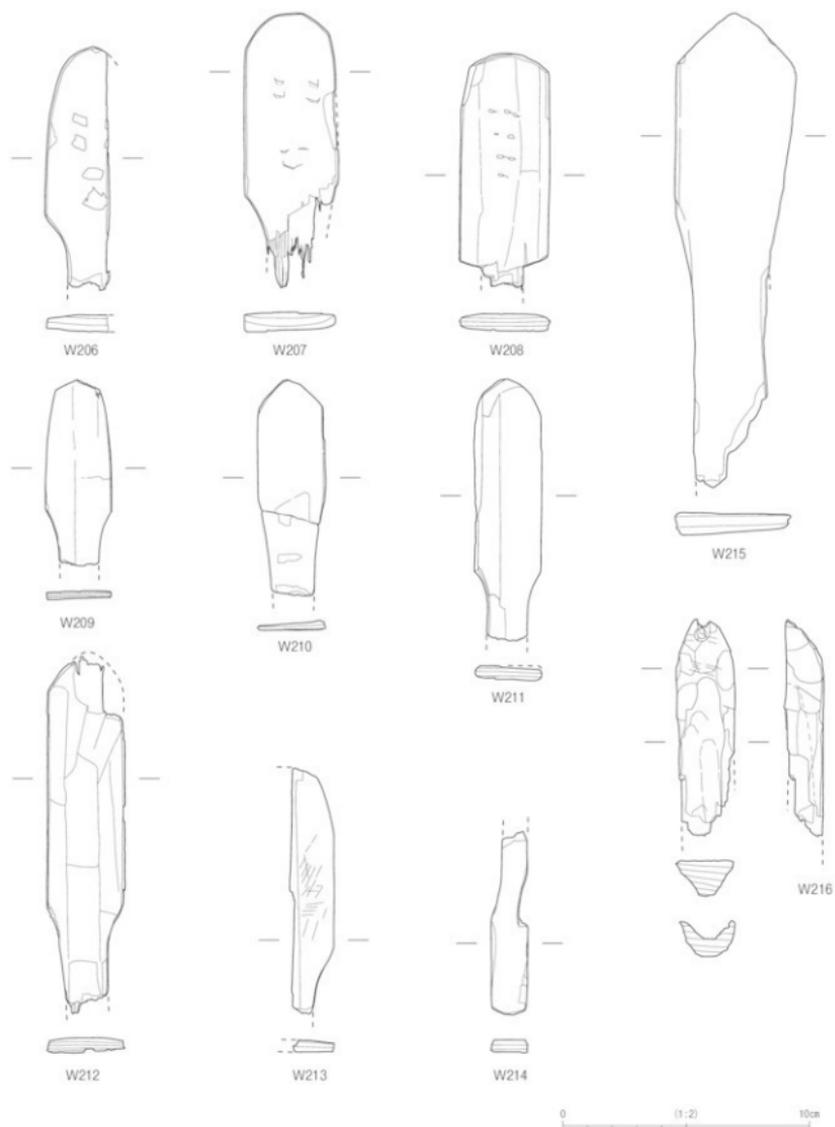


図446 B区 V層 出土人形代・刀形代・舟形代

面に黒色塗彩される。

W171は板材の端を頭状に加工し、側面の片方に小さな切り欠きがある。W173は板材の端の幅が広がるように加工し、短辺は円く加工しており、建茶部材の一部の可能性もある。

W176・177は板材に木釘が複数刺さっている。IV層でも同様のものが出土したが、いずれも細長い材で、製品の一部と思われるものの用途などは不明である。W180は面取りした角材の端付近に切り欠きがある。経糸や布を巻き取るために利用した織機の一部と考える。W181～183は糸巻きの部材と考えるが、W183は他よりも大きく別の製品の一部の可能性もある。W184～187は火鑽白である。W184は糸巻きの部材を転用したもので両面から火鑽を行っている。

W196は棒状の材の両端を尖らせ、切り欠きが複数みられる。W194・195は杓子状木製品である。いずれも工具痕が残るが、W194は線状の工具痕が顕著である。W197・198は表面が丁寧に加工され平滑に仕上げられる。W205は棒状の材にほぞ孔があり、これに直交する方向に木釘が差し込まれている。ほぞ孔に材は残っていないがBS203出土のW96と同様のものと思われる。

木製祭祀具は人形代、刀形代、舟形代、馬形代、鳥形代齋串がある。人形代は頭部のみが出土しており、W206～208は工具を使って顔を表現している。W214は刀形代の基部、W216は舟形代である。W217～223は馬形代で、鞍が表現されたものはない。下部後ろ側の切り欠きは三角形に切り欠くW223と後ろ側全部を切り欠くW219・221があり、後者はいずれも下部に棒を差し込む切り込みがある。W224は鳥形代と考える。他の形代に比べて材が厚く大形である。

W225～237は齋串である。下端部は板の両側面から切って尖らせたもの他に斜めに切って尖らせたW234・235がある。W225・227は上部の両側面に上方向からの切り込みがある。W236・237は厚めの板材で、W236は側面の片側、W237は両側面に切り欠きが多数みられる。

施釉陶器(図449、PL.8)

本項は遺構以外から出土した施釉陶器について記述する。

Pol119～1127は緑釉陶器である。Pol119は内面にミガキ調整が確認できる。Pol1122は碗の体部の体部片で外面の稜が明瞭で、10世紀前半頃の京都産と思われる。Pol1123・1124は底部外面が回転糸切りで全面に施釉されており、9世紀中頃の京都産と考える。Pol1125～1127はいずれも削り出し高台で底部外面は施釉されず、9世紀末～10世紀前葉の京都産と考える。

Pol1128～1136は灰釉陶器である。Pol1128は小片で、瓶の口縁部と考える。Pol1129・1130は碗の口縁部で、Pol1130は口縁端部を水平方向につまみ出すような形をしている。Pol1133は碗の底部で、高台は欠損する。いずれも内外面とも施釉される。Pol1131・1132・1134は皿である。Pol1134は全体形が分かるもので、口縁部～体部の内外面は施釉され、底部内面にはハケで一文字状の施釉が行われる。底部外面は施釉されない。灰釉陶器はいずれも9世紀末の黒笹90号窯期第3段階と考える。

緑色凝灰岩剥片(図450、PL.129)

B区からは少量ながら緑色凝灰岩の剥片が出土した。S108は厚みのある緑色凝灰岩製剥片。表裏両面の剥離面が両極打撃の特徴をよく示しており、玉作関連遺物である。S109は玉作関連の緑色凝灰岩剥離物。板状の石核の角を両極打撃で除去したもの。S110は緑色凝灰岩の剥片で、両極打撃時の対向打痕が主剥離面と背面にはっきりと残っている。玉作関連であろう。

墨書土器(図451・452、PL.130)

本項は遺構以外から出土した墨書土器について記述する。

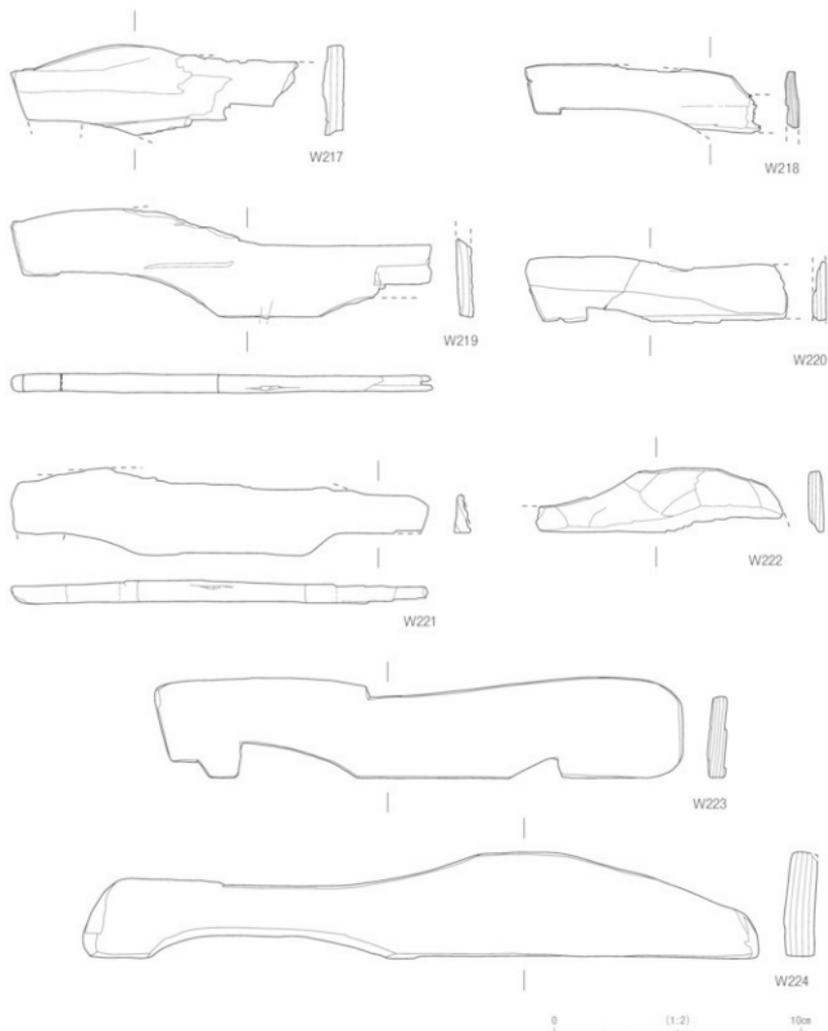


図447 B区 V層 出土馬形代・鳥形代

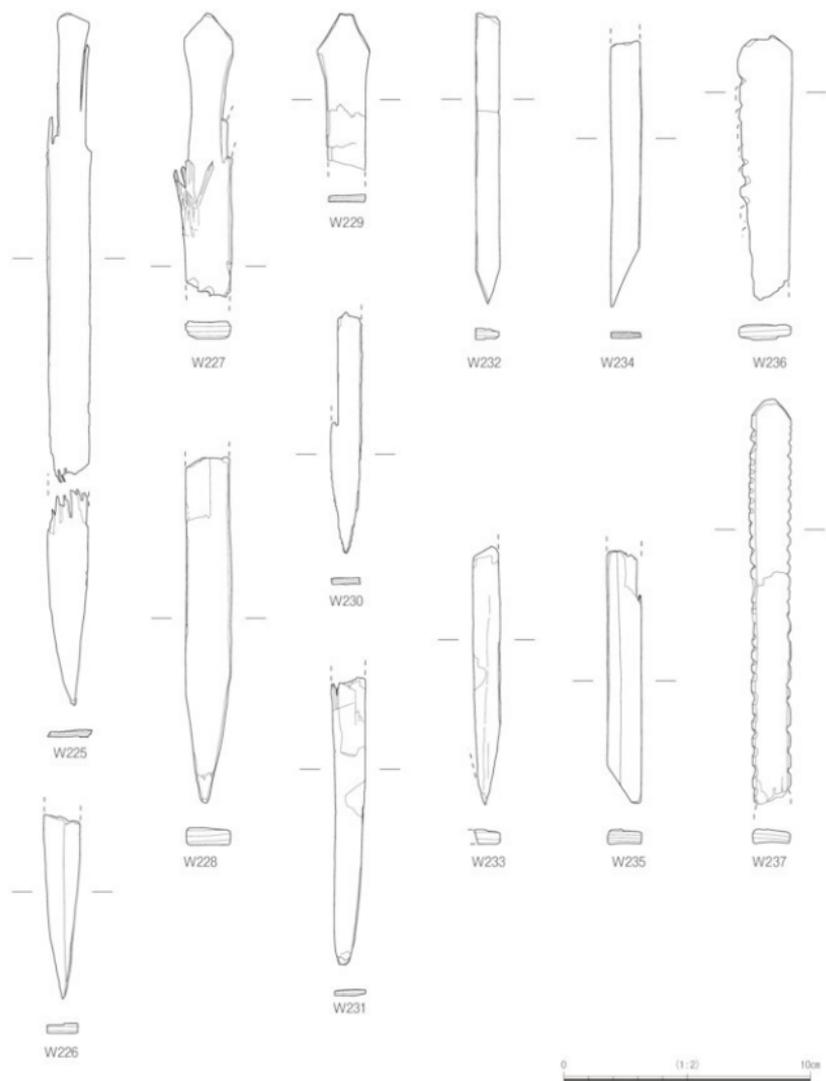


図448 B区 V層 出土斎串

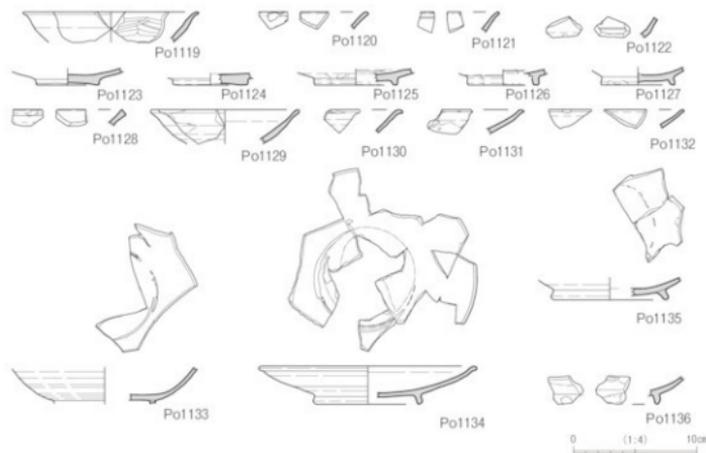


図449 B区 包含層 出土施釉陶器

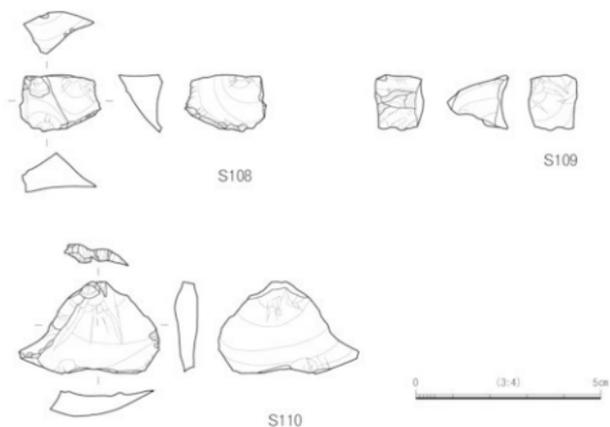


図450 B区 包含層等 出土 緑色凝灰岩剥片

墨書されたのはほとんどが須恵器で、器種は坏または高台坏が多く、蓋と皿が若干ある。書かれた箇所は坏、高台坏、皿の場合はほとんどが底部で体部に書かれたものが若干ある。書かれた面は内面と外面がほぼ同じで、内外面ともに墨書されたPo1182～1184もある。

図451は外面に墨書されたものである。Po1137は縦に長くなるが「益」の可能性がある。Po1138は



図451 B区 包含層 出土墨書土器(1)

平高台の坏に書かれたもので「岡」の異体字である。Po1139・1140、は「衣」、Po1141は「井□」と書かれる。Po1142は文字の部分で割れており、墨痕が見えなくなっているが、残っている筆致から「本」と考える。Po1143は2字書かれていて、上の文字の左側に「矢」が入る文字(知、智など)であることが分かる。Po1150は2字で下の文字が「田」か、1文字で「福」の可能性がある。その他、破片に墨書の一部が残るものがあり、Po1149は2字書かれていると思われる。

図452は内面または両面に墨書されたものである。Po1160・1161は「屋」と書かれており、Po1162～1164についても一部しか残っていないが同様と考える。Po1165・1166は「□田」と2字書かれる。Po1165は1文字で「福」の可能性がある。Po1167は「田」と思われ、書かれた位置から上にもう1字書かれた可能性がある。Po1169は土師器皿の内側に示偏のような墨書がある。しかし旁が見当たらず、「衣」の可能性がある。Po1170は「林」と墨書される。その他、破片に墨書の一部が残るもの、判読できないものがみられた。Po1186は蓋の宝珠つまみの部分で、内面に墨書が確認できる。(田中)

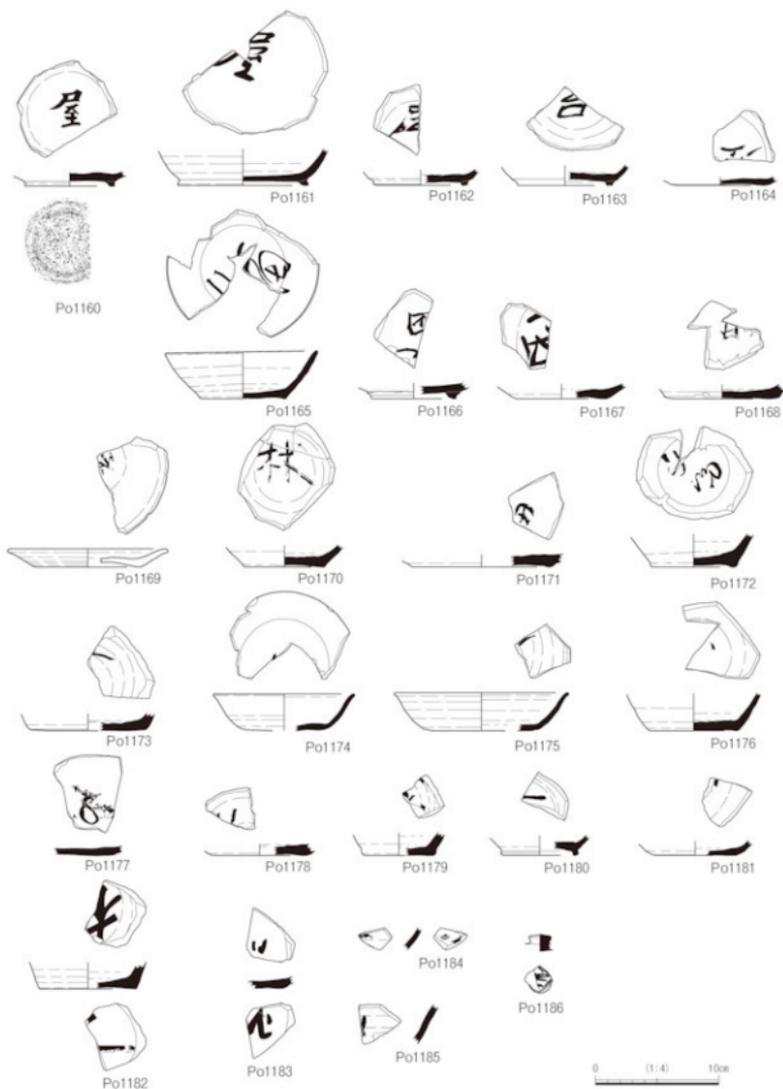


图452 B区 包含層 出土墨書土器(2)

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 65

一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXXV

鳥取県鳥取市気高町

会下・郡家遺跡

第1分冊

発行 2018年1月31日

編集 鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取市国府町宮下1260番地

電話 (0857)27-6711

発行者 鳥取県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社鳥取平版社

〒680-0845 鳥取市富安1丁目79番地